DS
881
.5
S35A2
1934
v.4

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/shzanzensh04saku

增訂

象山全集

卷四

8357

LIBRARY
APR 30 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

DS
881
.5
S35A2
1934
v.4

書簡

木挽町時代

（江戸）嘉永四年四月より安政元年九月迄

聚遠樓時代(一)

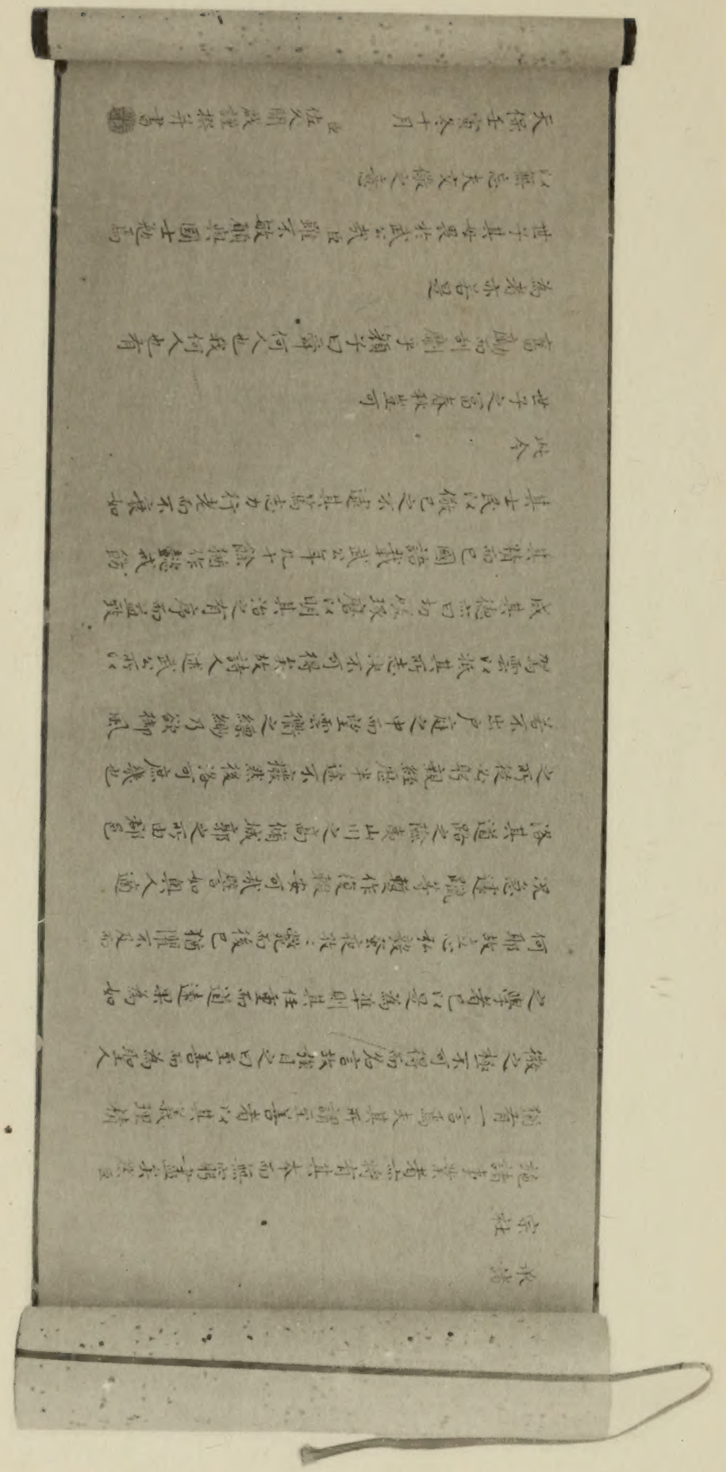
（松代）安政元年九月より安政五年二月迄

LIBRARY
APR 30 1969
UNIVERSITY OF TORONTO
DS
881
.5
S35A2
1934
v.4

書簡

有斐亭記

安政六年先生四十九歳の筆蹟なり文の成りしは天保十三年卅二歳の時にて全文第一巻淨稿三五頁に出づ原本は縦九寸横壹丈壹尺貳寸の絹本にて眞田伯爵家所藏



自畫孔子像竝贊

安政四年四十七歳の筆蹟なり全文第一卷文稿七七頁に出づ原本は縱四尺壹寸五分横壹尺九寸の絹本にして東京市宮本仲氏所藏

人謂泰西之學盛孔子之
教衰予謂泰西之學行
孔子之教滋得其資夫泰西
之學藝術也 孔子之教道
德也道德譬則食也藝術
譬則菜肉也菜肉可以助食
氣孰謂可以菜肉而損其味
耶

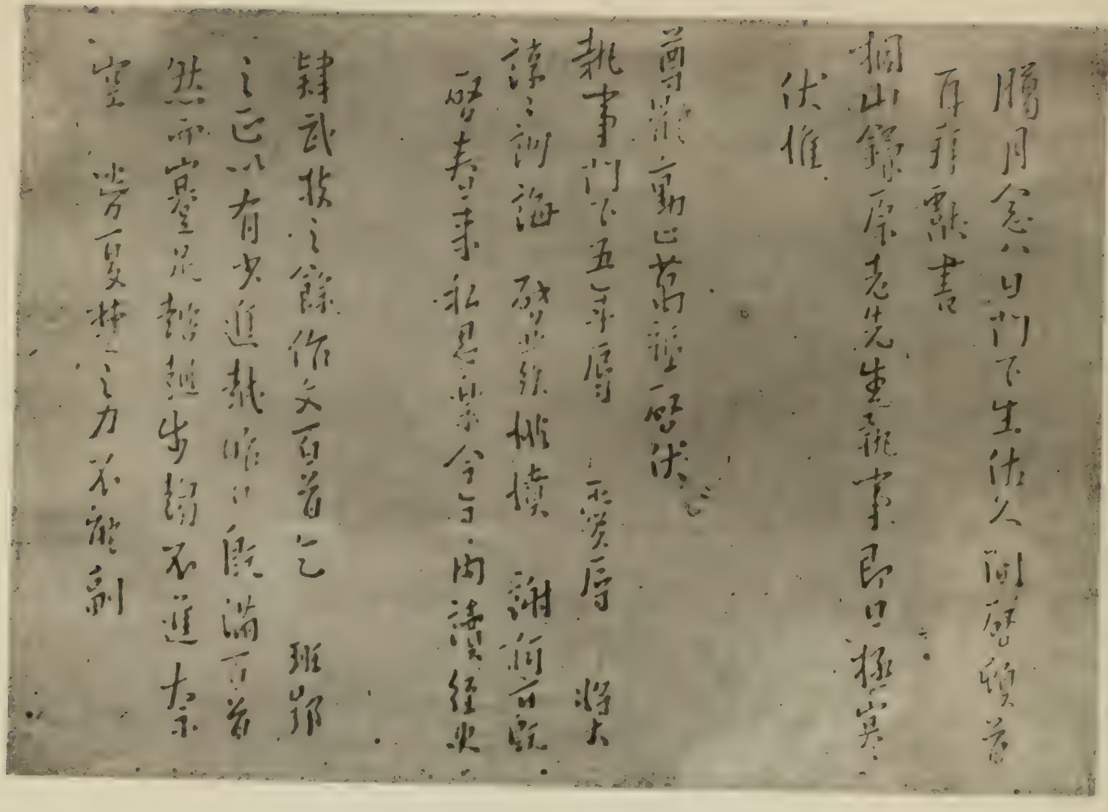
右一圖ハ七頁ニ出ヅル松代町鎌原重由氏所藏

武田晴信ヨリ大之(高禅寺史丸高)宛文書第一號文

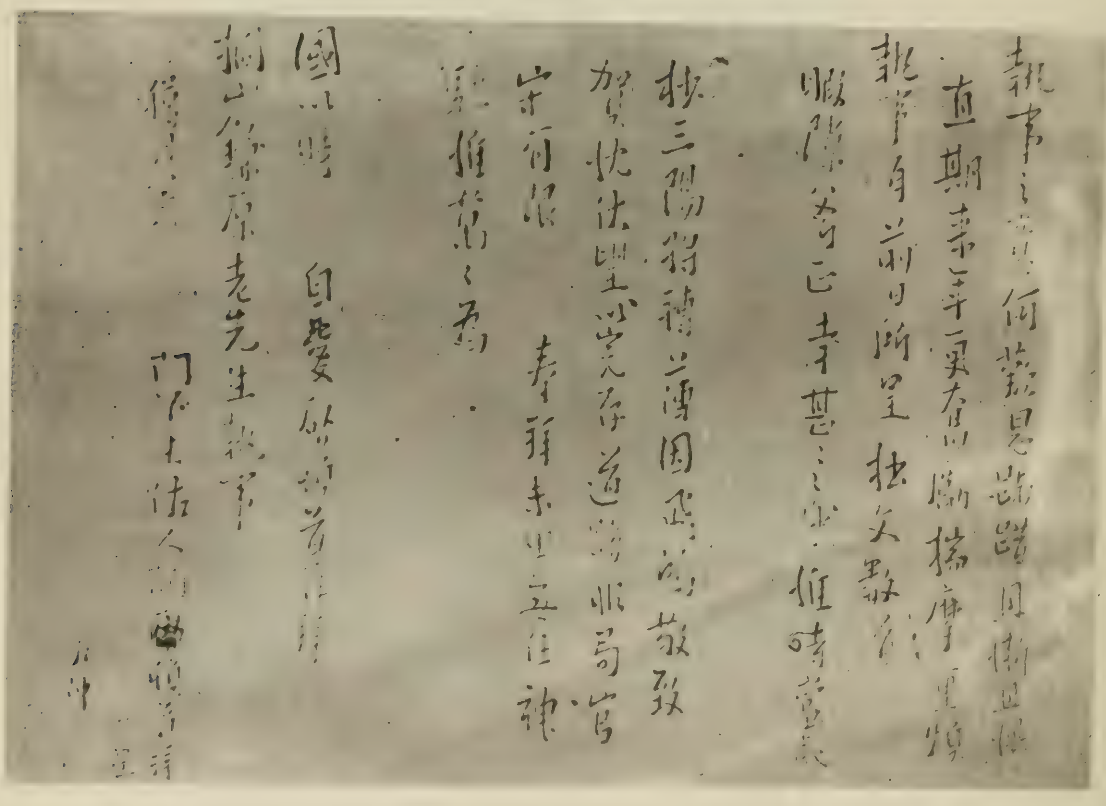
又此ハ年十二月廿八日二十歳ノ晴信ノ筆意ナリ

誠ニ貴重スベキ二種ノ書類

師鎌原桐山に贈れる書牘
天保元年十二月廿八日二十歳の書なり筆意は
歐陽修なりと云ふ（高野蒡叟氏說）全文第一卷文
稿一四七頁に出づ松代町鎌原重正氏所藏



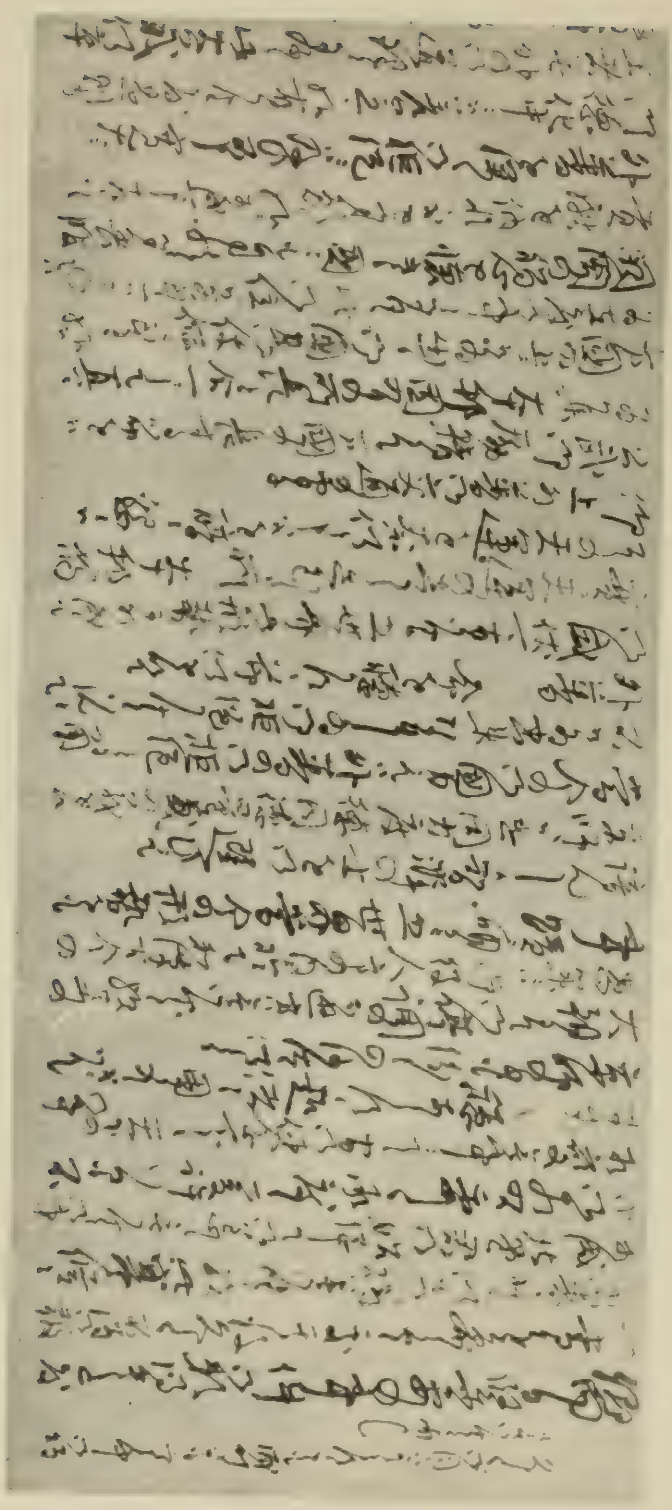
臘月念八日門下生佐久間啓頓首
再拜獻書
桐山鐵原老先生執事，昆日極寒，
伏惟
尊體萬福，甚喜甚慰。
執事門下五年，屢 承厚 獎，大
諄々訓誨，啓發誘掖，謝何可既。
啓去年秋冬今年，閉門讀經史
肄武技之餘，作文百首已， 班郎
之正以有少進執事，既滿百首，
然而實是鞭韁步趨不進，大索
實勞夏楚之力不能刷



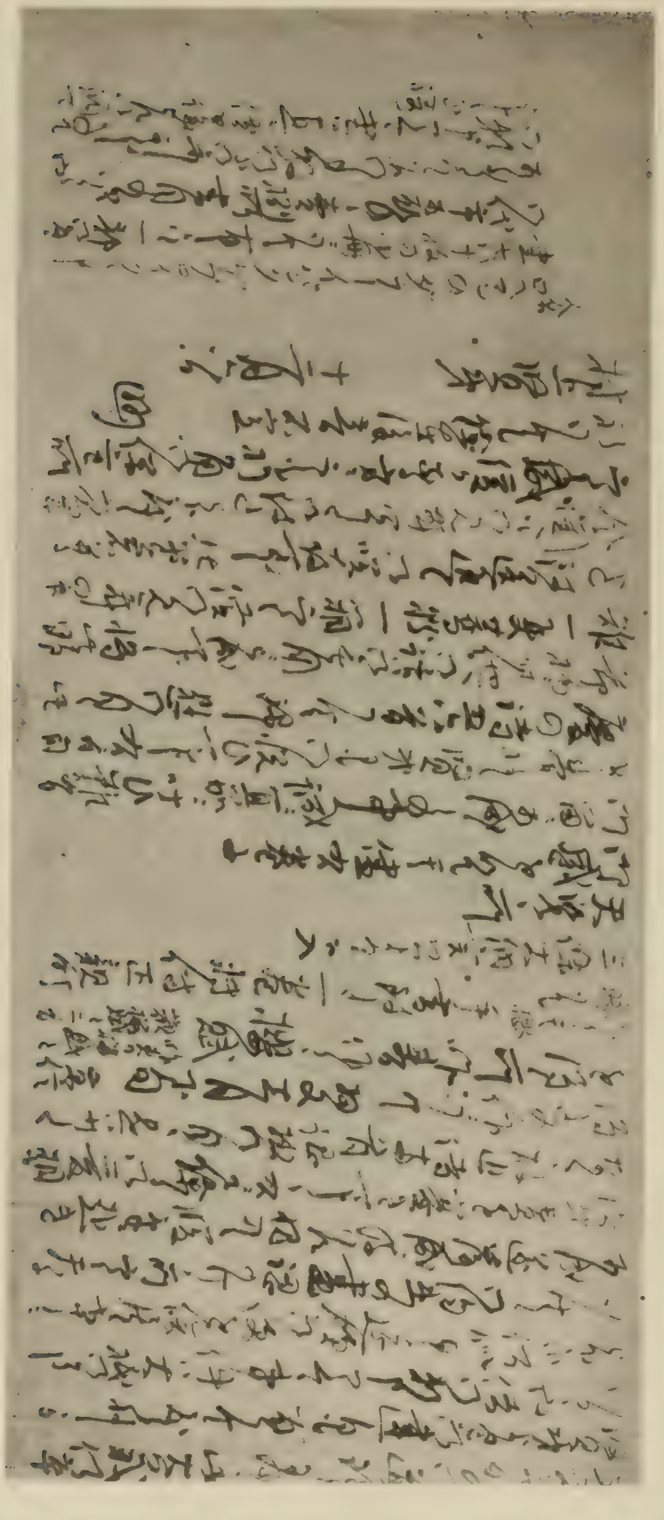
執事之前，何敢思踊躍，因樹旗幟
直期來年更奮勵，揣摩是慎
執事自前日所呈拙文數首，
暇隙賜正，幸甚幸甚。惟時寒威
抵三陽將轉，漸固氣，敬致
賀忱，伏望以道自存，道為服司官
宗前程　奉祈朱無任懇禱
至禱，惟為
國以時　自愛。啓頓首再拜
桐山鐵原老先生執事
侍史　門下生佐久間啓頓首再拜

義弟村上誠之丞に贈れる書簡

文久二年十二月六日五十二歳の筆蹟にて先生の政治意見を述べたるものなり全文第五卷に出づ原本は京都市青柳榮司氏所藏



同續き



書簡　木挽町時代

自嘉永四年四月
至安政元年九月

（第三八三號、第三八四號二通は御使者屋時代に入る可かりしものなり）

〔三八三〕 山寺源大夫に贈る

松代町 丸山熊男氏藏

嘉永四年三月二日

第一發玉跡索させ候所無相違有之

昨日御朋輩の門弟幷に他藩の門人見定め候所

拜見倍御清勝奉欣慶候然ば昨日御勸も御座候に付此程の第一發玉跡索させ候所無相違有之候趣申上候所御怡被仰下候是はかねても申上候通り態々穿鑿仕候にも及ばぬ程の義に御座候但今日御投與之御帋表更に〳〵難得其意奉存候畢竟此度の義は士人武術上の事にて敢て下輩のもの〻掛り候事に無御座候右を矢代村役人共に見覺えさせ被差置度候の御手附に內穿鑿御申含め候のと申は何事に御座候や果して左樣御座候筋にては昨日御朋輩の門弟幷に他藩の門人見定め候所猶其證に難相成矢代村役人に御見せ御手附に穿鑿被仰渡其上にて始めて慥かと申次第にて第一私に於て會得難仕定めて門下に於ても合點難致筋と申に可有御座候畢竟一昨日光來之節御自身御見置きも被成度と御申被成候に付其段を以て門下へも申通じ候義に御座候然る所御自身御出□の御沙汰は一向に無御座右之次第にて甚如何と奉存候に付如此に御座候御手附未だ

發し不申候はゞ速に御差留昨日之樣子猶聢と御見置被成度候はゞ御約定通御實驗に不可如候多忙中緊要而已草々申上候以上

三月二日　脩理

山寺様

〔三八四〕山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

嘉永四年三月下旬

中の條より云々の次第に付て

過刻は難有奉多謝候留別之菲品呈覽仕候處御懇懃に蒙仰結句汗顏之仕合奉存候偖中の條より云々の次第に付て門下の姓名等しるし候番付様の書付御所望に候所是は未だ作り不申いづれ彼場所へ向ひ候て差計らひ可仕奉存候且□前いたし候ものゝ順次等も事を終へ候後に傳播候は差構候事も無之候へども順次前廣に作り候て外へ出し候事はちと厭ひ候事に御座候開御斷申上候小山田大夫より山より前三町の間を除き玉落ちに致し候樣差圖御座候に付數字不明中の條關係數字不明御座候矢代迄御支配か御手附か出役なども思意には□いらぬ事と奉存候草々奉復

即刻

山寺盟臺 案下　　　　啓 拜復

嘉永四年五月十九日

（此の手簡の年代新に決定したるを以て第三巻五六九頁と重複すれ共これを再録せり）

〔三八五〕 八田嘉助に贈る　　　　松代町 八田彦次郎氏藏

多忙故久々御疎音愧入奉存候彌御萬福被成御揃候や奉伺候然ば追々暑時に向ひ候に付倉田にても大草にても御頼み六拾目より七拾目迄の御刺絡被成可然奉存候此度師岡氏被歸候に付其事申上度要用耳如此に御座候乍憚御家內樣へも宜しく御致聲奉希候以上

五月十九日　　　　修理

嘉助樣

嘉永四年六月十八日

〔三八六〕 山寺源大夫に贈る　　　　東京市 久保來復氏藏

拜別以來忽七八旬に及び候先以時下炎暑の所彌御萬祥被成御座候御事や御近況委く承度奉存候偖其表發軔の砌は御餞別等も御丁寧に被寄思召著都後も道

最初昨冬迄拜借の御長屋に著仕

去月廿八日木挽町の方へ相談整ひ候て引越申候

地主も諏訪莊助殿弟にて浦上四九三郎と申人に御座候

中阻撓も無之樣子御傳聞御怡被仰下母方へも御懇に御傳聲蒙仰重疊感銘不知所謝奉存候右拜答段々の裁謝をも疾可申上之處御聞も被及被下候や最初昨冬迄拜借の御長屋に著仕夫より修覆並建次等いたし候間御殿の方へ引移罷在十日餘にして御長屋の方へ戾り候等にて度々混雜仕其內小弟例の痰喘の氣味にて久しく相艱み快方候や否や木挽町に相應の家有之候と申にて其相談に取掛り候所彼是と入込候事も御座候て忙劇甚しく乍存御疎遠に打過愧悚不少奉存候幸に御諒恕被成下度候去月廿八日木挽町の方へ相談整ひ候て引越申し候不存寄御手充等被成下候にて頗る立派なる所へ罷越し剩へ此節專ら砲技出精いたし候中津の藩邸に近く候にて悅び候もの多く惟藤堂藩始め下谷より參り候門人深川の方より少々遠くなり候とてかまけ候のみ其他は大抵通ひ候最寄宜しく成候とて喜び申候其上地主も諏訪莊助殿弟にて浦上四九三郎と申人に御座候が頗る質直の仁にて何かと都合も宜しく旣に此間も裏口より風と被尋候て門人共砲術演習致し居候所を被見候て是にては場所尙狹く不都合なるべく候へば今空地にて此所不用に候へば圍ひ込候て都合致し候へとて二拾坪ば

（其氣概小弟の地主には頗る妙と存候）

かりの所を借し被申候莊助殿には不承知の由に候處洋學をも竊かに講究せら
れ度舍の様に見え申候其氣概小弟の地主には頗る妙と存候義に御座候母も御
厚恩にて居宅を獲興臥候所も可なり清疎に候故大に欣暢候様子にて何よりと
難有奉存候義に御座候此度書狀差上候事申候所立前の義並に過日御懇に御傳
聲被仰下候御禮宜しく申上度申出候尚色々申上度事共候へ共今信は何分多忙
にて不行届候先は段々の拜謝申譯旁如此に御座候惟千萬御保愼所祈御座候頓
首

六月十八日　　　　　　　　　　　　啓　再　拜

懼堂老盟臺　案下

（塚田孔平なり力石村の人武術修業の爲在府）

附啓尊嫂前へも乍憚宜しく御致聲奉仰候將譯書の義云々元豊類稿の料取戻
し白非氏へ相附し可申樣敬諾仕候孔平も如仰久保町へ家作仕引移候舍のよ
し此節作事中のよし此間參り申聞候何卒上邸にても渠へ也教授被仰附劍術
なども世間並方迄には振ひ候樣仕度ものに御座候中津藩などにては繁勤に
て其年齡五十六十に及び候もの迄も劍槍砲術等廢し不申者多勢の樣見受候

所本藩に限り拂地と相見え候て歎敷事に奉存候以上
又申上候被仰下候綠玻璃成程先年御眼疾の節破れ候を差上置候ひき急ぎ候事には無之候へども御見出しも御座候はゞ便閒木板に御はさみ候て御擲返奉願候以上

嘉永四年六月十八日

〔三八七〕竹村金吾に贈る

御手充に百金被下置候半と被仰出又々三拾金御增被成下候御事

深川御屋敷内にてあちこちと居所を轉じ

拝啓仕候炎暑之候に御座候得共闔府益御萬祥被成御座候御事や御履用委しく承度奉存候偖今春出府と罷成其後外宅仕候御手充に百金被下置候半と被仰出又々三拾金御增被成下候御事全く上の御特恩に出候義には御座候へども偏に先生御懇篤に御周旋被成下御親切に御耳提を蒙り候故の義と感激膽に銘じ候義に奉存候中々筆紙に難盡候に付却て多書不仕候其段は御心諒可被成下候扨途中の拜別いかにも遺憾奉存候著府後早速段々之拜謝申上度奉存候所久々不快に罷在深川御屋敷内にてあちこちと居所を轉じ候等にて實不得暇隙其内又木挽町居宅の義に付色々多事に罷在御手數被成下候拜答も早速に不申上慚悚

去月廿八日引遷候處

諏訪庄助殿弟浦上四九三郎殿と申仁地主に御座候

津侯の左右に門に登り候もの有之頗る出精に御座候

（三晴は三村晴山）

之至奉存候相談も調ひ候て去月廿八日引遷候處落付も不仕候に日々賀賓にて暫の間は何も手に付き不申又々今日迄御疎遠申上候段背本意候義に御座候幸に御宥恕可被成下候此度の所居地面之義御下問に候が矢張先年の於玉ヶ池同様武家地にて即ち諏訪庄助殿弟浦上四九三郎殿と申仁地主に御座候直に隣家にて頗る眞率なる人に候小弟など付合候には御舍兄ゟ却て取飾なく面白き様被存候宅の様子も御傳聞被成下候通何も取調ひ候て母も殊の外難有がり日々欣然罷在候其上御氣遣も被成下候水替の事に候が一向其氣味も無之宅の臺所に井戸有之候所上水の流派に候故水味も至て宜しく天幸と存候義に御座候門下之義も御尋被成下奉謝候月々に相增し申候當月は入門のもの三人に御座候所去月は九人御座候ひき津侯の左右に門に登り候もの有之頗る出精に御座候侯よりも時々御下問の事有之御不審之條などは直に引返し御尋等有之勢州表幷に志州海岸防禦之策御下問に付存候次第申上候所至極と御同意之趣にて御在所へも其段被仰遣其爲御家老何某も此表へ被召呼候御樣子にて三晴中津侯にてか御目通致し候節小弟へ宜しく禮申呉候樣になど御懇に被仰候と申事に

（二八七）竹村金吾宛

御座候拙文など御目にかけ候へば御自身御寫留被成候と申事に候いかにも非常之方と被存候此節御書齋修復御座候よしの所夫出來上り候はゞ參り呉候樣にとの御沙汰に御座候此節小弟新製の車臺を原書に本き候て取立候所其雛形けしからず御賞譽にて御在所に於ても其形に御改造有御座度御含のよしにて五分一の雛形製造の事御賴に御座候大藩之義に付一致致し本手に參候はゞ本邦の武備一廉の事に可有御座と存じ候義に御座候中津藩の事斷りにも可相成と風聞候よし一向跡方も無之訛傳に御座候此度の宅と相成候ては彼藩の上邸も中邸も近く成候とて諸子殊の外の悅にて日々よく致出精候深川に居り候間も少し改り候稽古之節は御用人と申老人迄も出席にて世話よく屆き申候いかなる事にて右等の風聞候やらん是は本藩にて小弟の事など面白く存じ候はぬもの申出し候事にても候歟本藩には却て此樣の事有之候五十ポンド砲玉著の事他に勝れずとの御沙汰に候へども其他と御稱し候は誰々にて其打候所如何樣にて此御沙汰御座候義歟不審に奉存候惟火藥を先に裝し彈を後にこめ筒より打出し候ばかりは素人にても婦人小兒と雖も出來候事に候數拾指の人規律

（中津藩の上邸は上木挽町、中邸は鐵砲洲に在り）

數十指の人規律を違へず一人の身の如くに……働き候法則を專らに敎へ候が小弟の家法

を違へず一人の身の如くに假令敵陣より矢石を雨の如くに飛せ候中に於ても慥に働き候法則を專らに敎へ候が小弟之家法にて卽ち西洋の眞傳に御座候假令玉著等の事世間俗砲家と同じく候迚も其同じからざる所は別に御座候と奉存候又況や玉著玉道等の常度を委しく講究いたし姦民の申かけを一目に看破し御用番始め素人にて正論通り不申候に付差出し置候書類殘らず取下げ候て出府後尙又明細注脚を下し御手許へ差上候所尤に被思召被下置候よし此一事に於ても俗砲者流とは伍を同じくし候はぬ心得に御座候右書類草本をば杉田

成卿も殊の外致感服大に砲家の心得に成り候事とて

成卿等へ見せ候所成卿も殊の外致感服大に砲家の心得に成り候事とて其藩の砲術家には一通づつ寫させ候趣に承り候其外にても大分傳寫候よしに御座候如此其學に長じ其識御座候人に動かぬ議論と被思候程の筋に無之候て何と致し御料所等へ拘り殊に御用番等を相手に致し强々申張候事出來候はん此表へ出で御上御始め成卿等の洋學窮理に精しきものいかにも尤もと御座候にて其御地の素人衆も閉口後悔可被申と存候義に御座候然るを先生より他に異ならず抔被仰下候はちと／＼不滿に奉存候故爰に一言相認め候義に御座候偖令愛

令愛君御疱瘡の事

君御疱瘡の事御丁寧に被仰下けく恐入候定期通り立派に御かせ候由安心大慶仕候途中拜顔之次陸々拜謝も不申上候が種痘の御禮とて何よりの御品被下又御餞別にとて御手重の品拜戴何共悚感之次第に奉存候是等乍憚尊妹へも可然御致謝奉希候近日少々落付其上先達より御書中にも被仰下候通り餘り頻に感冒仕候に付皮表の締り惡しく成り候と存じ毎朝冷水三桶宛あみ候事に仕久しく風邪にも遠り候て手隙を得候まゝ段々の拜謝御手數の拜答遲緩の申譯旁申上候尙色々申上度御座候へども餘は可期後音候惟爲衆折角御多愛所祈に御座候以上

毎朝冷水三桶宛あみ候事に仕

六月十八日　啓　再拜

竹村先生　臺下

嘉永四年六月十八日

〔三八八〕　増田助之丞高野車之助に贈る

著府後も度々御手數被下奉多謝候其表出立前も何かと御周旋御餞別等も御丁寧に被寄思召重疊感銘之至奉存候著府後も轉居彼是殊の外多忙にて稽緩愧悚

（三好小三郎森安藏は共に紀藩久能丹波守家臣にして砲術の門弟なり）

藤堂侯御左右よりも入門の人有之

不少候幸に御諒恕可被下候扨傳七より受取候て切手も高野君へ上げ候筈にて遂大延引に相成候此度兩樣とも附送候間宜しく御取はからひ可被下候十三ドイムガラナート壹つ鑄直させ候約束に付鑄直し候迄此分御引被下候ても可然候演習の爲ガラナートも多き方可然候近日三好小三郎、森安藏其外拾人ばかり久能氏の銃砲出來其打試として浦賀へ罷越し候所折節彼地に於ても下曾根殿門人地附の與力同心等にて致稽古打總數百發餘の樣子に候處其中にて三好等大に出來候評判にて就中十三ドイムモルチール皆々感心候よしにて筒並臺の圖なども彼地のものを寫し取候と申事に候稠人中にて大に面目に候ひしと罷歸悅び申聞候此節藤堂侯御左右よりも入門の人有之頻に致出精侯よりも時々御下問に御座候頗鋭敏の御樣子にて當今爲すことある御方と被存候拙文など入御覽候に御自身御筆錄被成候よしに御座候中津藩諸士不斷出精にて此度引移り候宅其藩邸と切近候とて皆大喜にて晝前當番に出かけなど候て參り候ものも有之候彼藩などにては五六十の老人などもよく見え申候本藩などの風習とは餘程違ひ候樣被存候中津の大砲も多分八月中に演習可致存じ罷在候尙其

以前期日大凡にわかり候はゞ御知らせ可申候先は出立前よりの御禮貴答旁如
此に御座候時氣折角御多愛所祈御座候以上　　　啓　再拜

六月十八日

増田
高野　二君　足下

〔三八九〕八田嘉助に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

嘉永四年六月二十二日

御長屋を彼此替候

是よりこそ疾出立前段々之拜謝をも可申上之處著府彼是と居所を移し候等にて殊の外多忙に罷在其上久々風邪氣にて夫も拜借の御長屋を彼是替候にて押張り候故か散々長引候て筆研等をも近け候事能はず平臥罷在候仕合にて何方へも書狀等差出し不申但貴家之御事は別段に付呈書可仕と存候所例の鋏君御縁談之義出立前御囑託を蒙り候に付此事能く突留め候て同じくは申上度臥病中も手を回し候て御飾方と申候へば奥向へ携られ候衆に尋ね候はゞ可然存じ賴み候所可宜樣にも承候へども兩人の申方兩樣の次第にて何分聢と申上候に至りかね候に付又御細工頭の方へ手寄を以て託し候處此方何かと日數相掛り

候へども矢張初めも同樣動かぬ所へ參り不申依て近頃中津藩の門人に町與力に親類御座候者有之其與力隨分此樣の內穿鑿もの長じ候よしに就き其門人へ相賴み此節探索罷在候所へ本月八日之御手教拜接御催促之義蒙仰愧入奉存候此度はいかにも仕聢と仕候所突留源兵衞善光寺に罷在候間に申上度と奉存候義に御座候嘸々久々御無音に打過ぎ候にて御待遠に可被思食奉推察候最早大抵は相分り候に付其相續仕兼と申勘助の性行委しく相分り跡々厄介に不成候や否を突留候て申上候樣仕度候只今此所迄認め候所へ兼々賴み置候人參り漸委しく相分り候樣子物語に候次右衞門の死去は四年前かの事のよし內々は頭向にても承知にて其儘に相成居候との事夫も一昨年か姫君樣御方付の御道具御用中故死去屆いたし候へば戴ものゝ割合あしく相成候に付存命の分にて其割合を戴き候樣取拵へ候ものゝよし偖其勘助に御座候所是は性質暗愚にて勤等出來候ものに無之其弟に長藏と申もの御座候處是は至ての才子に御座候へども以ての外の放蕩無賴の者にて既に姫君樣御道具の內其價五百金程の品引込候て外へ典物にいたし候所其事露顯候て表向候時は次右衞門の株にも差障

り當人も死罪を免かれ難き次第に付今津仁兵衞氣の毒に存じ其金を償ひ候て長藏の頸を續ぎ遣し候よし依て此節にては次右衞門の株は仁兵衞の方に有之譯のよしさてこの今津は至て手堅き人物にて此節同じ支配の內にても評判宜しきものゝよし其上至ての大身上にて町地面十七八ヶ所も所持いたしいづれにも萬金の儲も御座候と申べきものゝよし次右衞門方の株も千兩の株と唱へ候ものに付其株を次女に與へ夫へ聟養子いたし長藏竝に勸助等へは夫々手當ても致し可申候へば其所は御氣遣にも及び申まじく惟仁兵衞の聟に御成候と被思召候はゞ可然よしの說話に御座候總領藤二郎と申ものも實子にては無之養子のよし然れば其次女と申ものは頗る愛子にても候歟のよし此度の突留にては御緣談至極可然被存候間源兵衞へ被仰談御熟話に相成候樣奉祈候此段々之說話にて御別帋に有之候株式仁兵衞へ引取別宅爲致直家督に相成外厄介無之尤も兩親老母の內參り世話致し可申と申所其緣故委しく相分り候義にて小弟に於ても安心仕候義に御座候尤も次右衞門御扶持方三人扶持と御座候所是は一代切にて其跡目の勤功に依り候て又々被下候ものゝ由僅か三人ふちと申

外宅御手充百三拾金戴き家を求め引移り候疊の數八十枚ばかりにて藏も二ツ有之

にても御扶持の出候と申は至て重き事のよし此仲間にては皆其通の事のよしに御座候今津の方は永々御扶持と申ものにて又家筋も違ひ候よしに御座候年始御目見の義も世間へは左樣唱へ候へども是も數年御用相勤め候功に依て被仰付候事にて最初よりは御目見とは參らぬ事のよし是も心得迄にはなし置き候と申事に御座候愚意には此樣の事いづれにても宜しく但其身に相成候今津の人物宜しき評判と申にて心掛り無之樣奉存候其上勘助長藏等への手當も今津より可致事に候へば總て氣遣は無之樣被存候惟彌御熟談とも相成候上は錢君之御愼簡要と存じ候事に候彌御熟談とも相成候樣運びにて御出府等も可有御座候はゞ乍不及如何樣にも御世話可仕候間突掛小弟方へ御出御座候樣奉存候小弟も此度外宅御手充百三拾金戴き候て木挽町五丁目御繪師の狩野殿向へ家を求め引移り候疊の數八十枚ばかりにて藏も二ツ有之大小銃習はせ候空地も少々有之都合も宜しく偏に上の御特恩と難有仕合奉存候此段乍序御風聽申上候先は緊要の事件のみ申上候母も出立前段々之御禮宜しく申上呉候樣申出候乍憚御家内樣へ總て可然御致意奉希候餘期後音候頓首

六月二十二日 修理

嘉助様

尙々先達ても著府御悅とて御手帖又此度も御懇書千萬奉多謝候且名產之甘露杏一棬御送惠感銘不已奉謝候愼藏君より御託の望岳賦も竹村氏歸藩の節迄には卒業差送り度と奉存候過日おしづ君も家見に御出被下候御歸り候はゞ伊勢町さまへ委しく御話し被下候樣にと申置候義に御座候宅の樣子は其內此君より御承知可被下候以上

望岳賦

〔三九〇〕林辰之進に贈る

嘉永四年七月九日

御細工ものゝ事

甚暑之節倍御無恙奉拜慶候然ば御細工ものゝ事私も出府以來暫不快にて引込居又木挽町五丁目へ轉居候等の混雜にて御催促も不申候處此度身筒出來候に付御仕上被下候分西村大八郎子迄御出し被下度奉希候片端より段々に御仕上被下候思召にて未御不調に候はゞ責て拾挺分早速西村迄御遣し可被下候此節西村も臺の細工に掛り居候て近日旣に身筒の形を送り吳候樣に申遣し候に付

相送り候義に御座候其節もからくりの分貴君より落手取付候樣申越し候義に御座候餘り延引に相成候ても甚恐入候事且からくり御手後れに被成下候と外細工の差支に相成候間何分御果致取被下候樣奉萬祈候御引受の分出來上り候はゞ又々五六十挺御あつらへ申度御前借の所も御都合よく取計らひ可申候何分武器の事にて候間期日後れ候ては不都合に御座候先は前段拾挺の所御催促迄如此に御座候暑威折角御多愛所祈に候以上

七月九日　　修　理

辰之進樣

猶々四五十挺の御引受あれば前借何程六十挺なればいか程御所望と申事貴答被下候節一寸御申送り被下度候以上

〔三九一〕片山仙左衞門に與ふ　下高井郡平穩村　黑岩市兵衞氏藏

西洋砲學眞傳免許狀

嘉永四年七月廿三日

一砲兵隊長號令法

一長短カノン表
一大小ホウキツル表
一大小モルチイル表
以上

貴殿早歳大砲之術を以て家を成され候所尚君國之御爲に心を被盡高年の今に及で再び節を某に屈し祁寒暑雨といへども無怠慢西洋眞傳之砲學被遂修業候條感歎之至に候依之今般目次の通令附屬候畢以後從學賴入候者有之候はゞ敎學之分を正し其等に循ひ可有指南者也仍而免許狀如件

嘉永四辛亥七月二十三日

佐久間脩理

大星明

片山仙左衛門殿

長野市　和田榮二氏藏

〔三九二〕　高田幾太に贈る

嘉永四年八月三日（幸貫の孫女秀姬、十五歲卒去）

御手敎拜見扠正九時被遊御逝去候との御事御同然慟絕之仕合恐入候御事に奉

重大の蓋石を蓋ひ

存候右に付御心得迄に御問合之義能社御心付られ候御事と奉敬嘆候御棺內御詰ものゝ事古來用ひ來り候者樣々に御座候腐敗を防ぎ候爲に或は朱を用ひ水銀を用ひ候事貴人の上に御座候へども是は入らぬ事と奉存候其次に至り石灰又は炭末を用ひ候是二種も能く動物の體をして長く腐敗せしめざる功を備へ候故に御座候然れども期し候所は是も入らぬ事と奉存候惟御棺內をば可成丈狹く作り其隙間〳〵御召の類を以て奉詰候方可然奉存候御棺內狹く作り候と申事一通り承り候と何か薄きに失し候樣に聞え候へども是は古人の論も御座候義にていか程棺材を瀝青(チャン)塗に致し或は棺を銅にて製し候とても千百載の後には必ず腐爛を免かれず候其節棺內の隙廣く候時は棺側之土石棺を押し破り斂め置き候遺骸をそこなひ可申と申を恐れ候て可成丈狹く作り候をよしと致し候義に御座候乍然其穴を右樣之患無之樣切石にて積み下げ棺上をもたとひ棺材朽果て候後といへども下へ押し崩し候はぬ樣重大の蓋石を蓋ひ候樣致し候へば棺は大きく候とも害無之と申說も有之候是等可然御論究御座候樣仕度候二重御棺の詰は石灰木炭の內可然奉存候偖御棺內を塗り可然哉御問合に御

座候是は內をば塗り候はぬが宜しく御座候外をば塗り候方可然候料は松脂黃蠟麻油蛤粉に御座候其分量は時節に因り候て變じ候樣覺へ申候此炎暑之時節程好き分量を定め候て跡より申上候樣可仕候先は御心得迄の拜答迄如此に御座候以上

三日　　　　　　　　　　　　　　　　　啓　拜　復

高　田　君　臺下

棺を塗り候料時節に因て變じ候と申は寒き時節には松脂多く候時は少し物の當り候てもひゞわれ且はげ易く候又暑き時は蠟油多く候時は溶け候て流れ候患有之候全く其爲に分量を變じ候事に御座候也

〔三九三〕　島津文三郎に與ふ

嘉永四年八月十日

貴殿西洋銃兵之法入門以來無怠慢御心掛立法步法銃器のあつかひ正斜左右進退回旋諸則凡そ一人に係り候業御習熟候に付今般一等を進め隊列法令敎授候但隊を結び陣を連ぬると雖其利鈍の本は一人の業に外ならず候間兼て御習熟

候所尙無油斷可有精研者也

嘉永四年辛亥八月十日　　佐久間修理

啓明

島津文三郎殿

〔三九四〕　中俣一平に贈る　　松代町　中俣兼雄氏藏

嘉永四年八月十四日か

彌御安泰珍重奉拜慶候然ば願置候ゲウェールル何分此者に御渡し被下度奉希候以上

八月十四日　　佐久間修理

中俣一平様

〔三九五〕　山寺源大夫に贈る

嘉永四年九月五日

七月念四八月初五之御兩函陸續拜接いつも〳〵御健寧之條詳悉沃慰之至奉存候木挽町ト居之義も御怡び御肴代等被寄思食其以前暑中の御尋とて老母方へ

白玉粉二袋蒙御惠投重疊感銘不勝筆謝奉存候自是は毎々御疎遠のみ申上候處數字不明乍例奉痛入候御事に御座候中元にも先子之墓へも御參詣被下候よし奉感謝候

其御地雷雨頻々のよし具に被仰下視るが如く奉存候此表も一度迅雷有之所々へ落ち候て震死のものも兩三人承及び候盛暑に候て歲柄宜き程雷は强き樣被存候利害兎角相依り候ものと被存候當年東西ともに豐作の樣子にて尤も肥後は十分にも無之水損なども有之候よし承候所是も藩士の內門人有之夫に尋ね候へば三郡ほど荒候のみにて其他は隨分宜しき趣申候御大家に候故三郡ばかりの荒は何とも存せぬ樣見え申候浦山しき事に御座候

孔平近邊へト居候て度々參り候が小弟よりは多忙にて于今尋ねも不仕候其內尋ね候て稽古場の樣子など目擊候はゞ可申上候

令郎御配偶之事委細奉畏候子習兒返簡次第是又可申上候

陳化成小傳

犯境錄中陳化成小傳御不審の條御尤に奉存候是はかねて埒もなき事と存じ候故一寸跋文を認置候ひき丁度三里の海門に短き二三〆目の砲を備へ候て洋舶

の乘通り候を打沈め候はんと謀り候風習に二なく存じ候に就き其所に意を寓し候事に御座候御一咲奉希候

別紙をば桐翁先生へも御轉致奉願候此草稿を津侯御覽被下一幅手錄候て呈し候樣被仰則ち錄し候て差上候ひき何か御擊節被下候と申事に御座候

異船の沙汰も一切無之至て都下も平穩に御座候乍去七月中か松前には何か異人亂妨の事にても候ひし樣に內々致沙汰候乍去其藩の門人共などは一向に不承と申候しかしいづれにも何ぞ有之候趣にて近日三村同門に仙臺の人有之七月中彼地發足近來著府のよし此發足の頃松前の早馬とて大急にて打續き數騎通り候內餘りに急ぎ候て馬を乘殺し候なども候て隨分騷々しく候ひしとの話の樣傳聞仕候但朝廷の御秘密と見え候て只今に委しき事は世間にあらはれ不申候尚承り候事も候はゞ可申上候

川路君にも如仰度々會見色々相話候義に御座候御名前をも兼て折々噂御座候義に御座候

鶴作何か火術書拜借に罷出候よし是は彼れ一人の了簡にも有御座まじく被察

候仍而高島が名前など有之候ものはけく然るまじく候其他の譯書の類は拜借
被仰付候ても苦しからずと奉存候
高文御示及難有拜見仕候愚意も御座候はゞ申上候樣畏候乍憚御行文も可然と
感讀仕候一兩ヶ所存付候義有之認入候御取舍宜しく奉願候先頃は禰津氏心疾
の樣子に候所左高療治にて忽ち快方のよし此疾も早く法の如く療用候へば格
別手開取れ候事もなく全快候事と見え申候吐藥はアンモニャには無之アンチ
モニーにて製し候吐酒石にも候歟と被存候此疾にはアンチモニー劑よく效を
奏し候樣被存候此方安藏子も大抵全快に御座候是などは小弟三日間に五百三
十錢の血を奪ひ餘程劇症と被存候ひしかども是に依て日ならず本心を得申候
醫方の事も隨分面白きものに御座候惟御姬樣御事時後れ候て遂に其詮も無御
座恐入候義に御同前奉存候御容躰を七月初にも承候はゞ何とか御療法も有之
候ひし歟とも存候義に御座候所一向に廿二日迄御病氣の趣申聞せ候ものも無
之不及是非次第に候ひき畢竟は漢方醫にて事もなげに申候故に御重症に被爲
至候まで誰も氣遣ひ奉り候者なく候ひし故と被察候既に中村の瀉血を盛に致

（文聰公妹秀姬、十五歲八月三日卒）

五行の説など唱へ何か理窟らしく聞え候故

し候頃藩邸の醫者衆竊に論を立て申候に一体發狂の症はたとへば人身の火の盛になりたるにて候火を滅し候は水にて人身の水は血に候火の盛なるに當て水を滅じ候事いかゞあるべき血液減じ候はゞ益〳〵火は旺し可申との事のよし小弟の耳に入候に付小弟哄ひ候て申候は發狂はいかにも火の旺し候症に可有之候火の盛なるは畢竟油の多すぎ候故に候へばその油を減じ候なりとて法の如く十分に瀉血を行ひ候所案の如く快方に御座候かの醫者衆の論に依り且その見込に從ひ候はゞ只今頃は如何ともすべからざるに至り可申と存候事に御座候五行の説など唱へ何か理窟らしく聞え候故素人はだまされ申候氣の毒なるものに御座候

猶色々拜聞申度義も御座候へども何分世話しく候まゝ兩度の拜復御惠賜の拜謝迄如此に御座候此表此閒迄例ならざる殘炎にて旣に當月も夏服用ひ候樣被仰出も候ひし所此月に入候て一旦に冷氣に成り朝夕は綿衣を重ね候位に御座候其表さこそと被存候御保嗇千萬所祈に御座候餘は後音可申上候已上

懼堂老盟臺　几下

九月五日　　　　　　　　　　　　啓　拜覆

〔三九六〕　恩田頼母に贈る

嘉永四年九月十八日

拜啓次第に劇忙に罷成從て久しく御動靜をも不奉伺畢竟は深き御雅愛の程を奉恃候ての義と申ながら愧悚の至奉存候偖又先頃は御投書被成下御譴責を蒙らず候のみに無御座御丁寧に奉荷御存眷卜居の義も御悅被成下殊に時候の御尋ねとて白玉粉一箱蒙御惠賜重疊感戴拜謝の可申上樣も無御座難有奉存候且今年夏秋非常の熱毒にも尊體益御萬福之御樣子詳悉仕深く奉慰勤企候義に御座候小生此節之樣子御下問被成下奉謝上候中津藩次第に信從候もの多く月に三度づゝ其下邸へ（高輪二本榎に有之候送迎は駕籠と申事にて候所文邊の事にて請待に候はゞ可然候へども武事には馬の方似合可申と愚意を申候て送迎馬にてせられ候）罷越し候て兵士に進退分合の節度を習はせ申候近來は大に歩を進め候もの有之皷角の節奏も稍法の如く相成候此分にて歲月を重ね候はゞ一廉可觀ものに至り可申候津侯にも追々御信用被下候て藩中より九人歟稽古に參り候乍然未だ格別の英才を得不申候左倉侯よりは被命候て近日四人入塾仕候是

当今世に益も無之詩文等閑言語の世話致し居候よりは遙に増したる事

迄の塾生と合せ拾三人に御座候何かいかにも混雑仕候義に御座候日々の稽古にて塾生は早晨より打掛り申候外よりも中津藩因州藩長岡藩上田藩等よりは早朝より朝暮の辨當など持參候者も有之日々三拾人缺け候事先は無之少し賑かと存候へば四拾人に餘り申候故教授仕候も甚世話布罷在候本業にも無之事に揆らず箇様の次第にて奇怪なる事と奉存候乍去當今世に益も無之詩文等閑言語の世話致し居候よりは遙に增したる事と存候て勉勵仕候義に御座候御一笑可被成下候左倉藩門人十人有之候所一人は兼松繁藏と申候て高島四郎大夫が弟子にて江川氏などと一同に致修業其比皆傳の者と世間にも被稱小生江川へ參り候頃は先輩と禮敬候ものに御座候然る所其者却て贊を納れ候て門人と稱し候などわづか七八年の間に不思議なる事に御座候又其一人は齋藤碩五郎と申候て繁藏の弟にて砲術を以て家を興し候者に御座候是は江川の門人にて忠兵衛などと一同韮山へ參り居皆傳を得候て其在所にては教授を專に仕候者の由然る所君命とは申もの丶節を屈し候て入塾仕少年の者一同專ら勉強いたし候は中々感じ入候者と奉存候他藩にて箇様の者多く有之候故よき筋も早く

一藩に開け候歟と被存候中津藩などには事を執り候役人の内に人物有之天下の御爲に海防人數を被命候て夫々厚く手充も有之砲術など致懈怠未熟に候ものは容易ならざる罪科に付隱居致させべくなど申存念の由懈り候へば嚴罰あり勤め候へば重賞ありと申仕向け故に砲術のみに限らず何藝もよく仕候者多く候樣に被存候近日浦賀へ罷越候て彼地へ近來參り候東西諸蕃人筆蹟を得申候其內尤も感心仕候はアメリカ人に此方の同心其船の今まで過ぎ來り候海路を尋ね候所其同心の懷ろ紙を取り候て例の石墨を以て五大洲の略を畫き夫々海路の線を引き候二枚匆々の筆に候へども五大洲の形狀布置圖を按じて認め候とても此上あるまじく被存候程に御座候いかにも地理の學など手に入候事と被存候此は跋を作り候て一幅に仕候間後便跋語可奉入御覽候又アメリカの象棋を傳へ申候頗る面白きものに御座候兵法に似候所は是迄の碁も象棋も及び不申殊に敵のこまを取ると申事なく夫をわが物として使ひ候趣向孫子の必以全爭於天下之意に叶ひ候て意外の考に御座候餘り珍布候故近日譜を作り申候桐翁先生へも御目にかけべくと存居候へども寫手も無之延引仕候是も後便

閑を得候はゞ御慰に可入御覽候色々申上度義も御座候へども多忙に付御惠賜の拜謝旁早々申上縮候時氣折角御保重被遊候樣奉祈候以上

九月十八日　啓頓首拜覆

正誼老臺執事

附啓熊三郎歸藩の節託して呈覽仕候品は物末に御座候へども津侯より御贈り被下候品に付かく有名の侯より賜を受候と申も長々の御高誼を蒙り候故と奉存候に付心計りに呈上仕金吾へも同じ志にて贈り候義に御座候其節も書狀差上候心得の所難去幹事出來遂夫なりに呈書不仕候義簡慢の罪實に逭所無御座奉存候幸に御海容可被成下候頓首

嘉永四年十月五日

〔三九七〕八田嘉助に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

其御地追々冷氣に相成べく候處倍御安健被成御揃珍重奉存候先頃は鋏君御出府にて御近況委しく承之大慶仕候其節も御手紮にて被仰下候義一々敬諾仕候所彼の先方にても不慮之事有之御相談果敢〴〵しく調はず不及是非候此節外

榮八大坂往來甘草等の事不始末のよし

誠意を以て炭彥を語らひ

に差當り是と申處も承り不出候得共此表の事は廣き義に候へば其内には可然所も往々に可有御座候御當人にては此儘私方に也とも御出候て宜しき所御尋ねも被成度と御申候へども市兵衛之存念此度は是非とも御同道申度と申事に付明朝御出立と申事にて殘り多く奉存候尚此度の今津樣の所諸所へ頼置候て宜しき所聞つくろひ候と申上候樣に可致候委細之義は御當人並市兵衛より可申上候へば多忙旁一々不仕候將榮八大坂往來甘草等の事不始末のよし承り苦々しき義に奉存候右等の義御座候に付候ても兼ても申候通り腹の惱にして商賣の事に致鍛錬應對文筆いづ方へ被差出候ても菊傳の手代と稱し愧かしからぬ一人を被召拘御働かせ候はゞ敗を轉じて功と爲す手談可有之事と奉存候いづれにも誠意を以て炭彥を語らひ是を後ろ楯として利をも共にし損をも共にするの仕掛に候はゞ其所に眞利可有之候松嘉も近日出府候との事同道の坂人も御座候よしいづれ逢候て其樣子委しく相尋ね愚考も候はゞ尚申上候樣可仕候忙中草々頓首

十月五日　　修理

猶々乍憚御家內樣へ總じて可然御致意奉仰候以上

嘉永四年十月五日

嘉　助　樣

〔三九八〕恩田賴母に贈る

（新執政は眞田志摩）

拜啓仕候此表も朝夕は大に冷氣に相成候其御地定て霜寒の候と奉存候御動履益御萬祥被爲入候歟奉敬問候時に昨日依田甚兵衞妻看病にて其御地へ出立仕候趣承り上邸へ罷出候處新執政も著府御座候由に付候問仕候處何歟以の外に御用にて取込れ候と申事にて他日參□□□□事にて面言は不仕候邸中にて承候へば其著御座候當日なども御逢など長く有之候歟退出も遲く候ひし趣に御座候此度新執政出掛られ候事誰に承り候ても聊か突留候事存知候もの無之本より其筈の事には候へども顯然□□□□往を以て來を察し候にいづれにも其表に一變革御座候事と被存候此義公明正大の君子手を揃へ御國家の大本より興り御紀綱を一新候事に候はゞ幸甚の事に候はんが萬一左なくして執事に意を得ざるの黨與有之或は其間にて首鼠の兩端を持し彼の壟斷を占め候賤丈夫

輩私利を失はぬ謀にて取拵へ新執政衆も少年客氣を以て事を計られ候はゞ其名其形或は是に近く候とも其實其心旣に非に候へば孟子の所謂生於其心害於其政にて夫は〳〵容易ならざる義と竊に恐惶仕候乍然事爰に至り且小生閑散孤立の者に候へば如何とも力の盡し方も無御座候因て唯一言の忠告を執事へ申上候是は久しく高誼を拜戴罷在候に付如此に御座候幸に御心を被爲留被下度奉冀候能く大觀候へば毀譽得喪は片雲の空に起滅するが如くにて實に意にかくるに足らず畢竟自ら覩候事輕く踏占め候所浮き候故に其起滅に隨て吾心を轉せらるゝにて候憚入候申上方に御座候へども成程執事の御施設上奉敬服かね候義も御座候夫は御賛襄申上候ものに其人を得させられず其爲に□□□義多分御座候義と被奉察候乍然執事御資質當今實に其比なく候へば此節或は御不得意の事御座候とも遠からずして又思召を被爲得候事なからずやはと奉存候間何分にも御進退の所乍憚御立派に被遊候樣奉祈上候遠くこれを□□し近くこれを自身の上に省み候に世に逆境と稱し候ものゝ則ち皆我錬磨の地にて其心を懲らし性を忍てその能くせざる所を增益し候事其後よりこれを見候に

（正誼館記は第一卷淨稿二八頁に出づ）

甚幸なる事の樣奉存候因て執事の御上にも萬一御不得意の御事御座候はゞ其所を以て是迄能くせさせられざる所を御增益被遊候樣に乍憚御心を被爲付度奉企望候其綱領條目は先年既に正誼館記に認め差上置候義に付爰に重複不仕候唯返す〴〵も御自重被遊一段と御志氣を引立てさせられ候樣奉祈候突然御威重を奉犯候義恐入候へども兼々御不棄を蒙り候上は一言申上ざることを得ざる義に付如此御座候餘は奉期後便候恐懼頓首

十月五日　啓　拜

正誼老臺　執事

久かたのおほぞらわたる月だにも
　はるればかくる世にぞありける

なか〳〵にかけぬればこそ照る月の
　光みちぬる夜半もありけれ

世の中は古今ともに皆如此ものと奉存候以上

嘉永四年十月

〔三九九〕　三好小三郎に與ふ

西洋砲學眞傳免許狀

一立法
一頭の向きやう左右
一右向法
一左向法
一左向回りやう
一歩法　直斜
一止法
一小銃持やう
一同あつかひ法
一同こめ方　十二段　四段　急
一打方　直斜

一二列打方
一人數組方
一點足法　一替足法　一急足法
一正面進みやう
一側面進みやう
一向き方正しやう
一隊伍回り方左右
以上小銃
一野戰大小地砲使用法
一攻城地砲使用法
一守城海岸地砲使用法
一長□人砲使用法
一大小天砲使用法
一砲身並砲車圖式及砲家に用ふるさまぐの器械圖

一砲身砲車砲隄砲床等名目
一三才諸砲裝藥分量
一同射擲遠近
一遠近測量
一ねらひ規則
一三才諸砲さま〴〵の打方
一同時所位
一諸火術

以上大砲

貴殿入門以來篤く心懸修業有之追々上達被申候に付右の通敎授の事令免許候
但西洋砲學廣深之事に候間猶無怠慢可有勤修者也

嘉永四年十月　佐久間修理

三好小三郎殿

〔四〇〇〕 中俣一平に贈る　　松代町　中俣兼雄氏藏

（嘉永四年十一月十五日）

霜寒之時候御上益御機嫌能被遊御座恐悦至極奉存候然ば過日被仰出候オクヌント先御借受被遊御覽度との御事奉畏則取出し候間奉差上候宜しく御取計可被下候彌御用にも相成候や否は其內御旨を御伺被仰下度奉存候以上

十一月十五日

猶々風呂敷は此ものに御返し可被下候以上

中俣一平樣　　佐久間修理

風呂敷包添

〔四〇一〕 長谷川深美に贈る

（嘉永四年十一月十六日）

（村上生は村上榮俊なり）

霜威日に烈しく相成候所彌御安健珍重奉存候然ば御在府中御內話も候ひし村上生外宅之事其後隨分無油斷心斷遣し候へども相應之所無之今日に至り候處此節一ヶ所有之候趣にて場所は萱場町に候故醫業致し候には最寄よろしく御

座候委細之義は當人より申上候に付相略し申候かねて御内話の節も左樣申候通りとても醫業にても少し行はれ不申候ては小給に就き何分活計に差支候義に付何とか御助力不被成下候ては難相叶次第に御座候此表貢居の家も澤山有之候へども或は市中の地面にて物がゝり多く又は武家地にても輕き御家人の地などに候へば餘計に先納をはたられ候には困り候ものに付夫等擇み候と善き所は隨分少きものに御座候此度の如く最寄も宜く地主も良き趣にて宅の樣子も大分都合よきなど申は拂底なる義に付何分も宜く御周旋被下度奉希候今日當人罷越し此段私ゟも相願呉候樣賴みに付如此御座候時下衆の爲折角御多愛所祈御座候頓首

十一月十六日　啓　再拜

長谷川君　几下

嘉永四年十一月十七日

〔四〇二〕　白井平左衞門に贈る

附啓此一封御序に御遞送奉希候

金忠（金子忠兵衛）蔭にて愚弟を批議いたし

古人之申三世の通家と申様のものに付大抵の事は差ゆるし置き候心得

霜寒彌御健安奉拜慶候然ば此間は御内書被下金忠蔭にて愚弟を批議いたし不埒至極に付離門候樣被仰下御尤之御事に奉存候然所蔭言は小人之常事にて聖賢之事をも君長至尊之義をも蔭にてとかくいろひ候事まゝある事に候所夫は其まゝにして差置候事に御座候去らば表向候所にても批判出來候事かと申すに夫は本より根據もなき私言の事に候へば其人に對し候ては一言も出不申是は小人之常態と申ものにて實は深く咎むるにも足らざる樣被存候其上彼が祖父綱左と申人は先子の執友にて其緣故にて雪庵も渠も門人に御座候渠又愚弟へ入門候へば古人之申三世の通家と申樣のものに付大抵の事は差ゆるし置き候心得に御座候愚弟の心得は左樣に候へどもかれ本小人の事に候へば猶々不義理を重ね容赦成兼候樣之事に至るまじとも難申其時は愚弟とても不得已事も可有之候乍去先成丈は差ゆるし置度候但每々老兄より御深切に被仰下候條は千萬奉感謝候委細は尙拜面可申上候扨爰に一事御煩はし申度事御座候御隣長屋に寓し候雨宮左京の義に御座候先年愚弟手支之節所持之西洋書を引當に六圓用だゝせ候事御座候夫等之事も有之候に付昨年夏中當人差支之趣を以て

都合致呉候樣賴候故兩度に三十一圓用達遣し尤其節は來月末とか何とか申事に候所其時限戻しも不仕乍去愚弟も返されず候ても何之手支も其節は無之候に付催促も不申當秋盆後迄其儘致置き候所當年は卜居彼是にて多分入增候て外藩懇志之者より少々貸借候位之事に付其外手回の事を申候て早速償ひ候樣申越候所陸々挨拶も不仕私方へいづれ參り候樣申候ても一向に參り不申度々紙中にても申坂本才助抔を以ても申させ候所一切返事と申ものも無之愚弟御屋敷へ出候序に立寄見候てもいつも留守と申事にて其時に私方へ參り候樣留守居のものへ申置き候へども其後遂參り不申餘り不埒之事に存申候是も貴君忠兵衞を濟ぬことゝ御申候樣に申候へば差ゆるしがたき筋に候へ共是も只今にてこそ門人のあつかひに候へども兒どもの時は親しく友とも致し候もの且其母には人よりも其以前之交りを以て見捨呉れ候なと申賴みをも受け居候事に付堪忍致し置き候事に御座候乍然此節愚弟手許大に差支候間何分にも御厄介乍ら御長屋へ召呼ばれ以前六圓之借用も候間夫丈差引き貳拾五圓は近日之内致才覺差戻し候樣被仰含被下度奉萬冀候何分義理を辨へ候樣御敎諭可被下候

近日之内致才覺差戻し候樣被仰含被下度

御用多之御中かゝる事御煩はし申候は極て恐入候へ共何分可然樣奉希候至禱至祈

十一月十七日　啓　拜手

白井君臺下

嘉永四年十一月

〔四〇三〕大槻龍之進に與ふ　松代町　丸山熊男氏藏

西洋眞傳砲術免許狀（稿）

一立法
一頭の向けやう右左
一右向左向右向回りやう
一歩法直斜
一止法
一小銃持やう
一同あつかひやう

一同こめ方　十二段　四段　急

一同打方直斜

一二列打方

一人數組方

一點足法

一替足法

一急足法

一正面進みやう

一側面進み様

一（向け方直しやう 目良）

一（隊伍回し方左右 三谷）（括弧内の分は附箋）

　以上小銃

一山用三斤地砲使用法

（同十二拇長人砲使用法 目良 三谷）（括弧内の分は附箋）

（察するに附箋に在るは目良造酒三谷左馬に授與せし免許狀に書き加へしものにて大槻に與へしものには無かりしなるべし）

一野戰六斤地砲使用法
一同十二斤地砲使用法
一同柘榴彈裝法
一同十五拇人砲使用法
一攻城二十拇人砲使用法
一十三拇天砲使用法
一二十拇天砲使用法
一二十九拇天砲使用法
一各種砲身並砲車圖式
一三才諸砲裝置分量
一同射擲遠近
一遠近測量
一ねらひ規則
一三才諸砲さま〴〵の打方

一同時所位の心得

一諸火術

以上大銃

貴殿今夏入門以來篤く心懸日々出精修業せられ感入今般歸鄉被申候に付此卷今附屬候畢某元來此術を講習候事偏に家國天下の御爲を存じ候迄にて世間卑に臨んで高を爲さんと欲するものゝ比にあらず故に勤苦して發明する所の業といへども初よりこれを隱祕せず此邦に良法奇術を心得たるもの一人も多くあらん事某の志願也去れば貴殿歸鄉の後其人を得て指南有之義尤も以て可然候但修業の日甚淺く某の意に滿ざる所猶多し且西洋火砲の術甚廣博にして某といへども猶盡さゞる所少からず候間自ら其及ばざる所を知り旦暮無怠慢習熟續て可有請益者也

嘉永四年十一月

佐久間修理
明

大槻龍之進殿

嘉永四年十二月三日
尊大人御訃聞到來

〔四〇四〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

廿四日付尊大人御訃聞到來誠以絶驚言語道斷之至奉存候貴君御始御家內樣御傷悼いかばかりと察入候御事に御座候幼年より殊に御懇意も被下しかも御同庚に候故御互に末永く垂白迄も御力に致しも成りも仕候半と存候ひし所當年などかゝる御事の御座候はんとは思ひも寄らず唯夢とのみ被存候母始め小妾どもゝ何とも可申上やうも無之御不幸とて御悔み宜しく申上度段申出候御別紙御容體書をも致拜見候所西洋にてスワルテシーキと申御症と被存候至て難治のものに候へどもしかし四月中甚敷御黑便御座候節より御刺絡をも屢致し溫暖のもの一切御禁じ勿論御禁酒被成冷飮冷食のみ御用ひ假令茶等御上り候にも冷たるをばかり御上り酸き味のものを不斷御かてものにも被成候樣御心付御藥用も其御症に應じ候ものを御用ひ被成候はゞ此御大變には被及まじくと奉存候然る所私も此表に罷在其御地には夫等の御症と明白に存じ候醫者も無之此大故に至り候義と殘念に奉存候且其御初發より其容體等一切不被仰下

候事近頃遺恨の事に奉存候夫と申も畢竟西洋の醫方等も開け不申候故自然と右様の御症をも輕き御事と醫者も存じ其心得にて御話をも致し候故格別の御重症とも御心付れず此極に到り候事と被察候扠々不及是非次第に御座候乍然夫も是も皆定りたる御命數の所致可有御座候へば深く御恨悔も御無用に奉存候唯理を以て御節哀御毀瘠に不被過候様所祈御座候然ば此兩種不腆の至候へども御靈前へ御備被下度致送上候宜く御告羞可被下候乍憚北堂君令弟へも御悔可然御致意被下度候先は拜弔迄如此御座候唯御自愛のみ奉禱候以上

十二月三日　修　理

愼　藏　様

〔四〇五〕　林辰之進に贈る

嘉永四年十二月五日　折節奥平様御頼之大砲打だめしにて上總へ罷越し候用意

冱寒彌御安泰奉慶候先頃は御手帖被下候所折節奥平様御頼之大砲打だめしにて上總へ罷越し候用意最中にて晝夜無寸暇心外御無音恐入候又々御催促被仰下候に付今信金子差上申候七兩の所過日西村より三圓御取替申候よしに付四

圓御收可被下候からくり三十挺竹村殿へ御出し被下度候來年の御仕事も大分可有之候來年分は少し地板をも改め度所有之候十分に手本を作らせ差上候心得にて此節取かゝらせ居候兎角いつも多忙に付要用のみ如此御座候寒威折角御厭可被成候以上

十二月五日　　修　理

辰之進様

嘉永四年十二月六日

〔四〇六〕宮本愼助に贈る

近來一齋先生も八十の賀筵有之候

別來御踈遠愧入候其表發軔之節も御丁寧御餞別等被下感刻之至奉存候其後は絕て御禮も不申簡忽之段幸に御容恕可被下候日來寒威相加候御母堂様御始彌御清健に御座候歟爰許幸にいづれも頑全候閒乍慮外御放念被下度候近來一齋先生も八十の賀筵有之候至て健に御出候扁字一枚到來候所賢友山下の御住居には丁度適當候様存候まゝ致贈上候御哭收可被下候少々御厄介に相成度義も御座候別紙にて御承知被下度先は御踈遠の申譯旁如此に御座候乍憚御母堂様

へも宜しく御致意可被下伊木御祖母様へも可然希候億君より過日認ものゝ事申來候多忙にて未了いづれ年内には責を塞ぎ可申候間是も御序に御一聲所祈御座候寒候千萬御自愛候様奉存候以上

啓白

十二月六日

宮本賢友

（億君は伊木億右衞門）

〔四〇七〕 中俣一平に贈る

松代町 中俣兼雄氏藏

嘉永四年十二月七日

此間被仰出候十二廿野戰砲十五拇長ホウウヰッヽル圖奉差上候

寒威相増し候處御上益御機嫌克被遊御座恐悦至極奉存候然ば此間被仰出候十二廿野戰砲十五拇長ホウウヰッヽル圖奉差上候宜く御取計可被下候過日御尋被下候節も御話仕候通是迄の圖は門人共へも借し遣し鑄物師などへも下げ遣し候て手あかも付き居り御手許へ差上候義恐入候間別段に仕立て序に銃耳の所を切斷仕候圖をも認候義に御座候是は其儘御留被遊被下置候様仕度奉存候總て宜布奉賴候以上

十二月七日

佐久間修理

中保一平様

嘉永四年十二月十四日

〔四〇八〕中保一平に贈る

松代町　中保兼雄氏藏

寒入前故か昨今一しほ霜威に御座候彌御安泰奉慶候然ば此間申上候通オクヌントの義に付別帋之通に申來り候間何分も御下に相成候樣奉願候最初の手紙も乍序御覽に入候如此樣に申來り候得共私より差上候品に價など不相當之義御座候ては如何に奉存候故態と申上も不仕候ひき去りとて夫は不相當に付兎ても御買上等には相成まじくと先方へ申候時は暫時御借被遊候にも取計らひにくき事御座候に付やはり愚を示し候て取寄せ奉入御覽候に御座候右之次第に御座候間一先御下げに御取計可被下候昨日も又口上にて催促御座候に付如此に御座候可然奉願候以上

十二月十四日

中保様

修理

〔四〇九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

嘉永四年十二月廿二日

追日御淋敷思召被出候御事のみ多く可有御座察入奉存候近日御近所之内川巳之作出府にて御無恙の御様子は致承知候時下甚寒彌御障も無御座候や然ば此品御朦中並寒中御見舞の印迄致呈進候御叱存被下度候其後御家事の御様子等如何や日夜心にかゝり申候榮八方の御調等方付候義や近日御藏の方の義をも傳聞いたし候が實か否やは相分らず候得共穩かならざる事の様にも致承知候片桐等より御内借の事など急に何ら被成候様になど申事有之まじきに無御座候へどもひしと御差支候趣を此所にては包まず被仰立候が可然存候喜六等申候通り榮八不取計故に如此と申事も其通りを御申出可被成候夫にて榮八の罪の別に重く成り候にも無之候て貴家の敗を轉じて功と被成候一計には相成可申と存候故如此に御座候甚多忙にも候故草々如此申縮候餘期後音

榮八不取計故に如此と申事も

十二月廿二日　修理

愼藏様

嘉永四年か

〔四一〇〕 雨宮左京に贈る

昨日は御恵然被下奉謝候彌今夕御上途之條嘸々御用多之御事と奉存候昨日與良へも參り候所留守に付御約束通りに不相成遠方御使を煩し御氣の毒に奉存候近所より少々致都合御開に合申候御切手御丁寧の御事憚に致落手候昨日も御頼申上候通御在所表いづれへも宜しく奉願候御道中折角御保護所祈御座候

二日　　啓　拜

雨宮賢友座下

嘉永五年正月二日か

〔四一一〕 望月主水に贈る

長野市　近山與五郎氏藏

過刻申上候所申上落し候義御座候に付尙申上候私に御座候へば御安心被遊かね一平に御座候へば却て御安心被遊候と申御事乍恐冠履所を替へ候とも可申上是は畢竟學之淺深事の本末を御存知不被爲在の故と奉存候學之淺深事の本末を御存知不被爲在候は私等の言論を御親く聞し召れ候御事の無御座候故と

夏中御用に相成候六斤砲

奉存候私などの言論を時々御親く被聞召候御事無御座候は是亦其然る所以御座候義と被存候夏中御用に相成候六斤砲之義過刻申上候通戯稱に當り候や否御實驗被爲在尤も其節御側向にて右戯稱候族をも御呼出し御座候て其定見御座候て申出候義か又徒然一時の取留めざる義に出候やを御尋被成下度と奉存候もし唯定見も無之其義の本末をも辨へず候て取留めざる義を申出し上の御武器を誹謗致し候は不相濟義殊に火器之義などに浮說を申唱へ候事士氣の奮否にも關係候義に付其罪輕からざる次第に付聢と御沙汰御座候樣仕度奉存候是其關係候所細故に無御座候閒宜敷御勘辨御座候樣奉存候若又右等の義御勘辨に被爲及かね候御事に候はゞ右筒は御不用に相成（鑄物師へ御渡しに相成候金百拾兩に御座候閒右筒御戻し御渡しに相成候金子上納候樣致し候へば子細無之候）此度改めて御新鑄と相成候樣仕度奉存候且又其御新鑄も御上之御安心被遊候樣一平へ被仰付可然又鑄物師も兼ての思召通總五郎に被遊成就候所の延引に相成候は御見捨に相成候より外有御座まじく奉存候一向に事の得失是非も分らず候もの寄合ひ根柢もなき事を申候義御核實も無之御上之思召を奉始冠履所を替へ候樣にては御疎遠なる私輩いかに心力を盡

鑄物の掛は…蒙御免度

し候とも其御裨益有御座まじく却て御疑惑を蒙り候様可罷成甚迷惑仕候義に付鑄物の掛は一向に私の方蒙御免度奉存候若々私へ是非とも被仰付候御儀に御座候はゞ前條申上候御核實之御取扱ひに相成御上にても御親く私の辨說をも被成下御聽御側向にも限らず異論等仕候もの一同被召出其辨論の様御定斷被爲在御手前様にも御同様御聞被成下候はゞ根蒂御座候義は根蒂御座候事に相成り無根之論は無根之論と相片付可申左様御座候はゞ向後紛々之浮說相止み御兵備も確實之場に可至候左も無御座候ては一齊衆楚之勢致し方も遂に有之まじくと存じ候より如此申上候に御座候過刻申上落し候は鑄物御用私之方御免被仰付度と申一事にて候所其義を事の分り候様申上候はんと仕候へば遂又長く相成り御覽被成下候も御六ヶしく御座候はんと奉存候へ共不得已事如此に御座候彼是可然御進止可被成下候以上

正月二日

佐久間修理

望主水様

〔四一二〕 中俣一平に贈る

松代町 中俣兼雄氏藏

嘉永五年正月十九日（中俣は側納戸役）

剩寒兎角嫌かね候所彌御清安奉恭賀候然ばウエイランド詞書御手許御用に付返上仕候是は此節一四七の日西洋書輪讀等も始め置き御在所表より修業願ひ罷出居候ものゝ爲にも殊の外の必用のものにて此書無御座候ては盲者の杖を失ひ水母の蝦に離れ候樣にて甚當惑之仕合に御座候右之段御垂憐を蒙り候て御用明きに相成候はゞ又々拜借被仰付被下置候樣賢之助安世等迄一同奉願候義に御座候何分其段御序を以て可然御執成之程奉賴候御書物は都合合本六冊に御座候以上

（塾生蟻川賢之助嫐北山安世）

十九日

佐久間修理

中俣一平樣

〔四一三〕 中俣一平に贈る

松代町 中俣兼雄氏藏

嘉永五年正月十九日

拜見仕候西洋詞書之事云々承知仕候先刻持せ差上候が行違ひ候と相見え申候

只今頃は定て持參仕候義と奉存候但フランス字書（オランダ語にて註するもの）一本取落し恐入候家來罷歸り候次第持せ差上可申候此段拜答迄草々申上候以上

フランス字書一本取落し恐入候

十九日

佐久間修理

中俣一平様

〔四一四〕 宮本愼助に贈る

嘉永五年正月廿二日

新禧愛度申納候御揃彌御平安被成御超歳慶賀此事に限り申候弊家老少幸に瓦全候間御放念被下度候先は年頭御祝詞得貴意度如此御座候恐惶謹言

正月二十二日

佐久間修理

大星明

宮本愼助様

人々御中

猶々舊臘は御細答其上雨宮生之二十五圓御廻し被下千萬奉謝候然に其節も被仰下候通彼生事是迄の如く空しく歳月を費し内願の筋も調はず不用に金

舊冬より大御番與力村上と申へ相談大抵に相調ひ

拙者弟分にて遣しもらひ度と申賴有之候

錢を使ひ棄候始末にては行々濟かね候事に付存切り御在所表へ罷歸り候樣勸め可申樣被仰下至極御同意に存じ候事に御座候然る所舊冬ゟ大御番與力（祿は地方にて二百石と申事に御座候）村上と申へ相談大抵に相調ひ此度は十に十間違無之其家は砲術など敎授候家にて既に桑名仙左衞門老人なども其先代の門人にて候よし親類なども立派なる事にて松平和泉樣御家老鈴木權大夫なども近親の樣子にて此方樣御留守居迄も內々問合等有之妻女に成り候娘と年格好も宜しく引越しに相成候へば直に家督致し三月中は大阪在番に上り候都合と申事にて老母一人の外厄介等無之先代のなくなり候を祕し置き候ての養子と申事に付誠に都合よき事と存じ申候其親類共ゟも拙者弟分にて遣しもらひ度と申賴有之候持參は二百金にて結納の節百五十金引越の節五十金持參候樣にと申事に御座候尤も是非來月は引越と申事に致度と先方急ぎ候事に付結納迄に五十金出し候て追々引越迄に二百金の數揃へ候樣なれば夫にても宜しくと申事に御座候乍然成り候事に候はゞ結納に百金は遣し度樣に存じ申候先方にても大阪在番の年に當り居候故是非相應のもの見付候はねば叶は

ぬ樣子に就き至極妙と可申候其上其表後室の貞操の樣子をも其老母と申すもの年六十餘のよし聞及其樣の善き人に候はゞ同居に致し度と慕はしく存じ居候との事是又絶妙と存じ申候當人も近日私方へ參り何分厄介に賴み候と申事にて候所內心には至極妙と存じ候へども只今迄餘り不詰にも候ひし故いづれにも西山氏に坂本氏にても一同參り被賴候はゞ承知可申と挨拶致し置き候但先方より內々賴みも回り急ぎの趣に付今日迄兩子は見え不申候へども不取敢此事報聞申候依て此書狀屆き次第持參金の所は乍御苦惱御都合被下此表御勘定吟味の手迄也とも西山と拙者名充にて早速御繰出し可被下候此度は萬に萬調ひ可申事と存じ候へども乍去人事にて候へばいかなる間違有之破談に成るまじとも難申候左候節は其金は直に其表へ繰戾し當人の手に渡らぬ樣取計ひ可申候此度は拙者に於ても甚だ妙と存じ何分も相談調ひ多年の志願を叶へさせ度存じ候故此段得貴意候事に御座候後室へも其段御話し可然御取計らひ賴入奉存候以上

〔四一五〕中俣一平に贈る

松代町　中俣兼雄氏藏

嘉永五年正月廿三日

村上榮俊フランス語を和語にて譯し

餘寒兎角甚しく御座候益御安健奉恭壽候然ばフランス詞書（オランダ語にて譯するもの）奉差上候可然樣奉願候極密は村上榮俊フランス語を和語にて譯し一部の書を取立度と申事候て内々回し置き大延引仕候夫是宜く御回護可被成下候以上

廿三日　佐久間修理

中俣一平樣

〔四一六〕佐藤安喜に贈る

嘉永五年正月廿七日か

冬とても無之寒氣に御座候處彌御健安珍重奉慶候然ば先日入貴覽候臺場雛形此節萩藩にて差掛り借用申度と申事に御座候依て此人差出し候間一と先御返し可被下候御役方へは別に造らせ候て差出可申候忙中用事のみ草々頓首

正月廿七日　佐久間修理

佐藤安喜樣

〔四一七〕 雨宮(村上)誠之丞に贈る

東京市 村上常藏氏藏

嘉永五年二月十三日

今日は愛度存候何故遲刻にや千萬不審に御座候先刻村上より納幣參り申候代金は五種にて五百疋に御座候貴樣昨夜御申候とは五分一の相違に候あまり遲刻にては如何とて宗五郎只今に扣へ居候早々御出むき可被成候貳拾兩は某用意致し置き候先取急ぎ申進候以上

二月十三日　修　理

誠　之　丞　樣

(誠之丞は左京の改名)

〔四一八〕 宮本愼助に贈る

嘉永五年二月十四日

餘寒猶嚴敷候處彌御休安珍重之至奉存候然ば雨宮生義に付先頃中兩書を發し候所前書の御返事四五日前相達し拜見申候被仰下候次第餘議もなき事に存じ候へども當人も數年の願にて又此度の如き好場所も是迄とても無之此末も再びあるまじく扠又當人の存念も此度の義調はず候へば死てもおめ〳〵と在所

表へも歸られ不申剃髪にても致し候はんなど決心の樣子に見受申候依て是迄かの後室も當人の意に任せ候はんと被申候義に付此所にてはもし／＼貴樣御手にて御繰合も出來かね候程の事に至り候はゞ後室暮され方を減じ候て也何とか工夫御つけ被下候樣致し度存じ申候是は當人よりは申かね候事に候へども私並に西山氏より冀ひ候所に御座候此方一人のしうとめと申もの即老母也至てよき人にて先便書中にも認め候通其表の後室にも同居致しもらひ度と申候程の事のよし之趣に候へば其表の暮され方は其本を減じ候ても子細も無之直に家督致し候義に付何分他日に氣遣ひも無之事に御座候只億萬の一を氣遣ひ候へば雨宮生實子無之間に命短く候時こまり候などゝ申事あるまじきに無之候へども萬々一右樣の節は西山氏いか樣にも兄弟の義に付引受世話可申と被申候右之趣書狀も出され候よしに御座候何分も此所にて早速一御工夫被下候樣致し申度候人一人の義かの後室よりは子一人の浮沈此一擧に有之候事に付御勘辨可被下候幸此度三村氏御內用にて其表へ被參候に付委細の義は此人へ賴み遣し候何分も此歸府の節慥かなる便にも候へば貳百金御送り被下候樣所祈御

（昨日結納も無滞仕舞申候廿五日彌引越に決し申候）座候昨日結納も無滯仕舞申候廿五日彌引越に決し申候昨日も持參金之義不都合と申事に付私よりも貳拾圓才覺致し遣し申候何分も此度は速に事を調へ候樣致し申度候後室へも宜しく御傳聲乍憚奉願候以上

二月十四日　大　星　拜

宮本賢友

（嘉永五年二月廿六日）

〔四一九〕村上誠之丞に贈る

東京市　村上常藏氏藏

昨日は御尋被下辱候然ば其節忘れ候と申一條跡にて存出し候此度之義は津田轉子致周旋大岡樣より問合有之候節宜しき樣に致返答呉候譯有之候閒是は早速に禮に御出候樣致し度候其事は御家內樣へも御話し候て少々之土產は御持參候樣存候御多用に候とも是は何分早き方宜しく櫻田御屋敷內貴樣御外聞にも關係候事に候閒其心得可然候此事存出し候まゝ認め置候以上

廿六日

〔四二〇〕山寺源大夫に贈る

嘉永五年閏二月二十九日

二月晦日夜の御手誨拜接如舊御健安の御容子詳悉仕浣慰の至奉存候被思召寄片栗粉製の□□荷御送惠感佩不已奉存候偖此表の義をも三村氏ゟ具に蒙御承知候趣御懇切に被仰下乍例奉銘謝候老母事兎角其御地山間の風味を棄てかね候樣子に御座候しかし近頃は公邊にて格別に御世話やかれ候故か失火も少く都下穩かに候上好時節と成り候に就ては久しく其表の義も不申出候至て健にていつもまめ／＼しく候間乍憚御過念被成下間敷候偖桐翁先生御不幸の事御同前不勝痛惜奉存候盟臺御咫尺の間故御病間時々御候問も御座候義と奉存候所小弟義は隔地の事にて御大故と申すに及て始めて承知別して殘念に奉存候斯とも不存命を受け居候御自叙の跋尾をば能こそ御生前に差上候事と奉存候三村も歸府にて御近況委細承知仕候方々御尊惠の拜謝裁呈の心得にて忙中少く猶豫仕候內又々本月既望の御長箋到來感悚兼併せ候仕合に奉存候先以て時下彌御萬福の條奉欣喜候其表猶殘雪も候やに被仰下候所此地は既に櫻花の時

桐翁先生御不幸

御自叙の跋

牛渚先生御昔遊之地へ碑を御建て被成候はんとの思召御座候よし

荒井生人物之事

人の好不好は顏色言語にては定められ不申其行事の跡に就て窮むべきことに被存候

節に相成観花の士女日々喧鬧之樣子に御座候纔かの里數隔り候ばかりに御座候所氣候は著しく違ひ申し候偖牛渚先生御昔遊之地へ碑を御建て被成候はんとの思召御座候よしいかにも可然御事に被存候碑文の所は宿老且御知音にても候へば曖翁へ御賴み御座候はんとの事殘る所も有御座まじく候決して風流好事のみに渉り候義に無御座候間いづれとも早速に思召立られ可然奉存候愛日樓等へ周旋之義は如何樣も可仕候間御同門御熟談次第如何共可被仰下候令郎御寄宿中の事成程三村よりも承り申候其以來は雙日か隻日か隔日に千葉へも御通ひ候趣にて御得意の樣子に候荒井生人物之事御尋に御座候が何も不好の人物とも存じ不申但田舍より出候て律義なる方に可有之候其上人の好不好は顏色言語にては定められ不申其行事の跡に就て窮むべきことに被存候諸生輩異論有之候は何ぞ其跡御座候義や小生方へは每朝の樣參り候が其動止言語何も人の害に成候人とは存じ不申候孔平より辰三書物も少く讀め候樣に申上候よし小弟へも其事申聞け候ひき然れども文事の談に至り候ては孔平より少く讀めも致し可申候得共決して讀書の出來候人と申すにては無之候猶行跡に

老母事北遊など申事

佐賀侯津侯の第へ御出の節必らず小弟にも出候様にと

就て御氣遣候義も御座候はゞ可被仰下候如何樣も相探り可申候老母事北遊など申事久しき義に御座候が暫にても幼孫を手離し候義又忍びかね候樣子にて候于今何れとも決しも不仕候彌罷越候に相成候はゞ何分御心添奉願度候津佐賀兩侯之事御尋に御座候旣に三村よりも御承知被下候通今春佐賀侯津侯の第へ御出の節必らず小弟にも出候樣にと兩侯よりの前廣より御約束に御座候勿論其日は人ませなしにと申事又小弟も世間有ふれ候書家畫家などの樣に群侯雜沓の席へ被招候義は好み不申と斷り置候義に御座候然る所佐賀侯駕を發せられ日限繰上に相成候て宿約は廿四日の所十三日に成り申候津侯へ御出候九日御暇乞ふるまひの譯に相成候御會客御多勢候趣にて小弟遂不罷出候佐賀侯より其翌日兼ての門人本島藤大夫を以て兼て御逢可被成被思召候所無之義御殘念に思召被下候段被仰下御國許磁窯之内公邊へ献備に相成候窯にて博古圖中の爵の形を寫し候磁杯御好みにて出來候を一箇御贈被下候青色の顏料などいかにも美事なる事にて頗る清玩に足り申候但盟臺に一酌を勸め奉ると不能是のみ恨に被存候右の次第にて彼の侯に御目にかゝり候はざる事惜き事に御座候しかし彼侯御賴

ソムメルと申獨逸人の窮理學の書一部……十詩を作り申候

にて十二廿新製野戰砲架一座並海岸砲架十分一雛形一座作り差出候は近頃快く存候義に御座候佐賀も長崎へも近く第一大藩にても候へば架車等精密に作り候位の事は差支もあるまじき樣被存候へども左樣參らぬものと被存候異舶の事御尋に御座候是も先頃勢州沖餘程大ぶりの舶見え候趣にて御座候ひき乍然早速何地へか參り候よしに御座候清國煙土の後局先其儘と被察候四ヶ所の借地等目今其大害を見ず候へども後患は必らず免るまじく被存候清人の文集など見候ても何分己の拙陋なるを心付ず洋學の精到なるに我を折り申さぬ樣子にて氣の毒に存じ申候近日去々年出板の「ソムメル」と申獨逸人の窮理學の書一部不思議に手に入り候て朝暮讀覩仕候所新得殊に多く其樂不可言候夫に就き十詩を作り申候其序云。余誦陶處士讀山海經詩。喜其沖澹深粹。適然有自得之意。然亦恨其所云終宇宙者。止於山海經穆天子傳恍惚怪奇之談也。余嘗病漢土諸論說。物理多出臆度。而流於虛誕。竊欲救此弊。以西洋實測之言久矣。偶得獨乙宋墨爾著寰宇記而讀之。天地之大。日月之明。風雲露雷之變。禽獸草木之微。無一不闡其幽而探其賾。眞可謂綜括宇宙。終始古今者。余甚樂焉。乃以處士俯仰終宇宙不樂復何如爲韻作

詩十首。若其思致拙劣命辭凡陋。固無足稽。然至其云々者。則竊以庶幾焉。大略如此に御座候御笑覽可被下候詩は甚だ六かしく註釋無之候ては通せざる所多く候故態と不認候此節門生に注文を加へ居るもの御座候間其卒業次第可入御覽候令郎御事に付愛而能勿勞手被思召候よし御尤に奉存候兎に角安樂に死するの戒も候へば後生輩には何分艱苦を嘗めさせ度ものに御座候但御訓導の所無覺束候へば秋中云々の思召是又御尤奉存候池村生も被見候に付令郎御一同に夕飯にても進じ申度など母も申居候へども何や彼や取込候て其意を果し不申候先は御兩通の拜復迄如此に御座候時氣衆の爲折角御多愛所禱御座候不具

後二月小盡　　啓　拜復

懼堂盟臺先生　賜覽

〔四二二〕竹村金吾に贈る

嘉永五年三月十八日

早春には新禧の御投書被成下不淺難有奉感謝候早速右拜復可申上之處何か時節柄小弟などより稠々御文通申上候事等は御爲めにも不可然やなど存じ候て

客冬總州に於て大銃試しの節

遂延引仕候義に御座候幸に御炤諒可被成下候時下漸好時節と相成候彌御萬祥に被爲渡候御事と長谷川生より傳聞奉慶賀候同士歸藩の前一日訪問に付其節猶宜しく申上吳られ候樣相話し候賤家別條無御座候段は同生より御承知可被成下候偖早春御投書の節は被寄思召何々の一袋御惠貺被成下奉感刻候鄕味は別段なる事と家内打寄り獎味仕候義に御座候林生への義も御手數被成下是又奉多謝候拜借金の義も偏に高誼と言謝不罄難有奉存候客冬總州に於て大銃試しの節うめがね飛び出し候義等御傳聞不評判には成らずやなど御遠念を被爲勞被下候段今に始めず御深情の至不勝感銘候其節は同じく砲術など致し候ものは種々申唱へ候樣子にも承り候が本より其爲めのためしにて候へば顯はれまじき樣に姦工の巧み候を一時に打破り見せ候へば夫にて事濟み候義夫を世間有之候樣に其姦工奸商と腹を合せ藥力を減じ彈丸の徑を小さくして藥の分量迄を耗し候て損ずべき筒をも助け置候類は濟まぬ事に候後來もし强藥を用ひ法の如き强丸を裝し候時は必らず破裂し可申其節は幾分の人の損じにも至り可申候小弟のは夫等の類に無之法の通に致し其筒破れ候に有之候へば聊か

如何とは存じ不申候尤も其筒は一昨冬押詰り小弟の歸藩四五日前に鑄込候て鑄模を開き雜と改め候ばかりの事にて昨四月出府候へばもはや仕上げに成居候所銃腹に色の變じ候所有之候故もしくは埋銅にては無之やと存じ嚴しく工人へ尋ね候ひしかども鑄形のしみにも可有之などこ申うめがねとは不申候故鉦にて打ち巣中に日光を容れなど致し試み候へども埋がねなる證據も見出し不申候故去らば法の如く試み候はんとて勿論ためし候節には人をも退け損じ候ても害無之樣に致し候ての事に付小弟の心には何とも存じ不申候但其筒をためし候後に十分打候はんとて樂居候諸生輩の力を落し候には氣の毒に御座候ひき乍去其鑄直しも既に出來近々又富津迄罷越し打だめし致し候と申にて此節一統門人輩競居候義に御座候間御降心可被成下候津侯の事御尋に御座候處是は過日山寺兄への答書に認め置き候定て御出會の節御承知可被成下候と爰に相略し候其後は侯の御左右へ親しく出候門人親大病にて遂致不幸此節忌中に候とて久しく見え不申其他砲術の方に掛り候門人は昨今も見え候て筒の鑄造御賴被成度などこ申事申聞候彼藩も今少し振ひ可申筈の所何分存じ候やうに

（島津は島津良介と謂ひ中津藩内用人なり）

至り不申業前の修業而已にて甚鈍く候獨中津藩はいづれも出精にて頗る可觀やうに相成候先日二本榎下邸の稽古日に島津と申兵學者に小弟の申候にはかねて陣に臨み如何樣に被使候とも分合集散奇正の變化その指揮せられ候まゝに成候樣敎へ立て候はんと約束申候が大抵其場に至り候樣存じ候間いか樣の陣法にてもいか樣のかけ引にても好まれ候へと申候所其外にも兵學者居合せ候へば談じ候て種々の好み有之候ひし處指揮に隨ひ漫急舒疾聚散離合自由自在にして且整々として其隊伍の動き候事島津始め其藩の有司も目を驚かし候て感嘆致し深く禮をも申候事にて御座候ひき但惜むべし僅に百人に滿たぬ人數にて候故張合薄く候佐賀藩にては一日に三千人も出で操訓致し候事も候よしにて小生にも一年也半年なり參り呉候樣になど門人申候へども只今左樣も致しかね候乍去責ては三五千人の人をも始末致し見度ものと存じ候事に御座候佐賀の門人も中津藩人の精密に出來候をば浦山しく存じ候ていづれにも君侯御歸國候へば國の人三四人塾へ賴置き度と侯にも思召候と申置き候扨當年自分大喜候事はかねて長崎へ賴置き候窮理の珍書到來候て日々其所無を知り

ソムメルと……本邦にては當時三部御座候のみ

高價の極に候へども……用を成し候所金に換へがたく

寢食を忘れ申候ソムメルと申名の書に御座候が天地萬物古往今來誠に滯所なく其理を究め候書にて一昨々年の板行に御座候本邦にては當時三部御座候のみ一部は天文臺一部は薩侯一部は小弟の有に御座候ばかりに候跋尾を一首認め候間呈し奉り候是も偏に先生の賜ものと存じ候故に如此に御座候去年例の御厚情被成下候内を以て四十金長崎通事へ遣し置候其上に當春又十五金差出し候全く前金に四十圓遣し候故に手に入候に有之候へば偏に賜ものとは申上候事に御座候高價の極に御座候へども跋文にも認め候通用を成し候所金に換へがたく奉存候惟いづれの時か一室に拜對候て此妙理を拜話申上べくと是のみ恨みに奉存候先は早春御投書の拜復旁申上候以上

嘉永五年三月十八日

三月十八日　　啓　叩頭

竹村先生　臺下

〔四二三〕恩田賴母に贈る

拜啓仕候晴山罷出候に就き此表の樣子並に賤家の近況をも御詳悉被成下候と

書畫帖の絹二張以前作り置き候拙詩認め今信奉差上候

て呈書の御誨答も早速に拜接仕難有奉莊誦候先以其以來御履用益御休安に被爲渉候て慰沃之劇奉存候偖國史御通觀の思召立ち御家藏の古書類御調の事並に晴山歸府にて往事は語らずと御定め被遊候御事等一々拜承不勝敬歎奉存候先便一時の御唉草に入御覽候拙詠過て御賞譽を蒙り汗顏の仕合に奉存候本より深く學び候義にも無之一時の責を塞ぎ候迄に仕候ものに候へば御過奬は敢て當らざる義奉存候扨蒙仰候書畫帖の絹二張以前作り置き候拙詩認め今信奉差上候五古の方は君臣の際に感じ候所有之作り候詩に御座候昨今の御樣子乍憚御同感も可被爲在と存付候まゝ錄し候義に御座候七絕の方は今春慥か入御覽其說をも大略申上候やに奉存候いづれも御一唉可被成下候偖近日又々御手敎被成下且被爲寄思食越產の乾鱈御送惠被成下乍每度御芳情の程千萬難有言謝不罄奉存候小生よりは其以前御誨答の御請をも不申上候所に如此御存問を奉荷候義何共悚惕の仕合奉存候此程晴山より極密御退隱の御含も被爲在候樣奉伺候乍恐さすがに御早く思召被爲付候御事と奉感歎候一通の誼を以ては猶暫らく御見合せ被遊候樣にとも可申上候得共深く御知遇をも蒙り候所にては

何分御速に御決心被遊候樣に致し度ものと晴山へも申候義に御座候沈み候程のものはいか程水面へ引揚げ候ても手を放ち候へば隨て沈み申候浮み候程のものはいか程水底へ押つけ候ても手を放ち候へば隨て浮み出申候人事の上に於て此理甚妙に御座候惟是等の妙機は御心底に被潛候ていかにも脱然と御羽翮を雲霄の上に振はせられ候樣に奉望候先は御惠賜の拜謝旁申上候時氣折角御保重被遊候樣奉祈上候不乙

（沈み候程のものはいか程水面へ引揚げ候ても手を放ち候へば隨て沈み申候）

三月十八日　　啓　叩頭

正誼老臺　執事

（嘉永五年三月十八日）

〔四二三〕羽田忠左衞門に贈る

本月六日之御手札到來致拜見候先以春暖彌御無恙之條陳重不過之候御母堂君御容體いつも御同樣候歟如何など母とも時々御噂申暮し候事に御座候近頃の御樣子如何や猶御左右承度候さて初春にも御狀被下其節は御心掛け名蠟澤山に被下不淺辱奉謝候御世話ほど御座候て並方とは遙に相違いたし別段なる事

蠟の木澤山に成り會津紀州抔の様に

硝石造込之事

さ感じ入候何分も御骨折にて蠟の木澤山に成り會津紀州抔の様に此表へも始終は被差出候様に致し度ものに御座候右賜物の御禮もさく可申進處多忙彼是延引愧入申候然ば今度山寺より沓野村二ヶ所硝石造込之事被申渡候所製し方等の事不相分候に就き方書相送り候様御申越致承知候其書一本差出し候間御寫し取の上原本は御返し可被下候此内御不審の所は山寺へ御尋ね候はゞ相分り可申候夫にても尙わかりかね候所候はゞ御申越可被成候兎に角法立有之候事は一より十迄其法の如くに致し不申候ては出來上りに至り其法の通に參らぬものに御座候硝石造り込も時々の耕し方法の如くに無之候ては何分取揚に至り損御座候と存じ候法の如くに致し候へば其土壹ヱル立方に（ヱルとは三尺三寸をさして云ふ）硝石四十五ポンドより七十五ポンド迄を含み候定法に御座候（ポンドとは二百六十七匁也）大造なるものに御座候此所を定規と被成候て御試み穢物を十分に御入被成べく候穢物のかさほど硝石多分つき候ものに候能々御合點可被成候將此品乍粗末有合候まゝ掛御目候御咲存可被下候先は兩度之貴□御禮旁如此に御座候折角御厭可被成候以上

三月十八日　修理

忠左衛門様

猶々昨冬中御送りの人参入御覧候所御感心被遊候御様子と申事に御座候然る所其表之様子も一變致し諸産物之事抔も山師なご申事に唱へ候て一切止み候やにも聞え候三村人參仕付の事某仕出候事にて行々一廉之利益と存じ候事ながら右様の時勢に此方より求め彼是申候も如何に付默し居候が是等は如何に致し候心得か此度の御勝手方並に郡奉行などが如何存じ被居候や御承知の事も候はゞ可被仰下候其模様次第は其捌方等愚考有之事に御座候但志摩殿抔の存念次第は一も二も無之候是某の默し居候譯合に御座候以上

（此度の御勝手方並に郡奉行は新に就職したる眞田志摩長谷川深美菅沼九兵衛等を指す）

〔四二四〕雨宮よし子に贈る

清野村　西山三治氏藏

嘉永五年三月十八日

誠之丞殿養子一條

御文被下辱く致拜見候先以彌御さはりも無御座候條御めで度存上候さては誠之丞殿養子一條めで度相濟候事御悅び御ねんごろに仰せ下され殊に思召よせられ品々御取そろへ母迄へ御贈被下山々辱くいたみ入候御事に存參らせ候先

方の様子もさいしよ申候通至極よろしく何〻の事と御同前大慶之事に御座候
此節専ら上京之支度のよしに御座候めで度來陽歸府も御座候はゞ其御都合に
被成候て此方へ御出可被成候是は何分と只今より祈り候事に御座候先は此程
の御返事御禮迄如此に御座候母も私〻宜く申上候樣申付候時こう折かく御厭
可被成候めで度かしく

三月十八日　修　理

雨　宮

御　袋　樣

尙々西山君も此間御出被下御傳言之趣私はるすにて候所御ていねい母へ仰
せ下され候と申事にて辱存上候以上

嘉永五年四月二十八日

〔四二五〕　山寺源大夫に贈る

珍函捧誦先以愈御萬福の條奉慰浣候賤家老少も如昨罷在候間幸に御放念可被
成下候偖桐翁先生御昔遊の地に碑を被建候と申一條御同門熟談に付文の義屢

御行狀等も不被遣且天王山地形等の圖も無之候ては曖翁にも文の出來可申種子無之

翁へ小弟より賴可申義いかにも承知仕候然る所此度御行狀等も不被遣且天王山地形等の圖も無之候ては曖翁にも文の出來可申種子無之差困られ可申右の種子なしに文を請ひ候事餘り不覺の事に相成候間右兩品被遣候迄相扣居候心得に御座候曖翁にも大老に候へば御急ぎの所御尤に候間此紙の相達次第早々兩種御調被差遣候樣奉存候但御行狀の所例の御自叙と申もの候へば彼一卷を被遣夫にて宜しかるべくと被思候仁も可有御座候へども彼御自叙にては先生の御聲價を損じ候と奉存候間別段に老兄の御筆にて御綴被下御家督御禮の御伴に馬に召され候樣の義を三五事御取出し御座候へば其餘は御家柄にて御文辭御鍛錬にて御政事に御與り被成候外は御著述に御かゝり御終身御筆を被放候事少く等身の御編述御座候にて事足り可申奉存候御自叙は御子孫に被傳候爲に候へば如何にてもよく候へ共經學文章一藩の模範など申にて大家の文を請ひ候料には不可然と限て存候義に御座候偖又天王山は餘り寂寥の地に付蛩歌觀音堂の餘光を借り候はんの西條菅公祠の末輝を仰ぎ候はんのと申はいづれも俗諺云ふに足らず候文盲人婦女兒の一人も多く讀み候が宜しと申御趣意

に候はゞ御自叙の儘假名がきにて石に雕られ候て可然假にも御昔遊の地が慕しく存候御門下の至情より有名大家の文を請ひ永く老先生の義を後に傳へ申度と申に候はゞ本より識り候人の識り見候人の見候を望み候譯にて盲者や兒女輩に示し度と申には有御座まじく候因て愚意には天王山に限り候義と奉存候人跡の絶え候所に候へ共先生は其幽寂を御好み被成候て時々御遊も被成候事に候へば御門下の士とても月の夕花の晨御碑下に徉徜候て往事を忍び候も不妨是韻事と存じ候事に御座候尊意何似尚衆論も有之候はゞ可被仰下候先は御急ぎの事件故夫のみ拜復仕候後便尚可申上候不盡

愚意には天王山に限り候義と奉存候

四月二十八日　啓　拜　覆

懼堂老兄皐比

〔四二六〕望月主水に贈る　松代町　原淳造氏藏

來る廿八日六月朔日各兩日砲術門人勝麟太郎殿拜借にて大森濱御臺場に於て大砲打方仕候其節廿ドイムホウウキツヽル同モルチールル右二挺拜借奉願門人

嘉永五年五月廿四日

共一同演習仕度奉存候右御筒拜借之義可然御勘辨被成下度奉願候以上

五月廿四日　　佐久間修理

望　主水様

〔四二七〕鎌原觀水に贈る

嘉永五年五月廿七日

（觀水は桐山の子）

先生御碑文之事曖翁へ撰文相頼

拜啓仕候御起居倍御健輕に被爲入候歟奉伺候然者先頃は故老先生御遺品之默友一枚御贈被成下感戴之劇奉存候永御形見と秘藏可仕候右御禮迄艸々申上候偖先生御碑文之事源大夫熊三郎より申遣し御自叙御年譜等も相廻り候に付大抵に相調曖翁へ撰文相頼御口上をも程よく申繕ひ候所外々の頼此頃は總斷に候へども久しく御懇意も申候事故承知可申と被申候義に御座候尙其內催促可仕奉存候此段も乍序申上候頓首

五月廿七日　　啓　拜復

曰唯夫子執事

嘉永五年六月十七日

感應院樣御誌石銘文

御誌銘奉撰

眞月院（感應公後室）樣御手許にても被遊御承知候御事は

〔四二八〕 望月主水に贈る

感應院樣御誌石銘文義被仰付候旨奉畏候委細晴山申通にて相心得候樣是亦奉得貴意候將御石槨盖石裏へ雕刻之方に候へば一段速に取調べ候樣否は御卽答可申上との御事奉承知候愚意に奉存候には盖石裏へと御座候ては平人の上にても尤も事を殺ぎ候筋まして御上之御禮には當らざる樣奉存候いづれにも誌石を埋め候法に被遊候て別段に石を被撰候方と奉存候扨又私御誌銘奉撰候に付ては御一世の御閒之御德行は勿論御政事の御上に被遊御施行候御事蹟をば法の如く認め申度奉存候私など不心掛にてかねては御實錄等編述之念も候ひしかども私務に被逐候て遂に筆を起し候事も無御座此御大故に被爲及今更後悔仕候義に御座候此節幸に舍人殿御出府之御樣子に候へば此御手には定て御取調被置候義可有御座奉存候間是迄御取調丈のもの御下被成下候樣仕度奉存候眞月院樣御手許にても被遊御承知候御事は御條書に被遊候て御下げに相成候樣奉願度奉存候猶委細は罷出可奉伺候以上

六月十七日　佐久間修理

望　主水樣

〔四二九〕　山寺源大夫に贈る

嘉永五年七月三十日

浪華富商より借り：：：百姓借主役人末書にて借出し金出來可申やの事

次子夭殤之御弔書令郎御持參被下拜見仕候御懇篤に御慰問被仰下殊に爲御香奠昆吾一片蒙御惠贈感戢之劇不可言宣奉存候老母へも御丁寧蒙仰難有がり申候是は至て存じ切宜しく不幸中の幸とも可申其以來も甚輕健に罷在候間乍憚御放念可被成下候將右の拜答も彼是延引仕候內廿二日付御手敎拜接先以不相替御健安之條奉降心候被寄思食水飴二棬御垂貺感愓之至奉存候老母幼兒暫の娯に可相成御禮難申盡候偖浪華富商より國產交易倉屋敷等の邊に拘はらず百姓借主役人末書にて借出し金出來可申やの事早速聞繕申上候樣被仰遣敬諾仕候然る所右之義は決して出來申さゞる事と可被思召候西國の諸侯方にてすら百姓借主役人末判などにて貸し候事絕て無之候を東邊の御國などへ何とて致し左樣の事致し可申や間違の有之候節更に致し方有之まじく候彼地金銀を以て

角毛偶語の事被仰下始て承候今日の勢漫に排佛候時は必ず敗辱に及び候

性命と致し候俗右樣の愚計にかゝり候事萬々無之奉存候此樣の出來ぬ事に御屈託御座候は乍憚無益の義に候間御竄端にしくべからず奉存候是非とも御借出し金なく叶はぬ事に候はゞ小弟兼々其御地に罷在候節苦口申候ひし通甘草人參等の御國產を以て彼地に御藏屋敷御しつらひ交易の筋開け候上ならでは兎ても出來申まじく奉存候川路殿の事御尋に御座候是は不相替折々の文通に御座候如仰其外浪華人に相識幾人も有之候間其筋を以ての事に候はゞ隨分用を辨じ候ものも可有之候へども被仰遣候邊の事にては小弟など少しく其筋を心得候所にては口外も仕り難く奉存候先よく御勘考御座候樣奉祈候近來上方上木の角毛偶語の事被仰下始て承候此流の議論兎ても齒牙にかゝり候事にては無之候今日の勢漫に排佛候時は必ず敗辱に及び候水戶の殷鑑と被仰下御尤に奉存候最初に佛を引入れ縉紳家にては門地の見盛にて天下の英雄を登進候事無之候故申さば其英雄豪傑を驅て佛に入候に付其才力を極て振興候て遂に此確乎不可拔之勢を成し候樣存候最初の運び方あしく候故只今と成り候ては所謂雖有智者不能善其後にて更に奈何ともすべからず候乍然佛の敎の聖人の

氏もなき賤民の開より出で候て士大夫貴人にも交り候事公に出來候は

道と判然氷炭の如き事をば君子たるもの心得申度事に存候又只今の勢奈何ともすべからずとは申ものゝ政道の上には我が規律を以て彼の亂妨をば防ぎ申度事に候氏もなき賤民の開より出で候て士大夫貴人にも交り候事公に出來候は何の故にて候や彼れの身を律する所聖人の中道には外れ候へども其清苦の嘉すべき所ある故にて候然るを竊に酒肉を御し婦女を蓄へ嚴業に怠り財利を貪り候の僧至る所として無之はなしと申事に候是を其まゝにして差置候ては一國一郡の間に於て士大夫に對し濟かね候事に存じ申候況やこれに依て風俗を敗り人心を壞し候事云ふべからず候に於てをや有德廟上野に律院を被爲建候は此弊風を被爲救候爲に天下諸宗に律を是非とも被爲兼度思召と申事に承候格別の御明猷と奉歎服候事に御座候但奉惜候義は此事御成就無之以前被爲隱其後其思召を被爲繼候御方樣世に不被爲出候は奉惜候ても猶餘りある御事と奉存候愚意には佛の扱ひ有德廟のこの思召を憲章奉り度其外更了簡無御座候先は御急ぎの趣に被仰下候に付右拜答御惠賜之拜謝其以前御弔問之御禮旁如斯に御座候秋冷千萬御自愛奉祈候以上

七月大盡　　　　　　　　啓　拜復

懼堂老盟臺　案下

〔四三〇〕村上誠之丞に贈る　　　　東京市　宮本仲氏藏

嘉永五年八月七日
惇三郎不幸之事御弔問被仰下

御手敎被下辱拜見申候然ば惇三郎不幸之事御弔問被仰下辱致感謝候御存知の通弱手にて候故成長候ても迚も豪傑などには相成まじくと存じ居候處果して致夭折候事に御座候是亦不及是非候幸に恪二郎事は至て健に御座候御降心可被下候先は御弔書の拜復迄如此に御座候以上

八月七日　　　　修　理

誠之丞様

〔四三一〕望月主水に贈る

嘉永五年八月十一日
御墓誌銘之義に付源大夫存意

御墓誌銘之義に付源大夫存意別帋之趣能被存付候義と奉存候壬子之子全く書損にて奉恐入候則午の字に認め直し候偖四品之義に御座候が是は御位記等從

關東方に於て……從四位下をば一般に四品と稱し

關東の御仕僻天朝の御事を以て律すべからずと申は

四位下と御座候とも關東方に於て專ら四品の唱御座候義に付夫を其儘に認め苦しからぬ義に奉存候天朝に於ては品を以て親王を稱し候事令にも見え候所關東にては左樣の事も無之從四位下をば一般に四品と稱し候事に相成候品は位也と申解も御座候へば字義に於て本より相當り候義に御座候但天朝の親王家に別なく如何など申說も可有御座候へども關東の御仕僻本より天朝の御事を以ては律すべからずと奉存候侍從少將等は元來官にて候所關東にては御位階のやうなるものに相成居候又諸大名樣方より歷々の御旗本にて御稱し候所の御名はいづれも官職にて王朝の御制度に依り候へば臣下の勝手次第に成候譯のものに無御座候所關東にては將軍家へ御目見だに相濟候へば御勝手次第に何の守何の正何の大夫と御稱し其後とても御勝手次第に御改稱被成候て其節は御改名と御唱へ候關東之御仕僻天朝の御事を以て律すべからずと申は是等の義に御座候仍而愚意には關東方は關東方の御ならはせに依り候方天朝と別ものに相成けく宜しき樣存じ四位をも直ちに四品と認め候義に御座候此品の一字ばかり令に據り候て位と認め候ても其他の義總て天朝の昔禮樂征伐天

義の長じ候方に從ひ申度奉存候間宜しく御評論被成下度

子より出候時の如く立派にはとても參らぬ義に就きやはり此御代の唱へのままに斯く認め候方可然奉存候漢碑の内にも既に其例有之刺史と認め可申を大守と認め候などまゝ有之漢の制州に依り決して刺史とならでは難認もの有之候所夫をやはり太守と認め候制に據り候へば刺史太守の別嚴然に御座候得共泛然と申候へば刺史も太守も同樣の如きものに付其時代に稱し來り候事と見え候夫を碑文の作者其まゝに認め候ものに可有之と申先儒の議論も既に御座候事にて私所藏仕候益州太守北海相景君の碑も既に太守と有之候然る所漢の制にて益州は刺史と可申して太守とは難申候へども如此に御座候右等の義も御座候旁四品の義も當代普通に稱呼候義に付御位記等の文字に拘はらず其儘奉稱候方却て面白き樣奉存候乍然義の長じ候方に從ひ申度奉存候間宜しく御評論被成下度奉存候以上

八月十一日

佐久間修理

望　主水樣

猶々御書類五通返上仕候以上

嘉永五年八月十一日

御墓誌彫刻相濟候處にて拓本拾枚頂戴仕度

川路榊原等の御方へは

御在所掛りの御役人其義を能心得居候様仕度ものと奉存候

（四三二）　望月主水に贈る

御墓誌彫刻相濟候處にて拓本拾枚頂戴仕度奉願候帋はとてもの義に賽雪氷雪の類に被成下度奉存候尤も紙搨手間等の料上納仕候心得に御座候川路榊原等の御方へは感應院様格別御懇意にも被爲在又私義も深く相交り候際の義に付壹枚づゝ相贈り申度又門人中にても同志の內にても此度御墓誌相認め候を存じ候ものは達て懇望も仕候義乍去餘り數多にも相成候義に付有志のものを擇み遣し候心得にて拾枚と願ひ候義に御座候是又乍恐御不朽之御一事にも候間御同濟被成下度奉願候以上

八月十一日

猶々彫工之義人を擇み隨分丁寧に仕度義に奉存候文字墨の付き居候處をば分厘も殘さずすき取り墨なき所は分厘も彫込み候はぬ様嚴重に被命候様仕度奉存候是は當り前の義に御座候所時々心附け候と心附けざるとにては甚の相違御座候義に付申上候御在所掛りの御役人其義を能心得居候様仕度も

のと奉存候右等の義源大夫は至て精密の男に付右之義心付候樣被仰渡置候
はゞ可然哉に奉存候以上

望 主水樣

佐久間修理

嘉永五年九月十日

〔四三三〕 西山恒三郎に贈る

清野村 西山三治氏藏

村上之事御厚禮被仰下

勤向も至極宜しき趣

御手帖拜見先以秋冷之候彌御多祥珍重に奉存候御歸著後是よりは多忙に取紛れ御無音□入候然ば村上之事御厚禮被仰下取替候分宮本より二拾圓臨時に取替候所此度御手より七圓被遣憐に致落手候些少之事はいづれにてもよく候へば是にて私の方には殘分無之と被思召可被下候著京後も度々文通にて候所勤向も至極宜しき趣にて安心仕候御姉樣へ御序候はゞ御安心御座候樣御傳聲奉仰候今日野本氏御手帖屆け被呉候に付忙中御□拜報迄草々申縮候其表追々霜色にも可相成候御自愛專一と奉存候以上

九月十日

修 理

西 山 樣

〔四三四〕 八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

嘉永五年十一月二日

御知らせ被下候前に令弟御尋にて御赴聞被下候賢妹御不幸之事扨々命數の限りある事とは申ながら言語道斷之次第御傷悼の程推察に餘り奉存候北堂君には別して御痛惜可被遊と家內一同御噂申暮し候事に御座候母はじめ宜しく御悔申上度申聞け候然ば此一品粗末には御座候へども御見舞の印迄御目にかけ候御叱存可被下候比來殊の外霜威甚しく相成候御動靜に御碍被成候御事は無御座候歟承度候乍憚ごなた樣へも御悔之事宜しく御申上可被下候先は御弔問迄草々得貴意候以上

十一月二日　修理

愼藏樣

〔四三五〕 山寺源大夫に贈る

嘉永五年十一月七日

近來霜威甚しく相成候御近況何似被成御座候哉然ば傳聞候に此間御退職の由

愚弟校訂の砲學圖編も彫刻大抵卒業に及び

（靜山は立田樂水なり）

（大槻磐溪）

散々の御事と奉弔候乍然老兄の御上には結句可然暫く又文武の業に御沉潜御座候はゞ御得力も別段に可有御座暫く御屈し候て大に伸られ候はん基本を於是御建候はゞ他日可奉賀事爰に朕し候樣奉存候何分も御憤發御努力所禱御座候過日此表邸內にて御うわさ紛々申候に付奉氣遣令郎御出被下候節御尋申候處さしての事に無之樣御申候故夫なり事濟み可申と竊に存居候處此頃の傳聞にては實に驚き入申候令郎には其後御目にかゝらず候が嘸御氣の毒に御思候半と察入候今日も荒井辰三郎參り候故承り候所至極御健にて御修業候由に候間御安心可被遣候賤家老少幸に無事罷在候乍憚御放念可被成下候愚弟校訂の砲學圖編も彫刻大抵卒業に及び候まゝ近日の內刷印に取掛り候半と存居候仕立出來次第一部送上可仕候此間少しく感ずる所有之夏中撰し候礮卦の傳と後記と申ものを認め申候礮卦は靜山氏持歸候間定て御轉覧も可被下候傳を認候て曖翁へも呈覧候處得過奬申候近處に卜居候仙臺藩大槻生なども一見候て致擊節達て板行候樣勸め候に付同人に任せ同人より昌平黌へ改めに差出呉候然る所日數餘程に相成候得共改め濟み不申昨今傳聞候得ば學士輩褊狹の料見に

て板行の事邪魔候よし是又取に足ず但愚弟の所見に至ては不可磨滅の事と存候間百年の後必ず定論可有之候其表にて易に被長候は錫命翁に限り候間先翁の一見に供し度相送り申候直に老兄へ被轉候樣兼て申送候間御電矚被下高論も御座候はゞ御誨示奉仰候御覽後立田宮下二子へ御示し可被下候此表にても門人共多勢借覽を乞ひ候間稿本をば乍御手數老兄より御催促被下候て御取戻し便風に御附還被成下候樣奉冀候多忙中先は草々申上候寒氣折角御保重所祈御座候以上

十一月七日　啓　再拜

懼堂老兄臺下

附啓乍憚尊嫂前へも可然御致聲奉希候

嘉永五年十一月七日

〔四三六〕　伊木億右衛門に贈る

猶々此一封西村令弟へ乍御手數御遞致被下度奉賴候以上

先頃は御懇書被下且絕妙精製之香のもの澤山御垂惠被下來賓にも誇り供し自

先公（感應公）御墓誌之事

彼の書體は如何御覽被下候や

身にも久しく賞味御芳情之程不淺致感佩候早速御禮も可申進所兎角多忙にて延引仕候御宥恕可被下候時下霜威嚴布候御母公様御始め被成御揃彌御健勝御座候か爰許幸にいつも無事に罷在候間御放念被下度候然ば此品乍粗末掛御目候令郎御慰に相成候へば大慶不過之候さて先公御墓誌之事被蒙仰候様被仰下候老兄御摺立に候はゞ誠に申分も有御座間布候雙鉤に被折御骨候よし御察し申候此節にては刻も餘程出來可申被存候御摺立に相成り一日も早く此表へ相廻り候様延頸罷在候彼の書體は如何御覽被下候や高評承度候未だ御目には掛け不申候が所藏に楊孟文が石門頌と申もの有之候彼土に於ても東漢人の傑作とて珍重候ものに御座候其體に韓明府が孔廟禮器の碑を兼ね併せて認め候積りに御座候が其表には其等辨じくれ候仁も有御座まじくと存じ候事に御座候乍然是は老兄御心易きに任せ御內話に及び候のみかまへて御他言は被下間敷候先は御禮答御無音の申譯旁如此に御座候寒威折角御自保可被成候御母堂様へも賜ものゝ御禮等可然奉賴候以上

啓拜

伊木老兄

復月七日

附白其以前も被寄思食松蕈一籠御送被下珍感少なからず奉多謝候此御禮も可得貴意と存じ延引の內又々御書惠且妙品被掛尊意感愧銤集候仕合奉存候畢竟多忙故の事に御座候閒是又幸に御宥恕可被下候以上

〔四三七〕竹內八十五郎に贈る

嘉永五年十一月七日

拙著の繇卦持參にて

打絕御動靜をも不相伺簡忽の罪遁るゝ所無御座候比來霜氣甚敷候御興居益御輕安被成御座候歟奉拜問候然ば立田氏歸藩の節拙著の繇卦持參にて御覽にも入れ候よしに其後文通にて候ひき其後一兩所改め候文字も有之近日又傳を認め申候然る所彖象繫詞一字苟せざるを見呉れ候人も無之ものに付又後記を認め申候此地にても易の事に至り候ては一齋先生の外相談可申人も無御座候一齋先生へは近日供覽候所大に致賞譽被下御地又先生の外易象に通じ候仁無御座候に付先子に見せ候も同樣に存じ今信其草稿入御覽候折角入御覽候閒思召し被付候義は無御伏藏御誨示可被成下候大段の所に至り候ては百世俟聖人而

不惑とは存候へ共後記等瑣々節目或は高意に不叶事可有御座候夫は必ず御垂示奉仰候御電矚の後山寺へ御傳被下度奉冀候是も承り候へば近頃散々の次第に候而後易象にても學び心を洗ひ大過なき樣に至り候樣竊に所祈に御座候先は多忙中草々申上候時氣折角御保護御座候樣爲道奉懇候已上

（十月廿二日山寺退役被仰付）

十一月七日　啓　叩頭

地水先生席間

〔四三八〕長谷川甚大夫に贈る

嘉永五年十一月十五日

勝麟太郎殿妹妻にもらひ申度

久々御無音申候霜寒之節彌被成御揃御安健珍重不過之奉存候此表も大分寒氣相成候所老少とも幸に相替候義無御座候間乍憚御放念被下度候然ば御旗本當時小普請勝麟太郎殿妹妻にもらひ申度内約束取極め申候表向願書近日差出度奉存候に付此段爲御知申上候この勝と申人學問も少々有之劍術よく遣ひ候て諸藩に門人も御座候よし阿蘭學も可也出來候て御旗本衆には珍しき人物に御座候其先代は御勘定にて中野御代官など被勤候小谷殿の弟に候へば私妻に成

候は燕齋翁の姪に御座候唯餘り年違にてをかしく候へども夫は致方なく候當年十七と申事に御座候御一咲可被下候其母上と申人私方へ遣はし度と申出られ候が始りにて此相談に及び候義に御座候其兄と申人は一昨年來砲術之門人にて時々被參候故其人物をばよく存居候間緣家に致し候て至極と存申候先は右內約定の御知らせ迄草々申上候寒威折角御保護所祈御座候皆樣へ乍憚宜しく奉願候以上（餘り年違にて）

十一月十五日　修理

甚大夫樣

〔四三九〕羽倉外記に贈る（嘉永五年十一月二十六日）

小寒に迫り候故か今朝など別して霜威甚敷候處御動履益御休安被爲涉候耶奉伺候然者此程入御覽候拙稿定て御一涉被成候御事と奉存候文章古人に及び候はぬは申迄も無御座候得共發揮仕候處の象理に至り候ては百世聖人を俟て惑はずと存候義に御座候大槪平次勸めに任せ昌平へ板行の改に差出し候處最早

一月に相成候へども濟み不申薄々承候へば板行不相成方に相成候半と申事のよし一㕝の義に奉存候右拙稿無餘岐所より借りられ候間賤使に御轉付被成下候樣奉願候先は用事のみ草々申上候以上

念六日

附啓此間文選樓叢書の事申上候處御藏弆も無御座候や御存知も被爲在候はば御示誨可被成下候至懇至懇

篇堂先生席開　　　　　啓　叩頭

嘉永五年十一月廿七日

〔四四〇〕竹村金吾に贈る

其後は久々御疎遠申上候所烈寒益御健寧被爲揃候事と奉想像候高田より傳聞候へば先頃中はちと御眼疾に被成御座候よしもはやすきと御快き方に御座候歟奉伺候拙家幸に如昨罷在候間乍憚御放念被成下度候然ば爰に一事報聞仕候義御座候秋中無餘岐次第にて召使一人暇遣し候所何廉不都合に付相應のものも候はゞ娶り可申存じ諸藩門人共にも徃々世話致し呉候ものも有之候得ども

御直參にて勝麟太郎と申人の妹に御座候

兎角意に叶ひ候もの無之候ひし所此頃に至り手近なる所に一人有之小身には候へども御直參にて勝麟太郎と申人の妹に御座候此勝と申は一昨年來砲術の門人にて隨分親しく致し候仁に御座候漢書も大抵には讀め西洋學も可也出來申候劍術もよく遣ひ候て諸藩に門弟も御座候この親と申人は小谷燕齋翁並此節の精一郎の兄第に御座候荊婦となるべきものは如何か兄とても當時小普請には候へ共御旗本衆には珍らしき人物又小谷氏とても凡流にも無之故宜しかるべくと存じ取極め候て願書も廿一日差出廿三日被仰付難有仕合奉存候此段爲御知申上候將此品乍粗末寒中御見舞申上候印迄に入御覽候御□存可被成下候兎角多忙勝乍存御無音申上候幸に御海容を蒙度候寒威折角御保重奉祈候頓首

啓　拜

竹村先生　席開

十一月廿七日

嘉永五年十一月廿七日

〔四四二〕恩田賴母に贈る

越前因幡等の大藩にても

正室の相應なるを求め候處

拜啓仕候久々御疎遠申上愧悚不少奉存候先頃も程過ぎ候て承知仕候處餘程御大病に被爲入候由乍然追々御順快に被爲赴吉人天祐と拜慶不過之奉存候時下嚴寒之候御病後何の御碍も不被爲在候か闔府總じて御萬福被成御座候や否奉伺候賤家老少幸に頑健罷在候小生義はいつも〳〵忙劇に罷在晝の間は多分來客の應接門人ども教授にて刻れ候故看書なども夜陰ならでは仕かね候仕合にて迷惑仕候義に御座候其間諸家樣より御賴の大砲架車等の製作にて日々諸職人も入込居り夫等時々差圖も有之近來は越前因幡等の大藩にても其老臣にて候者兵制を調へ候とて繁々相談に罷越し候など別して此程は取込候義に御座候右故心外の御不沙汰申上候幸に御宥恕可被成下候此品乍如何時氣拜候之印迄呈上仕候御笑存奉仰候此茶舗近日是迄と別人に相成り此種出來宜しと申評御座候故御慰迄に差上候義に御座候然ば小生義も當秋中召使一人子細有之暇遣し候處其以來無人にて家事不都合に付此度は母も勸め候に付正室の相應なるを求め候處諸藩門人どもゝ色々世話仕候も有之候處意に愜ひ候者無之候ひしに近日に至り風と一人有之早速に取極め候義に御座候乍小身御直參に勝麟

小生門人中指を屈し候內の人

太郎と申人有之其妹に御座候この勝は小谷燕齋翁の甥にて荊婦に相成候も其姪にて御座候麟太郎と申人一昨年以來洋銃の門下に御座候處漢學も洋學も可也に開に合候程にて劍術などもよく遣ひ諸侯方の內にも門人御座候位にて當時小普請には候へども一と料見御座候人にて小生門人中指を屈し候內の人に御座候其母と申人も頗る氣概ある女性にて手跡など男まさり達者なる事に御座候其人小生の正室を求め候と申を傳聞候て其少女をもらひ候はゞ遣し候はんと申事に付き其兄にて候人の性質をも存じ候義先方にても小生を存じ候へばこそ五歲に成り候小兒に年致し候召使なども有之候中へ遣し候はんと申事と存じ候に付頗る奇遇と存じ候早速に取極め候義に御座候但年の程餘り相違にて人の眥笑を引き可申候へども晉の鐘繇なども晚年若き正室を得候例も有之候へば貪著も御座有間敷當年十七と申事に候御一笑可被成下候しかし年ばかり相應致し候ても性行六ケしく候へば一も二も無之又小生頗る古怪に候へば一向の俗調にては雙方差困り候義に付少し料見ある母兄に育てられ候者に候はゞ一向の俗婦にも有之まじく左候へばけく年のわかきも面白かるべくと

礮卦と申者拙著仕候

存じ候て聘定仕候義に御座候願をも廿一日に差出し廿三日に願の通被仰付難有仕合奉存候引取り候は來月十五日と相約し申候別段御知らせ可申上の處事を殺ぎ候て時氣拜候の次奉報聞候簡略の段は御海容可被成下候近日礮卦と申者拙著仕候勿論前人未發の事どもにて砲の妙用殆ど玆に盡き候と存候義に御座候其草稿八十五郎迄相廻し置き候其内御一覽可被成下候一齋先生なども大に賞譽致し被下其他友閒にてももてはやし候て板行の事勸め候に付去月中昌平學問所へ改めに遣し候所月餘に相成候へども濟み不申薄々傳承候へば學士輩小生を忌み候より板行の事種々邪魔候と申事に御座候おのれ〱の學識の狹隘きより世の爲に成候ものをも壓へて世に出さぬ樣に致し候など不思議なる世界と存じ申候近來に及びつら〱存じ候に一向の無學よりなまじゐ誤て書を讀みはぐり候ものは世の害人の害に多く成り候樣存候が尊意如何や無學にても識量だに候へば世の衆美を集め候事出來申候へども偏固に書を讀み窮屈に料見を定め候ものは他の美他の長を合せ候事出來申さず剰へ無星の稱無分の尺にて勝手次第に事を計らはれ候ては始末に成かね候樣被存候乍然如此

無星の稱無分の尺にて勝手次第に事を計らはれ候ては始末に成かね

劇論世の禁忌に觸れ候義に候へば御覽後此紙をも御切捨可被成下候先は御疎遠の申譯旁草々申上候寒威折角御自重被遊候樣奉祈候頓首

十一月廿七日　啓　拜覆

正誼老臺　臺下

〔四四三〕伊木億右衞門に贈る

嘉永五年十一月廿七日

小寒の候に相成此表すら餘程の嚴寒に御座候其地別しての事なるべく被存候彌御揃御無恙御入被成候や否御安否承度奉存候扨又此程も伴之助へ御傳言殊に又何よりの品御送り被下不淺辱母始め宜しく御禮申上度と申出候

御誌石御摺立の事も

御誌石御摺立の事も高田等より承知候所御重役衆より掛り御役人料見狹く咲ふべき事に存じ申候原來上の御德誼を千載の後迄傳へ候はんと申候趣意にて御誌石等も有之事に候へば商人抔に鬻ぎ候には及ばず候へども御家中は勿論領分並他領のものとても上の御德を奉慕一本戴き度と願ひ候ものへは入費丈のもの納めさせ被下候て可然事に候夫も御埋葬御日限等に拘り候義に候へば

御誌石は再び開かれぬものに付

其爲に難相成と申事も候へども此度の如きは兎ても後れ候義に付其爲に少々倘御誌石を埋め候事遲なはり候とても御誌石は再び開かれぬものに付此節少しも廣く上の御美德を世に顯はし候はんには苦しからぬ筋に御座候此度幾枚限りなど申餘り狹き料見に付早速望月大夫へ其道理申候て其表へ其議論廻り候筈に御座候左候はゞ又御苦勞相添可申と奉存候乍然是は美事に付何分も御努力候樣所祈御座候將此紫菜聊か寒中御見舞の印迄掛御目候御哂收可被下候然ば小弟も當秋中召使一人無餘儀次弟にて暇遣し候所其以來無人にて何分家政も不都合に付相應の妻に成るべきものを求め候所諸藩門人ども迄も色々世話致し候へども是迄相應のものも無之候所此程に至り一人有之致約束申候御直參勝麟太郎と申人の妹に御座候此勝は先年中野御代官にて後御徒士頭に被成候小谷燕齋翁の甥に御座候則愚妻に成り候はんと申ものも其姪にて候麟太郎と申人中々御旗本衆には珍らしき人物にて漢學も可也出來西洋書も頗る讀め申候劍術も其伯父の精一殿の門人にてよく出來候趣にて諸侯方にも弟子御座候位に候一昨年來砲術をば小弟へ入門にて門弟の內にても指を屈し候人に

て平日隨分懇意に致し候仁に御座候其母と申も頗る氣性なる人にて小弟の妻を求め候と申を聞及び其末女をもらひ候はゞ遣し候はんと申事故よく其兄にて候人の性質をも存じ小谷などの血すぢ先不凡の方にも可有之と存候て早速に取極め候事に御座候但餘年違にてをかしく候當年十七と申事に候乍去年ばかり相應にても性行六ヶしく候ては一も二も無之又父兄の敎行き屆かずして氣まゝに候も困り候に付年の不似合は用捨候義に御座候其母にて候人は頗る能書に候故か千蔭の手など習ひ候て年より書は出來候樣にも被存候願も廿一日にさし出し候て廿三日被仰付難有仕合奉存候引越しは來月十五日と約し申候別段御しらせも可申所略し候て寒中御見舞の次如此に御座候乍憚御母堂樣へも右の段宜しく御申上可被下候寒氣折角御厭候樣所祈御座候餘在後鴻

年の不似合は用捨候義

十一月廿七日　　啓拜

伊木老兄足下

嘉永五年十一月廿七日

〔四四三〕　山寺源大夫に贈る

秋末一妾を出し候所

嚴寒の候御興居何似近來御閑散に相成候て御讀書の興尤も多かるべく奉想像候先便拙著の礮卦の事申上候が竹内翁より相廻り御覽被下候御事や電覽の上御高論御座候はゞ御示誨可被成下候然ば小弟も秋末一妾を出し候所家政何かと不都合に付相應の正室となるべきものを求め候所砲術門人にて乍小身御直參に勝麟太郎と申人有之候小谷燕齋翁の甥に當り候仁に候此人の妹當年十七に成り候を貰ひ候はゞ可遣と申事に付餘り年の違ひ候もをかしく候へども鐘繇なども晩年若き正室を得候例も有之其性行のわからぬものよりは兼て懇意に致し候間の事其女子は陸々不存候へども兄にて候人は當門下の内にも指を屈し候人にて漢學も可なり出來西洋書も中々讀め申候劍術も伯父にて候精一殿より傳へ又其親父と申人も擊劍家のよしにて此節も諸侯に少しく門人も御座候位の人にて旗下の士には珍しき人物に候へば其妹にて候故凡流よりは可然存じ年などの論に及ばず取極め候事に御座候願をも廿一日に出し候所廿三日に被仰付難有仕合に奉存候母も今度は大に悅び候義に御座候引取は來月十五日と相約し申候別段御知らせも可申上之所略し候て寒候伺方々爲御知申上

候今信發書極めて多く候まゝ不能多述寒威千萬御保重奉祈候以上

十一月廿七日　　　啓　叩頭

懼堂老兄　臺下

又啓尊嫂前へ乍憚宜しく奉煩御致意候令郎に近日途中御目にかゝり候至極御健に御座候御案思被進間敷候

此稿座右に有之候儘御慰に入御覽候此石門頌は隷辨隷釋などにて定て其大略は御承知のものと奉存候いかにも面白きものに御座候先年不揆手に入り當年迄は全く後人の摹刻とのみ存居候所此跋文にて略相分り候右の次第にて珍重不少候白井も手はきゝ不申候へども隷書好きに候間御序も候はゞ御示し可被下候此碑は漢碑には存外磨滅少く候摹刻と存居候故白井などにも見せ不申候所斯く原刻に極り候上は誇示申度ものに御座候同人至て磨滅を厭ひ申候漢碑など賞し候半に磨滅を嫌ひ候ては實に幾本も無之候當春かも阮元などが每度考證にも致し候衡方の碑有之勸め候所例の磨滅嫌にて不求候ひき尙古之志なき俗調こまり入候ものに御座候近日孔褒之碑を手に入れ申候是は磨滅殊に多

く十數字存候のみ然る所此人は孔北海の兒にて奇特なる事蹟御座候人に御座候依て此跋文も認め申候只今草稿手許に無之候間此度は不掛御目候衡方の碑も此碑も皆清代に至て始めて世に出候ものにて歐陽修、趙明誠、王世貞、郭昌宗、諸人の見ざるものに御座候以上

啓

是碑隷體古勁。時有篆籀氣。位置行數。錯落不齊。各具姿致。集錄家推爲東漢人傑作。洵不誣矣。但予所藏韓勑孔龢史晨諸碑。拓法竝皆精巧。然鋒鋩猶多漫漶。獨此碑摸拓不甚淨。而字畫如新。因疑是必後人摹刻。一日出而玩之。舒卷之際。偶見其墨光粗糙之處。往々有樹皮石蕊著紙背。因又大疑。更覆諸家說。此碑在褒斜谷中。其地絕險。椎拓頗難。蓋棧道在山半時。磨崖壁勒文。後代棧道移而漸下。今欲摸拓。必須長梯巨架。斫伐藤蔓。剝淨苔蘚。勞役多端。所費不貲。故臨池家不能盡得。近人學之者少。於是始知此其眞本。決非摹勒。樹皮石蕊。足證蹤跡。且拓法不淨。亦可想見其椎拓之難。而嗜古之士。不屬工人。親手搨之。故不能甚工。亦未可知也。搨工日衆。後出曹全碑。不免寖就漫滅。此刻終古巋然。字畫猶新。蓋以地險而搨者罕至。又奚疑。嗚呼。眞本。漢土之士旣不能盡得。況乎我

國。其能有幾本哉。眞可寶也。

象山平啓識

〔四四四〕　加藤弘之に贈る

嘉永五年十一月廿八日

雨故か小寒之候結句ゆるやかに覺え候彌御碍も無御座候歟此四五日御出席も無御座候故千萬無心許奉存候然ば過日御賴申候醱卦草稿何分引足不申候に付此間之如き謝儀にて今三通御賴み被下度奉存候行數之格好等は此稿之通りに致し申度候一通は殊に急ぎ候間出來次第御廻し被下候樣奉願候匆々頓首

廿八日

佐久間修理

仙石樣御屋敷にて

加藤土代士樣

風呂敷包添

松代町　丸山熊男氏藏

〔四四五〕　山寺源大夫に贈る

嘉永五年十二月十八日

醱卦草稿其

昨日相認め候呈書認落し候義有之候醱卦草稿其後數箇所改め候處御座候に付

後數箇所改め候處御座候に付申上候

卦下の傳　火發於金口也の下

　火有飛之義。口有吐之義。爲放發之象。洋人云々

彖傳欲出云々の傳

　是推裝彈之法。又合睽義。而賛其用之大也。

象傳の傳

　――以爲天下之大用。寇賊姦宄。蓋其相睽而相資者也。取其貞兌云々。

同―傳

　不令亂賊果於披倡。

九二の傳

　――不敢慢易。其小心愼密若是。所以亡其悔也。

九四象傳の傳

　反而觀之。得失見矣。

後記

書　衞　木挽町時代（四四五）山寺源大夫宛

如二六五革一故以レ新。兌金在レ下。離火在レ上。金之鑛敗者。火鍛而新レ之也。昔者攻金之爐。火多在二金下一。近世洋人回焔爐法。火多在二金上一。是其象也。離下兌上之卦云々

礮學圖編漸之事近來雕刻卒業

去年中序文掛御目候礮學圖編漸之事近來雕刻卒業相成候凡例目錄摺置候を供電矚候圖百三十八枚竪一尺横一尺四寸餘の帖に致し申候世間砲學家の杜撰をば少しく救可申奉存候乗て公邊の伺も□□同樣と申事にて候間門下へも其心得にて望み候者御座候へば遣し候事に御座候其表にも二三部有之可然存候が雕刻にも多分の費掛り其上外の品とも違細微のものに候故板木長く用ひ候事不叶依て一部代價一圓三方に極め申候に付誰も□□やうにも可難至乍御面倒白井氏等へ御申談被下幾部相送り可宜や便間御諭答奉希候以上

十八日　啓

懼堂盟臺

聖武記合本　十二册　二帙

右廉價の本有之小弟も一部もとめ候御入用は無御座候歟御入用も候はゞ可被仰越候代價四圓一方に御座候隨分一見識御座候ものにて面白く覺え候題

跋一首認め候後便可入御覽候　　　　啓　又拜

〔四四六〕根來斧右衞門岩下縫之丞に贈る

松代町　赤澤光太郎氏藏

嘉永五年十二月廿日か

西洋御書物返上之義

寒威甚敷候所彌御安泰被成御勤珍重奉存候然ば此間は西洋御書物返上之義被仰下承知仕候然る所望月大夫へは既に左樣申立置き候此節或る顯貴之御方より飜譯もの御賴に相成居右引合せ等に手放しかね候品も御座候に付今暫御猶豫被下度奉存候其義私罷出御內談申度候所此節連日多忙にて延引候內昨日又又御人被下恐入申候いづれ明日は繰合せ罷越し萬於面上可得貴意候昨日之拜復旁如此に御座候以上

廿日　　　　佐久間修理

根來斧右衞門樣

岩下縫之丞樣

〔四四七〕　田澤喜兵衛に贈る

嘉永五年十二月廿九日

覺

一金拾三兩壹分也

右知行所百姓より收め候分御廻し被下慥致落手候爲念如此御座候以上

子十二月廿九日　　佐久間修理

田澤喜兵衛殿

〔四四八〕　松代藩留守居津田轉より庄内侯への返簡

（嘉永五年庄内侯より先生の人物につきて問合あり津田先生よりまた津田先生へまり相談せし先節先生の下案せしものなり）

同藩佐久間修理業職の事御尋ねに御座候是は何とも難取定候先年此表にて學問所頭取被申付候へ共存念不行候て頓て致辭退其後郡中横目付被申付在所勝手に相成候所是も申立通り不成事折重り候とて頓て辭退に及び只今にては無役にて臨時手許の用向など候へば屋敷へも出候得ども用向無之候得ば式日などにも一切出かけ不申候故乍同藩甚疎遠に就き委しき事は不相辨候但元來は

父と申ものより讀書家にて幼年より書物を澤山讀み候事と被存候二十歳餘の頃林家御門人に相成り一齋先生に被取立文章などは先生の門下にも其頃類少き趣にて先生にも毎度御賞美被下候然る所如何存候や三十四五歳の時分より西洋學に入り半年計にして師匠なしに彼の横文字を自由に讀み覺え候て天地萬物の窮理よりして火術兵法等に渉り只今にては漢土聖賢の道德仁義の敎を。以て是が經とし西洋藝術諸科の學を以て是が緯とし只顧皇國の御威稜を盛に致し度と申存念のよしに御座候兵學師範の事御尋に御座候が是は先年故信州（故信州は感應公をさす）の側向勤め候頃信州より長沼流の傳書をば授り候かに承及び候甲州越後の手筋なども心得候かに御座候然る所近來は西洋の兵法を兼采候にあらされば當今の實用は成し難しと申料見のよし元來讀書好きにて候故漢土の兵書は大半渉獵候よしの所孫子司馬法一二書の外は皆淺陋にして用立不申が多しと申議論の樣子にて何か高尙に過ぎ候樣存じ申候火術門人兵學門人員數の事是は取合せ三百人。も御座候かのよしに承り候是亦一笑話にて當人義最初より砲術兵法など致敎授候はんとは更に存じも寄らず候所一昨々年冬西洋字書致編輯其

板行伺の爲に出府いたし深川屋敷に寓居仕候內僅かの間にひた〳〵と門弟も付きさては彼れが本業と仕候經學の事は不存人多く結句一箇の砲術家の樣に世間には申候樣に御座候

〔四四九〕竹內八十五郎に贈る

嘉永六年正月廿八日

拙著礮卦：：未だ御誨答を蒙らず

新禧芽出度奉存候彌御健寧可被成御超歲珍重不過之奉存候賤家依舊平安乍憚御放念可被下候然ば此紫菜粗品に御座候得共年頭之御祝詞申上候印迄呈上仕候御哂存被下候はゞ本懷之至可奉存候偖客冬拙著礮卦送呈仕仰高評候處未だ御誨答を蒙らず候思召被付候義は何分も御鐫誨被下度奉願候傳の方は宋儒の易に倣ひ後記の方は漢易に據候存意にて叙にも聊か其意を發し候義に御座候舊冬も申上候通後記御思召に應ぜざる所も可有御座奉存候夫等何分無御隔意御誨示奉願候其後又少々改め候所も御座候其內六五の革の詞を用ひ候を噬嗑と豊とを以て例し候事電と雷とは上下の分無之ものゝ故にいづれが上いづれが下にても差支なく候へども金と火の如きは自ら上下之分有之金を火上に加へ

候にあらざれば革の義を成し申まじと申議論も必ず可有之存候故後記の六五の一段を左の通改申候

如六五革故以新。兌金在下。離火在上。金之鏽敗者。火鍛而新之也。昔者攻金之爐。火多在金下。近世洋人回焰爐法。火多在金上。是其象也。

此説小生之新見と存じ候が

如何可有御座候や兵者革也。順時而更革也。此説小生之新見と存じ候が古人に此説御見及ばれ候御事は無御座候歟實に先子の覽に供し候心得にて録呈仕候義に付茂郎への御庭訓同樣の思召を以て御垂誨奉希候客臘より風邪に感じ常よりちと長びき候て漸此閒彈冠仕候仕合故新禧御祝詞も甚延引に相成其段は御海容所仰御座候猶期永日候恐惶謹言

正月廿八日　　佐久間修理

啓明

竹内八十五郎樣

人々御中

附啓茂郎彌御出精被成御勸學候や否近來は御體氣御丈夫に候や承知仕度乍

憚御序に宜しく御致聲奉仰候以上

〔四五〇〕　大槻磐溪に贈る案

嘉永六年二月朔　（河田八之助）

昨日は御惠然被下辱奉多謝候然ば河田別紙御示及に付則一覧候所其意を得ざる事のみに御座候

別紙に云礮卦草稿尙又其筋へ承り合せ候所云々

是不審の一つに御座候昨今如何被仰遣候て如此挨拶御座候義にや此間の御面話に彼の第二書表向取扱候ては河田殊之外致迷惑候趣にて旣に十七日に草稿彌戻り候に極り候事に候へば又別に事を起し候より少しく猶豫いたし候心得に相成り第二書引込ませもらひ度と申事の御話に付小弟申候は草稿引留に相成居候ては差支候間被差戻度と度々催促申候其上の事にて候へば彌十七日に聢と戻り候に極り候事に候はゞ夫丈の事は申通じ有之可然事と存候然るを一向有無の申通じも無之唯十四日の返書に廣く板行差支見合せの事早速其筋へ申立草稿下り候樣取計らひ可申と御座候のみ其以來十日を過ぎ何の沙汰も無

之候故此方に於ては是迄段々延々に相成居り春に及び申立候事も埒明き不申候を如何に存じ此程第二書の斷にも及び候事に御座候但し其第二書の斷表向き候ては河田迷惑と申事に候はゞ内々に致し申まじきにも無之候へども是迄餘り埒もなき事に付老兄と御内話申候計りにては不都合にも候間何田より十七日之樣子柄申通じ致さず候事の不念なるよしを申いつ迄には屹と草稿の戻り候樣いか樣にも骨折取はからひ可申に付第二斷書引込ませ貰度と申事手紙にて申來り候樣御申被下度と申事にて候所尚又其筋へ承り合せ候とは何等の事にて候や此方に於ては第二書の斷に及び候上は其筋へ承り合せもらひ度存念更に無之斷の儘にて固より遺念無御座候所夫にては河田迷惑と申に就て前條の勘辨も致し候事に御座候右之次第に候へば河田存念にて承り合せ候と也如何と也致し此間御面談申候所の挨拶あるべき事と存候然る所云々の文面にてはいかにも思意通せざる樣存じ申候

別紙に云開板改の義外々よりも夥敷願出御座候へども皆々一同指留に相成居候事故門人願の分計り相調へ候と申にも難相成

是不審の二ッに候夥敷願出御座候は皆開板改願ひ候分に御座候小弟草稿は久しく埒明き不申候に就き廣く板行候事の差支も差起り御改願ひ候事の御不用を願ひ右草稿早速御下げ被下度と申に候へば御改を願ひ居候ものとは事體格別に御座候御改を願ひ居候事に候はゞ林門の小弟分計り相調と申にも相成り難くとも聞え候へども御改を願はざる方に候を調と申事有之まじく存候是式の事は下賤の俗吏輩にても辨別候事に候所文學局に於て此等の事體相違の廉相分りかね候と申は更に〳〵不得其意事に御座候

別紙大試業調相濟次第開板御用に取掛り候へば其節御下げに可相成旨に御座候

是不審の三ッに御座候小弟も開板改願ひ居り候はゞ開板御用に被取掛候節の取扱有之勿論の事に候へども開板改の事不用を願ひ候品までを是非々々試業濟ならでは不相戻と申も怪むべきことに候草稿を其儘戻し被下候は誠に一擧手一投足の勞までも至らぬ事に候をけしからぬ義と存候此節試業に付學問所出役の衆等も日々出席のよしに候へば別して勞煩も無之事に相察し候此節にてこそ草稿入用にも候へどもいつ其試業調の濟み

候やも辨へ不申去十月中御取次奉賴候以來旣に百日に及び候へば此上尙多日手を空しくして相待候事何分差支候間第二書に認め候通再構候存念に相決候左候へば改を願ひ居候ものも願はざる方に致し候ものも同じく調べなど唱へ俗に申引づられ候はんよりは斷り通り差出し置候草稿に意念をかけざる方快く覺え候別紙の如き取留も無之義にては第二書引込ませ候事不承知に御座候間左樣御承知可被下候河田別紙返還御收納是祈頓首

二月朔　　　佐久間修理

大槻平次樣

（此割り書は先生の覺書なり）

礮卦の事に付丑正月二十五日林家塾長迄斷りに及び候所之事內分に致し度趣大槻より話廻り候に付承知可申覺悟に申置候所卑劣の事共有之候に付內分に致し候事不承知之趣申斷候下案

嘉永六年二月十日

〔四五一〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

新禧之御手敎辱拜見先以倍御佳勝被成御迎陽候條慶賀之至奉存候賤家依舊安在御放念可被下候被寄思食母方へ何よりの御品御贈被下奉多謝候母も宜しく

御禮申上度申出候先は拜復新年之御祝詞旁如此御座候猶期永日之時候恐惶謹言

佐久間修理

二月十日　啓明

八田愼藏様

人々御中

猶々殘寒折角御多愛御座候樣奉祈候乍憚御家内樣へも宜しく御致意奉賴候令愛君嘸御成長と致想像候此粗末之品聊か掛御目候御哄存可被下候其表新法にて町方窮迫のよし風聞承候吳服の方などは實に厄年なるべく被相察候令弟も每々御噂申候事に御座候以上

其表新法にて町方窮迫（前年四月藩儉約令を布く）

嘉永六年二月十五日

〔四五二〕側納戸役に贈る

以手紙致啓上候春寒退兼候得共御上益御機嫌克被遊御座恐悅至極奉存候各樣にも彌御安泰珍重奉賀候然ば拙著礮學圖編彫刻之義多少の御手數に相成彌成

礮學圖編彫

刻之義……一部献上仕候

本に至り難有仕合奉存候依之一部献上仕候御序を以て宜敷御取計被下度奉頼候外に加州製落雁加州樣御上りにも相成候品と申事にて門下より致到來候に就き是又御慰迄に奉入御覽候總て可然樣奉冀候右得貴意度如此御座候以上

二月十五日

猶々御□等の義は乍御手數宜しく奉頼候

〔四五三〕 山寺源大夫に贈る

嘉永六年二月十七日

老母散々不快

當春は朧底より散々風邪に罷在候て拜年にも一切不罷出候仕合故新禧の呈書も不仕候ひき時下剩寒猶退かね候所尊候如何被成御座候や奉伺候小弟追々快方の所去月廿日頃より老母散々不快にて夜々不寢の伽仕候樣の事十日餘り家内にても一統氣遣ひ外より見舞吳候人々も皆々快復覺束なしと心配致しくれ候程の事にて候ひき乍然惡性熱に無之候故小弟に於ては隨分療法届き可申存じ候尤も但來年滿八十と申候高年に付病毒分排の期後れ候時は難治の所謂老病と申に相成り候の恐れなきにしもあらず依て晝夜苦心仕種々機に先て手充

致し先々無恙及全快今日態と床上げの祝など仕候義に御座候今日頃の様子は誠に平常の通にて御座候閒乍憚御過念被下まじく候母の病症など珍らしき事に御座候元來御存知の痰氣にて此度とても同じ症には候へども精神欝とりと致し熱度も頗る壯にて御座候ひき其症最初よりいかにも瀉血によろしき症にて壯年のものに候へば譯もなく七八十匁の血を殺ぎ可申症に候へども高年の瀉血又醫家の恐るゝ所に有之候故むざと手を下し難く乍去瀉血の外更に手段無之藥石の能く救ふ所に無御座候症に付彼是斟酌仕前後に水蛭百條餘相貼し（胸部及肩後）血を奪ひ候事六十餘匁に及び可申全く此手充にて快方仕候義に御座候極老の人にも箇樣の事御座候不思議なるものに御座候母義に付毎度御配慮も被成下候故此次第申上候快方致し候に及び夢の覺め候樣と申し當人にも以來は小弟の申すまゝ瀉血も何も致し候はんと申位にて此度は小弟の手段隨分感じ候と被存候小弟快方仕年頭の書簡にても認め候はんと申節母不快に相成病中も右に申上候次第にて此程迄家内難澁仕乍存御疎濶申上候幸御涵容可被成下候偖舊臘は三郎君御不幸寔に言語道斷の至御哀痛奉察候其後御日柄も立不

舊臘は三郎君御不幸

御配偶之端を開き

申御心濟も無御座候はんに廿一日に於て縷々御懇到の御長箋被下迎婦の御怡蒙仰且被寄思召魚子一反御祝贈被成下乍毎度御親情萬々難有不勝言謝奉存候乍併只々恐入候御事に御座候乍憚尊嫂へも可然御致謝奉仰候荊婦入門以來先無事にて母との際も至て宜しく心安く存候義に御座候是亦乍憚御降心可被成下候母並愚妻へ御加筆被下候趣申聞候所尙宜敷申上度段申出候御紙末にて承知仕候へば初冬頃より御肺氣被損候御樣子御氣分御勝不被成御臥床のよし散散の御事に奉存候其御中別して御懇書奉感刻候將令郎御事に付被仰下候義委細奉敬諾候近日御出被下候節則被仰下候趣を以て御配偶之端を開き申出候所御咲ひ候て御卽答は無御座候ひき如仰小弟には御憚りなき樣にも參るまじく候間一手段仕り御心底よく相探り他日申上候樣可仕蒙仰候故先其端を開き候義に御座候偖又歲晩の御祝儀に預り疊複感銘奉多謝候上に申上候取込にて此哉謝も不申候所へ正月二十九日の敎墨拜按薰披仕候舊臘三郎君御病症の義につき愚意申上候賤書延達畫餠に相成り且郞君御病中より御臨終迄の御樣子具に被仰下不覺酸悲兩袖を濕し候義に御座候御性質と申し御年柄と申し誠に不

勝痛惜御心情奉推察候但壽夭は天定の義に候開理を以て御節哀御座候の外有御座間敷被存候御病占今更よく應じ候と存候必ず二月頃御凌つき不申候ては油斷なりかね候と申は過卦泰にて正月の卦に有之候之卦之升は四陰二陽の卦にて十二月の卦の臨より來り候卦に御座候名は升と申よく聞え候へども木地に入るの象有之其上三陰三陽の泰の一陰を增し此卦となり此月氣に應じ候所遁るべからざるの御危篤と爰にて存候義に御座候依て正月迄御持こらへ候ても一陰を增し跡戾り致し候象に或は應じ候義も有御座候べく必ず二月に至り候へば下に增し候一陰も復し三陽の上更に一陽を長じ候故御快復可有御座相考申上候義に御座候ひき是等の卦象なども跡より御覽被成候へば御節哀の一端にも相成候義と申上候義に御座候

拙著礮卦……國譯の義

一拙著礮卦文字無之門人の爲めに國譯の義相願ひ候所蒙御允諾喜感不淺奉存候體裁之事御下問に御座候が是は經傳共に荻生氏孫子國字解の如きものに仕度存候乍御面倒何分奉冀候掛御目候稿本の內誤字御見出し被成下奉謝候門人を倩ひ寫させ又讀合せ致し候樣申候所やはり誤り有之候是故に畢竟板に鐫り

此二日には小田原大地震にて

申度にて御座候被仰下候內非其非非其是ともに上の非は虛字にて是非の非に無之候尊考の如くに上の非を實字に讀み候時は文氣平易に聞え申候本のまゝに虛字に讀み候へば文句險に相成申候愚意にやはり本のまゝに致度候が尙思召も御座候はゞ御敎誨奉希候又礮の名所譯文並貅兒蒙礡(ヒウルモンド)の事御尋に候が是は別に譯文にも及び申すまじく尾珠(ヲダマ)當(ソコ)肘(ウデガネ)火門(ヒグチ)口(スグチ)首(カシラ)貅兒蒙礡は唐音を假名に用ひ候迄に御座候へば別に和訓無之火口卽ち其訓に御座候朱子燭籠の喩は語類に見え申候周易本義簡明を務とせられ候て漢晋以來葛藤の說を省かれ候に就て自說をなされ候に譬如燭籠添一條骨則障了一條明と被申候事に御座候御紙末只今にすきと御全快無御座候御樣子全く御不幸彼是の御祟と被察候緩和下劑にても御用被成候はゞ可然奉存候時下如何の御容體にや委しく相伺度候如仰都下も珍敷大雪にて候ひき近日浦賀與力より文通にて候がやはり彼地なども平地二尺餘の雪と申事に御座候絕て無之事のよしに候其上此二日には小田原大地震にて此表も餘程の事にて候ひき其日は中津藩の調訓日にて二本榎の邸へ出で居候所地震にて其震ひ方一通

ならず怖るべき事と中庭へ出候程の事にて候浦賀邊も潰れ家は無之候へども土藏の分は大抵痛み候趣に御座候其御地も大分强き震ひ御座候よしに承り候扠々穩ならぬ事に御座候其上此表にては首夏には必ず異國船渡來可申風聞にて志あるもの心を苦しめ候義に御座候偶感の詩三首錄呈御一評奉希候

偶感の詩三首錄呈

未見砲臺環海濤。南風四月甚關心。但致廟略無遺算。應有蕃船報好音。士庶何爲忘德澤。江山亦自惡妖祲。武昌元是咽喉地。可使犬羊窺領襟。

戎霧蠻雲黯海天。書生微力曷能宣。堅城巨艦策空委。短髮蒼顏徒自憐。楂木橫江誰起堵。硝苗在野未開田。伐謀原係廟廊事。祇把礮兵聊著鞭。

幾載鯨鯢橫遠海。中州豫備尙依然。孰知兵制從時變。但說軍裝映日鮮。運礮未應須我馬。守城却或要渠船。當今更有無窮事。志士何時安枕眠。

蕃船報好音は阿蘭船の風說書を申すにて候堅城巨艦策空委は先年の献策御取用無御座候を申候也此表の時事是にて御推察可有御座候雞の鳴き候に羽たゝき致さず候事の農兆と申事一向心得不申候易に翰音の名も有之候へば却て異事の樣愚意には被存候偖礮卦彫刻の事別紙の手段に仕候是にては十の八九は

御聞濟に可相成被存候聖堂學士輩猶豫致し居候間に此方より廣と申候一字を加へ斷り候は少しく快き樣に存候御一咲の爲別紙掛御目候いつにても宜しく候閒便閒御投還奉冀候先は兩度の奉復御疎遠申上候申譯旁々如此に御座候御體氣折角御愛重所祈に御座候不肅

二月十七日　啓　拜　復

懼　堂　君　臺下

（嘉永六年二月十八日）

〔四五四〕竹村金吾に贈る

（舊臘より御引籠の由）

舊臘より風邪に罷在又老母不快等にて新禧之呈書も不仕慚愧之至奉存候時下春寒猶料峭に御座候處闔府被成御揃御健寧被爲入候歟奉伺候偖客冬御惠書は無御座候へども受室之御祝儀並に珍敷美箋二刀蒙御送惠千萬難有奉銘謝候右拜謝も前條申上候仕合にて乍存稽緩に及び恐入奉存候幸に御容恕可被成下候さて薄々傳聞仕候へば舊臘より御引籠のよし先生御氣質にては色々に御憂慮も有御座べく候へども古來賢人能士罪なくして屈を受け候もの世々に其員少

洋法を兼取る事を知らぬ兵家者流何方にも澤山有之由にて浩嘆の至りに候

からず御自身君國の御爲を被思召御苦心候て御經營御座候事の或は天災或は人事の變にて思召通り參らぬ事御座候とても御內省御座候て天にも人にも御愧怩御座候はずば外より至り候榮辱をば御度外に被差置可然と愚意に奉存候に付朧底御惠賜の拜謝旁忠告申上候先生兼て史學に御長じ被成候かゝる時にこそ御受用可有御座事と奉存候古來罪なくして屈を受け候賢能之士を思召被出候はゞ自分御寬中の一助なるべくと奉存候唯何に就候ても御體氣の御保養に不可過候小弟此節頑健老母義も一兩日平素に復し候閒乍憚御放念可被成下候以上

啓　再拜

竹村先生臺下

二月十八日

附啓當年は四月の頃異國船數艘浦賀邊渡來候べき風聞にて志御座候ものは隨分疾首候義に候所時勢をも辨へず此節に至り候ても洋法を兼ね取る事を知らぬ兵家者流いづ方にも澤山有之よしにて浩嘆の至りに候大砲を用ひ候にも馬までも慣し不申候ては西洋の通輕捷の働き出來不申海城を守り候に

臺場のみにては何分屆きかね候事にて是非かれの用ひ候船無之候ては參らぬ事に御座候拙詩有之候御一咲可被下候

（百二十四頁參照）

未見砲臺環海潯　南風四月甚關心　但教廟略無遺算　應有蒼船報好音
士庶何爲忘德澤　江山亦自惡妖祲　武昌本是咽喉地　可使犬羊窺領襟。
幾載鯨鯢横遠海　中州豫備尙依然　孰知兵制從時變　但說軍裝映日鮮
運礮未應須我馬　守城却或要渠船　當今更有無窮事　志士何時安枕眠。

無窮之事と申には多少の意有之候御推覽奉希候御隣家御同僚も每度疎遠仕候詩作は怠らず致され候樣子歟定めて御承知に可有御座候御序も候はゞ此詩御轉示可被成下候以上

〔四五五〕 山寺源大夫に贈る

嘉永六年四月六日

追々氣候も好く相成候御動履倍御佳勝被成御座候歟此表にても令郎ちと御不快にて過日長谷川の方にて御容體をも一診仕候所さしてのとも無御座候へ共御用藥少々思意に叶はざる廉も候て長谷川へも左樣申候事に候ひき然る所追

（四五五）山寺源大夫宛

追御順快にて過刻も使を以て御樣子伺はせ候に今日頃は大分御快き趣に御座候御過念被遊まじく候偖先便礮卦伺の次第並に開板砲學圖編の事申上候所其內久しく御誨答不被成下候伺の方の義には此節も相關係候事御座候間入御覽候紙面便閒御返達被下候樣仕度候餘り暫御左右も不承候に付拜候方々如此御座候時下千萬御保愼奉祈候以上

四月六日　再拜上

懼堂契臺几下

附啓御近著等御座候はゞ御示及奉冀候上巳一詩供電覽候御一粲是祈

癸丑上巳會飮簡堂

（第二卷詩鈔二八頁參照）

王右軍上巳爲蘭亭之會。在晉永和九年癸丑。今歲又遇癸丑。是日之集。豈非勝事。因憶永和八年。殷浩北伐無功。再擧屯泗口。右軍移書諫之曰。區々江左。天下寒心。固已久矣。處內外之任者。未有深謀遠慮。天下將有土崩之勢。任其事者。豈得辭四海之責哉。又與會稽王昱牋曰。不度德量力。不弊不已。此封內所以痛心歎悼者也。願先爲不可勝之基。須根立勢擧。謀之未晚。浩不能從。遂有九年秋七月之敗。頃歲洋夷披倡。衆

頤大邦。形迹既露。而不可勝之基。尚有未立者。俯仰之際。不能無感慨。因詩中及之。良辰修故事。禊飲會詞林。乃誦蘭亭序。深欽賢者心。去年爭北伐。今日在山陰。勝集雖可娛。同思感慨深。鯨鯢久奔逸。長籌乏知音。興懷欲嗟悼。情況何古今。　啓

嘉永六年四月十五日

〔四五六〕島津文三郎に與ふ

西洋三兵砲術眞傳免許狀

一　步兵法

目錄有之

一　騎兵法

目錄有之

但隊伍進退之法馬術ニ屬ス

一　砲兵法

目錄有之但騎砲之法是又馬術ニ屬ス

以上

貴殿入門以來篤く心懸け日々出精修業有之追々上達せられ號令作法に至り候ては門下多しと雖も比類無之感心致候依之今般此卷令附屬候畢以後從學懇望之者有之候はゞ指南之義尤に候抑某此術を講習候事偏に家國天下の爲に微力を盡候迄にて世間卑に臨で高を爲さんと欲するもの〻比にあらず故に自ら勤勞刻苦して發明する所の業と雖も初めよりこれを隱祕する事無し此邦に良術秀法心得たらんもの一人も多く有之候はん事某の志願に候門人取立有之に於ては此事尤も不可有遺忘候且西洋之諸術是を泉の山より出るに譬へて暫くも息むことなく日々に月々に長進し新に發明候事歳に不少候若し此方に於て精研疎く候時は終に彼に及び候事能はず候大丈夫之志固より出藍之企なくんばあるべからず愈以無怠慢可有研究者也

嘉永六年四月十五日

佐久間修理

啓　明

島津文三郎殿

〔四五七〕 山寺源大夫に贈る

嘉永六年四月十七日

（前文切れてなし）

他出不相叶家僕を以て御左右承候に次第に御快き様承り其後使上げ候へば三四日取分け御善候に候よし其内村上生より承り候にも御様子宜しき趣長谷川生來訪に而承知候にも追日御快善の趣御話有之□□快き事最早御床なども御除け候半と存じ一昨日(十五日也)御見舞申上候所猶御牀有之其上御容體一診候て實大に驚き申候先頃ゟ宜しき方々と御座候て箇様御手間取其御容體とても聲も御唖し胸肋邊に押無き如き御覺有之候脉も數御座候御様子いづれにも肺に中分御座候證に被存候是等は其前私御診察申候頃は無之義に御座候是程の義を自身御見舞不申人言にて事もなく申上候は甚申譯無之恐入奉存候愚考には今に於て早速に其治方に從ひ致瀉血候か左なくとも胸部に水蛭を頻に施し候等の事無御座候はゞ或は肺勞に御傾き候恐れなきにあらずいづれにも功者の西洋家へ御見せ其議論を聞き愚見と參考有御座度可然見込申候所長谷川生も宜しく賴み度と申候に付早速大槻俊齋へ申遣し候然る所昨今の内必ず見舞

肺に中分御座候證

大槻俊齋へ申遣し候

考も候はゞ戻りに立寄り可申との挨拶にて昨日も見え不申今日も晝過迄見えず候所へ幸坪井信朝(信道の婿)參り候に付相賴安世差添相伺せ候左候所明朝長谷川御同道申出立と申候て一通御容子診察罷歸候趣に御座候安世を以ての傳言には脚氣を兼ね候樣存じ候との義に御座候隨分尤に被存候今一人若手にては當時書物よく讀め評判宜しき大木忠益へも申遣し(是れも信道の門人なり)罷出候よしの所何を申も明朝御出立と申にて是も御容體一診のみにて歸候趣に御座候服部某並阿藤を信じ候體を察し候て都下の流義にて言を盡すことなくして引取候やに被察候私此間長谷川へ申候には元來通家の事に候へば私方にて暫く養生有之全快にて歸られ候方可然何分御在所には良醫乏しく不都合なる事可有之と申候所長谷川も如何致したるが宜しからんと其節は未だ必ず御同道にも極めぬ樣にて候所全く服部等の說にて決心候事と被存候只今御暇乞ながら御尋ね申御容體を看了候に一昨日に御替り候所無御座候御道中候はゞ空氣も新たに相成候故脚氣の爲にも肺の爲にも可然候惟其表御著の上御藥用萬端肯綮に中り候樣を奉祈候いづれにも先倉田へ御見せ其品次第六七十匁の

(倉田は倉田左高にし

て松代藩醫の西洋家なり）

瀉血御座候方と奉存候若瀉血無之候はゞ水蛭を胸部に二十條づつ七日も御連用有御座度ものと奉存候返すく\昨今大槻に見せ候はぬが惜しき事に御座候愚意には兎に角最初より阿藤の桂枝剤は御症に相反し不可然と存居候千萬御愛養御座候様奉存候今夕長谷川へ面會不仕御傳言も不申候故如此に御座候過日は鼠宿迄既に御出かけ候よし隔地の義御案事被成候事御尤に奉存候御考合せ迄に例の伏藏なく申上候燈下亂筆御免可被下候以上

最初より阿藤の桂枝剤は御症に相反し不可然と存居候

四月十七日　　　啓　拜手

懼堂老盟臺

猶々乍憚尊嫂へも可然御致聲奉仰候

〔四五八〕　眞田志摩に贈る

嘉永六年五月十日

深美出府に付昆吾一方御賜惠被成下

拜啓仕候過日は舊年御墓文之義に就き御□御座候御挨拶として深美出府に付昆吾壹方御賜惠被成下感愓之至筆謝難申盡奉存候深美歸藩の節も裁謝申上度心がけに御座候ひしかども多忙にて延引恐入候扨近日愚甥北山勝三郎に承り

姉義けしからぬ嘆願書相認御玄關迄罷出粗忽之義共有之候よし

女の直々上へ願筋等仕候義の御座候義以の外

候へば姉義けしからぬ嘆願書相認御玄關迄罷出粗忽之義共有之候よし何共私に於て恐入且面目を失ひ候義に奉存候御□意を以て毎々御寛容之御扱被成下候條千萬難有御禮の申上べきやうも無御座奉心謝候元來姉にて候ものは氣性生得慓悍にて私などの手に餘り候者に御座候乍去其表に罷在候はゞ此度之義等の過失は無之樣諫も可仕候所隔地にて一向に存じ不申後れて承り誠に驚入申候全く私義の昨年來風説に因り蕃船渡來之義を心遣ひ少しは米などをも買儲へ夏の陣服など製し候義を傳聞仕只今にも騒亂の出で來り候樣只願心得候より兩人の子供へも臨時の御用向相勤めさせ申度相考候より少々は身の廻り佩刀之修復等も仕らせ度と存込候とて急に金子借入手段仕候所何分出來兼候に付前後窮迫仕嘆願候もくろみ等仕候義に被察志はけなげに御座候得共安世義も御座候に女の直々上へ願筋等仕候義の御座候義以の外之義に奉存候箇樣の事如何樣あせり候とて政府之御差圖に被爲及かね候義は知れわたりたる事にて候を辨別不仕候事唉止千萬之義に奉存候但士大夫すら爭友爭子無御座時には過失をも免れざる義に候へばまして不學の女子殊に早々夫をも失ひ獨り

仕にて教訓を加へ候ものも無之あまつさへ母並に私義も此隔地に罷在安世迄も此方に修業罷在候義にて考誤候義とても誰ありて申解き候者も無御座又諫爭可仕ものも無之候へば氣性慓悍のもの等は倘樣之間違御座候も亦其勢と奉存候何分にも御寛恕被成下此上何事も御含容被成下候樣奉願候先は過日之御請旁右懇願迄申上候心事千萬御照諒可被成下追々暑に候爲衆折角御珍愛被遊候樣奉祈候不肅

五月十日　　　啓　叩頭

眞田老臺執事

〔四五九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

嘉永六年五月十日

先便御送り物之御禮乍ら令弟之御事得貴意候所早速御復書被仰越候義一々致敬諾候端午前にも書中を以て御心付申候所いづれ御出候て御內話御座候はん樣に御申越し候處猶兩三日見合せ御出無御座候はゞ使にても差出すべく存じ罷在候偖急に一事相願度候義は兼て御藏品に俗にがんどう提燈と唱へ候もの

令弟の御事

がんどう提燈と唱へ候もの

御藏品を手本に一具御作らせ

御座候ひき其製作を懇意の者へ話し候所價は何程にても宜しく候間其古制の通一つ相願ひ呉候樣賴を受け申候近頃御厄介は恐入候へども御藏品を手本に一具御作らせ御送り被下度奉萬冀候此賴み候人は殊に入魂に致し候義に付早速遣し度候間何分御手數被下候樣奉希候要用のみ草々得貴意候令弟御事は御面話申候て猶報聞可申候總期後鴻

八田賢友

五月十日

啓

猶々北堂前へも宜しく御致聲奉仰候將此三封乍御手數御遞致被下度奉囑候以上

甘草一件は其後如何相成候義や

猶々乍序相伺候甘草一件は其後如何相成候義や承度候爰に不思議なる事の候は一昨々年春此表へ兩三根持參候品近日取出し見候へば靑くさき臭も無之折り候に粉の飛び候所全く舶來の品に相違無之味も同樣にて御座候大坂藥種屋にて吞込候はゞ舶來にて通用差支有まじく存候以上

嘉永六年五月十八日

〔四六〇〕 山寺源大夫に贈る

東京市 山寺源太郎氏藏

本月六日之御手翰相達し忙手拜展仕候先以御萬福奉慶候令郎も御著の頃よりは追々御順快之趣被仰下奉降心候乍然只今に御聲嗄並に脚下之御氣味は外御樣子に準じ候はぬよししかし其内には御平全候べく候但先便拜復にも認め候通御服藥方面白からず候腹内の攣急候を緩和溫補之劑をだに用ひ候へば宜しき事と存じ候は素人考と存候其攣急之源を探り候はねば一概の沙汰と相成可申候愚意には舶來の藥品にキバペープルと申ものの御座候が是なぞ必ず御相應候はんと相考へ候小弟儲は無御座候へども御用之思召も候はゞ懇意之間より分けもらひ候て差上可申候偖御殿御燒失之事追々承り御同然恐入奉存候傳聞候へば文林の御茶入千羽鶴の御茶勺等御寶器吉光御長持に入り可申を其儘御納戸役所に差置き此度の災に罹り候との事遺恨申ばかりなく奉存候歸する所御重役衆等閑より下々御役人も等閑に相成り候より事起候義と不勝切齒候御帋末にも御認御座候通り驕の字の病よりして道理を見候事暗く苛刻ならで宜

御殿御燒失之事追々承り

しき事は苛刻にし嚴密にせで叶はぬ事は却て粗略に致し候より箇様の災も有之其災に依て御代々御褒襲被遊候御品迄滅却に至り候事と被存候此以往之所如仰實に杞憂に堪えざるとごもに御座候是等の病痛を只今御國家の御爲に御濟ひ候も盟臺の外其人無之奉存候何分も御潜伏中眞に御綱紀の相張候樣御工

聖武記之事

夫専一と奉祈候將聖武記之事云々被仰下委細承知仕候十分思召も無之御樣子且書肆の方勢強く價は少しも減じ不申と申事故先日既に何方也とも遣し候樣

活字板武事餘記

斷り候義に御座候此度御紙上にては丁度夫も宜しく御座候ひき但活字板武事餘記頻に御渉獵全備のよしに被思食候との事去る御事ながら活字板に相成候は第一板にて此度のは增補の再板にて武事餘記中も大に增し候て餘程違ひ申候魏源は中々清人には珍敷見識之人と被存候既に此度の目錄の末に小識有之其結末に是爲二聖武記第二次重訂本一學問之境無レ窮未レ審三將來心目又復何似二災棃之悔其有レ既乎道光二十四載魏源識二于蘇州旅次一と有之候此一事にても井蛙の見を守り候ものゝ比に無之候事は相分り候義と存候此魏氏は乾隆征苗の前一歳に生れ候と序にも有之候へば小弟に長ずる事十七當年滿六十と被存候聖武記を

犯境錄刻本

初め草し候は道光二十二年壬寅に候所小弟海防之策を先公に上り候も壬寅にて其策する所往々一轍に出で候事千里之同志とゆかしく存じ候より此書も乍高價取入候義に御座候藏書中にもかねて活字餘記有之候閒其內閑隙に增補の分だけを調べ寫させ候て差上候樣可仕候犯境錄刻本も中々少く候小弟なぞ于今一度も見受け候事無御座候弊藏にも一部御座候所誤寫多く候故刻本にて對校を心がけ候へども持ち候ものゝ不承候刻本多候よしは誰ぞ申上候義や便閒御誨示可被下候其手にて借り出し可申奉存候白石蕃山御欽慕之條御尤に奉存候いづれも偉人と申內白石尤も不可及と奉存候しかし二子共に政事は申分御座候樣かねてより存じ居候二子もし此節世に在り相應の要地に被居候はゞいづれの所より手を下し可被申や定て御考可有御座御議論伺度奉存候津藩山本生御尋ね申上候よし砲技不精に候故うろ覺えに候が慥か一度は門籍に加り候ものと存候洋學もはか〲しく出來不申候ひき土肥生も度々宅へも見え候ひき才子にて文章は大抵には認め候由の噂に候所駿と致し候大文字は今に見候事も無御座候文章も可也見られ候位には往々認候ものも候へども漢土の學士に

愛日樓文詩續編の選定

見せ候ても恥敷無之と申樣熟鍊候は至て稀にして晉晨天之星の數とも參らぬ歟と存じ申候一齋先生の人選に預り候て先達て中愛日樓文詩續編の選定を仕候が彼先生など近來稀の文人にて候所議すべき所少なからず大分愚意申候事御座候先生にも大に益を得候とて悅ばれ候義に候ひき兎に角本邦之書生は學び方鹵莽故至る所迄至ざる樣被存候津侯なども諸侯の御學問には御作文なども感心之事に候所平人の書生に致し候へば未だ一向の事に御座候乍去大分御自慢の樣承り候故三村御取次にて小品文御示しの節不滿之意を寓し評語を題し上げ候所其後は一切御文稿等御見せ不被成候此一事に於て大抵其御量も識れ候事と奉存候御在府中沙汰ばかりにて遂に御逢は無之候但此度此表御出立に付候ても此上ながら發明の義等は聞かせ吳候樣にとて御內使者を賜り越後縮二反被下候扠醱卦上木之事政府より無用に仕候樣御沙汰御座候不及是非義奉存候寫本にて傳へ子雲を千載に待ち候はんと相決し候但夫に付候ても文字無之門人の爲め何分も御譯文は被成下度候異國船の沙汰今日迄は無之候が何とぞ事なく候へば是に增し候義は無御座候と祈り候義に御座候禍災不測に發

り候との事朔日夜の有樣にても思召被付候よし御尤に奉存候乍然是を知り候者は知者是を知らざる者は愚者知者位を得れば亂れたるも治り愚者位に當れば治りたるも亂る夫も皆定數御座候かと存候義に御座候但國家之責ある者は定數に安んじ候ては濟み不申と奉存候此節尾州家なども大分御心付も御座候か近日其家中砲術指南の者父子小弟へ手寄り西洋傳砲學修業候樣被仰付其御城附より御上屋敷御留守居迄其掛合有之其父子入門に參り候其父にて候人は六十五歲と申事に候其子息は三十五のよし父子とも大分分り候人に御座候彼の大藩にて六十五の老人を修業に被差出候も珍らしき事又其高年にて出かけ候も御同藩などの考にては奇の奇と存じ申候又いつかも申上候ひしが因州樣御家老荒尾千葉介御大家の大臣には中々感じ入候事にて其家來を四人迄も砲術門人に致し自身は別に兵法之入門いたし近來砲兵の攻守法を取調べ候公用の隙々には必ず參り候て每々半日餘も質問研究夜に入り歸り候事珍らしからず候他藩より稽古人出居候時は稽古所へも出候て偶には銃砲をも演習有之候年は三十七八にて御座候高も在所にては三千石此表へ出候へば一萬石の格と

御家老荒尾千葉介

中事に候が至て丁寧なることにて氣の毒なる程に御座候此人なども世界の長ずる所を取り候はねば叶はざる事とよく料見致し候より人にも下り精神をも勞し候て苦刻有之候事に御座候彼の面從諂諛の小人輩に付込れ驕心など生じ候の類とは相距る事天淵と存じ候他藩には隨分人も御座候樣見え候が何故に本藩には人に乏しく候やらん慨嘆の事共に御座候乍去箇樣の事申御互に罪蒙り候はんも難測候努々他に御泄し被下まじく候藤三甥出府母も悅び候はんさの御事如仰大喜仕候是も姉の惡元氣に又々困り其表へ立歸りに遣し候義に御座候定て御傳聞も可被成下か拜借金仕度とて御重役衆へ書取を持參仕候とか申事に御座候如此出來ぬ事の知れわたり候義を仕候事何共小弟迄失面目候事に候段此度藤三郎にも申含め又書狀にも認め候て遣し申候御相談など申罷出候義等も候はゞ何分もよく〳〵御理解被成下候樣奉願候先は拜復迄申上候時氣に從ひ折角御保愛所冀御座候以上

藤三甥出府母も悅び候はんとの御事

蒲月十八日　啓　覆　復

懼堂老盟臺

附白禍災も祟德にて必ず遁れ可申哉の御下問いかにも可遁道理と愚意には
かねてゟ存じ罷在候德を祟し候には必ず敬に本き候事に候能く敬し候時は
毎事に粗略なる事無之候毎事粗略無之候へば禍災いづれよりして發り可申
や凶年饑歲天行厲疫盜賊內發蠻夷外侵等も兼て精密に夫に備有之候へば憂
ふるに足らざる歟と存じ申候御異論も御座候はゞ承度候御殿御燒失の前近
在にて前廉より火氣を見候などは取るにも足らぬ妄言と被存候循樣の事兵
家の尤も忌む所と存候尊意何似火事にて戰場の形勢を御覽候に狼狽候もの
八分候を二分正氣のもの有之候はゞ八分を用立可申哉と思召候よし御卓論
と奉存候然る所此世上の樣子にては正氣にて候もの十分一もあるまじく覺
え候是に付孫子の危きを畏れざらしむると申に一說有之候古人未經言の論
に御座候是は追て可申上候牛渚先生御碑文之事委細奉諾候此月中は大砲打
方にて取込中に畯先生迄參り候樣出來かね候來月に入候はゞ早々罷越催促
可仕候先日唯君へ宜しく願ひ候以上

（日唯は鎌原觀水の號）

此狀認置候所嫌疑を避け候義有之拜發及延引候夫に付色々申上度事御座候

次便可申上候以上（編者曰く此狀斯る仔細にて山寺の接手せるは七月十日となれり）

〔四六二〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

嘉永六年六月二日

次第に炎暑に相成候益御佳寧被成御眠食候耶承度奉存候然ば令弟御事先便御書中にも被仰下候に付御面話にて愚意をも申思召之所をも御はなし可申存じ宅迄御出被下候樣使差出候所御出無御座候に付尚又使にても出し可申候所大砲打方前諸家樣御賴之筒等製作萬端殊の外忙劇にて延引候內去月廿日にて候と覺候令弟御申越候には又々使にても遣し急用の趣にて早速參り候樣被申越度左も無之候ては近日宅之樣子不都合に候間出向きかね候と申事故家來用隙を以其段可申越と存じ候所へ廿二日朝にて候か令弟突然と御出で昨夜宅を出で餘り夜深に成り候に付懇意のものゝ方一宿今朝參り候との事故打驚き一通り御不了簡又其被成方の御不行屆に候條を一々相咎め候所其段は一言も無之と申事に候但再び松村へ歸り候存念無之と御申切り候に付師岡氏も幸在府に有之又大木も居合せ其以前より段々內話も致し居候事故早速是へ一同參り被

諸家樣御賴之筒等製作

令弟突然と御出で

呉候樣申遣し松村の方へも私方に御當人御出候條は書中にて申越し師岡大木來會之上にて令弟御存念尙又承り共々御異見を申候て御改心之上御立戻り候歟左も無之候はゞ御國元へ御歸りに優り候義有之まじくと申所にて令弟篤と御勘辨御挨拶被成度趣に候何分急にも參るまじく存じ候に付其御勘辨の御つき候迄私方に御出候樣申此節私方に御逗留に御座候手狹に付一と間上げ置き候樣にも相成兼且其不自由なる事に御懲り候も可宜と考へ候に付諸生一同塾に差置き近思錄等心身の御爲に成り候もの御熟讀候樣申候事に御座候尤も食事の節は母と一同被成候樣致し置候早速右之次第をも申進度候所一昨々日も昨日も打續大砲打方にて晝夜不得寸隙乍存延引仕候今日晝立にて師岡氏歸藩被申候よしに付先此段得貴意候義に御座候委細は同氏御話可被申候へば夫に讓り候て巨細には認め不申候尙後便可得貴意候北堂君何かと嘸御案事可被思召候乍憚宜しく御申上可被下候署威折角御厭可被成候以上

大砲打方にて晝夜不得寸隙

六月二日　　修　理

愼　藏　樣

〔四六二〕　母に上る

東京市　久保來復氏藏

嘉永六年六月五日

渡來の船ども一見候所

日々あつき事に御座候へども何の御さはりもいらせられず候か私事あまりあまりたつしやにて昨晩四時すぎ浦賀までちやく致し候まゝ御安心願上候今朝はやく起き候て山に登り渡來の船ども一見候所かねてきゝ候通大そうなるものに御座候つがふ四そうの所二そうはじよう氣せんと申にて火の力にて風にさかひ候てもさしつかひなく走り候船に御座候一昨日七ッ時前の頃松わと申邊に帆かげ見ゆるなど沙汰し候うち矢の如くにみなと内に入り來り候由今朝見候所はくがより十七八町もへだたり候處に一艘有之候是はコルヘットと申舶にて大筒左右に二拾四挺ともに二挺つがふ廿六挺そなへ候船に御座候其並に六七町へだてじようき船有之又六七町へだてゝじよう氣船又六七町はなれて初めの如き船有之候じよう氣船はいづれも殊に大きく御座候其回りを此方の御用船帆をかけて通り候を見候に丁度大たらひの下にはまぐり貝御座候樣見え申候とても彼れと爭ひ候には私などのかねて申居候通り此方にても大船

を彼れと同様にこしらへ大筒をも同じく澤山に作り候上ならでは出來不申候此度も大に見あなどり候て小ぶね十五六そうおろし一そうに十人ばかり乘り候も有之五六人なるも有之港口諸所のりあるき縄を下げ海の深淺をはかりあますさへ浦賀の燈明臺と申邊へ上陸いたし悠々と見物いたし候てい傍若無人の様子と申事に御座候然るを奉行はじめおそれられ候か與力同心もこはがり候か夫が上の御趣意に候か誰一人とがめ候ものもなく唯見ぬふりしてさし置き候との事扨々遺恨無此上事に御座候一昨日四艘來り候が尙跡四艘參り候はんと申事に候由先至て穏なる取扱ひに候へば此度は何事も有之まじく候此表御用船の外一切船留と申事に候が其内さしつかひ出來可申候公邊の御挨拶も早速には濟申まじくいづれ盆前に方つき候へばよろしなど此土地のものも申居候私も又出候とも此度は一兩日中罷歸り候心得に御座候乍去今少しせんさく仕度事有之候間大凡わかり候事ども認め御屋敷へ差出し候爲め附人の内一人さし戻し候まゝ大略の事御きかせ申上候めで度かしく

六月五日　　　　修理

御母様

(四六三)　望月主水に贈る

長野市　小林暢氏藏

嘉永六年六月六日

日々毒熱に御座候處倍御萬祥可被爲渡奉恭慶候偖一昨日拜辭の後直樣歸宅仕拜借の御書物等取調べ賢之助安世へ看護申付置き御借人參著候を待ちつけ直に出立大森まで罷越し夫より舟にて金澤に渡り可申存意にて舟を倩ひ候所折節風の模樣あしく候に付舟出しかね候と申事故又金川迄罷越し漸一艘やとひ得候て乘出し候所南風強く波荒く候て舟子共力を極め働き候へども舟進まず金澤に至り候はぬ前日暮に相成候然る所風少しく西に轉じ帆を張り走り候模樣に相成候に付舟子に申談じ大津迄(金澤より三里餘)走らせ候舟中より猿島を望み候に此島の砲臺は既に撤せられ候と承候所此度は備を被置候事と相見え砲臺とおぼしき所に火の光多く見え候大津の陣屋濱手にも同じく提灯の光數多く見え候大津にて岸に登り夫より山を越し十八町にして浦賀に御座候所此度は御合印御座候提灯持參仕らざる方可然と相考へ態々用意仕らず候處此夜けしか

鴨居と中邊に錨を卸し

都合四艘…殊の外驕傲の體にて

身分輕きもの一切登る事を許さず

らず明かに候て山路の高低石の多少まで盡くよく分り歩行少しも無差遣浦賀に著仕候刻限は夜四ッ半ばかりにて御座候ひきかねて知る者に御座候故小泉屋と申に止宿先あるじを呼出し昨日異船渡來の樣子承候に蒸氣船の神速なる事言語に斷えたる由に御座候松輪邊に異船の帆影見え候と申やいなやまたゝく内矢を射候が如く走り來り彦根侯御持の臺場よりも乘留め候心得にて乘出し候よしの所皆及び候こと能はず第一番に參り候船浦賀港を過ぎ鴨居と中邊に錨を卸し續て蒸氣船に無之船一艘入來る是は先に立ち候蒸氣船の引き來り候ものゝ樣被思候よしに御座候其跡引續き蒸氣船一艘蒸氣船に無之船一艘都合四艘浦賀港より江戸の方へ竪に並べ置き候事のよし是迄渡來の船と總て品替り候て乘組居候者共も殊の外驕傲の體にて是までは異船渡來の度ごと與力同心乘入見分する事舊例に候處此度は同心與力の類身分輕きもの一切登る事を許さず奉行に候はゞ登せ可申との事にて其船の側へ參り候をも手まねにて去らしめ候由夫を強て近寄り候へば鐵砲を出し打放し候べき勢に御座候故一番船に向ひ候與力は其儘引返し又彦根侯御人數の内にても乘寄せ強て登らん

と致し候所空砲には可有之候得ども二發打出し候に付是も無致方且は怖れ候て引返し候由の話に御座候いづれの國にやと尋ね候所宿屋亭主には不相分候故其儘休息仕翌五日早晨に起出で東浦賀より山に登り鴨居と申所の東に向ひ候所に至り一見仕候所浦賀港口の東南十六七町の所に大砲廿八門備へ候洋名コルヘットと申べき船一艘有之其東北四町程隔て候所に一艘是は所謂蒸氣船にて其形コルヘットに比し候へば殊に大にして比例し候に五と三との如くに御座候コルヘットも大略測量仕候に其長サ二十四五間可有之候蒸氣船は四十間ばかりと被存候其東北に同じく蒸氣船一艘是は先のに比し候へば稍大に見え候いづれも船腹に車輪を備へ候其輪の大サ徑六七間可有之候蒸氣を生じ候爲の筒と見え候が徑五尺ばかりにして舷より三間餘高く突出し候もの有之候大砲の數は車輪の前に四門後に貳門是は砲窓を開き有之候故よく分り申候其上に六門是は砲窓を閉ぢ有之候故かすかに見え候左候へば是も二十四門を備へ候と被存候夫より同じく東北に當り砲廿八門備のコルヘット一艘船と船との間いづれも四町ばかり並よく隔て左右にコルヘット中に蒸氣船二艘を置き

與力中島三郎介

候樣子船の結構よりしていかにもきらびやかなる事に御座候乘組の人數は四艘合せて二千人ばかり船印は

如此にして角の黑白は俗に申一抹と申ものの樣に見え候持參仕候遠鏡格別宜しからず候間委しき事はわかり不申尙精しくは後便可申上候夫より旅宿迄罷歸り追々浦賀役場の手筋へ掛り異船來著の始末承り候に皆此度は事に成り可申と覺悟を極め居候樣子に御座候與力中島三郎介と申者和蘭通事堀達之助一同其主船とおぼしき船に（浦賀の方より第三　江戸の方より第二）乘寄せ拒み候を强て乘登り何れの國より何の用ありて來りしやを問ひ候所北アメリカの内ワシントンのよしを答へさて此度の用向は江戸へ直に達し可申候へば各の厄介に成り不申通事も召連れ候故入用無之と申放し候よし其通辯致し候ものは定めて通事なるべく候が本邦語を操り候樣子長崎人などの如き音聲と申事に候其外辮髮の人も乘組居候よし淸人と被思候是は漢文往復の用に供へ候爲の料見にて可有御座候昨年來公邊より此所に御達し被置候は和蘭本國の書簡にてだに向後は御取上げ無之封のまゝ御返しに可相成御定めに候へば異國の文書類總じて取上げ候事無之樣にとの事に候故此度の異船をも渠等

與力香山榮左衞門…早船にて出府候趣

奉行戸田殿にも…寺にて自害可被申とて

浦賀商家にても銘々逃仕度いたし

本邦はやがて四分五裂

申候如く内海へ入れ候ては濟み不申又齎し來り候國書をも浦賀奉行へ直渡しに致し候事に候はゞ左樣も可致と申候よしの所兼ての御達しも御座候上奉行直受取等の事體容易ならず候に付一昨夜與力香山榮左衞門其伺の爲早舟にて出府候趣に御座候夷人申候は若此度國書受取らず候など申事に候はゞ屹と亂妨致し候て引取可申と打出し申候よし其沙汰に有之候故下曾禰殿なども家來兩人非常の心得を以て參著候樣被申送又奉行戸田殿にもいづれ事に可相成其時夷人の手にかゝり候も無念の事に候間寺にて自害可被申とて寺の掃除を被申付候よしに候寺へ參られ候はんよりは兎ても事の屆かざるを被見候はゞ奉行屋敷に火をかけ自殺せられ候はん方當り可申と愚意には存じ申候浦賀商家にても銘々逃仕度いたし長持樣のもの其外家財持運び候なども往々に有之候夷船も尙四艘參り可申と夷人ども申候よしに相聞え候いづれにも此度は容易に事濟み申まじく被相考候渠の申に任せ願ひ筋御許容候義御座候はゞ夫を例として其他の國よりも兵威を盛にして請ふ所可有之夫をも〳〵御許容御座候はゞ本邦はやがて四分五裂可仕候其事目前に有之事に候へばよも此度御許容

は有之まじく去りとて軍艦を四艘も八艘も致用意渡來の上品次第は亂妨も致し候はんと打出し申程に候へば御許容無之候はゞ唯は得歸り申間敷畢竟此度樣の事出來り候は全く眞の御武備無之近年江戸近海新規御臺場等御取立御座候へどもかねても申上候通一つとして法に叶ひ異舶の防禦に聢と成候もの無之事を辨へ候ものよりは一見して其伎倆の程を知られ候義に御座候故の事にも可有之且大船も無之砲道も極めて疎く候と見込候て仕候事と被存候へば如何樣の亂妨に及び候はんも難計浦賀の地等の亂妨は如何程の事にても高の知れたる事に候へども自然内海に乘入御膝元へ一發も彈丸を放ち候事御座候はば大變申ばかりも無之候後患に御貪著無之此度の義御許容御座候か又戰鬪の出來り候をも御掛念候迄も御拒絕御座候かは廟堂の御計らひにて私共了簡に及び候事に無御座候へどもいづれの成行きに相成るべきか難計候御人數配御手充第一に萬一の節御前樣方御立退の御用意迄も被爲在候樣奉存候夫等一々御手配御座候て御不用に相成候へば無此上恐悅の義と奉存候何分も御手違無御座候樣奉祈上候此段草々申上候以上

御人數配御手充第一

六月廿六日(廿は誤記か)　啓　頓首

致堂老臺　執事

猶々此紙認居候内承候に明五日(五日は七日の誤か)迄國書受取可申や否挨拶無之候はゞ大砲を以打拂可申と申送り候よし奉行屋敷より慥に承候右の樣子にては私義も早速罷歸り可申奉存候以上

〔四六四〕　馬場彌三郎一場茂右衞門に贈る

嘉永六年六月廿九日

御手紙致拜見候御國家御一大事の義に付御目通を以て奉申上度但し私事は人に悅ばれざる者の義に付御拂にて御逢被成候ては或はその忌疑の際より御君德の御煩と相成候樣の義出來り候はんも難計且御國家の御大事と奉存候義に付御用席列座御側役御目付等内外御役人迄も其席に御差置其上にて被召出申上候條々御聽被成下置候樣奉願度と申義御側御納戶を以て願ひ候心得にて當番之御納戶呼出し右口上手扣差出し候所此義は當月廿三日修理罷出御目通願候ても不被遊御逢候間其段相斷候樣上書等致し候ても猥に御取次不致候樣望

月主水殿被仰渡候旨長谷川深美達し有之候に付御取次出來かね候趣申聞候に付無餘岐御役方へ差出し候義に御座候然る處伊野右衞門殿云々の次第に付御取次御出來かね被成候趣右御重役へ差出し候て宜しき筋に候へば私共よりは固より御役方の手を經ずして御重役衆へ差出し宜敷義に御座候處段々御內話をも申候通りの次第にて御重役へ差出しかね候に付畢竟御役方へ差出し御取次奉願候義に御座候右を只今の御重役等へ被差出候は御手達の次第と奉存候尙其御手達の所御組戾し被成右別紙御取次被下可然道理と奉存候不容易御大事を申上候はんと申候に御側向の方も壅蔽有之御役方にても其通りにては御國家は暗黑世界と成り可申嘆はしき事に奉存候能々御勘辨此所は御役方御眞面目の御處置被成被下候樣奉仰候御國家の御一大事と申候を壅蔽し候樣にと其黨の重役衆被申候へばとて其通りに被成候ては御忠義の御筋合とは不奉存候何分も御國家之御爲厚く御勘辨被下度奉存候依て別紙尙又御手へ差上申候萬々可然奉賴候以上

六月廿九日　　　　　　　　　　　　　　啓　　拜

馬場彌三郎様

一場茂右衛門様

〔四六五〕小寺常之助に贈る

嘉永六年六月廿九日（小寺は大垣藩士）

過日は御恵然被下辱奉多謝候其以來度々御使書も被下候所折惡くいつも不在多忙不得寸隙例之御問目拜答も致延引慙悚之至奉存候又々御墜簡拜接先以此毒熱にも彌御休安之條慰沃之劇奉存候さて御問目をも一覽候所此一事は大議論有之候事にて一時紙筆のよく盡す所に無之候此春大森村にて某侯の洋砲演習をば御覽候て寫肖を免れずと御申候が貴兄その眞法を御存知にて寫肖を免れずと御申候義にや全體の御議論の趣にては西洋礮兵之略一向御研究無之樣被存候その眞をも御存知無御座候ての御品評は乍憚いらぬものと奉存候唯砲を不可闕の器と思召候段は實に不磨の事たるべく候扨我擧國此術を熟するも畢竟彼は師我は弟子いかでかよく彼れを制する事を得んとの御論は乍慮外御料見違と存候荀子の出藍の譬は思召出られず候歟既に此度渡來致候カリホル

我擧國此術を熟するも畢竟彼は師我は弟子いかでかよく彼れを制す

る事を得んとの御論は乍慮外御料見違と存候

ニア人浦賀へ上陸の様子を門人共親く近傍にて見ての品評に不佞之致世話候中津藩調練人數の内其上等なるはカリホルニア人の總體よりは稍優り候との事に御座候左候へば果して荀子も人を欺かずと存候事に御座候ロシアの先主ペートルが和蘭人を師として遂に和蘭に劣らず北アメリカ人英吉利を師として終に英吉利に勝ち候類は御承知無之候義や兎に角愚意には夷の術を以て夷を防ぐより外無之と存候彼れに大艦あらば我も亦た大艦を作るべし彼に巨砲あらば我も亦巨砲を造るべし總てかの黄帝を師とし候に若くなしと存じ申候

彼を用ひ彼を制せられ候事兵法の至賾と存候

古昔兵器を造り初め候は蚩尤のよしに御座候所黄帝其干戈を習用し遂にこれを涿鹿の野に擒殺せられ候黄帝いかに聖德御座候とも敵の兵器を用ひ候に空手を以ては克つべき術之なく候故に其敵の用ふる兵器を用ひ夫を以て遂に勝利を得られ候事と被存候是則ち聖智の致す所にして彼を用ひ彼を制せられ候事兵法の至賾と存候去れば今の世に至り候迄も黄帝を以て兵家の祖と崇め尊び候事と存候是不佞持論の大略にて御座候宜しく御采覧可被下候

軍裝考の事

一軍裝考の事此間より懸御目候心得にて座右を索し候所見え不申依てかねて

寫し置候門人の方へ申遣し取寄其内可入貴覽候先は御使餘り待せ氣の毒に付是にて筆を擱き申候餘留面賦

六月二十九日　　啓復

小寺契兄足下

〔四六六〕望月主水に贈る　　埴科郡西條村　中島藤四郎氏藏

嘉永六年六月卅日

別紙手扣之通奉願度奉存候今日參殿を以奉願候心得之所夜前より中暑にても候歟頭痛強く乍憚打臥罷在候乍然急々奉申上度筋御座候に付書中を以て奉願候願之通御目通被仰付も被成候御樣子に御座候へば押て參殿可仕奉存候可然樣御執成之程奉賴候以上

急々奉申上度筋御座候

六月卅日

〔四六七〕望月主水に贈る

嘉永六年七月朔日

御再答拜見仕殊に驚愕の至奉存候漢土に於て聖德の主には堯舜文王を以て稱

此度被及御絶交候以前は

首とし候所堯舜の朝には敢諫の皷誹謗の木を被置文王の代には蒭蕘のもの迄に問ひ詢られ候事と承候堯舜文王聖人にて才德兼備まし〱候ひながら猶如此下民迄に言路の通じ候樣せられ候は天下國家の務は到て廣大に候故に上に明君ありて其事を聽斷せられ下に賢相ありて其政を謀議すと雖も人間の上には思慮の失と申もの難免又聖德の上にも善道は盡る事のなきもの故に如此心を用ひられ候事と奉存候是則聖のます〱聖なる所以にして後世政治の無此上よき手本と奉存候されば言路の通塞は君德の盛衰國家の安危に關り候とも申候と奉存候然る所御再答の次第にては所謂訑々の聲音顏色人を千里の外に拒候と申ものにて有道の世勵治の國の氣象に無之と嘆はしく奉存候周公の吐哺握髮の事抔をば如何御心得被成候義にや御國家上の義は乍不肖自分共などと御廬喝御座候ても決して御尤と不奉存候其詮は此度被及御絶交候以前は御國家上の御事にも何かと御垂問も有之其時々の御內書も澤山に所持仕罷在又私のみならず無學の晴山輩に迄も色々御相談御座候義はよく存知罷在候無事の時すら猶如此に御座候て此騷擾の時節に至り却てみづから御情の御口氣君

子の上にあるまじき事と奉存候夫々御役人被仰付被置候など御座候得共憚入候申條乍ら御役人に何等の人物御座候と御覧候て斯く被仰候義にや不審至極の事に奉存候御國は猶一家の如く君臣は一體に御座候故に私底閑散に罷在候ても疾痛痾癢皆その關る所に御座候に付固より心配の免るべき様も無之況や其御大事と奉存候義に於てをや私不德不才には候へども感應院様御代久々文學修業をも被仰付御役中海防御掛被蒙仰候節外夷の事情をも兼て穿鑿仕置候様別段蒙御内命候て追々西洋の原書に就き研究仕發明仕候義も御座候に付諺に申智者之千慮有一失愚者之千慮有一得にて御手前様方御聰明の御手揃にて大小御役人銘々其才能を被盡候とも亦私の愚見の夫に優り候義のあるまじきものにも無之候閒彼是今一應御勘辨別紙の次第可然御執成之程奉頼候以上

外夷の事情をも兼て穿鑿仕置候様別段蒙御内命候て

七月朔日

嘉永六年七月六日

〔四六八〕　山寺源大夫に贈る

東京市　山寺源太郎氏藏

是ゟも一書可呈と奉存候所本月十四日之御手誨拜接欣然捧讀仕候先以時下炎

厓か四艘の船に候所都下の騷擾大方ならず

熱にも彌御健寧被成御座候條沃慰之劇奉存候其事は御書中にも相見えず候が令郎御不快も追々御平善と奉察候偖今般蕃舶渡來之義に付候て段々御心配御座候趣一々御尤に奉存候國名の御考も共通にて共和政治之内ワシントンに相違無御座候御聰明今に始めず奉敬嘆候但し舶は新カリホルニヤ仕立の舶と申事に候願書之旨趣も色々世上唱へ候へども未だ的說を不承候乍去是は遠からず諸侯方へ御觸出し相成候よし風聞いたし候何分速に左樣相成候樣致し度ものに御座候御聞被及候通厓か四艘の船に候所都下の騷擾大方ならず諸侯方にも多分の御失費相立候事と奉存候誠に殘念なる事に御座候是にて大抵世上の夢も覺め候かと存じ候に中々左樣參らず益々昏亂し候類も御座候かと被存候本藩にても蕃舶滯留の砌は小弟に軍議役と申を被仰付大小銃の差引をば御任せ御座候よしに付是迄御不揃に候彈藥器械の脩治を始として御人數出の足並等も稍規律不明樣致しさせて存じ候には感應院樣御終身海防之義には被遊御苦勞此表に於ても大砲御製作有之御在所表より御取寄に相成候も御座候が畢竟如此御時節公邊の御警衛と被相成候思召と奉存候昨今諸家樣にも追々諸方御

大砲を用ひ候には先地の利を擇び候にしくなく候

固御人數被差出候樣被蒙仰候も御座候趣に候へば御默し被爲入候ても御屋敷に數門の大砲御座候もおほやけに知れわたりたる事に候へば明日にも御固場所被蒙仰候はんも難計又左なくとも異船內海に乘入自然亂妨にても始め候節は御防被蒙仰候はんは必然の義と奉存候然る所軍爭は地勢に依り候事簡要と申內大砲は別して勝地に據らず候ては其利少く候公邊にも火急の際に至り大砲多き御家は此所大砲少き御家は彼所にと申樣精密の御指揮は決して屆かせられまじく左候へば品に依り御家にても大砲難用場所へ御人數被差出候樣被爲蒙仰候はんも難計自然左樣に候節は感應院樣御終身御苦勞被遊御造立に相成候御武器もありてなきが如くに可有之其時又地の利不利を辨へず大砲など引出し誤て賊に奪れ賊より其筒にて打立られ候等の間違萬に一ッも御座候ては利を失ひ候のみに無之天下後世御家の御瑕瑾不過之依て大砲を用ひ候には先地の利を擇び候にしくなく候感應院樣思召を被爲繼候にも公邊へ御忠節被爲在候にも此御方略無御座候ては難叶候私かねて料見仕候に市中を燒拂ひ其形勢に從ひ備を設け候はゞ御府內によき場所幾ヶ所も可有之候へども左なく

御殿山近邊可然

候時は御府内に大砲を用ひ可申場所無之御府内に尤も近く候て大砲を用ふべき所を撰ぶの外無御座候かねて御府内に最近くして差當り大砲を備へ可申場所御殿山近邊可然と相考へ異船乘入候節先その衝く所に當り候と雖も却て防ぐに便よく候此場所を此節御取定め御固被蒙仰度と此節御內願御座候時は第一には感應院樣へ被爲對御誠忠之御遺志を被爲繼候御義にて御孝道無此上公儀に被爲對候ては夷賊衝突之場所御受持之次第にて御忠節たるべく又御家中の面々家國天下の爲に其身を致し候は勿論の事に候へども無謀にして士卒の肝腦を地に塗り候はんは傷ましき義に候所私申上候邊に御座候へば砲を放ち候にも敵砲を避けながら放發候手談も出來可申又御上御出馬など御座候ても右場所に候へば洋名ボムフレイとて敵のボムベンにも危き事無之小屋の製法有之候夫を早速作り候にも便宜しく其內へ御上を奉入候へばけく御殿に被爲渡候より御心易く御座候はんと奉存候是善美を盡し候萬全の策と可申と理を盡して申候所望月大夫も至極の事と被納候に付しからば私を御內使者として阿部樣へ也牧野樣へ也可被差遣尤も御留守同道にて表向の御口上は御留守中

述樞要の御口上は私受取り其機に隨ひ申述候はんと申候所是亦伺之上可然事に極まり申候直樣阿部樣へと申事にて罷出候所もはや御出仕の後に付御口上申置き又御退出後に罷出候然る所御內願之筋御尤に思召早速御評議可有御座候に付御口上書認差出し候樣御座候故則左の通致草案候

亡祖父信濃守…………（以下第二卷上書一二六頁一二七頁揭載の文と同樣につき省略す）

御留守は津田にて候所草案之表餘り立派過ぎ候と申論にて高田と申談じ少しく禁句を省き候樣子に御座候ひき阿部樣ゟも時宜次第御人數出可被仰渡と申事に御座候御人數調の事も是迄衆議區々にて一決致しかね候よしの所此度大小銃の臨機の義は御任せ可被成と申に付御人數繰出し候節の少し前後に相成候位は何の差支も無之候に付總て高田が調べに從ひ無餘岐所を一二ヶ所改め候のみ異論を出し不申候に付事ふしなく調もとゝのひ候義に御座候但御馬場に御人數を集め御屋敷內を一と囘り拍子木を太鼓に替へ打せ候てあるかせ候所一向不揃なる事にてばら〳〵と成り見苦しき事に御座候故其段申候所さら

（御近習表御番方合せて三十人入門有之）

（（家老鎌原伊野右衞門、郡奉行長谷川深美）海防御人數）

ば私に整へ見候様にと申事にて其節は御上も御馬見所へ被爲出望月大夫も御稽古場にて見物に御座候其節私料見を以て西洋隊伍の法を用ひ關節を所々に設け如此にして足を起し如此にして足を止ると申様反覆敎示候てさて申候は斯く法を定め候上は是則御軍法に候御軍法に背き候ては難濟候開銘々心付られ候へと高聲に號はり候て自身押し太鼓を打ち御人數を引同し候於是步法總て秩然と致し初の紀律なきに比し候へば大に觀を革め候ひき御上之思召にも叶ひ御目付始め如此無之候ては相成まじと申沙汰し候と承候砲術も小弟門弟に無之分は殘らず入門指南を受け候様御用番被仰渡小弟へも取立の義被仰渡御近習表御番方合せて三十人入門有之御徒士御足輕も追々入門の沙汰有之候て此度の儘暫續き候はゞ御兵制も殆ど一變し可申と暗に存じ罷在候所其表に於ては御重役衆御役人にも何とこの大變を被心得候や此方御用番より申參り候御人數をも不被差出剩へ公方様御本丸御籠城に候はゞ御屋敷の御前様方御本丸へ可被爲入左候へば御人數出に及ばず等の怪論申來り承り候て興がり候內鎌原に深美出府にて如何なる子細にや廿四日海防御人數臨時出役軍議役御

臨時出役軍議役御免被仰付

免被仰付砲術教授の義も御用と被仰渡候方は不用に心得候樣にとの義に御座候夫も宜しく候所如何なる筋にや望月大夫も暫く小弟と往來を停め申度との事深美勸めの趣慥に其證を得申候其間筆帋に盡しかね候事有之候
御國家の御爲實に容易ならざる義と存じ廿九日左之通口上手扣を認め御殿へ罷出候

御國家之御大事と奉存候義御座候に付御目通を以て奉申上度奉存候但し私義は多く人に悅ばれざる者に付御拂にて御逢等被仰付候ては其忌疑の間より或は御君德の御煩と相成候樣の義出來り候はんも難計且御國家の御大事と奉存候義に付御用席列座御側役御目付等內外大小御役人其御席に被差置其上にて被召出私申上候條々御聽被成下候樣奉願候斯く奉願候義餘り仰山なる義と思召も可有御座候へども忌疑生暗鬼なども申候へば何分も光明正大之思召を以て左樣被成下置候樣奉願上候

先づ御目付役所へ參りこの下案を示し今日は此心得にて登殿候間品に依り御厄介に可相成と申候所當番は馬場にて委細承知と申事に候ひき夫より御次へ

參り御側御納戶を呼出し候所當番は中保に候ひき則ち此手扣を出し候て宜しく賴入候と申候所中保當惑の體にて何とも挨拶不致急ぎ座を立ちやがて役所の方より出來り候不思議なる擧動と存じ候內懷中より日記を出し廿三日の所を示し候て此次第に候故早速の義に不參いづれ同役とも評議候て挨拶可致と申候其日記を覽候へば左之條有之候

佐久間脩理罷出御目通願候而茂不被遊御逢候間其段相斷り候樣上書等致し候ても猥に御取次不被致候樣右之趣望月主水殿被仰渡候樣深美殿より達有之候

右之條をば中保に賴み後に寫し取りもらひ候

小弟これを一覽候てさて中保に申候は是等の事可有之と存じ候て常にも無之手扣を持參致し候私は狐むじなの類に無之候故人の多き所をばこはがり不申宜しく御評議可被下と申候て表方詰所に半時ばかり扣へ居候所中保逢度と申事にて參り候へば手扣の次第にても御取次出來かね候と申同役評議に候へば不及力と申候に付當番御側役を呼出し申談じ候所竹內平也是も同樣の挨拶に付

此度の義は御重役に壅蔽の筋有之

御目付役所へ戻り其次第を申候て此上は御役方を頼み候の外無之何分御國家の御爲可然頼み候と申候て手扣を相渡し候然る所御目付の方へも鎌原手を囘し候て脩理より何ぞ差出し候義候はゞ被伺候様にと申事のよし御目付申候には御役方には御役方の御規定御座候て右様の事伺候義無之と申候所達て伺候様にと有之候に付伺候所其儘差戻し候様にとの事に付無餘岐とて右手扣返し候に付小弟申候には御重役へかゝり差出し宜しきものに候へば私共貴様方には拘り不申直に御重役へ差出し候此度の義は御重役に壅蔽の筋有之其手より難申出候故に最初より御役方へ及申談候右様壅蔽の筋等は御役方にて直に御聽に被入候義を心得候故の事に候然るを其壅蔽の次第も始めより承知にて右様の不取計御座候事不得其意夫にては御上の御目代にては無之と存候趣申候所御目付も一言もなしと申事にて候ひき依て此手扣を被戻候には手帋にて戻され候様申候所則左の通文通にて候ひき

御目通御願之儀に付別帋御預申候所伊野右衞門殿より右は差戻し候様御差圖に付御取次致しかね候間別帋致返却候右様御承知可被下候此段得御意候

以上

六月廿九日

馬場彌三郎

一場茂右衞門

賤名様

猶後日の爲と存じ望月充名にて一通差出し候

別帋手扣之通奉願度奉存候今日參殿を以て奉賴候心得の所夜前より中暑にても候歟頭痛强く乍憚打臥罷在候所急に申上度筋御座候に付書中を以て奉願候願之通御目通被仰付被成下候御様子に候へば押て參殿可仕奉存候可然様御執成之程奉賴候以上

六月卅日

然る所難相成と申返事來り候に付左之通申越候

御國家の御大事と奉存候義有之御目通奉願度則別紙手扣を以て申上候處御大事と其方は被見込候ても御目通被仰付候儀は難相成候其段相心得候様奉得其意候然る所別紙の次第を以御目通奉願被仰付否は御上より可被仰出御

事と奉存候御手前様方ゟ御國家御大事と見込候ても御目付被仰付候義難相成と被仰聞候ては全く御上之御大權を御手前様方御自由に被成候と相聞え申候今一應御勘辨被仰下候様仕度奉存候別帋手扣之趣は御執成被成下かね候と申義に御座候歟又御目通被仰付候義は御手前様方にて難相成と申義に御座候歟此所承知仕度奉存候御批答可被成下候

同日

右之返書左之通

令披見候頻に御國家御大事など被申立候へども御國家上之義は乍不肖自分共初夫々御役人被仰付置候事に付其方等格別心配には不及事に付書面之趣難及挨拶候依而差戻し申候以上

同日

去りとはと存じ又々左之通申遣し候
（此文書簡（四六七）と同文に付省略す）

右之返事

令披見候昨日申越候次第に付今日迚も同樣の事其上自分との挨拶柄旣往の義を以當今へ引當被申聞候など勿論不當之儀旁別段挨拶には難及候此上何ヶ度可申聞候とも此一條に於ては不及挨拶書面等も其儘差戾可申候勿論此度も別帋差戾申候以上

同日

至是彌八方塞りと相成申候此等の義御上には決して御存じ有御座まじく別して嘆はしく奉存候然る所猶又昨朝四時御用奉書到來罷出候所左之通被仰付候其方內願之通江府住居被仰付置候處御在所へ罷歸候樣被仰付候用意果敢取早速可有出立候

御在所へ罷歸候樣被仰付候

七月五日

私一身に取り候ては此節此被仰付殊に難有仕合奉存候今般騷擾中ももはや今日は老母に再會候も容易なるまじくなど存じ出宅候事兩度か有之候然るに其御地に退去候へば老母養老にも都合宜しくと大悅仕候事に御座候但國事可憂と存じ候ばかりに御座候如何被思召候や此度は非常の際に御座候に付御人數

出候と申節には盟臺には必ず特命にて御出掛御座候はんなど竊に企望罷在候所御書中空谷之御嘆息不及是非奉存候前條の義も盟臺の外報聞可仕もの無御座是亦浩歎之至御座候感應院樣被爲捐群臣候て僅か一歳と申に國事此始末に御座候此汎濫を扱ひ候御一策は無御座候歟是も盟臺を望み候外無御座候身雖在山林心尚向魏闕候者且與に共に可談もの正誼君の外有御座まじく候御勘考之上密に此一紙御携大手前へ御出で此顚末御話し置被下度後來自ら可有用候（大手前は恩田賴母正誼を指す、大手前に恩田邸あり）先は拜報旁如此に御座候殘炎不相替烈しく候千萬爲國御保愛奉祈候以上

七月六日　大星拜覆

懼堂盟臺臺下

猶々多忙中追々認繼ぎ不免亂雜候宜しく御焔覽可被成下候以上

（嘉永六年七月廿三日）

〔四六九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

此品到來に任せ致進覽候御哂存被成可被下候以上

竹村氏出府にて御手簡拜接此秋暑之時節彌御休適之條承之欣慰之至奉存候被

令弟御事にも誠に差困申候

寄思召何よりの品御投恵被下乍例御厚情千萬奉謝候偖令弟御事にも誠に差困申候毎々大木とも申談じ又竹村殿出府以後は一同相談も致し御同人より委細書中にて御掛合申され候筈に御座候夫にても御承知可有御座候が先頃其御地へ出向き候松屋親類の者申候所は全く虚飾にて何か巧みのあるべき事と被察候令弟の御所存には決して彼方へ御立歸りは無之御決心の樣子に御座候依て離縁に相成候上は早速其御地へ御還り候樣に相勸め候所兎に角其所六ヶしく困り候事に御座候折角私方にも御出候事に付御改心だに被成候へば相應之士大夫の家にも御方付候樣致し度既に先日異船騷擾の砌には大砲の打方なども敎へ申候樣致し候所遂私方をも大木方へ參り候と御欺き其儘御歸り無之淺草邊御私昵の婦人の方に御出候よし大木を以て度々御歸り候樣申越候へども更に御出無之此節に至り候ては實當惑之次第に御座候竹村殿よりも委細被申遣候由に候が如何取計らひ可然や御存念之所被仰下候樣致し度候最初より折角御囑託も受け罷在候て其甲斐も無之愧入候義に御座候男女之私情は他事とも違ひ自心より猛省悔悟候の外は外人より彼是申候も六ヶしきが多き樣存じ申

男女の私情は他事とも違ひ

候先いづれにも一と先御歸省候樣被仰越候て其御地へ御引寄せの上能々御教訓御座候樣所祈に御座候御母樣御一同御折檻候はゞ夫は一番響き可申と相考（御母樣御一同御折檻）へ候先は貴報旁如此に御座候秋熱折角御保重可被成候以上

七月念三　修理

愼藏樣

〔四七〇〕　山寺源大夫に贈る

秋冷之時節倍御休安に御履用被成御座候歟偖過日は縷々御長箋申上候事共無阻撓相達し候趣早速に蒙仰乍毎度御厚意之程萬々難有奉降心候其後も種々奇怪なる事共有之其儘にも難致監察僚友迄申達し置候義も御座候扠々わからぬ人物ばかりに御座候萬一戎事にても差起り候はゞ如何致し候もの歟氣遣はれ候事のみに御座候尊意には何と被思召候哉此表の官邊御模樣なども甚葵憂すべき事有之候是等形勢は筆にも盡しかね候義又百聞も一見にはしかずと申事も候へば御療用とか何とか御申立一ト先御出府御座候ては如何や此節水戶藤

（嘉永六年八月十八日）

（萬一戎事にても差起り候はゞ如何致し候もの歟）

（藤田東湖戶田忠太夫）

田戶田なども出府に候唯御自國のみならず本邦全國の與り候も衰へ候も此時節に御座候と被考候間實に容易ならざる機會に就き此段申上候よく御刮目御自他を御覽候へ天下英雄幾人有之候半眞に御奮發の秋と奉存候間御出府の義奉勸候速に御勇決被爲在候樣奉望候多々申上度事のみに御座候得共紙筆のよく盡す所に無御座候まゝ過日御細答被成下候拜謝旁喫緊の一事申上候千萬御心畫御座候樣奉翹企候此品乍粗末有合候に任せ呈上仕候御莞收可被成下候以上

八月十八日　　　　　啓　再拜

懼堂老盟臺　席閒

猶々令郎御不快其後如何御樣子委しく承度奉存候時候の替り目御保護に不可過と奉存候以上

（嘉永六年八月廿五日）

〔四七一〕　横田甚五左衞門竹内八十五郎に贈る

本月四日之御內書來達拜見仕候先以倍御佳勝之條奉慰傾想候然ば洋船來著此

表一方ならざる騷動に及び候趣追々御傳聞御忼慨被成候よし御尤に奉存候右に付云々の御内命委細承知仕既に此程川路殿へ拜話之節及其事候義に御座候同所にて承候へば公邊にても其思召有之新潟より三國近邊迄引上げ夫より十四五里馬牛にて運び夫より戸根川の上へ出し可申通路を開かれ候はんとて此節御勘定所より見分の御役人出居候との事に御座候平日は上り船の品は駄賃も格別廉にも付き不申候て下り船には其土地のもの易〳〵と下し候義に付土地の品高直に成り候等の弊を免かれず右故愚意には兼てより格別ふさはしき事に存じ不申候へども此時節に至り候ては一國の小不利天下の便利に替へ難く依て此義川路殿へも申陳べ候事に御座候則ち水府老公歟福山閣老より御一聲被下候樣にと申所一計策の先を開き候義に御座候川路殿にも川運の義いかにも可然事と被申候福山侯の方にも手短に一道有之候開是へも愚意の分に致し話し置候義に御座候其内いづれにか相成可申と奉存候先左樣御承知可被下候偖小弟義にも色々御配慮を蒙り難有奉多謝候然る所すでに中々にかけぬればこそ照る月の光みちぬる夜半も有けれ

と存じ候て毀譽得喪にて心を動かし候事はまぬかれ候まゝ幸に御放念被下度候尚好音の模樣も相分り候はゞ申上候樣可仕候多忙中早々如此に御座候時下追々秋涼千萬御保愛奉祈候以上

八月廿五日　　修理

甚五左衞門樣

八十五郎樣

〔四七二〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

嘉永六年八月廿五日

令弟御事

過激の御取扱は然るべからず

次第に秋涼相成候倍御揃御佳勝に御座候歟承度奉存候偖令弟御事も過日も得貴意候通差困候義に御座候松屋の方御離縁候所は如何被成候御心組にや其御地へ出向き候親類のもの申候口上にはうらはらの違にて兎ても御立戻り候思食は無之只々其婦人と一所に御成候所の外天地開御志願無之と被相察候誠に氣の毒なる事に候へども此節の場何分外より手をつけられ不申候其御方よりも過激の御取扱は然るべからず何分も徐々に御悔悟御座候樣致し度ものに御

座候市兵衞も近日に出府候由に竹村にて話御座候が如何や愚意には松屋の方も市兵衞出向き候はゞ夫に喰ひつきけくやかましき事等も出來り可申歟又令弟の御上とても此節御悔悟の無之所にては市兵衞罷越し候とも致し方も有之まじく被存候左候はゞ離緣丈の所は市兵衞參り候迄も無之僕よりかけ合ひ候て事濟み可申事と存候夫等は被仰下次第如何とも取計らひ可申候令弟の御事には嘸々御母樣も御心配に可有御座と奉察候御序に宜しく奉希候其後暫御便も無之候に付今夕高田氏出立と承り此紙相認め候松屋の方も餘り延々に相成候てもいなものと存候に付如此に御座候尙御勘辨可被仰下候以上

仲秋念五　修　理

愼　藏　兄

尙々時氣折かく御厭ひ可被成候此一品加州表より到來候に任せ御目にかけ候御咲留可被下候以上

〔四七三〕　山寺源大夫に贈る

嘉永六年九月八日

歸山之義も段々御配慮被成下候所又々此表に罷在候事に相成候

（三晴は三村晴山）

中秋之華簡に問對書之首編御附し被遣候所けく御卷末より延達致し候乍去開達なく落手仕候義に御座候先以益御休安之御容子□慰之劇奉存候歸山之義も段々御配慮被成下候所又々此表に罷在候事に相成候義御怡被仰下厚誼之至感銘無罄奉存候但當今天下之形勢を察し候に行止の利害得失は何れとも難申乍然拙詩にも申述候通天意任せと存候義に御座候一方ならず御深切に蒙仰候條老母へも申聞せ候所深く難有がり宜しく御禮申上度申出候其親に薄く其師に薄きものゝ事被仰下小弟歸山之事抔は不承服之樣子に申候よし此其奸邪たる所以と存候既に三晴の手より謀略を以て奪ひ候望月が內書之內にて此者主謀にて望月と小生との間を離間候事能く分り申候又御側御納戶日記にて上との御間を離間候も此者の仕業なる事明白の事に候右兩條を以てトし候に歸山之命の下り候も此者の同謀なる事は火を見るが如くと存じ申候但輕忽淺慮にて意外之事出來り夫等の密謀を成し候事不都合に相成候故又其表へ參り盟臺等に拜謁候へば厭然として其不善を掩ひ候事と被存候望月も海防之義御書下を以て被仰出候御趣意相守候に就ては小弟と致往來候ては嫌疑も有之候に付往

來を絶ち申度と申事三晴を以て斷有之候故小弟三晴へ申には外之にして公儀へ御忠節內之にして先公へ御孝道且萬一之事有之候ても猥りに御人數を不被失候等小弟愚蒙の建白には候へ共堅看横看殘る所も無之事と存じ候所其方略はけく御趣意に相觸れ此江戸立始り候以來遂に無之大變にても御人數被差出候樣此表より申參り候に公方樣御本丸御籠城に候はゞ御人數不差出等の不忠不智不義之次第結句御趣意に叶ひ候と申樣には御在所の面々御咎等も無之剩へ小弟をば軍議役御免被仰付猶小弟と往來候ては嫌疑も候とて絶交等の斷近頃珍事にて候定て貴君迄申來り候內書可有之候へば夫を見せ賜り候樣申候所けつして見せ吳候なと申賴故見せ難しと三晴堅く拒み候に付是も緣邊などに引かれ候かとも察し又存外風並を見る男故望月などにあしく思はれぬ樣などの考も有之候かと存じ深く議論にも及ばず謀計を設けて其書を奪ひ一覽候所以て開いたる事どもにて全く伊野右衞門深美謀を合せ御書下と申ものを上に奉逼拵へ候て上を併せ奉り外公儀へ御不忠內先公へ御不孝に陷れ奉り候事にて其際に小生罷在候へば一言の議論も立たざる義故に上に御逢も無之樣道を

塞ぎ上書迄も御取次致し候なと申事に致し望月とも往來の無之樣致し全く小弟をば別世界へはね落し候事と被存候乍去小弟始の存念には先暫く動靜を見候てとも角も謀を運し候はんと存じ候所其內書を奪ひ候翌日望月自身草堂迄出かけ參られ候には更に驚愕仕候禮儀廉恥を知らざるも大抵程の御座候事と存じ在宿は致し居り候へども存念有之面會不致趣を申斷歸し候事に御座候是は七月廿八日の事に御座候ひき御在所より出かけ候者にも彼れの如く此表に居候者も如此にては實に亞墨利加の事より御國內大變と存じ草稿入御覽候通手扣致し內外御役人列座之上御逢を奉願候義に御座候然る所是も形の如く阻られ候て志趣も貫かず殘念の事に奉存候先一寸致し候ても右の次第に候を歸山の事かのもの不承服の樣など申候は尤も惡むべき態と存じ候事に御座候亦門老へはよく早速に前後とも御報聞被成下候よし奉謝候如仰此人在職に候はばいかでか如此形勢に至り候はん誠に樞軸の場に於ては一人の邪正賢不肖國家の興衰安危に係り候事面り思ひ知り候事に御座候偖御次韵之兩絕難有奉存候乍憚面白く奉存候但御推獎を荷ひ候段は赧然之仕合に御座候彼の時節實に

川路司農之臣下に宮崎何某と申もの候

大艦御買上之義和蘭人へ被仰付候は實說に御座候

八十門の石榴砲新鑄の事も無相違候

意外之事にて是も天意と存じ候へば暫く蟄伏甚妙と存じ候て一向に取飾らず口占仕候所詩教忠厚の意を得候など蒙仰不敢當奉存候扨問對書擬諭文とも篤と拜見仕候所いづれも人の未だ言ひ得ざる所流石の御手筆と感歎不淺奉存候殊に彼里への御一通別して妙絶と敬服仕候尤も問對書中三四箇所御誤傳とも被存候所相見え候故愚存欄外へ認め置候水戸藤田もかねて御懇意にも候上此節專ら海防の義に付老公の御顧問にも備り候趣に付川路司農之臣下に宮崎何某と申もの候是は水戸浪人にて從來藤田等と無二入魂の樣子に付是を以て川路司農へも一覽致させ其後を藤田へ轉じ候樣申此者に相附し候義に御座候是も草堂にて兩三條讀過擊節歎服候ひき藤田も定て評語にても認め返し候事と被存候戻り次第完璧可仕候菅沼何か對策も御座候よし御手に入り候はゞ一寸御示及奉仰候此人中々本藩の人傑にて候何か名言も有之べくと被察候大艦御買上之義和蘭人へ被仰付候は實說に御座候八十門の石榴砲新鑄之事も無相違候但是は江川の手にて出來候よし當年中二十門とか申事に候櫻の馬場にて鑄立候よしの所今猶其場所の普請にて未だ一門も鑄立には不相成候是も誠に拙

海中臺場の事も奇怪なる事に小弟などの存念には少も叶ひ不申候

國力を如此にして被差置候ては守

策の限りにて日を爭ひ急に造り候ものを其場所よりして拵へ候と申は時變を知らずとも可申候日を爭ひ製造候には吹場を持ち居候江戶中の鑄物師へ手分して申付川口の鑄物師等迄も及候はゞ彼の時節よりはもはや七八十門も出來に相成可申其出來立候ものより臺に居ゑ砲隊の士卒を擇み操演致させ候はゞいかばかり實用あるべく候あはれ本才の人と申もの無之浩歎之事どもに御座候海中臺場の事も奇怪なる事にて小弟などの存念には少も叶ひ不申候水戶老公先御別條も無御座御樣子に被窺候但思召通には何分參らぬかの趣に傳聞仕候如仰其以來御新令も人意に滿ざるが多く候養子の事出で候も植村氏に其實事御座候故とか聞え候乍去此御時節にも候へば其如何敷事有之候者を痛く御察當有之候はゞ夫にて衆人の戒警に相成可申夫を其儘に被成被差置紙上の御達しのみにて其弊を被救候はんと申はいつも御同樣の故轍にて其御益は有御座まじく被存候何故に此御時節に至りても御目の明き候はぬ義か不思議の事に被存候和策を唱へ候者の事苦々敷と被仰遣御尤に奉存候乍去此爲體にて戰策を唱へ候も得たりとさせざる樣被存候兎に角國力を如此にして被差置候ては

戰和ともに難出來候樣奉存候

守戰和ともに難出來候樣奉存候古人も守る事出來候て後に戰ひ戰ふ事出來候て後に和すと申候て守戰之事調はずして和し候ては和は乃ち降るにて國遂に亡るに至り候事漢土には歷々其證御座候かに被存候同力度德同德度義力の字を首に置候事最深意ある事と存候事に御座候假令聖賢にても列國を制伏し候程の國力無之候ては天下の君にはなられざる事と被存候周文を稱し候ても大國其力を畏れ小國其德に懷くと申候事に御座候依て小弟此節專ら力を說き候

小弟此節專ら力を說き候

事に御座候水陸戰法錄とか申ものゝ事被仰下候是は佐藤何某とか申者の著述之由にて此者は元來妄人にてたわひもなきものに候元より評論にも及ばず候事と存候阿州の集堂と申ものゝ事一向承り不申候將十年前長崎へ英船參り候節答書之擬作御寫し被置今更隔世の樣被思食候由小弟は却ていかなる義を認めしか忘れ申候文化度の論文は能く出來候と被仰下候是は先々の林祭酒と申事に承り及び候愚意には猶十分ならず奉存候是等何分面言にあらざれば難盡候令郞も次第に御快方にて戶隱迄御登り何の御申分も無御座本日御歸宅候よし其分に候ては先御霍然と申ものなるべく候先は拜復迄申上候多忙中亂書御

英船參り候節答書之擬作御寫し被置

文化度の論文

海容可被成下候已上

懼堂盟臺皐皮

重九前一日認

啓　拜復

猶々前半は御覽後早速に御投火可被成下候時氣折角御愛重奉禱候以上

〔四七四〕山寺源大夫に贈る

嘉永六年九月十日

八月二十七日之御手敎拜見仕候御佳勝之條奉慶候然者本日――及ばれ候白旗二本等の事は取るにも足らぬ妄言にて御座候此表にても其樣の事申傳へ候もの御座候是等は其起る所を糺し妖言の典刑を正し度ものと申居候事に御座候楮御別紙五條之問目何分御對も出來かね候とて御廻し被遣手透に申上候樣被仰下候に付一々浮簽に認め御問目返璧がてら掛御目候尙可然御論究所冀御座候

此度も縮地の術なしとて御遺憾之條被仰下候が旣に前書にも御東遊之義御勸め申候御勇決にて御發軔御座候節は第一に御國家之御爲に可被成義も可有之

第二には御家學の兵道に付大に裨益可有之只今之世の形勢いか様のものに變じ候かも難計候其節盟臺など一方を御引受可被成御才略にて候を大小□訓練の業新しく御手がけ無御座候ては實に惜むべき事と奉存候是獨り盟臺を惜み候に無御座候天下の爲に惜み候義に御座候何とぞ一と御趣向有御座度奉存候扨過刻櫻田邸の風聞を承り候處何共憂患に堪へざる義に御座候其表にてももはや定て紛々之說可有御座候夫是に付候ても盟臺はいづれ御東遊御座候方と奉存候急々御工夫被遊候樣奉存候過刻不穩風聞承候に付候ても右之義尙々御勸申上度此紙を認め候

御紙末駒込邸の事御座候に付一寸申上候が甚不滿に存じ候は此度の御出處に候御自分樣より御求め候御氣味御座候ひしと申事に御座候夫故に御政事と海防とを二ッに分け老公其海防を掌り候御約束と申事に候海防の第一は人材に有之候人材の進退は御政事の樞軸に候然るをこれを分て二途と被成候ては何事も出來申まじく偖々嘆はしき時節に存候事に御座候是等の義ます〳〵御密祕に可被成下候餘在後音

懼堂盟臺

九月十日夜　　　　啓　拜復

品川沖臺場新築の事に候所全くは江川氏の杜撰に出候と申事

江川元來固陋之上杜撰を好み且偏狹故に人言を聽き衆長を集め候事能はず

過日孔平に御附し候御前書未だ手に落ず候趣申上候所四五日間有之慥拜接安心仕候御返事は別段申上候に付爰に復書不仕候

猶々追々御傳聞も御座候はん此表品川沖臺場新築の事に候所全くは江川氏の杜撰に出候と申事に候が外國の內に如此守禦を設け候海城と申も無之又原書中にも一切見え候はぬ處置にて輿のさめ候事どもに御座候依て川路司農へも精々然るべからざる義を申福山矦御手許へも長岡矦御手許へも委細其說を申陳候事に御座候然る所何分救べからざる體にて是又浩歎□候江川元來固陋之上杜撰を好み且偏狹故に人言を聽き衆長を集め候事能はず全く□用ひ候離堡の法を臆見を以て海上に移し候ものと被存候離堡は其中心より中心迄壓か百六七十間にて小銃の矢先を正し候て置候ものに候所此度其法を延候て距離を大にし候ては必ず打合候間に身方打も出來可申且其不便無窮候太平無事の時にて候だに空しく財用を糜し候は惜むべき事に候

をまして艱難多事の際夥しき財費を被耗實用にも當らぬものを御普請御座候はけしからぬ事と存候あはれ大朝にも人材は無之と恐入候義に御座候以

上

〔四七五〕　一場茂右衛門に贈る

嘉永六年九月廿六日か

御疲少しは御くつろぎ候か其後の様子いかにや極密御屋敷の方相探り候所上の思召も御なごみ被遊御和睦の形に相成候とか申事にて其御屋敷太守様新橋御屋敷へ御出御相談御座候趣に被仰進候所御和睦に相成事收り候に付御出被下候に不及候御挨拶且私共兩人罷出段々御厄介に罷成候御禮旁昨日小山田大夫其御屋敷へ出候と申事に御座候上の御憤御なごみ被遊候は馬場高山等の少しも口をきゝ候はんと申もの共親類預等に相成候に付ます〳〵御獨立に成せられ御力に及ばざる所にてやむ事を得させられず其御次第に至り候事か不審の事ども に御座候又薄々承候に今度上の御憤を起し候樣御たきつけ申上候は全く內藏進が仕業にて被召上もの等に心付候へなど申候も內藏進より出候奸

（高山內藏進）

言にて聊か跡方も無之事故御側向一統もかれが奸を悪み候等の沙汰も御座候趣に候又内藏進何故に上の御憤を起し政府を傾け候はん等の奸計を企て候かと申に是は長谷川深美に使はれ候て深美を内に引入れ候半とての事と申様にも承り候此事果して實に相違も無之事に候へば内藏進智慮の足らざるより深美に誑され奸邪をよきものと心得平日新しく交り候より起り候とは申ものゝ一方ならざる騷動を起し御君德を煩はし大臣之急出府等屢に及び道中筋などにても何か異變の風說專ら有之候趣又私とても貴君御申聞け被成候次第には實御國家の御大事と心得上の御一身の義をも甚危み奉存候より外に手段もなく候故其御屋敷太守樣へ御一同嘆願候義御親類樣とは申候へども御他藩へも御自國の體たらくを打出し候に至り候事容易ならざる事に御座候其容易ならざる次第に至り候も内藏進上を奉激御憤を起し候に始り候事に候へば内藏進罪狀殊に輕からざる事と存じ申候又果して内藏進を使ひ候は深美に相違も無之候へば是其主謀に付深美事は猶一層之重罪と存候此度假令上之思召御なごみ被遊候とても右等の奸邪事を用ひ無智のものを使ひ君側より事を起し候

大鋒院様御以來御忠孝の御名家の御瑕瑾に不相成様仕度

様の義陸々御詮議も無之御典刑を不被正被差置候ては他日尚如何様の義御座候はんも難計候へば此折に右奸謀の根源を究め奸人の罪狀を糾し御國家永く無事に御座候様其御屋敷太守様へ奉願度義と奉存候此義御同意に候や如何や思召可被仰下候偖伊野志摩主水黨を結び國權を弄し公儀へ御不忠節に相成り御先代様へ御不孝道に相成候義を我意私計を以て取計らひ候義私此度まのあたり其證を握り居候義に付此度之御様子御和睦と相成候とも私其證を握り居候一條をば其御屋敷太守様御賢慮を以て是迄壅蔽に相成居候義共殿様之御耳に入り共々御相談にて不忠不義私曲の取計致し候ものゝ罪狀御裁判に相成此容易ならざる御時節別して海防之義に付大鋒院様御以來御忠孝の御名家の御瑕瑾に不相成様仕度義と奉存候右之存念に付昨朝既に鳥飼氏迄此程其御殿にて認め候別紙草案之通申越し候義に御座候御心得の爲右草案掛御目候猶思召も候はゞ可被仰下候將何ぞ御不自由の事候はゞ無御遠慮被仰遣候様致し度候其御方の様子御聞取候はゞ可被仰下候以上

九月廿□日

嘉永六年九月廿九日

令弟にも…御改心無之浩歎之事に御座候

大銃鑄込等折重

御屋敷にても異事出來

茂右衛門様　　　　修理

〔四七六〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

秋冷相增候其表さこそと被存候彌御無恙に被成御揃候御事や承度候嘸令弟にも御心配と奉察候兎角只今に御改心無之浩歎之事に御座候偖先便は淺草御離緣之事取計候樣御賴被仰遣致承知候前廉之次第も市兵衛始末書にて委細相心得候早速罷越し候はんと存じ候所あやにく諸藩にて被賴候大銃鑄込等折重且其他種々の用向致蝟集延引候內追々御傳聞も被成候はん御屋敷にても異事出來竊に心配候內無餘議夫にも携候事にて彼是と致奔走徹夜不眠など度々之事に候ひき昨日漸少閑を得松屋迄罷越し候然る所新兵衛留守にて候ひし故妻と手代とに面會其御方にて離緣被成度の御口上を申述べ新兵衛被歸候上にて私方へ可及挨拶申置き候義に御座候挨拶有之次第得貴意候樣可致候市兵衛始末書にてもいづれ六ヶ敷く可有之事とは被存候乍去離緣と申段に至り候ては先方何と申候ても致し方も有御座まじく候品に依り候ては例の曲者ども其御地

へ參り候樣の事も可有之候へども總て私へ御任せ被置候趣を以て御取合被成まじく候多忙中用事のみ如此御座候北堂君へも可然御致意可被下候以上

九月廿九日　修　理

愼　藏　樣

〔四七七〕　鳥飼右仲に贈る

嘉永六年九月廿九日

以手紙致啓上候秋冷日に加はり候處倍御安泰被成御座珍重之至奉存候然ば一昨朝も參殿仕御手數に罷成奉謝候其節御用人衆へも申述置候通最初一場茂右衞門同道仕御館へ罷出嘆願筋申立候節近頃私義に關係仕候書類迄差上候義は重役の者黨を結び我意を振ひ言路を壅蔽し國權を賣弄致し候罪惡を顯はし且嘆願筋の佐證とも仕度存意に御座候然る處右書類の次第私に係り候義とは申ものゝ私一身の枉誣を受け候等は固より論ずるに足らず候へども當夏亞墨利加の事起候以來不容易御時節に相成公儀にも深く御配慮も被爲在候折柄海防御手充向第一追々遂翁樣御生前の思召に相觸れ忠孝の大本を忘れ人を欺き天

（一場茂右衞門は松代藩目付役）

（遂翁樣は先藩主眞田幸貫）

（信濃守様は藩主眞田幸教）

是迄雍蔽に相成候義ども信濃守様御耳に入り

を欺くの義御座候ては信濃守様公儀並に御祖先へ被爲對御濟難相成此御時節柄別して容易ならざる義と奉存候右書類共既に此度太守様へ御覽に入れ候上は幾重にも奉嘆願是迄雍蔽に相成候義ども信濃守様御耳に入り御共々被成下御相談御政事向は遂翁様御舊時に相復し海防御手充向も眞實の御忠節より出候樣仕度奉存候仍て差上置候書類一先御下げの義奉願不用の品除き夫々最初よりの手順相認め往復の書面等も次第を追ひ寫取り御覽被下よき樣仕差上度義と奉存候右の次第御用人衆へも被仰談被下候はゞ一先書類御下げの義御取計らひ被下度奉願候何分にも可然樣奉仰候右得貴意度如此に御座候以上

九月廿九日　　佐久間修理

鳥飼右仲様

（鳥飼右仲は桑名侯の側役なり）

嘉永六年十月一日

〔四七八〕　山寺源大夫に贈る

念二日之御一封小盡に相達し拜披仕候所乍例御懇篤之御紙表殊に前便被下候蕎粉少く候とて御到來之戸隱產澤山に御送惠被成下感佩之甚しき義と存候や

近來は以の外に取込來客の應接に早朝より夜陰迄

連日入門のもの有之閒斷少く候

御著述之義は：川路氏に寓し候宮崎生を以て藤虎へ轉じ申候

う御禮難申盡奉存候晩來直に拜味仕候所名產又格別とて母はじめ家内一同御交情に厭飫仕皆宜しく御禮申上度段申出候大根をも被下候はん思食のよし難有奉存候然る所當夏の旱損にて西條邊可憐體と申事思召を相聞候へば戴き候も同樣感□奉存候稻田は幾年にも無之豊熟と申義御同前怡存じ候事に御座候近日竹村兄も御會見小弟噂御承知被下候よし高察之通近來は以の外に取込來客の應接に早朝より夜陰迄□□閒斷も無之候事每々の義にて取掛り居候自分の業一向に出來不申迷惑仕候事に御座候乍去夫等も少し宛は世の用をも成し候義に付一概に拒み候事も避け候事も難出來窮困之仕合御炤亮可被成下候一兩日閒入門二百人に及候などは誤傳に御座候乍去連日入門のもの有之閒斷少く候偖此節之義故御手誨之拜復稽緩候ては御心掛りにも可被思召と奉存候故撥冗候ては拜復相認め監察寮へも兩度か相賴三澤へも賴み差上候義に御座候只今頃は定て御落手被下候御事と奉存候

御著述之義は過日も申上候通川路氏に寓し候宮崎生を以て藤虎へ轉じ申候定て評語等も可有御座候戾り次第一先返璧可仕候

海防彙議中羽倉子之□中御不滿の義有之候條被仰下御尤に奉存候斯人何分好人物に候へども書生の臭氣を脱しかね候と申樣の所御座候人に御座候因て右樣の筆先きばかりの論出來候事と奉存候伎倆之所は先年も被勤候御勘定吟味役などに候はゞ御勘定所の補には餘程被成候はんと被存候遠國奉行などにても俗人と違ひ隨分政績も可有御座候右拜答御惠賜の裁謝未仕候內瑤函又至難有拜展仕候へば却て十九日之御手書にて候ひき御著述御前發之分無相違相屆き候と申拜復も于今不相達候よし不審奉存候しかし御屋敷も隔り居り人に託し候日合も必ず幸便を得ざる義に付遲延の事は難免候いづれに致し候ても此節は御落手被下候義と奉存候

如仰藩邸も甚の珍事にて小弟義も色々聞繕ひ候へども其根源何分不相分竊に心配仕罷在候所廿三日の夜計らず一場にかけ込れ其申候所に據り候に其儘に捨置難く且一場も只今にも奸黨の爲に捕へられ候はん樣子にて○○馬場○○○夜中御徒目付三人宅番をつけ候と申事故馬場の老實なるだにも其次第にては忠邪の辨判然之義其上一場捕へられ候時は御內命を受け候て御在所迄參り

御內命を受

け候て御在所迄參り候御用筋も復命に及ばず

候御用筋も復命に及ばず空しく成り候事いかにも殘念なる事と申且御側向にて上の召上りものに心付候へなど申事も候よしに付彌片時も猶豫出來かね候と存じ候乍去三村に面會精しき樣承候上の事と存じ夫迄不通にて候ひしかごも其夜戸を扣き逢度よしを申候所御屋敷より迎參り先刻出候と申事に付是又異事出來故と察し候去らば外に致し方もなく候此度の義樣之時にこそ御親類樣と申もの有之候御重緣之上感應院樣御里方の御事にも候へば御弱年にても何にても越中守樣へ出嘆願候方可然私同道致し內願之上貴樣をもかの屋敷へ願ひ御預け申すべしとて一場を同道にて八丁堀御殿へ罷越し御側頭鳥飼右仲に面會此度の義の急に迫り御弱年の殿樣御獨立にならせられ甚奉氣遣候間何事も御相談にて奸邪之黨御黜罰被成下候樣致嘆願尤も此外の事の首尾は私に於て不相辨但重役共幷深美と申ものゝ手を組み不忠不孝無義無恥の義を取行ひ御政事を玩弄物同樣に致し候證據は親く私之上にて近來有之候是を是度の佐證に被成下候樣とて例の御內覽に入候次第を其本書數通を以て越中守樣迄申上候追々承り候へば上にも御憤御散じ被遊御和睦之形に相成候よしにて先

一安心仕候へども此度異事の差起り候來由を薄々承候に深美再び君側に盤踞候ひ度の奸計にて內藏進を使ひ上の御憤を激發し召上候ものに心付候へなども跡形も無之事のよし斯る奸邪事を用ひ居執政之徒形の如く相黨し我意を振ひ言路を壅蔽し國權を玩弄候樣にては御年めされ候御方御一人も不被爲入御弱年の上御孤立に被爲渡候所にては假令此度は此儘に收り候とも他日必ず異變さし起るべく其節には品に依り御家に御疵のつき候樣の事あるまじきに無之と恐惶之餘り越中守樣に申上候は私ゟ差上候書類私に係り候義とは申ものの私一身の枉誣を受け候等は固より論ずるに足らず候へ共當夏亞米利加之事起り候以來容易ならざる時節に相成公儀にも深く御配慮被爲在候折柄海防御手當向第一近くは遂翁樣御生前之思召に相觸れ忠義之大本を忘れ人を欺き天を欺き父をなみし君を亡し候義を幼主に勸め候等の義第一公儀を憚からざる致し方にて此邪議只今の如く御取用ひに相成居候ては信濃守樣公邊竝に御祖先へ被爲對御濟難被遊御儀と奉存候右等の大事申上度候へども前後左右盡く壅蔽と相成居候間右書類此度は證據の爲に太守樣御覽に入候義には候得ども

一と度御覧に入り候上は幾重にも奉嘆願是迄壅蔽に相成居候義も信濃守樣御耳に入御共々御相談被爲在御政事も遂翁樣御舊時に復し海防御手充向も眞實の御忠節より出候樣仕度私義此義を奉嘆願候上からは奸邪と兩立仕らざる覺悟にて候間何分可然奉願候とて是は別段又私ゟ嘆狀を差上候義に御座候固より成敗の論議に及ばず身を以て國に殉じ候志にて如此仕候義に御座候尙此後の樣子其次第に依り可申上候他に一人の人を語らはず誠に一臂之力に候へ共彼式のもの共の爲に多分は敗走も仕るまじき歟とも存じ候義に御座候先是等申迄も無之極密に被成可被下候

米利堅來翰の內諸家へ御示しに成らざるもの有之候とて別紙御示及を蒙り候是は他にも旣に申上候と相心得候全く僞物にて取るに足らぬものに御座候しかし仰の如く箇樣の妖言さし起り候と申ものの容易ならざる時勢と被存候防禦御手充向被爲届やの事誠に何共言葉に出し難く唯慨嘆痛哭のみに御座候川路殿の外二三の御役人下問の義も候ひしかども其他は一切無之候兎に角天下は爲すべからずやと存じ候事に御座候川路殿折々相談に御座候へ共現に江川の

小人には川路殿も困り候と申事に候おのれに出で候はぬ事は美事と雖もこれを非としおのれに出候事は□事と雖もこれを是とし川路殿飜譯書などを見て居られ候へば夫を煙たく思ひ候色あらはれ候よしに候本藩當路之事沙汰之限りに御座候いづれ一變し候上ならでは何事も六ッかしかるべく候物窮れば變ずと申候へば其變もしくは近きに可有御座かと被存候先兩通の拜復御恵賜の拜謝迄申上候御覧後必ず御火中被成可被下候時氣折角御保重奉祈候以上

十月朔夜　　　　　　　　　　啓　拜復

懼堂盟臺　皐皮

令郎次第に御快復之條奉慶候御快復に候はゞけく寒稽古には御出候方然るべく被存候數字不明別に思召御座候義にや乍憚宜しく御致意奉仰候以上

嘉永六年十月廿二日

〔四七九〕　一場茂右衛門に贈る

拜見如仰不勝之天氣に御座候處彌御無恙奉慶候偖此間は乍早々拜面大慶罷歸りがけいづれ罷出候はんと存じ候所時刻も遲く相成且風邪氣にてちと寒さに

もたへかね無餘議家來を以て御斷申候義に御座候然ば先頃御借申候品々御返し被下致落手候又何よりの御品被下辱奉多謝候小兒大悦母もよろしく御禮申上候在宿の都合御問合せに候が今日晝後七ッ時迄は在宿仕候其餘も朝の內に候へば多分外へは不出候此段拜答迄早々頓首

（在宿の都合御問合せに候が）

廿二日　　啓　拜　復

一場賢友足下

〔四八〇〕望月主水に贈る

（嘉永六年十月）

御伺書案

（前文を逸す）

（品川臺場につき藩主より此伺書を幕府へ差出さしめんとし其案を草して送れるものにて其眞意は斯る法に叶はざる臺場にては有事の

先達てより品川沖御臺場御新築有之候趣相聞え今般異國船防禦の爲め西洋砲術家來共へも稽古相勵候樣厚く可申付旨御達有之右內海御警衛の爲御臺場御新築御座候も西洋法に依り御取立に相成候は其法術をも手廣に可被成置御趣意に候間其心得を以て西洋打方習熟のものへ申談候樣委曲奉得其意候然る所故御名代より取集め置候西洋書聊か有之家來の內にも西洋學心得

際用に耐へず萬一眞田家に警固を命ぜらるゝ事ありては迷惑につき其豫防として申立てしめんとしたるなり然るに留守居津田轉遠識なく其議行はれずして果して翌年固めを命ぜられ不用の失費をなしたり）

候もの御座候て是又海陸兵法に關り候洋書少々は所持罷在候所今般內海御取建に相成候御臺場の如き模樣は拙者所藏の書中にも又家來ども藏本中にも一切見え申さゞる趣に候既に御臺場御取建に相成候に於ては品に寄臨時其場所相固め候樣蒙仰候半も差計らひ候義なから難計候義に付其御依り被成候法はいづれの國の發明にて何と申書中に出居り候義や其築方異常に御座候に就ては定めて其守り候方も別段の趣向可有御座候へば爲念其御依り被成候原法委しく相伺置家來共初め異變臨時の節事を誤り候義無御座候樣此節ゟ穿鑿仕置度奉存候此段宜敷御指圖可被成下候以上

丑十月

猶申上候昨日の草稿中跡にて存付候へば改め度場所一二御座候

其御依被成候法はいづれの國の發明にていつの頃何國との戰に何樣の利有之候や其法立何と申す書に出居候義や其御依被成候原法幷に其戰例等も御座候はゞ委敷相伺置家來共へも異變臨時の節事を誤り候義無御座候樣此節より心得置せ度奉存候……………

と御座候方可然と奉存候宜しく御採擇可被成下候以上

修理

（四八二）姉に贈る

嘉永六年十一月七日

久しく御無ゐん申上候次第にさむさつのり候へども彌御きげんよくいらせられ御めで度存じ上候此方御はゝ様至極御すこやか其外いづれもかはり候事無御座候間御心安くおぼしめし可被下候さては私も此度學校の督學被仰付表御用人上席と心得候樣と申事にて難有仕合奉存候先達中奸邪の輩はびこり候頃は君國の御爲になり候樣にと計らひ候ても一とむきに打ちくづされ候てあますさへ其御地へ參り候へなどの仰せをも蒙り候所追々に忠邪の御辨別もつかせられ候事と相見え御家老しよく御免の人もこれあり御せんぎ筋御座候さて大阪より御召し下しに成り候もの有之候よしにて候に私事かやうに席なども下され候は全く是までの御仕むけ御改正に相成候事と被存御國家の大幸と難有御事に奉存候先頃中は何かと御母樣にも御心配をもかけ候所一昨日の被

（五日學校督學被仰付）

（表用人上席となる）

仰付にて大に御悦被下早速御前様へも御しらせ申上候様にと御申下され候依て其事のみ御知らせ申上度草々申上候藤三郎へも乍憚宜しく願上候是も此節の時節柄其地に居りやすんじ候べき事に無之いづれにも此表へ出で何かの修業致し候方可然とかねても申越し道中金までも送り遣し候所今に久しく沙汰も無之候此時節をいかなる時と考へ候事にや夫と申もの其山の中にては何事もわからず此節天下の容易ならぬ勢に成り居候事も存じ申さぬにこれあるべく候明日左大夫立歸致し候に付此事をも申候間此表の大略を承り志を決し候様御申傳可被下候さむさせつかく御いとひ可被遊候めで度かしく

十一月七日　修理

御姉様

（嘉永六年十一月七日）

〔四八二〕三澤刑部丞に贈る

昨日終日の評談遂に深更迄に及び御苦勞至極奉存候然ば明日は八日にて鍛冶職のもの吹子祭とか唱へ商家の夷講などの如く祝ひ候に付砲臺申付置候鍛冶

職よりも金子拂ひの事申出候依之例の高田ゟ御承知御座候ひし六ポンド砲臺
六十五兩の內三十兩今日御廻し被下度奉賴候御手數ながら何分所冀に御座候
印紙と御引替に被成可被下候以上

七日

覺

一三拾兩也

右は六ポンド砲臺製作料の內御渡し被下慥に致落手候追て職人ども本切手
と此紙御引替可被下候爲念如此に御座候以上

丑十一月　　　　　　　　　　佐久間脩理㊞

三澤刑部丞殿

〔四八三〕　藤岡伊織に贈る

嘉永六年十二月十三日か

冱寒彌御萬祥被成御起居候や御兩尊樣にも倍御安健被成御座候か御近況委承
度奉存候賤家老少幸に昨の如く罷在候間乍憚御過念被下間敷候偖先頃は令弟

御不快の所藥上げ候て早速御快方候義御怡御丁寧被仰下奉謝候其後も度々御尋被下候所此節にては至て御健に候間御案事被進間敷奉存候將又尊大人よりも御懇に被仰下且被寄思召牛肉一箱御贈被成下珍感殊に深奉多謝候折節先年西洋書の句讀を授かり候當時加州侯の醫官にて黑川何某入來に付御贈被下候肉を炙り酒を勸め候所けしからず致賞美大に興を添へ候義にて千万奉感銘候宜御禮御申上可被下候然者此紫菜珍しからず候へども聊寒候拜伺之印迄掛御目候御哂留被下候はゞ可爲大慶候過日之拜答たまものゝ拜謝旁草々如此に御座候寒威折角御自保所祈に御座候乍憚御尊人様方へも宜しく御致意奉願候以上

啓　再拜

十二月十三日

桂林賢友　足下

猶々御別紙御内々被仰下候義御尤に奉存候兎に角事を解し候人に無之候ては非常之節役には立不申候何とか御工夫被成暫にても此表へ御出一御脩行御座候はゞ一廉御國家之御爲にも可相成候此節此表は諸事大分開け申候世間にて

は大分開候所御屋敷にてはいつも同様嘆息之次第に御座候私も當月三日又々御役御訴訟申立候兎に角世間は私などの存念に應じ不申私などの存念は又世間へ應じ申さゞる事ゆゑ是非に及ばざる事と存候義に御座候御一笑可被下候以上

嘉永六年十二月十四日

（四八四）山寺源大夫に贈る

昨夕は御惠來を荷ひ殊に彼是御親切に蒙御提誨萬々奉謝候是よりこそ謝狀をも呈し候べき所に御墜簡拜接悚然捧讀仕候へば御丁寧蒙仰重疊恐入奉存候偖御旗本大銃一座御增し三座と被遊度思召被爲入候條乍恐御尤の御儀に奉存候海寇に對し候ては國內總て守戰に御座候所守戰には攻戰と違ひ大砲の數を多くし候事一定の法則に候へば御出馬の節も砲數多き方可然事に奉存候然る所その砲數を多くし候も亦外御人數の掛合せも御座候義にて右掛合せなしにひたすら砲數だに多く候へば戰に臨み必ず利を得候と申には無御座候過日御調の內大砲二門と申所外御人數との掛合せも至極御相當の事にて御不足の義に

十三ドイムのハンドモルチール二門御增に相成候はゞ

（山寺は十一月四日郡奉行側役頭取兼軍議役となり十二月八日海防臨時御出馬の節御供軍議役被仰付）

無御座候御調の御人數にて又一座を御加へ三門と相成候はゞちと御不釣合ひのものにも可有御座歟依て愚考仕候にはカノンホウヰツヽルの類被遊御增候義は御見合せに相成十三ドイムのハンドモルチール二門御增に相成候はゞ至て手輕に取扱はれ候もの故に御人數の掛合せに響き候はで御筒數多く相成其上カノンランゲホウヰツヽルの業の及ばざる所を補ひ候所も御便利に可有御座と奉存候カノンランゲホウヰツヽルは地平に準じて直射候もの故に物を隔て敵を害し候事能はずモルチールの類は天に向て擲發し候もの故に物を隔てて敵を打ち候用を成し申候且二門のハンドモルチール御鑄造にて何程の御入費も掛り申さず彈藥を併せて御送りに相成候時も人夫少くして埒明き可申候へば旁此趣向可然と奉存候尙宜しく御勘考の上思召御伺可被成下候先は拜復迄艸々頓首

十四日　　啓　拜復

山寺老盟臺　席開

再啓艸稿類御擲還を蒙拜收仕候長崎黑船の事佐賀藩留守居過刻も見え候が

一向不承と申候左候へば如何可有之や不審の事に御座候別冊同人より借受け候が其模樣にても只今頃再著は致すまじきかの樣被存候乍序別冊掛御目候便の事御知らせを蒙奉多謝候硝石一件必ず竹見迄申送り候樣可仕候礟卦和解之義御多忙故年內御卒業御座候はん事無覺束思召候との御事不及是非候御手隙次第に被成下度奉懇願候以上

礟卦和解之義御多忙故年內御卒業御座候はん事無覺束思召候との御事

嘉永六年十二月十六日

〔四八五〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

御手誨拜見先以沍寒之候彌御揃御佳勝之條詳之欣慰之至奉存候然ば過日御役蒙仰付候段御風聽申候處御怡被仰下殊に爲御祝儀御肴代金一方御送惠被下乍每度厚誼之至萬々辱言謝不罄致感佩候乍憚北堂君御始宜しく御致謝可被下候將此紫菜珍からず候へども寒中御見舞得貴意候印までに掛御目候御莞存被下候はゞ可爲幸甚候先は御悅被仰下候御答謝旁如此に御座候寒威千萬御保愼所祈に候不肅

八田賢友足下

臘月十六日　　　　啓　拜復

附啓令愛嘸御丈なども御延候べくと致想像候此品有合に任せ進上申候下著
に也とも御仕立御著せ申可被下候

令弟御離縁之事

一令弟御離縁之事近日も淺草迄門人差遣し申候久藏彼是尙申候趣に候所更に
致し方もあるまじくと存候近き内私方へ返事可申筈に御座候何事も私へ御
任せ可被置自然久藏等より市兵衞へ申送候事御座候とも皆私迄可申越と挨
拶候樣有御座度候令弟御一身何とも痛心之事に存候竹村より承候趣にても
迚も此節御悔悟はあるまじきよし御困り被成候義御心事も察入候事に御座
候松屋の方彌離縁と相成候所にては如何御處し被成候思召にや是又承置申
度候何も後音と草々申縮候以上

松代町　丸山熊男氏藏

〔四八六〕　山寺源大夫に贈る

嘉永六年十二月廿三日

昨夜も深更歸宅夫故御惠書は拜見仕候へども未及裁報候所に又々御墜簡奉拜
接候先以御多福奉慶候然ば御獻詩御草稿御示及愚意申上候樣奉敬承候至極可

御獻詩（廿

一日藩主幸教結婚に付賀詩を奉らんとす）御草稿御示及愚意申上候樣奉敬承候

小生も獻詩之事御慫慂を蒙り候へども

只今四時御用之趣

然候へども御後聯或は褻に渉り候の嫌を免れず依て存付添書仕奉返璧候尚御再考之上御取舍可被遊候高川氏の分是又聊か加筆仕候花の字同字有之候とも苦しかるまじく古人にもいくらも如此例は有之候事に御座候梅條にては何分不可然候將奉呈後臺と申事同じく褻に渉り可申然るまじく奉存候恐らくは古人にも此例決して有御座まじく候唯君公へのみ被呈候方可宜奉存候小生も獻詩之事御慫慂を蒙り候へども御家中一統より仕候義に候へば本より論もなく候へども表にて頻々御親しく御左右へ罷出候と申にも無之所にて一人立ち右等の事御座候は其姿却て不宜是は御左右へ御親二三字蟲喰奉侍□衆ばかりにての方御相當之義と奉存候依て小弟義は先見合候樣仕度奉存候幸に御炤亮可被成下候御別啓蒙仰候義多々奉謝候只今四時御用之趣申來り數字蟲喰罷出可申候へば其節拜面萬縷可申上候昨日之拜復も御面話ならでは盡しかね候義も御座候に付別段爰に拜答不申上候總期面賦

廿三日

懼堂老盟臺　丈室

啓　拜復

嘉永六年か

〔四八七〕中俣一平に贈る

松代町　中俣兼雄氏藏

火打石切道具壹通り拵へ差上候事御座候

其後は暫不得拜眉候彌御安泰被成御起居候歟扨御著御悅にも可相伺之所大砲試放前大取込背本意候幸に御海容奉仰候然ば先年感應院樣御盛之節（私於玉ケ池に罷在候也）（閊）火打石切道具壹通り拵へ差上候事御座候右は御手許之御品の内にて御取扱被下候事御座候や又御武具方に御渡しに相成候義や此節無餘議外より頼まれ拵候はんと存じ候所圖も借し失ひ手許に無御座依て實物にて製し申度此義御問合せ仕候義に御座候乍御面倒一寸御批答奉願候將此扇聊か御著御悅申上候印迄奉呈候いつか持參可仕存じ大延引奉愧入候御叱留所禱御座候餘期拜面候以上

十四日　　佐久間修理

中俣一平樣

安政元年正月四日

〔四八八〕高田幾太に贈る

松代町　原淳造氏藏

下條之義御問合せ被成下度

萬一手離されて苦しからぬ程の事に候はゞ小弟へ讓り賜り候樣

尊瘍被成御續御快方に御座候歟御容體相伺候然ば客歳より拜顏之節に可相願と存じ候ては拜範之節遂又失念其儘に打過ぎ候今日存じ出し候に付書付候て相願ひ候罷成候御事に御座候はゞ御序に下條之義御問合せ被成下度奉萬冀候

原權君に二尺五寸ばかりの一刀有之候（鐔に貝のつき候品と覺候）數年前深川御下邸にて時時會晤候間に原君被申候は此の刀も兼ては愛し候ものながら追々老境に及び候故か次第に重く成り候樣覺え候往々は是より短く輕く候を取立て帶すべく存じ候と申話も有之其刀は家に傳はられ候品に無之趣も被話候事に候ひき右之次第に就き未だ年のよられ候と申程には無之候へども腰のもの別に取立られ候樣之義にて萬一手離され候て苦しからぬ程の事に候はゞ小弟へ讓り賜り候樣仕度望願候義に御座候其子細は原殿にも兼々知られ候義に候が小弟常に帶し候刀全く原殿所藏と同作と被存候原殿鑑定には小弟の所持少しく優り候など被申候義も候へども其實は兄たり難く弟たり難く取合せ候はゞ所謂雙璧とも可申候依て若々他人へ被遣候程の事に候はゞ小弟申受度と存候義に御座候打振り試み候に寸合ひ目方等手に應じ心に叶ひ候と申品誠に少なきものに

て候處小弟常用之刀至て手頃にて使ひよく覺え候右之差替をと色々心がけ候へども原殿の刀の如く意に叶ひ候品無之當春亜墨利加之事有之候はんなど申すに就き候ても存念に叶ひ候副刀をば用意仕度此安念を生じ候義に御座候外品とも違ひ小弟より直に申し越し候はんも無遠慮に付御煩瑣之段は恐入候へども盟臺より便開御聞き試み被成下度奉願候義に御座候御允諾を蒙り候はゞ感銘無此上候千萬所懇に御座候頓首

（當春亜墨利加之事有之候はんなど）

四日　　　　　　　啓　再　拜

高田盟臺　案下

（安政元年正月九日）

〔四八九〕小山田壹岐に贈る

昨日蜷川賢之助より申上候大銃御圍ひ玉の内二十拇榴彈二ッ十五拇同十五六斤實丸五拜借仕度尤も不日上納可仕と申義定て御勘辨被成下御武具方へ御指圖被成下候義と奉存候御武具方へ掛合拜借仕可然歟爲念奉伺候十二日十三日打方に付明朝彈藥之方舟積に仕り差出し候と申に少々間合ひかね候に付此義

奉願候義に御座候可然御指圖被成下度候以上

正月九日

猶々御園の玉類も去夏中私方之常法を以て製作仕候義に付右を拜借仕跡より其分返上候も皆同物に付御差支聊か無御座候義と奉存候

小壹岐樣　佐久間修理

〔四九〇〕望月主水に贈る

西條村　高田壽三郎氏藏

安政元年正月十一日

午後より亞墨利加船八艘浦賀に向ひ候趣風聞御座候所又不突留の義申上候と恐入候に付諸所承繕ひ候に此度は相違無之趣に御座候營中へは今朝注進有之候所御祝儀日の事故とか申事にて暫く祕し有之候に付外へは遲く聞え候と申義に御座候定て御承知被遊候義とは奉存候へども此段奉報聞候未だ浦賀に入津は不仕歟に承候依て明日大森演砲も新調にて打試み可申筒數門御座候に付異船來著に付候ても彌打試不申候ては叶はず候故御指留御座候迄は稽古仕らせ候心得に御座候盜を見候て矢をはぎ候樣には候へども大砲と申もの初めて

手がけ候ものなども候へば少しは心得させ申度是又家國の御爲と存候義に御座候將過刻依田甚兵衞奥村良左衞門一同例の一條に付表並御側向共佗頼れ候とて參り候に付承知之趣及挨拶候全く御威勢故の義と奉存候此段も乍序申上候以上

十一日夕　啓　叩頭

致堂老臺　執事

西條村　高田壽三郎氏藏

〔四九一〕望月主水に贈る

安政元年正月二十四日

（小林虎三郎は吉田松陰と共に所謂象山門二虎と呼ばれし一人なり號を雙松字を炳文と謂ふ）

只今長岡藩より參り居候門人小林虎三郎と申もの其御屋敷より罷歸り申聞け候は明日ワシントンの（アメリカ合衆國開基之人）生日に付內海へ乘入居候異船共大砲壹門に付拾六發宛打放し候と申事其屆有之候よし慥かなる事と申義に御座候右行裝をば心得のため一見仕置き申度今夜中より金澤まで罷出居り右一見仕明夜晩くも罷歸り候樣仕度奉存候此段御聞置き可被成下候以上

正月二十四日　佐久間修理

望　主水様

西條村　高田壽三郎氏藏

〔四九二〕　小山田壹岐に贈る

安政元年正月廿六日

昨二十五日ワシントン生日に付異船ども大砲祝發候義に付其様子柄心得の爲め一見仕置き申度御聞置き申上一昨夜中出立仕昨日右祝發の模樣一覽仕昨夜深更歸宅仕候此段申上候尙委細は罷出可申上候以上

正月二十六日　　佐久間脩理

小　壹岐様

〔四九三〕　側納戸役に贈る

安政元年正月廿六日

日々風烈に御座候所彌御安泰珍重奉存候然ば過日被仰出候飜譯書之義に付彼是承り合せ候所未だ世上普通に不相成品にも有之候に付き餘し（譯カ）差上申候

一、原名ケルキウエーキ譯して砲臺全書と申候よし是は天文臺にて飜譯に相成候ものと承り候臺場の義を委しく記したる書に御座候

武田斐三郎

一、リニー船製作法是は伊達様にて武田斐三郎と申書生に御頼にて飜譯に相成候よし斐三郎は砲術門人にて私方へ立入候ものに御座候所此節長崎へ參り居候に付其稿本等も歸府仕候迄は私手にては詮鑿無心許候

一、砲術書の譯本頼敷もの是と申程の品無御座候西洋千八百五十年當年より五年前なりの板にオーフルストラーテンと申書御座候是を杉田成卿門人手を入候よしに御座候右を成卿校訂仕候はゞ用立候ものに可相成と考居候義に御座候オーフルストラーテン前板の譯は砲術發揮□砲發□など題し候て世間に有之候へども原書と照し合せ候へば半枚も誤のなき所は無之義に付用立兼候義に御座候右にて可然御申上可被下候偖は海上砲術全書器械の部少々見合せ申度義御座候に付暫時拜借の義奉願候宜しく御執成奉賴候私藏本も有之候所此節加州藩へ借し遣し置只今手許に無之借遣し候所へ取りに遣し候は手遠に付急に奉願候に御座候此意幸に御恕慮可被下候以上

正月廿六日

安政元年二月五日

〔四九四〕岩下縫殿丞片山半之輔に贈る

豊榮村　小林莊右衛門氏藏

十五拇長人砲臺直し候所先可也御用立可申候依て身筒と軸受の鐵物等車にて私門前迄御遣し可被下候（如此認め候は築地より船廻しにて横濱辨天の側へ著船の心得にて候ひき右は浦賀與力香山榮左衛門中島三郎助等のへ先發御役人より內話候所右兩人申候に大砲等も荷作りに致し被差出候得ば何も無差支趣に申候よし承知罷在候に付築地より船積と心得候義りに御座候然る所此紙認めかけ候所にて蟻川申候には大砲の類總て陸を御送りに成候趣に御評決候よし左候へば本文之臺並にて十三拇天砲同石榴彈同火管之類取に被遣被下度奉存候大凡積り見候所車貳輛被遣可被下尤も十三拇天砲三挺之內貳挺少々職人仕殘し候所有之候間是は私跡より相送り候樣可仕と既に主水殿迄申達し置候義に御座候左樣御承知可被下候）右鐵物（軸かけ並に軸のくさび等也）御取落し無御座候樣御心付られ可被下候此段草々以上

二月五日夜　佐久間修理

岩下縫殿丞樣
片山半之輔樣

安政元年二月九日

〔四九五〕卜木次郎右衛門に贈る

長野市　近山與五郎氏藏

君ヶ嶽助三郎　明日之御固一條に付君ヶ嶽助三郎御用にて罷越候右に付御打寄御評議被下度一義御座候乍御苦勞只今ゟ私共宿所迄御出張被下度奉存候此段草々以上

即刻

佐久間脩理

馬場彌三郎

卜木次郎右衛門樣

〔四九六〕竹村金吾に贈る

安政元年二月十日

（高川文筌は松代藩の醫師にて繪をよくす）

此度本牧御固御人數の內へ高川文筌も罷在居候所浦賀奉行伊澤公より御賴にて御手醫師賴度旨被申越候に付文筌大悅び致し候其次第小林の方へ手紙遣し候寫の通り御屋敷の御固場は凡二丁斗も遠く候て中々御幕張內の事一覽も出來かね候所幸に高川伊澤公近習の內へ交り圖ごり候樣被仰付十分に寫し申候委細は歸府の上緩々可申上候へども先凡申上候

晝九つ時頃本船よりバッテーラ一艘卸し數人乘渡候其並方調練の體に居並び候て忽に著岸致し候て先御小屋前廣き場所に追々上陸し上官の者先へ上り步

應接場の内の事

卒へ下知致候へば凡五百人程の群集如形隊伍を立候所其壯観なる事言に盡せず是は彼方平生の事にてよく人の知る處也未だ知る可らざる所と申候は應接場の内の事に御座候先饗應の席は廣大の御場所に御座候處上の方に二間四方の座敷有之是は密談所と申候所にて三方三尺程の床有之不殘毛氈をかけ申候扨其間より士分の者四十四人外に隨者四五人是は黒奴也右の者打通り夫々床に腰を掛け候て御役人方御出座同じく被腰掛御通辯對面の一禮有之夫より茶煙草盆菓子等も有之菓子はカステイラアルヘイに候所皆大悦の様子にて殘り候を紙にて包み申候右の一儀相濟例の密談所へペルリ始め五人案内にて相通り林公始め井戸公伊澤公鵜殿公松崎公御出餘程の間に有之候是は極密談の義にて一向外へは不解其間三十九人の者共へ吸物口取刺身にて御酒出候所酒はからきは嫌ひ迚養老酒を好み候様子刺身は少々用ひ候へども外品々好み不申候文筌頻りに寫し候へば彼等も珍ら敷存じ候哉文筌の傍へ參り圖取り候を爲見呉候様と手眞似致し候故見せ候所殊の外歡び上手々々と國語にて申候中に我肖像を賴度抔仕方仕候故意に任せ認遣し候へば皆大悦致し名を認め呉候様

唯々不可聞ものは音樂に御座候

此方樣御固めは

申候間文筌寫と相認め候へば是はなんと申など申候に付ぶんせんと申候へば彼の字にて認め言葉にも能く覺えぶんせん〳〵と相唱へ候事一奇事に御座候其外種々の奇説も有之候へども急ぎ候故申洩し申候偖々存外穩便の者に候へ共阿蘭陀人よりは一とかさ多きく丈けも高く肉も隨分太り居申候四百人程のゲベル組を一人にて自由に仕候事珍らしからず候へども驚入申候唯々不可聞ものは音樂に御座候是は如何にも可嫌候へども人は面白がり候樣子に御座候是は扨置應接の一條御密談の義いかにも深き御趣意有之候事と被察候何れ交易御許しの義には無相違樣子に候へども□□□手段の面白き事も候哉彼者共歸りの節も皆々耳語致し喜色の體相見え申候又君公より被命候圖取の義も御用達申候御家士迄も内々上陸の節に竊見候のみに御座候御返翰御渡し無之只只御禮迄にて今日は事濟候樣子後とても御返翰は有之間敷被存候この故は例の密談所に有之事と被存候此方樣御固めは遙二丁程の場所に候所御幕張も只一張小倉侯御持界に張り候計りにて固體の人相見不申候皆人家の陰に屯し候も奥深き事と被存候乍去ゲベル組こそ目前に相備へ爲見度存じ候道中評判は

殊の外よろしく小生等迄も快然の至小倉侯は悉く幕張にて所々に屯し候へ共御手薄にも相見え申候殊に鐵砲も三五位の和筒に御座候て夷人共見せ候樣申候へば國禁と申わけ候也是も餘り拙き事に被存候彼者共を恐れ候樣にも可有之などゝ申候扠又此後兩三度も應接有之候樣子に御座候左候へば今月中も相掛り可申候哉と奉存候夫に付ても高川は伊澤公の御手醫師の積りに御賴御座候故數度見極候へば圖樣の義は委細出來可仕大悅仕候山々申上度事も御座候へ共略

二月十日夜認　修　理

竹村先生

〔四九七〕　夫人に贈る

安政元年二月十日

もんぱは一ッ新しく拵へ被遣べく候其外何か御心附候品可被遣候以上

一兩日は氣こうもゆるやかに成候御母樣何の御さはりもなくいらせられ候やおもと恪二郎も定て無事と存候此方甚だすこやかに候間御氣遣被下まじく候

人はつかひ樣と存申候

七日朝出立品川宿の取りつき迄參り候所とかく車をひき候ものども跡へ後れ候て夫迄もいく度となく待合候所其節は甚しく後れ候故したゝかにしかり候て此樣の目方輕き品を車にのせ六人にて引候て如此後れ候はんやう無之全くおこたり候故の事にてふらちに候是よりは馬の前にひき候へと申付候て馬の前にひかせ候所本より輕き品故いか樣にも早くひかれ候事に候ひき其上馬上より見候へば前の繩をひき候もの力をいれず候ていつも繩ゆるみ居候に付繩をやめ三人づつにて替る〲休み候て彌ひき候時は骨を惜まずひき候樣申付候所三人にて六人がかりの時よりすみやかに參り候跡にから手にて殘り候ものけく後れ候人はつかひ樣と存申候大森まで參り小休致し貳朱金を出し銘々骨折候故に酒呑ませ可申候間是をわけ取候樣申候所皆々よろこび川崎の宿まで丁度九ッ時に著候ひき萬年やと申に休み晝支度調へ夫より此方は先に參り候間供のものに跡より來候樣申付馬を早めて生麥と申所まで參り候へば海上二十町ばかりも隔り候はんとおぼしき所に異國船八そうかかりをおろし居候加奈川宿の手前の松原には茶屋など出し船見物のものども群集いたし居候い

書備　木挽町時代（四九七）夫人宛

其邊のけしきおらんだ繪に湊のさまをかき候やうにて中々事替り候風

かさま其邊のけしきおらんだ繪に湊のさまをかき候やうにて中々事替り候風景にて珍ら敷存じ申候わざ〳〵人の江戸より見に參り候もことわりと覺え候其邊まで參り候頃程なく雨の降り出し候はん樣そらの色も見え候まゝ馬をはやめて參り候處に向より御屋敷のしるしを付け候一人足ばやに來り申し候には三挺の御筒御持たせ候はゞ外へ見え候はぬやうに物を以ておほひ御持參候樣御留守居よりの使にてと申す其もの申候を承り候へば昨日足輕の持ち參り候鐵砲も御役人のさし圖にて川崎の宿より皆むしろ包に致し人足にて送り候よしに候是は全く江戸より御用心の御固人數などさし出され候樣子をあめりか人に船より見られ左樣ならば品川まで參り候はんの江戸迄參るべきのと申事申されまじき爲と聞え候たゞ〳〵穩便にあつかひはれ物にさはり候樣の事と被存候依て一同は跡より參り候さい領へ左樣に申候へと申すて我等は加奈川宿津田の處まで參り面會候て樣子をも承候所明後九日の應接にも可相成と申候にて先刻まで望月も此宿に居られ候所今少し先き此宿出立橫濱村まで參られ候と申事に候夫等談話の間に雨降り出し候故其日は此宿に止宿明朝早く

（松代藩留守居津田轉）

浦賀同心吉村一郎

場所まで到著候はんと幸宮本彦之進横濱へ參り候に付其事望月と御目附まで斷り其夜は鈴木屋と申すにとまり申候浦賀同心吉村一郎は我等止宿の樣子承り候とて尋ね參り候是は一齋先生門人にて少しは漢字も讀め候よしに候以前浦賀にて大砲の打方を敎へ候其一人にて候イギリス人アトーがかき候船の繪を送り候は此者にて夜半頃まで此度のアメリカ船の事はなし引取候此者手よりにて水を送り候船に乘り人足などの體に成り候へば異船へ乘りつけ見物出來候趣に候故明後九日の應接と成り候へば明日は早く横濱まで參り何かの支度評議も致さず候ては叶はぬ事故明朝は正六ッ出立と宿へも申付候所雨ますます降り候に付明日の天氣如何と氣遣ひ候所翌朝は霧の如き雨わづかに降り候のみにて出立にても簑笠をも用ひず其家の庭前同樣の所より船に乘り横濱のアメリカ人應對の場の前へ著船候ひき其船も吉村が世話にて浦賀御用船を賴み候故いかにも早く廿町ばかりもあるべき所を暫時に渡り申候舟には櫓を九挺かけ九人にてこぎ候故この樣に早く候ひき陸に上り候頃より雨はれよき天氣と成り申候横濱と申所は鄙獵の御座候所故に村立も宜く見え候望月の宿所

馬場彌三郎氏と同宿

は村のはづれにて少しく山がかゝり候所の寺にて候夫へ參り面會候て御筒三挺の全備の上持參候事屆け候て直に引取宿所に落つき申候庄右衛門とか申ものの宅にて馬場彌三郎氏と同宿にて候是は御目附にて申談じ等に都合よき爲に同宿候事にて候其日應對場の見分に公邊御役人衆參られ一見の上論外遠方へ御人數をさし出し候樣との沙汰にてけしからぬ事に存じ申候後は壹町半ばかりへだたり横の方は三町餘遠く其所に折りまげ固め候樣にとの事縱横合せて六町餘りに候わづかの御勢にて右樣廣き場は警固出來かね候事は申までも無之又非常の變をいましめ候爲に無之只雜人の出入など戒め候爲には足輕に竹杖にても持せ道筋を守らせ候方宜しかるべく尤も公邊より警固被蒙仰候御事に候へば其御趣意の爲には別に御役人衆心配無之樣アメリカ人に見えぬ所に御人數を出し應對ずみ迄嚴重に人數を立て萬一異變差起り候節直に繰出し候事の成り候樣致し置き候はゞ公邊より被蒙仰候最初の御趣意にも叶ひ又こゝもとの御役人申され候趣にもさはらず兩全なるべくと申候所評議の一座皆尤の事と申候に付其事小笠原樣御役人とも申談じ其上にて公儀御役人衆へ伺ひ

可申とて晩景に小笠原樣御人數の宿所並に加奈川の御役人方宿所まで津田氏出かけ昨八ッ過に引取申候ば小笠原樣にても御役人方にても昨日評議の趣意柄尤も至極の事に候と申され候よし然る所御役人方被申候はアメリカ人へも馳走に江戸表より固め人數さし出候と申す事申有之候間かげよりは表へ出し度又人數をまばらにくばり候事不承知に候はゞ（是は昨日六町あまりの所固め候樣と沙汰有之せつ御人數をいか樣ともあらくこゝかしこに立せ候てそれにて宜しくと申事に候所我等不承知に候ひき）人數を二手に致し相應の所へ出し候樣にと申事故無據かねての模樣を改め別詰に致し今日朝五時に御人數を寄せ四時に場所繰出し候所正午時ばかりに異人ども上陸七時過ぎ引取申候其間に應接場近邊へ參り見物致し候上陸のもの三百六十人と申事に候所常のゲウエールを用ひ前後左右を固め候もの三百人餘有之べく乘り參り候小舟廿五そうかにて其内筒も八ポンドばかりのもの一挺づつ有之候舟拾貳艘御座候夫を祝と申事にて數十發放ち申候手際至て宜しく御座候異人ども我等見物致し居候邊へも頻に參り腰にさし候鐵砲をば我等手に渡し候て見せ申候五發六發連發の出來候筒にて美事を極め候ものに候異人ども五人拾人むれを成し既に小笠

原様御固めの場所へ參り鐵砲弓等の道具を玩びものに致し候趣に候いかさま
御備の前へ始終參り居り候御家の御人數の方へは一向に參り不申其内三人か
少しく御人數の方へやゝ參り候はんと致し候が一人此方にてよせ〳〵と申候
が如き手つきを致し候所皆夫にて引返し一人も御備の前へ參り不申候是は全
く不たんれんながら法の如く人數立致し置き候故侮り難く思ひ候ての事にも
可有之候小笠原様衆には公邊御役人方の申され候通に人數をばら〳〵に立て
至て法則のなき様に見え候故に其方へばかり向ひ候ものに可有之候先今日は
大に都合よろしく致大慶候今夕島津其外の人々歸り申候島津横山早速參り被（島津文三郎）
申候はんずれば夫より尙委しき事は御聞き被下べく候此事先あら〳〵申越し
候間御母様へ御申上可給候此の文人に御見せ候事は被成まじく候三村氏へも（三村晴山）
宅にてはよく候へども狩野殿へ御見せ候等は堅く御斷り可被成候外様のひは（狩野勝川）
んも認め有之候間あしく候よく御心得べく候めで度かしく

二月十日夜　　脩理

お順どの

猶銀藏よりも委細御聞き可被成候態々銀藏さしこし候は別義に無之此表さうりう些さ長かるべく候依て常のじゆばんもんぱつゝ袖常の下著被遣可被下候枕一ッ宮下よりもらひ候風呂敷にて拵へ送り可給候陣羽織は折角持參の所公儀御役人より用ひ候なさ被申事にて全く不用に成り申し候蟻川なぞ別して力を落し可申さ氣の毒に存じ申候御固めの御人數も野服さ申事故わり羽織にても宜しく又ちりめんの丸羽織にてもよく候依てちりめんの黒の三所紋羽織一ッ仕立御送り可給候是は跡より早速に致し先此方銀藏戻りの節はあや織の丸羽織を可被遣候以上の用向きに候間御取落し無之樣可被成候外にうに一箱ふしをおろしでんぶに致し一曲右御遣し可被下候此方へんぴ故給もの何も無之故如此御座候以上

ワーフルも出來候はゞ少し可被遣候てふにもよろしく

安政元年二月十九日

〔四九八〕 川田八之助外壹名に贈る

此間内願之筋を以て一簡拜呈候所早速御誨答被下辱奉存候兎角只今に春寒も

退きかね候へども御出張中御履用倍御健安之狀詳悉浣慰之劇奉存候偖內願一條早速祭酒公へ御申上拙箚をも被入御內覧被下候趣高誼の至千萬奉感謝候被仰下候に大勢の御門下殊に其主家より內托等有之候向も候て際限も無御座候に付一切御斷に相成候所に候へば小弟のかねて邊防の事に苦心候義も御承知被成下候義には候へども何分一統へ響候事故に不得已御斷と申事御尤の義不及是非奉存候斯く御座候所へ再び申上候はんも如何の義にて恐入候へども前書中胸臆には御座候ひながら申述べざる一義有之候に付試に兩老兄迄布陳仕候道理の御座候義と被思召被下候はゞ何分も尙宜しく御執成被下度奉懇候抑小弟多年西洋之書を兼ね學び天地萬物の實際を窮め詳證術分析術等の大略をも心得大砲小銃諸器械の製作使用をも講究し攻戰守禦の陣法戰術に渉り候て東西の所長を兼取り一家の言を成し候はんと謀り候主意は外國にて存じ候事を此邦にては存じ候はず外國にて能くし候事を此邦にては能くし候はず候時は國力も遂に彼れに匹敵し候事能はず其所を深く恐れ候て同學の訾咲をも犯し今日迄も其事に寢食候義に御座候同力度德と尙書にも有之候通り敵國ある

に對し候ては聖學を以て申候ても兎に角國力第一に居り候事と奉存候國力弱く候てはいか程其德有之候ても強敵を制伏し候事は出來かね候事と被存候去ればこそ文王を稱し候にも大國其力を恐れ小國その德に懷くと申候と奉存候扨其國力を强くし敵國をして恐れしめんには先敵國にて知り候事を知り敵國にて能くし候事を能くし候て遂に其上に超出候に無之候ては能はざる事と奉存候大凡敵國の侮りを受け候は全く彼れが智力學力の及び候所に此方の智力學力及び候はぬより出で候事と被存候昨年以來彌利堅の事起り當春に及び御拒絕にも至りかね春秋の所謂城下の盟同樣の事に至り候も畢竟彼れの知り候事の未だ明かならず彼れの能くし候事の未だ開けざる所に歸宿候と奉存候去れば此邦にも彼國の諸學科を心得候者隨分有之候と申すを示し候方此節にても尙不明補ひには可相成阿蘭通事など申もの通辯は聞に合ひ候へども學術の事に至り候ては兎角不心得なるが多く每度外國へ對し恥かしき事に存居候其中にて候へば御門下に小弟等有之漢學の餘西洋諸科に涉り居候と申ものにて異船御見分の節御陪從被仰付候はゞ聊祭酒公御門下御教育の御盛事を贊揚し

候にも足り可申是は本邦に彼國の諸科の稍開け居候所を知らせ候にも可相成又小弟一流の人御陪從相願ひ候ものゝ内決して多くも有之まじく候へば一統への響にも相成申まじくやに奉存候既に一昨日か異人の内十二三年前始めて發明候ひし寫眞鏡を持來り小弟の乘り參候馬を寫し候故兼て其器の製作使用を記し候書を藏し罷在其用ひ候二種の藥品の名をも心得居候に付其二種の名を呼びいづれを用ひ候やを附き居り候同心へ尋ねさせ候所異人大に驚きいかがして其名を存じ候やと申程にて候ひき其樣子を以ても此邦の人は何も心得ず候と申樣存居候と被察候依て異船御見分の節小弟御供被仰付候はゞ少しく御補も可有御座と相考候此事此間も心中には有之候ひしかども自ら衒するの嫌を免かれず候故に認めず候ひき彼と申是と申餘りに遺憾なる事に奉存候に付小嫌を顧みず吐露仕候宜しく御勘辨御進止被下候樣奉萬祈候以上

（宛名を缺く）

安政元年二月廿六日

〔四九九〕　藤田東湖に贈る

先夜は突然

拜啓先夜は突然拜訪奉獲面謁卄年來の傾想を慰し喜躍之至に奉存候然ば小生

拜訪奉獲面謁廿年來の傾想を慰し

皇國の御爲には千載の失計

も又々用向有之昨夕此表へ罷還候此間面陳仕候一條は如何なる消息にて御座候やらん下田迄出候と申船も一昨日迄猿島邊にかゝり居候と根岸の土人橫濱のものに語り候と申事昨日此表に歸りがけ承候御助力等にて下田の事に異議起り候故の義歟夫に致候ても奉得拜謁候ひしは廿一日の夜にて二艘の船の發し候は廿二日早朝の事に候へば其船の直に猿島に躊躇候は不審の義に被存候何ぞ御聞込被成候義は無御座候歟昨夕罷還長岡藩衆に面會承候へば下田の義は兼て愚察の通果して江川氏より出候に相違無之と申事に候此人一人の爲には一時の巧策とも可申候へども皇國の御爲には千載の失計に歸し申候我攻守に不便に候地へ敵を引き入れ候はんは三尺の童子も猶其害を知り候事に御座候然るを此人好んで此計を進めしは例の卑に依て高を成さんと欲する陋見たり自分の管轄候處の地にして彼の陸行不便の絕地なるを幸とし洋人の學術技藝をも外手にしらせず吾手にて獨り先づ學び得候はんと企候事と被察候誠に惡むべき私計と存申候一旦已むことを得ずして敵に地を借し地を與へ候とても從來我力を以て制し得易き所を撰び候事當然の事と奉存候是等申候迄も無

其地を以て横濱等の近地に改め：勾踐が朝暮の膽と成し

之御同案の義に可有御座候へば何分にも御力を盡し早く下田の義御延引に相成候樣御計策所祈御座候其地を以て横濱等の近地に改め碇泊の洋船を望んで勾踐が朝暮の膽と成し候はんこと又是に繼ぐの一策にて御座候先夜も被仰候通り近地と申處當今の大禁忌に可有御座候得共其大禁忌にて候故に又對症の大良藥と爲し候義に御座候只今禍を轉じて福と爲し敗を變じて功と成し候策恐くは此外に有御座間敷と奉存候間先夕も推參又此紙面をも呈し候義に御座候千萬心照不宣

二月念六　　啓　叩頭

藤田君　臺下

東湖よりの返事　安政元年二月廿八日

謹誦先夜は御貴臨被下如諭廿年來にて得拜晤欣慰不啻奉存候扨は下田一條尙又御細書之趣敬承仕候然る處異船一旦出帆又々立歸候譯は全く念二念三風波にて躊躇之よし戸田豆州より申出候夷の眞情は如何歟表向申出は右之通に御座候下田之事建議の出所長岡より御聞被成候由右出所は不詳候へ共管下之事ゆゑいづれ韮山承知は相違無之奉存候念五朝川路氏へ面晤仕候處同人はやはり浦賀の方可然との說に御座候ひき朝暮横濱にて異船をながめ

越王の胥膽に擬義は六ヶ敷相聞申候陳皮茯苓に候へば病家安心服用いたし候へども大黄巴豆等之激劑は勿論附子人參さへ被用不申長太息此事に御座候今日は一橋卿敝邸へ御出にて繁冗鳥渡歸舍中草々相認亂毫御推讀可被下候頓首

二月念八　　彪

佐久間君拜復

〔五〇〇〕 山田兵衛に贈る

神戸市外　山田孝太郎氏藏

安政元年二月廿九日

御祖父樣御不幸

昨日御上屋敷へ參り承候へば御在所御留守宅にても散々至極御祖父樣御不幸之由誠に言語道斷之次第兼て御話しにも修業に此表へ御出候ても其御事のみ御心にかゝり候ゝ御座候が果して俄に御不幸御傷悼察入申候右之御樣子に候□先早速此方迄御引取候樣存じ候此義可申進ため銀藏他一人差出し候以上

二月廿九日　　修理

權之助樣

〔五〇一〕 小山田壹岐に贈る

安政元年二月三十日

六斤地砲御鑄立の義かねて申上候通彌明朔日の手配に仕候錫の義如何取計可然や御指圖可被成下候以上

二月三十日　佐久間修理

小壹岐樣

〔五〇二〕　小山田壹岐に贈る

安政元年三月二日

大銃御鑄立錫之義に付主水殿迄被仰遣昨日中には事相分り可申旨此程被仰下候御鑄立之義如何相心得宜敷御座候や奉伺候右御鑄立之事御上にて御急ぎ被遊候と申に付御用中立歸をも被仰渡候處錫の義等にて御鑄立之義早速埒あき不申候時は空しく此表にて罷在候はん事不本意之義奉存候御固場に罷在候へばば日々御足輕其外砲御調練も仕候義にて近日は夷人上陸も少く閑日多く候に就ては猶右調練をも銘々少しく覺えの付き候樣仕候方責ての御奉公と奉存候私彼地に罷在候節より蟻川賢之助義も散々風邪氣にて平臥仕居只今に快方不仕候よしに候へば其外御人數の内壹人として調練の世話出來候者無御座候此

御鑄立之義如何相心得宜敷御座候や

節にては百人の御足輕等も日々いたづらに惜しき日を過し候義に被存候左候へば私義御様子次第は早速彼地へ立戻り候方可然哉此段御指圖可被成下候以上（早速彼地へ立戻り候方可然哉）

三月二日

佐久間修理

小壹岐様

（安政元年三月九日）

（門弟小林虎三郎、主家は老中牧野備前守）

〔五〇三〕夫人に贈る

御母様へは別段不申上候故宜しく御申上可被下候以上

今朝の御文夕方相とゞき披見致し候御母さまにも御きげんよくおもと二郎も何のさはりも無之候と承り悦入候我等至てすこやかに候まゝ御きづかひ被下まじく候扨小林の事誠に氣の毒千萬に存候天下の御爲自分の主家にも當時御役勤められ候て千載の不覺御座候ては如何と氣遣ひ候より種々奔走も致し候事にて候所其事あしく候と申にてつみ蒙り候て當人にはいさゝかきずに成り不申候所牧野様御家の御不行屆きは世にも廣まり可申と竊に嘆かはしく存じ

（第一卷淨稿五一頁參照）

候事に御座候一封書狀遣し候閒御屆け可被下候此度小林命を受けて國に歸り候を送り候文をば跡より遣し可申候へば其事御申置き可被下候二郎せきの藥河本よりもらはれ候よしさしての事にも有之閒敷候湯を多く呑せ候がよく候さては別紙に認め候品々此者に御遣し可被下候急に入用に付わざ〳〵取に遣し申候昨日今日の頃此地引拂にも可成と申事にて候所又々手まごれ十五日過ならでは歸宅有之まじく候依て此品々をも取に遣し候事に御座候先は今日の御返事旁申殘し候めで度かしく

三月九日夜　　修理

お順どの

〔五〇四〕　夫人に贈る

安政元年三月十二日

かぢ鐵參り候に就き御文被下御母樣彌御きげんよくおもと恪二郎も御無事の便承り悅入候昨日も銀藏歸り候節御細々御返事うれしく存候此閒あまり〳〵丈夫に候閒御きづかひ被下まじく候アメリカ人の事も御母樣御きづかひ被下

ペルリ上陸候せつも通りがけ我等の前を過ぎ候時一寸會釋して通り申候

候との事ありがたく候が何も子細なき事に御座候一昨日ペルリ上陸候せつも通りがけ我等の前を過ぎ候時一寸會釋して通り申候ペルリは一通りの人にはゑしやくは致さぬよしに候所右様の事故人々かれこれ申候と見え申候何もわけもなき事に御座候鐵すぐさま歸り候に付き御返事まで草々めで度かしく

十二日　修理

お順どの

いせんも明日か明後日頃は出帆と申事にさたいたし候左候へば其出帆のよく日はぜひ歸る事に相成候左様御母様へも御申上可被下候

安政元年四月三日

〔五〇五〕 川路聖謨に贈る

此間は登館拜謁御酒饌ども拜戴難有奉感戢候然者其節蒙仰候義諸書討索仕候所城中ばかりに無之是非とも固く持怺へ候はで叶はざる要害の處はボムフレイ（石榴彈を避るの義なり）ブロックホイス（尺角餘の大材を以て屋壁屋宇共掩ひ候人溜り）を置候事近來の定法と見え候左候へば例の御場所其設御座候はん事不可と申すべからず奉存候但去年右御

陸地離堡の形を杜撰を以て海中に寫され候もの

是非とも御本丸西御丸も西洋築城の新法を以て御改正有御座度事

事始御座候以前より其位置西洋にて海港を固め候法に倣はれ候にも無之陸地離堡の形を杜撰を以て海中に寫され候もの故に惟當今多く財用を被糜候の損有之のみならず他日戰爭の實際に於て必ず固守の成法に行つかへ候事可有之と不滿の義精々申上候ひき右様最初申分御座候御場所の義に付ボムフレイ、ブロックホイスばかり更に御國用を被費彼方の爲す所に御據被成候義も夫丈の利益無之御不用の義と奉存候乍去又退き勘辨仕候へば最初より申分御座候御場所の義に付責ては其守りの爲に被置候御人數を敵船の暴火に當てざる様に御處置御座候も亦道理御座候事に奉存候是等事の大小輕重を御計り宜しく御決斷有御座度御事と奉存候偖又右御場所のみは箇様御堅固に御力を被盡候とも此所にて賊と鏖戰御座候はん事必しも期すべからざることに候得ば是非とも御本丸西御丸も西洋築城の新法を以て御改正有御座度事存候左なくして唯御近傍の小堡のみ御念を御入候はん事識者より見候はゞ是を如何議し奉るべきや御熟慮被爲在度御事奉存候其上例の海堡を彌利堅人滯船中夜間委しく致測量海の淺深堡の大小形狀明細圖に仕立て江戸にては奇怪なるもの海中に出來

二月廿六日の夜は永代橋迄小艇を以て乗入候よし

候とて竊に嘗咲致し候由にも相聞候既に二月廿六日の夜は永代橋迄小艇を以て乗入候よし彼船中に罷在候本邦の漂民口走り候趣傳聞仕候夫等實否は難計候得共當時の勢必ずなしとも申難かるべく奉存候兎に角夫等の情實御探索の爲にも小生輩のごときもの物學びと號し兩三人も下田滯在中彼船へ被遣候方時に取り大なる天下の御裨益と奉存候先頃六十日の滯船中彼れには本邦の御不屆を飽迄見透かされ此方にては何以て彼の事實を御探索御座候事も無御座又彼の所長を駛と御學び取りも無之空しく横濱を引取らせ候は惜むべきの限りと奉存候其例を追ひ下田滯船中も空しく日子を糜し候はん事餘り遺憾にも奉存候間此義申上候彼を知り候事詳かならず候ては和戰とも其失多かるべく候間能々深く遠く御思慮を被爲運候樣奉存候偕先夕被仰下候小生阮甫云々と申義其節異船の容子等も親しく覽觀も仕度候よりうかと兎も角もと申上候所退て勘辨仕候得ば差支の筋も多く候間右御挨拶申上候義は御不用に被成下度奉冀候先夕の拜謝旁此段申上候以上

四月三日

（以下の書簡此時代と推定すよりて一括し此處に掲ぐ）

（又兵衞は虎三郎の父にて誠齋と號す）

才氣不凡…志行篤實にて當今多く得べからざる御人物

〔五〇六〕　小林又兵衞に贈る

度々御手敎拜接辱莊誦仕候先以沍寒の節倍御輕安被成御與居候條結構に奉存候其時々拜答可仕候處原來疎懶且何かと俗紛蝟集乍存御無音に打過候段幸に御海容被下度候偖令郎御事陸々御世話も屆かず候處御懇に御謝辭等被仰下深く慚愧之至存候才氣不凡其上第一に志行篤實にて當今多く得べからざる御人物と他日に望み候處不淺存候學幷東西術兼文武候事僕の志し候處に有之候へば其衣鉢多分斯人に落ち可申と存候事に御座候兎に角此節と成り候所にては漢土の學のみにては空疎の議を免かれず又西洋の學ばかりにては道德義理の講究無之候故に縱令人目を驚かし候程の大事業を成し候と雖も賢聖の作所と懸隔候所有之依而是を合併候にあらざれば完全の事とは致し難く候其事に就き詩有之御一咲可被下候

　東洋道德西洋藝　匡廓相依完圈模　大地周圍一萬里　還須虧得半隅無

末句の意は道德藝術相濟ひ候事譬へば亞細亞も歐羅巴も合せて地球を成し候

如くにて一隅を缺き候ては圓形を成し不申候その如く道德藝術一を缺き候ては完全の者にあらずとの考に御座候思召被付候御事も御座候はゞ被仰下度奉冀候將又御國產の品折々御惠投被下每度奉多謝候拙詩先年聲律を誤り置き候閒認め直し差出し候樣致敬諾候ふつゝかなる詩繕寫も愧入候へ共すきにも相成少閑を得候はゞ責を塞ぎ可申候拜復稽緩の申譯旁如此に御座候時氣折角御保護所祈御座候以上

〔五〇七〕川路聖謨に贈る

昨宵は久々にて奉獲拜謁殊に御酒等頂戴仕重疊難有奉感戢候但禦邊の一事に至り候ては竊に以水投石之嘆を免れず明公猶且如此に被爲入候得ば其他尙何ぞ望まんと長大息に堪へず奉存候乍然再思仕候へば愚說の不蒙御點頭候は全く彼方の時事形勢より海陸の兵法等深く御承知不被爲入候故の御事と被存候是等樞要の筋被遊御合點候はゞ明公の御聰明必ず水を以て水に投ずるの機なくんばあらずと奉存候義に御座候右に付一策奉勸候御用御隙の御話相手に杉

禦邊の一事に至り候ては竊に以水投石之嘆を免れず

御話相手に杉田成卿箕

作阮甫等被召呼候はゞ

田成卿箕作阮甫等被召呼候はゞ必ず御聞見を長じ可申奉存候阮甫は西洋地理に頗る委しく成卿は彼方兵制をも稍調べ居候間随分御補益に可相成と相考候唯一通りの砲術家などと申ものは聞見も淺く高識無之ものに付御取捨無御座候ては叶はざる事と奉存候同じ砲術家にても砲術の砲術あり兵法の砲術あり此差別ある事を御存知無御座候ては鳥喙を食ふの譬に等しかるべく奉存候昨宵或先生の御噂御座候に付拙文一篇入御覽候は全く此差別を被遊御辨別候樣に仕度心得にて御座候所御話他へ移り候て遂其趣意を盡さず候ひき其他猶奉啓沃度事共多端に御座候へども未其機を得ずと奉存候故相扣申候其内御沈思被遊昨夜申上候事共の内成程と思召被爲付候歟或は更に御不審を生じ被遊御難問候思召被爲入候はゞ天下幸甚と奉存候何分是は當今のみならず永世迄の一大事に御座候間深く被爲留思召候樣奉祈候昨夕の御請旁此段申上候恐惶頓首

十月七日

猶々仰を蒙り候拙畫宅に有之候間爲持差上候寬々御留被爲置不相妨候以上

近作一首奉瀆電矚候是は兼ての愚見に御座候高評奉願候

帝用蚩尤兵　終克蚩尤兵　聖人百世師　何無學夫明

刀槍我所長　砲艦彼所精　多少萬古算　長令英雄驚　啓稿

啓頓首拜覆

川路明公閤下　玉展

〔五〇八〕 高田幾太に贈る

只今罷歸候處例の長州様より今朝から詰掛け居鑄立早々大砲の分不殘もらひ受度との御事に御座候ひき然る處主水殿御決斷にて御屋敷納物被成大慶不過之奉存候但長州様にては大に力を落し候様子にて其代り早速鑄立もらひ度との事に御座候鑄物師も其節銅錫とも少しも多く取入置度由にて新製六ポンド筒代戴き申度段申出候依之過刻御話申上候通金子御渡し可被下候筒の代金百十圓奉願候委細は鑄物師綱之丞可申上候頓首

木挽町時代か

〔五〇九〕　高田幾太に贈る

拝見仕候仰之御容體篤と勘考加減調劑仕差上候御過氣益々御よろしかるべく推測致され候如何委細は令郎へ御ふくめいたし候へば御聽了先は別包御試可被成下候頓首

十六日

二白當時召遣ひ候僕は壯年之節相撲など少し致し候哉の由にて力量に至りてはむざと人に負け候はずなど家内及び門生へほこり候との事此頃門生等と僕にて棒押し致し居候小生も試み候處なる程普通のものには無之樣子に候へども彼れ總身に力を入れ候て押し候へども小生は更に動き不申も卒度強く押し候へと勵し彼れ汗を水の如くに流し候ても小生にはおよび申さず呵々盟臺は小生と御同辰之御事に御座候へば御養生だに綿密に加させられ候はゞ御回復は期して可奉待候頓首

高田盟臺　案下　　啓　再拜

〔五一〇〕 中俣一平に贈る

松代町 中俣兼雄氏藏

猶々乍序奉伺候御筒改鑄之事鎌原大夫之受方如何に御座候ひしや無覺束存じ候まゝ一寸相伺候以上

過日は御來訪殊に何よりの良箋御惠投千萬難有奉謝候然ば其節差上候砲圖明朝鑄物師方に所用御座候間一先御投還被下度奉希候鑄立相仕舞候へば用も無之候間其節御用に候はゞ寛々差上置可申候此段過刻之拜謝旁如此御座候以上

十九日

佐久間修理

中俣一平樣 當用

〔五一一〕 竹村金吾に贈る

過日は御面倒の義奉願候定めて願候通被成下候御事と奉存千萬奉多謝候時下嚴寒御動履益御體寧に被成御座候や奉伺候賤家幸無事罷在候乍憚御放慮奉仰候然者此品菲薄之至御座候得共聊寒候拜候之印迄呈上仕候御哂存被成下度候

数寄屋橋内失火

宅の内殘らず方付

乍例多忙其上一昨夜數寄屋橋内失火にて折節風も勁くしかも宅の邊は風の眞下に當り候故手の如き大さの火の子雨の如く降りかゝり一しきりは免ても遁れ申まじく存じ候所幸御堀内にて燒け留り免かれ候義に御座候乍然疊を上げ候はぬ迄にて宅の内殘らず方付候て其跡調にて今日頃も殊の外混雜仕候故多書仕らず候但大分屋敷の内浮説も有之候間申上候迄に無御座候得共御心配り十分に有御座度奉祈候時下寒威折角御保重可被遊候餘者來陽芽出度可申上候以上

臘月念二　　　啓　再　拜

竹　村　先　生　臺下

猶々乍憚尊嫂前へも可然御致聲奉希候以上

〔五一三〕　獄中より某に贈る　此の某は川路の臣下なるが如し

某疎拙に因て禍を取り知己の累を爲し候事申すべき辭とても無之今更書簡等呈し候事愧入候へども憂心如燬存候筋候に付不得止事如此に候幸に御視置可

吏訊の際に於て口づから當今の御急務を陳べ

被下候抑天之方蹶無然泄々」とも申候此節に至り候ても朝廷の大臣百僚の御方皆猶怠緩悦従の御様子と被察候某下獄之砌吏訊の際に於て口づから當今の御急務を陳べ當路を激發し少しく裨補する所有之度と存じ込候ひし所に所謂以「水投」石にて心を用ひ候甲斐も無之更にその補ひ候所を見ず結句依之大禍を取り更に朝廷の累を成し候べき兆も有之候様心付候に付方蹶の時節ながら少しく日月を涉候閒には事體の分り兼候事も明かに成り時勢の知れかね候事も漸くに白し候て夫に依て國是も定り候はんと存じ其了簡に相成姑く罷在候所今に至り猶人をえらび彼地に遣し探索を務めしめられ候はん思召も無之頻に外國へ渡海は御國の大禁々々と唱へ外國人不斷本邦へ參りつどひ候様相成候に就ても御締り筋の爲に此度の獄を嚴重にせずしては叶はずと申やうなる御趣意の様被相察候外國渡海の禁は御當家いつの御代よりと申事も詳にし申さず候へども鎖國の御趣意を被爲定航船の檣一本に限り海路も可成丈地方を近く乘り候様にと申御制度に相成候頃の義にて外國へ漂流の民終身押込め他所他國の人に面會せしめられざる御定も此御時代よりの事と被存候然るに王朝の

此方にては終に守り得べからざるの古法を株守し

昔は外國に漂流するもの歸朝候へば幾年かの復を（諸年貢御免ノ事也）賜り候と申事令に見え候樣に覺え候是は唐山へもの學びに學生を被遣候頃の御制度と見え候去ればかゝる義は皆時に因て宜きを制せられ候義と被存候鎖國の御趣意も外蕃の形勢此節の如く盛大ならず蒸氣船等の發明無之以前は至極の御良法にて候へども外國の技能藝術今日の盛なるに至り蒸氣船の便利萬國に行はれ全世界をも月餘にして一周候程の事に相成候ては世界萬國の形勢往日とは全く別物に相成二千里三千里隔り候國と雖も比隣同樣にて是にて彼を壓倒候程の國力無之候てはとても鎖國の御趣意可被貫時勢に無之其上彼のよくする所我も亦これをよくするに非ざれば彼と抗拒候事遂に成しがたかるべく既に當春御國の御大恥を被忍御要害の土地を彼が申にまかせ御借與御座候も我の技巧藝術彼れに比すべくも無之蒸氣船は勿論諸軍艦とも彼の如く堅牢便利なるが無之故にて候彼れには昨年も今年もいづ方となく恣に上陸し内海の測量までも自由に致され候て剩へ土地を借し候に至り此方にては終に守り得べからざるの古法を株守し彼の情實を探知し候べきの急務をも心づかれず偶此事に心を盡し候て身

（主明公は川路聖謨を指せるか）

を苦しめ報國の忠を企候もの有之候得ば其苦心の所をも問はず貨の爲利の爲に動き候もの同樣に嚴重にこれを治めて外國との締りをつけられ候はんなどと申は抑も何の御趣意にて候や無知の匹夫と雖も盗人の入り來らんに自ら其身を束縛して其盗人の爲すに任せ候ものは有之間敷候今朝廷に於てこの匹夫の知に及ばれざる事何の故にて候や皆かの怠緩悅從の致す所と被相察候天之方蹶無然泄々の義をば何と御心得候事にや彌利堅の無禮は盗人の比に無之わが古法を株守し人の彼に往くを禁じ其情を知る事を務めず剰へ志士の志を挫き奇材異能の士を損せられ候はわれと我身を束縛するの類には無之候や兵法（孫子ノ用間篇）にも明君賢將。所ニ以動而勝レ人。成功出ニ於衆一者。先知也。先知者。不レ可レ取ニ於鬼神一。不レ可レ象ニ於事一。不レ可レ驗ニ於度一。必取ニ於人一。知ニ敵之情一者也。との明文も有之要路には今の時に當りても猶是等の事御心得なくおはしまし候御事か主明公にも同じく海防の御掛にて被成御座候得ばかゝる大事は御建議御討論無御座候ては不被爲濟御事と奉存候此用間の一事當時御變通無御座候はゞ天下は終に不可爲と奉存候去年六月彌利堅の書翰御請取に相成候御始末實に皇國開闢以來未曾有の事共にて未

我輩の如きものをも凡民同様御覽被下候事

だ兵を交へずと申ばかり實に一大敵を被得候義に付此時に當り候ては兵法に申候無政の令を懸け無法の賞を施し（此二句孫子の九地篇に出候と覺候）天下の奇材異能の士を御振興御座候てこそ可然御事にて候所所謂有吏材者未必有將材にて大切なる土地迄をも御借與御座候に至り猶夫等の御思慮も無之我輩の如きものをも凡民同様御覽被下候事浩嘆の至に候萬卒は得易く一將は得難しとも申候はずや又周禮の八議にも議賢議能とも有之候はずや況や此非常の時節に於てをや某敢て賢の名に當り得ず候と雖も今時に當り一二の能無之と申べからず此度の大敗を取り候次第に候得ば將名も負ひ難く候得共元來將家の子孫おのづから卒伍の人とも異なり候樣存じ申候然る所時勢の御勘辨も無之人材の御料見も無之彌利堅人のしげ／＼參り候に付て某等の獄を嚴にして御締りを取付候はん位の思召にては此節爰許出入候小吏などの申すが如く外藩御預けなどと申事にも相成可申歟（たとひ御褒賞御座候とても當今の天下吉田生の如きものも決して多人數は出で來り申まじく候此度のことは大なる仕損じに候へども敢て爲し候人に無之候ては多難の際非常の用は成し難く過を見て其人を知るべき事と存候然る所吾輩獄につながれ候にて是充分の御締りと被存申候樣にては稍志御座候ものも皆戰慄頭を縮め天下の御爲を謀り候念も自然と消阻し可申との方蹶の際に當り何程の御損に可有之歟痛哭に餘あることと存候）夫も是も天定と存

何とぞ主明公の御鼎力を以て世の固弊を被除某等の獄御定斷

獄中は元來筆墨無之筈に付

じ明め候へば事の濟候樣のもの丶是迄多年外寇のとの爲めに心を用ひ許多の苦辛を以て諸藝術を講究候も此節の如き時に自國の助けとも成り即ち皇國の御爲めに相成り可申志願にて候ひし所に萬一小吏輩の申候如くに候時は是迄の忠志も一朝にして水の泡に相成り自國の爲に竊に力を盡し候はんとも先代より請候莫大の恩義をも報い候となくして此時を失ひ候はん事千載の遺恨に有之又八十歳に及び候老母の再び難見候はんと是又何等の無情に可有之や御諒照可被下候乍去是等は一人の私情に付平日厚く主明公の御知遇を荷ひ候得共此節の場號訴可仕樣も無御座候惟前段用間の一事は當今天下の御一大計にして事是より重きは無之他日成敗の機こ丶に決し候と存じ候に付何とぞ主明公の御鼎力を以て世の固弊を被除某等の獄御定斷御座候前に於て時勢御省み人を選み彼に被遣候の御趣向相立候樣仕度奉存候某等の獄御定斷御座候後に又御趣向を被爲替候ては朝廷の御擧措輕々しく相成天下後世批判も可有之候此事當今主明公に號訴し候外無之候に付極密老兄迄此書を呈し候獄中は元來筆墨無之筈に付外へ書を發し候は固より嚴禁にて候夫を主明公御覽候など申

候ては被爲濟まじく候へば老兄迄漸に此書を呈し候ことに御座候是も老兄とは格別の交際にて候故に候間老兄にも其思召にて御覽被下尤なる筋と被思召被下候はゞ此趣意を盡く老兄のものに御認直し被下夫を以て主明公へ御申上可被下主公の御鼎力にて當今例の御法の御變通に至り候はゞ實に天日を回すの御大功とも可申某輩も御末光に從ひ蘇息を得候義も可有之又多少苦忠の顯はれ候期も可有御座候母子生會を得候とも叶ひ可申主家へ報恩を謀り候事も屆き可申候左候はゞ某一己の上にも實に再造の御恩惠とも可申候右老兄御周旋の程奉懇願候言不盡意千萬御心諒可被下候不一

安政元年四月廿七日

（宛名日附とも切れてなし）

〔五一三〕　獄中より山寺源大夫三村晴山に贈る

東京市　赤池濃氏藏

此度之義に付兩盟臺一方ならず御厚情御周旋被下候趣甥どもより極密申遣し御深交之故と申ながら感刻之劇不知所謝奉存候偖詩文之義等有之輕忽疎漏之

吉田生と申者當年廿五歳の少年には候へ共

小弟門下にも多く無之忠直義烈の士

始末御下墨可被下と近頃愧入候義に御座候但吉田生と申もの當年廿五歳之少年には候へ共元來長州藩兵家の子にて漢書をも達者に讀下し膽力も有之文才も候てよく難苦に堪え候事は生得の得手にて海防の事には頗る思をなやまし萩藩兵制の事にも深く心を入れ存寄りの次第書立て其筋へ申出候義も度々有之小弟門下にも多く無之忠直義烈の士に御座候然る所一昨年中遊歷之事に由て落度有之知行被召離候尤も萩御城下江戸御屋敷出入免許有之十年の家學修行被申付候とて其後もよく宅へ致出精候然るに去夏米利堅之事出來り本邦開闢以來未曾有之體たらくにて小弟にも忼慨悲憤に堪えず差當り敵愾の計策を考へ候に諸事皆御手後れと相成如何とも手のつくべき様無之乍去七年の病に三年の艾にて當今にても邊備之急務は彼をよく知るより先なるはなく彼を知るの方略は人才を選び彼の地方に遣し形勢事情をまのあたり探索せしめ火兵の術水軍之方海岸の固め城壘の制等も書傳ばかりにては何分に埓あき不申往往靴を隔てゝ痒處を掻くの歎を免れず候へば兎に角此人を遣はされ候の道を開き候より外無之と存じ其策去る要路之御方へも申試み川路司農御取次を以

吉田生此節逆境に居り何がな功を建て：：：見込の次第及物語候所當人骨髓に徹し

萬次郎は此節の手本に付

て福山侯へ奉り候上書にもその義を認め候處事行はれざる御様子にて殘念に存じ候内土州漂民萬次郎預御召出御普請役に御取立御座候と承り中心竊に欣び候は是までいづれの國へ漂流候ても外國へ漂流とだに申候へばそのもの終身禁錮せられ候御法に候所萬次郎義米利堅へ致漂流彼方に於て少しく書物をも讀み候の故を以て御召出しに相成候然るに萬次郎義は偏鄙の地に育ち候獵師の子にて和漢の文字をも心得ず殊に幼年にて漂流し候故に此國普通の言語さへ差支多く候よしに付御取立に預り候とて大事の御用には立申まじくさらば此節學才ある有志の士彼地に漂流し其形勢事情に心をつけ旁砲術兵法航海の技を學び兩三年にして歸朝候はゞ公邊の御重寶にいかばかり相成るべく萬一公邊にて御取用無之候とも皇國一統の利益少なかるまじくと存付き幸に吉田生此節逆境に居り何がな功を建て歸參の願ひ叶ひ候樣望み罷在候事熟知候に付見込の次第及物語候所當人骨髓に徹しいかにもと存じ候樣子にて私に事を謀り見度よし申候に付小弟申候は兎に角萬次郎は此節の手本に付漂流と申に無之候ては公邊の御法改まり候はぬ間は叶ひ申間敷乍然漂流の事は九死一

少々の路費を無心候に

生之至難にて天と人とに係り候と存候志あり才ある人に無之候てはたとひ漂流候とても世の益には成り不申人に係り候と申は此故にて候有志有才の人有之候ても風に放たれ候にあらざれば此邦の小舟を以て巨海を渡り候事能はずさて其暴風の必ず起り候はんことあらかじめ難定又其暴風には覆溺の患必ずなしと申すべからず天に係り候と申は此故にて候然りと雖も此御時節天此皇國に福し給はゞ望む所の風も起り無難に漂流も出來可申五島邊にては風の爲に乍浦邊の漁人此方へ來り候事も此方の漁人かしこに至り候事も一年に五六度は有之とに承候此節清の天德の亂も彼此風聞は候へども慥なる事わかりかね候むかし元の忽必烈志を得候へば我に弘安の亂有之候唐山の兵亂は我國に甚敷關係も候事に候へば是又差向き探索申度唐山地方にだに漂著候へば彼の地方には米利堅等の船の往來斷えず可有之左候へば志し候カリホルニヤ、ワシントン邊に至り候事容易なるべく但し公邊御法も候へばいづれにも萬次郎に傚ひ候ことを忘れ候なと申候處當人いかにも心得候とて慨然として旅裝を整へ少々の路費を無心候につき用達ち遣し候さてつら〳〵存じ候は此九死一生

付用達ち遣し候

之至難の義を當時の御爲を存じ候へばさてよくも速に決心いたし候けなげなるわかものにて候と感心に存じ遂詩も胸に浮び候故一つには彼れの志を賞し一つには彼れの心をます／＼堅くし候はん爲に倉卒に認め遣はし候其詩左の通に候

之子有靈骨　久厭蹩躠羣　振衣萬里道　心事未語人　雖則未語人　忖度或有因　相送出郭門　孤鶴橫秋旻　環海何茫々　五州自成隣　周流究形勢　一見超百聞　智者貴投機　來歸須及辰　不立非常功　身后誰能賓

（第二巻詩鈔三〇頁参照）

是は既に當五日の夜御呼出しに臨み候て樂眞盟臺へ心當りの事及御內話候節御目にかけ候所に候環海より超百聞迄は彼れの意中を忖度候所にて來歸須及辰は三年の后必らず歸り候へと申聞けたる意にて御座候然る所去暮押詰り候頃にて候ひしか此春初にて候ひしか不覺に候が吉田生飄然として宅へ參り候に付漂流も遂出來ず候歟と申唉ひ候所吉田生申し候は此度は何事も心に任かせず其上長州屋敷にても浦賀邊御固被蒙仰候よしに候へば其爲めに差向き力を盡し候義も候はんと存候間例の義は暫く思ひ止り候はんと存じ候とて出立

の節用達ち遣はし候四圓の金を封のまゝ返し戻し候其後長州様より小弟へ御頼にて十五拇ランゲホウウキツヽル筒臺とも御制作に相成候其元〆は小川市右衛門と申人に候所吉田生事を小弟へ頼み當人も此節柄の義に付此かゝり申渡置き候間福原清助と申ものと兩人へ萬端差圖致し呉候樣にと申事にて深川に於て鑄立候右大砲にも兩人よく致奔走其上吉田生は差向き臺場築立の事に心を用ひ申度とて小弟新橋御屋敷御普請方心得の爲にさし出し置候臺場雛形姑く借受け長州役人中へも相示し共々心得居度とて右雛形をも達て致無心小弟文武舍にて銃卒調練いたし居候所へ雨中態々尋ね參り雛形借用の事なども候て只今其雛形猶長藩に有之去年萬次郎に傚ひ候はんと申存念は實に全く存じ止り候事と存じ居候三月六日か横濱御陣所へも尋ね參り候へども形の如き稠人中寒溫を述べ候のみ何の一事を談じ候事無之是馬場氏始め下目附等まで皆よく知る所也唯心得の爲に彼船に近寄其形狀一見致し度如何いたし候はゞ可然と申候に付加奈川水運び人足に出立候へば近寄見られ候趣浦賀同心申候事も候間懇意の吉村一郎へ頼み遣はし候はんとて內書一通を認め相渡し候其趣意は某かねて其志有之候へども

此文直し呉候へと申差出し候

總髪故其人足に出立候事も六借きとの事に候へば不及力此ものは門人中有志のものに付某と心得内々周旋賴入候と申候然る所其夕方か又々陣所馬場氏と對座の所へ參り時宜申述候上此文直し呉候へと申差出し候則一覽候へば江戸の書生何某と申書出しにて吉田生の姓名は無之其大意は吾輩は漸東西五百里南北三百餘里の間を離れ候事能はず貴國に於ては火輪船等を以て全地球を厘かの日數に周回せられ候を承り候に跛者の健足者を羨み候より猶羨敷存じ候あはれ此船に乘せ本國へ伴ひ給はゞ千萬可辱但し吾國人外國へ渡り候は嚴禁に付此事發覺候時は刎斬の刑にも被行候べく候へば極祕に致し度との趣意に御座候其文中々面白く出來候ひき去年來此樣の假託文澤山に有之候へば更に怪み存ぜずかつ去年中の含みは存じ止り候と申事に候へば後來の心得當座稽古の爲に認め候假託の文と存じ筆を加へ遣し候然る所豈計らんや其文に別啓を作り添へ和文の書簡一通と都合三通下田に於て夷人へ遣し遂に發覺候て此次第に至り候義に御座候小弟の門人にて候上に小弟加筆致し候文を以て御國禁を犯し候義小弟一切内談等致し候事無之同意候等の義には曾て無之候へど

小弟多年外寇の事に心を盡し皇國の御爲を存じ候外無他事候ひし所

も奉對公邊恐入候義と奉存候一昨日御呼出しの節吉田も一同罷出御徒目付立合にて與力の下調にて候ひし所小弟申候所に相違無之修理が萬次郎に倣ひ候へと申教戒を背き候義愧入候と虎次郎申立候是迄の大略右の通に御座候右之所を以て此上之御周旋偏に奉冀候最初より此頃迄も小弟多年外寇の事に心を盡し皇國の御爲を存じ候外無他事候ひし所一旦にして此禍に罹り候は天小弟をして此義を唱へしめ天朝百僚の御方々に當今の急務かの人材を選び彼地に遣はされ候より外の義あるまじと申事をよく其心に得せしめ給はんとての事にも可有之と志を勵まし尋の時其趣意申立候所いか樣申候ても彼アメリカには多日滯船の間に人ならば隱所までをも見透かされ候ひながら此方にては是迄の死法を守りかれの所長を取らむすべをも知らずかの形勢事情を探らむともせられ候はぬ樣子誠に望を失ひ申候聊か世の補にも成らず候て御上之御名を出し奉り候義誠に恐入候義高年の老母もさぞかし無念にも存じ可申さらぬだに物あんじ致し候性分に候へばいか計心配も致し候はんと志の貫き候はぬに就て存じ出候へば五內共に裂るが如くに存じ申候此情幸に御炤亮可被下候

當今天下の長策

此樣の事獄中より申送り候事極禁祕に御座候間此帋中の次第御了得被成下候はゞ直に丙丁に御附し可被下候但し昨年萬次郎被召出候以後彼に漂流外國の情實を探り歸朝候へば當時此上もなき大功と存じ詩を送り候と申より吉田生其志暫く存じ留り候と申に付（金子返し候節慥かなる證人有之候人の迷惑にも成り候事故名前は是迄も不申候此上止事を得ざればその存じ留り候と申證人を出し可申存候）見せ候文を全くの假託と存じ誤り候大略迄は樂眞盟臺へ五日の夜及御内話候趣にて苦しからず送別の詩は六日に御役所にて津田氏に預け候懷中ものゝ内に態々入置申候夫を御覽被下候趣にても又當夜安世へ示し置き候にて御承知被下候にても差支有御座間敷奉存候當今天下の長策はかれにのみ見透かされ彼れを見透候策無之候ては和戰ともに成し難しと申所にて國禁をゆるべられ吉田生如きのものを彼地方へ被遣候樣にと申事水府老明公等の御議論被仰出候樣仕度候其次は御時節柄之義に付皇國の爲に萬死を犯し非常の功をも立て候はんと心を凝し候忠誠の至りを被成下御明察千卒は得易く一將は得難しとも申候へば出格の御仁惠を以て速に寛典に被從候樣仕度義と奉存候何分も宜しく御周旋之程奉懇願候以上

啓

四月廿七日

懼堂老盟臺

樂眞老盟臺　梧下

〔五一四〕獄中より北山安世に贈る

安政元年七月廿六日

續て好天氣に候今日は藤吉方まで藤三義左右承りに立寄吳候よし悅入候手紙は無之候ども御祖母様御機嫌よくゝ致大慶候爰許依舊頑健過念給るまじく候然ば過日も書入候通り其元ゟ申越候帋面いつもくゝ簡に過ぎ候て事情分りかね申候依て此月末分遣候帋中には事情のよく分り候様賴申候此節朝廷の此表の也御様子など聞かれ候事は無之候か海岸防禦の御手充等何等の樣子にや其後の事一向不承候毛利細川御兩家の人氣など如何や其外大小諸侯にても不相替西洋砲術世話有之候義か公邊には如何や當年の和蘭風說書被見候事は無之候歟もし川本などにて手に入候はゞ內々示し可給候昨年御あつらへに成候洋艦も持來り候樣子か和蘭人をもめし呼れ候なども昨年承候事も候ひしが夫等如何

御船じるしは日の丸を御用ひ候とか

や御船じるしは日の丸を御用ひ候とか御觸出しも候樣にお順より申越し候ひしが此表にて洋製に傚ひ御造立の大船は未だ出來上り候はぬやう爰許にては風聞候が果して出來候義か江川氏の手にて蒸氣船を造り候とて昨年より書物にて穿鑿候樣に承り候が少しは手始にても致し蒸氣のからくりにても出來より候義や承られ候事候はゞ申越し可給候十餘年前より我等籌策候通り此邦の事なれぬ工匠を用ひ不分りの書物讀みの棟梁にては早速埒あき申まじくたとひまげなり出來候とも夫を扱ひ航海の用を成し夫を連ね陣を作り進退かけ引して攻守の用を成候事善師に就き勤苦して修業候に無之候ては實用は無之候

我等の策

依て我等の策は船をば先彼地より購ひよき師匠をやとひ邦人に習せ船を造り候には是非とも彼地より船大工を呼び候料見にて候ひき素人拵の濫惡の器械を拙劣の人數にてあつかひ彼の精巧の器械熟練の洋虜に抗し防戰を成し候はんは譬へば羊を驅て虎狼を取拉んとするが如き致し方にて廟算決して立ち不申候是等誠に明々白々の道理にて智者を待たずして知れわたり候事と存候處今に至て當路の人是を曉られ候はぬ樣に被存候が如何やあはれ是等の御一助

をも成し候はんと苦心候ひし我等をば形の如き御扱にて言語道斷と存じ候過日與力輩罪案の事に苦心候など申こされ候が夫は岡見の話にて承知せられ候歟與力輩輕くとも御家人の事に候へば我等の爲めに苦心候より公儀の御爲に苦心候て可然事と存候夫れ匹夫匹婦は至愚なり然れども盜賊の室に入らんには必ずみづから其身を縛し盜の爲すがまゝには致すまじく候彌利堅人御國法を犯して此御膝元に船を入れ其ゆるしをも得ずして內海を測量し嚇するに兵威を以てして要害の地を借り候等其類を充る事を待ずして盜賊に有之候しかるを朝廷には彼れが成すに任せられ遂に下田をも彼へ被遣彼れには飽くまで此國の虛實を見透され候ひながら此方にては以前淸國和蘭陀の外通商の國を被停本邦地方に近寄候異船は打拂ひ候と申節一同に被爲立候御法を御守り御國人をば外國へ不被出候とて敵を得ながら敵の事情を探る事を務めず自ら其身を縛して盜賊の爲すまゝにまかせられ候如き御始末をば與力輩等何と心得居候や下田の土地僅か也とも皇朝開闢以來御世守の地にて候無餘儀時勢なればば夫をさへ突來の夷人へ御借與候事に候外國へ人を遣はさぬの外國へ罷越し

當代一時の權を以て被設候法をば通變に從はれ候べき時節にも御死守御座候事

候ものは罪あるのと申候は御當代にて其時の宜に隨て被爲立候御法にて候其御法は近來の如く萬國蒸氣船を用ひ五大洲比隣の如く成り候時勢に至り候ては惟外國に此國の患を示され候のみ惟この國人に長く其患を守らせられ候のみ何の詮も無之事に候無餘儀時勢に至候ても却て其法をばひしと御守候て皇朝御世守の土地をば輕々しくこれを夷人にかし當代一時の權を以て被設候法をば通變に從はれ候べき時節にも御死守御座候事何と申御事にて候や當今の時勢と外國の形勢とを少しく心得候者其閒に有之候はゞ明かに建言すべき事に候岡見など何と被申候や何も天下の爲に付岡見ゟ其親戚にて候與力によく其公私大小當今の大利害を說かれ其人當時の大忠臣と成候樣有之度事と存候我等罪案に關係候所は二人に送る內書草稿にて明白に候三村なども此所の利害は何と心得られ候や又我等心事は有人於此、憂君父之病、將革而求之藥、幸而得之、且知其必有效也、則不問其品之貴賤、必請之於君父矣、君父惡其名而不許、則多方謀之、竊有進之乎、抑亦坐而俟其啓手足歟、臣子至誠惻怛之情、固不可坐視其病患、則雖知後逢其怒、亦豈得不竊進之哉、是にて明白に候後刻藤三又立寄候と申事に付

先早々如此に候御祖母様へも宜しく申上可給候其外いづれへも宜しく頼入候
二郎事よく世話賴申候月末の便に近日の清書二枚見せ可給候過日の美濃帋使
ひ切候間其節又二帖遣し可給候以上

廿六日　山王祭日一日憷に藤吉ゟ品物さし入申候乍序如此に候

伯仁坊

書簡　聚遠樓時代

自安政元年九月
至元治元年三月
（文久二年十二月までは蟄居）

安政元年十月卅日

〔五一五〕 依田甚兵衞に贈る

松代町 山口勇雄氏藏

廿一日之芳簡相達拜見仕候追々霜威相增候處倍御淸健被成御座敬賀之至奉存候偖當年は四月以來一方ならず御心配御苦勞かけ奉り殊に先頃中は寒天に此表まで御勞煩被成下重疊感惕御禮の申上べきやうも無御座候早速拜謝之書狀をも差上可申之所私も十一日之雪に當り候て少しく快く覺え候ひし風邪致再感剩へ母事も九日著の途中ゟ散々不快にて平臥仕尤も始の程は唯一通りの外邪の樣に被存候所次第に宜しからず十八九日の頃は精神も致昏冒食氣などもも至て薄く夏以來の心配の一時にゆるみ候て氣力の張りの一旦に減じ候上に土地の時候も違ひ寒氣の大敵を受け候事に候へば旁以此度はたやすく平愈候はんと六ケしかるべくと私も病中ながら晝夜心配種々手充仕候等にて乍存御禮も延引仕候義に御座候幸に御亮恕被下度候母義も申上候樣の容體にて候ひし所幸に藥力功を奏し廿一二日の頃より次第に快き方に向ひ食氣も進み氣力も追々に復し此四五日來の樣子にては先々順快可仕と被存候但乍憚兩足之腫氣

廿日頃に比し候へば過半はひけ候へども平日之足に復しかね夫故か今日まで
も腰をかゝへ候はねば獨にて立ち候事能はず候何を申も滿八十と申ものゝ故快
復候にも手間取れ候事と被存候乍去逐日少々宛は宜しき方に御座候間決して
御過念被成下まじく候當人よりも宜く御禮申上度申出候扨木挽町居宅之事三
村より御話申被呉候とて詳密に被仰下難有奉存候早くより承り候よりは代價
も宜く當節柄幸の事にて御座候ひき御勘定吟味替せの事迄も三村氏申談じ被
下候よし此度は何から何迄大煩勞致し被呉候御序も御座候はゞ宜く御代謝奉
希候浦上用人へ謝物の事いかにも當然の事と奉存候武藏屋の事も被仰下是も
津田氏體面に掛り候事に候はゞ兎も角も宜く但私存念は安世より申聞け候節
も左樣申候武藏屋事は四月中兩三度內々の取次致し候のみ（よく考へ候ば二度かと存候）認め
ものゝ取次は迷惑の趣申候て一切致し不申依て其以來は別に內取次致し候も
のを拵へ一切彼れへ賴み候事無之其上最初拾金宅より出し候を彼內へは唯七
圓屆け候のみ其三圓はかのもの取込みに相成居候壹割位の減じ立ち候事は候
へども拾圓にて三圓の取込はちと甚しく其上書通の事迷惑と斷りをも致し其

後何以て頼み候事も無之候へば別段手重の謝物にも及び申まじく又謝物遣し候事に候はゞ拾圓送り候節の三圓は如何成り候事や承り度ものに候と申聞け候事に御座候安世より夫等申談じ候事と存じ候處例の不辨別ものの一向沙汰なしにて出立候よし不都合の事にて御座候ひき乍去夫も是も衆議にてよきに御取計被下候趣本より別に存念も無之義に御座候何かと段々之御手數千萬難有奉銘謝候將此品先日御餞別に呈上可仕ものに御座候所其節御猶豫奉願候通荷物屆かず延引仕候誠に有合の粗末なる品に御座候御咲留被成下候はゞ幸甚可奉存候乍憚政君へも宜しく御致意奉冀候此度之貴答段々之御禮旁申上候益々寒候に相成候折角御保護所祈御座候已上

十月卅日　大星

依田君

猶々家族よりもいづれも宜く申上度段申出候私風邪も最早全快仕候間乍憚御放念可被成下候以上

附啓御道中御阻橈なく十二日暮過御歸府被成御座候條愛度奉慶候寒威之時節何かと御途中も御迷惑の御事と奉察候御留守中政君何の御碍も不被爲在候歟奉伺候以上

〔五一六〕勝麟太郎に贈る

安政元年十一月四日

拜啓霜氣日に相加り候處北堂君御始め總じて御佳勝被成御座候御便昨三日順子への御文相屆き委しく承之喜慰之至奉存候偖今夏災患以來段々被成下候御心配此度落著にて歸藩候に付候ても何かと御配慮銘々へ御餞別御送惠被成下拜謝申上盡すべきやうも無御座難有奉存候某も四月以來專ら心を攝生に用ひ候故平素よりけく健にて風邪などにも逐感じ不申候ひし所歸國に相成愧入候事ながら精神に油斷を生じ候故か途中桶がは宿の泊にて散々外邪に冒され逐一日逗留本月（本は去の誤か）三日歸著仕候其頃は既に快く御座候ひき母等は九日に著致し候然る所母事其當日より同じく散々外感にて夫よりさうと平臥仕尤も其頃此地

四月以來專ら心を攝生に用ひ候故

本月三日歸著

一統に風邪流行にて老少をえらばず免かれ候もの稀に候故其流行に感じ候と存じ一通其手充仕候所追々に病勢進み候て十八九日の頃は神經症に相成食氣も一向に乏しく精神も昏冒候て晝夜譫語絕えず剩へ索空摸床の樣子なども候て滿八十の高齡にも有之夏以來久々の心配一時に弛み精神の張り俄に失せ候上に風土の氣候も違ひ殊に土地柄の勁寒に出逢ひ旁快方候事は至て無覺束と痛心仕候所かねても申上候ひし通僻境相談等可申醫師も無之依て心得居候所を以て種々手充仕候所幸に用藥效を奏し候て次第に輕症に趣き食氣も追々に進み精神も慥に相成此五七日之樣子にては彌順快の善候も相見え一安心仕候義に御座候始めは手足ともに腫氣なども餘程有之候所是も次第に減じ候て今日頃は足の甲に僅に見え候ばかりに相成候乍去餘程對え候事と相見え只今に座敷の內も前後より抱へ候はねば步行仕かね候體に御座候しかし乍ら追日宜しき方に相成候間遠からず全快可仕候某義も其以來依舊頑健に御座候乍憚御省念可被成下候其御地氣候如何に御座候や冬至に候へば何と申候ても霜威も強かるべく候

北堂君其後は何の御碍も不被爲在候か御容子委しく相伺度候此地両三日前迄は寒氣も例年よりゆるやかにて手水鉢などに氷のゐ候事もまれに候ひき但昨今餘程の寒威にて庭面なども堅く凍り申候然る所今日巳の時ばかりに餘程強き地震有之候尤も只今罷在候所は御安口と申地名にて候が此以前未年の大地震にも人家など一軒も損じ候事無之場所に御座候夫故か左までの事とも存じ不申しかし大分強く長くゆり候に就き母等をも致介抱庭へ出候てしばらく其靜まり候を待ち候位の事にて御座候ひき然るに不思議なる事には城下の内にても中町鍛冶町石町など申邊は只今罷在候御安口と申より僅か六七町も隔り候はん位の所にて候が地震の道筋に當り候と相見えやはり未年の如く町屋も倒れ候て人も五人ばかり致怪我家も三十軒あまり損じ候と申事に候城中なども事氣遣はしく早速安世に申付見せ候所是は一切何事も無之惟外がこひの塀わづかにいたみ候よしに御座候乍去遠方隔り候其表などへは其實より大騷にも相聞え可申左候はゞ北堂君などには別して御案事も可被成下と奉存候故段段の御禮旁其實を申上候義に御座候何も御氣遣ひ被成下候程の義に無御座只

強き地震

家も三十軒あまり損じ

今居候所は地震には以前幷に今日の例を追ひ候に氣遣ひ無之候其上一度强きふるひ有之候と其後蹔は安心なるものに御座候只今安世方に母も不快旁同居罷在候が兩三日中やはり御安口と申內にて安世方より一町ばかり東南に其表上屋敷に居候重役望月主水が別業に相應の住居有之是は至て四時の景色も宜しく庭も頗る廣く候て戶を閉ぢ書を讀み候には究竟の場所と存じ候故其表に罷在候閒に致約束置き候に付夫へ引移り候心組に御座候是へ移り候ても同じく此前も地震の難無之所に御座候閒先御心易被思召被下置度候地震に付其表へ便有之候と申に付早々申上候乍憚北堂君小星君へ宜しく御傳意願上候時氣折角御保護奉禱候恐惶不肅

十一月四日　大星拜覆

勝　君　臺下

附啓御上京之御事は異船浪華を引取候に付御沙汰止に相成候よし然る所其船下田へ回り候て御役人方も御出張御座候とか應接の樣子如何に候や彌利堅の恐嚇に御怖ぢ年久しく申出で居り且つおとなしく出かけ候魯西へはけ

く立派の御挨拶有之候故魯西人も心よからず存候より彌利堅の恐嚇に倣ひ候樣の義も可有御座歟と杞國の憂に堪へず候既に箱館へは堡柵樣のものを作りろしや交易場など申旗を建て居候など申風聞も有之候が實說なりや否果して左候へば押領の沙汰に相聞え申候是則ち彌利堅に倣ひ候所とも被存候箱館の模樣既に如此に候へば下田へは猶一層の義を彌利堅にて取立可申と存候左候とて此節の御體たらく御禁止候事萬々御六ヶしく終に此邦除くべからざるの大害となりもこそし候はんと恐入存じ候事に御座候實著の御異聞も御座候はゞ極密御示し可被成下候是等の御文通此節柄尤も內密の事に御座候其思召にて他へ御話等は堅く御無用に被遊可被下候此表にて御話の獄中百首順子に寫させ候間御咲草に御目にかけ候御母樣へも御覽に御入被成下度候已上

〔五一七〕八田愼藏に贈る

安政元年十一月五日

松代町　八田彥次郎氏藏

其後は御左右も承らず候時下烈寒に候へども御揃彌御佳勝被成御起居候歟然

ば僕も安世の方餘り手狹に就き主水殿下屋敷の物見を借り候て引移り申候是も隨分狹くは候へども來客も無之閑居候には差支も無御座候其上雪月の眺望も頗る宜しく候に付甚妙境を得候と自喜候事に御座候さては拜面を獲候て御話申度筋有之候此節にては内々にて御尋被下候事は門を守り候足輕なども何とも申さぬ樣子にも有之其上表だち候ても母の方へ御尋被下候趣にて候へば何にてもさし支候事無之候右之次第に候閒御繰合せ一寸御經過被下候樣奉賴候御安否拜候旁如此御座候以上

五日　　　　　　　　星　　拜

八田君

〔五一八〕勝麟太郎に贈る

安政元年十一月十一日

拜啓冬寒彌御多祥被爲涉候歟御母樣御容體何の御障も不被爲入候や御動靜委しく相伺度奉存候扠四日之地震八年前の變に存じ合せ此地方近邊而已の事と存じ御訛傳も被成下候て御過念を蒙り候も如何に付過日之便其事のみ申上候

所追々傳承候へば其表も餘程の事と申義乍去山の手邊は何事も無之と承候定て高館之御近傍御異事も有御座まじく奉察候乍然御動靜不奉伺候間は不安心奉存候間委細御報聞可被成下候伊豆駿河殊に大變の趣に承候下田の事等は誠に絶驚の義に御座候於是愚意には尙皇國の御爲禍を轉じて福と爲すの策も御座候歟と奉存候如何被思召候や色々申上度候所此度の便極めて急にて飛脚のもの待居候に付先御見舞御安否拜候迄早々申上候乍憚御母樣御始宜しく奉冀候此方總じて無事老母不快も大抵常に復し候間乍恐御放念可被成下寒威千萬御保愛所祈御座候頓首

愚意には尙皇國の御爲禍を轉じて福と爲すの策も御座候歟と奉存候

十一月十一日　拜

勝　君　臺下

安政元年十一月十八日

〔五一九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

兩三日は寒威殊の外に嚴烈に候所御動靜何の御替も無御座候歟偖此間は北堂君より被寄思食精製之蕎麪澤山に御投惠被下家內老少打寄賞味折柄來客も候

並方の屏風
片方拜借

所夫へも饗應一段の清興を得喜感之劇不知所謝奉存候乍憚北堂君前宜く御禮所仰御座候然ば近頃申かね候御無心に御座候が樓上障子たてつけなども宜しからず其上隣家なども無之特出いたし寒風を受け候故か夜分など別して寒烈小屏風を枕邊へ立て廻し候所夫にても面部の冷え候を覺え迷惑候に付幷方の屏風片方拜借相願申候明春寒威のゆるみ候迄御緩借被下御差支無御座候を御無心申候尤も程近き閒の義に付籠居之清玩を求め候ひながら中頃別品を御替貸被下候樣乍自由奉萬祈候杜徽かの淡墨にて疎梅竹石など認候を御所持と奉存候右は暫く御惠借被下候事相叶申まじき歟是迄もいつぞゆる〳〵拜見申度と存居候ひき幸に此節右片方御許借被下候に於ては感銘尤も深く可奉存候餘り勝手なる事を申如何に候へども御心易く候に任せ如此に御座候千萬御諒恕可被下候以上

十八日　　星　　拜

八田仁友　几下

尙々此閒の御器もの返璧有合の微品御移のしるし迄に御目にかけ候以上

〔五二〇〕村上誠之丞に贈る

東京市　村上常藏氏藏

安政元年十一月十九日

附白浦町より早速御尋ね被下御目にかゝり候所至極に御健かにて五年前に少も御替不被成候御安心可被成候近來は誠に御安心と申御はなしに候

十月十二日之御手簡來達先以寒威相加候得共御闔家御揃御萬福之御便承之欣慰不過之候某幷家内歸著の御悦をも被仰下辱奉存候御賴申候品々をも明細御調御預置被下候趣是亦感佩之至御座候乍御厄介何分宜く奉賴候扨其表出立之節も御餞別被下南部坂之方へも御丁寧に御贐惠何共痛入候御事御隱居樣おちかさまへもよろしく御禮所仰御座候夫是の御挨拶さくに得貴意度存じ候所に某も獄屋に在り候頃は勉めて攝生の法を用ひ夜陰なども風邪に犯され候はぬ樣心がけ熟睡は致さぬ事に致し夫に準じ總て病魔を遠ざけ候樣の手段のみ打かゝり居候故か四月以來殊の外丈夫にて旣に昨年彌利堅船渡來の頃藩邸の諸務經理し候ために晝夜致奔走其後も打つゞき劇忙に候ひしが氣體とも至て健にて十七八年つひ覺え候はぬ程に達者にて候ひき夫にも尙增し候て風邪など

も一切感じ不申櫻田邸にて御目にかゝり候節すでに其御はなしには及び候と存候夫故其表出立道中へ出で候ても風邪などは感じ申まじくと存候所に道中に及び氣候の違ひ候故にも候歟遂二た泊り目かにて散々流行の外邪に冒され頭痛などはげしく致し候て是が爲に半日逗留夫より漸々おくれ候て十月三日松城表著いたし候風邪は追々に快よく本よりさしての事にも無之候ひしが大に丈夫に成り候と人々にも誇り候所にて候故愧入候事に御座候ひき慈君などは九日著に御座候然る所其當日戸倉邊よりして慈君にも散々外邪に御感じ候て眩暈强くやう〳〵著被成候乍去はじめの程は一通りの感冒とのみ存じ五六日も過ぎ候はゞ宜しく候はんと存じ候所全く疫邪にて十九日二十日の頃は精神も昏冒被成撮空摸床などの惡徵も有之四月以來の御氣疲等も一時に出來り殊に暖地より寒地に御入り氣候も次第に寒烈に相成候等諸難打重り候上に滿八十の御高齡と申ものに候へば御快復候はん事誠に覺束なく存じ晝夜心配候所に天幸にて用ひ候藥相應致し追々御輕快此四五日は座敷の内人手をからず候て御あるき候程に御成り候間御安心可被下候極危難と存候ひしは一日半ば

閉居客を謝し候には

かりの閒にて候ひき夫過ぎ候ては次第に善候に御赴き候夫故別段御知らせも不申候乍去一體は餘程の事と見え候て一旦は御兩足とも大分の腫氣にて其腫氣去りかね此程まで獨りにて御立候事も六ケしく候ひきしかる所此四五日來の御容體にては平日に僅かに御違ひ候ばかりに候此度自然の事も候と誠に殘念なる事と存じ候所先幸に御平愈候て大慶不過之候足下にも御悅び可被下候段々之御禮御挨拶延引候も全く右之次第故にて候閒千萬御亮恕可被下候其外家內何の碍り候事も無之候閒御降心被下度候此地へ罷越し候ても浦町舊宅荒廢候て住居候事能はず夫故先年も中町客館に居候事に候此度閉居候には客館も差支候に付其表に居候閒に望月氏の御安口の下屋敷住居を借り申度無心申候所快く承知しくれられ候故此地著の上少しく手を入れ候て是に住居申候手狹には候へども閉居客を謝し候には差支も無之園ひ內は六七百坪有之候故少く逍遙も出來申候園中老松二株有之候いづれも姿態有之數百年のものなるべく被存候或說には其一株は木村長州守が盆栽の木也とも申候よし其外櫻數十百本有之竹箭これに雜り候て殊に池水も淸らかにて中々面白き所に候樓も一

四山の蒼翠几席の上に聚り

下田など人家も八九分通津浪にて流没

ヶ所御座候四面戸牖有之候て幸近邊目に遮り候ものもなく候故見はらしもよろしく四山の蒼翠几席の上に聚り申候右之次第に候故閉居も亦あしからず候けく足下はじめ都城の下の人は美み可申と存じ候程に御座候御一咲可被下候扨四日の地震追々承り候へば其表も餘程の震ひのよし御住居邊いかゞにて候ひしや何の御損所も無御座候か承度存候乍然都下もまれの地震にて候へば御家内様さぞ御驚き可被成と御察し申候某住居候邊は何ほどの事にも無之壁など二ヶ所か少々ひゞ出で候のみ其他は何のいたみ候所も無之候夫故中町邊家つぶれ候など申事承り訛傳と存じ候程にて候ひき乍去追々に承り候に町方にて五十軒あまりつぶれ屋御座候しかし未年に比し候へば此地の事は半分にも及び不申候東海道筋殊に駿河伊豆は大變のよしに候定めて委しき事追々御承知可被成候下田など人家も八九分通津浪にて流没し人畜とも大分なくなり候様に始めは承り候所追々の説には人は大抵免かれ候様にも聞え申候果して左様に御座候歟某門下の人などに見物ながら其地へ參り合せ難に逢ひ候もの無之候へば宜しくと掛念候が其様の沙汰は御承知も無之候か何ぞ御異聞も候は

ば御傳へ可被下候先は段々之御挨拶延引申譯旁如此に御座候家內よりいづれも宜しく申上度と申出候乍慮外御隱居樣おちか樣へも可然御致聲希候寒威折角御多愛所祈に御座候以上

十一月十九日　大　星

村上令弟　足下

附筆寒入候てけく此方はゆるみ申候其表氣候如何や總じて何の御碍も無御座候歟別段寒中之御見舞も不申進候略義御免可被下候一品寒中御見舞のしるし迄に御目にかけ候御咲留可被下候此書も此節柄無遠慮に候へども外ならず候閒如此に候御覽後御燒捨可被下候以上

〔五二二〕山寺源大夫に贈る

（安政元年十一月廿六日）

（第下は文聰公なり）

昨日來暖氣是又不順の一事と被存候義御座候御近況何の御障も無御座候歟過刻親戚共參り候て申聞け候には第下又々御村被爲入候よしいかなる御容體に被爲在候御儀や憂思無已奉存候に付極密奉拜問候義に御座候昨夜は服部醫生

（竹村兄は竹村金吾なり山寺の親戚）（倉田生は藩醫倉田左高）

も著候よし能く迅速に罷越し候いかゞの御容子に申上候義や定て醫案をも御承知の御事と奉存候何卒服部速に功を奏し候樣所祈に御座候竹村兄にても誠に散々の事に御座候不幸より二十日ばかりも前の義に候が倉田生參候て其療法と申事にて醫案をも承り候所倉田に成り候て少く宜き方に付追々輕快に可被趣と申義に付尚その養胃の劑等相談も致し遣し其後安世差出し候所竹兄不在にて取次の者に承り候に村も無之追々宜き方と被申候義に付實に好徵を得られ漸々快方御座候と只顧に存じ罷在候所俄に不幸の事傳聞驚入候義に御座候嘸々盟臺にも御心苦く被思召候半と奉察候御事に御座候御面會の御折も候はゞ極密弔問之義をも可然御致聲可被成下候第下の御上をば甚御案事申上候義に付乍御面倒一寸御批誨奉冀候以上

廿六日

武備志砲之部

附啓乍序奉願候も恐入候へ共武備志砲之部暫時御惠借被成下度奉禱候差掛り見合仕度候間此者に御附與を蒙り候へば尤も可難有存候別段服紗は不奉差上候間過日二郎君に奉使紀事殘本送上候節の風呂敷へ御包み御渡し被成

下度候至懇

星 拜覆

山寺老盟臺 座次

〔五二三〕 立田樂水に贈る

安政元年十一月廿七日

內海御警衛被爲蒙仰候義に付

兩三日殊の外軟寒に御座候尊候益御勝常被成御座候耶令郞御外邪其後如何既に〳〵御霍然御座候御事や奉伺候然ば內々御周旋奉願候義に付過日御允諾をも蒙り候故例の草稿副本早速に仕立候て御手許まで差上候半と企て候所於江府御奉書御到來內海御警衛被爲蒙仰候義に付亦澤大夫より安世へ內々職外の事には候へども小弟に久々在塾仕何かと餘論を承り候義も可有之に付心得の廉中立候樣被仰下候義有之好機會につき同人を以て例の草稿幷に其外も一二の書類御座候を取合差出させ申候夫には緩うすべからざるの事勢も有之且此機會を失ひ候てはたとひ盟臺へ奉願候ても多少の言辭を御費し不被下候ては屆かざる義に付急卒之際別段申上も不仕左樣取計ひ候義に御座候心事幸御寬

唐人法帖を臨し候は必ず硬黄紙を用ひ候よし

恕可被成下候尤も右草稿は副本仕立次第盟臺へは内々御覧に入候心得に御座候倘其上にて御品評被下候樣奉冀候將唐人法帖を臨し候は必ず硬黄紙を用ひ候よし東坡の詩にも硬黄小字臨黄庭なども見え候この硬黄の法を得候に付座右の爛紙にて試みに製し候所頗る用に適し可申程に出來申候御慰迄に小片御覽に供し候閑を得候て猶精密に製し可申と存じ候事に御座候時に傷寒六書に出候升陽散火湯の方はいかなる藥劑にて候歟右の方御教示被成下度其主治の大略も幷せて御垂誨奉願候若御用繁にも候はゞ其方の出候本一寸御惠借被成下度尤も卽刻返上可仕候小弟も近日望氏別墅の方へ引移り申候何か今に方付不申悤倥中要用のみ草々申上候以上

近日望氏別墅の方へ引移り申候

廿七日　　星　拜手

靜山老盟臺　几下

安政元年十二月朔

〔五二三〕　山寺源大夫に贈る

過日は細々の御誨答千萬難有奉謝候御容體の義も較御宜き御方にて次第に御

順快被遊候樣服部も申上候よし先々□□安心仕候先頃の風承にては行々如何被爲入候はんと憂心の餘り極密相伺候所御誨答にて夜中も得安寢難有奉存候寒威も續いてゆるやかなる事に御座候其後の御容體服部生申上候樣御藥も被爲應候樣被爲在候歟是又內密奉伺候廿三日以來日夜御在公と相伺嘸々御心配も被遊べく又御體力も御疲候はんと奉察候然る所益御勝常に被成御座候御樣子にて慶賀不過之奉存候偖武備志の義も差掛り奉願候所に御用繁の御中御手數被成下是又感荷無限奉存候檢索相仕舞候に付則還上仕候御査入可被成下候又々御無心御座候藝海珠塵も慥か御藏弆御座候御事と奉存候同書の內明國□□の地震にて王維楨など壓死候ひし事有之樣うろ覺えながら覺有之候□□御座候はゞ右地震の卷暫時御許借奉願度もし〳〵御見出し御面倒に御座候はゞ全部を兩三日御借與可被成下左候はゞ討索抄出之上早速返璧可仕候先御書物返上ながら草々申上候以上

嘉平朔　　星　拜手

懼堂契家先生　席開

藝海珠塵

安政元年十二月七日

内海の御警衛など被爲蒙仰御不都合千萬なる事

〔五二四〕 津田轉に贈る

冱寒之候に候へども御近況益御壯健被成御座候哉奉伺候去月の地震天下大變奉存候其所へ内海の御警衛など被爲蒙仰御不都合千萬なる事と嘆息仕候此事は昨冬頃も御屋敷へ可被仰付等の取沙汰も有之候故例の御臺場築法西洋書中見當らざる法則に付き近年の新發明等出候義歟定て御據所可有御座義に候得ば其原法を御伺ひ被置度且その警衛の法も必ず發明可有之夫等あらかじめ御伺不被下置候時は臨時原法と牴牾候樣の義にては天下の御榮辱國家の安危に係り候事に付不被爲濟依て其義も御伺置御家患策ども獻じ候所御役方の御見込も候趣にて遂にその策も不被行候ひき夫にて此度の樣の被爲蒙仰候御防ぎに屹と可相成とは不被申候へどもかの海中へ數多く築き並べ候と申法は決して西洋に無之義に就き右御伺御座候時は早速の御指圖には被及かね候事其指圖無御座候節は假令此度の樣被爲蒙仰候ても兼て御伺被置候義御指圖無御座候ては行つかへ候趣被仰立可然御事其上に其間に就き別に御遁れ被遊候方策

昨年中の愚策御取用ひ無御座候事惜むべき事

可有御座ことに奉存候兎角愚意には昨年中の愚策御取用ひ無御座候事惜むべき事に奉存候乍然只今と成り如何樣申候ても駟も及ばざる義無是非候但愚意には此節と雖も尙御辭退の御策可有御座候又天下の御大計を以て申候ても是亦御辭退御座候方御道理に存申候いかにとなれば車を以ては陸の用を成し船を以ては水の用を成し候事本然の利用にて候然るを陸の用を成すべき車を以て水に施し候はゞ淪溺之禍踵を運らさずと奉存候夫と同樣にて信州の山中の兵士を以て海中に御用ひ候など以ての外の御手違の義と奉存候是等天下軍務の根本にて候所今に至ても御廟堂には猶御茫然之御事に候歟扠々恐入候御形勢天下大地震山崩れ海飜り候の大變出で來り候も偶然にあらずと浩嘆仕候此舟車誤用東西奔命に疲れ候義をかね／＼心づかひ候故先年先公御役中海防の義に就き申上候上書の末にも此事を認め置候事に御座候猿に河太郎の働きを致せと御座候ても決して能はざる事に候たとひ公邊より左樣御座候とも見す／＼御行屆きも有御座まじきを御請御座候はん事御不覺の義に奉存候他の太平の御用向きとは懸隔の事體にて天下の安危國家の存亡に預り候事に御座候

貴君など如何被思召候御事や猿に河太郎の業出來候との思召に候はゞ小弟の知る所に無御座もし猿には決して河太郎の働き出來ぬ事と御見透し御座候事に候はゞ當今の御時節御身命を被抛候ても何とか御周旋有御座度御事に奉存候斯く蟄伏罷在候ても天下は一家君臣は一體疾痛疴癢皆身に切なる義に付此事傳聞未だ聢と被爲蒙仰候飛便無之以前に昨冬愚策申出候節の御伺書下案幷に當四月三日か川路殿へ贈り候てかの海中御臺場を論じ候手簡の稿と昨年秋川路殿手より福山侯へ上り候當今の急務十事相述べ候書稿當年獄中より上書候はんと存じ候て腹稿候一通併せて内々恩田執政迄差出し此度被爲蒙仰候所を御辭退外陸地御警衛と御切替の策を勸め候義に御座候然る所是も自身乘出し四方八面切りまくり候に無御座候ては屆かぬ事と奉存候結句貴君御役柄にて思召次第事行はれ可申と奉存候に付愚存の荒增申上候望君へも極密ざつと愚意をば申置き候宜く國の爲天下の爲御勉強奉禱候書不盡意千萬御心諒所仰に御座候以上

十二月七日　　大　星　拜

津田君臺下

附白去月初旬清野歸府の節段々の拜謝申上謝忱の印まで粗末の壹品呈上仕候定めて御落手可被成下奉存候其以來は何より何まで厚く御配慮を荷ひ候事實言謝不盡奉存候然ば川勝縫殿助殿砲御免許の義は如何相成候やもし御伺置被下候義の只今に埒あき申さゞる事に候はゞ願置き候認めものは便宜此方に御返し被成下度奉冀候此段乍序申上候以上

（安政元年十二月七日か（日付なけれど津田轉宛と同日と推定す））

〔五二五〕依田甚兵衞に贈る

長野市　鹽澤龜太郎氏藏

勁寒之節倍御佳勝被成御座候御事歟奉伺候政君御持病氣も其表は何と申候ても暖氣故に御發し被成候も薄く御座候や是又奉伺候小弟方いづれも無事母義も漸く近日に及び本の如く快復仕望君別莊の方へ一同引遷り候乍憚御過念被成下まじく候然ば過日は御投簡を蒙り難有奉存候浦上殿へ三村氏取替五百疋遣し給り候事も蒙仰奉謝候右之分今便御手許迄差上候間御手數の段恐入候得共御序に三村の方御償被成下候樣奉願候千萬所祈に御座候地震之變追々傳聞

（望君別莊の方へ一同引遷り浦上殿へ三村氏取替五百疋遣し給り）

内海御警衛
被爲蒙仰

驚入候事に御座候乍去御屋敷は何事無御座奉恐悦候然る所内海御警衛被爲蒙
仰候趣此事をば昨冬より取沙汰も候ひし故氣遣ひ居候所遂に爰に至り恐入候
義に御座候山國の人海の働俄かには六ヶしかるべく何かに付又々御苦勞なる
御事と奉察候小弟義は此地閉居何事も耳遠く只々其表の御事も諸事覺束なく
夫のみは苦勞に相成申候寒候相伺旁過日之御答迄草々申上候折角御自玉奉禱
候已上

星

依田君臺下

附白其表諸方への謝儀去月清野氏歸府の節頼み候て差送り候所只今に一ヶ
所として挨拶申來り候所無御座不審に存じ申候甚恐入候へども御序に清野
御問合被成下候樣仕度奉願候持參被呉候事に候はゞ歸著の砌夫々屆け可給
事と存候既に御宅へも一品呈し度頼み候義に御座候御宅へは何ぞもそと差
上度政君へも何かと心づかぬ義も無御座候へども當年の義は御存知の次第
にて少しくたくわへ置き候品々等も盪盡仕候義にて不任心底其上其以來手
數に成り候箇所も多く夫々挨拶などを仕候に外邊の方先は體をもつくろひ申

傳馬町へ送り候分使の者へばかり取られ候分廿圓あまり

度旁甚不行届きの義にて愧ぢ且恐入奉存候其段は幾重にも御推恕可被成下候政君へも乍憚宜く御申譯奉希候木挽町より南部坂まで家財運び候車賃ばかり七圓餘傳馬町へ送り候分使のものへばかり取られ候分二十圓あまり誠にあきれ申候萬事夫に準じ候間總て御恕察所祈に御座候以上

疱瘡うゑ（源公は養子源之丞）

再白馬場町御宅にても御別條無御座候條御安心可被遊候過日御小兒御兩人へ疱瘡うゑさし上候今日源公御出御話しに御兩人ながらもはやかせ候と申事に御座候以上

此一封御届被成下度奉希候

安政元年十二月廿四日か

〔五二六〕山寺源大夫に贈る

寒候御存問殊に雛子竝に精製の蕎麥御贈惠被下佩荷無盡候蕎麥は關川の品のよし彼地の産往年試み候處香味無類に候ひき久しぶりにて妙味に飫き可申義千萬忝奉存候尚拜面御禮可申竊候偖は御文稿被遣候篤と一見存付も候はゞ書加可申候先拜答迄草々以上

御文稿

念四日

認置候高嶋の扁字幸の御使に付相附し申候不出來御一粲可被下候

拜答　　　　　　　　　　　　大星

安政元年十二月廿五日

〔五二七〕宮本愼助に贈る

餘寒も勁敷候處御眠食愈御平安に御座候歟偖先頃歸藩之砌は御使被下殊に佳菓一折御投惠御芳志之至淺からず辱不勝感謝候右御禮人を以て也とも可得貴意之所此節柄無人旁御無音背本意候幸に御宥恕可被下候然ば一事御煩はし申度義有之候御役所御出仕之御序可然奉賴候僕公邊より蟄居被仰付此表へ罷歸候へども當年丈は江府に罷在候通半知上高の分も相渡り候義と奉存候右之分貴君御計らひにて御受取御廻し被下候樣乍御手數奉賴度候在府中は田澤氏へ賴み置候處是も不幸と申事外に御藏へ被出候仁に懇意の人も無之仍而不得已事貴君を御煩はし申候何も御入魂之義に付此節柄には候へとも此段手書を以て御賴申候義に御座候御承知も被下候はゞ千萬可辱候要用のみ草々頓首

念五　修　理

愼　助　樣

安政元年十二月廿七日

〔五二八〕　山田兵衛に贈る

松代町　三井圓二郎氏藏

御手簡拜見如仰年内僅かばかりに相成候何かと御多忙察入候然る所御想像の通杜門籠居候へば歳杪とも存じ候はず何か靜閑なる事に御座候是は不幸中の幸とも可申候扨は被寄思召節儀として御殺代朱提一方御贈被下辱奉存候乍然當年抔けく御厄介に相成候のみにて何以御世話申候事無之御祝儀に預り痛入候御事に御座候何も拜面拜謝可申述御卽答耳草々以上

廿七日　星

山　田　賢　友

安政元年十二月三十日か

〔五二九〕　山寺源大夫に贈る

除日愛度奉存候今朝も餘寒甚布覺候所閤府益御厚祉浣慰之劇奉存候然ば御歳

儀とて家父方へ青蚨三緡令郎君より二緡御投恵乍例深く奉感佩候私へも何よりの御恵品御寵賜被成下千萬難有永く相樂可申と御禮難申上盡奉存候乍然御多忙之御中何共恐入候御事に候とていづれも宜しく申上候樣申付候尙折角御自玉芽出度御迎春被爲在候樣奉企望候早々奉報

除日

附宜此閒は風說書北生迄御示し被成下早速相囘し一讀難有奉謝候不相替通事の陋譯にて齒の拔け候樣の所有之候へども諸蕃の景象ほゞ相分り候樣に奉存候早速寫し返上仕度候處臘底母はじめ多事に付安世方にて塾生に也とも代寫せしめ候樣申候て一昨夜か彼方へ遣し候義に御座候乍每度御蔭にて異聞を廣め候義感刻仕候とて是又宜しく申上候樣申付候墨人來舶も有之候はんと申事過刻江府門人よりも來書中に申越し候果して慥かなる義か其好音信早く承り度ものに御座候以上

墨人來舶も有之候はんと申事

恪　拜復

懼堂老先生　丈室

安政元年

〔五三〇〕　倉田左高に贈る

涼氣には相成候へども散々の雨にて昨夜も遂無月御同然遺憾之事に御座候ひき然ば村上榮俊三語便覧とか申もの拵へ候よしその品聞違未だ見不申貴兄など（村上榮俊三語便覧とか申もの拵へ候よし）へは一本呈し候趣に候御手許に御座候はゞ一寸御借示被下度奉希候以上

十六日

近日ビュッケル氏の法に依て吐酒石を製し候所方書の通澤山に出來申候今日御試被下候樣に少々上度存候所此雨天にて十分に乾き不申候間今一日乾かし候處にて呈し可申候製法も至て無雜作に御座候其內拜面も候はゞ御話に及ぶべく候也

倉田老兄　　　　呉　　安

安政元年

〔五三一〕　倉田左高に贈る

昨日は珍物御投惠被下感荷淺からず奉謝候然ば御示し被下候三語便覧一寸致

寓目候處訛誤以の外に多く散々なる著述と存候右へ松代など題し候事恥かしき次第本藩無人を世間へ知らせ候樣のものにて扨々氣の毒なる事と存申候右は只今にても改可申事と存じ候其儘差置候てはいかにも恥辱なる事に候間此事内々御心づけ被遣可然と奉存候家父内々致轉覽誤り多くいかゞと申候趣にても苦しからず候間其事昨日の御禮旁得貴意候樣申付候まゝ如此に御座候以上

廿二日

佐久間恪二郞

倉田左高樣

内用差置

安政元年か

〔五三二〕　望月主米に贈る

近日江戸表へも申上候是まで御別業亭舍泉石各嘉名御座候義か嘉名御座候はば夫に因て追々詩文を著し御丘園を貢り申度然る所是迄夫等の御名稱御座候義も絕て不相伺候に付試に存付候所をしるし候て思召をも奉伺候事に御座候

追々又盟臺の高意も被成御座候べく候へば存付候所を錄し入御覽候跡までも殘り候義に付尊意之次第御隔てなく蒙仰候樣仕度奉存候

東郭別墅　御別業の總稱と仕度候文字ひらきも宜く候へば其實をさして如此

常　關　西向き中の木戸の扁字面は淵明の歸去來辭に出で主意は士の恒ある門關の意

聚遠樓　字面は其見る所に本づき推擴の意味は甚廣く片語の盡す所にあらず

清夏軒　北風を引く爲の御結構御座候所

瓊　林　櫻林を如此稱し申度瓊は紅玉なり

篔　徑　御栽ゑ込の竹は常の竹箭とも違ひ候禹貢の篔簵と被存候

古木公　東面の大松樹御園中の主木なればなり（木公は即松字）

范公松　怪松誠に奇特の品と珍賞仕候范公は卽ち文正に御座候文正當時しば〳〵朝廷の事を申され候故に權に當り候人これを喜ばず目

して怪人と申候よし文正夫を知られ候て或る時陸龜蒙の怪松圖贊を書して當權の人に贈りさて申され候は某朝廷と齟齬して辭を伸る事能はず因て乖戾して龜蒙の松の如くなれりと被申候事御座候文正の人物有宋一代の冠弁にて候だに當時には人相喜ばずさして怪人と成し文正も怪を以て自ら居られ候事世のありさまは古今一揆と被存候此事葉水心の避暑錄話に出で候て面白き事に存候折から御園中の松に出逢候に付此名心づき申候

希范亭　四阿屋なり希范は胡氏が明道希文を以て自期待の意此亭范公松に密邇候故如此

見操泓　端莊淸愼見操執の意にて松樹下に付松の歳寒節操の色を見る意を兼ね候

活泉　池の東南隅の泉をさし申度據る所は朱子の詩の石源頭活泉來に取り候也

高義園　北の御園内に入り候門に小弟より御園中の總名として此三字を

書し匾に掲げ後代へ遺し申度是又事實ある事に御座候昔范文正義莊を置き親戚故舊の居處なきものに借され候事候所賢者の餘澤にて此跡一箇の名勝と成り清國にても隱れなき事に候を乾隆の代に高義園と改め候事に御座候此度小弟公儀より罪譴を蒙り歸藩候に故宅荒蕪居所無之候に就て此所御借與被成下候は范公の高義と雖もこれに尙ふる事なく候故此嘉名を世に永く存し申度如此に御座候

尙種々可有之候へども名稱餘り多く候半もうるさく相成可申依て先此位に仕度歟と奉存候猶思召之程奉伺度候御起居請問旁如此に御座候已上

十五日

安政二年二月廿日か

〔五三三〕　山寺源大夫に贈る

今朝は令郎御出被下久々にて獲拜面大慶奉存候何よりの品御投惠感荷淺からず奉謝候昨日拜答申上候義に付又々蒙御誨酬長岡高瀨二子の書簡賤名に及び

花月友御跋文（蘇堂多門の著花の友月の友）（花の友月の友の奥に記したる歌）藝海珠塵

候事御座候辿御示し被下感佩の至奉存候花月友御跋文の事敬諾仕候拜見仕候所至極可然但し此度長岡へ御借し被遣候に就て跋文御認め御座候と申候ても餘り態々しく相成候て面白からずと奉存候依て小弟存寄候丈を朱書仕差上申候例の覆藏なし宜しく御取捨奉仰候花月友も此度高庇にて初めて一渉を得奉謝候いかさま大藩の巨室などには珍しき人物なるべく但花月友愚意には園の内にさきちるはるの花よりも見どころ多し秋の夜の月と存じ候が尊意には如何や猶其内拜眉高論可相伺候藝海珠塵も長留仕恐入候近日の内返璧可仕奉存候如斯膏雨故殊の外に暖氣に御座候結句かやうの時節風邪なども人身（數字不明）千萬御保愛奉祈候御文稿一頁寫本二卷還趙仕候先は拜復のみ草々申上候

廿日

附白入御覽候拙詩御賞譽を荷ひ汗背の仕合に御座候又一首錄呈御一咲可被成下候

棲止幽僻宜守拙　身閑心靜塵囂絕　樓頭盡日坐蒲團　咲看山雲自起滅

懼堂盟臺席閒　　啓拜

〔五三四〕夫人に贈る

安政元年二月廿日（此の手簡木挽町時代なり）

好天氣には成候へども昨夜など此へん少しながら雪降り候て夫故か今朝など大分寒く覺え候其表いかゞ候や御母樣何の御替もいらせられず候か其御もと二郎安世てふにもさはり無之候歟傳右衞門餘り長陣にて衣服の事など差支候に付一日遣し呉候樣申に付遣し申候上田も參り度と申事にて一同參り候此兩人參り候間此表の委しき樣子は其はなしにて御聞き候方けく御分り候べくと存候異人ども我等をば別に存候か既に一昨日などもタゲウロライペンと申すものに人物の影を鏡に寫し其まゝ其影を留め候器有之候所夫を持參候て小笠原樣の人數の固め候所を寫し此方の御人數の內をも大勢立ち居候所を寫し我等をも一人きり立たせ海のけしきを何げなく見て居り候へと申樣のまね致候故其通りに致候所其所を寫し申候其器用ひ候藥二種有之候所かねて其事を心得居候故其二色のくすりの名を申候所其異人大に驚き候體にてよくも存知候と申樣子にて其器をも親しく見せ又蒸汽車とて湯をわかし其ゆげにて人馬の

力をからず走らせ候事の四分一のひな形をも公儀へたてまつり候が其仕かけをも委しく仕かたはなしにて敎へ申候大にめづらしく面白く存候事に御座候其外色々はなし有之候が上田委細に可申候閒認め殘し申候

朱子文集　一二

右二册

軍用記　全部

右七册

右御遣し可給候おもとの御出候所に多分有之候土藏には入居不申候さて此閒は小林參り候節小袖遣し給りうれしく候羽織は先見合せ可申候もはや長陣と申候ても大抵今月一ぱい位と存候

中奉書

卷紙

ほう書二枚つぎ立て可被遣候用事のみ草々めで度かしく

廿日

御母樣へ別だん不申上候間よろしく御申上可被下候

お順どの　　修理

おもと

〔五三五〕山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

（安政元年・二月廿六日（此の手簡木挽町時代なり））

御手函拜見先以御萬祥被成御座敬慶之至奉存候昨日も一寸御玄關へ罷出候所御不在不得拜眉遺憾此事に限り候偖は魯船大島沖に四隻見え候と申届浦賀表より有之候義や小弟も其義はかね〲恐れ居り候事（天下の爲には結句此節に候へば後計も成し易く歸する所好消息に可有之候へども御一家の御爲には横濱の御固人數長く居繼に可相成左候時は又御物入も餘分に相增し可申是深く所恐に御座候）故過刻要路之衆迄探索に差遣し候て今に其使のもの還り不申未だ不分明に御座候然ば洋銃の調練致し居候所を夷人見候て直し候と申事決して無之事に候是は多分一昨廿四日增德院の庭にて弟も罷出稽古致させ居候所かねて夷人上陸候はゞ御足輕共の未熟なる稽古見られ候はぬ樣早速やめ可申ための見□使出し置候て夫より夷人上陸と申注進有之候故稽古相停め居候所へ夷人兩名罷越候一名は繪

（增德院は横濱村に在りて當時眞田侯の本陣たり）

圖をよくし候もの一名は是まで銃卒上陸の度ごとに號令を致し虫喰數字不明ダントと申ものにていづれも見知り候人に候所小弟へ頻に調練を見度よし手まねにて懇望候へども未熟故に斷り候と申手まねの致挨拶候所號令官咲を含みながら□方一通りと腕開に銃を置き手を休め候等の手法を戯半分に致し候義に御座候其義の誤傳にて御耳に入候と被察候數字不明の取扱は隨分立派にて主水殿なども蔭にて見られ感心之樣子に候ひき馬を乘候節も小弟居合せ候旣に御番方にて乘合ひを始め候所へ繪圖をよくし候夷人入來り小弟の乘參り候馬を乘り度樣子にて頻に懇望致し押して其側へ參り候所其馬はけしからず數字不明人に驚き候性にて大にはね申候夷人は格別に怖れ候樣子も無之尙引よせ乘り候はんと致し候附き居候同心もやめ候樣手まね致數字不明達て所望の樣子に數字不明疵にても蒙り候と如何に付數字不明やめ候樣申候所原半七郞が其節乘り居候を誰が乘せ候と申にも無之夫に押乘り候義に御座候夷人の足に比し數字不明甚短く不都合なるべくと存じ候所追□をも立派に押し□□手綱をば左の手にて持右の手をば明け居申候馬より下り候て後に劍を使ひ候

形をも致し見せ申候馬も劍も其人丈は修業候ものと數字不明を明け置き候と申を自慢致し候體故□□騎射騎銃の眞似を致し見せ候事にて候ひき先大略如此に御座候昨日來何の好消息も無之候小林生之手簡御擲返數字不明御事に奉存候如仰數字不明藩に御座候偖又魯西亞船嵜陽退帆數字不明川路君より承候義候はゞ申上候樣敬諸候所此間は急卒の一大事に就き愚衷を成り丈け盡し候はんと謀り候故數字不明不申嵜陽の事は數字不明承と申別れ候義に付可申上樣無御座候尤數字不明可申事は必定の義に有之候よしに候筒井古賀續て被返候樣子に御座候先は拜復迄草々申上候後刻大銃鑄立の數字不明萬期其節候頓首

廿六日

何か留守に差上候と申御禮被仰下返て恐入奉存候以上

懼堂盟臺臺下　啓　拜　復

安政二年二月廿三日

〔五三六〕 鎌原伊野右衞門に贈る

前頃太孺人御不幸之趣傳聞仕何とも申上べき樣無御座憮々御傷悼可被爲在奉推察候早速御慰問も可申上處此節御存知の仕合故態と無其義背本意候義に御座候先以御喪中御氣體無御恙被成御座奉降心候偖御墓表之義につき蒙御下問一々奉得其意候先君御不幸之砌桐翁先生へ御相談にて一印之通御勒しに相成候御事是にても隨分可然奉存候但し故の字は源大夫も申上候て御心付れ候通り有之候ては然るまじく候間御除き被遊候にしくべからず候御題署御通稱御書放しと君の字御加へ被成候と是はいづれも其道理有之事にていづれをいづれと一方に取定め難申事に奉存候其子細は凡そ墓表は天下古今億兆の衆に別つ爲の公なる筋にて候へば神主の陷中銘旌等の書法同樣書放しにて本より異議無之義にて樂翁公并に澹齋貞丈二先輩の墓面書法故ある事と奉存候乍然子として其先人の名稱を認め候には君の字其外尊稱の文字を加へ度と申も亦至情の存する所にて候へば是も亦道理ある義に付一方に歸し難くと申に御座候是はいづれとも御心の安き方に被任可然御事と奉存候しかし先君にも墓表の公道なる義御承知にて折角御遺命迄も御座候ひし御事に候へば君の字御加不

御墓表之義につき

被成候方に道理多く御座候と愚意には奉存候義に御座候配の字の事是は勿論配に無之候ては不相叶候過庭紀談御取用と申す御事此書は往々其論を究めず無理なる說多く難取用事共少なからず候樣奉存候右書中范子暨配楊氏之墓の例に御座候同書范子の墓文を載せず候故分明ならず候へども察し候に是は必ず妻の方早く歿し候て夫の范子のうせ候まで墓にも表せず差置き范子の死後一同に其墓文を撰し碑に勒候故に如此書下しに認め候事と奉存候御家のは先君先づ御不幸にて其御墓表有之夫へ此度御祔葬と申御事に候へば古法の如く

鎌原……之墓
　暨配小山田氏

と太孺人の御方をば文字をも三の一をも減候位に御認め御座候て可然御事と奉存候題考妣の字思食通可然候御名は御生前御認御座候通假名可爲勿論但し志津よりは倭文と被遊候方にもやと奉存候二印三印もとくと拜見仕候第一姓字の事過庭紀談の說は大略鄭漁仲が通志略に據り候ものにて候所其說をも盡さず例の無理勝に御座候氏には二字三字四字も候所姓は一字に限候などと餘り

に杜撰なる說と存候黃帝軒轅の丘に生れ給候故に軒轅有熊に國し給ひ候故に有熊氏と號せられ候其姓と申せば公孫姓にて候是姓一字に限らざるの一ッにて御座候堯初の唐に封ぜられ給ひし故に唐を氏號とせられ候所其姓と申せば伊耆氏にて候是姓の一字に限らざるの二ッに御座候禹の母有莘氏と有之候婦人姓を稱すると申候へば有莘の姓なる事疑ふべからず是姓の一字に限らざるの三ッにて御座候箇樣の一寸致したる事にも杜撰多き書取るに足らず候歟元來氏は族を分つ爲のもの姓は婚姻を別つ爲のものにて候故王子諸侯は氏を稱せざる事古の制と奉存候武成の有道曾孫周王發其他博古考古等の鐘鼎銘文にて明白の事に御座候惟楚國のみ其君世々熊氏と稱し候是をば荊蠻の俗とて賤しみ候事齊小白入于齊と春秋に有之候ても國を擧げたるまでにて氏とし候には無之國を以て氏とし候は諸侯の支庶他國に適く後の事にて宋の公子朝衞に來て後に宋朝と稱し衞の公孫鞅秦に在て衞鞅と申したる卽ち其例と奉存候未だ諸侯の其國に在る直に其國を氏とし候事を承らず因て氏族博考の說幷せて非と存候事に御座候元來姓を嚴密に辨じ候は周の法にて周代同族の婬亂をあ

らかじめ防候爲に同姓娶らざるの制を立てられ候より姓の吟味明著に成り候事にて本邦などの如く同姓を娶るの制禁無之國にては畢竟姓の吟味はいらぬ事に屬し申候乍去本邦の習はしとして氏族を分ち候爲に姓を論じ候事古き事にて候鎌原氏にも滋野姓の鎌原氏も有之源平姓の鎌原氏も有まじきに無之候既に私苗氏佐久間にて御座候多くは三浦の一黨にて平姓に御座候所白石の文書往來などにも候ひし仙臺藩の聞人佐久間洞巖などは源姓のよしにて候ひし箇樣の事御座候故に氏を姓にて差別候事本邦は本邦の習俗に從ひ有來り候に任せ可然更に一々彼土に引當て申さずと宜き事と奉存候其上國史に慥かに滋野の姓を賜る源平姓を賜ると有之候へば其姓は婦人の稱し候用には無之氏族をわけ其由り出る所をしるし候爲の用と見候て始より彼土と同じからぬものと料見し候へば夫にて事濟み候義と奉存候依て愚意には本の字御加被成候にも及ばず其儘にて可然事と奉存候第二第三別幅の通に有御座度候重邦君之直君の上諱の字無之候て可然候第四第五思召通にて子細無之第六既に上に云ふ第七顯考の二字にて明白更に松園君の三字御著し被成候に及ぶまじく候第八

同様第九上下いかさま誌より記の方可然候此度も繼の字は無之方と奉存候第十人の存生の間に諱と稱する事無之先公御在世の御間の義に候へば御一名と有御座度御二名の御一字に付如此御修辭御座候はゞ幾度も御對論可被遊御書物二冊御書類四通返璧仕候御收可被成下候以上

（脱文あり）

二月廿三日　　星　拜復

大孝鎌原君　苫次

（別紙）

鎌原司馬滋野貫政之墓

暨配小山田氏

顯考。初諱重龍字子雲。及公賜一名更貫政字子德。姓滋野鎌原氏。號松園。司馬其通稱也。重邦君之適子。母小山田氏之直君之長女。寛政癸丑十一月九日生。文政庚辰十月襲家。弘化丙午十二月十日卒。年五十有四。葬于寒松山先塋。釋追號曰良源院殿忠山恕政居士。娶小山田氏。生六男一女。第二子不肖貫唯嗣。第六子翼未冠。餘皆先沒。孤子貫唯泣血稽顙記。顯妣。小山田氏。諱倭文。之光君之二女。母恩田氏宜民君

之長女。寛政丁巳十二月十三日生。文化甲戌九月歸于顯考。安政乙卯二月三日卒。年五十有九。祔于顯考。釋追號曰瑤池院僊桃殿玉蘂大姉。

哀子貫唯泣血稽顙記

〔五三七〕立田樂水に贈る

安政二年二月廿五日

湖山へ御贈被成候に御四樣の御認方いづれに認ても可然

御手字拜見仕候如仰只今に風寒に御座候近日鎌原氏不幸何かと御煩勞にて御感冒其上又々御痔疾御再發御迷惑と申御事散々奉存候乍去昨日來餘程御快方と相伺ひ先以奉降心候月皎入院之御賀章御示及愚意申上候樣每度恐入候拜見仕候處殘る所も有御座まじく珍重に奉存候但幾多の文字如雲にては如何有之候はむや花雨の雨などと照應も有之其方可然哉に相考へ候其他は一字を動かし候事能はず奉存候湖山へ御贈被成候に四樣の御認方いづれにても可然古人は是等の書法をも每々換候樣被存候左候へば此以前是ならば此度は彼れ此度是ならば此次は夫と申樣有御座度奉存候京師の沙汰被仰下異聞を廣め候仰せの如く切憂の時節と相成候京師の猶委しき的說承度ものに御座候先は拜答迄

草々申上候

念五

過日の御箱返上可仕筈にて失念大延引恐入候則高使に相附し候不罪

大星拜復

靜山先生

〔五三八〕依田又兵衛に贈る

安政二年二月廿七日

一望大夫御子息達元來私の砲術門下に御座候所はからず私は此表へ引込打捨被置候所一平出府に付同人へ被相賴稽古被成度よし右之段御當人方より被申越候も相成兼候に付尊君より私へ御申達被下候樣御座候に付被仰下承知仕候然る處一向に御沙汰なしにて右樣に御座候義に候へば元より無論の事に候へども尊君を以て被仰聞候義に候ては存念御座候義に御座候其子細は一昨年かの柿の核一條の節も御取掛御座候に付略私の申候所をも御承知御座候御事さ

柿の核一條

奉存候私兼ての持論に武士の武藝の手筋を吟味候事輕からざる義に候夫等を一向輕卒に致され候より武藝の手筋も埒もなく成りゆき且は師弟の間義理を

失ひ候樣の事出來り候今度一平御臺場の方に付其砲の世話にても被仰付置候義に候はゞ望月御子息達に於ても御臺場御用御勤め候に付砲術の義門人へ御申談じ候は尤もの事に候へども元來西洋眞傳の砲術熱心にて私へ入門も御座候事に候へば其手筋の稽古被成度候はゞ本藩にては賢之助中津藩には島津文三郞佐倉藩には齋藤彌一左衞門等いづれにても西洋の法則相心得居候義一平輩同日の論に無御座候是等の內いづれへなりとも思召次第御出御手寄り御修行御座候義可然事と奉存候公務は公務藝術の義は藝術の義分けて御承知御座候樣仕り度此義尊君まで申上候開望大夫へ宜しく奉冀候砲に玉を込め候前に火藥を裝ひねらひ候て火を點じ打放し候ばかりに候へば素人にても出來候軍事の間には實用を成し候はんと申には法則之眞法を得候に無之候ては能はざる義に御座候道髙の差別も又やはり眞人に無之候ては分り兼候夫故に公邊にても本藩にても此節迄も此體たらくにて恐入候事に御座候先は拜復迄早々申上候時氣折角御保護奉願候

星　拜復

依田君几下

二月廿七日認む

附白臺場繪圖の事難有奉存候既に此表に傳播一見仕候義に御座候いかにもよく立派に出來候趣に御座候

安政二年二月廿七日か

〔五三九〕 望月主求に贈る

紅雨盦
長春菱

昨日來暴風に御座候所御眠食何の御碍も不被成御座候歟然ば此風にて櫻樹一旦に開花に相成候紅雨盦も今朝迄に略形を成し望觀ぁしからず候長春菱之方は明後日の夕刻ならでは出來寄り申まじく花は昨日までの景氣にては兩所とも略落成の後に盛観と相成可申考にて御座候ひし所はからざる風天にて兩三日進み候て發き候様に存候淺葱色の方も今朝は餘程綻びかけ其外遠近の杏桃も紅白開雜聚遠樓上の眺望殊に麗しく候間此段報聞仕候亭子落成の後は落成の後先今日頃の景色御一覽御座候様奉存候兩所の用に籧篨を編み候とて少年ども參り居り色々世話仕候故甚多忙に付先草々申上候總留面賦

廿七日　　星　再拜

望月盟臺　侍右

〔五四〇〕　藤岡伊織に贈る

東京市　石垣忠義氏藏

安政二年二月廿九日か

御上途も次第に近寄り何かと御多忙

一旦に暖光是も亦不順の事に御座候加之昨日來風烈御與居何の御障り無御座候歟尊大人御頭瘡之御氣味は如何の御樣子や承度奉存候偖此間は御過談被下寛々得貴意歡喜少なからず乍去何の御もてなしも無之愧入奉存候御上途も次第に近寄り何かと御多忙致推察候然ば此品乍粗末有合候に任せ聊か御餞別之印まで懸御目候御笑存所禱御座候御出立前一寸は御尋も可被下と存候間御暇乞は其節可得貴意と草々如此に御座候以上

廿九日

藤岡仁友　足下　　星

〔五四一〕　浦上四九三郎に贈る

安政二年二月

拜啓仕候追々春樹方華之候に相向ひ候御動履倍々御萬福被成御座恭慶之至奉

（堀口貞明）

存候偖御地面故宅賣却之義に就き候ても厚き思召の程堀口子ゟ晴山へ通達し被吳晴山より具に申越し感激無涯深く心腹に銘じ候義に御座候早速拜謝可申上候處彼是と俗紛も有之延引に罷成候其段は幸に御諒慮可被成下候拜借之御祕策後便返上仕候是亦長留恐入奉存候高島上書□□候にて一覽感じ入候事に御座候兼て中々不凡□□承知罷在候得共技術など彼方の一斑を漸にして窺候程にて高島流など標榜し世に衒鬻の志迄甚不滿之事に存候より中々是程之料見は有之間敷存候處にて此書一覽仕候故一際感心致し候餘程綿密なる人物に御座候小生獄中にて所得之詩文草稿も無之候故多く遺忘仕候得共其記憶丈を合せて煙霧となし候はんも惜しく存客冬母の看病中覺え候丈を筆錄仕候處三十葉足らず有之候一時の心血に付知己之爲には御覽にも入れ度存候得共何分觸忤之事共多く且晴山等よりも詩文之類一切門を出し候なと堅規箴候故此節は忍で不奉入御覽候苦しからざる近詩一首呈覽候御一咲可被成下候

（高島上書「　」候にて一覽感じ入候事）

（象山獄中の作省諐錄あり）

棲止幽僻宜守拙　身閑心靜塵囂絕　樓頭盡日坐蒲團　笑看山雲自起滅

近頃如此に御座候只今籠居仕候處は望月主水が下邸にて氣色の美は松城第一

とも可申園中も頗る廣く紅櫻百餘本有之其間古松怪石美竹清泉も候て日渉に宜く樓上四方のながめ雪月共に麗しく實佳境に御座候

予得罪歸鄕。舊廬廢蕪不可居。乃僦居於望家莊淸夏軒。地勢殊勝。結構亦不妄。所謂聚遠樓者。西臨小巷。東北樹竹扶疎。絕無城市氣。四山屛列。遠邇掩映。凭欄瞻眺。嵐光襲人。雖咫尺不出門。悠然如在山林之中。不自知罪譴之在此身矣。

如斯にて日々に例之異書を讀み天地の際を究め古今の變を觀萬物の理を玩び候事を得候も朝廷莫大の御恩光と奉存候義に御座候先は拜借の御祕本返上までに草々申上候頓首

安政二年三月十一日　　　星　拜復

如不及君　几下

〔五四二〕望月主水に贈る

（前文缺く）

折角御保護奉祈上候御園中趣向之義蒙德音けく奉恐入存候御病人様の御中不緊要之事申上候も恐入候へども高誼にて當年は飽まで花を觀誠の春の樣にて春の日を暮し候事是迄遂に無之義にて難有奉存候上巳の翌日にて候ひし歟早

咲之方は稍ちり方に相成候處聚遠樓欄角の兩三株滿開に付再び折柬素軒君へ申上候て御別墅御巡覽がてら御立寄を希ひ候其節林下敷來全似雪の字を分けて韻として御一同詩を賦し候所家父下の字を得て

日々醉㆓春風㆒　廣庭櫻花下　不㆑因㆓罪譴餘㆒　豈得㆑任㆓放情㆒　折柬招㆓所私㆒　興懷何瀟洒　對㆑花當㆑盡㆑歡　酒到莫㆑辭㆑畢　春花與㆓人生㆒　偕非㆓永存者㆒

と仕候不因罪譴餘豈得任放情實に虛飾無之所に御座候昨日か高幾自分家事之義にて内話に罷越し候聚遠樓上對話中風少し荒く吹き候所落花の空に亂れ候景色主客とも如此は初めて見候とて抃賞仕候餘り家父かく書付候

（高幾は藩士高田幾太）

法ふるぬしのしのびてこもり居る所にとひ來て東のたかどのに酒のみもの語りする折ふし庭の林なるさくらの風にちりみだるゝさまいとおもしろかりければ

（法ふるは高田幾太の號なり）

折にあへばちるもめでたし山ざくらめづるははなのさかりのみかは

おほぞらにみなぎる雪と見るばかりちるもさくらのさかりとはいはなむ

御一咲可被成下候時下千萬御自玉被爲在候樣奉祈望候先は御惠賜の御請のみ

申上候已上

三月十一日　　　恪　頓首拜復

致堂老臺　執事

〔五四三〕　山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

安政二年三月十四日

故の字

故の字に自ら二樣の用法御座候と奉存候

御手筆拜見仕候先以雨中益御佳勝被成御座沃慰之劇奉存候此閒は令郎御尋被下奉多謝候十日御手敎の拜復も御惠賜之顔帖跋尾認めかけ候に付淨寫の上入御覽度夫一同拜復をも申上候心得の所此節日々俗事不絶其上來客なども候て空しく日を過し夜陰も近日は殊に嬾眠を覺え候て早く臥せり旁認かけ候もの夫なりに打捨置き拜復までも遂延引惶恐之仕合に御座候故の字御問難にてよく相分り申候故處士は拜話の節も申上候通り晩年攝仕の事候へども元來の處士故に其始に從ひ其高節を標し□と申趣意と奉存候故叔父是は全く亡の字と同樣に用ひ候ものと被存候故の字に自ら二樣の用法御座候と奉存候乍去故鎌原何某と申例は無之樣被存候御蔭にて慥に此二樣の用法御座候を詳に仕難有

率更の碑

奉存候御書册四本返璧仕候御査入可被成下候□□□搨本御擲還奉拜收候小歐陽の書定て御覽御座候義とは存じ候へども跋尾認め候間御慰迄に奉似候けしからず嶮岨なるものに御座候乍去是碑にて率更の碑の濫漫致し用筆の糢糊とし候所を補ひ候一助には相成候歟と奉存候浦賀表新造の公船並に土藩蒸氣船雛形等の義被仰下異聞を廣め候義奉多謝候江川死去の發し有之中俣入門見合に相成候事も御帋上にて始めて承知仕候江戸表より飛脚のもの罷歸り宅へ一寸相尋ね申聞け候は中俣過日御臺場にての打方あしく公邊ゟ御沙汰にても候ひしかと申樣申聞け候果して左樣にては公家の御恥辱にも候が何ぞ睦と致し候事御耳に入候や何如や（以上過日の拜復迄申上候）入御內覽候稿本之義御過賞赧顏の仕合奉存候再三御熟誦も被成下度候に付今暫く御留め被遊候との御事幸の義に奉存候何分も御心を被付否と被思召候義は不妨御駁論（數字不明）藤森生が備論附紙致し候を御覽被爲在度との御事何も大家の眦をけがし候程の義にては無御座候只初學の士に心付せ候爲に紙をもつけ候義に御座候ひき

海防臆測

海防臆測御示及一讀の上論辨も仕候樣蒙仰奉敬諾候議論は兎も角も一讀仕度奉存候一昨冬か

梵鐘鑄換

上邸の御寓居にて一寸本柄一見候ばかりのものにてかねては一渉も仕度と存居候所御示及にて得漫讀候事一快事と奉存候愚論も御座候はゞ其內可申上候小林生詩御評語いづれも擊節殘る所も有御座まじく候但題中の戍の字も當り不申戍は守邊と申字註に候へば是も御一評有御座度奉存候則原稿とも二綴返上仕候別條一頁御垂示奉謝候梵鐘鑄換の事は仰の通十四年前より申候事にて候所其後水府にて纔に被行候のみ多年響を絕し候義俄に……不明……忽五畿七道に及び候は近來の快事に奉存候惟此上之御施設奸蠹を生せず果して皇國鎮護の至寶と相成候樣仕度ものに御座候別條直樣完趙仕候御收可被成下候荊婦不快をも御存問被成下難有奉謝候もはや霍然仕候間乍憚御放念可被成下候尊伻に承候へば令兒君御風邪も追々御快く候よし奉慶候しかる所盟臺御眼の際御腫物出來候よし散々と奉存候其樣の類は蛭に吸はせ候が至てよく候もし赤く成り御痛み候はゞ必ず御用可被成候先は拜復迄草々申上候以上

十四日　　星　拜復

懼堂盟臺皇比

安政二年三月十五日

〔五四四〕 望月主米に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

昨日之雨長降にも相成候はん歟と存じ候所よく霽れ候乍去殊の外冷氣に御座候震艮何の御碍も不被爲入候耶然ば承り候に今日江戸表より御判物著と申事に候右御便に付顯藏樣其後の御容體被仰越候御事は無御座候や被仰越候御事も御座候はゞ奉伺度候今日頃俗に申峠可有御座と被存候何とぞ御病早く分離候樣仕度ものと奉禱候右御樣子奉伺度草々申上候以上

御判物

晩春望

長春茇扁字

長春茇扁字相認め今日刻迄相仕舞候に付雜と摺り候て入御覽候字體肥大墨豬の誚を免れず御一咲可被成下候然ば先達て光訪之節申上御允諾御座候ひし以下切れてなし

安政二年三月十九日

〔五四五〕 山寺源大夫に贈る

雨に成り候へば又よく降つゞき候事に御座候天地の氣と雖も亦一偏に成り候

事を免かれざるにても御座候歟と被存候何の御碍も無御座候邪御面部御瘍其後如何の御樣子にや奉伺候偖過日御手敎の拜復申上候節夜陰御顧訪を蒙り候拜謝をば既に申上候歟の樣に存じ候て其義不相認跡にて再思候へば左樣にては無御座候を甚不都束なる裁復の仕やうにて深く恥入奉存候御繁務の所態々荷御枉趾殊に御丁寧の尊命を以て御土產もの被下其上拜借の顏帖其儘留置候樣にと申御事誠に望外の事共にて感刻良に深く筆謝不殫奉存候顏帖は殊に難有日日不能釋手愛玩仕候義に御座候過日申上候跋尾漸淨寫仕候間申上落し候

海防臆測颯と一涉

御禮申上候序供電矚候御一笑可被成下候偖此間御示及之海防臆測颯と一涉仕候所いかにも感じ入候事どもにて候儒生にて此樣の料見の御座候人外に有之まじく賴襄などの海防論とは日を同して語るべからずと奉存候是は精里にて候か又は侗庵にて候や慥か一昨冬の高話には精里の樣に承り候と存候所此度一讀候へば精里の頃の人の口氣に無之事ども候故甚だ疑ひ存候事に御座候精里の筆し被置候へ侗庵の潤色を被加候ものにても候歟仁齋の著述へ東涯の手を入れ矢張仁齋の所著と致し候類にも御座候歟左なくば最初より侗庵の被書

（森嶺は高川文筌）

候ものかと被存候卷末に有之候擬封事は全く倜庵にて候所其文句口氣よく似寄候所も有之又いづれも署尾無之等共に同手筆の疑を免れず候踪と蒙御誨示度奉存候御浮簽高按の所一々御尤に敬服仕候いかにもよく御心付かれ候と存じ候事共箇樣の義に至り候ては別して小弟遠く及び奉らず候乍然一二存付候箇條も有之候間近日御書物返璧仕候節錄出可申上候近者傳聞候へば唐山へ滯（一本歸）舶の墨人より急使を參らせ候て英人の軍艦魯人の跡を尾し候て本邦へ來り可申魯人を其儘被差置候はゞ御爲あしかるべく候へば御了簡御座候樣にとか申上候よし其事下田より森嶺のいづ方へか申遣し候內書に有之と申事に候が慥かなる義御承知無御座候哉此義はかねてより氣遣ひ御話にも申上候かと存じ候いなものと存じ候事に御座候兩三日前江戶門下のものより書狀到來候所其內都下のふるまひ兒戲よりも愚なる事ども候て見聞を厭ひ候など申來り候此節いかなる事共有之候て右樣申越し候者歟□□□へは不相分候何ぞ御異聞御座候はゞ內々御示誨可被成下候將此間は其御近邊暴風の趣にて候高邸何の御祟りも無御座候ひしや旣に故宅園中の木折れ候とて長屋のものより申出候所

見候はねばちと指圖も出來かね候へ共小弟此次第故母に參呉れ候樣申候所是は少々乍憚足に腫物出來候て步行迷惑とのことさらば駕籠にて宅限り外々へは參り候はぬ樣申遣し候所足もよく候とて途中より駕籠を止め跡にて承り候へば高館へも罷出候よし其節は御不在にて候所政君御款待被成下豚犬義も戴ものなど仕不淺難有奉存候乍憚政君其外樣へも可然御致謝被成下度候草々如此に御座候以上

十九日

附啓小四書御藏本御座候はゞ第三卷史學提要の上冊暫時御惠借奉願候豚犬に爲讀候本其部いづ方へ參り候歟久しく見え不申依て補寫候て敎へ可申と存付其底本に拜借願候義に御座候以上

懼堂老盟臺　几下　　啓　拜手

安政二年三月廿二日

〔五四六〕　山寺源大夫に贈る

御手筆拜見仕り候如仰朝々いかにも冷氣なる事に御座候所益御綏和奉慶候此

程も御細答被成下奉感謝候就て御面部御小瘍も早速に御癒令兒御風邪も追々御磷被成候よし先以奉降心候御領の邊御かぶれ候には手巾を微温湯に御しめし候て御拭候方可然候尤も御全身浴までの事にて御座候小四書の義も御手數難有奉謝候過刻御官より到來仕候開乍序御禮申上候海防臆測の義愚筌の通倜翁と申事いかさま左樣なるべく候亡友鈴木春山並箕作阮甫など時々申唱候說ども其儘に出居候倜翁は元來虛心平氣の仁故に偏執の意無之因て議論も公平にて諸家の長を被取候所に他の讀書家の及ばざる所御座候と奉存候御示敎を蒙候詮に小跋を認め候て返上可仕と存じ罷在候委細は尙其節可申上候別條三頁御內々御示被下乍每度奉多謝候墨人申越候趣は恐らくは渠等が奸計にて本邦に惠をうり魯人よりは相應の利を收め候はん等の趣向かと被存候高意には如何や右三頁返上仕候御査入可被成下候今日は道因碑本御擲還奉拜收候跋文御留被置候旨唯命可奉從候經世祕策二本蒙御垂示是又奉感銘候遂に是まで名も承らぬものにて御座候無名老夫は何人に御座候や御傳聞の義も候はゞ其內御誨示可被成下候御紙末云々の御說時弊によく當り候樣奉存候約を納るゝに

小跋を認め

經世祕策

膈よりするの場いかさま此樣のものも所用可有之候尙一涉の上存寄候事も候はゞ申上候樣仕るべく候過日の拜復一同草略申上候

廿二日　啓　拜復

懼堂老盟臺　臺下

〔五四七〕山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

安政二年三月廿三日

經世祕策（本多利明の著　利明は蘭學者　寛政二年の作）

硝石をとらねば火災を興すなどたわひもなき浮論

昨日は經世祕策と題し候二本御示及難有奉存候則一覽仕候所何人の著し候ものや不都束なるものと存じ候事に御座候天下の財を十六分にし十五分商賈□□など申事も奥州の米相場のみにて積り（數字不明）埒もなき次第又江戸表一日の食糧米九萬石と申なども一向無算の事と存じ候玄米九合をしらげ候て大凡男女二人の食に相成候夫を以て積り候へば都下人口幼孩を除き大凡二千萬有之譯に相成申候江戸人口五百萬と申候だにちと其數□□など申事に御座候しかるを二千萬（數字不明）何に倚り積り候義か埒もなき事の樣に御座候其上四大急務など申候て何事かと存じ候へば第一策に硝石をとらねば火災を興す抔た

わひもなき浮論にて覺えず噴飯候事に御座候何事をも深く究めず西洋書など讀候ものゝ申候事をつまみ聞に致し不明よき料見にて書立候ものと被存候夫を書肆なども題號大相にて候故よきものと存じ活板にも仕候事歟同じくたわひもなき事どもと存候昨日御書中エゲイプテの事御新聞かの樣に御覺え被成候と御座候所是は洋人の毎度誇候て何の書にもよくしるし候事に御座候エゲイプテの内地名不明と申所不明と申街衢有之其所に古き大寺有之其寺中に天の十二宮の圖御座候所其圖六千年前の製作と申事にて只今は佛郎察の都府パレイスの寶物に成居候と申事に御座候是は慥かなる事と見え候て描藏のソンメルなどの内にも人の學問才智の上古に開け候據と致し有之候唐土にては慥の記載は堯の□よりして有之四千年の昔に候へども□家の事璿璣玉衡等の手際中々其近古に開け候樣には存じられ不申やはり其前千年も二千年も古くより衆智を集めて出來候ものゝ樣被存候樂などの事も擊石拊石百獸率舞と有之候其妙けく後世及び候はぬ事にて御座候唐土は不思議に早く智慧づき候て後世へ成り埒もなく成り候と被存候本邦は其追々埒もなく成り候所を學び候故

（エゲイプテは埃及の事）

璿璣玉衡等の手際

唐土は不思議に早く智慧づき

本邦は其追追埒もなく成り候所を學び候故に今に至ても智慧ひらけず

に今に至ても智慧ひらけずと存じ候事に御座候當今に至り候ては實に西洋を以て郄子と爲さゞる事を得ずと奉存候先は御書物返上候迄匆々申上候以上

廿三日　　啓

懼堂盟臺　皐比　　拜

安政二年三月廿四日か

赤鬣魚

〔五四八〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

較久敷不獲拜面渇饑罷在候所に忽御使書殊に御到來の品とて美事之赤鬣魚一尾御惠投被下千萬辱感謝不盡奉存候折節客を得居候に付早速調理饗應にも相成可申別して辱奉謝候尙拜面御禮可得貴意候乍憚御母堂樣御始め宜く御致謝奉頼候以上

念四　　星　　拜

八田君　几下

安政二年三月廿五日か

〔五四九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

令弟御縁談の事

好き時節に相成候愈御住勝被成御起居候耶政君御續き御肥立候歟御左右承度候然ば昨日荒神町大藏罷越し令弟御縁談の事此節はじまり居候よし申聞候此節大藏に貴家へ罷出御無心申呉候樣更級の方より頼相伺居候と申事に候所賢友御始御母公樣思召は如何や又御當人の御存念も御座候義に付私ゟ内々御尋ね申呉候樣相頼申候承り候へば松本の純助殿方よりの縁邊にも候趣旁可然御相談の樣に被存候大藏も既に左樣申事にて此節の御場合御身の廻り御支度等も貴意に任せられまじく候へば夫等の事は始めより御打出し以前の如くに御不自由の事無之候へば此御相談は先方よりも不申出又たとひ先方より申出候迚も御相談には不相成候畢竟此節の御樣子故に先方心得次第は御熟談も被成度と申譯に候へば引越等も本引越に無之内引越にて支度なども何一ッ無之夫にても宜しく候はゞ進上候はん位の思召にて御相談に相成候ては如何や其義にて候へば夫丈の事は大藏如何底にも周旋可仕と申事に御座候依て先御内存之所私まで被仰下候樣致し度如此に御座候大分先方有餘も有之家の樣子に付或は始終の御宅の御爲などにも可相成やとも被存候先夫は末の義令弟にも何

とぞ早く御一分に御成候樣にと祈り候所より此御相談至極可然と私にも存じ候事に御座候貴意如何や承度奉存候以上

廿五日　星

八田賢友　几下

〔五五〇〕　鎌原伊野右衞門に贈る

安政二年三月廿八日

御手筆拜接捧讀仕候先以不揃之時候に御座候處御廬次御別條も不被爲在奉慰鄙懷候然ば御墓表御陰文中歷仕云々と御座候て官名無之彷彿として不分候に付何とか脩辭認方可有之と或人申上候より御勘辨御座候所一體無役席とて無役にて官職有之同樣の席御立被置候て先府君其御席に被成御座候御事に候へば其所何とか辭の脩め方有之まじきや歷仕とばかりにては唯御家督のみの御事か又は何の御役か不相分候樣被思召候に付愚考申上候樣奉敬諸候原來無役席にて別の御勤無御座候御事に候へば歷仕云々御陰文本のまゝにて何の子細も有之閒敷候必しも或人の吹毛求疵の如くならでも然るべき事と奉存候如此

例漢土秦の代以來天下郡縣の制と成り候てはあるべき樣も無之候へども岐周の制仕者世祿と申時には此例いくらも可有之事と被存候家を襲し祿を受けさへ致し候へば官職の有無に拘らず仕と申ものにて可有之候左候へば郡縣の世には無之事に候得共封建世祿の時には數々あるべき事と奉存候是を以て申候へば御陰文本のまゝにて何の御申分も無之御儀と奉存候又御席柄の事何とか無之候ては後世夫程の貴者なる事も相分らず位階低きもの丶家督後何の役義をも勤めずうせ候ものに別無之いかゞなど申論あるまじきに無之候へども釋追號云々の御模樣にても貴者なる所は明かに候へば是又子細も有御座間敷に其上無役席と申事決して別に辭の脩め方は有之まじく是を無理に辭の脩めだて致し候はゞ彌不分りのものに相成可申奉存候若々是非とも御席柄の事御しるし被成度思食に御座候はゞ襲家の下歷仕の上に無役席ﾀﾘの三字を御加へ被置候ものにも御座候はん歟左樣一々御記し御座候御事にて候はゞ御知行の御高等も是非御しるし不被成候ては片つりに相成然るまじく候依て夫等は別に御家牒と申ものに候へば總て御除きにて唯其御生卒ばかりを御記し御座候

と申が最切の思食と奉存候夫にて可然事の様奉存候尚御勘辨被遊候様奉存候
偖又或人の説に表面御題署に尊稱の文字無之候ては御陰文と不釣合と申義是
は取るにも足らぬ事に御座候本々天下後世へ公道なる御墓表を被設候と申が
至重の義にて其陰面に執事の御上より御生卒を御記し被置候と申までにて候
へば始めよりその釣合を議するなど申事にては無之候仰の如く此義は第四印
の拙箚にて明白の義と奉存候更に浮説に御迷ひ被遊まじく候御遺命にて云々
など申御斷御座候は尤も以て然るまじく奉存候愚意如右に御座候御下問に付
無伏藏申上候以上

三月廿八日　　　　星　　拜覆

鎌　原　君　廬　次

〔五五二〕望月主米に贈る

安政二年春か

霽色に相成候倍御佳寧奉慶候然ば此品珍しからず候のみに無御座杯中の物き
こしめされ候には不詰りのものに御座候へども御園中の草にて製し候間差上

度と老母申出候に付入御覽候御咲存の上御取捨可被成下候以上

八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　啓　再拜

素軒盟臺臺下

附白別紙一昨日差上候心得の所老僕去り難き用向有之遂に延引及今日其儘差上恐入候幸御海容奉希候乍序試に申上候老僕御家來に承り候へば黃菊の苗高園に御座候よしもし御餘計御座候はゞ少々にても宜しく戴度奉存候昨年菊圃の上へ風にて兩柳倒れろく〳〵花も無之候ひし程に候故か當春苗も一向出で不申候右故此御無心に及び候に御座候苗有之候て御分惠を蒙り候はゞ感銘無已可奉存候以上

〔五五二〕　山寺源大夫に贈る

安政二年三月か

下田の報聞

連日冷雨御動止何の御障も不被成御座候哉奉伺度候然者近日下田の報聞何か異事の御座候趣に承候定めて御手にはしかと仕候別條類可有御座と奉存候苦しからず候はゞ御內示被成下度奉懇願候過日本國へ志し候て乘出し候舟人も

本邦指掌全圖

中途より引返し立戻り候とか申事何等の義か其話の詳かなるを承らず候內は更に合點參らず候偖本邦指掌全圖永々拜借難有奉存候則完趙仕候御收可被成下候時に此御領分だけの圖定て御所持と奉存候御所持に御座候はゞ唯半日拜借奉願度候尤只今は雨にて候に付御□□□候はゞ雨歇み候處にて賤人差上候樣可仕候又晴閒を見候て直に返璧可申上候閒何分にも御許諾可被成下候草々布字

大星頓首

懼堂老盟臺

〔五五三〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年四月二日

御屛風長々拜借

大筆暫時御惠借

過日は美好之海鮮御惠贈被下辱家內打寄賞味いづれも山々御禮申出候爾來兎角不揃之氣候に御座候何之御碍も無御座候歟承度候然ば御屛風長々拜借冷風を防ぎ且雅品にて目を悅ばしめ千萬辱筆謝不罄候則致返璧候御收可被下候將近頃御無心に候が唐紙一枚に二字位認め候程の大筆御所持に候はゞ暫時御惠

借被下度奉冀候萬所祈に御座候以上

四月二日

八田賢友　　星　拜

〔五五四〕立田樂水に贈る

安政二年四月二日

名物六帖拜借

唐紙一枚に二字ばかり認め候位の大筆

兎角不揃の氣候に御座候尊體何似偖過日は名物六帖拜借奉願候所早速蒙御許諾高庇を以用事相辨じ千萬難有奉感謝候則返上仕候御査入奉仰候爰に又一事御無心の義御座候唐紙一枚に二字ばかり認め候位の大筆定めて御所藏と奉存候暫時御惠借奉萬冀候御允兪の上賤伻に御附與被成下候はゞ尤も多感の仕合可奉存候以上

四月二日

立田先生几下　　星　拜

〔五五五〕立田樂水に贈る

安政二年四月十九日か

石墨鐫華拜借

風候雨に成り候はん歟と被存候尊體次第に御快方の御容子昨日令郎より拜聞奉慰鄙懷候石墨鐫華拜借毎度御無心申上蒙御允愈難有奉存候則返璧仕候御收接可被成下候然ば此一帖近日手に入申候御慰に汙清覽候古搨を近年仕立直し候ものと被存候御鑒定如何や御留被置寛々御覽被下度候此の戒壇銘には慥か大小兩刻有之候かと覺え候金石史中其論有之候哉にも存候他日御擲還を蒙り候節右論説御見當候を令郎御筆勞被下候樣仕度奉冀候餘期面拜候以上

戒壇銘には慥か大小兩刻有之候かと覺え候金石史中其論有之候哉にも存候

十九日　　星　　拜

安政二年四月廿四日か

静山先生　几下

〔五五六〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

令愛御種痘

陰鬱之天氣に御座候倍御清適に候歟偖此間は美事の海鮮御投惠乍毎度感佩之劇奉存候令愛御種痘後御熱氣如何や承度候此程の御樣子にては今日頃多分御熱氣は有御座間敷と奉察候今夕刻風呂に御入申可被成候明朝の御樣子一診申

度候間朝飯後一寸御遣し申被下度候御左右拜問旁如此に御座候以上

廿四日　　　　星

八田賢友　几下

〔五五七〕村上誠之丞に贈る

長野市　和田榮二氏藏

安政二年五月十五日

閑居以來舊學を精研し近日に至り頗る力を得

長崎へも英佛魯三國の舶追々に相集り候由肥前藩の劍生矢野茂方へ尋ね去冬の詔書と申ものを見……卒然詩を作り拜

ボイス……借用

久敷御音耗も不承候時下梅節にも御母堂樣御始彌御碍も無御座候歟御近況委く致承知度候此方依舊安全御過念被下まじく候某閑居以來舊學を精研近日に至り頗る力を得候事ども丶有之獨自悅び存じ候事に御座候天下之御事は何廉御多事にて長崎へも英佛魯三國の舶十二艘追々に相集り候よし近來肥前藩之劍生矢野茂方へ尋ね候ての話の趣致傳聞候其表にてはもはや委敷事も御承知可被成候過日去冬の詔書と申もの拜見此御時節乍恐御尤至極の御事にて難有奉存且は先年先公へ上書の事なども存出で卒然詩を作り申候外ならず候間錄し候て御目にかけ候尤も暫の內御他見は御無用に被成可被下候然ば昨冬も御賴申置き候通ボイス左の部差しかゝり借用申度御無心申候

ＡＤＭＳＲ

此度飛脚宰領伴之助出府に付本の痛み候はぬ様には委細是へ申付候但すれ候はぬ様一冊ごとに反古に御包み御渡し可被下候箱は伴之助用意可申候爰許にても尚貴き書物の義に付箱へつめ候にもよく其心得にて致し候様御申付可被下候何分御頼申候此節何か御穿鑿にても有之右之部御手放し候事御迷惑にも可有之候へども其表には藩邸の本も村上榮俊方に有之蟻川へ左様御申候へばいつにても御用は辨じ可申此方にては西洋書持候人も無之候故誠に不自由にて別して物の名など討索候に差困り候依て此度もさしかゝり御無心申候事にて候幸に其意御諒得可被下候先は用事旁御近況御見舞迄如此に御座候時候折角御厭可被成候御家内様へ總じて宜く御致意被下度候餘期後音

村上賢弟

五月十五日　　子明

本邦輿地圖幷に漢土沿革圖

附白相託し置き候本邦輿地圖幷に漢土沿革圖は一同に被成蟻川方へ御出し置き便の節此方へ屆き候様乍御手數御取計可被下候此段も乍序御賴得貴意

候以上

〔五五八〕 山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

御手簡□□仕候如仰今日御發駕好天氣にて御同然恐悅奉存候然ば夜前も御不寐と申御事に候所此間拜答申上候義に付一々御酬誨何とも恐入候且桐先生御遺跡碑文之事も曖翁へ（數字不明）來候とて御示及被成下奉銘謝候翁も愚意申候所に一々被從候趣大慶仕候全く盟臺被仰遺方當其□候故の御事と奉存候扨又望家御別紙も（數字不明）始めて承知仕候定て□島などの振合と奉存候翁にも大老に及ばれ候て其學ぶ所を以て侍講までも被進候は榮幸之至とも可申候但不知□□に補ひ御座候所何事にや是又竊に惜み存候義に御座候今（數字不明）に御奉送の御詩作を被爲召候て御作御座候とて御垂示感吟仕候御再練無御座候所けく卒然の御作には可然樣奉存候もし御再考御座候所に候へば第二のはじめを無力補時など御座候ては如何や存付候閒例の伏藏なし宜しく御取舍可被成下候鈴木氏所藏之珍物寫眞圖是又高庇にて此度始て一覧難有奉存候何とも分

安政二年五月十六日

桐先生御遺跡碑文之事も……愚意申候所に一一被從

侍講までも被進

鈴木氏所藏之珍物寫眞圖

（五五八）山寺源大夫宛

兵の賓

りかね候ものにて候いつかも御沙汰の通いかさま自然物にて人功に成り候ものとは不被存候但草木の實か又は動物の遺骨か其處も圖のみにては分り不申尤も是は某一見だに仕候はゞ即座に可辨と存候いつぞ其時節も候はゞ檢査仕度ものと奉存候寫眞何人に成り候や頗る精緻に出來申候此位の圖に候へば西洋書リンナウスビホンなど申類にて勘合候はゞ必其品質相分り可申被存候惜むべし官本にも私藏にも此兩種とも無之差當り候ては手の下し所無之候依て先此圖も直樣返上仕候曖翁書簡望家劇札とも御落手可被成下候過日拜借之兵の賓も一同奉納上候此書かねて名を承り居り渇望之處致一讀候て大に望を失ひ申候防海の事に至り候ては此公にして此に御止り候事に候へば其他尚何ぞ望まんと慨歎仕候義に御座候高踐とは相觸れ候へ共聊か愚衷之端を開き候其內拜顏を得候はゞ尚御異見をも奉伺度候先は拜酬迄草々申上候以上

既望

星　拜覆

懼堂盟臺　皐比

安政二年五月廿一日か

〔五五九〕 小山田壹岐に贈る

埴科郡西條村　中島藤四郎氏藏

昨年中より長谷川善兵衛を以て相願ひ御承知被成下候砲術書

大本の方

ヱキセルシチーレグレメントアルチルレリー

の義

右は段々子細も御座候故を以て御用の趣にて（學校御用と也　御内用と也）蟻川賢之助より御手へ差上候様被仰渡御落手之上御下げ被成下度と申義只今に御遲延被成下候義如何之御様子に御座候哉既に御在府中にも幸の義に付彼表にて早速に抄取候様被成下度と善兵衛より申上させ候筈に御座候然る所御歸藩後も一向御沙汰不被下候に付度々御催促申上呉候様相賴候義に御座候處其時々申上呉候義歟如何歟元來右之書修理藏本にて借し遣し置候品に御座候所其外に同名の小本の方も借し置き尚其餘に武器稽古道具等も多々用立ち置き且金子にも少々取替も有之是は此節柄手本逼迫にも候故差戻し候様親類共より掛合に及ばせ

候義も御座候然る所兩三年一向不沙汰にて遂に一と度文通も仕らず候程の事に御座候（賢之助義は修理御吟味中なども親類名目にて公邊迄通り候義に付私迄の文通は苦しからず候筋其上修理には莫太の恩義も有之候義に付他の一通りの門人とも相違候筋と奉存候）右樣の次第に候へども夫を咎め候樣の事より是迄の恩義をも滅却候樣の事も出で來り候ものと修理勘辨を以て其以來は深く掛合にも及ばせ不申候然る所右之書此方門人共親類を以て質問候等の義にも入用有之候に付私名前にて也親類名前にて也返却候樣申遣し候義いと易き事に候へども是迄の振合を以て氣遣候へば早速返却致すまじく候萬一左候時は其儘にも不被打置取詰め掛合にも及び候義可有之右之上に同人自然も心得違ひの筋にても御座候時には不得已事表向御手前樣方の御厄介筋相願候樣の事あるまじきに無之左候ては是迄恩義を破り候はざる樣厚く勘辨を加へ候義詮もなき事に相成候に付き彼是の次第を以て一向の事右書ばかり御手にて御用之趣に奉願候方無事の手段と存じ不顧御手數相願ひ候義に御座候既に此段々心入れをば颯と認取り善兵衛へ渡し置候義に付定て御一覽も被成下候義と奉存候然る所如此御遲延被成下候は外御用向御繁劇にて御失念被成下候御事歟但しは一と先御

承知は被成下候へども追て表向御手数に罷成候義は兎も角も善兵衛を以て内願候様には御取計らひ被成下兼候御事歟善兵衛へ御催促申上㕝候様度々申候て其時々申上㕝候様承候へども如此歳を超え月を重ね一向に相辨じ不申候義に付同人の上にも疑惑なきにあらず仍て無餘議私より御内々御様子奉伺候明日江府への便御座候趣承知仕御様子次第は直に掛合可申と奉存候乍然前條の次第も御座候に付篤と御様子奉伺上ならでは仕兼候義に付此段申上候御勘辨之上否御批誨被成下候様仕度奉願候以上

五月廿一日

佐久間脩二郎

小壹岐様

〔五六〇〕 長谷川甚大夫に贈る

松代町 長谷川五作氏藏

安政二年六月七日か

附白綿内よりも御法事に付御出御座候よし定て數日御逗留と奉存候今夕頃何も御構不申候が夕飯御上り乍ら御出被下候様仕度候此段乍憚御傳聲奉冀候以上

日々よく夕立は致し候へども矢張暑威は甚しく候御眠食何の御碍も不被成御座候哉然ば安世義俄に御内用と申事にて大坂表へ出立仕候右之義は御承知に御座候哉御存知之通忠信孝弟の缺候人物遠國の御用等勤め得可申義とも存じ候はず如何なる子細か更に合點參り不申右に付拜面を以て御内話仕度義御座候間炎熱の時節別して御苦勞千萬に奉存候へども一兩日中一寸御來訪奉願度此段私より申上候樣申付候に付草々申上候已上

七日

本文奉願候義晩來にて候はゞ少しは涼くも可有之候夜食は此方にて御上り之思召にて御枉趾奉希候

甚大夫樣　內用　　悋二郎

（五六二）八田愼藏に贈る　　松代町　八田彥次郎氏藏

安政二年六月十一日か

御使書拜見先以酷暑之節閤府御揃彌御佳勝之段沃慰之至奉存候賤家老少幸に頑健御放念被下度候偖は被寄思食美事之海鱗一尾御惠投被下乍毎度御芳志千

萬辱言謝不盡奉存候尙拜晤を以て御禮可得貴意と拜答迄匆々如此御座候以上

十一日　　星　　拜復

八田仁友臺下

〔五六二〕宮本愼助に贈る

安政二年六月十二日か

此間は暑候御尋とて御入來殊に鷄子一盤御惠投被下且拙筆之御挨拶として過當之御謝儀に預り重疊感銘乍然痛却之至奉存候偖御囑し御座候匾字今明日の內認め可申と存候に就き存じ付候事有之候まゝ此間の御禮旁一寸得貴意候最初第一圖の通可認と存候所草の字を加へ候方匾面立派に見え可申と考候て第二圖の如く認め見候再又存じ付候は凡そのもの格別の事に無之候ても新奇にて珍らしく候へば見所多きものにて候並方より一等擢で候事にても他人の糟粕をねぶり候て陳腐に成り候ては面白からず候樣存候彼の山に象山の號有之候事惠明寺の古き額に其字面見え候ばかり人之心づかず居候所にて僕よりこれを發し候は格別の事には無之候へども此土地のみならず本邦には古來此別

號の人儒釋ともに無御座候へば先新奇とも可申候然る所其字面が面白く候とて今又匾字に被成候ては再出三出に付もはや陳腐にて糟粕の譯に相成見聞候人珍重申まじき歟とも存じ申候然らば匾面いかゞにて可然と御座候はんに第三圖の如く御座候はゞ却て見所有之候はんかと存候過日認候山記にも以其東面修竹成林紺聯綠涵彌望如霽雲故亦名竹山とも有之候てけく山の本名にて候但字面至て平々の樣に候へども他に其類無之特出の事に付却て新奇に打揚て聞え可申かと被存候たけやまと稱し候へば餘り普通に申唱へ候故に平々の如き樣聞え候へ共此間拜晤之節も御話申候通唐代名勝の地に竹山と申が有之既に顏魯公などに聯句の詩も候て後世法帖にも入候程の事にて其字面も頗風雅に御座候又本邦にては寬政時代浪華に中井積善と申鴻儒有之則日本逸史の撰者にて候此人の號を竹山と申候此人の外は本邦に同號の儒釋無之候へば此所も面白き歟と存候僕に於てはいづれを認め候とても同じ事に候へども折角之御結構にて匾地なども格別に御念をも入れられ候事に候へば其字面等をも永く人の珍重候樣致し度及此事候夫とも委細なく第一第二の方に思召御座候歟

夫是御伏藏なく御申越被下候樣致し度如此に御座候呉々も此間は痛入候事に御座候ひき右御禮ながら草々以上

六月十二日　　　星　拜

宮本賢友

一印 象山堂

二印 象山草堂

三印 竹山草堂

嘉永甲寅三月象山平啓書

（甲寅三月は蟄居を憚りて特に蟄居前の年月を用ひたるなり）

〔五六三〕 宮本愼助に贈る

（安政二年六月十五日か）

夜前は好雨にて御座候ひき彌御清適と致想像候然ば此間御誨答之如く御扁字認め申候但四字に落款致し候程は地無之依て此程の第一圖の樣認め候小扁の方櫻樹の御植込も有之又華胥國の故事兩樣に聞え候樣如此致し申候いづれも

（第一圖云云は「象山堂」小扁云云は「華國」と認めたる額の説明に）

て宮本仲氏の重襲する所）

拙劣なる所は御容赦可被下候餘在面賦

十五日　　　　佐久間

宮本様

〔五六四〕竹村金吾に贈る

安政二年六月十七日

御使書拜接忙手拜展仕候如仰連日酷暑難凌覺候程に御座候夫故にちと御碍り被遊候よし散々の御儀に奉存候兎角御快然無御座候との御事時節柄千萬御保重に不可過奉存候扠又時下御尋ね被成下候て美事の折御惠贈被成下感戢之至可申上やうも無御座候不打置老少打寄拜味仕り炎時をも忘れ可申と奉欣謝候小弟義は昨年得禍候以來氣體は殊の外に健に罷成候て當年などは幾歳にも無之輕安に御座候兩三日前兩日ばかり頭痛仕候氣味に候ひし所其後本の如く爽快讀書窮理とも怠り不申候其外老少いづれも無事に御座候間乍憚御放念可被下候其内夜涼をも生じ候はゞ月に御乘じ被成候頃となり晩來より御過談被成下度奉企望候色々拜話申上度事ども如山に御座候いづれ期拜晤之節候先は御

恵贈の拜謝迄草々申上候以上

十七日

猶々有合せの品御移りの印までに入御覧候御哂存可被成下候以上

竹村先生　臺下　　　　星　拜復

〔五六五〕　山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

安政二年六月十七日か

亞國より銃砲二千門差出し候と申は小銃に御座候や又は大砲に御座候や

御使牘拜見仕候如仰今日は殊に熱風人意に可ならず候所倍御萬福被成御座欣慰之至奉存候然ば御精製之妙品澤山に蒙御恵賜言謝不盡難有奉存候不打置老少打寄拜味仕候て炎熱をも忘れ可申と家内一同宜しく御禮申上度申出候義に御座候將江戸御來書之御異聞をも早速御聞かせ被成下毎度ながら奉感佩候亞國より銃砲二千門差出し候と申は小銃に御座候や又は大砲に御座候や御承知御座候はゞ其内御示誨奉希候過日は宮復手柬御示被成下奉多謝候今日之御誨牘の趣にては此手柬の說全く浮きたるにても候歟しかし如何可有御座候や尙不安心なる事と奉存候右手柬も依命返璧仕候御收□可被成下候先は蒙御芳問

候拜謝迄草々申上候乍憚尊嫂前御始可然御致謝奉仰候餘留面悉

十七日

倡義老盟臺　文几

星　拜復

〔五六六〕　山田見龍に贈る

豊榮村　小林莊右衛門氏藏

安政二年七月三日か

秋熱も兎角鬱溽をかね候御起居倍御戩穀奉慶候偖此間も蒙御訪問其上御嘉貺を荷ひ感佩之至奉存候其節被仰置候品出來候間御門前僕の序御座候に付持せ差上候御一咲可被下候此程之拜謝旁如此に御座候以上

三日

山田君　臺下

星　拜

〔五六七〕　藤岡伊織に贈る

安政二年七月七日か

佳節御同慶奉存候偖先夕は御內訪殊に美事の萍實一顆御投惠被下乍每度御芳情不淺辱奉謝候然ば其節掛御目候詩跡にて一所改め申候其改候方少し宜く候

開認直し可呈と存候此程の一帋御座右に有之候はゞ一寸此ものに御投與被下度候先夕の拜謝旁草々頓首

七夕　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　　星

勉齋令友几下

安政二年七月九日

〔五六八〕立田樂水に贈る

夜前は乍少々好雨にて御座候ひき御起居倍御佳勝被成御座候耶然ば淨土宗にて始祖の樣に致し候善導大師と申ものゝ傳の內討檢仕度事有之候所其傳も數種有之候かの樣に記し居り候甚御手數の段は恐入候へども御香華所の城巽林には其數種必可有御座候開暫時御借求め御轉借被成下候樣仕度奉萬冀候善導五書と申すものも有之候よし是は名目を存じ候迄にて涉獵候事も無之候兎てもの御手數序に是も一同御取出し被成下候樣奉願候此樣のものも閑時一涉致し置き候へば何かに無用の用可有之と存じ候より相願候義に御座候尤も急ぎ候義に無御座候開御序御座候節に宜く奉希候將此開は少林寺戒壇銘御擲返右

（城巽林は松代御安町願行寺淨土宗なり）

善導五書

見合候樣にて金石史一本蒙御借示乍毎度銘感不已奉存候今日返上仕度候讀かけ候所御座候間少々御寛貸可被成下候押版一枚以序返上仕候草々不字

九日　　啓　　拜

靜山先生　臺下

金石史一本

〔五六九〕小林善藏に贈る　　長野市　新井義雄氏藏

安政二年七月十二日か

晴山老より修理方への送金

殘暑甚布御座候處彌御安泰被成御勤珍重奉存候然ば先達て江戸三村晴山老より同姓修理方への送金拾三兩西村源藏殿より御役方まで爲替の證書にて致到來居候今明日之内右證書を以て御役所迄人差上申度奉存候其節證書と御引替右金子御渡し被下度奉賴候此段得貴意度如此に御座候以上

七月十二日　　悋　二　郎

善　藏　樣

御口答可被下候

〔五七〇〕 山寺源大夫に贈る

安政二年七月十五日

中元愛度奉存候倍御安好と奉想像候夜前より好き雨にて御座候今少く快く降候はゞ剩炎をも一洗し可申と企望候義に御座候偖此間は藤盛生詩抄御示借相願ひ得一讀奉感謝候此間も一寸御誨答被下候通何も是と申目にかゝり候事も無之譴責を得候はん廉も無御座候へば過日傳聞候所は多分訛傳なるべく被存候詩中々感じ入候事にて五古など此位に作候もの都下外に有之まじく候三本返上御收納奉仰候海防臆測も長く留置き恐入候是又一同奉還上候御約束に付跋文起草仕候故入御覽候淨土宗の祖師善導の傳の跋是又一時存じ出候に就附上仕候善導傳の跋は別して略草のまゝに候間御覽後御擲返被成下度候先早々申上候以上

（藤盛生は弘庵）

詩中々感じ入候

中元　　　　啓　拜上

懼堂老盟臺

〔五七一〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年八月六日か

過日も佳菓御投惠乍毎度御深情不知所謝辱仕合御座候爾來稍涼氣に相成候御起居彌御勝常に候歟然ば御囑託之畫牋此涼に乘じ候て可認と存候然る所雙幅の御約束にて候ひしや又隨意と申事に候ひしや忘れ候間一寸御尋申候將奉使日本紀事山寺より御取寄せ御座候や如何乍序此事も承度候御書入貴答可被下候以上

御囑託の畫牋奉使日本紀事

六日

八田賢弟　几下

大　星

〔五七二〕勝麟太郎に贈る

安政二年八月十五日

久々御踈遠申上候浪華よりも倍御多祥にて御榮歸愛度奉慶候右御悦も順子へ相託し候て不申上候所御多忙之御中御惠書を蒙り千萬難有奉謝候右奉答も甚延引重疊恐入奉存候時下秋涼何の御碍も不被爲入北堂君にも御村も不被成御

座候御便順子迄到來奉慰鄙懷候賤家老少無事乍憚御放念可被成下候世上には色々の事も御座候よしの所屏居の身は甚閑寂にて近日も大幅の畫を一張作り夫に左の詩を錄候

罪讒亦渥恩。忽與世事違。起臥一室空。疎放得自怡。委懷親文墨。早晏他無思。偶然及此戲。雲山見幽姿。方將消永晝。何曾學畫師。遣興豈非適。休論妍與媸。

是は實境に御座候御一咲奉仰候此閑時を空しく致し申まじくと存候てウキスキユンデに取かゝり申候礮學軍術いづれも此詳證術に根基候はでは叶はぬ事と被存候孫子にも地生度。度生量。量生數。數生稱。稱生勝。と有之候は全く此術を申候事と被存候所漢土には其下學の功無之候故其效驗を收め候もの寡く候と存候事に御座候是までサックフック卷首の所力及ばず其儘に致し置候が大抵推研埒あき申候始は原書誤の有之候に差支候所能讀候へば原文の誤皆相分り候御紙上拜見候へば只今に洋籍拂底のよし公邊には何故洋籍澤山御取寄せ海内に普く成り候樣不被成候義や今に儒者衆邪魔致され候事歟扨々不審の事に奉存候此事左樣相成不申候内は開け候樣にても十分の事に至らず何分某などが

此方へも洋人御引入：衆長を御集め候樣に無御座候ては永世の大業は立ち不申

申上候通に此方へも洋人御引入水府老公など御直に御論辯其上にて御兵制をも御定め又此邦のものをも諸國へ差出され衆長を御集め候樣に無御座候ては永世の大業は立ち不申候今夕便有之候に付餘り御疎遠申上候故申譯旁草々申縮候氣候折角御厭可被遊候乍憚北堂前御始め可然御致意奉仰候以上

勝　君　臺下　　星　拜覆

中　秋

今日は此地好晴に御座候此分にては夜來月色も可宜被存候其御地如何や定て御興も可有御座奉想像候玉詠等も御座候はゞ他日承度奉存候偖中元之御祝儀さして昆吾一方御贈被成下感銘之至奉存候是よりは毎度御無音愧入奉存候此野物如何しく候へども聊か入御覽候御哂留可被成下候以上

勝麟太郎より返事

安政二年八月廿日

貴翰拜讀先以御惣容樣御初御多祥御座被成重々奉賀候偖は私方よりも鳥渡御文通可申上と便宜相伺候處芳翰到來右も其儘貴答に相添差出し申候御書之御詩拜吟小子輩高意は不可解候へども卓然として胸

開清懷を生じ申候ウヰスキユンデ御電覽之趣御示教一々的當後學に相成候義深く感佩仕候未だ洋籍拂底にて皆々困り居申候乍然此節長崎表にては植字□□候爲追々邦製多く相成可申舶來も御取寄之義と推考仕り候別封申上候長崎表へ罷越候義も昨今又々被仰出候て私共一同薩州獻上之船にて品川方乘船の積りに相成申候是迄航海之書は讀不申今更當惑之仕合に御座候何ぞ御心附の義も御座候はゞ御教示偏に奉願候蘭人に問試申度候開箇條書に御認寄に御投被成下候樣奉希候且又如高命往々江戸へ御呼下に相成候樣仕度□□之義も申上候へども未時不到何れにも一兩年中には右樣相成可申と奉存候此度參候船將はメールステルグ、フアヒユスと申ものに御座候由三十年來航海いたし居其内上陸いたし候年月は二年程と申事に御座候同人も最早老年に及候開他邦へ參候所存無之日本人教育にて相果候はゞ足れりと申居候由獻上之蒸氣船は名はスームピンク三百四力之蒸氣と申事に御座候其他士官四人士官見習二人雜卒百二十人計と申事にて慥なる事は知れ不申又々申上候樣可仕奉存候私別段相願候傳習中怠惰を不生警戒に相成候樣なる高作頂戴仕度奉願候此義は呉々も御面倒乍

ら御一筆御勞奉願候餘は後便可申上貴答迄早々如斯に御座候以上

八月廿日

猶乍末筆御母堂樣御初御惣容樣へも御序之刻宜敷御致聲奉願候將又此一封甚乍輕少呈上御取捨被下候はゞ大慶奉存候何か取込居御無音仕候義と奉存候間不惡敷御海容被下度候小生出帆も來朔日と治定仕候以書崎陽ゟ可申上候前文申上候御詩と御心付之箇條は何分奉願候再拜

象山先生　貴答　　麟太郎

〔五七三〕高田幾太に贈る

安政二年八月二十日

祭禮兩日あやにく雨天にて萬端御不都合と奉存候處令郎にも先々御恙なく御仕まひ殊に昨日は大分御立派に御裝ひ望觀候もの皆々嘆賞を極め候と申御事重疊愛度大御安心と奉慶賀候偖此程は右之御用意萬端にて御多忙之御中御內訪を蒙り縷々御誨喩望恩兩君の御配意と申し竹兄幷に盟臺細微之所まで御心付被成下候御事御親切之至今に始めざる義ながら萬々難有感激之餘り流涕に

及び候までに奉存御禮も存じ候様には申盡し難く奉存候但し御誨喩一條に付尙さくと勘辨仕見候所諸君御配意被下候處と元來愚意の有る所と行違ひ候所御座候様に被存候に付愚意之趣一應左に申上候抑砲術門人共内々參り候て受教授候と申事はじめは依田源之丞、金井新六等親類にて朝暮立入小弟所持の道具など見候より大小砲術幷に測量等習ひ度と申出候へども最初は志の程も分り申さずさては右等の藝術一兩人にても實に上の御用にも立ち候様に仕立候には多分之骨も折れ又多分の手間をも費し候はでは叶ひ不申小弟事昨年まで四五年の間他人の爲のみに致奔走空しく日月を過了し候に付此時節を幸に是迄手前の爲闕漏を覺え候事ども專に研究仕度其事に心を入れ候折柄一兩人の門下のために多分の手間費致し候も迷惑に存じ教授の事再三斷り候所源之丞中々志も深く候様子にて達て申乞ひ候に付去らば手間費も無餘儀事又一人にても始終上の御用にも立候程のもの拵へ出し候へば是も亦屛居中責ての御奉公と存じ候て教へ始め候所舊門人の内にも志御座候もの其事傳聞候て内々罷越し候其内には小弟の教授候所を執心候て新入を乞ひ候ものも有之候夫等總

宅へ見え候もの四拾人計りも有之べく候所

て一應二應斷候へども達て懇望候故不得已事内々致教授遣し候事に御座候乍去右之次第故に此節宅へ見え候もの四拾人計りも有之べく候所其開才不才は候へどもいづれも先一廉づつ有之候もの共にて尤も小弟の取立方に成法有之故には候へども僅かの間に其坐作進退やゝ見るべきものに相成候。此儘兩三年も怠らず修業候はゞ大抵の師範家にも成得候はんと被存候もの十四五人も有之候小弟の發揮候て西洋の法則を誤り候はぬ門派は廣く他藩に行はれ候へども本藩には蟻川生一人の外よく出來候もの無之かね〴〵嘆息罷在候唯大略似寄の事を致し候て夫にて事を仕まひ候料見に候へば何成と其眞似方致し事濟み可申候へども此時節に當て眞箇に兵務を修め候には小弟の成法を守り候樣に致さず候ては決して行き届き不申候兼て存候に上にて御眞眼を被爲開御眞實に練兵之事に被爲及候はん時には眞に其術に明かなる人有之改正潤色仕らず候ては相成申まじく其人たとひ有之候ても一人二人にては多分の御人數を暫時に規律に入れ候事能はず本藩の上に於ても左樣の人いづれにも拾數人無之候ては埒あき不申と存候故此節竊に右之御用に相立可申もの其數だけも取

恩君御密喩被下候には

立置候へば是又一廉の蔭の御奉公と奉存依て此間御覽に入候詩に申候通随分氣の懈るをも忘れ候て内々教導も仕候義に御座候此程恩君御密喩被下候には高弟のものへ一兩人其事を面誨致し其餘のものへは高弟のものより傳へ候樣に致し候はゞ可然と御座候へども只今左樣の高足弟子も無之且教授の事は其地位だけのものにて其地位に至らざるものへは其事いか程耳提面命候ても何の用をも成し候はぬものにて候恩老臺碁の國手にて御出候と申事に候所拙碁のものへ一時妙手を御授け候とても其ものより他人へ傳へ候時は大間違ひに成り可申竹兄馭馬の名人に候所其功至らざるものへ其術を授け他人へ其通に傳へしめられ候はん事是決して難出來事なるべく又老兄音律に御堪能に御座候處其技拙きものへいか樣御骨折御教喩御座候とも其ものゝ思召に叶ひ候はん事固より無覺束況や夫を他人へ傳へ其他人をして高意に叶ひ候樣致させ候はん事存じもよらぬ事と奉存候小弟の教授仕候所も是と二理無御座候依て此義者何分左樣も仕かね候義又其有志のもの此節の所をも憚からず頻に出精候て一日は一日丈に其功も見え候を自分の爲を計り候て一切斷候と申所何分忍

かゝる御時節に付聊かにても御武備の御一助に相成候義

びざる處に御座候一向の事是迄の通に仕居り夫あしく候とて表面御沙汰にても蒙候て其節やめ候方可然奉存候左候へば諸有志に於ても怨も無之又小弟に於ても遺恨無御座候かゝる御時節に付聊かにても御武備の御一助に相成候義を心掛け候て夫あしく候とて御沙汰を蒙り候とても恐入候とは可申上候へども內心には聊か恥ぢ存じ候筋無御座候望恩兩君御親情より自然上の御耳にても入り屹度愼ませ候樣など被仰出候時は甚氣の毒の事とも被思召被下候段は身に餘り辱き事に候へども小弟に於ては左樣被仰出軒端より外へ出候な我家內の外親類たりとも逢候なと御座候とても固より屛居の身分さし支候筋更に無之左樣に候へば左樣に候上に就て最初にも申上候手前一分の修業專らと仕度是元來の素志にて御座候此節柄門人ども少々也とも取立候て蔭の御奉公仕候はんと申も有志の者の出來候より起り候事又少々藥劑など與へ候もの有之候も聊か財を得候はん爲に致し候に無御座入魂のものより達て賴み候より斷り候に忍びず且一向に醫藥の事取扱ひ候はぬ時は家內のもの不快に候節も其病に應じ候て治を施し候氣わたりあしく相成候に付其爲にもさ存じ乞ふに任

總て是迄通に仕天命に任せ申度

せ候義にて是又やめ候て外に何の差支も無御座候依て總て是迄通に仕天命に任せ申度奉存候昨年獄に下り候ても是も又修業の地と存じ候て精力を著け候事に御座候獄中にて著はし候省諐録と申ものの一巻有之候其内の一條録出掛御目候

予自來此。勉勵克治。鍛錬身心。未嘗虚度時日。古人云。儻閒居眞不空過日月。彼錮我者。皆成我也。旨哉。

小弟に於ては始より此心得に御座候此節にても又々嚴しく被仰付候へば夫も實は幸の義と奉存其間には何れ天意も可有御座と奉存候既に獄中の作に別紙の如きものも御座候御一讀奉冀候何事も心に任せぬ所にて自分の根性を矯めつけ候が却て益少からずと奉存候右の存寄に御座候開外交等の義は固より仰せをも待ち候はず愼み罷在候義其他砲術門人等の義は是まで通にて打過ぎ何事も天に任せ度奉存候此所諸君思召被下候所と違ひ候樣に御座候へども諸君朋友の爲に御謀被下候と小弟國家の爲に謀り候と所謂道並行而不悖と申所と奉存候乍憚此次第恩老臺幷竹兄へも御序の節可然御演説被成下度奉願候しか

し尙道理に觸候と被思食候所も御座候はゞ何分も御辨駁を蒙り度奉萬祈候此段此程の拜謝旁申上候總乞心諒

二十日　星　拜

高田盟臺　几下

〔五七四〕山寺源大夫に贈る

安政二年九月七日か

御手筆拜見仕候雨中倍御佳勝奉敬慶候昨宵は差懸り入用候て入御覽置候草本御投還相願候所速に賤使に御附し被成下殊に又下田御異聞詳密に蒙御內示千萬難有感刻之至奉存候今日も御追書に御座候此事は容易ならざる次第に至り可申歟と杞憂に堪へず候夷人も形の如く申出候上は其到底を窮めず其儘に放下候事有之まじく又大朝にても此一事は餘の瑣事とも違ひ當今御大政の最第一にて候へば夷の申候事も御打捨も被置まじく左候さて彼を制馭し候籌策火急に生じ可申樣も無之畢竟其籌策無之候故に一昨年來此次第にも至り候事に

桐先生遺跡碑文の義

毀蘭說

御座候周の文王の大國畏其力小國懷其德と申如く其國力かれを制伏し候程に無之候ては始末つきかね可申候小弟聊か愚考有之候へども紙筆のよく盡す所に無御座候間爰に不申上候差當り妙高案御座候はゞ御示誨奉冀候偖桐先生遺跡碑文の義に付縷々蒙仰奉謝候就中□□の誤寫よくこそ御心づかれ被下候□□ひて直ちに御手へ差上申候可然奉願候如仰過日は□翁物故と申風聞承り直に望月へ質し候所跡方もなき訛傳のよしにて降心仕候如仰彼翁にて候へば早速に□つき可申候將毀蘭說の稿此程も蒙仰候に付搜索し候て漸く見出し候誠に起草し候ばかりの紙にて塗抹も少からず御見分被成にくゝ可有御座候へども度々被仰下候義に就き其儘掛御目候其外には別に稿も無之候間御覽相濟候はゞ其內御擲返可被成下候昨夜の草本も□□仕舞候間一同尊价に附上仕候先は此段拜答迄申上候以上

七日　　星　拜復

山寺老盟臺　几下

〔五七五〕　山寺源大夫に贈る

安政二年九月十四日か

四郡圖

毀蘭説辨稿

御誨答拜見仕候前以御萬祥奉慶候然ば昨朝奉願候四郡圖御見出し御恵借被成下欣感の至奉存候返上少々猶豫仕候ても苦しからず候樣蒙仰別して難有奉謝候毀蘭説辨稿並袮字御擲還慥かに拜收仕候毀蘭説の義に就き荷御過奬乍毎度赧然に堪へず候夜前の月明聚遠樓上眺望いかばかりと被仰下是亦奉多謝候いかさま昨夜は好風月に御座候ひき樓上の眺望もあしからず候所夜前は東園へ出で候て長春芟前に至り候に月色殊の外麗はしく遂其光景に愛で候て夜深まで其邊に彷徨致し候事に御座候癡情御一笑可被下候先草々奉復

十四日

星　拜復

懼堂老盟臺　梧下

〔五七六〕　山寺源大夫に贈る

安政二年九月十五日

四郡繪圖

連日好晴適人意候倍御輕安と奉想像候然ば昨日は四郡繪圖御惠借被成下難有奉謝候乃返上仕候御收接奉仰候偖風聞仕候は佛朗察船下田へ參り候て船中缺乏の穀類御合力に預り度の魯西亞は敵國に付其國人の此方に滯在候分渡され度のと申出候よし然る所御合力の方は御斷り魯西亞人は彌利堅船を以て既に歸國致させ候と申す此方應接の詞にて候所夫は僞に候とか申候て大分やかましく井澤殿も大に心配とか申事高川より申來り候文通有之其内書御手に御座候を拜見候とか寫し候て權要へ差出し候とか申し兩角玄修安世へ内話候趣同人より承り候果して左樣の事有之候はゞ其顛末詳に仕度奉伺候乍御煩瑣右始末御書留も御座候はゞ何分も御內示被成下度奉冀候過日御誨示の佛朗察に怖れ候て魯人の引返し候所など存合候へば佛人の魯人をめざし候もさもあるべき事に相聞え候然る所英佛等にて此節の體たらくをつけ込み魯人を强て受取度と申出候事慥かなる事に候時は誠に禍を轉じて福となし敗を變じて功となすの好機會と存候事有之候て前條の次第詳悉仕度と申に御座候其次第に依り候ては是非一夕御過談をも奉願度と奉存候義に御座候拜借もの返上方々草々

佛人の魯人をめざし候もさもあるべき事

申上候
望　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　啓　拜
懼堂老盟臺

〔五七七〕八田愼藏に贈る　　　　　　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年九月廿五日か

一通の梨子を赤葡萄酒に煮候迄のもの

小春老晴御同意に存候御起居愈御佳勝と想像仕候然ば此一種御慰迄に掛御目候是は荷蘭人好み給へ候ものと申事にて先年江府勤番の通事より承居候一通の梨子を赤葡萄酒に煮候迄のものに御座候色相異常に付御怪も可有御座と存候故ありのまゝに得貴意候以上

廿五日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　星　拜

八田賢友　几下

〔五七八〕 山寺源大夫に贈る

東京市 西川大六氏藏

安政二年九月三十日か

昨日は御手誨拜接欣展仕候如仰近日はけしからず冷氣に相成候夫故ちと御風邪のよし尤も達ての御事にては無御座候と被仰下候へども此節の氣候御保護專一と奉存候賤家動靜御芳問を荷ひ難有奉謝候幸に母も至て健にて小弟も久く風邪にも感じ不申頗る爽快に罷在候間乍憚御放念可被成下候近日何か新聞も候かと被仰下候所何も是と申す事承り不申候八日には諸學人謁見可被仰付

長息流

よし是も先年隱岐侯の藩に長息流と唱へ候馭法を傳へ候もの有之格別得る所さても無之偏僻の持論など致し候樣子にて諸家の馬役などをば門籍に拒み候と申事にて何か淺々しき事の樣に承居候所猝に其藝術勝れ候よしを以て謁見被仰付候此類に候さけく世上に異論御座候樣に御座候此度は盡く其選に當り

市川一學

候や否杉田成卿の事は御聞及無御座候哉市川一學の事小弟も其名を存じ候のみ面會致し候事勿論無御座候一二新刻の序跋など見候事も候所如仰左のみ出來候學者とも存じ不申候ひき石河田村兩司外へ轉じ川路は禁裏御造營御用掛

妻の兄も崎港へ參り候やう蒙命候趣

天下の武備を御一新候樣……

に被成候よし大得意の事なるべく候へども大得意の內大失意無之候へば宜くと氣遣ひ申候何卒此度の御造營は大體にも叶ひ天下人心にも滿足候樣有御座度奉存候川路も此所に心を被盡候樣乍陰祈候事に候へ共京都と江戶との間に挾まれ候ては甚だ處しにくき事共有之趣にかねて承居候故斯人の上をも氣遣ひ候事に御座候下曾禰も御先手に被命候よし如仰御鐵砲方の下地にも候歟しかし好人物には候へ共其好人物丈眞箇に鍊兵の有之候には其致頭無覺束存候先唯具位のみと存られ候荷蘭より蒸船並銃器致獻上水陸提督兩人致導に罷越候と申事にて成程妻の兄も崎港へ參り候やう蒙命候趣一寸其事知らせ候が委しき事は申も越さず候但折角と荷蘭より遣し候者の事に付其人物も定めて非常に且諸學術も拔群の事に可有之候へば江戶へ直樣被召寄水府太公御始め御兵制御改正に御携候御方々親しく御辨論をも被成其所長を御師法とせさせられ候て其上にて御兵制をも御改め又御旗本御家人を始として諸藩の俊秀をも其門に入候義を御指圖有之天下の武備を御一新候樣の御手段有御座度事に候所何ぞや其人を長崎のはてに被差置わづかの人數を彼地へ被遣其事を被爲習

是も例の小器の所致歟

水戸老公又又隔日御登城

候等其意を得ざる御所置と被存候是も例の小器の所致歟嘆息の事どもに御座候砲臺の鐵造巨砲御不足の分肥前侯へ被命此節卒業にて餘程著船候所其内遠州灘に於て數十門覆沒の風聞も候よし實說に候へば可惜義に御座候乍然果して左樣の事も候はゞ又事の開け候基にて崎港に有之殆棄物に相成居候ドイケルスコロックも世に出可申候此器は海底へ沈み候ものを拾ひ揚げ候爲めの道具にてかゝる時節尤も必要のものに御座候先年荷蘭より餘程の御賞譽をも蒙るべき存意にて獻上候所當時御用も無之候さて關東へも上らず粗相なる土藏に收め有之誠に惜むべき事と通事のもの物語致し候事も候ひき定て其樣の事に候はゞ御取出しに相成可申候左候へば又一つの益にも可相成候水戸老公又又隔日御登城と被仰出候よし御新令の事も是も傳聞のみにて今に拜見は不仕候本邦近海測量の願彌御斷に可相成とか御達も候歟のよしに候所是は例の內外二かはの外邊ばかりの事には有之まじきやちと不審に存じ申候此節の體たらくにて彼を御制伏御出來候はんと申御料見にては所謂喪心の沙汰たるべく又彼を制し候事能はずして假に是を拒み彼より强暴の振舞に及び候節無餘岐

其爲すがまゝに任せられ候樣にては尤も恥辱の甚しき者に可有之是等は智者を待ずして分り候事に候へば例の二かは論にて外邊をば形の如くに御つくろひ内實は極密御許容候はんなど申事には無御座候や高意の程相伺度候松前藩より仙臺へ愁訴の事是も傳聞仕候乍去其書面などは未見及不申御手許に御座候はゞ御示及奉願候過日拜借の二種も色々取込候て寫し手間取れ漸今日返上仕候御庇蔭にて此の如き類追々に相集り難有奉多謝候岡田の事成程承候乍去餘りの事に付けく訛傳にも可有之など存候がいかゞや幽囚錄の事承知仕候内內懸御目候先御他見は堅く御無用に被成可被下候臆測の跋認置候間附上仕候拜借の夷人畫帖いづれも西南夷に相違無之樣に候毛檢討蠻司合誌中にも其種多く見え候間右帖返上仕候に付合誌差上申候ゆるりと御覽可被遊候先は拜答方々如此に御座候以上

幽囚錄の事　臆測の跋　夷人畫帖

晦日

南疆繹史

南疆繹史數日間御許借奉冀候此价に御附與を蒙り候はゞ尤も以難有可奉存候至禱

小林生の文詩手を入候や否御尋に御座候少々手を入置き候序に一寸供電矚候以上

貴恙今朝の御容子委しく奉承度候以上

啓　拜　復

常山老盟臺　几下

〔五七九〕八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年十月七日か

竹村氏より内々話の回り候事有之

續ての雨雪御起居何似然ば竹村氏より内々話の回り候事有之御目にかけ申度候間一兩日之内御繰合御出被下候樣致し度候先は其事のみ倉卒如此に御座候以上

七日　　　　星　拜

八田賢友

〔五八〇〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彥次郎氏藏

安政二年十月十四日か

寒威相加候處倍御佳勝奉賀候然ば昨宵御內訪も被下候はんとて御使被下殊に美事の河鱖二尾預御送惠感刻之劇不可言喩奉存候然る所折惡く頭痛氣にて療法中光來御見合被下候樣得貴意背本意候左候處早く療法を加へ候故か朝來すきと快く平日の如くに相成候依て今夕御來駕被下候ても差支無御座其上當日之番人能心得候者に付昨宵の申譯旁御案內まで如此に御座候何も拜眉に於てと草々已上

折惡しく頭痛氣

當日の番人能心得候者

十四日

大 星 拜

八 田 賢 友 几下

〔五八一〕 鎌原石見に贈る

松代町 赤澤光太郎氏藏

安政二年十月十九日（此石見は桐山の嫡子なり）

佐久間修理宅番人居所損候に付外箱番所と引替度旨御普請奉行申立候に付其段可相心得旨奉得其意候然る所右之義に付候ては御普請奉行以の外の取計に

修理義殊の外腹立仕

て修理義殊の外腹立仕此節柄には御座候へども其儘に難打捨義有之既に普請方手附の者召呼右様の取計有之候御普請奉行心得相尋委細親類共迄挨拶有之候様申聞候趣に御座候右之次第早速御聞置にても可申上之所此節柄故相扣へ御普請奉行にても粗忽の取計定て後悔致可然様親類共迄可有之と存じ罷在候所其義も無之一概右等の申立に及び御用番御威勢を奉借最初粗忽之取計押透し候心得尤も以不得其意義と奉存候最初よりの手續修理申聞候義一通り申上候間右にて御勘辨宜しく御指圖可被成下修理義近日より散々風邪にて乍憚平臥罷在候義に御座候所去る十五日番人の者より番所建替之趣取次のもの迄相斷り候に付是迄の番所板壁透間等も多く嚴寒の時節番人迷惑の趣も承居候へば全く其手充御座候事に心得居候所翌十六日番所の邊にて屋敷内木を伐候音致し候に付臥せり居ながら不審に存じ何致し候と尋ねさせ候へば番所引替に付御普請方手附のもの罷越し其邪魔に相成候木並木の枝等伐候趣尤も望月主米家來も立合候事に付折節親類共も不罷在家内別に聢と仕候もの無御座候に付無餘岐脩理義主米家來病床迄召呼其次第相尋候所其者申聞候は昨日御普請

方より屋敷用役の者迄掛合御座候には此方の番所建替に付邪魔に成候木の枝等伐申度立合候樣申來り候に付其段主米迄申候所何如なる義歟先いづれにも今日罷越候樣申付候に付罷出候旨申聞候依て修理申候には此所元來主水殿下屋敷に候所住居一同別に圍込に相成候地所は不殘自分自談を以て借受候場にて立木其外も悉皆自分に被爲任被差置候事にて最初より御用地に相成御普請奉行より被引渡候場所にては無之候夫故に昨冬是迄の番所建候節は立木並に植込等へ障り不申候樣自分に及指圖取立候事に候其子細は此所元々主水殿息遊の地にて兼々其心得を以て樹木等も被植置候事にて樹木の茂り候は手間取れ候ものにて多少之年數も立ち候はねば此所此節の見□の如くものさび候ては見えぬものにて候自分此所借用候は全く數年江戸住居にて此地の舊宅致廢蕪住居も出來かね親類共宅さてもいづれも手狹にて家内多同居も難出來候に付主水殿久しく御懇意も被下候所を以て借用致し候事主水殿に於てもたさひ差向き明き居候場所公儀より蟄居被仰付候者に許借せられ候は迷惑にも可被存候へども此節に到り候ても平日の好みを棄ず無心候に任せ借給り候所は深

く辱く存候所に付樹木泉石等の事被任候に付ても此圍內の品々は殊の外に致愛惜候譯にて自分暫時の借用候て年數を經て致繁茂の木を伐り植込等へ疵付候は忍びざる事故に先年番所建ち候節も其指圖に及び番人等も其義理よく相辨へ居候筈に候然る所御普請方にて最初より御用地にても相成候場所歟の如くにたさひ一枝にても樹木等伐取候事此方へ一言の掛合も無之我儘に手附差遣し伐らせ候義奇怪至極の事に候自分借用中致進退候事には候へども元來主水殿下屋敷の事に付自分へ一應及掛合枝打候等の義無差支趣及挨拶候上にも尙念を遣ひ主水殿用役迄及斷候事に候へば道理に叶ひ候事に候へども第一の借主へ無沙汰にて其地主計りへ斷り其屋敷へ手を入候と申候ては難濟候間いづれにもいかなる心得を以て右等の取計御普請奉行にて致し候や可相尋候間此始末罷歸り主米殿へも夫丈之義申聞候樣申し御普請方手附にては何者罷出居候やと相尋候所杖突代祖平と申もの罷在候趣に付右祖平召呼今日誰の指圖にて罷越し候やと相尋候所岡島唯喜指圖と申聞候依て最初主米家來へ申聞候通り其筋を申聞せいづれにも御普請方にて右等の取計有之候義不得其意候間

其存念承度尤も此節柄自分に於ては文通往復も出來かね候譯に付自分親類共迄右挨拶有之候樣致し度夫迄は建替之義見合候樣申右挨拶待居候所十七日晝後御普請方杖突重五郎と申者のよしにて取次を以て申聞候には御普請方にて番所立替に付罷出候段相斷候に付昨日祖平を以て御普請奉行迄申させ候義何と有之候哉と尋ねさせ候所右等の譯柄一切不相心得候趣申候に付尙又修理病床迄呼寄せ申聞かせ候は此屋敷は自分自談を以て主水殿より借受候事にて最初より聊か御普請方手を經ざる場所に候然る所昨日祖平にも申聞候通自分親類共とも一應之掛合も無之不意に手附を出し屋敷内の木を自由に伐らせられ候事奇怪之至自分此節公邊ゟ御咎を蒙り居候へども御家の御役人に右樣輕蔑致され候筋無之候間先昨日之挨拶承り度此事今日得差圖候役所へ申候樣申聞候所重五郎義も驚入り右樣の義とは聊不相心得候所段々承理解候ては尤も至極の義其段早速役頭へ申聞け可申と申候て引取候義に御座候然る所御普請奉行より今日迄も親類へ何とも不申來先刻被仰渡候次第にては段々脩理申聞候趣意如何相心得候義にや修理義に於ては此節柄故に其始末柄申立等も不仕罷

杖突重五郎

在候所御普請奉行より右等之申立仕候に於ては其儘彼等の我意を募らせ候義も難仕依て不得已事私共を以て右始末柄申上候御普請奉行全く修理此節の體を見侮り非を遂げ我意を募り候鄙劣之處置如何敷義に奉存候何分も此段理非明白に御糾し被成下候樣仕度奉存候以上

佐久間修理
親類

十月十九日

鎌原石見樣

猶以申上候前文修理申條之內是迄の番所之義修理自身其場所致指圖番人共も納得仕是迄差支も無之相勤め候所何故に此度右番所是迄ゟ一倍の大さに引替候義や畢竟其所より右間違も起り候義に付爲念番人共へ相尋候所別帋之如く書取答申聞候右にては御普請奉行心得更に難得其意奉存候是又宜しく御看詳可被成下候以上

番人答書

御尋に付爲念書取御答申上候
此度佐久間修理殿御宅番所建替之義私共ゟ割番所迄何と願立候哉の御尋に御座候所私ゟ願立候は是迄の番所板壁透間多く寒氣の時節迷惑仕候に付追々嚴寒に相成候ても無差支相勤り候樣被成下度と申立候義に御座候番所御廣げ不被成下候ては勤方差支候間御廣げ被成下候樣願立候義は無御座候哉と御尋に御座候所右等の願立仕候義一切覺不申候此段申上候

佐久間修理殿宅番所
番人

十月

佐久間修理殿
御親類中樣

〔五八二〕長谷川甚大夫に贈る　松代町　長谷川五作氏藏

安政二年十月廿六日か

朝來欝陶敷天色に相成候全く雪氣色の樣に被存候御興居被成御障候御事も無

御座候や然ば過日も申上候安世一條如何御手段被下候御含や何分とも乍御苦
腦速に奉願度候母へ對し御誤らせ被下候類の事も御教戒にて改心候へば宜く
御座候所其後もやはり舊病再發の事も有之様子兎に角心得違のみの始末何分
其儘に致し置かね候其儘に致し置候へば彼家斷滅旦夕に可有之候此節柄には
候へども眼前之近親にて外に騠と致し候親類とても無之家の事に候へば義理
人情いづれに致し候ても等閑に仕兼候乍去此節柄の義に付彼家いか様に相成
候とても默し居候が宜しと申御重役衆の内意にも候はゞ是亦不及是非候へば
其節には又おのづから所存も御座候事に候間先段々之次第內々御重役衆まで
申出候方と奉存候乍然一と度御厄介相願候義に付御力にて彼家斷滅に至らざ
る様の御趣法何分とも奉願度私に於ては實に術計盡はて候故前條之料見にも
至り候事に御座候宜く御原諒可然奉萬祈候以上

廿六日

甚大夫様　內事　　　　　　　　　　　　　　無　　名

〔五八三〕　山寺源大夫に贈る

雪故か一しほ寒威を覺候御眠食益々御安健被成御座候耶奉窺候於賤家もいづれも瓦全罷在候間乍憚御放念可被下候然ば拜借もの長々難有奉謝候今日兩種奉返璧候細密の圖の方は外へ寫し賴置候所猶卒業に至りかね候さ申事に付卒業まで御寛貸奉願候江都災變水邸にては兩田物故の由痛惜の至才能衆に秀で候程のものは天災にも多くは免かれん歟の樣に存候處左も無之と被存候明の韓邦奇馬理など申大家も地震にて死亡に候誠に不及是非事共に候家父地震之詩過日安世より汚電矚候由草稿御擲返奉希候仄に聞候へば江都近海へ墨舶又又乘入候て其報の爲飛脚にても到着候かの由實否如何哉英舶□隻崎港へ參り候所大に不平を懷き退帆候など申候が是又如何や去々月中例の御沙汰を蒙り候以來人も一向に見え不申候に就き別して何も耳遠く罷成候江都の新聞紙御手に御入も御座候はゞ內々御示及被成下度奉冀候先は御近況御伺旁々如斯に御座候以上

（兩田は藤田戸田）

安政二年十一月十七日

十七日

安井仲平門人

猶々此節安世方に洋學修業にさて參居候書生江府にて安井仲平門人さ申事に御座候詩なごも可也達者に仕候樣子文字にては安世每々壓倒致され候樣子に御座候本藩文字餘りに衰微氣の毒に候間責ては右の書生高堂へなりとも御召呼御才學の御富贍なる所にても御示し被下候はゞ少しは本藩の外聞も(不明)と奉存候何分にも所希に御座候

山寺樣　　悋二郎

〔五八四〕八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年十一月十八日

屛風御持たせ被下

過刻御無心申候屛風御持せ被下千萬奉謝候中々面白く出來候畫にて淸賞少なからず別して辱奉致感候先拜謝迄草々頓首

卽刻

八田君座右　　星

〔五八五〕八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年十一月廿二日か

大藏……今日漸罷出候

殿町邊へも參り

微雪にても其奇特にて一段寒威を覺候總じて御碍も無御座候耶さて前夜は御內訪被下久々にて得拜晤喜躍之至且嘉菓一箱御惠被下乍例御芳意不淺辱奉多謝候將其節御內話之一事早速大藏方へ申遣し候所今日漸罷出候仍而かねての愚見委細に相心得させ候隨分よく呑込歸り候間少しは功を成し可申歟と存候早速殿町邊へも參り其樣子柄近日に報聞可致と申事に御座候此事一寸御知らせ申度此程の御禮旁草々如此に御座候以上

廿二日

八田様　　恪二郎

御覽後御火中

〔五八六〕八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年十一月廿四日

墨敎拜見如仰今朝之霜威甚く候全く至日之奇特に御座候べく候然る所愈御健

御出入の者眼疾療治松嘉の石

寧欣慰之至然ば御出入のもの眼疾療法の事委細致承知其手充致遣し候左様御承知可被下候松嘉之事も被仰下被入御念候御事奉存候是も例の石ども一々試み候所金銀之氣などは露ばかりも無之唉止に存じ申候其上其近傍之石質を觀察致し候上ならでは更に當りも付き不申事に御座候先拜答まで草々以上

廿四日

馬場氏の方模様如何

馬場氏の方模様如何や日々延頷御左右相待居候以上

八田賢友几下

大星

〔五八七〕八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

安政二年十二月廿四日か（編次を誤れり）

昨夜は御來訪得拜眉大慶殊に何よりの品御携惠被下乍每度痛入奉謝候今朝は雪故か當年初ての寒威と被存候晨候愈御碍も無御座候歟然ば御歸後尚又再思候へば始め起草候より今少し委しく申候方聞え宜く可有之依て別紙の通認め

始め起草候より今少し委しく（松山町は親戚岡野氏を指す）

見候此方に被成候ては如何や松山町へ可然御相談御座候樣奉存候昨夕之御挨拶をも乍慮外宜く御傳聲希候以上

廿四日

高囑の藥劑は後刻御近邊迄序も候間其節上げ候樣可致候

八田兄　　大星

〔五八八〕齋藤友衞に贈る

安政二年十一月廿六日

親戚に加へ度五氏一條

只今の親戚と申もの貴家御始盡く遠緣にて

當冬は例年無之寒威に御座候所彌御安泰奉拜慶候然ば親戚に加へ度五氏一條昨日依田氏を以ても宜しく御相談可然樣御周旋被下度段は申上候義にて定て御承知可被成下と奉存候御覽被下候屆書にも認め候通只今の親戚と申もの貴家御始盡く遠緣にて日々の如く使ひ候は安世一人是に續て依田に御座候依田とても近き程の事にても無御座候へども是は元來門人にて候故師弟の間柄を以て安世に續て勞し候事に御座候然る所安世とても本業有之夫を務め候はねば暮し方にも差支候義に付賴度事有之申遣し候ても□□度々勞し候事も實に氣の毒の義一切家族外出も出來かね候事に候へば是非親類の內誰か賴み候はねば叶はぬ事のみに候所右之次第に候て每々以ての外差困り候事共多く御座

祖母義兩三日此寒氣に中り候て散々不快

候是等總て御推察可被下候其上昨日依田も見呉候事に御座候祖母義兩三日此寒氣に中り候て散々不快に罷在候所高年故か食事なども過半相減じ氣力弱り候て夜分殊に不相勝依之伽仕候所あやにく修理義も近日散々不快平臥致し居候へども母不快故に押して起出候ては藥の世話など致候へども寒氣に冷候へば夜は嚴重に快からず無餘儀溫覆加養候次第にて私は御存知之通幼年何の役にも相立不申夜は母と修理召使と兩人（此節は外に下女とても無御座候）にて替々不寐に看病致し候義に御座候安世も昨朝よりは散々風邪にて打臥候樣子にて祖母方へも見舞不申候所其中にても安世母は昨晩私方へ伽に罷越し候右之通座の近親之內病人も有之宅に於ても形の如く無人に罷在候に付自然昨冬祖母不快之節の如く長引候時には伽致し候人にも實に差支候仕合に御座候昨年祖母不快之節は安世方に罷在候間の事にて出入候人の義も左程嚴重にても無御座候に就き常に出入候者又は懇意の間にて伽をも助け呉候故に差支も無御座候所近來御沙汰を蒙り候以來は出入のもの等尋ね可申樣も無之出入口番等も殊の外嚴重に付親類の外出入無之候所其親戚と申ものゝ御存知之通實に名のみにて疾病相扶

け候程のものとては絶て無御座候然る處例の五氏に於ては眞情より出候て親戚の好みを修め度と申事に付かねて師弟の間柄も有之依田同樣の義旁祖母不快に付候ても一廉の助けにも相成可申候に付何分も何分も御重役衆にて濃く深く議論を立不被申差支之廉々恕察致し吳られ申立候所聞屆被下候樣に乍憚御忠告宜しく御周旋被成下度奉冀候總て御照察奉仰候以上

十一月廿六日

友衞樣 恪二郎

内用

〔五八九〕 八田愼藏に贈る

安政二年十一月廿六日

松代町 八田彦次郎氏藏

風爐暫借用相願度

至後寒威猝に甚しく相成候高堂被成御揃御萬福御座候歟御左右承度候然ば前宵高意を以て御惠借可被下と被仰下候風爐暫借用相願度候其爲此もの差出し候御附與被下候はゞ感銘可尤深候至禱

廿六日

松嘉よりの礦石

附白後に御持參被下候松嘉よりの礦石三塊之内一塊は試みも濟候に付同子へ直に相返し候此二塊試未濟に付殘し置別段相試候所是亦始の品同樣金銀銅鉛の氣等は聊にても無之候序に持せ上げ候間其段を以て御序に御還し可被下候凡その山火を以て出來候と水を以て出來候との差別有之候火を以出來候山に無之候ては金類は多分無之ものに御座候是は山を致鑒定候大綱領にて候是等の石は皆水にて出來候ものに候以上

大星拜

八田賢友几下

〔五九一〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年十一月廿八日

風爐御惠借

此間は御約束之風爐御惠借被下高庇にて寒樓之冬を凌ぎ可申と言謝不謦服佩仕候敷版は此方に雜品有之候間此美物相用ひ候にも及ばず候へば致還璧候御收可被下候此程釜之事も無遠慮御無心申候樣被仰下奉謝候是は粗品有合候間不願拜借但五德不自由に候まゝ如何樣なる品にても宜敷候一座御許借被下候はゞ尤辱可奉存候以上

廿八日

坂本（上州坂本に鐵次郎婿養子となる）にても御女子御出生

別白昨日榮八より承候へば坂本にても御女子御出生御座候との事幾久しく芽出度北堂君御始嘸々御怡可被成と致想像候右にては益御安堵と奉存候乍憚北堂君へも宜く御悦被仰進可被下候

一馬場氏の方模様如何や大手前にても久しく不快にて被引籠候と承候岡野氏内話等は無之候や是亦承度候

爰に乍序御無心申度一事有之候粗末の駕籠一ッ只今迄預け置候所少々差支有之取出し候所御存知之手挾之場所ちと差困り申候依て雨露だにかゝり候はねば宜く候間如何様の所にても入用之節迄御差置被下度奉萬冀候至祈

八田仁友　几下　　大星　拜

〔五九二〕菅鉞太郎に贈る

安政二年十二月朔

（此年九月十四日より交通の禁殊に嚴となり）

昨夕の事傳聞絶驚之至奉存候申立之事取用ひられぬなどは取用られぬにて事濟可申乍去如何敷申立之筋に候はゞ其段御沙汰も御尤に候へども其筋と申せ

其後親類名面書を差出すべく命せられし時其書面中へ白井菅八田塩野等も名を書き加へしより白井は遁塞其他は愼を命せられたる件なり）

ば此時節柄國家の爲に當今の急務を研究有之度と申にて聊か利の爲欲の爲に無之全く報國之誠忠より出候事且公邊より御達しも有之候事に付其邊にも不相觸親戚と申にて御出入候へば何方への差支にも成り不申候に付先代の舊好を修められ度と申事時節柄多少之御苦心夫等の事は推察にも可有之事と存候然る所其筋も不被取用とて事止み相成候左候て昨夕之事出來り候は如何なる義か更に解かぬ候事どもに御座候御書付の樣何等の事や夫も承知仕度乍御見舞極密如此に御座候御書付の次第内々御示及可被下候以上

一日

（白井平左衛門、八田競）

白平之事に至り候ては殊更に驚入申候八田もやられ申候さか是は最初の樣子を承り安世へ斷り名を除き候と申事にて候所何故に昨夕御同樣に相成候や不審千萬之事に存候

御覽後御火中被下度候

安政二年十二月二日

〔五九二〕依田源之丞に贈る

此間は度々御尋被下奉多謝候然ば此程の書面不得其意廉齋藤へも御談事被下候や如何齋藤何か申候とも看病人の事は某方より歎願の義にては無之出入も嚴しく相成候に付安世方に罷在候節の如く出入の者等も參らずかつ親類少に

先代の舊好を修めて親戚のつき合致度

候へば先代の舊好を修めて親戚のつき合致し度と申候ものを其意に任せ度と申たて候處舍人殿料見にて出入のもの一向に出入無之家内病人多にては差支もあるべく夫は尤の事に付其事は勘辨可致と申され候より貴兄再び某方へ御出で出入人の名面御調御座候ひき右の手順にて親類の事は度々申候へども出入人のことは申さずけく是は月番の方より出候事に御座候夫に歎願ありし事實相違候事某方に取り親類の義と出入人とおのづから輕重も有之候事其重き方を置き出入人をこめ候筋無之因て右御改に相成候樣致し度且被成下御許容と申義も上にて御在城にも不被爲入候所にて御重役の勘辨を御許容と申事是は如何なる義か不審千萬に存候夫等聢と御突留被下度奉願候

砲術稽古の事

將砲術稽古の事も少しく頭角をあらはし候者此度皆蟲つき申候殘り候は貴兄御一兩輩切に御座候

何分一際張込度事

此所にては何分一際張込度事と考候依て別啓御廻し申候此次の學校定日

前乍御手數殘り居候諸友御勸め共々御骨折御座候樣致し度候第一に御隣家岩下氏にも御話し別帋も御寫し候て諸友へ御示し被下度候何分所祈に御座候以上

二日

深志の仁三兩輩御相談にて手を分け一兩人宛御申通御座候樣に候はゞ暫時に行屆可申候其人は岩下長谷川坂本など可然か餘り年少にては屆かぬものにて候此事も御心得までに如此に御座候

源之丞樣

恪二郎

〔五九三〕　長谷川甚大夫に贈る

松代町　長谷川五作氏藏

安政二年十二月三日か

安世一條

拜見先以倍御佳勝奉慶候然ば御普請方より別帋之通得貴意候さて心得置候樣被仰下承知仕候則別紙返上御落手奉仰候扨又安世一條に付近日光來をも可蒙趣何分も宜奉願候誠に年內日數も追々寡く相成候義且一日遲く候へば一日丈の費有之義に付かねては今三日迄猶豫候樣被仰下候御事にも候間乍御苦腦可

然奉冀候安世昨日までに何とか申上候筈に御座候所如何に候ひしや自然御無沙汰申上候義にも候はゞ嚴敷御察當被下候樣仕度候何事も〳〵等閑に仕候馬鹿ものにて畢竟夫故に此極にも至り候事に御座候夫等も宜く御含奉願候拜答旁草々申上候以上

三日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　恪　二　郎

甚　大　夫　樣

〔五九四〕長谷川甚大夫に贈る　　　　　　松代町　長谷川五作氏藏

安政二年十二月六日か

朝來飛雪北堂君御始何の御障も無御座候歟承度奉存候然ば愚甥方之一條當人より二日までの御猶豫相願候よしを以て三日迄致猶豫候樣蒙仰候に付其心得に罷在候處昨五日までも何の御沙汰をも蒙ず候定て例の破家もの二日迄なご申上候て其期に及び候ても何とも不申上御無沙汰に打過ぎ候事と被存候右樣の始末にては迚も〳〵御敎戒をも重んじ申まじく候へば其段御斷り御手切に

舊冬來の始末

被成被下候外有之まじく某に於てもかねて申上候通舊冬來の始末御重役衆ま

で申出で兎も角も彼家の存亡官府の御處置に任せ奉り候より外無之と決心仕罷在候乍然猶御見込も御座候はゞ奉伺度此段極密申上候以上

六日　　無名

甚大夫様

御内披

〔五九五〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年十二月十一日

玄樹老（藩醫大草玄樹）別紙も御添へ

葛根湯中の桂枝麻黄は熱藥

御手誨拜讀如仰今日は殊の外の寒威に御座候然ば政君兩三日猶又御感冒の御樣子と申事にて御容體被仰下玄樹老別紙も御添へ被遣委細致承知候いかさまその御症に候へば漢醫者流には葛根湯とも見込可申候然る所泰西窮理の密なる所より立論候へば葛根湯中の桂枝麻黄は熱藥にて候故邪氣の爲に血液の運行はげしく相成夫が爲に頭額強く痛み候病に投じ候ては熱を助くるの害なきにあらず候依て此所にては夫等の害無之藥劑を擇み用ひ申度候其心得にて五六貼作り差上申候一合半の水にて一合に煎じ兩度に分け一時ばかり間をおき

溫服御座候樣奉存候（尤も一二貼御用ひ候に如此有御座たし其跡は一時半ばかりに一度づつにてよし）少しく御發汗候はゞおのづから御頭痛も可宜候もし尙御頭痛甚しく候はゞ玄樹老にても御賴六十匁程御瀉血可被成候猶明朝御容體承度候以上

十一日

畫箋の事被仰下奉謝候江戸表などにても丁度其位の價なるべく候入用も候はゞ御手許迄御賴可申候御含置可被下候

義井賢友几下　大星拜

〔五九六〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

（安政二年十二月十二日）

今朝も峻寒に御座候令政御頭痛氣少しは御磷ぎ候御事歟御容體承度候頭痛を（雷頭風）ば漢家にてはさまでに心得不申候へども雷頭風など申樣にはげしく候時は多く眼に障り申候至て恐るべきものに御座候依て夜前も甚しく御頭痛候はゞ刺絡にしくべからざる趣申進じ候ひき今朝の御樣子承度如此御座候以上

十二日

八田君
大星

〔五九七〕　相澤藤吾に贈る

安政二年十二月十四日

御下屋敷内修理御門弟の御方足並稽古被成候爲に當年より拜借の御地所御年貢の義此間御別紙を以て被仰下承知仕候則致上納候御受取被下度奉存候扨又當春中修理拜借罷在候御園内ふたおもて並杉生垣拔取等の義主米樣より御談事御座候に付夫々申付手入致させ其御屋敷よりも植繼の櫻數本持運ばせ植付致し又修理御懇意に仕候方よりも三四本もらひ寄せ植込其外櫻の邪魔に成候茅の根を掘取り南御屏際杉の木伐取らせ候等の義は修理拜借罷在候御園内の義に付修理手内にて諸拂仕候覺悟に御座候但し拔取候生垣の杉幷にふたおもてをば御下屋敷御總境の東御屏の北の方御屏並に是迄のくね除き其所へ植込み生垣に被遊度と是又御談事御座候に付其通仕らせ候義に御座候是は御總境の義にて修理拜借の所に預り不申候へば御屋敷にて御拂被遣可然と奉存候其節右心得に罷在候に付一同に拂方は仕候へども受取切手別に仕らせ差置候間

此度御手許迄御廻し申候右を以て此方へ貳分貳朱と六百文被遣可被下候春中右拂方致し候節の總高の切手も爲念掛御目候御一覽後御返し可被下候以前より御建被置候四阿屋も屋根盡く零落當年梅雨前手を入れず候へば屋根裏までも痛み可申と申事に付是も四月はじめ葺直させ申候是は御構内の義に付修理手にて修復仕候心得に御座候乍去以前より御有來りの御建物故に右修復入費切手掛御目候是又御一覽後御戻可被下候其外圭米樣迄及御内談取立候紅雨庵長春菱等は全く修理一己の慰より出で御園中に一時拜借罷在候跡を殘し候爲めの心得に付費用等の事勿論御目にもかけ不申候取込中用事のみ草々如此に御座候以上

御年貢は使の者に壹分貳朱爲持差上候間乍御手數御勘定御受取可被下候

十二月十四日　佐久間修理內

荒井嘉右衞門

望月主水樣御內

相澤藤吾樣

〔五九八〕 竹村熊三郎に贈る

安政元年十二月十五日か（編次を誤れり）

歸震川文章體則

南豐集

過日は御枉顧を蒙り殊に何よりの兩種御惠投を荷ひ感戢不淺奉多謝候爾來勁寒御起居倍御健安被成御座候や然ば歸震川文章體則御一覽御座候はゞ御益も可有御座奉存候に付御目にかけ申候緩々御留被置不相妨候將差上置候南豐集見合申度事御座候間一ゝ先御擲返相願候又々御用之節は差上候樣可仕候過日の御禮旁草々申上候以上

十五日

再白御序の節煩はし奉り度一事御座候先年御隣家桐翁先生御賴みにて小弟より鶴氅の式差出し先生にも一具御製しに相成御著用も御座候事にて候ひき此節慰に製し候て樓居の燕服にいたし申度右に付御隣家より右形借用申度候所此節柄小弟より申候は內々にても御役家の事に付無遠慮に御座候就ては盟臺御借用の御分に御申入暫時右形御轉借被成下候樣仕度奉萬祈候兩三日中人差上可申候間夫まで何分御周旋奉願候至懇

三白先達ても申上候江府にて小弟災患中安世より差上候先公御誌石搨本何れも御取戻し被下度弟方に今一枚有之候と存じ候所此度の義にて混雜中紛失いたし候と相見え先日より荷物の內詮鑿候所見え不申候依て右別して御取戻し不被下候ては迷惑仕候間御手數ながら御鼎力奉仰候是又所懇に御座候以上

竹村盟臺几下　　星　拜

安政二年十二月十九日

〔五九九〕綿貫新兵衞に贈る

草稿御淨寫

省諐錄中一二字改度處有之

續て烈寒に御座候御眠食御替も無御座候耶御眼氣其後はすきと御快く候や此月に入候ては何かと御私用も多かるべく奉察候其御中にても草稿御淨寫被下候御事や御出來寄の分此ものに被遣可被下候將此省諐錄中一二字改度處有之其序脫字をも補ひ申度尤も脫字は其行の上に細字に何々之間脫何と申樣しるし置度候直し候文字は打拔置候間夫へ直に御認入被下度候總て其所〳〵上につけ帋致し注し置候間宜く奉賴候地震之條へは當年の變災の事其上に記し置

度候乍御面倒草稿の通須南新語と御認置被下候位の字にて其次の行の上より御書始め被下度候國風最後の一首有明の世と申事をよみ込候へども萬葉假名にてかき候へば其用意の所も不分候に付是は注し置度と存候いづれも前の字格好御照し可然奉希候以上

十九日　　佐久間恪二郎

綿貫御隱居様

〔六〇〇〕　山田兵衛に贈る

神戸市外　山田孝太郎氏藏

安政二年十二月十九日

尋常の人の成し能ぬ業を御身に備へられ候様

尊大人御丈夫に無御座

昨夕の次第傳聞御心中察入候乍去是に依て御志を被折候ては成り不申凡そ天地の間いづれのものも屈せざれば伸び難く伏せざれば起り難きものにて候左候へば此度の御過失にて昨夕の次第に及ばれ候も御志の立られ方に依てはけく御終身の御爲には可然事にも成り不申候間御奮發候て尋常の人の成し能ぬ業を御身に備へられ候様可被成候別紙は此程認置候此御心得專一と存候夫に付候ても尊大人御丈夫に無御座候ては叶はず候ちと並方より御肥滿に過ぎ候

候ては叶はず候

別紙よく御熟覽

へば御飲酒をも可成丈被節折々御瀉血にても候て暫御無病に御出候樣祈り申候其内に御身を被起是非とも御家督に御成候樣不被成候ては濟不申候某世に出で候はゞおのづから含も可有御座候何分にも御志を堅固に可被成候御閑居中先廣く根基を御取立可然候愚甥方に有之候ウヱイランド文法書にても御書寫（此書は一通りの文法書に無之事共も候て始終讀法の達者に相成候樣には此書必要にて候）夫に續てハルマにても御寫し候はゞ可宜さ相考候兎に角時節柄有用の學を被成候樣所祈に御座候別紙よく御熟覽御決擇可被成候御立志の所無心許も存候間内々如此に御座候以上

十九日　　大星

山田令友

此書堅く御他見は被成間敷候

〔六〇二〕倉田左高に贈る

安政二年十二月廿一日

臘底沍寒彌々御安健御座候邪月迫何角御多忙に可有御座候秋中は御訪問被下奉多謝候折節砲術門人共參り居り緩々御話も不申遺憾奉存候御案内にも御座

候はん九月中より出入の事六ヶ敷相成申候乍去御醫者に候へば家父不快とか家内不快とか御見舞被下候趣一寸御用番迄御申立被下候へば表向御尋被下候てもとより不苦先頃立田氏も自分用にて候ひしかども安世と申談られ其趣にて參られ候事も候ひき年内は餘日も無之候へば春に成り左樣も被成ゆる／＼御物語ながら御出被下候樣に仕度候扨は別封よき便も候はゞ乍御手數御差出被下度候此節は御存知の通り安世事も御咎中に候へば此上を今一重御封じ貴君御名にて御出被下候樣奉希候千萬所祈に御座候寒威折角御保愛奉望候以上

廿一日　　恪　二　郞

左　高　樣

〔六〇二〕山田兵衞に贈る

安政二年十二月廿四日

御內函拜見先以此烈寒にも彌御障も無御座降心此事に御座候然ば過日內密得貴意候事共御聽納有之喜慰不淺候何分も此所にて御勵精所祈に御座候尊大人御齡御耳順と申御事に候へども尙御先も長く候某事も亡父晚年の所生にて亡

亡父七十三にて致仕して某十八歳にて家督

父六十歳の時はやう／＼四歳に候ひき亡父七十三にて致仕して某十八歳にて家督いたし候此度の御過失成程輕き事にても無御座候へども又上之御仁意も有御座べく候へば文武御修業等には御自由相叶ひ候樣忽ち御成候べく其所にて御勵精次第本の御身分に御成候事袋の内の物を取候樣に可有御座候某が亡父六十の時に漸四歳にて候ひしことに比し候へば誠に譯もなき事に存候開功を以て過を御償候を御目的と被成旦暮無御油斷御心掛候はゞ御志の貫ぬ事は有御座まじく候御作什拜吟御尤に存じ候其內御過を御償御初身に御戾り大人方之御愁眉を御開き被成候樣奉萬祈候餘は乍失敬御別幅に認入候て及御返事候幸御視置可被下候以上

御作什拜吟

廿四日　　大　星

山田賢友

安政二年十二月廿七日

〔六〇三〕池村良太郎に贈る

拜見如仰臘底餘日無之何廉御多忙と奉察候令愛君彌御健かに御成當冬の嚴寒

にも御中りも無御座候よし何よりの御事と奉慶候偖又被寄思食御歳敬として昆吾一圓御投惠被下感戢之至不知所謝奉存候乍然甚痛入候御事奉存候乍序御禮申上候毎度御芳志を以て何よりの御品ども御惠被下家內一同喜感宜く拜謝奉り度と申居候事に御座候乍憚御母堂樣御始可然御致意奉冀候先は御惠賜の拜答まで早々如此に御座候以上

廿七日

附白家內へも御加筆是又奉謝候尙宜く申上度申出候將令弟御事も御丁寧被仰下けく痛入候地震も南部坂御屋敷は輕き方と申事に候へば御留守宅にても總じて御別條も無御座候事と奉察候其後度々御便も御座候ひしや御便の御序も候はゞ內々可然御致聲奉賴候爰許通用口の事も御配慮被仰下奉謝候如仰秋末よりは何かと廉々敷相成親戚の外通用無之候右故に晝の開も殊の外閑暇にて讀書は思ひのまゝに出來候て其以來發明候事共も少なからず是は又一つの天幸と喜悅候事に御座候御一笑可被下候以上

秋末よりけ何かと廉々敷相成

又白此帋御一覽御火中可被下候

池村君 机下　　　　大星拜

〔六〇四〕 山寺源大夫に贈る

安政二年

百伊達百佐竹ありと雖も

雲翰拜見仕候如仰……不明……御起居倍御佳勝慰浣不過之奉存候然者佐州邊亞船渡來之事御紙表にて始て承知仕乍毎度之義奉感佩候尊考之通り過日下田へ參り候測量の船なるべく候彼方にては益々此方の形勢致搜索候に此方にては膠柱の御處置のみにて人を彼地に差遣され候思召も于今無之空しく歲月を糜候は不勝痛憤事共に御座候僕輩のかね／＼苦心候所に候國是定らず候內は天下之事未可爲と奉存候蝦夷地の防戍伊達佐竹兩侯へ被命候よし傳聞候所如何の方略有之何等の御區處御座候義や愚意を以て申候へば此節の形勢を以ては百伊達百佐竹ありと雖も慥かなる防戍は決して出來兼可申被存候每事先務と申事有之候所其先務の何事たるを心得られ候人一人も無之候浩歎之義御座候偖又一昨年秋中の書類內々入高覽候樣仰を蒙り候所昨年の禍にて夫等の書類もいかゞ相成候哉歸山以後も心付候て索し候へ共今に其影子を見ず候多分紛

失候事と被存候蒙仰候義に付爲念今一捜仕有之次第是より差上候様可仕候先
此段草々拜復申上候　念　四

土浦藩大久保より呈し候別幅山陵之事御座候とて御示及被成下感刻の至奉
存候此大久保のはかね〴〵其名聞及び候事に御座候御文通の様子にても非
常の人たると不可掩と奉存候神武陵其外とも川路殿在阪の砌段々骨を折候
趣東歸後内話に御座候ひき其節も是迄の謬傳夥有之差困ものと被存候然る
所大久保書中の塚谷二氏等の力にて夫等の葛藤盡く剪除候義にや書中にも
御座候通り夫等の顚末悉布承り度ものに御座候猶此後同氏より御文通の事
も候はゞ必らず御示及奉冀候只今來客有之草々御答まで申上候

懼堂老盟臺　梧下　　星　拜　復

安政二年

〔六〇五〕　山田兵衞に贈る

神戸市外　山田孝太郎氏藏

昨日圖面御許借の御無心申候子細は去春彼場所にて御家にての固め場に成り
候間數大略は覺え居候へども慥かなる事は圖面にゆだね置き候所其圖面紛失

候にて差支候に就き御無心申候事に御座候自然御手許に無御座候はゞ乍御手數高田氏より御借出し可被下候萬所希御座候以上

廿四日　　　　　　　　　　　　　恪　二　郎

権　之　助　様　差上置

（権之助は兵衞の前名）

〔六〇六〕　山寺源大夫に贈る　　　　　　松代町　丸山熊男氏藏

安政二年正月廿二日

（編次を誤れり）

賢郎御過訪に就き御投簡奉拜見候如仰今日は風烈に御座候所倍御綏和の條沃慰之劇奉存候過日返璧もの並に僕夫不調法の義に付縷々蒙仰悚惕之至偖川伊確執の旨趣も御傳聞の所御示誨いかさま朋黨の風並に依り候事なるべく被存候客歳除日御退出の遲く候て夜に入りしなど何等の事どもに候歟此地などにて傳承候ては尙以怪しくのみ被存候義に御座候將賢郎御事御血色もよろしからず御稽古事にも早く御退屈候等何か御體氣に御申分御座候ての事かと御懸念被進候より一診の上愚意申上候樣被仰下委細奉敬諾則丁寧相伺候所此節の御樣子は一昨年冬都下にて拜診候頃よりは遙に宜しき御容體にて當節は隨分

（川伊確執の旨趣も）

（賢郎御事）

壯健の字を下し誰以異議有之まじく御腹狀など殊によく相成候と奉存候敬順など肝氣と申見込の趣も被仰下候に就き肝臟の部も念入れ伺ひ候に聊か申分無之此分にては灸治等にも及び申まじく其外御服藥等總て御無用にて可然奉存候敬順の申候は何の考據を以て申候義歟愚意には少しも分り不申候御序に御尋ね御覽候て可然候先々愚案にては何の御申分無御座候に付追々御嘉禮等も殊に愛度と奉存候決して御過念被遊まじく候御安心の爲拜酬まで草々申上候以上

追々御嘉禮等も

廿二日

星　拜復

懼堂先生　文几

安政二年

〔六〇七〕　立田樂水に贈る

松代町　赤澤光太郎氏藏

桐先生碑文直に石面に御書丹可有御座との御事古法に叶ひ

御手誨拜見仕候如仰秋霖欝陶敷覺候倍御多祥奉慶候然ば桐先生碑文帋に御認御座候にては縮張も有之石上之晝罫に符合候はず候に付直に石面に御書丹可有御座との御事古法に叶ひ至極可然奉存候先御試に紙へ御認御座候所誤脫如

何やさて御示及御座候に付再四覆詳仕候所聊か殘處有御座まじく候楷字云々
御謙辭に候所過日御草稿拜見候節よりは字形も大きく御力量も格別と被存候
御名字大小の事勿論外字と並方可然候刻工の姓名は御様本の通罣外之方宜し
かるべく刻字鐫いづれにてもよく候へども曖翁に撰文と有之候へば以下切れ
てなし

〔六〇八〕　山田兵衞に贈る　松代町　三井圓二郎氏藏

安政二年

横濱應接所の圖

彌御多祥奉賀候然ば昨年横濱應接所の圖定て御寫し置き御座候事と奉存候私
方にも數通有之候筈の處いかゞ成候や見えかね候に付御惠借被下度御無心申
候千萬所冀御座候以上
　　廿三日
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　恪　二　郎
権之助様

〔六〇九〕　山寺源大夫に贈る

安政二年か

大槻磐溪と咲ひ候事御座候處

韜晦の兩字

御手翰拜見仕候如仰能開霽に相成候此儘續き候樣致度候然ば服部生文稿評語御示及御下問乍再度恐入候至極體を被得候御認め方殘る所も有御座まじく感誦仕候御行文の上一二愚意申上候御採用にも相成候へば大慶の義に奉存候外小字に御認御座候錯置の處思召の通御尤にて御座候是等近日文章は一向修行無之素人と申證蹟に御座候少しく筋を存候へば顚倒錯置は無之筈の事に候を書生等往々途方なしに認め候と大槻磐溪と咲ひ候事御座候處大槻申候に僕などは童子上りより文字の顚倒は先は無之候ひしと申事に候家父なども御一同桐翁先生へ尺牘かき習ひ竄改を乞ひ候頃より顚倒とて御直を受け候義は無之よし左候へば文字性有之人並に文章の出來候程のものは誰も皆左樣に被存候少し立上り候ても顚倒錯置を免かれず候程の人にてはとても人並の文章は一生かけ申まじくと申事のよしに御座候服部生なども從來文字には疎き方か又は功を用ひ候事無之方かいづれに致候ても素人を免かれず候何分も此度の御規箴にて節を折り嚴密に一と修業致し候へば當人終身之幸たるべく候

一新聞紙事御配慮蒙鐫誨乍例難有奉感謝候韜晦の兩字書紳可罷在候先は拜答

書　簡　來遠樓時代　（六〇九）山寺源大夫宛

耳匆々申上候以上

念七

御新收の爭座帖跋命に任せ認め候

御新收の爭座帖跋命に任せ認め候此節の用筆甚だ禿にて殊に見苦しく誠に御責を塞候迄に御座候御一笑可被成下候以上

恪　拜復

使無堂先生　臺下

〔六一〇〕山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

安政二年か

（第二巻詩稿七一頁に載菜の詩あり）

此間は御手誨御新聞の事共御恵示乍毎度難有奉慰岑寂候過日令郎御訪問之節載菜之一詩供御一粲候所果て寓意の廉をも御了得候やの様被仰下獨咲仕候義に御座候肥藩兩刀家の様子も被仰下奉謝候是は其當夕傳聞候事にて御座候ひき如仰一人其敵手に成り候程のもの無之との事苦々敷次第かの不恥不若人何若人有にも可有之候當路之人猶自警せられ候はぬにや崎港之洋舶も數增し候さのよし御同嘆と奉存候大朝にても大小の差ばかり本藩も御同様今に至り不

御文章二篇御示及

恥不若人にて第一の大本を不申候へば御別紙にも御認め御座候通其內には楽の利誘に從ひ候岸奸など追々出で來り可申不勝痛哭事どもに奉存候將拙書御需に預り汗顏の仕合に御座候先日より自ら闕漏を覺え候義有之專ら精研仕候にて左なきだに筆を執り候事嫌ひに御座候上別に打かゝり候義御座候にて幾日にも字を作り不申別して陋劣愧入候へども仰に任せ美扇數本相汚し候御一咲可被成下候近製と蒙仰候へ共是は嫌疑も御座候旁態といつか認置き候樣舊作を錄し候幸に御怪み被成下まじく候偖又今日は御文章二篇御示及愚意も可申上候樣每度恐入候拜見仕候所簡潔被得體候の御作と奉存候一兩處存付御座候に付不顧失敬認入候宜しく御取舍可被下候江府にては御本丸を大城西の御丸を西城なども通じて申候樣にも候へども此御方の花丸を花城と申候てはちと名實相應じ申まじく依て此兩字はけく無之方と奉存候燕室の字上下通じて用ひ候文字に候へども何となく尊嚴の意かけ候樣にも見え申候小寢の方可然尤も寢とても上下に通じ候義には候へども小寢と御座候へば諸侯に限り可申卽宴息の處にて候へば此字相當と奉存候其他一二字の替換いづれにても可

然候へども折角蒙仰候義に付如此無伏藏書入候義に御座候昨日安六持參の拓本御電覽にも入候よしいかさま如仰羅念庵なるべく候但けしからず讀めかね候狂體に御座候是は近日の內愚考を錄し候て御公案を願ひ申度奉存候先は兩度の拜復迄如此に御座候以上（安六は八幡村中原の和田氏）

十二日

附啓大久保の國風始めて一矚仕候隨分才人と被存候水府公の御作どもは格別感心仕らず候起造の詩は何人にや是又平々よしと奉存候御示及の八道敬で返璧御查入奉仰候以上

啓　拜　復

懼堂老盟臺　几下

〔六一二〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郞氏藏

安政二年か

兎角欝陶敷天氣に御座候御氣體其後益御爽快に御座候歟承度候然ばさしかゝり客を得候てうつはものに困り候粗相なる品にて宜しく候が臺重樣のもの一

つ御恵借被下度奉頼候何分も所祈御座候以上

四日　星

八田仁契　几下　拜

〔六一二〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政二年か

夜前は御入來乍毎度美事之海鮮一尾御恵投被下痛入辱奉萬謝候不打置調理家内打寄賞味いづれも宜しく御禮申上度段申出候偖は去る戌年賤家東遷之跡にて大坂へ出候當所產物尤も御宅にて一手さ申には無之候へども荷元之事何さか御役頭衆より達し御座候ひしかの樣に被存候其節は何か書取渡り候義や又は口達かいづれにても其事有之候はゞ承度存候其後程もなく眞田鎌原等の執政等參られ候て產物等の事一切停めに相成其開にても多分之御不都合生じ候て惟其節御改革嚴重之儉約等にて呉服店之方はたさ行きつかへ候計りに無之さ申事は申度事に存候依て前條之次第承度候昨夜之御内話にて大主意相立萬死中に一活路を得候心地致し竊に先大慶候へども夫に付候ても道具に持出さ

（頭注）賤家東遷之跡にて大坂へ出候當所產物

（頭注）眞田鎌原等の執政等參られ

（頭注）呉服店之方はたと行きつかへ候計りに無之

れ候程の事は詳に致し度ものに御座候右一條一寸御答誨被下度候此段早々

二日

猶々先夕御示しの竹村氏より水井春日兩人への一通今に御手に有之候はゞ一寸御見せ被下度尤も直に御返し可申候以上

八田兄　御内覽後御火中　大星

〔六一三〕八田愼藏に贈る　松代町　八田彥次郎氏藏

安政二年か

昨宵は御過訪被下緩々獲拜晤致大慶候然ば岡野氏御出被下候事今日は例のちと六借敷番人（六借敷番人）にて候故夜陰も同じく差支可申候明夕は心易き者出居候開酉時後にすゝ御入被下自然番のもの何とか申候はゞ山中より參り居候家來へ（山中より參り居候家來へ）用向有之夫まで通り度と御申勝手口にて御案内被下候へば早速御目にかけ可申候昨夕御示及之草案之內某心得居候所と事實相違の義も有之いづれにも岡野氏へ面話に及び候方都合宜しかるべく存候に付此段得貴意候宜く御申通せられ可被下候偖は御所望の香雪（香雪は書家山內香雪木挽町に寓居せり）差上申候尙御用に候はゞいつにても無御遠慮被仰

下候樣奉存候先は夜前之御挨拶旁草々以上

十五日　　大星

八田令友文几

〔六一四〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

安政二年か

五燈會元

例之御宅之一條

御發憤御自身より

連日嚴寒貴家總じて御障も無御座候歟承度候然ば先達ては五燈會元色々御手數を以て御取出し被下高庇にて一涉千萬辱奉感謝候則返璧御査入之上尚宜敷奉賴候かねて第二本不足之趣御廻し被下候砌得貴意候義に御座候所其後御取出しも不被下候へば是は元來缺本と被存候爲念如此に御座候將例之御宅之一條其後如何や水忠にも何とか御話有之候義歟近日恩大夫も歸藩と申よしに候へば今程は何か話も廻り候事と被察候然る處先方にて因循と致し沙汰無之候とも時分柄の事に付御發憤御自身より水忠迄也とも御打出し被成候方可然と相考候其大意は過日某より內々相贈り候手紙之廉々を以て是も內々掛御目候事に候へば大抵御記臆も可有之もし又御入用に候はゞ草案も有之候開差上候ても宜候是非共かの御歎願書に組落候樣御談可被成候諺

にも虎穴に入らざれば虎子を得ずとも申候へば總て御勇猛に御取掛可被成候あはれ某閑生に候はゞ御一臂の御助勢をば致し可申候をと乍序此義に及び申候千萬心諒

十一日　大星

八田賢友　御内覽後御火中

〔六一五〕八田愼藏に贈る

安政二年か

至後一段之霜威御起居倍御無恙に御座候や然ば例之內書此程早速御送り申候其節別紙に水忠緣家之事にも候へば夫へ也とも內諭致し呉られ候樣申遣候何か話も御座候ひしや如何御話御座候節寛延三莫太の御滯御斷にて二十人御扶持御戴御座候に寛保元に古金八百兩餘籾二千俵の御元利滯御所持之田地御年貢にて二百九拾五俵宛御戴き候口と二口に聢と孫左衞門樣御書留にも有之候所をよく御話し可被成候無利息六十箇年賦之事も內書中委しく申置候事に付多分先方より歎願書等の題出で可申と考候此事御心得までに匆々以上

十五日　　　　　　　　　　　　　　大屋

八田賢友

〔六一六〕 高田幾太に贈る

安政二年三月二日（編次を誤れり）

早春は御顧訪を蒙り久々にて獲拜晤感喜之至に奉存候忽御手誨拜接忙手薰披仕候先以暖和之時節御興居倍御綏安いらせられ候狀詳之浣慰不過之奉慶候偖は不存寄御到來のよしを以て精製之佳菓御投惠被成下永晝眠を覺え候折柄別して難有感謝不罄奉存候早速翠茗を瀹し園中の花に對し精味を賞し可申候家母豚兒に到るまでも宜しく御禮申上度段申出候將入御覽置候拙吟痛く御叱正をも奉冀候所御過獎之上御擲返被成下深く慚悚仕候義に御座候一二高詠をも御添被下候はん思召も被爲入候よし是は其內御手隙之節何分にも所仰に御座候先者賜物の拜謝まで早略申上候以上

園中の花に對し

附白乍序申上候園中之櫻花僅ながら夜來の雨並に此間の風にて大に麗色を減じ候へども猶遲きは莟み勝なるも候て稍見所も御座候御閑暇も御座候は

夜來の雨並に此間の風にて

少しく觀を改め候事に候間

ば内々御一訪被成下まじきや此園中の爲望家より被囑候て手を入れ改正候所も有之少しく觀を改め候事に候閒花の御座候内御目にかけ度奉存候今夕など如何可有御座候や御近邊に付御枉駕被成下候も餘り六ヶしくも有御座まじく奈何々々

星　拜復

高田盟臺　文几

〔六一七〕立田樂水に贈る

安政三年正月五日か

小記一篇

新禧御同慶奉存候當年に相成候ても兎角猛寒に御座候閤府御揃倍御障も不被成御座歟奉伺候然ば客冬拜借の化石多日愛玩岑寂を慰し奉多謝候右完璧仕候に付認候小記一篇供電矚候手許藏書乏しく殊に物産に係り候ものとては何も無之候故記憶候まゝを認め候定て訛謬も可有之候宜く御斧正奉冀候將每々色色の御無心申上恐入候が先年御文房中にて長方形に候ひしか便面形に候ひしか其所甚うろ覺に御座候へども白磁にて蓋に三孔が有之筆洗かと存じ候へばさながら筆洗にも無之又水滴にも候はずもしくは水筆を以揮灑候に臨み其内

に水を盛り筆を倒立して鋒毫を軟和し候ものにても歟など申高說御座候一品拜見仕候義御座候右御品只今も尙御藏中に御座候はゞ暫時御恵示奉願度少々存じ當り候義御座候に付乍序奉懇請候以上

五日

大星拜手

靜山先生丈室

〔六一八〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郞氏藏

安政三年正月六日か

御投書拜見先以新禧御同慶奉存候如仰春來も兎角猛寒に御座候所連日愈御萬福被成御祝候條欣賀不過之候然ば政君にも藥御用ひ候以來御氣分も御爽快御腫物も大抵御平癒但御耳中少々御膿氣御座候との事又御頸筋玉樣のものゝ事委細致承知候昨日頃より御會釋などの節御前額御痛み少しく衄血の御氣味も候よし是は愚考候所元來の御持病には無之全く此寒威故に御感冒御座候と被存候夫には鼻血の御出候至極宜く候藥は是までにて別に加減候に及ばず勿論少しく表發を助け候樣に致料見差上申候將西洋戰爭圖卷懸御目候樣被仰下御

西洋戰爭圖卷

易き事に御座候則貴价に相附し候緩々御留置れ苦しからず候先は拜答まで草々以上

六日　大星拜復

義井賢兄几下

〔六一九〕立田樂水に贈る

安政三年正月八日か

西洋人の墨斗の用に作り候もの

昨日は御誨答難有拜見仕候御借示奉願候御珍藏の一器賤价に御附與を蒙り奉多謝候則拜見仕候處是は清國製に紛れ無之候へども元來は西洋人の墨斗の用に作り候ものと被存候西洋諸國一般に用ひ候墨汁は定て御承知も可有御座候彼の沒食子の煎汁に綠礬を和し候ものにて此方常用の墨の如く用ひ候に臨み磨し候に及ばずかねてより液にて貯へ候ものに御座候此器上に蓋有之候は塵を防ぎ候爲め蓋に三孔有之候一つは墨を點じ候爲の用外の二つは鵞管を建て置候爲と被存候清國廣東の互市に西洋諸國多く入こみ候事に候へば其互市へ向け候爲に造り候品風と此方へ渡り候が偶御手に入候義と被存候近日洋文認

め其墨汁をも造り用ひ候節この御藏物の義存じ當り必ず夫なるべくと存候に付一寸拜見相願候所果して夫に相違無之奉存候右返璧仕候に就き愚考の次第申上候御器御査入奉冀候以上

八日

昨日狀箱いたみ居候義被入御念蒙仰奉多謝候先頃愚僕取落し候て損させ候義に御座候必御放念可被成下候

靜山先生 臺下

大星 拜復

安政三年正月十三日か

〔六二〇〕白井平左衞門に贈る

和蘭文範並に銃卒訓語

瑤簡拜見仕候如仰今日も又々不天氣に御座候處倍御清適奉拜慶候然ば被寄思召御美製之御重の內蒙御惠投千萬難有老母豚犬始め大喜宜しく御禮申上度段申出候偖又書肆より新刻の和蘭文範並に銃卒訓語御目にかけ候さて御示し御尋に御座候訓語は練卒の原本にて年數も千八百三十三年拙藏の本と同様のものに候へば令郞の御爲めに御調へ被差置可然奉存候文範はリユチメンタと申

すものに候是も御座候て可宜尤も最初御讀習には常の文典の方御爲にはよく候此段御惠賜の拜謝迄草々申上候只今無餘儀細工ものに取かゝり候御使しばらく相待せ氣の毒に候此義御申譯迄如此に御座候餘は面緊に讓る

十三日 大星拜

樂山盟臺机下

〔六二二〕八田愼藏に贈る

安政三年正月十六日か

松代町 八田彥次郎氏藏

御使書拜接辱致莊誦候如仰春來屢々大雪にて剩寒も右に準じ料峭御座候處愈御清適被成御起居沃慰之至奉存候偖御丁寧之御帋表を以て品々御取揃御惠贈被下感惕之劇不知所謝候何等之功勞も無之候て箇樣預御配慮吳々痛入候御事に御座候乍然折角之思食に付一々辱拜受家內いづれも宜しく御禮申出候但政君御不例にて聊か藥劑差上候御謝儀とて被下候分は過當之義に付其儘拜受候事能はず是は完璧仕候御收被下候樣奉冀候政君其後の御樣子も不奉伺候定て御平善と奉存候御面部之御痛等如何の御容子にや御申分御座候はゞ無御遠慮

可被仰下候先は拜答迄草々如此御座候餘尙容面謝

十六日

猶々有合之粗品帋代まで御目にかけ候御一咲可被下候

義井仁友几下　　大星

〔六二二〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

安政三年正月十七日か

昨曉の地震

政君御藥の事

拜見被仰下候如く餘寒兎角甚しく候處愈御多祥政君にも倍御順快と申御事沃慰不過之候昨曉之地震此邊はけく寅年冬の一震より强き方かとも存候程にて候ひし故御宅之邊などは如何やと氣遣ひ候所使のものに何事も無御座候よし被仰下致安心候ひき偖政君御藥の事被仰下御容體御替り候事も無御座候との義則六貼差上申候もし是を御服しきり候頃に御腹內御不和或は尙御舌苦等御座候はゞ可被仰下候其心得にて解凝之劑上げ可申と存罷在候以上

十七日

義井兄几下　　大星

〔六二三〕　山田兵衛に贈る

安政三年正月廿七日

當春の拙詠を錄し

昨日は御細書辱拜見先以新禧愛度奉存候倍御無恙被成御揃御超歳慶賀不過之候偖又被寄思食御丁寧御目錄殊に品々銘々へも御贈被下感惕之至不知所謝奉存候御預置之絹素之事被仰下承知仕候心には有之候へども寒威に畏れ候て其後は筆をも下さず候ひき今日は少し暖にも候間當春の拙詠を錄し掛御目候殘りは又其內に認め可申候將高調御錄示感吟淺からず候草卒の御返し御一咲可被下候昨日之拜謝迄草々如此に御座候以上

廿七日

返々品々之賜ものには甚痛入申候いづれも宜しく御禮申出候面白き本御借與被下候て兩鶴大よろこび致し申候母も好物の御禮よく申上候樣にと申付候

（短冊）

さくさかぬこゝろにとむなうめのはなはるのいたらぬやどだにやある

（絹地）　　ひらき

（卷二和歌の部二一五頁參照）

日能毛東乃、耶末登能久爾波、閑氣萬具母、安也仁駕之許幾、閑見呂幾能、可美乃美餘々理、當可志羅春、阿末都非都幾遠、安面川知登、比都起東々毛耳、登保奈閑久、與呂都知安幾爾、數面呂幾乃、新幾萬春九爾東、多知武加布、惠美之可登毛遠、波幾々與女、年介當悲良計天、安越九毛乃、堂奈飛久幾破美、志羅久毛能、武駕不數可幾里、具爾波良八、有末當天都羅禰、宇難破良者、布年美天都々氣、阿女乃志多、久爾都知可羅乎、毛遲川岐能、當々波之轉武登、於不計奈久、美遠母於毛破春、徒幾耳比爾、許々呂都久勢之遠、末我川比能、駕美乃志和散閑、遊九美知能、意具良毛安羅傳、美地萬氣爾、川萬都幾志都々、徒美遠斜幣、於悲天之阿禮登、以之己所八、萬路比毛須免連、久左許處波、難非幾母數奈禮、春面呂幾能、美可東乃堂女登、萬春良遠能、布利於許之天志、登古々呂者、以能知乃加幾理、意之乃故東、要也八末路破武、久斜能己登、要也盤那悲可無、安免都知能、於保美駕美堂知、志奈奴能、於本九爾美當末、登起志具耳、安末都見所羅由、阿萬加氣里、見處奈波之天與、和我志都己々呂、

平　啓

〔六二四〕竹村金吾に贈る

安政三年二月二日

又冷返り迷惑仕候處御眠食何の御碍もいらせられず候歟奉伺候然ば今日ふとたにざく入置き候筒取出し候處認め置候中に此一枚有之候是は過日差上候ものと存候に殘居候は不審なる事に被存考候へば過日のは全く書損の方を差上候に御座あるべく候甚愧入候義に御座候ひき何分是と御引替願上候乍序申上候近日正誼老臺の昨年頃御認御座候と申を見候所うなゐ子のはなりのかみををぐしもてゆふやまざくらと申一首に御座候愚意には是は全く思食たがへられ候事の樣に存せられ候いかにとなれば櫛もてゆふ髮ははなりにあらずはなりのかみはくしもてゆふべからず一たび髮あげする時はうなゐばなりとは申されまじく候遠からずして老臺御上阪も候なご承り候かの邊にて御認めものなご候はんに當樣の所隨分御心を被用候樣御序も候はゞ可然御傳語奉願度候此間例の倉卒の口ずさみ御咲草までに錄呈仕候以上

うなゐばなり

おなじくつみありてこもりをる人のもとよりひそかに

はるはきぬきみがそのふをはじめにてわぎへの梅もはなひらきてよ
と申おくりしかへし
咲くさかぬこゝろにとむなうめの花
はるのいたらぬやどだにやある　　　　ひらき
二日　　　　大　星　拜
竹村先生　臺下

〔六二五〕　山田兵衞に贈る

拜見頃日風霜御存問被下奉謝候老母はじめ皆健に御座候但某少々此寒氣に被中申候乍去格別之事にも無之追々快方候間幸に御放念可被下候然者洋書一本御還し被下致落手候將過日御賴申候籌子出來に付御廻し選用候樣被仰下不淺感銘仕候過日御持參被下候分も御座候間乍自由其內にて斑の無之候を留め餘は近日安世迄差出し置度奉存候右御禮拜答旁草々以上
十六日　　　　恪　二　郎
安政三年二月十六日

〔六二六〕　山寺源大夫に贈る

安政三年二月廿日

再啓申上候迄にも無之候へ共此紙御覽後御火中被下候樣奉冀候以上

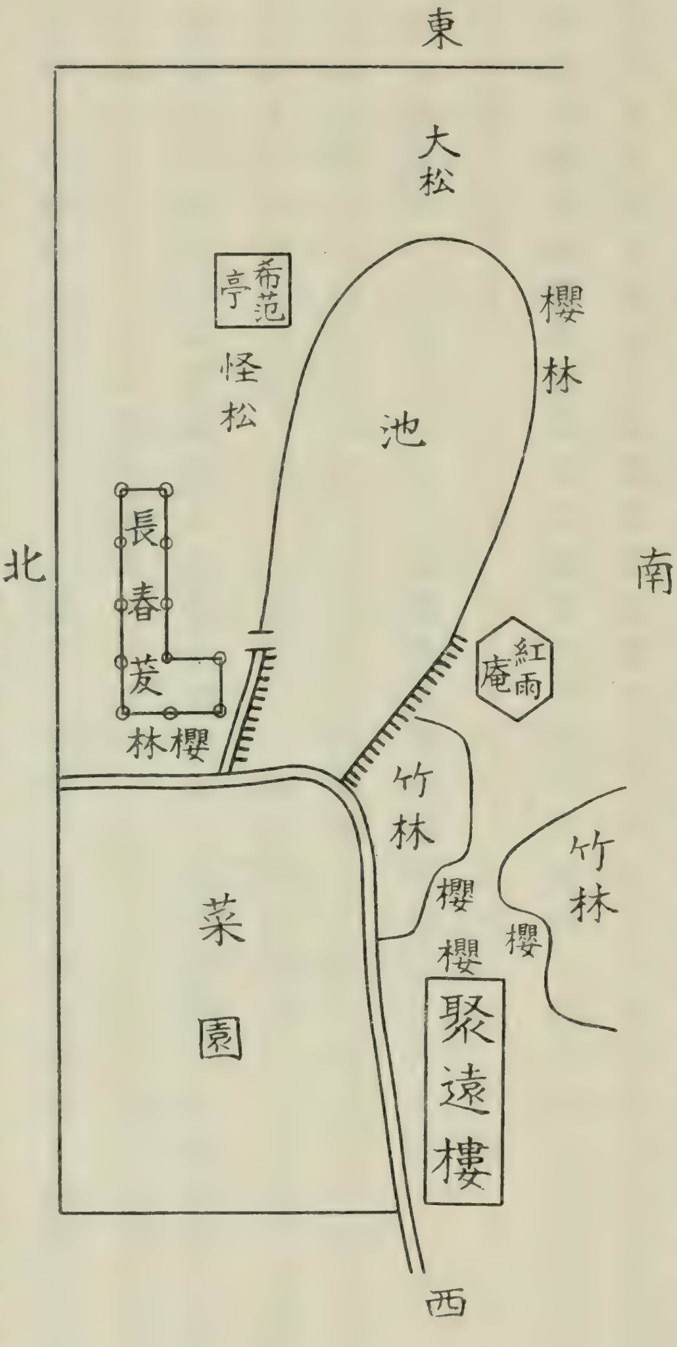
先夕は蒙御顧訪緩々得拜晤數日の渴想を慰し且豚犬迄品々御投惠感喜之劇言謝不可盡奉存候然ば其節被仰下候樓頭よき程の所に牆を結び內外の辨をつけ栞戸樣のものを造り開閉候樣に有之度とのこと望大夫の志と申義に付乍夜中樓頭の樣子御覽被下候所竹樹檐を拂ひ候體いづれの所に牆を結び候はん樣も無之百聞一見に若ずとて御感心御座候所其後篤と勘辨仕候へばその內外の辨を付け度と申事の起りは望大夫今春久々にて歸藩の事に候へばかね〲賞愛され候古松泉石の模樣をも早速見られ度候所あやにく某に借し置れ園中□□□も住居と一と續きに候へば公餘の遊觀にも我ものながら無遠慮に思はれ內外の締だに有之時には他の方の小門より園內を見回られ候に人言も有之まじくと被存付候ての事と被察候依て種々趣向仕候處左の略圖朱引の通に致し候得ば□□□左右より見候てけく風致を添候樣にも可相成候へば夫にて內外の隔

望大夫今春久々にて歸藩

有之候へば大夫の來遊にも差支有之まじくと被存候

御覽の通竹も茂り居候へば牆を以て其中を貫き候にも及び申間敷兩端をば竹

（本文に見ゆる朱引なるもの傳寫本に之なし）



林に倚せ候て空隙の地ばかりに牆を設け候はゞ可然と存候北の櫻林の西通り

小流に沿ひ候所は昨年中も在邊より黄梅をもらひ候て生垣に致し候はゞ花時

の目を悅ばしめ候のみに無之略菜園との別もつき候て可然と存じ其心構も仕

候所秋中嚴しき御沙汰にて其れも廢し候事に御座候此度内外を界し候樣にと申事に御座候はゞ此所は左樣に被成候方始終面白かるべくと被存候左樣相成候へば園中と住居との界は分明にて唯竹林中一徑を通じ候までに御座候是は苦しくも有之間敷歟もし夫までをも締つき候樣にと申事に候はゞ小流の石橋を渡り竹林に入らんとする所に風韻有之候皮つきの木にて一衡門を設け候なども可然候いづれにも大夫來遊に差支無之候樣に仕度此義内々申上候正誼老臺の御引受も御座候との事に候へば盟臺よく御勘考被下候上にて宜しく御相談望大夫歸藩御座候以前に夫等の事行屆き居候樣仕度奉萬祈候先夕の拜謝旁如此に御座候家内いづれも宜しく御禮申上度段申出候已上

廿日

附白昨秋安世を以て御無心申上候洋墨其節貯置候分にて事足り拜借のみにて其儘仕まひ置返上延引仕恐惶不少被存候乍序奉完璧候御查入可被成下候謝々

大星拜手

懼堂老盟臺　案下

〔六二七〕　山田兵衞に贈る

安政三年二月廿二日

神戸市外　山田孝太郎氏藏

料紙不足に候はゞ無御遠慮被仰下候樣奉存候蟻川も近日出立と申事に付何分少も早く御卒業被下度候

日々風烈に御座候彌御障も無御座候耶近日蟻川父親看病にて立歸の所病氣も幸快方にて出勤此閒屢此方へも見え申候四年來多勢世話有之候故かエキセルシチーは大に達者に相成悅存じ候事に御座候賢友へも御尋申度樣に被申候が御逢候や如何や然ば此閒同子話に近日江戸にて洋書を熟語にて巧に譯し讀み候もの御座候と申事にて其熟語の譯書にても候かと尋ね候へば大阪緖方の塾にても江戸伊東の塾にても書拔候もの有之夫を一つに致候を此度も持參候と申事に付今日致無心借寄せ候所大に心得に成候事共も有之候依て蟻川逗留中僅かのものに付寫し置度と存じ候へ共某は御案內の通レッテル至て不得手に付無餘議御無心申候御手閒費ながら雜と御寫し被下度奉希候大分不用に紙のあき居候所御座候が是は此樣に致候に及ばずA之部終り候はゞ半枚なり四半

蟻川父親看病にて立歸

洋書を熟語にて巧に譯し讀み候もの

蟻川逗留中僅かのものに付寫し置度

枚なりあけ其次の紙の頭よりＢの部を寫し候樣致度候何分宜しく御賴申候以上

過日御目にかけ候はんと存候歌有之候ひき序にしるし電矚をけがし申候
春をまつやどのうめが枝うたかたも雪さへけなば咲きでなむかも
長歌も一首有之候認め候草稿有之候まゝ一同御目に懸け候御一咲可被下候
以上

廿二日

猶々過日被遣候御草本も久々風邪にて看書をも怠り候仕合故一覽も延引に及び候御諒恕可被下候

蕗庵賢友　机下　　大星拜

久々風邪

だいしらず

しなのぢは、ひなにはあれど、うらくはし、やまにものにも、はるされば、はなさきをゝり、秋づけば、もみぢにほへり、そをめでて、のゆき山ゆき、あまつ日の、くるゝもしらず、あそぶなる、ひともさはなり、しかれども、さすらふるみは、はるの野の、

はなもかざさず、あき山の、もみぢをもみず、たらちねの、はゝのかふこの、まゆごもり、こもりてながく、としぞへにける

かへしうた

君がためたちはしりせむすべをなみあたらよはひのおいらくをしも

ひらき

〔六二八〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

（安政三年二月廿四日か）

四五日暖光を覺え候處又冷かへゟ申候彌御佳勝に被成御起居候耶然ば過日御約束申候通明廿五夕藤岡も參り候間御早く御入來被下度奉待候尤も此節がら何の風情も無之唯ゆる〳〵御物語被下度夫のみの義に御座候以上

（明廿五夕藤岡も參り候間御早く御入來被下度）

廿四日

猶過日御來過の節は何よゟの品被下辱乍序及御禮候以上

八田仁友足下

星

〔六二九〕　山寺源大夫に贈る

安政三年二月か

御墨敎拜見仕候如仰今日は氣候も稍緩に候樣覺候一雨も有之候はゞ春光にも相成可申候家父風邪の義御傳聞蒙御芳問難有奉謝候本より對したる事にも無之昨日は朝より大分快き容子にて候ひし處今少し溫覆も仕居り候へば今日頃は□□とも可仕候にあやにく色々の事にて再感を覺候樣子候て今朝は只今に臥せり罷在候再感なご申候ても格別の事にも無之候へ共往々惡性疫邪なごも流行候時節に付き隨分用心加養仕候義に御座候間乍憚御過念被成下まじく候然ば新刻の和蘭文範御示及に御座候處是は原名リユヂメンターと申ものにて彼方にては初學致重寶候ものと被存候乍去此方にて新たに洋學を初め候者の爲には箕作生が刻し候て文典前編と題し候ガラムマチカと申ものゝ方便利の樣に存候其所以は此リユヂメンタの方には句讀を習ひ候はん所少く結句例のみを擧げ句讀を習ひ候に及ばぬ處多く有之候夫故に早く卒業に相成候ても素讀の力薄く候に付後編に及び候事進み却て手間取れ候かと存候ガラムマチカ

リユヂメンター

龍種を以て常馬にたぐへ候樣

玉煙堂帖作者

三村子も近々來著と申事

ひたち帶御惠借

有之候例のみにて授讀に及ばぬ所も有之候へ共授讀すべき葉數多く候に付ちと卒業には手間取れ候樣には候へども一部讀覺候間に功者つき候處出來候樣に御座候非常の天賦にて一を聞き十を知程の人に候はゞいづれの優劣も有之まじく候へども世間の常材を以て東西異俗をかけ合せ論じ候へば此差別なきにあらずと奉存候令郎方の御爲に御備御座候御事に候はゞ同じくはガラムマチカの方に可被遊候價銀はいづれにても被仰候位に可有御座候御下問に付此段申上候箇樣申上候時は龍種を以て常馬にたぐへ候樣にて恐入候へども授讀すべき葉數の多き方いづれに致し候ても其答多き樣に被存候に付如此に御座候伏冀原鑒玉煙堂帖作者御尋に御座候やはり董玄宰と覺候其刻之年は戲鴻堂帖の後に御座候樣に候

三村子も近々來著と申事意外の義誠に如仰に御座候御面會御座候はゞ乍憚幸に御致意可然奉願候右草々奉復申上候御芳問之御禮家父も宜しく申上候以上

即日

附白過日はひたち帶御惠借難有奉存候さすがによく出來候て此人の不可復

見候事ます〳〵不堪感愴候荆婦寫し置き可申と存候に付取かゝらせ申候返璧此月末に及び可申候夫迄御寛貸奉願候是は家父より申上候義に御座候以上

懼堂先生　丈室　　　恪　拜復

〔六三〇〕　山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

安政三年三月七日

瑤函拜接忙手薰展仕候先以時下愈御健寧被爲涉欣慰之至奉存候賤家近況蒙御存問毎度難有奉多謝候幸いつも相替候事無御座候間乍憚御放念可被成下候然

園中分界の事

ば園中分界の事早速正誼老臺へも御相談被下候所愚考之通にて可然と申事のよし然る所此間申上候後尚又反覆其模樣取の處工夫仕候へば樓の東の方のは此間申上候より稍西へ寄候方宜く被存候其所以は樓の東面中央へ曖翁手筆の

曖翁手筆の聚遠樓の扁を掲げ申度

聚遠樓の扁を掲げ申度其爲には此間申上候如くにてはちと檐端邪魔に成り候て全く見えかね申候稍內へ其牆を引入候へば其匾殘る所なく見え候て園中の一景を添候樣に相成候故左樣致し候方致堂大夫の意にも更に相叶ひ可申と奉

存候庭師の豐吉昨年も園中の事總て扱ひ候ものに付被仰渡被下候はゞ尚宜相談可仕候

一風說書半下御借與被成下奉銘謝候前半をば則奉完趙候墨船も彌一隻下田へ渡來候よししかし一隻のみにては例の風聞も有之候ひし一事にや又は左も無之船かさだかならず候樣被存候慥かなる模樣御聞及ばれ候義も御座候はゞ其內內密御報聞可被成下候萬奉冀置候

一崋山の畫幅御示及圖の事御下問に御座候所隨分見かけ候事有之ものに候所其題を忘れ候て不及是非候筆力面白く相違も有之まじく御紙中の價にては先廉品とも可申御藏弆御座候て可然奉存候墨は華品にては無之多分古梅園の製と被存候其墨譜中試に御討索可被遊候二方の價惡からず候へども華品の思召にては違ひ候間爲念申上候則返璧御査入可被成下候偖又何よりの兩品御惠賜被成下殊に家父へ被下候は當地珍しき品にて別して難有早速晚來の下物に供し可申吳々も宜しく御禮申上候界牆の義に付候ては近日又々御賁臨も可被成下か左樣に候へば尤も妙と奉存候同じくは櫻花の發き始め候頃に候と更に奇

昨年は清明の節には餘程花も見え候所

絕と奉存候今日頃の樣子にては尙五六日も過ぎ候はでは咲始め申まじく被存候昨年は清明の節には餘程花も見え候所客冬雪深く寒烈に候ひし故か當年は十日餘も晩く候樣に御座候何も其内拜顏之時と拜答まで草々申上候以上

七日　　　恪　拜復

懼堂老先生　臺下

〔六三二〕白井平左衞門に贈る

安政三年三月九日か

靄崖慊堂

御內書拜見先以愈御佳勝喜慰之至然ば靄崖慊堂兩幅御示及拜展仕候如仰靄崖面白出來と存候慊堂も疑もなきものに御座候六十九に候へば晩年に候夫故か書體老蒼出來宜く奉存候御草稿拜見一兩所愚見相認入候拙作の事御尋に御座候處舊冬より別して讀書のみに打かゝり候て詩文は廢絕同樣に御座候尤も少々は有之候へども流義違ひの作に付他人には至て不分りに可有御座と奉存候其內の解し易きを錄し掛御目候御一咲可被下候

詩文は廢絕同樣

春林昨夜雨　餘滋在園蔬　日出猶未曦　露華湛平鋪

錯落如㆓列星㆒　明圓似㆓編珠㆒　此形誰使㆑然　能力非㆓外駈㆒
窺㆓彼天體圖㆒　始原將㆑無㆑殊　理妙無㆓大小㆒　不㆑達竟焉如

（草韻彙編の事　省譽録）

草韻彙編の事過日も仰も御座候に付早速完璧可仕候所此節無人にて乍存延引仕候内又々蒙仰恐入候省譽録一同昨日直に尊使に相附し候多日拜借毎度益を得候て千萬難有奉謝候省譽録申までも無之候必ずしばらく御他見は被下まじく候知己を百歳の後に求め候心得にて錄し置候ものに付其思召にて御獨覽可被下候昨日は難去餘事有之拜復に及びかね奉愧入候返上もの旁右申譯迄草々頓首

九日　大星

子康老友臺下

〔六三二〕立田樂水に贈る

（安政三年三月十二日か）

膏雨一團の春意を顯はし候倍御綏和に御興居御座候御事と奉想像候然ば過日

（破家（北山）

御内話申上候破家もの只今に病家をも碌々見舞不申不快にも無之起居飲食平

安世を指す）もの只今に病家をも疎々見舞不申日に替り候事も無御座候所結髪候様申候ても結髪も仕らずもずの巣の様なる體と申事如何なる所存か扨々解しかね候義に御座候定めて一二應は其志の程をも御推問被成下候義と奉存候尊意に於ては如何被思食被下候御事や御書中にて也共御誨示被成下度奉願候至禱

十二日

附啓過日家父御來診御斷にて御光訪被成下候御事に候へば其續きにて御枉趾を蒙り候には此方より申立候にも不及其御方にて御手數被成下にも及ばざる事と奉存候其子細は病の義は毎日御見舞不被下候ては叶はぬも可有之又は朝夕御覧不被下候ては濟まぬも候べく候へば其時双方にて斷りを申候事にては大に差支候筋と奉存候依て其始に申立致し候はゞ其快方の斷申候迄は幾度御招き申上候ても苦しからぬ道理と被存候然る所此閒御誨答之趣にては左様にも無之様に御座候が是は御序を以て御重役衆へかく無之候ては差支に成候譯を御演説被成置被下度是又奉萬冀候若猶故障の筋も御座候はゞ親類共より申立も仕らせべくと奉存候就ては本文奉願候次第萬一御書

中にて御示誨も難被成下筋も御座候はゞ御病用之御序家父御來診之趣にて御訪問被成下候樣仕度奉懇請候以上

靜山老先生 丈室伏乞密覽　　恪　再拜

安政三年三月十五日か

〔六三三〕立田樂水に贈る

此畫百合女史（松代恩田氏の女綠蕊と號す藩畫師山田島寅の門人）に囑し寫しもらひ度

潤筆も相當の振合御承知に御座候はゞ

西施の面貌鬢髮總て此幅の通

けしからず冷氣に御座候尊體倍御恙も不被成御座候歟然ば此畫百合女史に囑し寫しもらひ度かと存候所此節柄外に手寄無之依て恐入候へども御座右へ相願置候絹地も彼方に常用之品有之事や又は此方より差出し候が宜く候はゞ是より上げ候樣致し可申但是に應じ候わく所持仕らず是は多分彼方に相應致し候が可有御座候且潤筆も相當の振合御承知に御座候はゞ御示誨奉願度もし御不安心にも候はゞ內々苦しからぬ樣に御聞つくろひ蒙仰候樣に仕度奉萬祈候乍御煩聒何分も宜く御周旋被成下度奉冀候以上

望

猶々西施の面貌鬢髮總て此幅の通と申望にて御座候其所も御含可然御賴被

下度奉希候

大星拜手

静山先生　丹房下

安政三年三月十六日

松代町　山口勇雄氏藏

〔六三四〕　依田甚兵衞に贈る

附白津田の一通返還御收可被成下候以上

三月九日付の御手筆伴之助より落手拜見仕候先以御興居御平康慶賀之至奉存候然ば津田よりの返しもの御屆被成下難有奉謝候同人手紙も御廻し致一見候所義理の分らぬ認め方と存じ申候恪二郎名前の文通出來ぬ譯も有之まじく又表向たとひ出來ぬ筋候とも事には內密と申次第も有之況や恪二郎に於て返書被越候とて何の仔細も有之まじき事と存候又夫程內々にても返書しかね候程の義に候はゞ昨冬の送りものをばなせ受取られ候事にて候や送りものを受候は苦しからず返事はしかね候夫樣の不理窟なる事あるまじき事と存候津田はも少し義理の分る人と存じ候所存外の事にて候乍去是等の義先方へ被仰被下

候には及び申さず只ちとあきれ候故御返事がてら貴君迄申上候事に御座候先は拜復迄早々申上候御臺場へ續て御出張御座候御樣子御苦勞奉察上候時候も兔角不順其表も同樣冷氣と伴之助よりも承候御自玉專一と奉存候以上

御臺場へ續て御出張御座候御樣子御苦勞

三月十六日　修理

甚兵衛樣

猶々政君へも宜しく御致聲可被成下候以上

安政三年三月十七日

象山靜山筆問答

〔六三五〕立田樂水に贈る

此兩三日漸春光に相成候樣奉存候御寢食愈御萬福と奉想像候然ば每度御無心恐入候得共例の大筆暫時御惠借被成下度奉懇願候御允兪之上此者に御附與を蒙候はゞ尤以感銘之至可奉存候頓首

十七日　大星拜

靜山先生　几下

靜山より象山へ

華翰拜見仕候如命春光相催候處御琴書日々御碍も不被爲入欣躍奉存候然ば例之大筆御用之由容易之御義則差上申候疇昔は外出罷在候て御即答不申上恐入奉存候將又小生義も先日より一寸罷出申上度義御座候て既に望執政君へも御内々御話仕尤病用之趣に申立致し可罷出奉存罷在候處小生義も流行之風魘に被襲漸近日外出も仕候仕合之處玄道義も散々風邪にて平臥罷在小生一人にて孜々罷在未だ相果し不申は別義にても無御座先日晴山少々内話相託候義御座候尤同人委細申上候由に御座候得ば小生罷出申上候譯にも無御座候得共退て相考候へば知て告ざるは忠に非ずと申候得ば何れ御内話と奉存候て延々相成候尙近日罷出御内話も可申上候夫に付大筆御用之由差上候得共唯先生御閑時之御慰に御揮灑御座候は固より勿論に候得共御認物萬一外へ御出し又は被御賴物等御認抔と申義にも御座候はゞ何卒私罷出候迄御見合せ相願度奉存候申上候迄も無御座候得共此節先生之御敬愼は先生御一人之御爲計にて無御座候先生之御敬愼宜敷御座候得ば即君公之被仰付方御宜御譯柄に相當り乍失禮先生之御不敬愼は君公之被仰付方御行屆不被遊

晴山少々内話相託

大筆御用の由

先生之御敬愼は

忠孝共先生之御方寸之中

九二見龍之時を御待被成候樣仕度

近頃之金魚賣抔も油斷相成不申

候御譯柄と可相成奉存候且天命無餘義事には御座候得共御敬愼宜く早く御廣く御成被成候得ば御先祖樣への御孝道にも可相成候得ば忠孝共先生之御方寸之中に可有御座奉存候箇樣申し上候ては彼釋迦に心經とやらに御座候得共此所を知て告ざるは忠にあらずと申場にも可有之奉存候に付申上候大筆も蒙命候て不差上候得ば交友之道を失し御認物萬一外へ御出し被成候樣之事御座候へば先生之御不敬愼を於小生も相助申候譯にて友誼を失候事と奉存候友は以て仁を輔くと申候得共大筆を高意に任せ机下に呈候て先生之德義を輔る事能はざるは小生拙陋之才之致す處と深く背汗仕候是を以て小生先生之爲に敢て願候は何卒初九之位を御守被成候て九二見龍之時を御待被成候樣仕度奉存候潛龍之動候は妄動にて必以禍を相招候義と奉存候御敬愼深く御座候得ば必無異閑寂にて御聲名外へ走候義は無御座候此節探索人兩途より出居候と申事傳聞仕近頃之金魚賣抔も油斷相成不申候於是小生は此節先生之御聲譽世間に相響き候を甚以て忌諱奉存候右故大書等御認物外へ出候義を深く相厭ひ候義に御座候少々は高意にも斯く申上候拙語を友誼之寸志共被思召被下候へば實以泰山も猶卑く滄海も猶淺くと難有奉存候書は不盡言餘は拜顔可申上候以上

操　拜復

三月十八日

象山先生帳前

〔六三六〕再び樂水に贈る

安政三年三月十八日
其の一

昨日奉懇願候大筆御恵借被成下候に付縷々御深切之御誨敎千萬感銘不知所謝奉存候認もの等の事三村も過日被申吳候事も候旁小弟は先一切相止候義に御座候昨日の拜借もの願ひ候譯は小弟はつまらぬ事と申候得ども老母何か心願の願ばたし致し候に付小さな幟を豚犬に認めさせ愛宕の社に收め申度と申事幟身も手縫ひに仕先達てより認めさせ候樣申候得共餘寒も强く候故迷惑の趣申居候所兩三日此暖光を得候て是非とも認めさせ候樣責め候義好み候はぬ義ながら其意にも乖き難く拜借ものをも願ひ候事に御座候豚犬の義に付此節柄とは申候得共年月だにも認め不申候はゞ殊に一と幅ものゝ小物には有之子細も有御座まじきかに存じ候義に御座候乍然御懇切に蒙御耳提候義に付夫等の顚末をも申上尙其可否之所高意奉伺候夫等迚も然るまじき事に蒙仰候へば其

事母へも申聞せ候て見合せに致させ可申奉存候思召之所無御伏藏蒙仰度奉萬冀候御誨敎之拜謝旁如此に御座候以上

十八日　　大星　拜復

靜山先生　臺下

令郎御感冒にて御平臥のよし散々に奉存候何も御對し被成候御事には有御座間敷候得共千萬御保養所望御座候以上

靜山より象山へ

御再翰拜見仕候愚意申上候義も御海容被成下候段降心仕候且御北堂樣御心願に付云々蒙仰尙又愚存も可申上旨恐入候仕合に奉存候折角蒙命候義につき肺肝吐露仕候扨令郎君之御所爲に御座候へば苦敷も有御座間敷哉には奉存候得共愚意にては御全家樣先生に隷候義に御座候て此節御外出も御愼被爲在候位之處に御座候へば如何のものに可有御座や私にては先御見合御座候て御北堂樣御誠心にて御祈念御座候はゞ神受も可有之奉存候世間にて神は非禮を不受と申候へば禁を犯候て幟を御納め被成候形に御座候得ば却て神受も如何可有之や御北堂樣御誠心を以て御祈念御座候て御心願御成就且

先生も御廣く御成被成候上にて幟御納め御座候はゞ世間にても誰以啄を入候ものも有之間敷と奉存候御取捨は高意の儘に御座候得共於私は御見合相願度事に奉存候愚意御尋問に付無伏藏存候儘を申上候以上

三月十八日　操　拜復

象山先生帳前

〔六三七〕三たび樂水に贈る

安政三年三月十八日其の二

御再教難有拜見仕候高意いかにも御尤奉存候依て其次第申聞かせ見合に致させ可申と奉存候就ては拜借の御品返上仕候御査入奉冀候御懇情之次第呉々も奉萬謝候以上

十八日　大星拜手

靜山先生臺下

靜山より象山へ

再三之貴書拜見仕候愚意申上候處御取用も被成下候段萬々難有投御海量之程奉敬服候世間にては御父子樣之差別も不辨唯佐久間樣と取はやし候得ば

實以先生之御名譽之相響き候譯合にて心痛に御座候處御見合と相成候得ば瓜田李下之疑も御免れ被成候事萬全之義と萬々大喜不過之奉存候筆二握御返却被成下慥に落手仕候何れ近日罷出候節萬々可申上候且御帽子還消仕候以上

三月十八日　　　　　　　　操　拜　復

象山先生　張前

〔六三八〕勝麟太郎に贈る

安政三年三月廿二日

正月廿七日之御手誨相達し拜見仕候先以尊體倍御無恙にて數多の學術御勵精御座候て追々日新之御效驗も相顯はれ候御便承り喜躍無量奉敬慶候然る所御出かけ海上御危難の事初て承知仕驚愕不啻しかしかゝる大危厄を御免被遊候事御福分厚きの致す所いはゆる吉人天佑と萬々奉賀候右に付候ても益々御鞭策を被加天下の御爲第一等の御功業の相建ち候樣奉遙祝候外他事無御座候洋匠と言語不通にて通事を經候の上ならでは何事も十分に參らず候との御事いかさま左樣にも可有之隔靴搔癢の御歎息誠に御尤も至極奉存候しかし崎港御

著以來日子を數へ候へば屢々の事に御座候處今少し御修業御座候はゞ御通辯も可也御出來可被成との御事全く晝夜御刻苦故とは申ながらいかにも御果敢の參り候御事と敬嘆少からず奉存候御自由に御通辯も御出來被成候樣に御進步被成御座候はゞ何事も破竹の御勢に至り可申候へば其所申迄も無御座候へ共隨分御心を被爲用候樣奉祈候航海術悉數學のみウヰスキュンデ開け不申候ては叶ひ不申候との事御尤に奉存候此事は僕に於ても兼て左樣存じ候事にて一昨年獄中にて致腹稿脫繫後淨錄候一卷元來省諐の餘に成り候もの故に省諐錄と名づけ候其內にもウヰスキュンデに係り候一條有之候被仰下候所に符合候に付爰に抄出掛御目候

（ウヰスキュンデ（詳證術））

詳證術萬學之基本也泰西發明此術兵略亦大進與往時夐別所謂下學而上達也孫子兵法度量數稱勝亦其術也然漢與我有孫子以來莫不誦習而講說而其兵法依然如舊不得與泰西比肩是無他座於無下學之功也今眞欲脩飭武備非先興此學不可』

（卷一省諐錄九頁參照）

教頭人物も宜く本國にてもスコールの教授致し居候人のよし定てナチュールキュンデなどにも長じ候人に可有御座候あはれ其人に出逢候事も候はゞ斯學に就

き是まで貯候疑議をも質正候はん者をと神飛候義に御座候御承知のソムメル
などゝも高價三十餘萬錢を以て取入れ候へども追々渉獵候へば畢竟フォルクスブック
の大なる者にてホーゲスコールの者にては無御座候此節ホーゲスコールにて
用ひ候ナチュールキュンデの最も有名な書何と申もの有之候や其名のみにても御
序に御尋ね置可被成下候先頃洋書の事順子よりも相伺はせ候御手寄にては手
易く手に入り可申歟ケレーネオールロフ　ゲフェクツレール　ストラテデー
アルチルレリーのニーウエのものカハレリーのエキセルシチー　レグレメン
ト　タクチーキも何ぞニーウエにて評判宜しき者御座候はゞ便開乍御手數其
價も御報聞願上候日々御出會の士官の內戰爭に出で候人も候よしいづれも無
造作にて見識ぶり候事などゝ無之乍去號令はよく行屆き候て總て知れ渡り候事
と雖も號令官の命無之候ては自儘に致し不申候との事軍中の禮いかにも左樣
無之候ては叶はぬ事と被仰下候にて益々感心候義に御座候貢獻の蒸氣船に御
駕し運用御稽古ながら海上六十里も御乘出し御座候處裝置器械廻轉絕妙と被
仰越健美に堪へず奉存候如仰ウエルトイグキュンデ致長進諸器械のマーケラー

ルに富み候はでは航海の術は別して行つかへ可申殊に鐵の扱ひ普通に開け候て（此普通と申所に廊廟にても御目を被附候樣致度ものに御座候）鐵艦に至るまでも製作の行屆き候樣に無之候ては算多とは終に申されまじく候火礮の術も追々少し宛は開け候樣に候へども元來火藥は礮のブルードにて候所火藥の製作を彼邦の通に致し夫より礮の事に及び候はんと申料見の人絶て無之嘆息の事に御座候此製作是迄の如く苟且の事にてはいか樣礮器備り候ても海陸ともに軍を出し候事は出來不申候崎港にはプレットモーレンの旣に獻貢の記に上りたるが有之候趣兼て承居候何とぞ是をば御力にて江戸表迄御上せに相成り火藥よりして彼邦の通りに相成候樣企望候義に御座候步兵の練法此節のも是迄のヱキセルシチーレグレメント書中の法と大同小異のよし裝藥も八段に致しフーチーをファールヂフの時アモルセーレン候との事被仰下得新聞千萬奉多謝候左候へば寅年春彌利堅人の致し候手續と一致と被存候擊發銃にてはいかさま便利なる樣に御座候定て是もヱキセルシチーの書可有之候ラードトゲウヱールとフークトファールヂフの所レグレメント中一寸御抄出御送下奉願候フークトファールヂフは此迄

と違ひ銃口を前の方へ向け銃を少し斜に致し申さず候ては叶はざる樣に被存候彌利堅人も左樣致し候と覺え候乍去睫と致したる定式相伺度奉冀候バスの法細かに足早に成り候樣被仰下候へども是はバタイロンスコール中にも見え候通りバスのレングテマートテイドマート慥に成り候上の事にて別してタクチーキ中などにはエキセルシチーの常則より餘程早く成り候趣も見え候へば洋人隊伍を立て候上にて歩法早めに候とてレグレメントの常則まで早く成り候とは難申樣奉存候早く致候はいつにても早く成申候一分時七十六歩一歩の長さレインン尺二尺に踏み候と申事けく甚難き樣に御座候此難き所をレクリユートには勉めて刻苦致させ不申候てはバタイロン以上の大陣を布き運動候節に大いなる差支出來り可申と被存候併し夫とも近來其レグレメントの法迄早く相成一分時に何ほどと申定則御座候義に候はゞ是又御垂示奉希候海上の戰法定めてタクチーキ樣の者可有之候舶を以ての陣の布き方許多之法御座候はんと被存候海上にもゴロートゲフェクトケレイネヲールロフの差別も御座候義歟其書も澤山可有御座候何等の書名御承知に御座候や是又便間御垂示奉懇候

舊冬は都下も大地震

偖如仰舊冬は都下も大地震にて近年御多事の際別して恐入候御事に奉存候最初傳聞赤坂御宅の義も奉氣遣内々飛脚差立相伺候處北堂君御始御別條も不被爲在降心仕候義に御座候御港著後とくに呈書も仕度候所蒙御承知候通去秋中文通等懇意の向たりとも決して仕るまじき趣御沙汰を蒙り候て勿論其以前と雖も賤名を以て文通候所は無之候へ共無餘議用向等有之又音問を受け候所は恪兒の代筆致し差出し候のみに御座候雖然其御沙汰以後は夫も見合候て一切呑筆を執り候義無御座候勿論親戚の間は別事には候へども夫も見合候樣家老ごもなどより嚴しく申達し候故不本意に御疎音申上毎度順子を以て申譯仕候義に御座候乍去此度の御手誨中御危難之事相伺候へば再び人間へ御出有御座まじくとまで被思召候所幸に御免れ御手書をも拜し候義に付實芽出度奉存候故例を破るとて極密右御悅迄此書相認候義に御座候其御思召にて御祕し可被成下候此間にて風聞候に暫く御不快に被成御座候と承り早速順子に相伺はせ候御手誨中其御樣子も無御座候へば全くの虛傳か乍然風土も違ひ候義に付萬端御心を被用御保愼に不可過奉存候餘は後音可申上拜答旁如此御座候以上

三月廿二日　　大星拜復

勝　君　臺下

附啓先便順子よりも申上此書中にも認め候洋書の事何分御舍可被成下候外に

ダラーグバーレバロメートル一　テルモメートルバロメートルに附き候へば更に妙

オリタント　一　オロ、チーのフェールー條

別に

テルモメートル一　表はレアウミユルにてもハーレンヘイトにてもセルシウスにても何れにても宜しく候

右價金何ほど計にて手に入可申や乍御面倒御誨示奉願候

一　デッケルのタクチーキを辯駁候書有之候よしにも承候是は何と申書にて何册有之其論當り候や否御序に教師へ御質問被下度候屛居以來タクチーキは藏本デッケルのみに付かの二卷を把て序に是も奉伺候此書も第三もドイツ原本は有之よしに候荷蘭にて譯本出版に相成候事や是又御尋ねの義奉願候精讀仕候所愚意などにも聊か肯かね候事なきにしもあらず乍然此術に至り候ては其運用の妙畢竟其人に存する事に候へば其人にして用

運用の妙畢竟其人に存する事

ひ候はゞデッケルの一書にても其用餘ある義又其人に無之候はゞ何程の奇書何十部有之候とも又徒然なるべく候乍去讀候書好書に候へば夫丈けの益は御座候樣に存候に付好書はほしき者に御座候是亦何分御含可被成下候以上

（此の手簡に對する勝より返書四六八頁に出づ）

安政三年三月廿四日

〔六三九〕山田兵衛に贈る

神戸市外　山田孝太郎氏藏

久々御安否も承らず候專ら開花之時節に相成候へども兔角不揃之氣候殊に日日の烈風人意に快からず候御屏居中何の御碍も無御座候歟御家内樣にも總じて御安好御興居御座候御事や御學況其後何似此節何等の事に御取掛り御出候や承度候某も人の出入嚴しく成候以來は是も難得の好時節と存候て餘勢之閑事業をば一切相止め晝夜意を專にして讀書のみに打掛り申候今春に成候てもかのデッケルのタクチーキ兩帙も卒業此節又再遍を始め初帙の中半まで濟せ申候大に力を得候事も有之みづから喜居候事に御座候宋の陳希夷先生之語に落便宜是得便宜と申事有之候誠に名言と存じ候賢友も此節の御落便宜を以て終の御得便宜に被成候樣所祈に御座候然ば步騎を合せ候大陣を取立て見度候

步騎を合せ候大陣を取

處例の御手數に相成候算木のみにては事を略し候ても猶ちと不足にて候依て近來御無心に御座候が黑染に被成候分三十二本暫御惠借被下度希候此ものに御附し被下候はゞ尤以可辱候右拜懇之爲草々以上

廿四日

猶々此品乍些少只今到來にまかせ御目にかけ候御咲留可被下候以上

山田賢友　足下　　大星　拜

〔六四〇〕山田兵衛に贈る

神戸市外　山田孝太郎氏藏

昨日は得御細答時下御康寧之狀詳悉沃慰の至奉存候御無心申上候籌子御借與被下感銘不少但し御借與被下をば騎隊として用ひ申度候へば同じくは御染め候方に御取替被下候へば尤も妙と奉存候依て昨日の三十二本致完璧候乍御面倒御引替被下度候偖詩を御作り習ひ候はんとの事に候はゞ唐詩正聲を御熟讀古今詩取合せ二三百篇御諳誦可被成夫も初めより諳記を求めずゆる〱と遍數を重ねて御吟誦候閒に自然と覺えのつき候て諳誦被成候事之御出來候樣に

被成候方宜しく候二三百篇御諳誦候間には自然と其風調並に文字のはたらきをも御悟り候所可有之其御悟り候所をたねに被成候て御自作に御かゝり候様に可被成候古人の詩を記する事少く悟る所なくしていたづらに多作候はつまらぬ事に候古人の詩を誦し候間には自分にて作り見度念を生じ候ものにて候所夫を押へて作らずに居候へばますく作り度思ひ候の念を起し候へばやむを得ざる時に及で筆を下し候へば長短篇思ひのまゝに調ひ可申是詩を習ひ候の妙訣にて候御試可被成候以上

廿五日　　大　星　拜

山　田　賢　契　几下

〔六四二〕　山田兵衞に贈る

神戸市外　山田孝太郎氏藏

安政三年三月廿七日

花時連晴御同意奉存候偖此程は御無心申候黑算御借與被下不淺辱奉謝候暫御寛貸被下度候將又御無心御座候橫笛譜に太鼓の裏拍子まで御附置候が御座右に御座候はゞ一寸御惠借被下度候もし又太鼓の譜計り御寫し候が御座候はゞ

横笛譜に太鼓の裏拍子まで御附置

夫にても宜しく候以上

廿七日　　　大星

山田兄足下

〔六四二〕 山田兵衛に贈る

安政三年四月十六日

昨年も當年もさき始め候より殘花に及び候迄は大凡廿日ばかり

洛神賦

御手誨拜見如仰追日夏色相催候處御屏居中愈御碍も無御座沃慰此事に御座候爰許之事預御存問毎度辱奉謝候不相替いづれも頑健罷在候間幸御放念可被下候高想の通園櫻も最早散過ぎ申候乍去昨年も當年もさき始め候より殘花に及び候迄は大凡廿日ばかりに御座候夫故に或は風或は月其變態も亦限りなく候を俗紛の纒も無之飽まで賞觀候事是又人閒の淸福と獨喜候事に御座候御一咲可被下候偖又被寄思食御手製之艾糕御惠投被下嗜好之品別して辱奉銘謝候乍憚兩尊前へも可然御致謝被下度候洛神賦之事御尋に候全篇は文選中に有之候獻之のも定てはじめは其全篇にて可有之候所今世傳り候は皆其殘缺にて可惜事に御座候將過日は太鼓之譜御借與被下奉謝候則乍序返璧御收納可被下候先

は賜もの丶御禮答のみ草々頓首

十六日　星

蕗庵兄几下

安政三年四月

〔六四三〕　村上誠之丞に贈る

久布御音耗も無御座候此地とても四林新綠追々夏色に相成申候其表は定て薄暑を催し候程に可有之と存候御家内總じて御障も無御座候歟爰許不相變無事に候間幸御放念可被下候浦町にても至極御安健のよし御安心可被成候偖正月中陣學號令手註致送上候以後一向御便無之候に付無心許其後一封差出候所其御返報も無御座候いかなる事かと心頭に掛り候故又々御安否承度旁得貴意候事に御座候陣學號令書注し上げ候は正月下旬蟻川舍弟出府之節に候其後一封差出し候は三月初にても候ひしかと存候陣學號令未だ御手に入らず候はゞ蟻川の方御詮議可被下候廣右衞門と申飛脚出府の節も一書差出し候是も蟻川へ賴置候よしに御座候御返事は此以後總て外へ御出し被下候より浦町への御狀

安世義も屢不埒の筋有之

中御封じこみ被遣被下候方に被成可被下候安世義も屢不埒の筋有之最夫等の事に依てには候へども春來も引籠り居り此方へ出入も其以來出來かね候次第にて心術も甚宜しからぬ事ども有之候開某方への御狀同人名前にて御出し被下候事暫く御見合可被下候將又其後の書中にも認め候通此間御あつらへの洋銃の義も同じくは去年荷蘭獻上の形に被成候方可然其表にて右圖面御仕立御送御座候はゞいか樣にも出來はか取候樣致し方有之候と存候先年此地にて致

庄三郎と申鐵砲師の弟子

世話候庄三郞と申鐵砲師の弟子に致し候者其表へも暫出居諸方あるき修業候て去冬の地震にて命をひろひ此方へ罷歸り候者近日家業始め候に就ては用向申付られ度とて手見せの品持參候右のものにても某口授候て造らせ候はゞ可也行屆き可申存候數挺の事に付手を御分け候て御申越し候はゞ早く埒あき可申と存候御序に西山の方へも其事御申遣し被成可然候安世事は此方出入も出來難き次第に付夫等の事被仰遣候も先御無用に被成候方と存じ候事に御座候段々不埒の筋有之兎ても家名相續之事無覺束存じ候より當人は隱居いたさせ藤三郎家督に致し候か又は上向次第醫者の家に付家業出來候者に無之候ては

家督に相成かね候様子に候へば無餘義他より養子にても致し候はねば叶ひ不申其仕議に候間此方への御書狀等も同人名にては御見合被下度と申に御座候此書屆き次第是迄の一二書御落手の有無乍御手數貴報被下度候近日島津より（島津は砲術の門弟島津文三郎）も內書有之候所其表大陣演習も候所大分無規則不出來の趣申來り候いかなる次第歟委しく承度ものに御座候川勝殿（川勝は砲術の門弟川勝丹波守）も敎授方へ出役と申事も一寸見え候是もいかなる筋にて候や是又御承知だけの事御聞かせ可被下候長崎へも異船渡來天草島へも上陸候など風聞有之候是又被及御聞候事密々御報聞被下度候先草々申縮候時氣折角御保護所祈に御座候以上

大星

村上友弟足下

（此の手簡は六三八號手簡に對する返書なれども年代順により此處に插入したり）

勝麟太郎より先生に贈る

安政三年五月六日

先達は寸楮拜呈仕候處御懇篤の御返書被成下拜讀先以追日薄暑相催候所益御淸祥被成御座重々奉賀候從是は多忙に取紛每々御無音不本意之至御座候傳習之學術も兎角存候程果行不申右故未だ歸府之處も難と相知不申候得共一と渡りは見通も相附候上は實地之處研究いたし候樣相成候はゞ箇成航海

詳證術之御說難有一々御尤至極

も相出來可申哉何分蘭書讀候者少く候間誤傳多くこれには困り申候學科之内にても數學は天文方之者兩人スチュールキュント丈け之處は會得仕候元來彼の算と申者も極之處我との差別格別に違ひ候ものにも無之事故算學出來候者は會得早く參り申候義に御座候小子輩無算之者は算より入候事にて甚困難に御座候此節大方は覺申候何分困難致し候程面白無之事に御座候詳證術之御說難有一々御尤至極と奉存候

教頭へ此節は築城之事承り申候兎角能き書籍無御座候由にてはきといたし候事も無之乍去隨分新聞も御座候事に候ソムメルの事承り申候ひしが別段これぞと申ものも心得不申赴に御座候同人はシケーナチュールの學は左のみ得意之樣子には無之此二學は在留之外科ハン、デル、ブルックと申者博覽に御座候少々承り度と存候へども他の學術に相追れ暇無之其上隨意に出會と申譯にも參難き意味合にて困り申候これ等はいまだ頑成る事多一時にゆるまり申といふ場合に到り難くまた其上蘭人共之うちにも嫌忌甚敷有之中には可笑事共多く彼邦學校に向き入塾等いたし候樣成り不申候ては何事も早くひらけ候事には參り難く哉と此節に到り歎息之事共多く御座候

過日も蘭書之事被仰下畏り候書物は兎角拂底私など此地にて拜借いたし居

候分なども此節にいたり江戸へ御取戻し相成困り申候蘭人共も書をかし候は兎角嫌ひ申候其上格別之ものも所持不致書には甚差支居申候當秋の入津を相待居申候此時に至り候はゞ少は被得可申其節迄御待可被下候必らず心掛何ぞ取入差出可申御注文之書は如何哉澤山齋候とは申候へ共多く江戸へ御引上に相成可申事哉と相考居候

土地に殘り居候もの無益之書而已諸侯達譯官町年寄抔に出入之者有之候故右へ手を入れ置宜敷ものはいづ方へか失ひ申候稀に右をもれ候ものは高價江戸之二三倍に至り申候

鐵の扱ひ

鐵の扱ひ普通に開け不申候てはと申御説御尤之御義既に昨年ホークヲーへン取寄不申候ては叶ひ難き事といふ説被行御誂に相成申候當秋は多分參り不申候御説之フレットモーレンも韮山へ相廻り□行違一見不仕殘念之事に御座候是も數御取寄に相成候樣いたし度と頻申出置候

レグレメントエキセルシチー之ニーウなるもの蘭人は持居候哉一向見せ不申大方は是迄之書にて教へ申候其内マリネ之エキセルシチー之書有之右之内二ケ條抄錄差上申候陸にては矢張パトリーへフーチーを結付置申候事と申聞候しかしながら多分此節はマリネ一同に相成居可申と蘭人共は申居候

フートマートは三歩二越爾と申候得共少々狭き方に御座候一分時百〇六歩
七十六歩のものは喪禮之節ならでは用不申と云
今日之便は急便にて俄に出候事故とりあへず申上候餘は又々可申上隨分時
候御厭專一奉願候以上

五月六日　　　　　　　麟太郎

象山先生　榻下

猶々バロメートル之類は甚拂底に御座候これも秋之入津には參り可申哉
既に御船付一ツにてかけ替一無之テルモメートルは隨分□渡御座候由故
心掛取出し可申候オロ、ギーフェール幸一條とゝのへ置候もの御座候間呈
し申候御用達候はゞ大慶奉存候
デッケルを辨駁いたし候書蘭人存居不申私此節讀居候ケレイクスキュンデミュ
ルケン之著八百四十五年之板なるもの蘭人もよろしき趣申居候(以下裂け
てなし)

安政三年五月十日

〔六四四〕 和田隼之助に贈る

愈御障無御座珍重奉存候然ば去月卅日北山の事に付御來談被下猶又朔日二日

の內分聞にても御遣はし能々御相談被下候樣御申被成候所右兩日何の御沙汰も無之さらば三日には必ずと存じ相待候へども參られず四日五日は佳節にて御取込も可有御座候夫過ぎ候はゞ定てと日々其心にて待居候所もはや當月も十日に相成候へども一向に何の御沙汰も無之候事近頃不審に存じ候事に御座候かねても申通延々に相成候へば夫丈に祟りも御座候事彼家の爲しかるまじき事に付御相談遲延に及び候はぬ樣に被成下度候精々致教戒候ても夫に從ひ候はぬ時には妻は出し子は放つと申定に候へば彼は甥にて候へども教戒に背き始末に成かね候時は致義絕候より外無之一旦に左樣致し候事は何の手數も無之事に候へども某左樣致し候時には彼の身に取り外に嚴父兄とても無之候へば北山の家名斷滅に及び候はん事端明に可有之候左樣相成候ても姉の一身の事は引受候て兎に角も致し候心得申迄も無之候へども眼前姉の子のやがて家名をも喪ひ候はんと申をおのれの身を潔く致し候はんが爲に義絕致し候こともかかる樣屛居致し居候てもよそに見捨候事人情といひ義理といひ出來かね候事故にあちらこちら心を勞し及御相談候事に御座候過日も每々得貴意候通り

某に於ては其者を廢し候て……家名相續致させ

尊長の教戒を用ひず父祖の本業を怠り飲酒に耽り母親の養をも顧みず候者某に於ては其者を廢し候て別に相應のものを以て家名相續致させ候の外無之依て此事親類より御用番迄申出で家名相續の所を何分も可然外に歎願申度と存候事に御座候乍然當節彼の身上に見所有之家名相續の事に於ては氣遣ひ無之と請合候仁有之候はゞ夫こそ誠に此上も無之次第某に於て一言も不申萬端其仁に任せ申度候尤も萬端其仁に任せ候に付候ても後來の所に心懸りの事有之候へば彼と義絶の義は御重役衆迄申達し宜敷と存居候前條の心得に付過日及御相談候筋御同意に候はゞ歎願の次第等も宜しく被仰合被下度若又御不同意に御座候はゞ夫も不及是非候間其次第を併せ某親類より可申出候樣御挨拶被仰下樣致し度如此に御座候

松代町　長谷川五作氏藏

〔六四五〕　依田源之丞に贈る

安政三年五月十三日（令兄は源之丞の實兄長谷川甚大夫にて當時江戸に在り）

附白令兄へ其以來御無沙汰のみ仕候其段も乍憚宜しく奉願候以上

愈御多祥珍重奉慶候然ば近日伴之助罷歸り候節代官町令兄より御傳言被下千

書簡 聚遠樓時代 （六四五）依田源之丞宛

萬奉謝候右之御挨拶得貴意度候所此節柄故貴君まで御頼申候御序に乍御手數左之趣宜く御申上可被下候先年礮學圖編と申もの藏板に致し門下へ差遣し門下ならざる人へも懇望候仁へは差越し候て一昨年此表へ引籠り候に付其仕立置候本拾部餘岡本氏へ相賴み置候所通價是まで一部に付金壹圓三方宛にていづ方へも遣し候義に御座候へども近來同じ似寄の書拵へ候ものも候て手輕に取調候故私方のも價引下げ壹圓位にも致し候はゞ望人も多かるべく其方都合にも可相成やに岡本氏並に令兄も被思召被下候よしにて其事件之助へ御傳言に御座候然る所右藏板の事は元來利を求め候爲に致し候には無之西洋礮術に付世上杜撰の徒多く後輩を誤り候事共少からず候を見るに忍びず實用專に原本に少しも誤り候はぬ樣に諸圖の校合にも盡く念入筆者等をも致吟味有名の書家を賴候て仕立候て費も存外多くかゝり候に付代價をも相當に相定め候事に御座候只今殘り居候本とても最初一同に摺らせ候本にて摺あしく候と申にも無之板あしく成り候と申にも無之仕立粗相と申にも無之右を世間に廉價の書有之候に付賣れ方のよく成候が爲に價を減じ候と申候ては始めより利の爲

に脩へ候者同樣に相聞ゑ且是迄相當之價を受け遺し候諸人へ對し濟ぬ事に相成候に付たとひ夫が爲に一部望み手無之候とても苦しからず唯同じ本にて最初と其後と價を二つに致し候など申事世間にて唱へられ候ては象山是迄の志操に差障候義に付難致候右に付思食被付被下候所は千万感佩仕候へども何分教の如く仕かね候此段乍憚然るべく被仰越被下度奉冀候萬々所仰御座候以上

五月十三日

柄糸御功者に付

猶今一條令兄へ御願被下度義御座候白の三分の刀柄糸御功者に付可然を御調被下度奉希候柄ちと長く候故大小分にても脇差二腰分にても御都合次第御見はからひ被下候て御代市被下候樣 十八九字不明 二百疋差上申候宜しく奉賴候以上

〔六四六〕　關口紋右衞門に贈る

安政三年五月廿三日

追日暑氣に相成候へども彌御安健被成御起居珍重奉慶候然者安世義に付春中より得拜面御內話申度候所此節柄罷出候事勿論不相叶御招き申候にも早速の

事に至りかね慊然之至奉存候乍去御家中一軒の家名廢興にも預り候程の事に

安世家事の義

就き申立候はゞ子細も無之相調ひ可申と存じ親類を以て貴君御招き安世家事の義御相談申度と申立候へども存外不相成趣御用番差圖有之其日は慥四月三日と覺候左様有之候上は貴君へも和田を以て御内談申候より外無之と存じ候て同氏へ北山の事に付差掛り面談申度一寸出向き呉候様申遣し候所是も不快と申事にて幾日立ち候ても參り呉不申内々承候へば宅の普請致し候に其場へ出で手傳も致し當番にも引き不申と申事故依田源之丞など相賴み態々申遣し候事も候へども達て不快と申聞け漸去月廿八日に及び參候に付段々の次第相談貴君へも宜しく御内話申兎も角も早速挨拶承度と申候所夫より直に貴宅へ罷出候はんとて引取卅日に又々罷越し貴君にもいづれ御勘辨之上ならでは御挨拶に被及兼候と御申被下候趣自分にも同樣の事と申罷歸り申候

安世不埒の義は

抑安世不埒の義は昨年以來某の教戒をも不相用本業を懈り剰へ酒を好み參り候程のものへ酒を出し酒宴がましきことに日をつぶし夫が爲に餘勢の財を費し申候さなきだに不勝手借財多にて是非とも治療相勵み夫にて一と旗揚げ候はねば暮し

去十一月九日姉一同呼よせ

方にも差支候程の事に候を家業を怠り頼みに參り候所へも氣にむき候はねば出向き不申朝藥取りに參り候者有之候ても朝寢致し居り後に參り候樣申し後刻參り候ても猶臥り居今少し過ぎて參り候へと申樣の事有之酒をば人の顏を見次第に甚前よりも相始め候次第以ての外の事と度々戒め候ても用ひ不申某屛居致し居候を幸とし候かの樣にて一切改心の樣子も見え不申結句日々に長過候やの樣に承候に付去十一月九日姉一同呼よせ深く相責め候所其節は恐入候體にて向後は如何樣にも改心酒をもやめ家業を相勵み可申候間致勘辨呉候樣詫候に付勘辨は仕候へども餘り度々の事に付念の爲に規定の一紙認差出し候樣申候て一紙取置候義に御座候（是は過日隼之助より入御覽候事と奉存候）然る所程もたち候はぬ間にもはや其書付に迄致し候斷酒を破り時々相用ひ候樣子にて遂に夫が爲に療用の事に大瑕瑾など候よし承候故當正月九日か又々姉一同呼寄せ責め候所其節は不當の義を申し姉の致し方あしく候故兎ても家は安全に保ち難く一人愼み居り候てもつまらぬ義に付破れかぶれに酒も給べ候趣申候に付以の外の事と相叱り親のあしく候はゞ增々おのれの身を正し誠意を以て感動候樣に致し

候てこそ人の子たる道も立ち可申此事は兼て書をも讀せ敎へ置き候事に候然るを親あしくとて破れかぶれに酒を給べ家の亡ぶるを待ち候など人倫にあるまじき事と申候所聊か悔悟の樣子も無之別に家督の人を擇み呉候樣にと迄申て袖を拂て引取候其以來數日相立候ても詫言申にも無之一切某方へ立入不申夫にては濟まぬ事と老母よりは內々申心付候事も御座候かに候得共少しも取用ひ不申餘り心得違の事に付別人に異見にても加へもらひ度候所某方御存知の通りの次第にて懇意の人とても出入の事相叶ひ不申近親と申候ても彼家には和田のみの事に候へども是も御案內の通りの人物にて既に去冬安世斷酒之事話に及び共々に戒め呉候樣申置き候所冬中も內々にては安世一同酒をも給べ候樣子又當春は元日の夜よりして安世方へ參態々酒を買はせ飮候事等有之程の義に付兎ても親切の談話に及び假りにも彼れへ敎戒の事など申し得べき人物に無之親にも師匠にも外にこれなき某の申候をたに用ひ候はぬ程のもの隼之助輩の申候事何しに取用ひ候はん畢竟是等へ話に及び候も不用の事と存知し話も致し不申唯立田老人のみは御醫師の筆頭にも有之且は年齢と申し某

和田（安世の姉りう和田隼之助に嫁す）

の教戒の及ばざる所を補ひ彼へ異見を施し呉候人此人に限り候と存候故某不快に付て診察を頼候趣に取拵へ及内話候所是も氣の毒に思ひ被呉何とか力を盡し候はんとて宅へ呼寄せ異見致し當人心底相改め某の教戒を守らず候ては濟み不申と申事申被呉候所聢と改心可申とも不申答其後は立田氏より手紙を以て呼に被越候ても不快と號し參り不申剰へ立田の門前を通りながら立寄不申候に至り立田氏も手に及ばずと見限り被呉候樣子にて某方へ斷りの手紙被遣候（是も和年より御目にかけ候事と奉存候）親とも師匠とものの某申候ても形の如く又立田氏筆頭の場年齡を以て申被呉候ても右の次第に有之此上は力及ばず彼家の親戚相談の上當人を廢し相應のものを以て養子にても致し家に疵つけ候はぬ樣に致し候の外有之まじく弟藤三郎も有之候へども是は幼年より武藝を好み醫者をば嫌ひ候て聊も醫學仕らず候へば兄の家督引受候ても御醫師の御用には難相立御醫者の家業をやめ御奉公申候へば御徒士に御引下げ御座候なども承居候へば是もいかゞのものと存じいづれにも家業の出來候ものを擇み養子候より外有之まじく夫も是も當人心得宜しからず家業を怠り行く／＼家名を喪ひ候は

んだけの事申立候て上の御仁計を奉歎願候より外無之と某に於ては稍決心和田を以て御相談に及び候義に御座候然る所當六日には思召の所和田迄被仰遣右御手紙も十日迄承知致し不申唯餘り延々に相成候事と心得別紙一印案之通り隼之助迄申遣し候所其夜姪罷越し御手紙をも持參始めて其節拜見仕御親切の御事親戚の情誼かくこそ有之度事誠に感じ入候事とて老母一同感泣候迄に辱奉存候義に御座候然る所隼之助に於ては右御同意と申にも無之唯早速挨拶出來兼候とばかり姪へも申越し候に付又々品をわけ候て姪へ傳言申遣し候は關口殿存念尤に付いか樣とも同氏と申談じ當人改心向後某の敎戒をも堅く相守り内外嚴敷飮酒を禁じ家業專ら勵み候樣致させ可申候間上へ申出候所は暫く見合せ吳候樣にとか又は關口氏存念の外に別に存念有之此子細故に上へ申出候義某と同意致しかね候とか又は某と始終同意に付某存意丈の事御重役衆迄申出候はんとか右三條いづれ也とも聊か無伏藏挨拶有之候樣致し度と申遣し候所其翌日二印之通姪より申遣し候箇樣の事の往復女の手に任せ可申義も無之候故其返事も委細申遣しいづれにも隼之助より兎も角も挨拶候樣申遣し

翌日右挨拶取に遣し候所不當の口答に付尙又十三日三印下案の通申遣し候其節も即答出來かね候趣にて十五日に及び四印の返事有之候所趣意柄一向分り不申に付十六日又々五印之通り申越し候然る所是より挨拶と申事にて三日過ぎ候へども返事無之右に付其返事取に使遣し候所同じく返事未だ出來不申と申事故續て三日使差越し候へどもいつも同樣の口答に付昨廿二日家來差遣し申斷り候には十六日以來七日に及び其間度々人差遣し候へども有無之挨拶無之候は挨拶せられぬ事と被存候間以來人は遣し不申と申候事に御座候隼之助事右之通り不心得の者にて元來安世酒の義も隼之助が爲に半は破れ候次第十六日以來も安世方迄は參り候て酒宴に及び候趣に相聞え候安世不勝手の事もかね〳〵知れ候事に候へば某の申迄も無之當人酒給候ては若年の者家業の怠にも自然と相成候譯又自身參り候度每に酒を出させ候ては無益の失費をもかけ候事と申位は勘辨も可有之候の所一切右等の考は無之義と被存候を見ても隼之助樣のものにては共々彼家を破り候ばかりにて當人身の爲家の爲に成り候計らひは出來兼候事と被存候此上は貴君隼之助迄被仰越候思召も御座候へ

ばたとひ御一人ぎりにても當人へ聢と改心仕候樣の御手段被下度奉冀候より外無御座候隼之助義は形の如きものに付貴君へ御直談仕候はねば事體も分り不申某他へ文通の事嚴しく差留も御座候事に御座候へども近親之上容易ならざる義に付禁を破て及此事候義に御座候心事幸に御炤諒被下當人改心悔悟も仕候樣御手段御座候はゞ何分可然奉萬祈候某に於ては往に見限り候ものゝ義に御座候へども手を替へ品を替へ何とか人にも被成下度御親切之思召和田への御文通中拜見感佩仕候より此事申上候義に御座候隼之助存寄違此相談に及び兼候所は別紙五通にて御承知被下度掛御目候上可申出とは存じ候へどもかく貴君迄申上候上は貴君より御挨拶御座候迄は相扣候心得に御座候當人も早春以來引籠り居り家業も行はれ不申誠につまらぬ心得只今に人參り候へばよく酒をば出し候樣子去りとは解しかね候ものに御座候何卒乍御厄介御猶豫不被下速に御療治被下候樣偏に奉希候書不盡意千萬御諒察所仰に御座候以上

五月廿三日　修理

紋右衛門樣　極内用

安政三年五月廿六日か

裝劍奇賞八丘椿

〔六四七〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

梅候能く快晴致し候乍去兎角不揃之氣溫に御座候御與居愈御安佳に御座候歟然ば近頃御無心に御座候何か織もの革類の古き模樣を集め候裝劍奇賞八丘椿のたぐひ御所藏御座候はゞ暫時御惠借被下度奉希候將此幅は御目にかけ候事有之候ひしや久しく玉川氏に借し置き出府前取戻し候に付御慰に持せ上げ候餘程覇氣有之書にて異樣に候得ども詩は何人の作か風流に御座候不妨御寛覽可被下候以上

廿六日

大星

附白前條拜願之御藏本此伻に御附し被下候はゞ尤可爲感銘候以上

八田令友几下

安政三年夏

小照の義に付御厄介筋來願

〔六四八〕 立田樂水に贈る

長野市 近山與五郎氏藏

只今は細々蒙御誨答且化石前記御附還難有奉存候偖又々小照之義に付御厄介

筋奉願候處容易に御許諾是亦奉感銘候圓相内云々の義も蒙仰候所左なくたゞ胸のあたりより上を寫し申度候差上候絹の格好にては小照の頂より壹尺三寸程の大にて丁度宜しき樣に存じ候ひき此義も御序に女史へ御話し可被成下候

（女史へ御話）

以上

卽刻

春來山水畫に題し候詩一首有之候呈覽取御一粲候

欲託守徽猗。永釋塵累紛。幽獨踰林扃。靜披玉笈文。
山中新雨足。林外夕陽曛。多謝同道友。翛然破溪雲。

梧盦先生　臺下　　大星拜

〔六四九〕　村上誠之丞に贈る

（安政三年六月廿二日）

久々御動靜をも承らず候炎熱之時節御母堂樣御始愈御輕安に御座候歟御近況委しく承度候爰許依舊無異に候間幸に御省念可被下候然ば蟻川生歸府之節生義は外ならず候に就き一書相託し著府次第篤弟に相屆け候はんと申約束にて

（蟻川生歸府之節）

候定て期の如く相達し候義と存候が如何や其節インハンテリーヱキセルシチーブラーテンの事木村軍太の本を以て御寫させ被下候樣御賴申入右寫料に御用被下候樣に銀子をも送上候所其以來有無之命を得ず候萬一未だ御落手も不被下候はゞ蟻川の方御尋被下度候其節之書中にも得貴意候通所藏の品紛失候に付御手數相願候義に付乍御厄介何分も御賴申候今一事御無心申度候は此節

蕃書調所へ御出役マーリン詞書一部

蕃書調所へ御出役と申事に候へば蕃書之事は定て御手廣と被相察候右に就きマーリン詞書一部御代市被下度冀候格別ニーウエに無之候て宜しく第五版位に候はゞ隨分可然と存候此節右五版位にて通價何ばかりのものや內々先御報聞被下度候當秋は蕃舶も定て多分之書を齎來可申左候はゞ自然と書價も故に復し手にも入り易かるべくと存じ候まゝ此相談申置候御含置可被下候當時のマーリン價は何程位や是も御聞せ被下度候先頃より暑中御見舞ながら得貴意度と存じ居候處飛脚宰領之內腹心の者に出府無之右故乍存延引致し候然る所明曉便有之候趣俄に承り草々如此に御座候此品乍粗末時候御見舞の印迄に掛御目候御哂留可被下候浦町にても定て御健在と奉存候一寸御左右承候て此書

をも認め度存候所荷物仕舞も急ぎ候と申事故不任心底候尤も浦町よりも時々御便御座候事と存候殘炎尙熾に御座候御自玉所祈に御座候餘期後音

六月二十二日　大星

村上賢弟

附白當春三村此地へ參られ候節委細御傳言をも相傳へ且御交通の事に就ては三村存念をも申候て一切無之樣致し候と申事も具に承り申候然る所他の門人朋友は勿論文通等あるべき樣もなく候へども父子兄弟甥舅の間に於ては必しも三村の說の如くならず候て宜しき事と存候其故は親戚にて候へば兄弟の親に無之候ても屏居へ相見舞說話應對も致し候事に候左候へばよしや此方より通問を缺き候とも其御方より御通問被下に於て何の御遠慮も無之事と存候又此方より何か所用之義得貴意候とも右を其儘他へ御泄し被下候はゞこそあしくも候はんなれども御家內限に被成被下候はゞ是又近親の間は罪も有之まじくと奉存候貴意には如何被思召候や（三村晴山）

父子兄弟甥舅の間に於ても必しも三村の說の如くならずして宜しき事と存候

一其表も又々繁華に成り近來は洋銃調練など人數も大分引け候と申噂に御座

候蕃學所などの様子如何に候や御聞かせ可被下候下田へ洋船渡來類船を待つけ候上にて申出すべき筋有之候など申事も候よしに風說有之候虛實如何や福山侯御大病など申噂も有之候是又如何や

（安政三年六月廿六日か）

〔六五〇〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

（裝劍奇賞七本古今名物類聚二本名物切手鑑二帖御示借被下）

（當年新に漬け置かせ候櫻子少々）

過刻は拜借ものゝ事得貴意候所御細答被下又御專伻裝劍奇賞七本古今名物類聚二本名物切手鑑二帖御示借被下殊に又遠來之良菓一箱荷御寄贈重疊感戴不知所謝奉存候わけて此日永の時分數日之淸供に充て可申返〱辱奉多謝候御移に何か御目にかけ度候所寒厨何等之品も無之不珍候へども當年新に漬け置かせ候櫻子少々差上申候御一咲可被下候以上

廿六日　　大星拜復

八田仁兄足下

（安政三年七月十日）

〔六五一〕勝麟太郎に贈る

四月廿四日五月六日之御兩函相達し拜見仕候先以尊體倍御萬祥にて諸學科御修行被爲在候との御事慰沃之至奉敬慶候先頃は御不快など申風聞承り甚奉氣遣相窺候へば御勉强御過度にて御上氣强く御耳など鳴り候て御迷惑御座候所此節はすき〳〵御全快のよし降心無此上奉存候兎に角萬事之根元にて候へば隨分御心を被用御起居御飮食總じて御保愼に不可過奉存候偖又江府御留守宅にても暑時被爲替候御事もいらせられず候よし奉賀上候賤家にてもいづれも頑健乍憚御省念可被成下候

一、廿四日御書中是より奉願候ブックメートル等の義御承知之趣蒙仰難有奉多謝候其地も測器類は拂底にて囊佩六圓儀百金にていづ方へか片付候よし景氣想像するに足り申候右樣法外之高價にては力及ばず相當の價に候はゞ何とか手段主人家へねだり候て也藏有仕度奉存候ブックの義是又同樣御含置可被成下候

測器類は拂底にて

一、時下御修業之御日課御記し蒙御示及難有拜見仕候是にてこそ其地へ態々被爲入候詮も御座候御事と奉欽羨候

一、御傳習の學術も思食通りには御捗かね候との事是は御尤に奉存候何藝何術

に依らず兎角積累を以てし候事に無之候ては根蔕淺く實地に施こし其用乏しき様に被存候其思食通りに參らずと被仰候所けく頼母しく被存候事に御座候但し其開洋客氣うけ宜しからず候處より御迷惑筋も御座候歟のよし是は何とぞ御辨明御座候て其弊の根本を御除き被成候様奉存候諺にも一利を興し候は一害を除くにしかずと申し是等の弊害除け候はぬ間は本邦の學藝技術歐墨諸州に肩を比し候事難出來事と奉存候朝廷にて此所御合點參り候様相成候はゞ天下幸甚に奉存候

歐墨諸州に肩を比し

一、此邦にては兎ても十分之御修業御出來かね被成候に付哇巴へ御留學の事御願御座候趣誠に不朽の御壯圖と感嘆且奉健羨候此義は某兼々著眼罷在候所にて畢竟罪譴を負ひ候も此所見よりの事に御座候いづれにも歐墨諸州の如く諸學術を明かに致し候はんとには其州へ留學又は差遣又彼州よりも師範のもの被召呼天下普通に其諸科を御開き御座候様に無之候ては遂に行屆き申まじく候漢土の文字の只今可也にも行れ諸技巧も可也かの邦に恥ぢ候はぬ様相成候は全く先皇の是より時々學生をも彼土へ被遣文籍は勿論女工の事に至るまで

も御心にかけさせおはしまし西蕃より女工を貢せしめられ候等の事年久しく有之候故に御座候へば當時も何とぞ其所に思召つかれ偏執と不明との弊を破て速に國是の定り候樣有御座度奉存候此事を慨嘆し候て去々年獄中に於て著はし候賦中にも昔聖皇之樂靈兮、瞷西隣（指隋唐）而不畫、暨呉女之綺巧兮、豈維鳩夫典籍、後后承而祇敬兮、庶丕變而熙恬、非王道之無偏兮、胡瞻文明之而今、と仕候事に御座候萬國既に諸藝にかしこく成り候時節に此邦のみ孩童に侔しく每々輕侮を受候事に候へばかの所謂七年の疾に三年の艾を求め候如く此節より實功を收め候樣に仕度ものに御座候其事一日早く候へば一日丈の功有之一月早く候へば一月丈の功有之一年早く候へば一年丈の功御座候へば少しく早く急ぎ申度奉存候速に其功を收め候樣には兔に角偏執不明の大弊を除き候にあらざれば屆かざる樣に被存候其偏執不明とも多くは皆漢學者流に有之候樣に候其偏執の起りは西洋學盛に被行候はゞ漢學其壓倒を受け自家嘗て學び候所の說立ちかね候はんことを恐れ候より偏執媢嫉の念を生じ種々誣妄の說を唱へ廊廟を奉欺候も候事歟と被察候又其不明のものよりは彼方風土の違ひ習俗の同じ

盛○は○れ○は盛○に○行○は○れ○とすべきか

からざるを視てこれを異類に比し其學盛に行はれ候はゞ本邦の美俗追々これが爲に移され候はん歟を疑ひ候よりこれを沮み候事御座候樣に被存候然る所此二者共に至て淺き事どもにて既に四書六經の教を以て其道德を育ひ其道既に廣く其德既に崇く候時は何等のもの有之候て壓倒し申すべき他の壓倒を受け候と申ものは畢竟其修むる所の道德未だ至らざる故の事に候へば自然も其懸念有之候はゞます〳〵其德を脩め其道を弘め候樣有之度身みづから其道德を修めずして他の學術技藝を媢嫉候は抑陋劣の限りと被存候扨又彼方の學盛に行はれ候はゞ本邦の風俗これが爲に移され候はん歟と申も世に忠信孝弟の教法制禁令の改無之候はゞこそ其氣遣のあるまじきにも無御座候へ共既に斯く御政教も被爲屆候上の御事にて候へばいかでかさる事の御座候べき既に漢土の學は應神帝以來御取用に相成候へ共君臣の大義よりして漢土の風には流れ不申漢土にては諸姓替〴〵帝王と成り候風習にて御座候所本邦にては皇統終古天地と共に御長久に御座候て人民の欽戴奉り候事甚深き樣奉存候洋學盛はれ候とても本邦の風俗に礙るまじき事は漢學の例にてよく分り候事と被存

洋學に資し候所はもと政教の論に無之

交易の道不開候ては失費に倒れ候のみと申御考御尤

交易を以て其利を外に獲て夫を以て此費に充

候且洋學に資し候所はもと政教の論に無之唯技術器械の智巧を極め候所を採用し彼れの侮を受け候はぬ爲の備を成し候迄に候へば其益する所ありて損する所なき事益々明なる事と奉存候此事かねての持論に御座候所少しは御建議の御補にも相成り候はんかと申上候事に御座候哇巴御留學の事彌御願通に相成候へば西學の爲には誠に嚆矢とも可申尊名も長く青史を照し可申候へば御父祖樣へ被爲對候ても此上の御大孝は有御座まじく唯當節あやにく御母樣御病身に被爲入候へども御湯藥に被侍候方も候へば彼是輕重を御量り重き方に被爲就尤も以可然候しかし只今の朝廷にては御願通り御許可御座候はん事至て無覺束奉存候乍然御鼎力にて何分も被爲貫候樣所祈に御座候

一、交易の道不開候ては失費に倒れ候のみと申御考御尤に奉存候此事も某かねての定論にて既に拘繫中腹稿仕候省諐錄中にも及此事候て但し看るものをして自悟せしめんと欲し候て言をば盡し不申候其極意とする所は海防の事元來外に起り候事に候へば交易を以て其利を外に獲て夫を以て此費に充て候はんと申了簡に御座候御同案に付右一條錄し掛御目候

て候はんと申了簡（第一卷省諐録一一頁參照）

本邦金貨米粟、號爲富饒、然疆域不大、故以邦內所生之財、享邦內所爲之用、無甚有餘、乃若防海之事、則起于外者也、置防堵數百所、造大艦數百艘、鑄巨礮數千門、其費亦浩矣、而皆非永存之物、每一二十年、必待修繕改造、況外之有應接給資之用、內之有餉糧購賞之費、凡如此之類、將安取其給哉、夫劣濟困窮之家、多得賓客、屢設宴饗、則其資財空乏、卒至於不可復繼也必矣、今之時事、何以異乎是、然則其所以經理之者、何術、有志於經世者、所宜先審計、

一、永井殿御事好人物にて且英敏萬事御力を被得候よし幸の御事奉存候何事もよき同志無之候ては難濟候御協同專一と奉存候

一、唐品の入用も候はゞ御代市も可被成下と蒙仰難有奉謝候

十三經註疏 考勘 附 十三經註疏 並の本 欽定四經 三禮義疏 御纂三經

十七史 弘簡錄附 四朝別史附にても宜く候

右等の書は其地にては何程位にて手に入り可申や乍御手數便開御垂示奉仰候

一、六日御書中御傳習の學術兎角思召候程には御果行無御座候夫故御歸府の所詮と御分りかね候へども一と渡りは御見透しも被爲附此上實地の御研究御

座候はゞ可也航海も御出來可被成と被思食候段敬嘆之劇奉存候何分西書讀候もの少く誤傳多く候には御困り被成候よし是は思ひ當り候事御座候先年より其表の通事と知人と成り候も少なからず候所日用の俗事を尋ね候へばよく埒あき候へども學術邊の事に至り候ては一向の素人に等く候ひし元來ハンドルの通辯のみ專と致し候てかつて學術邊の修業無之候故其筈の事と被存候本手に致し候なれば其地にも是樣彼邦のスコールに倣ひスコールを幾通りも立て有之候はねば叶はざる事と奉存候算法の事歸する所我と彼との差別無之事故算學出來候ものは彼邦の算にも早く達し候との事いかさま左樣可有之候但彼邦にては一題一術皆其用有之事に候所此邦の算者は平日無益の事に骨折候樣被存候其上此邦の算術は元來漢法にして綴術の圓理を談じ候も畢竟句股に本づき方を以て圓を馭するの法に御座候西洋の八綫はこれに反して圓を以て方を馭するの術と存候清儒戴東原・焦循・阮元輩算法に於ては中西の別なしと申說に候へども某は左樣には存じ不申漢算西算の區別は以方馭圓と以圓馭方との二語にて埒あき候と持論罷在候が如何や高論御座候はゞ奉窺度候

以方馭圓と以圓馭方との二語にて埒あき候

一、教頭へ此節築城の事御質問御座候よし不堪神飛奉存候但よき書籍乏しきよし乍然築城の事は隨分古き所をも用ひ候かの樣に被存候が近日の論如何やデッケルなどはサハルトを殊の外に珍重候樣子に御座候近年ケルキウェーキかに良書御座候樣に傳聞候ひしが是又如何や愚意には本邦の城制兎に角一と度爭亂を經候はずば洋法の如き築法には相成申まじく只今の有り形小々の補綴にては行屆きかね候樣に奉存候依て本制の城よりはキュストバッテレイフェルドフルシカンシング其急務かと存候が尊意如何

一、ソンメルの事も御尋被成下候よし然る所これと申ものも心得ざる趣教頭はナチュール……シケイキュンデの類は左まで得意にも無之此二學は在留の外科醫に博覽の人有之御尋被成度事も御座候へども御本業に御追はれ御餘暇も無御座其上御隨意御出會も難相成子細も御座候て未だ御逢も無之との御事其内御出會も御座候はゞ御序に善書の名目だけも御記し置かれ其内御誨示可被成下候

一、先般申上候洋書の事其表もやはり拂底にて御拜借の分も此節に至り江府

御取戻に相成候も御座候よし洋客も書は借し候事を厭ひ候との事書物は常に座右に無之候ては間を缺き候事御座候故にも候歟いづ方も同じ人情と被察候當秋はブック澤山入津も可仕趣其節は何とか御手段を以て御代市も可被成下さの義難有何分も奉願候江府へ多く御引上げに可相成被思召候よし乍然是迄既に官庫に有之候分は左程にも相成まじき歟且臺下御引受の御分に被成下候はば事易く調ひ可申歟と奉存候さし向き候てはかねても申上候通りこれまでケレーネオールロフの書無之候に付先第一にこれを懇望仕候御紙末に被仰下候ミュルケンのケレイグスキュンデはケレーネオールロフよりストラテヂー迄に及び候ものゝよし此ミュルケンはブランドトのタクチーキを荷蘭にて譯し候人に御座候歟出版も新しく且荷蘭教頭も好書と申候趣に候へば其書御座候はゞ何分も奉願候代價は蒙仰次第赤坂御宅迄送上可仕候其外はかねて願置候通に御座候但當年頃價も不定に可有之候へば一時存念通りにも參りかね可申乍去三四十圓までは何とか手段可仕候間御含可被成下候

三四十圓までは何とか手段

一、デッケルを辨駁し候書荷蘭人心得不申候よし然る所右ミュルケン書中デッケル

不取説は何等の説に有之候や一二其目を御摘示

却て深文

の説取り不申候へば其書の事にも可有之かの旨蒙仰難有奉存候いかさま其書に可有御座候但しその不取説は何等の説に有之候や一二其目を御摘示被成下度候決して詳なる事に及ばず唯その目にて宜しく御座候爰許ケレイクスキュンデ多く無御座候に付昨秋再御沙汰を得候て人の往來も一切絶え候て殊の外に閑暇に相成候に付誠に讀書候には此上なき好時節この時を空しく過し申まじくと存候て夫よりデッケルを取て三遍くり返し通讀仕候右にて大に益を得申候右に付そのミュルケンの取り不申候所はいづれの邊の事に候やらむと其説を求め候義に御座候某などタクチーキの書外に讀み不申候て唯漢土の兵書と比較仕候所にては是も絶類の好書の樣に被存候その譯者ブーコフの駁論も往々そのノタ中に有之候へどもけく原説の方に左袒仕度ノタの説却て深文の樣に存じられ候所御座候コロンネ中開にチライルレウルを備へ候事其時其所に應じ候て至極妙法の樣に被存候所ブーコフは概してこれを取り不申候兵は活物の限りにて候へば概してこれを用ひ候と申も非なるべく候へども概して是を取らずと申も是にあらずと存じ候事に御座候但しデッケル重騎兵にてスコックを尤

も主張致し候が是等はいかゞのもの歟說の一ッにて御座候其外疑惑仕候所も少からず候に付彼土にて評判宜しき書を多讀仕一是の地を自ら求め候外有御座まじく存じ候よりブック御代市の義をも奉願候義に御座候僻地に屛居罷在候て別して益友も無之書籍の助けを求め候より外無御座候幸に御原諒可被成下候

書籍の助けを求め候より外無御座候

一、フートマートの事西人御直傳の趣蒙御洩示感銘之至奉存候但しインハンテリーのパス三分二ヱルと申事ちと不審仕候義に御座候パスと申に種々のフルシキル有之候と申事諸書に見え其三分二ヱルを一步と致し候は大銃射擲のフルヘードをはかり候事と奉存候步兵のパス精密に申候へば六十八ドイムと心得申候步兵レグレメントにパス二レイン尺と有之候は大概の說かと奉存候夫とも當時はパスとだに申候へば何かのフルシキルなしに三分二ヱルと定め候事や此定め幾年よりこの方の義や御序に敎頭へ御尋ねの上其內御垂示奉願候フートマートも一分時常法百六步七十六步のものは喪禮ならでは用ひ不申と申事是又いつの頃より改まり候事や彼方レグレメントの書にて御案內之通

步兵のパス

王家の令條に候へば其本の改まらざる限りは其法則に違ひ候をばその法則に違ひ候と致し不申候て叶はぬ事と奉存候且被仰下候百六歩と申ものはゲズウヰンテパスの常規にして常足の法には有之まじく被疑候パラデマルス（按ずるに葬式などゝも是と同じかるべし）一分時間に八十二歩にて五十五ヱルを行きゲウオーネマルスは同時間に九十五歩にて六十四ヱルを行きゲズヰンテパスは同時に百零六歩にて七十二ヱルを行きストルムパスは同時間に百二十歩にて八十二ヱルを行きパスデコウルセは同時に二百歩にして大凡百五十ヱルを行くと申事は次第詳にして慥かなる事と被存候しかるを百零六歩をのみ用ひ候て其餘を盡く廢し候事合點參らぬ事に御座候其上に段々實驗仕候にレクリユートを敎へ立て候には七十六歩と申定規難廢樣に被存候其子細は靜なる歩法をよく熟し候へば調子の進み候所は至て容易の樣に御座候兎角レクリユートの癖として歩法早く成り勝に候夫を其儘に致し置候時にはゆく〳〵種々の病を生じ候て始終の損に相成候歟と被存候依てレクレメントの定法一分時間七十六歩と申敎を立て歩法の根本を固くし候事かと竊に存じ罷在候乍去かの王家のレグレメント

此邦の人には曲尺の二尺と定め

改まり候事にも候はゞ又其所を以て推考仕度奉存候間何分も聢と御探索可被成下候尤も此邦の人は丈短く候が多く候へば六十八拇と申候の法もちと長すぎ行屆かざる様に御座候依て此邦の人には曲尺の二尺と定め夫に依てアフレツヘンの算を立て候の外有御座まじくと相考候高意如何

一、マリネのレグレメント二ケ條御抄錄御送り被成下思過半候て千萬難有奉多謝候但し風聞にはラードストックを扱ひ候時に右の方へ向ひ候なども承り候果して然るや否兎てもの御終惠にネームトハトローンより以下オップスコードルヘットゲウェールまで即ち第五パラカラーフより以下をいか様にても宜しく御座候間御門下へなりとも被仰付御抄出御惠可被成下候

一、オローヂーフェールの御代市の事奉願候所に此度一條御見當り被成候とて蒙御惠投何共恐入感佩筆謝不罄奉存候早速江府へ相廻しかけ替可申と相樂候但惜むべし外邊の二卷中途中にて損じ候義や六斷に折れ申候乍去是迄のを加へ繼ぎ候はゞ十分用立可申奉存候何ぞ右御答禮も申上度候所遠路致し方無御座候聊か御菓子料呈上仕候御叱留可被成下候先は御兩函の拜答迄極密申上候時

下秋暑千萬御自玉被遊候樣奉祈候

七月十日　　　　　大星頓首

勝　君　臺下

附啓此節は荷船入津も候て何かと御新聞もいらせられべく候書目代價等御錄し乍御煩瑣御投與被成下度奉懇願候至禱

蟻川賢之助より先生に贈る　安政三年七月

（前略）勝樣御門人並御同門之者調練御老中樣方御見置之上上覽に相成候義に付世話方より人數差出し候樣申來り兼々御約定にも御座候處筒の持樣は勿論規則等も是迄通りにて候得ば差出候旨申聞置候處其後世話方之者參り候て總て老先生より御教示御座候ひし處に改め候間差出候樣之事申來り候に付島津にも申談差出候筈に致度旨申出候其後大目付土岐丹波守樣御會被成度旨申來候に付島津岡見其外三四人並に門下の者二人同道仕候て罷出候處島津私兩人へ調練教授引受世話致候樣御賴に付勝樣御門下にて京極の御家來猪子左彌太と申者此は御留主中稽古場萬端之世話致居候義に付同人とも三人にて引受教示仕候樣其他は土岐樣御世話被下候との事に御座候偖其節

筒を右に取十一段込方に候故講武場とは相違致候樣に付彼是と利害も御座候間講武場の御規則に從ひ候樣の御話有之候所素より規則は無之此度蘭人より傳授の業へミスコールの規則を加へ教授方出役の衆編立候事の由未だ直傳にて規則疊候者も無之故長崎表より二三人歸り候毎に色々變り候事に御座候得ば何分も其所に相改候義難仕旨申出候然る所是迄の通にて側隊歟又中八隊にても別段に致し不苦候はゞ差出候樣申出候義に御座候然る所此頃川勝樣講武場御出勤之節土岐樣右之一條御賴過日會候節何とか講武場御趣意丈も申聞度存候得共何分議論高く候て一言も返答不致候て別れ候事にて甚殘念に存候得共右之始末故又々面會候ても所詮申聞兼候故川勝樣より御趣意御理解候て曲ても御規定に從ひ相改候樣御賴之由其前御目付岩瀨修理樣へ右之旨御賴御座候所島津は御出入にも候得共私事は知己にも無之事故尙又御內々川勝樣へ御賴み候よしに付共々にまげても相改吳候樣御賴有之候將又講武場之御趣意は此迄西洋砲術と唱候て教示仕候人每に相違も御座候に付此度御取極に相成候を則御規定と致し天下一統一樣に相成候樣厚き御趣意に候由にて蘭人より傳授之所レグレメントの規則に合せ彫刻に相成一統御觸達しにも可相成之由左候得ば追々是非共改め候樣との事に可相

成申且は八段手續は千八百四十八年ゼーオフヒシユールの發明にかゝり其以來海陸共に格別の利辨も有之說を立候て海軍は其法に隨ひ一變致候得共陸にはゼーに預り候オフヒシユールの發明故用ひ候者少く候由然る所此度渡來教示候オフヒシユールは四年前本國を出候てジヤワと申地に參り候所其後本國より度々文通有之長崎へ參り候ても文通有之候所八段手續の方追追盛に相成候趣いまだ規範書は出版不相成候得共不遠其法に改革可相成由にて以前有之候レグレメントに書加へ候を船中に所持致候に付原書御渡に相成候得ば直に書入候て差出可申旨仍て此表より原書御廻しに罷成候間無程書入出來相廻り可申候由左候得ば少々は據も御座候得ば追々其法用ひ候樣相成候事折柄格別之御賴抔と申義も御座候得ば何分も默止がたく候間十分の規則は無之候も手續計の事にて調練方は是迄の運動に三四ケ條增し候のみに御座候得ば此場にて速に相改候方可然哉に被存候間申合ミスコールの規則は內々私抔も拜見仕候事に御座候所格別之誤も無之被存候乍然號令は上より御差圖と申事にていかさま拙き事且原語に不相當の譯も多く第一ワールスコウングとオイトフーリングの差別も無之到て不都合千萬に御座候得共致方も無御座候次第歎息仕候(中略)然る所前文之次第に相成當時之有

様にては軍容節度等に至り不申候更に何の心得も目的もなくはやり稽古抔と名づけ致候者多く候様之事にて講武場も日々盛に出席御座候由に候只々歎かはしき事に被存候（下略）

〔六五三〕 依田源之丞に贈る

長野市　佐治木清七氏藏

安政三年七月十二日

猶々此事昨便相達し候所便り次第早く發し候はざれば不都合の事可有之と被存候依て今朝も得貴意候所御出番御留守と申に付御番所迄持せ上候何分宜しく奉頼候以上

日本全國の兵備に關係

砲術門人奥平様御家來島津文三郎より此度銃兵調練御老中様方御見置御座候に付込方を八段のに改め度と荒増取極め申遣し候然る所此事は容易ならざる次第にて日本全國の兵備に致關係其上先頃軍容等の事書付け御頼申候節も得貴意候通段々感應院様御末光に因て形の如く法則を憶に取立候手筋不穿鑿の事共にて變改等候はん事遺恨之限に付別紙之通内々心付遣し度存候先日軍容等の書付江戸表に於て被成下御伺自然難相成趣にも候はゞ此度の義も存じ留

り可申若又苦しからざる方に御指圖も御座候はゞ此度の義も同じ事に付同人方へ悴二郎名前にて也とも差遣し度奉存候此段乍御手數御用番まで御伺可被下候以上

十二日

依田賢友

〔六五三〕島津文三郎に贈る

安政三年七月

同社中銃兵調練御老中樣御見置一條又々御沙汰有之某方門派の衆一同申談罷出候に決著御座候所勝の門人は近來込方を長崎にて西洋人直傳の八段に改め尊藩等は是迄通り十一段の法則御守候に付彼是不都合の場も有之其所勝の方世話人へ御申談じ御座候所至極尤と申挨拶にて其義に付土岐丹州殿御逢被成度と申來候に付（是は勝の門人に被成候故なり）岡見蟻川諸子一同御出御逢御座候所御見置一條は凡て御相談其上にて十一段八段込方の御話に相成八段込方にも慥かなる據だに有之候はゞ改め可然候得共唯長崎表修業方より申來り候と申すまでに

て未だ原書も見不申聢と致したる證據無之候ては敎導不慥に付卒爾に改め候事は難被成依て此度御見置もやはり是まで通り十一段にて被成度と御申切御退座候處土岐樣にも當惑被致岩瀨修理殿へ談事に相成講武場へも御出席川勝殿へも貴君並に蟻川等へ能々示談（川勝縫殿助殿事某方門人也）公邊御趣意通り相改め候樣致候方可然旨川勝殿より內談有之候に付敎導の慥なる事だに有之候はゞ拜見之上兎も角もと御申被置候所原書に荷蘭人書入候御書物幷に號令等認め候書類川勝殿より廻され候約束に相成先慥なる事も分り候樣子に付八段込方に荒増改むべきに御相談有之彌々と申節には尙又仰も可被下候得ども先其事一應御聞かせ被下候とて御丁寧に被仰越淺からざる御志の程感入候よくこそ再應も原書に無之不慥なる筋にては敎導の法則難改と御申切被成候夫にてこそ根基ある門流とも可被申但川勝殿より御書物之內原書に荷蘭人書入候もの相廻り夫次第御改めも可被成との事に御座候所此事は甚子細あるべき事かと被存候かつ存付候次第も候間內々左に得貴意候抑彼邦の兵にはランドマクトとゼーマクトとの差別有之ランドマクトは即ち陸軍にて陸上の戰を學びゼーマク

トは卽ち海軍にて船上の戰を專らに學び申候此差別たゞ砲兵に有之のみならず歩兵にもやはり有之候事に候此節長崎表師範に參り居候荷蘭人は追々仄聞候にゼーマクトに屬し候ものと被察候去れば其傳授候所の八段込方にて火冠を用意（マークトフアルデフ）の號令の時に著け候は恐らくはゼーマクトの法にして是迄の陸軍の法則改まり候には有之間敷被存候一昨年横濱表にて致一見候亞墨利加船人數調練の節もいづれも火冠をば後にて著け申候是かのゼーマクトの故にも候歟と存候十一段と八段とにては一寸考候へば段數の減じ大凡四分の一と申ものに付大に便利の樣に被心得候へ共用意（フアルデフ）の段に至り十一段の方は三擧動にて照準すべく八段の方にては七擧動を經ざれば照準に至りかね候裝へ筒よりねらへの號令まで其擧動を通計候へば十一段の方卅一擧動有之八段の方廿九擧動にて其間僅に二擧動の遲速有之のみにて候偖その用意より照準までの擧動多きと少きとは一體の戰法の利害に大關係ある事と存候たとひはじめより總數の上に二擧動多く候ても用意より照準迄の擧動少き方陸地戰法には便利なる樣に被心得候夫等の事をも明細に算し候はず只管八段の段數に泥み便利とのみ

存候は未だ盡さゞる所も候はん歟又荷蘭人の書入候とても其人ゼーマクトに属し候者にて自分の學び候所丈を書入れおのれ一分の心得に致したるものに候歟も難計候得ば是また未だ信ずるに足らず候聢と是迄の陸軍調練差圖書（レグレメント）改正有之出板に相成渡來候はゞ格別唯荷蘭人書入なりと申すにて果してランドマクト歟但しはゼーマクトかの突留も無之倉卒に是迄の慥かなる法則を改められ候はん事如何あるべきや既に是迄も世間にランドマクトとゼーマクトとの差別ある事を心得候もの寡く候よりボムカノンなどをも某薩藩の爲にランドマクトの式に從て造りはじめ候迄は公邊も何方もマリネ（即ちゼーマクトのこと）の書に據りてのみ製作御座候故陸上の打方に不便を極め候事御承知の通に候小銃の事は一人の上の扱にて候得ば其利害左のみ大砲の上の如き懸隔も有之間敷候得共用意より照準までに擧動少き方陸軍上に便利なる事は彼の邦戰法の略を辨へ候ものには手易く分り候事と存候夫とも近年に至り陸軍戰法の上にも變改有之用意より照準までの擧動多く成り候ても裝法の初より二擧動を減じ候方取るべきの利多く候と申すに決著しランドマクトゼーマクト一致に致候事

もや是詳密に詮議を加へ度場と存候彼是の利害得失不穿鑿にて輕忽に改めだて致し又左様には無之候ひしとて再び初に復し候様の事有之候ては如何と存候に付川勝殿より御書物相廻り候とても御如才もあるまじく候得共ランドマクトかゼーマクトかをよく御辨別可被成候愚察には十に八九八段込方はゼーマクトの法と疑ひ存候公邊御趣意通り相改め候方可然と申談じ迄も有之候ひし趣に候得共此御趣意も右に論列致候所まで聢と御論究御座候ても相立候御趣意にや但しはゼーマクトのボムカノンを其掛りより申立有之候に任せ御製作に相成り陸地に御用ひ御座候御同様の御趣意に候歟夫等も聢と丹州殿へ御伺ひ有之度事と存候篤く御志し箇様に候所へも折角と被仰下候義に付存付候事共書付内々及拜復候是等實に細事に無之日本闔國の兵備に關係候事に付如此に御座候幸に此意を被諒社中面立候衆と宜敷御相談有之度候事

ランドマクトかゼーマクトかをよく御辨別

〔六五四〕 立田樂水に贈る

安政三年七月中旬

瑤簡拜見仕候如尊敎連日毒炎御座候所御動履倍安好沃慰之至奉存候然者御周

百合女史西施之畫卒業

上田の林醫生

潤筆料

印材動物鈕頭面を我方へ向け字を刻し候が古法

旋奉煩候百合女史西施之畫卒業に付蒙御轉附段々御手數の義千萬難有鳴謝不罄奉存候早速展觀仕候所用筆著色精緻を極め候事目を驚かし申候此畫をほしと申候は上田の林醫生に御座候差送り候はゞ定めて喜躍候はんと被存候右に付何分例の潤筆料之義御内探御誨示被成下度奉冀候孫桐畫幅も西施原幅も一同御還し慥に奉接□候何ぞ手本にも可成もの女史被望候由に候所清人の絹本一兩幅有之候ひし所一昨年の禍にて畫幀の類紛失ゆき方を知らず候只今有合せ候は何も無之候と存候見出し候はゞ御手迄差上候樣可仕候御別紙艾園の申候印材動物鈕頭面を我方へ向け字を刻し候が古法と申事根據有之事に御座候漢唐の古印土中より出で候など多く左樣と申說往々見當申候乍去蠟石印はやうやく明代に始めて世に出候ものに付是は必しも古印に擬し不申ともよき樣に被存候依て近人動物の頭上を以て印文の上とし候もあながち是に非ずとも申難く本より文房の玩物に付いづれも己の欲するに任せ可然と僕などは存居候義に御座候偶御下問御座候故存じ候丈申上候扨又御醫案二則御示及愚意も御座候はゞ申上候樣奉敬諾候とくと熟玩もし存付候義も御座候はゞ是より申

上候様可仕候家内一同女史の畫に見され居り御使相待せ恐入候先段々之拜謝迄草々申上候以上

大星拜復

靜山先生　研北

安政三年七月十七日

〔六五五〕立田樂水に贈る

御來緘拜拆仕候如仰炎熱難堪覺候右故か一兩日御外感其上御痔疾の御氣味と申御事散々奉存候尤も昨日よりは少々御快被成御座候よし先以奉降心候但此毒暑の時分千萬御保攝に不過奉存候然ば崋山の西施百合女史臨本とも正誼大夫被見度よしに付高价に附上候様容易の義則奉從命候將過日拜見仕候御醫案之義御別幅縷々御誨示奉多謝候有故無殞の義素問本病論蒙御借與候にて能く了解大慶仕候奈何は上の一字にて御句法宜く候へば何の字は御除き候方と奉存候斯須は須臾と同樣に御座候其所の數句御附簽の通にて可然奉存候さて當歸陳皮薑を去るべしと申愚考大略高案の如くに御座候凡そ香氣鼻を衝き辛苦舌を刺し候ものは皆熱を助くるの品に御座候格別の大病にて無之候へば往々

誤用候ても害なきに似候へども重症に至り候ては聯かの差誤大害と相成候事少からず候樣奉存候御醫案兩篇とも精密を極め候御論に付尙全きを奉責候心にて及此義候に御座候幸御原鑒可被成下候素問とも完趙仕候御接收奉希候草々拜復

十七日　大星拜復

龍田先生 几下

〔六五六〕羽田忠左衛門に贈る

長野市　橋本正次氏藏

安政三年七月廿日

秋暑彌御碍無御座候歟扨過日は御出產とて品々被下辱乍然每度痛入候義に御座候家內いづれも宜しく御禮得貴意度段申出候然ば御一町屋敷御口入を以て在府中隣家大川へ借し置き候所はからず此地へ引籠り候樣相成野菜萬端不自由に候に付昨春も早速取戾し度と存候處桑なども植込み有之樣子俄に取戾され候ては先方にても迷惑も可有之と存じ候て其儘致勘辨差置候所其間には存念に應せざる事等も有之候旁借遣し候事當年限りに致し申度候來春よりは此

來春よりは

方にて野菜もの等も蒔つけ度心得に候間御序に可然樣大川へ御斷り被下度御賴申候乍御厄介千萬所祈に御座候以上〔此方にて野菜もの等も蒔つけ度〕

七月廿日

佐久間脩二郎

羽田忠左衞門樣

〔六五七〕 菅鉞太郎に贈る

〔安政三年七月廿一日〕

昨便江府さる方より內々申來り候は魯西亞とトルコの戰爭も當二月中彌和睦に相成候由當節長崎へ參り居候カピタン時々申出候はロシヤとトルコの戰爭は日本の爲には天幸と可申此隙に兵備御整に相成候樣有御座度自然右戰爭和議に相成候時は英吉利必日本へ手を出し可申候間若是迄の通怠緩の御沙汰に候時は禍近きに可有之と申居候處果して近日長崎へ英船渡來魯西亞トルコ和議相調候に付ては別段改て使節を參らすべきにて候と申斷り直に出帆致し候趣江戶表へは去月廿日頃に其事聞え候かのよし旣に御承知かとも存じ候へども序に一寸報聞仕候以上

廿一日

過日蟻川生よりも內書到來候處彼表講武場の稽古なども埒なしを極め候よし殊の外致歎息申遣し候其所へ右樣の沙汰いづれ久しく安眠も出來申まじき世の中に相成可申かと被氣遣候右に付候ても本藩御武備のこと心にかゝり申候何卒吾黨にて責めては隊學陣學等の役人を仕立置度と存じ候間此事に付ても諸同志を御勵まし怠惰無之候樣被成度所祈御座候

隊學陣學等の役人を仕立置度

菅　賢友　几下　　　　　　星　拜

〔六五八〕藤岡伊織に贈る

安政三年七月廿五日か

御惠借の盆蘭

朝夕は稍涼氣を催し候愈御健勝奉賀候偖過日は御惠借の盆蘭大なる方に御引替被下此度のは花も殊の外多く別して賞玩數日相樂感荷無量奉存候然る所花も追々歇候に付御禮ながら一寸人差上候はんと存候所此節無人に候上に此旱魃にて近隣の井皆涸水し稍離れ候所より日々の用水をも汲み候樣のこと故乍存延引仕候蘭へは御咐囑の通り盆面の樣子を見はからひ候て雨水を十分に灌

花も過ぎ候跡に六七箇實を結び候

ぎ候に付其所は宜しく候所花も過ぎ候跡に六七箇實を結び候是は根葉の爲めには宜しかるまじくと存候がいかゞのものにや剪去り候がよろしく候はゞ剪去り可申又其まゝ差置き候ても苦しからぬものに候はゞ葉間に一二頭を出し候所も隨分面白く候いづれも御差圖可被下候毎度御人を煩はし恐入候へども御都合被下又々兩人御遣し被下度夫々返璧可仕候事慣れぬものにて萬一粗相致し候も如何に付御人を願候義に御座候幸に御聞濟被下度先は御禮旁如此御座候以上

百合女史に寫しもらひ候所潤筆を何様に致し可宜や

附白一事御誨示を蒙り度別幅掛御目候是を或人に被頼候て立田老に託し百合女史に寫しもらひ候所潤筆を何様に致し可宜や内探致し候に先方至て謙退潤筆のこと斷にて甚だ迷惑致し候多く遣はし候へば夫程よき事は無く候へども夫にては被頼候或人へはちと迷惑をかけ候様にて中にはさまれ至て致しにくゝ候賢友は毎々畫工へ種々の御好寄被仰付御功者に付通例の所を御教示に預り度如此に御座候何分無御伏藏御報聞被下候様奉冀候以上

廿五日

藤岡賢友 几下

〔六五九〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郞氏藏

安政三年七月廿六日か

御書恵拜見如仰秋暑只今に甚敷御座候乍去朝夕は稍金氣を覺候倍御清適之狀詳悉欣慰之至奉存候近日不快之事御傳聞被下預御存問辱奉謝候差したる義にても無之候所風邪氣にて例之痰喘を引出し三五日迷惑仕候事に御座候當年は春より其氣味は一切無之候ひし處夜中俄の涼氣に中り候義と被存候乍去此節はすきと霍然平日に復し候間幸に御放念可被下候偖は被寄思食須坂製之好菓一折御恵送被下乍例御芳情不勝感謝候不打置老少一同賞味可仕候御移に何かと存候所何も無之座右有合候粗墨二枚御盆上に入置候御一咲可被下候將拜借ものも色々長留恐入候名物切手鑑外に御書物二部乍失敬御人に附還仕候外御寶刀等は其内光來も被下候節御供の衆に附し完璧致し度先は御芳情の拜謝旁草々如斯御座候頓首

名物切手鑑外に御書物二部

念六日　大星復

八田令友几下

〔六六〇〕依田源之丞に贈る

京都帝國大學藏

安政三年七月廿八日

小銃込方の事も其後江戸表の動静を仄聞候に何分默し難き勢と存候大小砲術の事某多年の勤苦を以て俗流の訛傳を改正し隱祕の固弊を一變せしめ門派殆ど天下に普く候昨年來御老中様御見置の御沙汰御座候も其門派も廣く且業前も他と同じからざる公論も有之故と被存候是某に於て本より輕視し難き筋且其淵源を窮め候へばかねても申候通感應院様御遠識を以て西洋兵備に預り候書多分御取集め拜見をも被仰付又某の原書を集め候に差支有之候へば多分の御内借等も御許容被成下力の及び候丈書籍をも取集め研究仕候様被成下候故の事にて是則ち當今天下の急務彼國の所長を取るにしかずと申所に御眼を被爲著候故の御事と乍恐難有奉感嘆候義に御座候此節御在世にて某門派のもの別段御見置の事被爲及御聞候はゞ頗る御愉快にも被思召可被下置と御厚恩の程存出候毎に感泣罷在候事に御座候左候へば某門派をば他の俗流と相違の廉

感應院様御遠識

御厚恩の程存出候毎に感泣

（別紙添付の文は第二卷補遺の小銃裝法の事と同文なりよりて略せり）

（舍人は家老河原舍人）他日駈と致し候原書渡來の節必ず狼狽いたし

はきと相顯れ候樣致し度候所世に申す寸善尺魔とやらんにて意外の事さし起り門下にて是迄堅く相守り候法則流行の俗派に變せられ候はん兆相見え某の辨論を假り候にあらざれば救ひ難き勢有之歟に御座候仍て此開の書付別紙の通り聊か文通に紛れざる樣認め直し候苦しからざる義に御座候はゞ江戸門人まで親類又は此表門弟より差送り度奉存候箇樣に認め候へば其以前軍容節度等の事相しるし候書付同樣の義に付於江戸表御手數の段は恐入候へども同じく公邊へ御伺ひ可被成下や宜しく御勘辨被下候樣御用番にても又は最初之御掛舍人殿へにても御差出し可被下候某の料見には彼の海陸軍備の區別をも辨へずその利害得失をも心得ず輕忽に改めだて致し候俗流の徒に於ては他日駈と致し候原書渡來の節必ず狼狽いたし又再び初めに戻し候樣の事有之天下に面目を失ひ可申其節某門下のみ輕卒のふるまひなく前後一の如くに有之候はば誠に天下獨歩とも可申左候時は某一人の規模に無之則ち御家の御外體にも可然御事感應院樣御遠識も爰に至て增々相顯れ候事に御座候へば是等の意味合よく御申取可被下候以上

七月廿八日

（名を缺く）

依田賢友足下

〔六六一〕依田源之丞に贈る

松代町 山口勇雄氏藏

安政三年七月廿九日

今日もあちこちら御煩勞乍毎度奉多謝候過刻上げ候菓子御手をつけられず候ひき乍粗末令子達一時の御慰にもと持せ上げ候過刻之御禮旁草々以上

廿九日

直に蟻川賢之助へ江戸御月番より御下げ被下候様

過日の兩條（軍容の事節度の事を指す）

乍序得貴意候明日は八朔にて定て御登城可有御座候左候はゞ御都合次第舍人殿御引廻し此度の義は何分も早速御勘辨被下候様御賴可被下候江戸へ御廻し相成御伺之上苦しからざる筋に候はゞ直に蟻川賢之助へ江戸御月番より御下げ被下候様致し度此義も宜しく御賴可被下候隔地の義にてあちこち時日を移し候ては苦心も詮なき事に相成候間如此に御座候此度の義は申さば過日之兩條より事柄重く候事に付其所よく御心得被下候様御申取可被下候偖又關口へも定て御面會可有御座候何分今日御煩はし申候事宜く御申談

被下度千万所仰御座候以上

依田兄　几下　（名を缺く）

〔六六二〕依田甚兵衛に贈る

安政三年八月廿九日

廿五日其表大風雨津浪

（代官町は甚兵衛の實家長谷川氏）

去秋末蒙御沙汰候以後は別して戒懼乍存暑寒の御安否も不相伺背本意候義に御座候然る處廿五日其表大風雨津浪等の變災にて御屋敷に於ても死失怪我人多分有之候よし過刻傳聞打驚き直樣馬場町御宅まで人を走らせ御別條の有無相伺はせ候所不相分代官町へ遣し候所留守にて夜に入り又々人差出し候所代官町にて貴家にては御揃御無難のよし承知先以大安心仕候御臺場なども津浪にて皆隱れ候樣に承り新たに御引移り御座候御屋敷御住居も海へ臨み候御場所とかねて承り候故當日御臺場詰なれば勿論大變たとひ御在宅にても津浪に御逢被成候事かと存じ殊の外に心痛仕候所先々其中にて御別條無御座候と申御事誠に以て目出度奉存候依て先御無難の御悦申上度禁を破て取あえず如此に御座候乍憚政君へも宜しく御致聲奉願候しかしいかなる御都合にて御遁れ

被成候や變患の次第もあら〳〵承知仕度奉存候少しく御落付被成候所にて一寸御便願上候此方何の替り候事も無御座安全罷在候門乍憚御放念可被成下候大變の後必氣候等もくるひ可申候千万御自愛に不可過奉存候以上

八月廿九日夜　　　　恪　二　郎

甚　兵　衛　様

猶々三村澁谷蟻川岡本別條は御座なく候や一寸安否も尋ね申度候處三村氏より親切に申給り候事も御座候に付忍で其事に及ばず候御面會の節御傍に他人無之候はゞ此度の災變に付ての御傳聲可然奉冀候以上

〔六六三〕　依田源之丞に贈る

松代町　山口勇雄氏藏

安政三年九月十一日か

一兩日は一しほ寒冷を覺候御起居何の御替も無御座候歟然ば過日御用番へ御伺被下候樣御賴申候義は如何の樣子に候や此程拜話の後存じ候には御用番の有無に拘はらず赤澤殿へ御尋被下候へば端的に相分り可申と存候乍御苦勞何分宜く奉賴候偖は上げ置候風說書其餘蟻川の手紙等一先御返し被下候樣致し

度候御入用に候はゞ又々上可申少々取調べ候事も御座候に付御催促申候事に御座候以上

十一日　（名を缺く）

依田賢友

〔六六四〕片岡稚臣に贈る　埴科郡雨宮縣村　片岡三郎氏藏

安政三年九月十九日か

口上

古事記傳多日借覽

追日霜氣相加候處愈御多祥珍重之至然ば古事記傳多日借覽辱次第に御座候既に卒業は致し置き候へども中元前より家來一人ぎりに相成何かと用向も繁く

中元前より家來一人ぎりに相成

返上乍存延引に及び候今日持せ致完璧候間御査入可被下候御差支も無之候はゞ此次の卷々御惠借被下度冀候家父認め置候扇有之候まゝ御慰み迄懸御目候先年御手に入候趣に被成可被下候以上

十九日　佐久間悋二郎

片岡君

安政三年十月六日

〔六六五〕 勝麟太郎に贈る

八月十九日御認の御手函拜收倍御清健にて諸學科御精研のよし御便承り奉慰鄙懷候江府にても同じ廿五日の夜異常の颶風にて築地門跡本堂など吹倒し候程の事にて死傷も無數と傳聞仕御留守宅之御事甚無心許奉存卽便御安否奉伺候所御住居の屋根損じ候位にて總じて北堂君御始聊か御怪我等も無御座候との御事降心之至先々奉賀候御事に御座候爰許にも老少不相替瓦全罷在候間乍憚御省念可被成下候然ば近日江戶表よりの御便にて承り候へば御鶯遷被蒙仰候との御事幾久しく愛度奉慶賀候全く段々有用の事に御苦勞被成御座候故の御事と此方にても家內擧て喜躍仕候

北堂君にもさこそ御悅び被遊候はんと奉想像候態と拜賀の印まで魚價少々赤坂高館迄奉致候御一笑可被成下候偖又御學科も追々御方付當年中には御交代にも相成候はんとの御事總て御熟練と申には無御座候へども一般の御取廻丈は御會得御座候よし敬嘆之至奉存候十分の所はいづれにも彼地遊學に無之候

ては届くまじくとの御見込是はかねても申上候通り御尤至極の御事御同意奉存候近來の御新聞とて雜記一本御贈被成下毎度難有奉多謝候いづれも耳新しき事共にて得益少からず大慶仕候義に御座候但し書籍測器類積入候船海上颶風にて行方を知らずと申事扨々時節柄にはあやにくの義其分にてはかねて願置候洋書御代市之義も行届き申まじく是のみ遺憾至極奉存候乍去跡より無難にて入津にも相成候はゞ拜願之義宜く御含可被成下候昨年出版の歩兵調練書一本渡來候所裝方十二節（十一節か）にて八節にては無之候との事是は愚見と暗合竊に自喜候義に御座候都下にては例の八段に押並て改正夫を以て公邊御趣意など申候に至り候と承り海軍の法をむざと陸軍に攙入候事あるまじき事と存じ起稿候もの有之過日既に内々順子より御目にかけ候筈に御座候如何御覽被下候や高論も御座候はゞ被仰下度奉冀候歩法をも舊に復し候と御雜記中には有之候へども是は先便も愚意申上候通スコール中にてレクリユートを取立候には依然と一分時七十六歩にて一先夫を改て早めに致し候を又此節舊に復し候にては有之まじく被存候本邦の人はおほかた窮理の力薄く候故に何事も矮人の場

を觀候が如く人に從て悲哭候事を免れず候やに存候洋客より直に御傳受御座候諸學科の上にも此所には一番御心を被付候樣乍憚奉存候偖又英舶渡來云々之事一層の杞憂を增し候義に御座候其乘沉められ候番船は公邊に屬し候ものや又は肥筑二藩の內かいづれや事の起り候は其乘沉められ候ものゝ父子兄弟等より起りもし候はんかと心遣ひ候事に御座候夫等の事夫々遺漏無之候樣に御始末つき候義歟無覺束奉存候心得にも相成候間夫等後を善くするの計ひ有無御承知の御事も候はゞ御一報奉願候英人の風本邦の人を蔑視し甚惡むべき次第と申す事是必然の勢今更怪しみ候に足らず候某かねての持論に同レ力度レ德、同レ德量レ義、雖レ稱二文王之美一、亦不レ過レ云下大國畏二其力一、小國懷中其德上、無二其力一而能保二其國一者、自レ古至レ今吾未二之見一也、誰謂二王者不レ尙レ力耶、と申事に御座候夫を儒者輩眞學問を知らず天下の形勢を審かにせず萬國の情狀をも察せず外國の人をば押並て夷人など稱し外國所有の諸學科諸藝術を此邦に興し夫を以て國力を强くし候事を知らず此節迄に馴致し候事故に當時に於ては智者ありと雖も猝に雄視の略を建て候事能はず嘆はしき事に奉存候此度英人使節を參らせ候等もいかなる事

に成り行き可申歟只今の姿にては彼より如何様の事を申出候とも其申候まゝに被爲任候より外有御座まじく扨々困り果て候と申は此時節の事にて可有御座候尙色々申上度事も御座候へどもけく御學業の御邪魔に付拜答迄に是にて筆を擱き候時下折角御加愛芽出度御歸府御座候様奉祈候外他事無御座候餘在後鴻

十月六日　大星頓首

勝　君　臺下

附啓過日順子より御禮申上候夏中は吳筆廿枝御惠投被成下乍毎度感佩難有奉存候每々重寶仕候殊に一種の方細楷に宜く別して奉感銘候義に御座候乍序爰に御禮申上候以上

〔六六六〕倉田左高に贈る

安政三年十月廿二日

（十月十三日左高永醫師となり表御番醫を命ぜらる）

續て輕寒に御座候御起居倍御勝常と致想像候然ば過日は結構被蒙仰候よし傳聞幾久しく芽出度奉慶賀候早速使にても差出し可申と心には存候ひながら無

手術の事は貴兄にあらざれば行屆き申すまじく

人旁不本意御無音に打過候幸御諒恕可被成下候此品乍如何聊御怡得貴意候印迄致呈覧候御咲存所仰御座候今日馬場生罷出可申に付乍略義相賴差上候其段は御海容可被下候偖馬場罷出相願候は他義にも無之先頃迄御療治御座候伊勢町大國屋に候所追々御見離し被下候趣にて夫迄被下候煎劑も見合御書立の末藥相用ひ見候樣御敎示も御座候よしの處當人よりも某に内々容體を見せ醫案をも乞ひ申度と馬場を以て内々相賴候に付乍迷惑致承諾一見候處御見離し御座候はんと申も隨分御尤なる難物には候へども聊か異見なきにあらず心得候丈の手充致敎授遣し候所少しは效も有之候やに馬場よりも承候然る處昨今バルサックへ殊の外張り候て患者甚だ相難み候よし尤もバルンステーンの薰法炒沙の罨法スベスレイサック等法の如く手充致し候へども何分釣り痛みには迷惑致し候趣に付手術の外有之まじく依て今朝も貴兄迄罷出御賴申候樣申候所早速御承引も不被下やに承候然る所手術の事は貴兄にあらざれば行屆き申すまじく候へば何分にも御仁意を以て御足勞之上御一鍼を御勞被下度某に於て深く致懇願候最初かれより賴の節此節の如き體に無之候へば及御相談兎も

角も致し可申の所此節柄故に無餘儀療法致敎授候等御思召も可有之かに存候へども夫是時宜御堪忍被下馬場生罷出御賴申候はゞ早速御承知被下樣所仰御座候餘は生の口頭に可有之候へば草々申縮候千萬心諒

二十二日　呉　安

離山老兄　親拆

〔六六七〕　立田樂水に贈る

松代町　小山英次郎氏藏

（安政三年十二月朔か）

御誨答難有拜見仕候ちと御風氣と申御事乍然御漸快御淨髮も御座候と承り先以奉降心候時節柄折角御保護被遊候樣奉禱候偖又折節御製しのよしにて□□　夥品々御取揃蒙御投惠不打置拜味仕候所不相變別段之淸味塵腸を一洗し感戢之劇不可言宣奉存候御器ども返璧仕候御査入奉仰候將內密相願置候義云々奉多謝候一家存亡之義に係り候事に御座候間何分も御原鑒可然樣奉万祈候比照之爲相願候化石も御惠借千萬難有奉存候形狀と申光澤と申又別格と愛玩不能釋手候示し度仁も御座候間一兩日御寬假奉願候さて河中島懷古之詩電矚を汚

（內密云々は北山安世に關する事なり）

（河中島懷古の詩）

川中島へ探騎を出さゞるの明證

餘りと申せば不覺の事

し候所荷御過賞赧顔之仕合に御座候且首章之亦不㆑發㆓探騎㆒と申を御不審にて甲州方にて西條山へ廻候斥候兩度まで越後方の伏兵の爲に被撃不歸報候故妻女山へ押寄せ候所空山と相成又河中島の戰も甲州方斥候出候へども越兵既に押懸候左候へばいづれも探騎は出候と被思召候趣蒙仰是又奉謝候然處某の據と致候は甲陽軍鑑河中島戰の條に九月十日の明ぼのに信玄公廣瀨の渡かをこし八千餘りの人數にて備を立て先衆の一左右を待たまふ（先衆はうしろへ廻し候兵を云也）所に日いでて霧こと〲く消ければ輝虎一万三千の人數にていかにも近々と備たりと有之候是川中島へ探騎を出さゞるの明證と存候又その下に信玄公浦野といふ弓矢功者の侍をめし物見にこし給ふと御座候是を以て尊意には探騎出候かと被思召候やに御座候へども朝霧のまぎれに敵のちか〲と備たるを探り得ずきり晴て後に始めて見つけ候と申は餘りと申せば不覺の事後ればせに浦野とやらむに物見を申つけられ候と申も何の事か某など甚不承知に御座候かゝる無益のものみをも實にもの見を被出手落無之樣に甲州流など唱候兵學者流は申もし候はんずれども某に於ては取り不申最初の明證を以て云々案を結び

候義に御座候尚高論も候はんには幸勿吝言昨夕之拜謝旁草々申上候頓首

嘉平朔

錨村化石梅齋先生之御話にある西洋物產家セーステルと申ものゝよし申候と承り罷在候所大なる相違に御座候是はおのづから別物にて前世界のものと被存候此說甚長し拜眉を待て可申上候以上

錨村化石（第一卷文稿二八頁參照）

靜山先生　臺下

大星　拜復

〔六六八〕依田源之丞に贈る

松代町　山口勇雄氏藏

安政三年十二月十三日

昨夕も御出被下辱奉謝候餘り俄に御引取故可及御話と存候事遂失念致し候いつにても宜く候閒御出かけの御序一寸御立寄被下度奉賴候以上

十二月十三日

片井御內用にて可罷越と申御達しは有之候所只今に見え不申候是は乍御面倒今一應望月大夫へ御伺被下度候元來某の所存には賢友にても假りに御武具方助とか申ものに被仰付御內用を以て某に御申談じ新工夫の雛形先一挺

新工夫の雛

形先一挺御取立

御取立御座候樣に致し度かと存候乍去夫も御手數にて六ケしく候はゞ過日書付掛御目候所を以て京助へ申談じ一挺取立試み候樣一寸御内意にても被成下候樣仕度候唯京助へ御内用とばかり御座候て此方へ何とも無之候てはちと不都合なる事かと存候御勘辨之上望月大夫へ御内話被下候樣希候以上

大　星

依田賢友

安政四年正月十八日

〔六六九〕 山寺源大夫に贈る

一昨曉之地震

春來御動靜をも不奉伺候殘寒もとかく料峭に御座候へども御眠食何之御碍も不被成御座候歟一昨曉之地震此邊なども强しと申ながら格別之事とも存じ不申候處追々其最寄より舊宅之邊餘程甚布震ひ候やに傳聞仕候御住居向等何事も無御座候ひしや奉窺候偖拜借之下田應接記幷可不可と題し候文字一篇長々相留め寫し畢り難有奉謝候則返璧仕候御收可被成下候可不可の文字は何人の

作に御座候や御存知に御座候はゞ御誨示奉願候一應は其筋も有之歟の樣に候へども未だ眞眼を具し得ざるものゝ手に成り候ものと家父などは存じ候趣に御座候春來高作如何や御草稿も御座候はゞ拜見奉願度奉存候家父近日之小品一兩首錄し呈覽仕候御一評可被成下候御近況拜候旁草々申上候以上

十八日

題先聖像

人謂泰西之學行則孔子之敎可衰。予謂泰西之學盛而孔子之敎滋得其資。夫泰西之學藝術也。孔子之敎道德也。道德譬則食也。藝術譬則菜肉也。菜肉可以助食氣矣。孰謂可以菜肉而損其味耶。

跋龍田葵丘翁所書聚星二字

先君脩德淸靜。平心率物。嘗竊慕陳太丘之爲人。且有締交世之賢者之志。遂取續晉陽秋語。名其觀曰聚星。囑其執葵丘翁書之。然以其筆畫不滿意。而未及揭之也。頃覩諸古笥中。其字雖果如不免無有憾。而其語則先君所取。而先執書之。則亦焉可忍其敗爛而不顧哉。乃命裝工而治之。以其未有記文。始自書朱文公聚星亭銘。以附此。惟啓之躁急

激昂。常匱ニ良朋一。尤不レ可下以不レ儀ニ刑先君之盛德一。則取而揭中之於楣上。蚤夜觀覽以自省云。

懼堂先生臺下　　　　恪　再拜

安政四年正月

〔六七〇〕山寺源大夫に贈る

一昨日は細々蒙御答敎難有奉存候此間の地震其近邊果して烈しく候て御駈出し御座候節少々御脛を御痛め被成候との御事驚入奉存候尤も格別の御怪我とも不奉存候へどももはや御平癒御座候ひしや否御容子奉伺度候石炭說の義承知仕候ざつと心得候丈かき加へ返璧仕候過日申上候通此原書は餘程古きものに御座候其說をも標注仕置候間御覽可被下候華嶽精享昭應碑御示及いかさま是は是迄も一兩度見かけ候ものにて御座候唐隷にても是等翹楚とも可申候世人大智の碑を稱し候へ共大智の碑よりは此方漢に近く面白き樣被存候高意には如何や偕佳什數篇御示被成下不相替擊節拜吟感服仕候御下問も御座候に付竹村の被申上候處と比較仕候處皆先生御原稿の方豪雄の氣有之宜しく是は全く書を讀み候多少の係る所にして不及是非事と家父に於ても深く御稱美申候

石炭說の義

華嶽精享昭應碑

大智の碑

義に御座候但新年の御作の七八のみは竹村被申上候處聲律に叶ひ候間御採用御座候方に奉存候趣此段宜しく申上候樣申付候將又考古圖攷か末卷と覺候楚の武王の像有之候卷一寸御惠借被成下度奉願候昨年拜借殘り說書下半も御寫しに相成候はゞ是又拜借奉冀候春來御寵訪の高意も御座候との御事何分も御繰合晡時頃より夜をかけゆるりと光來相願度家父も延頸罷在候義に御座候右草々申上候以上

晡時頃より夜をかけゆるりと光來相願度

墨帖、石炭說、御草稿、以上完璧仕候

安政四年正月廿六日

懼堂先生丈室　　恪再拜

（六七二）立田樂水に贈る

過日は御誨答難有奉存候御紙上拜見仕候へば近來御失調之由散々の御事に奉存候此程の雪以來餘寒も殊更料峭に御座候被成御續御村もいらせられず御快方に被爲趣候御事や奉伺候御出勤御座候はゞ此間奉願候通家父不快御來診被成下候樣奉萬祈候右御左右伺旁如此に御座候

廿六日　　　　　　　　　　　　恪　拜　手

立田先生　丈室

附啓過日入御覽候葵丘先生の御匾字只今の住居掲げ候地無御座候に付先雜と一卷に仕候跋文も少々改作仕候過日のは亡父の中候義を以て其意を承候て認め候へども何分先輩へ對し如何と存じ且裏打を改め敗爛を治め候て篤と展玩仕候へば御腕力の老蒼中々時輩の及び候所に無之仍て亡父の意をも存じ又愚見をも添候てかく仕候義に御座候御一覽可被成下候以上

〔六七二〕　八田愼藏に贈る

安政四年二月廿三日か

昨宵は御來訪緩々得面晤大慶奉存候殊に乍毎度御土產もの被下痛入辱奉多謝候御小盞返上御收可被下候有合の粡品帋しろまでに掛御目候御一咲御取舍被下度候偖は夜前御話の書畫帖拜見致し度候此ものに御附借被下候はゞ尤可爲好候噂昔之拜謝旁如此御座候以上

廿三日

附白夜前御話の貴號之事相考候所かの名水御所持に付いづれにも水に緣故御座候文字可然かと存候禮記に君子澹以成とも有之又老子に澹兮其如海なごとも有之候へば此澹の字を以澹庵など被成候ては如何や宋に胡澹庵御座候へ共何も苦しからぬ事に候存付候故乍序如此に御座候

八田賢友几下　　大星拜

貴號之事

澹庵など被成候ては如何や

（六七三）八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郞氏藏

或は冷或は暖非時に相變じ候氣候に候所彌御萬福被成御揃候や然ば近頃御無心に御座候いか樣粗相なるにても宜しく御座候屛風片方差かゝり拜借致し度候賤家も流行の風邪に三人平臥仕居候仕合にて風を避け申度御無心申候義に御座候御允諾此者に御附與も被下候はゞ感佩不可過之候至禱

廿日

澹蓀仁友几下　　大星拜

安政四年二月廿日か

屛風片方差掛り拜借

流行の風邪に三人平臥

〔六七四〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彥次郎氏藏

安政四年三月四日か

華墨拜見如仰いかにも不揃之氣候日々之風烈迷惑之事覺候處倍御健安喜慰不過之候偖は家内不快之者御存問被仰下殊に老母への御見舞として嘉菓二盒御贈惠被下御深情千萬辱感佩無已奉存候母義從來殊に悦び候品故別して感銘不打置拜味宜しく是ゟも拜謝申上候今日頃も家内殘らず病人にて御座候處幸に老母と豚犬は昨日來大に輕快の姿に相成嗣で某も善候に相成外兩人も明日頃は多分宜しく相成べく被存候間幸に御過念被下まじく候此間も急に屛風拜借之事御無心申候所早速御允諾にて此日々之風寒をも相凌ぎ不勝感謝候米帖天馬賦も今日御遣被下是又奉謝候先は御存問之御禮迄草略如此御座候餘留面賦

家内殘らず病人

米帖天馬賦

四日

大星拜

濳庵君 几下

〔六七五〕 山寺源大夫に贈る

安政四年三月七日か

過日は御墜簡にて蒙御存問難有奉謝候其上御話の黄州統領公祖の像一幀荷御示及是亦奉謝候折節家父義風邪又々致再感平臥罷在且家内祖母より私まで一時殘らず風邪に取伏せられ數日枕を竝て打臥首を擡げ候事能はず候體右故乍存早速拜答も不申上且高田より御到來とて精製の蒲鉾御分惠被成下候御禮も不申上不本意至極の義に奉存候蒲鉾いかにも良品にて中々一通り有觸れ候品に無之稍江戸の風味に近く折節家内不快にて食品味なしと申時節たまものにて食を進めいづれも難有がり能々御禮申上候義に御座候さて公祖の像は仰の如くあまり面白からぬものに御座候勿論贋作にも有之まじく候へども畫手と申し其像の面貌と申し鑒賞するに足らず候但裱裝の切れのみは舶來の品に候へども是等を算し候に至り候ては商人の料簡にて可有御座候乍去一時展玩相慰み難有存候則還上申上候御查入奉仰候偖其以前三村へ被遣候とて川中島地理記に御跋尾御認め指掌圖一同御示及御跋尾いかにも雄偉に御出來家父も殊の外御賞美申上候地理記も風邪の初にて候ひし故押して一讀仕候所へ三村氏に被押懸巳の時ばかりより晡前迄對話病中の上の倦み候所故御使を蒙候時節

には拜答を可認氣力も無御座草々御答申上候仕合失敬恐入候事どもに御座候ひき地理記尊考の如く龍洞院裏の茶臼山と申事も目に立ち申し其外往々事足らぬもの候樣にも被存候其上地名をも夫は今のかしこれは今のこゝ也と申所地勢變革の後よりしるし候ものに致し候ては詳かなるに過ぎ候かとも被存候果して彼戰を致目擊候ものゝ傳へを錄し候と申所如何可有之歟疑を免かれず候やに家父は申居候高意如何や御異論も御座候はゞ奉伺度被存候常陸帶跋見出し候まゝ別冊に錄呈仕候是は其まゝ御留被置差支無御座候戸田の別號を存じ不申御存知に御座候はゞ御誨示可被成下候先は拜復御無音の申譯旁早々申上候家内風邪も昨今いづれも快方にて起き出候間乍憚御過念被成下まじく候以上

七日　　恪　拜手

使無堂先生　臺下

蒲鉾の御移何も無御座候此小筆紙しろまでに御筥内に入置候稚龍の御慰にも相成候へば大慶不過之候

書簡　樂遠樓時代（六七五）山寺源大夫宛

〔六七六〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年三月十七日か

附白御器は是より返上申度候以上

墨敎拜見如仰兩三日漸春光に相成候樣被存候倍御多祥奉慶候然ば家内風邪御存問被下殊に精製の妙品澤山御惠投被下重疊感銘不知所謝唯甚奉痛入候御事に御座候一時は家内老少とも殘らず平臥の仕合に候ひし所いづれも不日に快方此五七日來平日に復し候間乍慮外御過念被下まじく候右仕合故今日は天氣も宜しく候とて皆々松下の水亭へ出候て茶など給べ居候所存じ寄らざる賜ものにて一段の清興を添へ家内ども〻一同難有狩宜しく御禮申出候先は裁謝まで草々頓首

一時は家内老少とも殘らず平臥

十七日

大　星　拜

澹　庵　兄　几下

〔六七七〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年四月二日

楞伽經

夏に入り漸春光之様に相成候是も又珍らしき事に御座候御起居彌御障も無御座候耶然ば楞伽經一讀致し申度候所可借出手寄も無之候淨福寺には定て可有之乍御六借御序も候はゞ御借寄せ暫時御轉借被下度奉賴候勿論急ぎ候事にては無御座候今日一文字屋參候に付此事相願置度如此御座候以上

二日

澹庵兄几下

大星拜

〔六七八〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

安政四年四月三日其の一

楞伽之事

淮南子

昨日楞伽之事御無心申候ひき急がざる事に候間いづれにも宜く奉賴候今一事御面倒相願度候は寺街御同氏より先年淮南子を借覽候事候ひき此節定て藏本可有之候右も何分御借り出し被下度奉冀候每度色々御六借の事申候も如何に候へども此節柄御懇意を憑み候て如此に御座候千万御原鑒可被下候以上

澹庵兄

大星

〔六七九〕　八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年四月三日其の二

淮南子早速に御借出し

過刻も御丁寧に御答簡被下奉謝候其節御無心申候淮南子早速に御借出し被下殊に態〳〵御持せ被遣萬々辱不勝感荷候其內拜面可奉謝先御禮迄草々如此御座候以上

即刻　　大　星　拜

澹庵　契　丈

〔六八〇〕　八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年四月三日か

御惠借の書畫帖

有合の小絹一片近製を錄し

好天氣倍御健安と致想像候然ば御惠借の書畫帖多日展玩岑寂を慰し奉感謝候則返璧御接收可被下候有合の小絹一片近製を錄し御目にかけ候御一咲被下度候以上

三日

猶々庭林の花も追々さき出候當年は十分に月の時節にかゝり申候月のよき

夜いつにても竊に御一遊可被下候乍序如此御座候以上

大星

澹庵賢友

〔六八一〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彥次郞氏藏

安政四年四月十日か

御手誨拜見此兩三日はちと又暖氣に過ぎ候樣被存候倍御淸勝奉慶候御手數相願置候佛書御持せ被下奉謝候然る所御無心申候ひしは楞伽に候所是は楞嚴にて御座候此書は文章も宜しき評判のもの故に是迄も三遍り讀候ものに付其儘致還璧候楞伽と唱へ候にも二種有之其一を楞伽阿跋多羅寶經と云ひ其一を入楞伽經と申し候入楞伽は十卷楞伽阿跋は四卷に御座候一と通り楞伽と申候へば入楞伽の事の樣存じ申候猶首楞嚴を恆に楞嚴と申候類と被存候乍御手數是等の義を以て今一應御詮議被下度奉冀候偖此間は御遊山御座候ひしとも存じ不申迎など差上げ結句御苦勞をかけ悚惕不少候御目にかけ候拙詩の事など御丁寧被仰下痛入申候先は拜答迄草々如此

御無心候ひしは楞伽に候所是は楞嚴

入楞伽

十日

澹　庵　兄　几下　　　　大　星　拜

［六八二］　八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年四月中旬

入楞伽大英（寺の名）の方より

藏經揃居候に付何也とも

淨福（八田家菩提寺の名）の方の四卷物の方も

此間は御過談被下奉謝候花もよき折にて昨日の雨故一旦に散過ぎ家内ども〻丁度よき時節御出被下候と今日も御噂申候事に御座候然ば相願置候入楞伽大英の方より御取出し被下候とて態々御持せ被遣每度御手數の御事千万奉多謝候同寺には藏經揃居候に付何也とも御取出し可被下との御事大慶の至奉存候折柄立田氏入來にて對話中草々御禮得貴意候餘は拜面萬謝可申盡候以上

即時

淨福の方に有之候四卷もの〻方も未だ看過候はぬ品に付御序も御座候はゞ御取出し御轉借被下度奉冀候至祈

澹　庵　兄　几下　　　　大　星　拜

［六八三］　八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年四月十七日

楞伽阿跋多羅體齋書譜の事

御手簡拜見好霽御同意奉存候然ば致拜話候楞伽阿跋多羅御持せ被下毎度御手數千萬奉謝候體齋畫譜の事御尋に御座候元來蘭竹のみの譜に付別段蘭竹之譜と無之通用候樣に存じ候所某など存じ候外に梅菊又は山水等の譜あるまじきに無之候へば體齋蘭竹譜と申候方まぎれある間敷存候釋書の御禮旁草々以上

十七日

大　星　拜

濟　庵　賢　友

〔六八四〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郞氏藏

安政四年五月十二日か

何となく夏色に相成候愈御好安と奉存候然ば一寸拜話を得度筋も御座候御差廻し今宵暫時にても御內訪被下度奉希候要用のみ草々以上

十二日

大　星　拜

濟　庵　賢　友　几下

附白得拜話度主意は寺町御病人用藥の事に御座候何かと御怪みも可有御座候に付一寸致注解候以上

〔六八五〕　八田愼藏に贈る

安政四年閏五月一日

今日は覺溽暑候御輿居益御礙も無御座候や然ば寺町より被囑候跋文認候に寺町の字にても號にても認め申度候乍御手數御問合せ被下候樣奉冀候乍序拜問貴兄御字は何と御申候ひしや御賴の山水輿に乘じ致一揮候に付其題辭に貴字をしるし申度候御書入御申越可被下候以上

御賴の山水輿に乘じ致一揮候

閏月朔　　大　星　拜

澹　庵　兄

〔六八六〕　山寺源大夫に贈る

安政四年閏五月五日の一

日々陰雨梅天無餘儀候御動履倍御礙も不被成御座候歟偖此程は御惠訪殊に美醪澤山に御貺私迄も好物之品拜戴重疊難有宣謝不盡奉存候乍去御用多とて御急被下候故餘り匆々之仕合にて遺憾亦不少奉存候

御示しの侗庵筆記律曆書解一涉之上奉返璧候書解を作り候人は何分固陋にて

侗庵筆記律曆書解

西書などには勿論渉らず律暦淵源などをも讀み候はぬやに被存箇樣の書先致し方無之候筆記も平に格別面白からず儒者之不窮理は怪しむに足らず候へども箇樣の小册子中往々紕繆も有之樣に相見え候上卷三頁陰符經引太公之言曰殺人滿大風暴起と申事陰符中記し不申候故試に檢索候所箇樣の文無之候如何の義歟子增の序も顚倒を免かれず藤謙敍の大之經術事業小之制度文章もちと聞えかね申候制度文章爲之末など申候事は三綱五常の大經に對し候ての事儒生の經術事業を大として制度典章を小とし候事は相成まじく儀禮周官いづれか制度ならざると存じ候事に御座候高意には如何被思召候や侗翁の著書を先刻し候はんには猶外に精品も可有之候はんに惜むべき事に奉存候先此開之御禮旁草々申上候已上

五日

（望遠鏡中望月歌）

園中十二詠と申詩

附稟松嘉罷出候はゞ此一封乍憚御遞致奉願候望月歌下半此帋と御取替被成下度候上半中孤月懸天を月輪懸天に改め候偖此開園中の模樣御賞玩をも蒙り候園中十二詠と申詩未だ電矚に供し奉らず候ひしや掛御目候やにも存じ

候がいかゞや若未に候はゞ近日錄呈可仕候是は望家に他日迄も殘り可申候へば御次韻なりとも御同作なりとも御手隙に奉願度趣家父申居候御含置可被成下候以上

山寺□□　　　　恪二郎

〔六八七〕山寺源大夫に贈る

安政四年閏五月五日の二

履霜錄

河原氏出の上人詩稿（竹叢軒遺稿と稱せるものなり）

昨日賤价御門前市を成し候體目擊罷歸り御多務之御樣子申聞け嘸御退屈も可有御座と奉存候所に細々御誨答恐入奉存候然ば今度松嘉より献じ候履霜錄一卷御示及被成下難有奉謝候此撰者知り人に候や御尋に御座候所是迄遂に承り及ばぬ姓名にて候尊按には佐藤何がしなどの流にも候やと被仰下候へども此時務の一卷にては果して左樣に候とも難申上候此卷一涉仕候に付可相成は軍制兵具礮技等の卷一兩日御惠借被成下度候夫一覽仕候上にて愚存御座候はゞ可申上候河原氏出の上人詩稿も御示及是又奉謝候颯と見渡し候處絕句之內往往可誦ものの有之感じ入候事に御座候卷中にて見候へば石城翁とは叔姪の開柄

此地へ引込候以來の詩文も……大抵にも次第し置き候はんとて

と見え候流俗の間に自然と文字種御座候事の樣に被存候乍去仰の通此許にて一生を終られ候はゞ決して此手際に至り申まじく他山之石之御譬至極御同意奉存候園中十二詠未だ御覽に入らず候よし近日錄往可申候此頃風と存付此地へ引込候以來の詩文も一時草書のみにて夫成りに致し置き大分見えかね候なども候樣に付大抵にも次第し置き候はんとて座右さがし候へば右十二詠なども出來り候て詩は都合六十首ばかり文はその半ほど御座候仍て昨日も十二詠の事申上候にて御座候御帖中料帋を被遣候と御座候處紙は參り不申御取込中御取落しと奉察候紙は尋常の品に候へば此方に有合候間御配慮被成下まじく候安世へ係り候書價の義も御手數に難有奉存候是はいづれ書肆より尙申出べく被存候間其節又々御厄介筋可奉願候別紙御擲還則落手仕候將桑名藩靑木老人書簡も一讀中々手の廻り候人と感心仕候詩と申書と申いづれにも讀書家と被存候本藩にはけく箇樣の人に乏しく遺恨此事に御座候右書簡詩箋も外二書一同完璧仕候御査入可被成下候

但履霜錄中家父先年老公へ奉りし上書の略をも載せ有之候處鑄立可申銅砲

の事など餘りに固陋を極めたる事共にて其後見候ては誠に愧入候とて毎々門下の衆ども申事に御座候既に庚戌之夏右上書の草稿取出し候節此條之上に一語を題し置き候只今左に錄出懸御目候間乍御手數此錄中へも御書入置被下候樣仕度と申義に御座候

大礮鑄造之料に（此の文天保十三年十一月の上書末尾に追記（第二卷上書五二二頁）したれば此處には省けり）

狂雲集の詩

狂雲集の詩其儘御留被置差支無御座候但本差上候心得にて認め申さず候故書法禮に當らず其所恐入候右御投還を蒙候はゞ認直し差上可申候右拜酬迄申上候御忙鬧中御手答を煩はし奉らず必御口答に奉願候以上

五日（此の日附或は六日の誤か）

礮掛の解……後半殘りの分

乍序願置候先年後輩の爲に御無心申候ひし礮卦の解此節の如き御忙劇にては後半殘りの分如何御座候はんや後輩にも近日江府の怪我人などの事承候に付候ても心得に示し申度候所何分文字有之人乏く候に付原文のまゝにては多埒あきかね候樣子に御座候就ては御解の出來候丈も讀せ申度奉願候御

草稿のまゝにて宜く候間暫御惠借奉冀候至懇

　　　　　　　　　　　　　　　　悋　再拜

懼堂先生　丈室

〔六八八〕 山寺源大夫に贈る

安政四年閏五月十日頃

今日も欝溽の天氣御輿居倍御健安に被爲入候歟然ば此間は履霜錄三卷御惠借難有奉存候料紙三番も慥に御預申置候履霜錄一覽仕候處明鑒の通佐藤何がし位のものなるべく候世間近來は別して箇樣の編述も多く候樣被存候所少しく立あがり候眼よりはあらずもがなと存じ候事に御座候高意には如何被思召候や三本即返上仕候此樣のものに候ては殘りの分は拜借相願ひ申まじく候將此間申上候十二詠稿塗抹のまゝ掛御目候他日御擲還奉願候是等の義に付候ても桐翁先生御存生に候はゞと感愴仕候定て御同懷と奉存候絕句は殊に不得手に付別して疵瑕多かるべく候痛く御指摘所冀に御座候高野生の詩御書留一葉還上仕候此節は又一段宜く相成可申近日の詩文ども見度ものに御座候御手に入候はゞ御示及奉希候此間相願候醱卦の和解も御取出し被差置候はゞ此作に御

（頭注）履霜錄一覽仕候處……佐藤何がし位のもの

（頭注）十二詠稿塗抹のまゝ

附與可被成下候先草々申上候以上

懼堂先生　席間　　　　恪　再拜

〔六八九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年閏五月十二日か

籾子にて也調置き申度

纔かに晴景かと存じ候へば又陰欝の氣色に相成候御眠食何の御礙も無御座候歟然ば此節此地並方の米價何程位か定て御承知と奉存候この氣候の不順に冷氣なるに就き候ても秋熟の際も如何と被氣遣候へば只今心扣に少々も籾子にて也調置き申度かと存候樣子次第拾圓ばかりも上げ候て御手數相願度候當時は御存知之通置場とても無御座候へば是又御厄介相願候より外無之候何分も御允兪御含置き可被下候以上

十二日　　大星拜

澹庵賢友足下

安政四年閏五月

恩田孺人碑陰御草稿

病中記事（板倉勝明著）

〔六九〇〕山寺源大夫に贈る

瑤簡難有拜見仕候如仰大雨夫故か冷氣に御座候所倍御健安被成御座奉慶候偖一昨日は御來過を蒙り奉謝候但餘り匆々の御事にて遺憾不少奉存候然ば恩田孺人碑陰御草稿御示及家父存念御尋御座候處是も昨夕より頭痛氣にて今朝夫が爲に右臂を刺させ候て八十戔ばかり放血仕候頭痛は右にて卽座に快く候へども鈹針の痕痛み候て字を認め候に不都合旁御草稿一兩日拜借是より返璧申上度餘事も其節拜答可申上今日は先是にて蒙御免度候此閒拜借の別條任命返上仕候寫させ度候閒近日の內尙又御惠借奉願度候以上

卽日

病中記事一葉御借示是又難有奉存候是も御草稿返璧の日まで御緩貸可被成下候此佚も御不幸との事始めて承り奉痛惜候義に御座候

山寺先生　席閒

恪　拜復

〔六九一〕山寺源大夫に贈る

安政四年閏五月廿日

令孫御誕生之拜賀をも不申上

此間の御草稿ものゝ事

雨竭候歟と存候へば又風烈よく世態に似候事と被存候尊候何之碍も不被成御座候邪奉伺候此間申上候臂昨日迄も少々宛痛み候て右故執筆をも存じ疾し令孫御誕生之拜賀をも不申上背本意奉存候御母子様とも御續き被成逐日御肥立被成候御事と想像仕候此節柄御祝ひ申上候と申も如何に御座候得共是は祖母より態々御目にかけ度と申事に御座候當年八十三歳に相成候處耳目聰明腰脚とても甚輕健にて候間夫に御あやかり御長命に御出被成候樣を奉祝候心ばかりと申事にて候御咲存可被成下いづれも御怡宜く申上度段申出候乍憚ごなた樣へも可然御致意奉冀候然ば此間の御草稿ものゝ事家父へ申聞候所委細敬諾仕存寄候丈御稿本へ朱書仕候尙其義に付申上候は箇樣の一寸致し候私記に將軍家の御諱等有之候事如何と存候其上に御諱を記し候に決して及ばざる事但麾下之衆と申事だに分明にて候へば夫にて濟候義と奉存候溫信之文字の事御心付れ御申越御座候通箇樣一寸致し候品にても碑陰などに認め可申義に無御

座候有のまゝに小姓衆と可有御座候正名諸言は其序にも見え候通元來正言ならず私言と申ものと被存候依て遊戲の文字にはまゝ采用候も苦しかるまじく候へども聊も其實を後に傳へ候はんと申には決して用ふべからざる事と奉存候擡頭の義に御座候が擡頭と申書式本邦の法に無之候かけまくもかしこき天皇の御上を書し候にも平頭に認め候が本邦の方式にて御座候其事令の公式に詳なる義に候を世間漢文字を扱ひ候輩不相辨外國近代の法に私に倣ひ候て一字擡頭二字擡頭等の種々なる事を仕出し剩へ近日は將軍家の御諱に係り候字を缺畫候なども往々有之候樣に被見受結句失禮千萬なる事と奉存候右の次第に付先考などの所も擡頭は勿論然るべからず碑陰に付平頭にも及ばず大朝と先考一字闕にて可然候碑は大小に限らず面限あるものに候へば古來ゟ平頭等に可致所をも闕字にて濟せ候事漢代以來致現存居候諸碑を覆して知るべき義に御座候日尾荊山が訓點復古之事御尋にて高意にては隨分尤にも被思食候かに候へども家父かね〳〵不十分の事に申居候荊山は先年家父玉池に住し候頃は程遠からぬ邊に居候故に折々出會候事にて候所歌學は隨分致居候樣子に候

擡頭と申書式

日尾荊山が訓點復古之事

一齋先生之改點と申もの

別に讀法をも相立て

加川生が草稿甘雨侯の病中記事

高野廣馬など

へども經學の力など格別無之人と申事に御座候一齋先生之改點と申もの先生元來國學之事は更に不案内に候故に固より其訓點に紕謬も多くたゞ荊山が申所のみならず候へども作文家の爲に裨益御座候所少なからず候へば所謂蒭を采るに下體を以てする事なかれの意にて取用ひ可然事と家父はつね〴〵申居候尤も決して從ひかね候所もまゝ有之候故に家父には別に讀法をも相立て置き候事に御座候其從ひかね候所五經には勿論多く四書にも少なからず候是等其說甚長く一朝帋筆の能く盡す所に無御座候其內御過訪をも蒙候節御猶豫被下候はゞ委細可申上候東洋生が詩文並に書扇加川生が草稿甘雨侯の病中記事搨本御草稿二通一同返璧仕候東洋生が詩文の義は過日略御面話仕候故別段不申上候加川の手際甚六ッケしく存じ候文章本手に致修業候ものには有之まじく候高野廣馬など罷歸候はゞ是等の手際より遙に可宜候是式にては何分數に入りかね申候病中記事も何か事足らぬ樣にて感心も仕らず候但此閒も申上候通御物故と申は惜むべき事に御座候諸侯の御身にて御文藝大抵に御出來被成候事當時晨天之星數にて候ひし所御不幸にては又更に寥々に相成候定て御同

歎可有御座奉存候言志十首の御作いづれも不勝擊節感服仕候諸老輩一二存念をも申上候にて別して鏘鏗一字も容易に動かすべからざるに至り候樣奉存候過日拜面の次に於ても奉願候通單身在宇宙の御作一葉御揮灑奉冀候外に昨冬か拜見仕候鐵瓶雪水甘如蜜と申七絕珍重奉存候開是も御序に御揮毫奉希候其外に一葉是は長短何樣にても宜く思食次第何也とも御一刷被成下度候今日は臂も大分自由に相成候に付先日の御悅旁如此申上候狂雲集の詩認直し候まゝ附上仕候以上

（單身在宇宙の御作一葉御揮灑）（今日は臂も大分自由に相成）

念日

（崋山の款詞）

附白華山の款詞と申もの御手に入候よしにて見及候や否御尋に御座候處彷彿と傳聞にて承候ひしかども遂に見候義無御座候御座右に御座候はゞ一寸御垂示奉冀候過日任命返上仕候別條も御用御手隙の節今一應御惠借奉願候

（久留米藩村上守太郎一件）

久留米藩村上守太郎一件は其砌宮崎復太郎說話にて承候通の事に候肥後の荻と申仁御存知に候や手簡の向讀書も餘程出來候人と被存事情もよく相分り申候右も寫留置申度候過日拜範の節は餘り匆々にて可申上事も遂申上落

礮卦の御解も難有

し候其以前礮卦の御解も難有奉存候江府にて拜見候は今少し多く候ひし様奉存候所ちと程子春秋傳の恨を免れず候乍然早速依田源へ相示し候所殊の外に珍重がりいづれにも相弟子申合せ擧て相願ひ此節御獨勤にて御用多の所は奉察候へども何分にも跡を御嗣ぎ被下候様仕度と申義に御座候ひき右に付候てはいづれにも誰ぞ罷出可奉願候後學許多の助にも相成候義に付門下共より奉願候はゞ乍御多忙彼の末御終惠被下候様奉萬祈候至懇々御揮灑相願候料紙差上候以上

〔六九二〕　山寺源大夫に贈る

安政四年閏五月廿一日

昨日御令孫様御降誕御座候御怡迄に祖母より粗末の品呈覽仕候處御丁寧に御挨拶蒙仰今日に至り更に又縷々御紙表殊に御有合の御品とて彼是御移に御惠投被成下結句奉痛入候御事ども祖母はじめ宜しく御禮申上候様申付候御母子様とも追日御肥立被成候よし殊に御出生様はよく御熟眠御座候故御伽の衆も心易く御座候との御事全く御丈夫の御出來故の御事に可有御座何より奉慶候

正誼大夫（恩田頼母）御賀詠

大綱（大徳寺の僧）の一幅

崋山款詞

義に御座候御名の事も被仰下難有候いかにも宜しき御名にて幾久しく愛度奉存候正誼大夫御賀詠をも御示及被成下奉謝候調も打あがり候て珍重奉存候大綱の一幅も御示し是又奉佩服候書體中々無我なる事に見え申し候一休の御間合の事三村よりは其後何とも不申上候や大綱が答承り度ものに御座候偖昨日申上候義に付詳密に御誨答被成下御用多の御中別して恐入奉存候昨日蒙御恵示候崋山款詞も一讀仕候よきもの世に出候て崋山が爲には一層光輝を生じ候様奉存候此様子にては家父幷に寅二郎などのも追々世間へ出で可申左候へばかの罪按の次第も委細に世に白し可申何とぞ右様致し度ものと申居候事に御座候款詞も外より御借ものに付早還申上候様蒙仰候に付今日御示及の二幅一同奉返璧候御査入可被成下候先は御移戴き候御禮御誨答の拜酬迄早々申上候

不盡

山寺先生 臺下　　　　恪 拜酬

安政四年閏五月廿一日

〔六九三〕 山寺源大夫に贈る

東京市 山寺源太郎氏藏

萬姓統譜御擲還
五老集

夢に傳に遇ふと讀み候は

狂雲集の事
大綱何と答へ候はんや

炭屋（大阪）別家の媳婦

梅天倍御多祥に被成御座候歟偖此間は萬姓統譜御擲還盧柳南趙清曠二名見え不申候に付外より御尋申上候五老集と申もの御示及此中蘇孫方いづれも宋人に候へば盧趙も同氏の人なるべく被思召候よし御尤に奉存候仰の通一渉仕候處與へ候人名も無之外三子とは違ひ申候やはり初學の爲に題を設け程式を成し候ものに可有御座候夫を五山の徒などが見出し候て點を施し上木候にも候はんと存候乍去何程も書を讀み候はぬ者の手に成り候樣被存候東坡が□□道に與る帖に宣甫が夢遇於傳有無と有之候を夢に傳に遇ふと讀み候は尤も咲ふべき事と存じ申候往々其手際と被存候へば程式に設け候ものをも眞の手簡と無差別に合刻候も怪しむに足らず候狂雲集の事よく三村へ被仰遣候大綱何と答へ候はんや其内三村より御返事御到來に候はゞ必御示及奉願候扠又炭屋別家の媳婦に相成候奇特の女子褒賞の別條御示借每度珍らしきもの拜見難有奉謝候十歲の女子にして箇樣の事と申は誠に天稟の美なる所と感心仕候年致します〱婦德有之候や承度ものに御座候別條の末に有之候安喰と申仁も非凡の樣に被存候御聞及ばれ候人にや過日拜借仕候風說書下半も漸卒業に相成候

（望遠鏡中望月歌を作る）

に付五老集右別條一同完趙仕候近夜月に對し一詩を作候に付錄呈奉取御一粲候原作は定て御承知と奉存候故差上不申候阮元は算學も出來候人と申事に候所地球の徑大略月の徑の四倍に候を以て光は面の積にて不申候ては叶ひ候はず其所より存付候て此戲作に及び候に御座候先は拜借ものゝ御禮旁草々申上候

以上家父より申上候樣申付候に就き如此に御座候以上

廿一日　　　恪二郞

山寺樣

（安政四年閏五月廿一日）

〔六九四〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郞氏藏

墨敎拜見梅節愈御佳勝沃慰之至然ば先考七年の御忌辰と申御事誠に開も無之義御互に往來も候事同視候へば昨日の事の樣被存不堪感愴候嘸々御追悼可有御座と奉存候御祭期何かと御事多にも候はんに被寄思食御重之內品々被下辱奉謝候家內いづれも宜しく御禮申上候將此品乍粗末御靈前へ相供申度候乍憚

宜敷奉賴候拜答旁如此御座候以上

廿一日　　　　　　　　　　　　　大星拜

澹庵賢友足下

〔六九五〕山寺源大夫に贈る

安政四年閏五月廿六日

十二詠御擲還拜收
令孫君彌御肥立

一昨日は蒙御墜簡難有奉存候如教猝に酷暑に相成候處倍御清穆被成御座浣慰不過之奉存候尊察之通清夏軒風も能入候故先凌よく老祖母始無事に罷在候幸御放念可被成降候十二詠御擲還拜收仕候其内御□詠をも可蒙の義先以欣然仕候義に御座候令孫君彌御肥立奉慶候然る所御額上に小指尖ほどの赤み御座候處有之押し御覽候へば暫赤みを失ひ候へども又やがて元の如く赤く成り候て尤も御見付被成候節より御傍にては少々御磷ぎ候樣に御申候へども尊眼には左樣にも不被思食御降誕の時御打身にても候歟又は惡血の聚り候にても候歟多分其内には散じ可申候へども唯今の所にて御手充御座候方可然か御手充御座候と申時には今少し御日合も立ち候事の方可然歟やはり硃沙記などの類に

も可有之歟家父の考御尋に付委細申聞け候處段々被仰下候條を以て相察し候へば多分祩沙記にて可有御座候祩沙記は大小厚薄淡濃に拘はらず皆皮膚に處し候ものに付法を以て除き候へば除き候に難からざるものに御座候小指尖程の記に候へば格別御容儀に碍り候事も有御座まじく先夫成に被遊御差置候方可然其内に幸に磷ぎ消失候へば尤も宜く又御年被成候て彌難消候時節心得候醫員へ御談被成候へば手易き事に奉存候醫員までにも及ばず家父へ御相談御座候ても容易の義と申事に御座候但其藥を施し候節滲透候て痛を覺候義に付いづれ御物心を御存知の頃に至り候ての方可宜と相考へ候趣に御座候偖又御手寫の別條御示及被成下毎度難有奉謝候但し初條の義はちと難信樣にも被存候が果して虛傳に無之や尙奉伺度候世間にて薩藩の士には每々無法もの有之暴戾なる事もまゝ候樣にも申ならし候處夫は往日の義にも可有之當時などは誠に世間並にて殊に當世づき候が多く候樣に相見え申候高意は如何にや澁谷

韓蘇の辨

老書簡二通、御示及磁像韓蘇の辨如何可有之や且宸奎閣碑の事御下問に候所像の肥豐なるより韓子と定め候との事面白く奉存候但表裝を具し候軸卷を佛骨

表なるべくさ申考はちと鑿にも可相渉歟夫とも韓子の像には左様の事實何か
に出居候義にや又唐代には上表の文悉く卷軸を施こし候て奉り候禮にや淺陋
不相辨候に付疑ひ存じ候義に御座候宸奎閣の碑帖は慥か癸丑の夏と覺候家父
方に有之候金石萃編に付碑の高廣等致討索其通につき立見度と申事候て持參
せられ候節彼老の藏を展玩候のみ全碑にては家父も遂見及び候事無之候と申
事に御座候如仰蘇癖老而益壯感心仕候道光板二十二史價相覺え候歟と御尋に
候所覺不申但し四朝史全史にては中々四十金などと申價にては御手に入り申
まじく被存候乍去若しくは長崎奉行などの手にて三都書肆の手を經ざる義に
ても候て左様の廉價に候義か是は例の外と奉存候先此段草々拜復申上候昨日
も御使にて御座候處折節手を釋きかね候義に取掛り居御使空く相戾し恐入候
幸に御海容奉希候別條幷に洒侯翁書簡二通完璧仕候頓首

念六　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　恪　拜復

懼堂先生丈室

宸奎閣の碑帖

〔六九六〕梅田屋に贈る

長野市小宮山信人氏藏

安政四年五月廿七日か

先頃は尋ね給り辱候時候も俄に薄暑と申程に相成候彌御無事に候歟然ば過日頼候下女相應のもの無之候や母とも左樣申只今妻年若く候へども子の無之生れつき又召使も當年にて八年出生も無之候へば是も出生は覺束なき事何分恪二郎一人にては事足らぬ限りにて別して異國の事なども心安からぬ時節には子共少にては賴少く覺え候間せめては男子にて兩三人も欲しく候依て此度下女を召抱へ候も妾に成り候ものに致し度候就ては惡疾等の筋を吟味申度又子は多くその母に似候ものに候間鈍き性分にてはあしく候又いかう見苦しく候てもこまり申候夫等宜しく心得可給候給分の所等は其人相應望にまかせ可申何分とも乍手數穿鑿賴入候將一齋先生の小品見出し候間遣し申候先生には此樣に小さきものけく珍敷候以上

妾に成り候もの

一齋先生の小品

廿七日

冊

梅田屋殿 內覽

〔六九七〕　望月主米に贈る

安政四年六月四日か

前夕は御過訪殊に此地に珍しき海鮮蒙御投惠重疊難有奉銘謝候但毎度臥病中失敬がち恐入候其節蒙仰候二帖被遣一題之義敬諾仕候竹の義もいかにも致繁茂居候御用に候はゞ澤山御切らせ候て可然奉存候將今朝御傳聞御座候へば英船多々參り可申然る所墨使都下に居合候事に付如何樣共取計ひ爭戰に不及候樣可致候と申候よしの事承知候や御下問に御座候處未だ承不申但愚意には英船多々可參等の事は此度墨使申立の書付より誤り傳へ候ものにも可有之歟と被相察候此節英領ベンガラにて餘程の戰爭有之候樣子に付當節本邦へ軍艦を仕向候等の事に及び難き形勢と被存候依て愚意如此に御座候對客中拜復迄匆匆申上候以上

竹の義

英船多々參り可申

　　四日

　昨夕の御器返上仕候御約束之櫻子御移のしるし迄に入御覽候

素軒盟臺几下　　啓　　拜

〔六九八〕 山寺源大夫に贈る

安政四年六月十二日

細君急症にて遂不幸

家父の存念は衆醫の撰に異り

一つの誤り

血液腦神に迫り候的症

御手誨拜見仕候先以烈炎の處愈御清健沃慰の至奉存候然者竹村にて細君急症にて遂不幸の次第被仰下誠に以驚入候事殊に在府中何共言語道斷の義察入候右に付御姉妹方家父料見御尋ね無御座候を遺憾に被成過去の事なる御報聞右樣の事も有之候ものか又早く御尋ねも候はゞ濟救の術も候ものやとの義にて江府へ被差立候容體書御添委細被仰下候に付御帋表を以て申聞候處家父の存念は衆醫の撰に異り候て第一平生經行不順に候はゞ其體質に隨て常に刺絡を被施候はゞ此變は有之まじく又十日朝より頭痛有之候と申節如何樣とも刺絡無之候ては叶はざる事然るをあやにくの伯父君御法事等にて被取込候故に其義にも不被及是一つの誤りにて候其翌鬱々中多分の下痢有之候を知覺無之は血液腦神に迫り候的症にて候へば此處にて壓か也とも放血壓迫を洩し候はゞ尚救ふに及ぶべき歟とも被存候所却て脈沈徵などの所に致拘泥平日の素因を辨へず前日來頭痛有之候近因をも問はず四逆加人參等の熱劑を投じ候事申さ

二つの誤

三つの誤

四つの誤

（粟佐は埴科郡の地名現今屋代町の一部）

ば燃る火に薪を添るが如く病を助けて重きに進め候事是二つの誤にて候又衆醫相談にて清解の心得にて不換金正氣散を用ひ候事清解の所に心付き候は宜しく候へども正氣散を清解の劑と心得候は漢人の醫書の訛にて不及是非香竄の品も候へばやはり病を助け候次第是三つの誤の上又手足厥冷を目ざし四逆加人參を用ひ候事四つの誤と存候左候て粘液强きより出候月經など申候て始終刺絡の所へ目の付き候はぬは誠に無慙なる事と御紙面並に容體書一覧仕候て只々浩歎の外無之候あはれ一人卓見の人有之候て十四（四は誤寫か）日中に百目以上程に無之候とも六十目餘の放血有之候はゞ秦越人が虢太子を起し候迄には無之候へども鍼針一本にして格別の藥劑にも及ばず此變は有之まじく候を返す〳〵も遺恨至極と申事に御座候此義私より宜しく可申上候樣申付候に付如此に御座候將安世義に付候ても御丁寧蒙仰難有奉謝候扨又御采邑粟佐より獻じ候品とて相嗜候品御投恵被成下□感の至奉存候早速時下の下物に供し難有特宜しく御禮申上候京攝邊地震と申事初て承候如何樣の義にて候ひしや別條等御手に入候はゞ不相替御惠示奉冀候不一

十二日　　　　　　　　　　　　　　　　恪　拜復

山寺先生臺下

〔六九九〕 山寺源大夫に贈る

安政四年六月十四日

竹村内君凶變之義に付

玉煙帖

今朝は微涼稍適人意候倍御清健と奉存候偖昨夕は疇昔竹村内君凶變之義に付御下問御座候に任せ療用手落の義ども無伏藏申上候所御丁寧御挨拶被仰下且從姉妹君よりも御傳言之趣一々奉領其意候寔に不慮之義於江府勿論御親戚方に於ても憮々御遺恨の御事と奉察候療用手落等御座候事人事の盡さゞるにて格別悔恨之次第には候へども是もやはり命數の存する所に候へば理を以て排遣候より外無御座と奉存候只々此度之義等有之候に就候ても謬誤無之醫學は盛に仕度ものに御座候將かねて相伺居候玉煙帖御到來御座候とて御示及拙評申上候樣奉敬承候今朝得と展玩仕候所九品にて申候はゞ中の上上の下とも可申候はん歟乍去當節にては此樣の帖も不易得候樣奉存候官藏の煙帖も御及示の內の第二帖と同じ所を先年在府中暫く拜借罷在蘭亭序樂毅論等の邊をば隨

分記憶罷在候所此帖と二なく候樣被存候但十三行洛神に至り此度の帖の方較官帖に劣り候樣に御座候官帖にもやはり洛神には董氏の跋御座候ひし樣に覺候乍去十數年前之事に付夫等は聢とも難申上候御書中には官帖は淳化へ標題のみ張替候ものと被仰下候が家父の記し罷在候は鴻堂帖の題簽を改め候ものと存じ候よしに御座候玄宰の跋尾兩帖ともに有之候故にまがひ易く右樣の事も御座候事に候若閣帖にて候へば題目は皆王著の書にて玄宰の書と紛れ可申筋無之況や董氏の跋文等あるべき樣も無之候へば閣帖を以て贋し候と申は乍憚御覺違には無御座候や扠又過日之別條並外に兩種拜借被仰付再度難有奉多謝候天下災異踵をつぎ候事何とも蔘恤にたへず候先は拜答迄草略申上候以上

天下災異踵をつぎ候事何とも蔘恤にたへず

十四日

法書二帖返璧仕候顏書の方下面の表版御示及の節より無御座候ひき爲念此段申上候

懽堂先生　案前　　恪　拜覆

〔七〇〇〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彥次郞氏藏

安政四年六月廿五日

浪華砲臺目論圖

先夕は御來訪被下久々にて獲緩話大慶仕候殊に品々得嘉貺乍例痛入不勝感謝候然ば其節御約束申候當年風說書外へ借し置き候處致轉傳只今に返り不申候幸白井氏見せられ候まゝ先是を御廻し申候浪華砲臺目論圖と申ものも一同掛御目候先夕之拜謝旁匆々如此御座候以上

廿五日

大星 拜

子靜仁友 几下

〔七〇一〕 山寺源大夫に贈る

東京市 山寺源太郞氏藏

安政四年六月廿八日

日尾某が近著御示及

御惠書難有拜見仕候ちと夜來御風邪の御樣子全く此俄かの冷氣祟を爲し候義と被存候千萬御加養に過させられまじく候此閒入御覽候別條今暫く御留置れ度との御事御心易き義に奉存候偖又日尾某が近著御示及是等の論貫通しかね候や否御下問奉承知則一讀候所如其仁の事何か珍しさうに記し候へども古人

の餘唾一向珍しとも存じ候はず第一に本文の語脈に違ひ候事故（二三字不明）方なき説と存じ申候但し莽が大夫は如を如何と讀み候こと丶被存候乍去楊雄が前に孔安國有之後に馬鄭有之候へども左樣は讀み不申候楊雄一人左樣讀み候とて一を證として他を盡く廢し候事難きと丶存候況や語脈に於て法言は其讀にて差支無之候へども語の本文は讀（一二字不明）かね候義に御座候其上小白と子糾の事古來紛々いづれか兄いづれか弟と申事聚訟有之事に候へども春秋經文齊小白入于齊と御座候にて小白の兄にして可立事明白にて漢の薄胎の淮南王への上書に桓公弟を殺と有之候も據正しき事と被存候左候へば管氏がはじめ子糾を助けて國を爭ひ候ひしは過にて桓公に歸し候は正に反り（二三字不明）可申況や共に信公の子襄公の兄弟に候へば他の讐とは義理等しからずに經學手薄に候故に精密之論に渉らず一偏に泥み候事と被存候其他春秋説は蘇文の燒直しに有之學説とても何も發明の論も無之學也者學其所師之謂と申第一句打こはし候事と存候いづれも其人相應の作と可申如此つまらぬものを板に鐫り候は誠に木に禍し候義と存候高意何似扨又此間は六合叢談抄等懸御目候處

浪華砲臺略圖日下部生（伊三次）呈書並に戯作もの

福山閣老遂御不幸の御爲當時痛惜候て奉然や又は可までにも左及ばず可然や

阿島洞巖の始末

御丁寧被成下御誨答且浪華砲臺略圖日下部生呈書並に戯作もの一通都合三品御惠示被成下每度難有奉展謝候砲臺も江川のよりは少し面白く被思召候との御事に候處何故の御事か更に了し奉りかね候家父一見仕候て多くは其實に有之まじく萬一是其實にて候時は又天下の大患と申額を頻め候義に御座候軍艦を造り候はんが礮臺を築き候はんが皆其學術有之候事にて杜撰臆想を以て調ふべき筋に無之若其學術無之候て强てこれを爲し候へば被仰下候山人の船に相成申候福山閣老も遂御不幸と申事彌相違もなき事のよし今日も被仰下候當時の御爲奉痛惜候て可然や又は左までにも及ばず可然や愚意には相辨じかね候川司農は福閣之病は福閣の病にあらず天下の病とも被申候よしに候所此節の勢福閣の御維持にて此位に止り候と申實症を眞に知られ候ての言葉に候や又癸丑以來の事共を其可に當り候事と思ひ自身も其黨と成り候ての義に候や是又司農之言を併せて解すべからざる樣に存候が高意には何似や萬一當時の勢此位に止り候はかの閣老の御維持に出で候と申ものに候はゞ唯病のみに無之其禍踵を旋らざる義にも候はんかと憂懼之劇に奉存候阿島洞巖の始末五左

衞門等より委細承居候御一見には凡僧と見え候よしに被仰下候處見つきは如何に候とも其義擧を以て非凡に列し可然事と奉存候大丈夫にてすら首を恐れ尾を恐れ義を見ながら手を出さずに居候もの天下皆是にて候所出家の身としてかゝる義擧を成し候は豪傑の士とも可申候禪宗には往々人意を壯にし候事有之候かの宗果が秦檜へ對し五伯は天子を挾で諸侯に令す今公は夷狄を挾で天子に令すと申候などは其魁首とも可申候先は過刻御示及之一册並に此間御惠示之三種其以前返上仕候と心得取落し候魯西條約原文完璧旁申上候以上

廿八日

還上もの都合五件御査入奉仰候以上

懼堂先生　臺下　　　　恪　拜覆

安政四年七月三日

〔七〇二〕　山寺源大夫に贈る

此間少々御外感之樣奉伺候此兩三日殘炎殊に酷敷御座候へども次第に御爽快被爲入候や否奉拜候偖は此品如何しく候へども外より到來仕候に任せ奉呈候

御下物之一種とも相成候へば本懷之至り奉存候將過日も申上候ひし浪華砲臺いかにも信じかね候結構に被存候彼圖はいかなる邊より御手に入候義や果して慥かなる事か奉窺度且泉州境並に兵庫邊にも砲臺取立に相成候などの風聞も御座候か承候是等の圖も御手に入候はゞ不相替御惠示被成下度逆じめ奉願置候先は貴恙之拜候のみ申上候已上

三日　　　　悋　再拜

使無堂先生　臺下

（安政四年七月廿二日）

〔七〇三〕　三村晴山に贈る

慨憤に堪へざる筋有之熟々愚考候所責ては密々得貴意候て御周旋を冀ひ候はば萬に一つも夙志の達し候事も候はん歟と竊に此一紙を呈し候義に御座候抑江戸御入府以來內海に砲臺の御設無御座候事世界萬國都城の通例を以て申候ても御闕典の義追々外蕃猖獗の勢も有之候時節に候へば此御設は是非共無之候ては叶はせられまじくと申事先公御在職中愚管申上候義も有之其頃濱松侯

（天保十三年海防八策）

を先公に上る）

専ら御事を被用候砌にて羽倉殿色々建白の筋も候て致承知候故御同人へ段々愚存申候次第も候て既に其義も建白に相成候事にて候所侯にも形の如き御始末にて其後は舊に依て因循の御時勢不及是非癸丑の夏亞墨利加の事興り候迄は兎に角富津の洲嵜天險にて有之候へば外夷禍心を懷き候とも決して乘入候事叶ひ申すまじく且相房海岸十數箇所の砲臺を被設夫々御手厚に大諸侯へ被命被差置候へば江戸御膝本へ外夷の侵入候べき道理無之と申す計りの御廟議と被相察候乍然愚意には何分不安心の筋に奉存去る庚戌の春心を決し密々近海の御備向殘らず巡覽候處案の如く濟ぬ事共にて十ヶ所に餘り候砲臺一ヶ所として御實用に可相成もの無之總べて兒戲同樣の義にて興の醒め候次第富津の洲嵜とても何の御要害にも相成不申其上右兒戲同樣の砲臺海上高く掲げ被置候事故惟其實事に於て益なきのみに無之時々事に託して舶を寄せ候外國の者に本邦の無能をあからさまに被示候筋にて言語道斷の義に有之公邊歷々の御方を始め奉り其御固被蒙仰候諸侯の御家にも夥多の人御座候ひながら斯る拙なき御振舞の有之候事未だ一人として砲兵の眞理海岸防禦の利害等諳熟の

十ヶ所に餘り候砲臺一ケ所として御實用に可相成ものも無之

時の急務十ヶ條

者無之故の義と餘りに歎かはしく某に於ては多年の講究に依て大略會得の筋も有之且此御時節に當て千萬人の耳目心思の及ばざる所を己獨り知覺候と申すは神明の靈寵に非ずと申す可からず去らば本朝八百萬之神靈に奉對候ても默止ある可きに無之と存じ起候て例の一書をも認め御許容の上は其御筋へ投進仕り度と相企て候所御差留に相成不及是非壬子之冬川司農海防掛の命を得られ候迄は筒中に祕し置き一人他見を許し候事も無之候ひしかども司農は格別の事に付內覽に供し候處某の見込候義司農と雖も信用せられず段々反覆申述候事も候へども猶半信半疑にて尤も擬上書草稿は被留置候ひき然る處其翌夏亞米利加船容易に內海へ乘り込剩へ驕慢橫恣の振舞を極め候へども奈何ともし候事能はず聞く人皆惟齒を切り候のみ爰に至て某が兼て申候處一々符合候故川司農にも防海の議には某の申候處多く聽納せられ候樣相成候ひき乍然大舶を海外に購ひながら外國の形勢探知せしめたきの策に至て何分口を開かれ兼候樣子に付時の急務十ヶ條を認め阿部相公迄申上候其第一條は右の人を出し舶を購ひ形勢を探知候の策に有之第二條は初めにも申述候江戶御城下東

碁に定石の有るが如く

邊砲臺の事兼ての心計にも候故專ら其利害を述べ且其翌春亞人渡來の開にも合ひ候樣急々御手始め有御座度數も二ヶ所に過ぎず候故至て易簡にして御用途も纔にて可相濟計算に御座候ひき其道に明かならざる人は斯る廣き海面二ヶ所計りの砲臺事足らぬ樣にも存じ可申候へ共譬へば碁に定石の有るが如く又上手の打候石の一二目にして其力盤上に響き候が如く其要を得候へば多きを貴び不申又ひたむき並べ候ても其理を得ざるときには下手象棋の自分の駒の邪魔になり候が如く事に臨んで其害を免れず候此道理川司農へも精々申述其頃只今の砲臺の見込江川より申し立候と申すに付某司農へ申候は此策一寸見候所にては海岸砲臺の樣に候へども元來これは陸戰に土壘を築き候法を杜撰に捏ね合せ候ものにて甚然るまじく其子細は陸地の戰は專ら守中に攻を寄せ攻中に守を寓し候て其土壘をも現存の人數に應じて之を築き敵に攻む可き機會あれば直に其土壘を出で之を衝きもし攻方不利に候へば又其土壘にて守り候其戰法大略如此に候故に此の如く陸續と築き立て候て利ありて害なく候然る處海中は夫と品替り砲臺を守り候ものは一歩も敵を追打ち候事能はず敵

を追打ち形勝の闕を補ひ候樣には是非共砲艘を用ひ候はねば叶不申攻守全く別手に付斯く臺場數多く候時は夫丈け多分の人數を用候事已むを得ざる勢にて陸戰の人數に應じて壘を築き候とは事體相反し候左候て臺場の模樣此の如くに候ては敵のかゝり次第左にて右を救ひ候事不叶右にて左を助け候事能はずあたら御人數を空しく御不用に被遊候義尤も然る可からず且箇樣數多く御築立に相成候ては第一莫大の御物入にて此御時節尤も惜む可き御用途に候其上如何樣箇樣の砲臺を以て內海を御裁截被成候とも砲を備へ候堅固の船澤山無之候ては夷賊萬一近海に群をなし回船の邪魔致し候節追擊の策無之都下の窮困日を數へて待つ可く候偖又砲を備候堅固の船多く有之懸引打放しの業相應に鍛鍊行屆き候へば某籌策の通り內海の砲臺は二ヶ所にて餘り有る義に御座候天下の財は限り有るものに付無益の爲に多分の費御座候ときは有用の爲す可き處に事を缺き候は必然の理に有之候西洋築城の新法を以て眞の御備の義を申上候へば都城の御模樣も御改制無御座候ては不被爲濟夫に準じ大砲の數も莫大無之候ては叶はず是等も容易の御物入に無御座候然るを今斯る杜撰

妄說の爲に不貲の御入料を被爲棄候はんこと天下の御大計に有御座まじく若此某が杜撰妄說と惡口候義御不審に候はゞ此策西洋諸國の內何れの都何れの港に擬し候やと一言御尋御覽可被成候自然も外國に此制有之候はゞ某過言の罪難逭候若無之に於ては彼人の杜撰に疑無之候妄人の杜撰御取用御座候より西洋成法の驗と致し候を御取用可然と申候處司農にも被領候て數日の後此程のこと尋ね見候處西洋諸國果して此制無之と被申眉を顰められ候へ共遂に救ひ候事も被出來兼剩へ其掛りをも被蒙命候て只今の砲臺出來に相成候は遺憾の事に御座候ひき（此事御座候故に丑年の冬御屋敷に於ても砲臺御出來の上仰を蒙られ候義暗に御防ぎ被置候樣愚策申立候義も御座候）其後

伊敎老

貴君伊敎老より御承知の趣かにて御話御座候には右砲臺御取立の義に付候ては一時某の策多分御取用に相成可き御廟議も候歟の所如何なる事にて江川の策御取用に相成候歟と不審し候仁も候哉に御話御座候にて更に遺憾を重ね候義是れ併し某の不幸に無之天下の御不幸と存候迄に御座候兎に角二百年來太平の御風諠にて此時節と雖も第一等の事に回天の御施設無御座嘆はしきことに奉存聊か竊に當今第一の御爲筋にもと謀らひ候義空しく出來損じ候て剩へ

浪華砲臺略圖

嚴譴を蒙り君家の御體面迄奉毀候に致り候事畢竟かねても申候通り思ふこと其位を出で言其分を踰え止む可くして止まず候より起り候義と今更臍を噬み候ばかりに御座候然る處猶懲りずまに慨憤候ことは此程親戚間より近々取掛りにも可相成と申す浪華砲臺略圖見せ候に付則ち一覽候處けしからぬ結構にて其表江川の杜撰に更に上は塗り致し候樣のものにて候其大略は安治川口天保山の西より西南へ四十町の海中へ直線に築出し東南木津川口平尾新田と申迄直線に四十五町尤も其間廻船往來の道を開き平尾新田より西南の方海中へ廿五町直線其邊は海も深く廿尋より廿四尋迄有之候由夫より西北二十町直線に築出し安治川口より四十町築出したると相合す其築き候石堤は幅六十間高さ水際より六間と申事是其大略に御座候始め此圖を見候處餘り素人考故に多分贋作に可有之一昨年勝なども大久保氏に附き其邊見分等も致し候事尤も勝とても其頃は此節とも猶相違砲臺等設く可き形勢等中々諳熟の所へ致り不申候へ共斯かる大杜撰等可申立謂れも無之旁必ず虛傳と推量罷在り候所追々傳聞候へば多分實事の樣子爰に至て天下の御爲何分默止候に忍びず貴君迄極密

得貴意事調はず候迄も一番御周旋被下度奉冀候義に御座候其子細は其表防堵の事も兼々御承知の通り多年の熟考精思にて江川輩一朝の杜撰とは遙に致相違第一數少く候て事濟み候故に御入用容易にて行屆き出來の後多くの諸侯方を疲弊し候の患無之事あるときには結句應變の都合よく候はんを其長策は御採用無之却て杜撰妄說之方御取用に相成害を後日に殘し候事今更是非に及ばず候浪華の事は未だ手始にも不相成候へば此節或は救ひ候方略も可有之浪華の事某未だ足其地を踏み候はずと雖ども京師にも近く天下樞要の大要害に付兼て分見地圖を集め西洋諸國の法に參し砲臺を設く可き位置等熟考罷在候所市中と海濱の間次第新田多に成り候故其表の海岸に逼て人家稠密候とは大に相違にて砲臺を設け候にも至て都合よく御入費とても聊のことにて事十分に調ひ可申と相考居候然る處今度海中の砲臺目論圖面の趣にては幾百萬の御失費相掛り可申や容易に算も及ばぬ程の事に有之候守國實地の眞計より申候へば洋法に倣て三都に外郭を設け內城をも追々に改制し大小の堅艦を造り砲を鑄夫々御人數を班たれ海陸の操練不斷可有御座等無餘儀御物入此上猶莫大に

御座候浪華一ヶ所の砲臺に斯く不貲の御用途を被費候はん事天下第一の御失計と奉存候夫とても右一ヶ所御經營御座候て夫にて始終萬全の防禦に相成候へば猶餘儀なき事共と可申候へ共夫さへも智者は別に手段を設け候て不貲の失費之掛り候等の事は可成丈相避け財用を延し貯へ候事軍國第一の務めに御座候其上浪華の金穀の湖海たる所以は畢竟東西諸國の船舶輻輳の湊たる故にて候如何樣右目論見の通り其邊海に砲臺を被構候とても夷賊に智慮有之其砲力の屆かざる邊に船掛り致し廻船の出入を亂妨し候節は追擊に用立候堅艦無之候はゞ其表も同樣惟手を束ね神風にても待候の外は有御座まじく候又右の賊計を打破り追擊掃蕩無差支程の堅艦だに有之候はゞ又何の患ふる所候て邊海一ヶ所の砲臺に不貲の御用途を被費候はんや寅年春亞船横濱滯在中夷人どもも夜に紛れ竊に新築砲臺邊をも端舟を以て見巡り其頃土工最中にて候所夫を見て拙謀の極と嗤咲候由の風聞も有之候ひき外人嗤咲候は西洋窮理の成法によらず妄人の杜撰御取用に相成候故に可有御座候事立候舉動は一事にても天下之御榮辱に預り候別して近來海外諸國船數多く御許容の場所へ入込居自然

伊敎老

と御國内の擧動探知候時節に付別して此所に御心を不被用候ては叶はぬ事と奉存候其表砲臺理を盡されず候事悔て反らぬことに御座候處是は阿部相公御首座にて御處置御座候に付き其責此公に御座候とも可申候然る所去月中御不幸と申す事に候左候へば其御跡御引受御座候は多く牧野相公に可有御座候相公に於て當今防海の大利害を審にせさせられ其表砲臺一時杜撰の妄說御取用に相成巨萬の御失費相增し候義被爲懲此度浪華の砲臺右に認め候目論見等の御謬擧無御座和漢西洋の兵務にも通じ大小砲使用鍛錬の者御撰猶有名のものへは草莽の士迄に御詢謀御座候て然る後其結構等御定御座候樣有御座度奉存候左候はゞ御首座相替り候義に付其表砲臺の御謬擧牧相公の思食に無御座候と申義も天下に相顯れ浪華砲臺のあらん限り御令名永く世に輝き可申候伊敎老御事は御知己の御中にも候間御內話御座候て右の次第伊敎老より密に申上げられ候樣相成候はゞ尙濟はれ候義も御座候はんと奉存候當今御大事の御時勢に御大計其理を不被盡無益の邊に莫大の御物入御座候時は簡要の爲す可き所に御事を缺かれ可申簡要の事に御事を缺かれ候樣相成候へば已む事を得ず

下より誅求せられ候に至り可申其誅求の果ては下より上を奉恨候樣相成其以往は言ふ可からざる事に至り可申候左候へば御餘儀なき土工の類と雖總て便利の成法を求められ候樣仕度ものに御座候西洋諸國にては防海の手段等も可成丈け財用を省き候を手柄と致し候不毛の地を墾開候にも金銀寶石硝黃石炭等相稼ぎ候にも諸產物製作候にも皆其人力を省き入費少なく候て利方多き樣工夫を凝らし勝れ候一法發明候者有之候へば自他の差別なく負惜み等の念を絕ち皆夫を用ひ候風俗故に萬事に就き良き成法多く候樣奉存候然るに本邦は猶未だ西洋の如く諸學科開け不申候故上下とも偏執の心深く負惜みの念强く依之開け可申學術も早く開け不申天下の御爲甚しき御損と奉存候當春蟻川生立歸の節面會承り候處講武所などの定式も慥に立ち不申其號令の詞など惡劣なるをば某方のに改り候も有之蟻川などの致し候所多く人も見倣ひ候と申事に候然る處此方にて改め見候へば某此地へ引入候以後同生料見を以て致し候邊には其誤り候も候て尙又初に復し候義も往々有之候ひき近來は其表にも原書を讀み候もの數多く候よしの所蟻川生一人の誤りを襲ひ候て其表いづ方と

負惜み等の念を絕ち

（當春は昨春の誤寫か）

なくカルコを二本指にて遣ひ候と申事依て生をも深く戒め精密に心を用ひ右等の誤り無之候樣精々申候へ共是も心長に今一應講究致し不遣候ては猶行屆かざる樣存じ候事に御座候小銃扱の細技にて尙此位の事に御座候是全く其人に乏しく候故の事と被存候左候て一昨冬以來稽古を始め候人を教頭として海軍御取立に相成西洋軍艦蒸汽船等乘習候修業可有之御達も御座候由の所以ての外なる御事と竊に奉存候手輕き小藝にてすら一兩年の修業にて師匠にはなられず候まして航海の術海軍の懸引等は此上もなき大藝術に候如何なる聰明特達の人に候とも一兩年の功を以ていかでか其術を諳じ得可申少くとても九年十年の寒暑を閱して其藝術に寢食を忘れ候程に無之候ては其事理會得に至り申まじく其事理會得に至らずして人を導き候時は往々大害を引出し候の基と可相成殆ど恐怖此事に御座候去ればこそ往年魯西亞のペートル帝は小成に安んせず禮を厚くして諸國有名の敎師を召來し近來トルコにても其蹤を追て海陸の兵制遂に一變し歐羅巴諸州と戰ひ候ても敗を取らざる樣相成り候と承り候英雄豪傑の處置皆如此に候故に其成功を收め候も彼の如く速と奉存候當

魯西亞のペートル帝は

第一等の御處置無之

今外國の形勢總て形の如くに候所何故に吾御廟堂には右樣の第一等の御處置無之因循苟且の御事のみ御座候哉浩歎の至りに御座候夫と申も兼ての籌策の通り人を海外に出し外國の政教兵備等親しく御探索無御座候より直に彼との御比較無御座候故自然と苟且の御風誼も不被爲振守禦の御大計も其善を不被爲盡義と奉存候人を外國へ出し候て其長を學ばせ師を外國より招いて其藝を世に廣められ候は某獄中腹稿の擬上書にも認め候通り本朝の古き御典故に御座候牧相公の御經理にて此一事御復古御座候はゞ其綱を挈げて萬目皆擧り候の譬防海の御眞計も是より相立ち可申其御令名彌々天壤と無限候義と奉存候某義も海岸砲臺等の義に付ては心を潜め候事多年に候故乍不才聊か所見なきにあらず丑年の見込に於ては既に御廟議にも相成候義其上更に蒙嚴譴候以來も讀書窮理に歳月を重ね候義に付砲臺の位置築法等に至り候ては本邦の內多く人に讓り候はんとも存じ不申自然も御時節柄觸犯之刑章御末減を蒙り候て砲臺見込等の義御採用にも相成候はゞ自ら見る可き義も御座候て某一人の幸にも有御座まじく奉存候天下は一家上下は一體箇樣に屏蟄罷在自咎之外他事

ある可からず候筈に候所前條の次第何分不堪慨憤此の數紙を重ね候義に御座候何とか御妙計を以て天下の御爲に相成候へば大慶不過之奉存候宜しく御熟計可被下候已上

七月廿二日　啓

樂　眞　君　几下

尙慨嘆の一事有之爰に相記し候横田見込の（以下切れてなし）

〔七〇四〕　村上誠之丞に贈る

安政四年七月廿二日か

秋熱尙去りかね候御眠食彌御安好に候歟近日傳承候へば去月中旬の末か其表大風雨諸方吹荒し候所も候やに候處貴家に於ては何等の御破損も無之候哉近便裁復の砌其事不承候故御尋も不申候ひき今晚出立いたし候とて廣右衛門罷越申聞け候に付右御左右承度如此に御座候不珍候へども手製之杏脯少々致送進候御哂存可被下候廣右衛門申聞け候には此方へ罷歸り候はいづれ來月中旬頃と申事に候此ものに候へば萬事心屆き候ものに付安堵に御座候其節可罷成

廣右衞門

は例のボイス殘本六本兎ても事に御惠借被下候樣希ひ申候此方に全部有之候へば夫は〳〵重寶の限に候間何分も相願候近日去る方より本邦海岸殘らず致測量度段彌利堅人より執政方への呈上譯文借受け候て致一讀候右は御覽も定て可有之と存候一應尤の道理とも聞え箇樣の運びに至り候はんと申事も已に明白なる事にて候此文理をば岩瀨修理殿始め感服の樣子にて御勘定所などにても拒み方あるまじき樣にも被申候と承候所是等道理を以て拒み候に何ばかりの事も無之容易の事と存候周易の王公設險以守其國の大義を申候へば論もなき事と存候然る所何を申も同力度德同德量義にて國力此體にては道理十分有之候ても其道理立ち不申扠々痛憤之至と存候事に御座候然る所今日に至り候ても猶第一著に目を注がれ候人の無之候は扠も〳〵世は季に成り候て聖德太子の未來記に有之候如く此國遂に夷狄の有に成もやし候はんずらん其前兆かと益す〳〵大息にたへず候聖德の未來記大略中々不思議なるものにて候御覽候事も無御座候歟太平記評判中玄慧法師が師道を說く條に慥か有之候と覺候難信と申せば申すものゝ唯この評判を著はし候ものゝ了簡に出候と致し

聖德太子の未來記

候ても此節の體たらくを掌を指すが如くしるし有之候事は不思議なる事と存候其表には類本も澤山可有之候へば御一覽可被成候もし早速書物無之候はゞ此方の書其卷便に附し候と也又は其條寫させ候と也掛御目可申候思召次第可被仰下候先は急便草々如此に御座候秋氣千萬多愛

七月廿二日　子明

村上賢弟几下

返〳〵ボイスの事何分御允諾可被下候至禱

〔七〇五〕林修三に贈る

安政四年八月廿二日

尊大人御不幸も忽御小祥

拜白日月矢の如く尊大人御不幸も忽御小祥に近く相成別して可被思召出と奉推察候家父に於ても三十年來一日の如く御懇意に致候て猝に御永訣申候事誠に殘念之至と時々申出悼惜候義に御座候先達ては御丁寧に御手狀をも被下候所此節柄不及拜復失敬之段拙より宜く申上候樣申付候偖其後櫻井子に御託し

御墓面文字之事

御墓面文字之事被仰越此節右等認候は如何に候へども三十年來之御懇意之廉

空しくし候に忍びず且は姓名も顯はれ候はぬ事故乍拙劣執筆候はんと存じ候
折柄此程も御催促御小祥之御開に合ひ候樣と申御事に付密々相認申候聊か地
下尊靈を慰し候までの志に御座候右の思召にて努〳〵家父の書などと決して
他へ御洩し被下まじく無餘儀邊へは貴兄御自筆に被成候趣に御申置可被下候
御兩名御不治定と申御事故形の如く相認置き候但し御氏は表面に有之候開側
面に又々出候ては重複に相成且古例に無之事に就き相省き上に孝子の文字有
御座度候初め櫻井子に申候は貴兄自然御召出しの命を不被蒙候ては人子たる
もの私財あるべき樣も無之候へば御墓石も王父君御建可被成筋と申候處結構
被蒙仰候御樣子に候へば貴兄の御立被成候にて筋宜く奉存候若王父君御建立
と申ものに候へば表面も是にては然るべからず林某之墓と御實名に被成候か
又は御通稱墓と無之候ては不相叶左候て側へは老父某立と可有之事と奉存候
自然も左樣御模樣替御座候はゞ無御遠慮可被仰越候御卒日は御家牒も有之且
御墓文等も其内御製しに可相成候へば無之方可然旣拙祖父墓表なども家父手
書に御座候所卒日は記し不申候此段も御承知可被下候扨御生前蒙命候ソムメ

ルを讀詩十首殘らず認め候樣にと申一軸其内意の進み候節揮灑候はんと等閑に致し候内捗らざる御不幸にて御生前一日の御慰にも不相成候こと愧負之至千萬悔恨候へども不及是非乍然御違約は申さゞる心得にて右十首相認候所其後淸の阮元が望遠鏡中望月歌を和し候一首有之大人御在世に候はゞ御目にかけ候はんものをと家内共とも申合候義に付致追書別に小詩一篇を題し跋尾に加へ候此節柄故態と歲月は記し不申唯延陵季子が劍を墓門に懸け候同樣の志に御座候此度一同持せ差上候間御落手之上御牌前へ御備被下度奉賴候將今日晚景近邊出入のものより櫻井子ゟ手簡等は無之唯口上にて此方へ届け呉候樣有之候に付届け候とて尊大人御肖像並に奉書紙一刀相届け候一切書演無之候故事の次第不相分候へども御肖像は定て贊辭にても御賴御座候高意と被相察忝は全く御惠投被下候義と感戢不淺奉存候明朝人差出し候はんと存じ申付置候に付御肖像も何とか題し返璧申度候所餘に差迫り候事故に趣向も浮みかね候間是は出來次第跡より御届け申候樣可致候先は御小祥も相逼り候事故御墓表文字御聞に合候樣にと如此に御座候秋冷折角御多愛奉祈候不一

（小詩は第二卷詩稿十七頁哭林大輝を見よ）

八月二十二日　　　　　　　　　　　　佐久間恪二郎

林　修三様　侍史

附白貴家北堂君御始此秋冷之候何之御別條も不被成御座候歟江府王父君にも愈御健安にて時々御便御座候御事や御左右委しく承度奉存候然ば尊大人へ奉貸候藥劑字書御寫取相濟候はゞ此ものに御投還被下度若尙御卒業にも無御座候はゞ御卒業の後に幸便御返し可被下候將昨夏大人此方へ御出被下候節コンスブリユウの譯書後世輩の爲かねて家塾にも備へ置き候所慥か米澤にてか活印致し候陋本にてしかも藥方の卷無之不都合に付御藏本藥方の卷だけ拜借小門生に寫させ申度と御無心申候所御承知被下其內御廻し被下候はんと御約束にて候ひし所誠に意外之御凶變遂其義も空しく相成申候決して長留は致し不申小生を督し早速業を卒へさせ直に返璧可仕候間御都合被下右藥方の卷暫時御惠借被下候はゞ感佩不少可奉存候來月は寡君にも參府に相成候に付慥かなる便も易得候此ものに御借與被下候はゞ來月中に無相違返上可申候以上

安政四年八月廿二日

〔七〇六〕　勝麟太郎に贈る

蒲月念二之華簡拜接御學況倍御清勝之御便拜聞奉慰傾企候永日を消し候爲にとて淸商の呈稟幷に六合叢談抄御寫させ御送り被成下乍每度御深情不淺難有奉多謝候淸商之呈に據り候へば國中の亂も十之七八掃平など相見え候へども金陵を復し候にも至らず又英國と兵を結び候ては此末如何成ゆき候はん歟尙甚氣遣はしきものに御座候本邦ゟ申候へば震不于其身于其鄰とも可申候へば如何樣にも戒懼修省之實功を加へ度義と奉存候春來彼方留學之御策も被行候はんなど被仰下候所只今に思召通にも叅らず候御事と被察候因循苟且之弊一日の事にあらず候へば是又深く恠しみ候に足らず候歟永井殿御事非凡の御行と承り不勝傾慕候但海軍學局を開き海軍の御世話被成度見込御座候との事其志は壯大嘉すべく候へども未だ其道理を得られざる事と惜み存じ候義に御座候いかにとなれば一年兩年の修業にて海上の軍務等其世話行屆き候樣の手易き事に候はゞ魯西亞之伯多錄も近年之都爾格等も外邦の名士を招來致し申間

敷依て海軍御取立等も唯一時の文具にのみ被遊候思食に候はゞ夫にても事濟可申候へども大日本の海備をして眞に外蕃に恥ざる樣被爲在候はんとには外蕃より名師を御招來御座候て夫を以て教頭に被遊候はでは迚も〳〵行屆き申まじくと奉存候高意には如何被思食候や右新聞御投惠之拜謝旁早速拜復申上度と奉存候所其頃是よりも達高聞置度事件も候て兩度迄發書も仕候義に付餘り屢々の往復も此節柄如何とも存候且は御勤學中御妨にも可相成と相扣候内又々初秋六日之芳墨相達し難有拜見仕候其御地霜臺又交代に相成候故萬事御引受にて殊に御繁雜と申御事乍然御興居彌御多祥被成御座候段浣慰不過之奉存候江府御留守宅にも益御碍も不被爲在奉拜慶候賤家幸に無事罷在候間乍憚御省念可被成下候右御多忙之御中荷蘭舶入津にて御新聞の次第數帋御書留御惠示被成下乍例耳新しき事ども多々拜聞屛居之樂是に加ふるものなく千萬奉銘謝候彼方日新の學不相替盛なる事と不堪嘆嗟候御書留中高按之次第一々御尤の御事と左祖仕候魯西亞の密計にて撈葛剌の亂を嗾起し候は差向き本邦の大幸と不思議に存申候六萬の衆と申す上に久しく英國に屬し候地に候へば彼

撈葛剌の亂を嗾起し

安世義其表へ罷越

倆も中々に可有之左候へば早速掃蕩にも至り申間敷被存候何とぞ其間に文具に無之眞正之御武備之相立候樣仕度ものと奉禱祈候義に御座候安世義其表へ罷越し候由高塾に相願度樣申候趣も被仰下親戚之至情稍降心之義には候へども段々内密申上候墮落之上心底宜しからざる者之義に付何かの義有之御迷惑筋等引出し候はんも難計深く恐惶之義に御座候人にして恆なければ以て巫醫と爲すべからずと申候所恆の守無之堯舜の道孝弟のみと申候所孝弟の情至て薄く唯利のある所に趨り候樣存じられ候間何分も御油斷なく御取扱可被成下候洋書の義に不正之筋有之候とて譯司四五人召捕に相成候との事品川藤兵衞はかねて懇意に致し候義に御座候是など其四五人の内には無御座候や甚氣遣候間便間有無御報聞奉冀候洋書之利を貪り候故遂に此禍を引出し候義と被存候當年入津の舶には定て書籍類測器等も多分載せ來り新珍之品々可有之候價なども必ず是迄の如き法外之義は有御座まじく被相察候兼ても願ひ置き候義共何分乍御煩瑣宜しく奉希候圖書等も其表にて仕立可申諸用器當年之舶に積來り候との事幸甚之義に御座候何とぞ公邊向に御差支無之樣仕度ものに御座

候其表にて愈ドリユツケレイにても盛に相成候義に候はゞ何樣の書にても手輕に手に入可申先已に欣喜罷在候今信何ぞ奉呈度候所遠路心に任せず乍聊料にて懸御目候何か菓子にても御調させ被召上可被下候先は兩度の拜復草略申上候最早此地なご秋冷に相成候其御地とても追々冷氣に相成可申候折角御保重被成御座候樣奉禱候餘は尙後便可申上候已上

勝　君臺下

八月廿二日　　大星拜復

（ポツトロードー兩枝ヱラスチカゴム小片）

附白御無心御座候ポツトロードー兩枝ヱラスチカゴム小片御序に御惠投被成下度奉願候ヱラスチカゴム少々所持仕候所紛失此節不自由仕候に付奉願候義に御座候何分も御允諾奉仰候以上

〔七〇七〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

（安政四年九月十八日か）

（本居の軸）

昨宵は御來訪被下緩々得拜晤大慶奉存候其節御話之本居の軸早速御借出し御示し被下辱奉謝候發途前云々御尤の事明朝は早々完璧候樣可致候疇昔の奉謝

旁匆々拜答

十八日

澹庵雅兄　大星

〔七〇八〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年九月十九日か

夜前は風烈に御座候ひし所朝來風も落ち氣候大にゆるやかに御座候御起居彌御佳勝と致想像候偖此間は兼々相嗜候妙品澤山に御贈惠被下家內擧て賞味乍毎度御芳情筆謝難盡奉服佩候拜謝の事家族いづれも宜く申上度段申出候乍憚北堂君御始可然御致謝奉希候將昨日は宣長畫贊の一幀御見せ被下辱奉存候頗る面白きもの故昨日は壁間に懸候て終日愛玩候ひし事に御座候向ふのつかへ候ものに候へば先早々致完趙候御查入可被下候先は此間の御器還上旁段々の御禮如此御座候以上

宣長畫贊の一幀

十九日

附白有合之微品誠の紙しろに御座候令愛方一時の御慰にも相成候はゞ大慶

不可過之候

澹庵令友文几

大　星拜

〔七〇九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年九月廿一日

岡野水井兩家の種痘

今朝は霜威以の外に御座候雅履愈御好安御座候歟然ば岡野水井兩家の種痘其後容子も不承候定て依舊順良と被存候最早追々落痂に及び可申候此節種子甚拂底に御座候間散落し候はぬ樣被心得取集め送り遺し被下候樣乍憚御傳聲被下度奉賴候勿論過日種子を下し候節かしづきのものへは能々申置候事に御座候何分可然奉希候偖は御預の絹近日認置き候まゝ致附上候御一咲可被下候殘絹猶有之候又其内に塗抹し可申候先當用のみ匆々頓首

廿一日

御家事の義

附白御家事の義馬場へ御催促御座候はんと申迄は致承知候處其後の御樣子如何やもはや御發駕も明日に迫り申候御樣子も無心許乍序及拜聞候

澹庵令友几下

大　星拜

〔七一〇〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年十月二日か

例の御裏印證書等

好機會に候間竹村は留守に候ても

今日山寺見えられ談次貴家之事に及び某心得候丈の義十分に演說候所同氏大に開悟之樣子にて愚意と盡く同意之趣を被申候但不審に存じ候事は賢友御話にては例之御裏印證書等一と先山寺氏へも御見せ被成候樣に承候處今日同氏被申候には右樣之書類遂に見及び候事無之若右樣之慥かなる書類有之候に於ては某見込の義誠に論も無之事と被申候依て某申候には左候はゞ早速差出し御目にかけ候樣可申通候間宜く含み被下候樣申候所同氏挨拶に御勝手掛の方も乍不肖持居候事に付如何樣も同寮とも申談じ可申と申事に御座候右之好機會に候間竹村は留守に候ても先速に例之御書類御持參御示し被成候方可然と存候右に就き愚意には岡野氏御同伴御座候はゞ更に可然と相考候昨年中も貴家の談に及び候所十分に折合ひ不申然る所今日十分に折合候義は竊に察し候所多分例之岡野氏よりの一策馬場より內話にても有之候ひし事と被存候いづれにも宜しき都合に御座候間某より內々御申通じ致し候趣にて尙岡野氏とも

御相談早速御出向被成候樣所祈に御座候某に於ても竊に大悅候まゝ草々如此に御座候以上

二日　大　星　拜

澹庵賢友內事

〔七一一〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郞氏藏

冬晴御興居何似然ば過日試み候樣御申被遣被下候炭甚好く是迄用ひ來り候とは夐別に付何卒此方へも遣し呉候樣炭工へ御申被下度奉冀候此程より右之義御賴申候樣家內共申聞候處忘れ居今日受催促候に付如此御座候乍序得貴意候過日山寺氏より見せられ候爭座帖校本寫させ置き候間御慰に掛御目候五品以上の以上の字升の字大に益を得申候乍去跋尾にも認め候通全唐文にも三字の脫文有之候此に至て陝刻のますく貴きを可知ことゝ存候此校本は追て御還し可被下候以上

安政四年十月十三日

山寺氏爭座帖校本

陝刻の貴きを可知

十三日　大　星　拜

子靜令弟　几下

〔七一二〕　八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年十月十七日か（竹村と劇論）

風故か寒冷に御座候愈御無恙にや御動靜承度候然ば夜前竹村氏見へられ候に付貴家の義に及び段々劇論致し大方は議論片付申候右之義に就き一寸御面話致し度候間御差支も無之候はゞ今夕にも乍御苦勞御枉趾可被下候何も拜眉の節さ匆々以上

十七日　　大星拜

澹庵賢友

〔七一三〕　八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年十月廿二日か

過夕御來訪之節は乍每度預御土産痛入辱不勝感謝候然ば及御内話候貴家之義に付沼田屋呼寄せ申談じ候處（昨廿一日の事也）某見込候かねての趣意よく呑込罷歸り候其上大藏より承り候へば此間の劇論には實に竹村も心服候樣子にて既に大

此間の劇論には實に竹

村も心服候様子

藏へも某の正論には一言も無之右丈の事一昨年精々被申候を夫程の義と不存等閑に致し候事愧入候と懺悔有之候よしに御座候左候へば此度は愚意もつらぬき可申と存候委細竹村へも申置き又大藏へも能々心得させ候事には候へども例之證書寫御渡し被成候節尙又某が云々見込を付け候迄は賢友とも御三代右に御念慮をも懸られず候御本意の空しからず候樣被成度と申事は能々御申被成候樣存じ候昨日大藏へ内意申聞候義一寸得貴意置候序此義も御心得迄申進じ候草々以上

廿二日

大星拜

澹庵賢友几下

〔七一四〕 山寺源大夫に贈る

安政四年十月下旬

重陽には少々御失調の樣奉窺候其後被成御續御平善御座候御事や御左右委敷承度奉存候然ば魯公の爭座位稿往年慥か全唐文を以て御參校御座候て定本御出來に相成候樣奉存候右御定本暫時御惠借被成下度奉冀候萬所仰御座候已上

星

附白家父近日一詩有之候内々錄し入御覽候御一讀の後御燒捨可被下候

聞虜使得允入城

忽傳虜使入都城　幽憤無那雙淚生　長策蒿萊久埋沒　異言朝市尚縱橫
小童十歲統戎務　新學三年操海兵　虎狼野心非一日　將迎愼莫示吾情

懼堂先生臺下　　恪再拜

〔七一五〕山寺源大夫に贈る

（此の手簡錯簡らしく宛名までは嘉永六年十月廿二日のものにて其の以下は安政四年のものなるべし）

冬晴彌御多勝被成御作止候や小弟は此中旬始微邪に感じ候を兩三度押し候て遂再感致し惡寒甚しく此七日許り平臥仕候仕合依て心外に御疎遠申上候幸に御照亮奉仰候然ば爰に一奇書有之殊の外先方急ぎ候者には候得共餘り珍敷もの且當今人々の心得にも相成候ものに付上覽に入れ奉り度御手迄差上候宜く御取計可被下候晝後には先方より必ず取りに參るべく候間御一覽被爲濟候はば□□□被成下候樣奉願候標題を譯し候へば千八百十三年十四年十五年三年

開の世界大戰記と申事に候則ナポレオンが軍に御座候開卷第一に有之候像卽其人に候圖の版は銅鐵へ刻し候ものゝよしに候小弟など是迄鐵版の名目承り及ばず勿論見候も初めてに御座候但し此書の圖を見候て存じ合せ候へば當夏異船來著の砌蒸氣船の小圖を上へ獻じ奉り候事御座候が夫は多分鐵版にて可有御座候又銅版石版の及ばざる精巧の所有之候と被存候戰記の書法も巧者なる事にて初に其兩軍を總致し其後左右翼中軍後軍等別々に致し記載候ものに候夫故に明細にて分り宜しく候小弟冤角頭痛强く執筆迷惑候に付不能多書草草頓首

廿二日

附白䜺卦國字解の御稿本二三子へも相示し候所一日も御早く御脫稿被下候樣一同相願候則返璧仕候續て御淨寫に御取掛被下候樣御多務の御中奉願候も恐入候へ共是又世上の裨益にも相成候事に付何分も御撥冗御卒業可被成下候以上

三白爲念申上候此書二本にて其價八十兩と申事に候二三十金位に候はゞ望

䜺卦國字解

も有之御買上の義申立候てもと存じ候所餘り方外の沙汰に付不及其義候右の價のものに候間御次などにて雜に御示し被下候義は御用心可被下候

山寺源大夫樣　　佐久間修理

（以下が安政四年十月廿七日の一か）

附白朱子燭籠之喩之條語類附上仕候樣本文相認心當之所檢索候へ共久く打捨置候故か何分早速に見え兼申候依て是は見出し次第跡より差上候樣可仕候但記憶罷在候大意は經文は譬へば燭火の如く注文は譬へば燭を覆ひ候籠の如くにて燭籠の格子密なれば燭火自然と暗み候樣にて經文の注脚も密に過ぎ候へば本文却て明暢を缺き候樣相成候と申大意にて御座候ひきいづれ委くは語類にて御覽可被下候偖實用日抄も多日拜借罷在爭座帖校本のみならず種々珍きもの共一涉異聞を弘め難有奉多謝候則返璧仕候御接收可被成下候過日も申上候通御校本の上を猶又陝刻を以て致覆詳四箇所補ひ候所御座候跋尾認め候まま呈覽仕候

實用日抄

跋二爭座帖校本一

是山寺不息所レ校、其朱書者、蓋全唐文所レ載也、丁巳秋借觀、以二陝刻一再校レ之、此本父子之

軍之上無以字、汨其志哉之上無能字、何必令他失位之上無亦字、而升別二字不加乙、按其文勢皆當以陝刻爲正、故今補之、

象山外史識

〔七一六〕 村上誠之丞に贈る

東京市　宮本仲氏藏

安政四年十月廿七日

七月廿三日附之貴簡相達し久々にて披讀面晤を得候如く存じ致大慶候總じて御異事も無御座候とのこと降心不過之候此方浦町にも爰許にも如舊御座候開可易御心候中元にも被掛御心品々被下乍毎度感愧之至御座候御頼申候步兵調錬圖も早速木村へ御囑し同人手にて寫し候圖懸御目候所殊の外宜しく出來候に付其儘御任せ御頼置き被下御面會之度毎に御催促も被下候趣御申越被下候故其內には御送も可被下此節柄夫を待て一同可及裁謝と延頸罷在候へども久しく御音耗も無之候に付七月中之御挨拶旁既に可得貴意と存じ居候處へ去る十八日か本月六日之御一封浦町より御屆け被下忙手披見候所寒冷之候彌御無恙のよし先以慰遐想候偖又御頼申置き候圖美事に出來御送被下千萬辱御禮難申

步兵調錬圖

盡候いかにも宜しく且丁寧にて西洋原版と分寸を爭ひ候のみと被存候木村いかにもよく致世話被呉候事と存候夫も畢竟被入御念御賴被下候故の義と呉々も辱致感泐候此寫手にては寫料も定めて貴かるべく貴く候て固り苦しからず今何程殘金相送り可然や早速可被仰下候木村も大厄介致し被呉候事と存候まゝ何ぞ謝意を表し度候處此節柄其義能はず但近作に月の詩有之候少しは珍しかるべくと存じ候閒錄し候て賢弟迄相送り候年號も何も無之候へば先年手に入候分にて所藏有之何の差支も有之まじくと相考へ候是を賢弟より能き樣に御計ひ御贈可被下候圖面いかにも宜しく出來候悅の寸志迄に御座候此墨は外より到來有合候まゝ賢弟へ御目にかけ候御咲留可被下候偖又每度別條御記し御送り被下辱致大慶候此度彌利堅官吏登城並に都下遊步其他應接向の大略御承知之事御座候はゞ極密御聞かせ可被下候外國の人營中迄も入り候義を御許容御座候程にて此國ゟ人を出し萬國の形勢事情親しく御探索有之べき御策の立ち候はぬと申は何故の御事か例之慷慨に堪えず候て賦一詩候

近作に月の詩

忽傳虜使入都城　幽憤無那淚涕生　長策蒿萊久埋沒　異言朝市尙縱橫

小童十歳統二戎敎一　新學三年操二海兵一　虎狼野心非二一日一　將迎愼莫レ示二吾情一

愚意には兎にも角にもかねての籌策の通人材を撰で外蕃諸國へ出し其長を學ばせ其政敎兵力の程をも能く〱探知し此方へも責めては荷蘭一國より也とも有名の大家を御招き夫を以て敎頭に被仰付海陸の練兵等も御座候樣有御座度候處童兒輩にて陸兵を頭取候の漸一兩年致修業候衆中敎頭に成り候て海軍稽古始まり候のと申樣なる事彌利堅官吏などの耳に入り候はゞ何と致し候ものの歟と涕泣長大息の外無之候憤嘆の餘遂及此事候御覽後御燒捨可被下候先は兩度之貴報迄如此に御座候時下折角御多愛所禱御座候苦しからずば北堂君並に令配へも宜しく御致意可被下候以上

十月廿七日　　大星白

村上賢弟

附白此帋も早速認め可申と存じ候所風邪氣にて六七日平臥夫故致延引候其表も風邪流行の事被仰下候が此地も同樣にて一統感じ申候某も遂免れず候ひき乍然幸早速に快方候まゝ幸に御放念可被下候舶來洋書澤山御座候所云

云之次第にて御手に入兼候由遺憾此事に御座候洋書有用之品天下に水火穀粟の如くに致し候も容易なる策に有之候所古賀殿など夫等の事に念慮無之候事歟當年に至り候ても御仲間にてだに一向手に入りかね候と申は不審千萬なる事に存候此節蕃書調所にては何等の業始まり居候や詞書など取立候はん目論は無之候や何ぞ天文暦學の外に別に學科を被設候事は無之候や測量の學なども開け候樣御達しも有之候樣承り候測量器械にも珍らしきもの御備に相成居候事か古賀殿にも自分に洋書を被讀候事か何程の力量に被成候事か是等便簡御報聞可被下候

古賀殿など

一、マーリンの事何分御遺忘なく御賴申候以上

マーリン

〔七一七〕山寺源大夫に贈る

安政四年十月廿七日

昨日は御書惠難有拜見仕候霜氣も如仰先緩やかなる方に御座候倍御佳安奉慶賀候祖母家父不快被懸御心頭御存問被成下毎度御深情感銘不已奉存候祖母の方は大抵平日の如く相成候所家父義只今に咳嗽甚しく日夜三四度宛發汗致し

旣に昨夜御使被下候節も發汗中私代筆致し呉候にも相成かね御返事も不申上候仕合其上晝夜夥しく乍憚痰沫を吐き候處其色宛然たる膿に御座候是迄遂に無之事とて當人にても大に懼れ試みに水上へ吐き見候へば盡く浮み候て一髮の沈み候も無之漸夫にて膿には無之全く痰飮の變性致し候ものなる事を存じ安心仕候義に御座候今日に至り候ては其出方も大に減少候へば此分にては不日故に復し可申候乍憚御過念被成下まじく候

羅池廟碑帖朱子絕句集奉示仕候所御悅被仰下大慶仕候

柏原六左所望の義共

柏原六左所望の義共地震記は旣に過日も申上候通の次第四祖の墓碑と申ものも一覽候處何分手を入れ候に難相成候命意結構の箇様なるもの家父いか樣手を加へ候とても好文章に相成候はんやう無之去りとて此趣意にては賴まれ候とて筆を立て候事能はず依て是は是にて建立候が宜しかるべくと申事に付二冊子附還仕候扨又同人より遣し候料紙並に絹展見候所詩は長篇を認め候への雨中夜陰の山水の作にて世の中を其暗きに比し候詩を懇望のと申事に御座候所詩の賞音固其長短にあらず家父の詩長篇優り候と存じ候ての事歟家父元來

詩人に無之候故得意の長篇など申もの一向無之又父祖以來かゝる難有太平之御世に生れ出候ては其難有事こそ謳歌もし候はんずれども雨中夜中之詩を作り候て世の暗きを譏り候はんなど誠に家父なるものなどの存じも寄り候はぬ事と申ことに候依て料紙絹ども外より取次ぎ候品にても候へば直に斷り差戻

過日御訪問の砌も

し候筈に御座候へども過日御訪問の砌も御懇の御口上も有之又昨日之御書中にもわけて蒙仰候義に付御體面を奉立候て先其儘預置き候へども當人拜謁仕候折も候はゞ一應御教誨之上當人何なりとも可然賴み候と申に候はゞ先年認め候分に對し揮灑可申若猶望ケましく申候はゞ夫を鹽に御取戻し御返し被下

覺巖髑髏贊

候樣仕度と申事に御座候覺巖髑髏贊並に家父の檃括致し候をも仰に任せ別帋に錄し懸御目候乍然必ず他へ御話は御無用に可被下候其子細は箇樣の筋はいか樣申候とて世上俗人の知得べき所に無之又不申候とても識者明者は能承知の事に候へば先申さぬ方と申事に御座候幸亮此意

角毛偶語

角毛偶語と題し候雜書是迄名も存じ申さず御藏本御座候はゞいつぞ御惠示被

佛骨表攻め方

成下度右書中には韓子の佛骨表攻め方淺き樣申有之よし家父存意にはかの一

表は全く憲宗の佛骨を被迎候を諫め候が主にて候故其勢彼の如くならざるを得ざる事にて丁度醫の病を治むるが如く頭腦の病は頭腦を治め手足の病は手足を治むるに無之候ては難叶其病む所淺く候を只顧に深く治め候ては端的淺所の病の爲に不相成候是佛骨表の攻め方淺き所韓子の韓子たる所以たるべくと申候偶語之説は如何御座候やらん一讀仕度ものに御座候

內密申上候兩執政確執の義絶無之事と子習君御案も御同樣と申御事夫にて先大安心仕候いかさま不取留事を致推量候ものゝ說にても可有之候吳々早速御探索被仰下難有奉存候

礟卦和解

礟卦和解彌御認足し被成下候に就ては先達て門生へ示し候爲拜借仕候御草稿完璧仕候樣被仰下早速依田源へ申遣し候處是より轉傳鹽野氏迄參り居候取戾し候にも無人彼是手間取れ遂今日も遲く相成候取戾し則還上申上候何分も乍御煩勞奉願度奉存候朱子燭籠之喩語類中いづれの處か御覺無御座候と被仰下候に付其條有之候一本に紙片を挿み候て差上申候序文は仰の如く再考の長き方に仕度跋並に原序は除き候含に御座候元來近日橋をかけ礟卦板行に致し度

朱子燭籠の喩

序文は仰の如く再考の長き方に仕度跋並に原

候に就き先年渡邊源藏に命じ板下認めさせ置き候を無心申度其目論手は門人中いづれも有志のものと申內佐倉藩齋藤と申事に御座候然る所礮卦板行之事福山侯御手にて御差留に相成候後も肥後藩莊村庄林二生國元に於て誰となく印刻候事は苦しくも有之まじく西國邊にては刻書の網も至て疎に候へば家父だに許容候へば早速取掛り候含に御座候ひき是は丑年冬の事に候然る處家父存念には孔子祭器を簿正するの策にて江戶刻書の密網を一掃し申度心得に候ひし故先暫く待候樣に申肥後にて板行候事も差留置き候事に御座候只今樣の事に相成候と存じ候はゞ其前早く許し候へば宜しく候ひしとも存じ候事に御座候其莊村生は旣に長岡大夫の紹介をも致しかけ候ものにて候隨分手堅き人物にて其上是も齋藤生同樣算術に長じ居り家父每に及び候はぬ事と申候ものに御座候右之莊村に一度許容致しかね候と申候を今更箇樣致し居候て著書板に成候を喜び前後を顧みず此度書せ置き候板下迄を遣し候はん事本意にも無之且莊村へ對し候ても義理合然るべからず雙方へ及談合候て共々謀らせ候義出來候へば申分も無御座候へども此節同藩中の知音にてすら文通等出來かね

序は除き候含

礮卦板行之事

肥後藩莊村庄林二生

孔子祭器を簿正するの策

和解御卒業之上……直に齋藤生迄御送り

候次第別して他藩且佐倉は此節御役家には有之文通の叶ひ候義に無之其事の橋かけ致し候ものも誠に祕中の祕にて只管家父の著述の世に弘まり候を目的と致し候と申事に付甚不都合千萬にて所謂隔靴痒處を搔くにて御座候其上實は先年御目にもかけ候通りの願文なども出し置き候義に付本文は長く家刻に致し度含なきにあらず乍去此節目論候者の志を空しくし候はんも惜むべき事に存じ段々愚考候處御筆勞の和解之方を以て此度の需に應じ候へば當時有志の士を敗らず肥後藩の士に對し候ても子細無之本文をば刻し候て長く家藏に致し度と申存意も屆き前後自他宜きを得ざる所なく候と存付候故既に此間も御煩勞之義奉懇請候事に御座候只今より願ひ置き候は和解御卒業之上兎てもの義に御一書を御添へ直に齋藤生迄御送り被下候はゞ尤も妙絶と奉存候此生之名前年齡職名等御尋に御座候處職名當時いかゞや存じ候はず多くは以前の如く侯の御側向にて專ら砲學教頭の方勤め居候事と被存候名は初の名碩五郎只今は彌一左衛門と申候實名並に年齡は別帋拙文に詳に御座候此稿外に留無之候間御電矚御擲返被成下度奉希候

將過日蒙御賞玩候鹽藏櫻子一時之御慰迄に呈上仕候其節も申候如く采時兩三日後れ候故常年より宜しからず候時は先ち候ても後れ候ても萬事ならぬことと此些細なる一事にても發明候事に御座候昨日之拜復旁草々申上候不謹

十月念七日

此乕認畢り候所へ或人參り申聞け候は御近所宮下氏疫熱にて容體宜しからず氣遣はしき程に申候が果して然候や否や當人の外家内大分疫に感じ候もの多く候よし此度等にて家相の無益なるを存じ付き候へば宜しく乍去舊友危篤の疾心を勞し候まゝ御存知之慥かなる義承度爰に附書仕候幸賜御答

懼堂先生　三席　　恪　拜手

安政四年十月廿九日

〔七一八〕　山寺源大夫に贈る

東京市　山寺源太郎氏藏

過刻は此間之拜復迄に申上候義に御座候處御繁務之御中累幅之御細酬何とも恐入奉存候祖母家父之義も毎度被掛御心頭難有奉多謝候家父義も今日は午後より別して咳も遠く相成候樣子に御座候間乍憚御省念可被成下候角毛偶語之

角毛偶語

事いつぞ拜見も仕度申上候所早速に御持せ被成下是又望外之義丁度病間讀過候に宜しき品とて家父も大悅能々御禮申上候樣申聞候此本福島勝樂隱居在京中呈上候ものゝよし右に付同人物故之事も御惜被仰下家父も御同意の事と申事に候大分に世態を辨じ候もの且宗門之意にも精しき樣子に承りいつか良き折も候て一面をも致し其話言をも承り度と存じ居候所舊年俄に殁し候よし殘り多く候と申出候義も御座候ひき將又櫻子漬呈上仕候所御移にとて五味子漬拜戴珍感之劇不知所謝奉存候御使參り候節祖母の旁に罷在御同敎拜見仕らず候內先賜ものを披き候處美色粲然目を照し候には皆々驚き候義に御座候祖母なども誠に始めて拜見箇樣の品見及び候事無之何と申ものにやなど取〳〵申候內家父申候に多分五味子なるべし御誨答拜見候はんとて莊誦候へば果して五味子にて一同一咲皆々一房づつ拜味賞玩仕候義に御座候孰も能々御禮申上候第下へも被差上候との御事產は西條山のよし此種に慥に南北之差異御座候樣覺え候ひき是はいづれの方にや御序に御敎示可被成下候顏色いかにも美事なるものに御座候諸國產物之內種々漬物類も御座候所都門に久しく罷在諸國

の士より其土產とてもらひ候品も數多く候ひし所此五味子漬と申ものは遂に無之且承りも及ばず右故祖母初殊の外珍しく賞賛候義に御座候御漬込は御工夫に御座候か又いづれよりかの御傳法に候や是又御序に御誨示奉仰候偖又宮下氏不快餘程の難症の樣にも承り慥に御承知之所拜聞仕度申上候處昨日御見舞御座候節の樣子並に今日拙簡差上候後以令郞御尋御座候容體委しく御報聞被成下難有奉存候昨日之下利甚敷食氣乏敷大に疲勞候と申樣子は家父傳聞氣遣候と合符節候次第にて心痛なるものと申候所今日に至り夜中のまゝ下利無之食餌も朝中かさに輕く一盛進み候と申事に候へば昨日迄の處所謂其峠にて今日より稍快き方に被向候義かと被卜候何分も左樣致し度ものに存じ候事に御座候御賜物並に偶語之御禮迄草々申上殘候以上

小盡

御別幅之義何共恐入候乍去是は唯夫子自謂也と家父は一咲仕候義に御座候呵々

山寺先生臺下　　　　　　　　　　恪　拜覆

安政四年十一月三日か

〔七一九〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

昨日は御細答一々得其意候別帋返還御收可被下候扨此間御內話に付ての見込いづれにも竹村能く心得呉られず候ては不都合にも有之御歎願書出候にも其先を開き候ものの有御座度候所外に人も無御座候に付某より內々別帋を贈り候はんと存候て認め申候自然事實之相違等有之候ても如何に付一寸御內見可被下候此程御內話之大略は此通と存候が如何や事實もし違ひ候事も候はゞ御附札にても被成被遣可被下候是等の事此節柄祕中の祕に候間其心得に奉賴候以上

三日

大星

八田賢友

安政四年十一月六日

〔七二〇〕 山寺源大夫に贈る

此間は再々御誨答御用多之御中御六かしく奉存候爾來先嫩寒にて南至に近寄

江府虜使登城始末

り候處雪も無之例年より大に凌よき樣覺候時下御體候倍御淸勝被成御座候歟奉窺候然ば傳聞候に江府虜使登城始末委しき書立御手へは既に御到來のよしさる仁などは拜謁の次御示し御座候ても一讀をも願はずと申上候樣承候所夫には反し候て一寸片端を承候へども渇望に不堪御無心申上候御寫し留も御座候はゞ暫時御惠借被成下度奉懇乞候蒙允命候はゞ何惠當之と奉存候此品乍如何到來に任せ懸御目候晩來御下命之御一種とも相成候へば大慶不可過之候先は拜願之義のみ草々申上候不字

六日

近作林修庵像贊乍序錄往仕候謬も候はゞ何分も御指摘奉願度と申事に御座候以上

懼堂先生　三席　　　　恪　再拜

安政四年十一月九日

〔七二二〕林修三に贈る

至後に相成候ても雪も無之右故か寒氣も例年より緩やかに御座候北堂君御始

御小祥之期

愈御佳安被成御起居候御事や御近況委しく承度奉存候爰許老少瓦全罷在候閒幸に御過念被下間敷候光陰矢の如くにて先考御小祥之期も被過候へどもいつとして御追慕之御弛み候御事も有御座まじくと不堪推察候御内託之御像賛も既に認め置き拜借之藥劑篇も校正相濟候に付幸便を待居候處至て都合よき便を得候まゝ二件とも致完璧候御接收可被下候御像賛款識を缺き候は此節柄態

御像賛款識を缺き

との心得に御座候其内再び世に出候事も候はゞ其節款印可申候藥劑篇原書と引合せ候處秤量の誤は至て少く候ひき語の誤も一々正し置き候是は拜借致し候御報禮之印迄と存じ候義に御座候先は用事のみ草々申縮候時候折角御厭被成候樣所祈に御座候北堂前へも乍憚宜しく御申上可被下候已上

十一月九日

附白薄々傳聞候へば加藤高瀨上野諸友嚴譴を得られ候よしいづれも讀書講學の士いかうの大過も有御座まじき事と被存候所右樣之次第と申は偖々不得其意候仕官之上には重き罪を蒙り候とて必しも恥べきに無之又顯榮思ひのまゝに候とて必しも譽むべきに無之唯その義理如何のみに候と存じ候義

に御座候諸友得譴之緣故御承知之御事にも候はゞ極密承り候て安心も仕度乍序及此義候事の次第內々御報聞も被下候はゞ千萬辱可奉存候以上

〔七二二〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郞氏藏

安政四年十一月九日か

南至に相成候ても雪も無之寒氣も緩やかにて凌能き事に御座候貴家被成御揃愈御佳安に御座候歟然ば虜使登城之大略を錄し候もの手に入候間懸御目候過日上げ置き候をば此者に御擲返被下度候以上

虜使登城の大略

至後一日

粉子相場

附白春夏之際拾圓附上御代市を煩はし候粉子は三拾幾表にて候ひしや當年は先入用も無之とは存じ候へども心得の爲承置度候乍御手數御批誨可被下候

子靜賢契几下

大星拜

〔七二三〕山寺源大夫に贈る

東京市　久保來復氏藏

安政四年十一月十日

御手教拜見仕候如仰昨今寒氣も稍相加り候へども倍御萬福奉恭慶候然ば宮下氏不快手充の事愚案申上候次第も御座候處御斟酌之御場合も候て御發言候にも相成兼候趣家父も七日夕被仰下候容體には實に驚き候て其翌日か白井子迄返却の品有之候序御手帖をも相示し愚意申遣し候義も御座候處昨朝返事有之夜前病者へも云々申聞け候と申事にて候ひき然る所小數之惑溺今に至て醒め不申方位等を以て醫を招き候など不及是非氣の毒なるものに御座候然る所其招きに應じ候策意も大草と同案にて附子の症と見込み既に大草には四逆湯を投じ候所致相應心下も和らぎ精神も稍はきと致し七分三分と申所四分六分と申程に至り候との事先可悅樣には候へども半身少々痲痺の樣子と申事右を兩醫員は全く中風之氣味に可有之と申候よし此に至て唯々相呆れ物も得申しかね候四逆湯は仲景の說に據り候へば下利淸穀手足厥逆の症に用ひ候事と存候血液烊崩便色赤黑のものに四逆を用ひ候と申事何の醫經に有之候事にや不審の極に御座候漢醫之方書は傷寒瘟疫に限らず粗の粗なるものには候へども箇樣なる事はあるまじき事の樣に存候此間も申上候腐敗熱と申事は漢醫之說に

無之事にて此邊の義は病理之講究も總て無之致講究度存じ候ても元來漢人之心得ざる邊の事にて候へば彼方の醫書千萬卷を通覽候とても知らるべき事に無之候然るを此間の御書中大草始め腐敗熱と申事粗心得居られ候と申被仰下候がいかなる筋にて右をば心得られ候事や既に其腐敗と申事心得られ候程に候はゞ其腐敗を遏止候處方も可有之候はんに其義も無之附劑等を用ひ其熱の本性にて人身の凝體緩縱血液烊解（便中黑赤のもの有之候にて徵知すべき也）四支鉛重半身の痲痺にも至り候と直診は仕らず候へども段々被仰下候所を以致參考左樣存じ候處唯其外形のみを認め中風兼幷と見込此場にて其手充迄は不行屆と申候事のよし扨扨奇怪至極なる醫案と存じ候事に御座候乍去段々仰も被下候通の次第に候へば誠に無據事當人の命脈そこに限り候義外人申に及ばざる事に御座候家父も是にて口を箝み候はんと申聞け候御在府中竹內翁木村菅沼等の傷寒之時節いづれも筑前之醫師湯本某の治療にて危篤を救ひ候事抔御考合御座候へば漢法とても一概に捨て候ものに無之と思食候よし御尤に奉存候夫はかの五穀と荑稗との譬にて五穀の熟せざるは荑稗の熟し候ものにしかず候乍去均しく熟し

候ものに候へば其竝立を得ざるも亦言詞を待ず候（此間漢洋兩立の義に付御請問御座候故如此）此事にて存出で候深川の邸にて矢澤執政危篤に及ばれ候節小山田大夫等久しく在府にて平日信任の醫師も有之又三村なども手廣にて衆醫を請じ候處一時の選と申事に候ひき然る所其頃家父には未だ西洋の一アの字だにも存じ候はぬ時にて候ひしが一二事醫理を談じ候と御座候所何一ッ妙解無之感心も仕らず候よし其後泰西之醫學に涉り候て其節の議論など存じ出候へば誠にはかなき事共かの時節家父に此節の醫術有之候はゞ執政をも必ず救ひ負せ候はむものをと時さしては申出候義に御座候無益之義相止め前條之次第思食通に參かね候さて御丁寧被仰下けく恐入候返す〴〵當人運次第何分も命脈の續き候て此危嶮をむぐり被出候樣祈る事に御座候此段草々拜復

十日

拙堂文話

附白拙堂文話の事被仰下候此書藏本無之尤も先年在府中澁谷老より借り候て一覽候よし大略松蔭快譚後半の如きものと存じ候趣に御座候扠過日より檢出之上申上候はんと存じ罷在候朱子燭籠の喩に御座候語類中大抵殘る處

なく見候へども見出しかね大全の易說綱領中に御座候て漸一兩日見付申候與趙子欽書と有之候故文集續別とも檢索仕候處是又見え不申依て大全中有之候を左に錄出掛御目候洋書に心を入れ候より自然と漢籍の涉獵懈怠に相成箇樣の事迄忘失檢查に手間を費し慚愧の至に御座候御一哂可被下候以上

朱子與趙子欽書云語孟說極詳易說太略此譬如燭籠添一條骨則障了一路明若能盡去其障使之統體光明乃更好蓋著不得詳說也

山寺先生案下　　　　悋　拜復

〔七二四〕　八田愼藏に贈る　　　　松代町　八田彥次郎氏藏

風邪兎角快からず候て例之一帋も大延引今日少く快く覺候に付別紙之通相改め申候是にては事實相違も無之と存候爲念一應掛御目候御覽後直に御返し可被下候今日にも遣し度如此に御座候

安政四年十一月十二日か

十二日　　　　大星

愼藏樣

安政四年十一月二十日

〔七二五〕 山寺源大夫に贈る

又白小詩一首錄呈仕候御一粲奉冀候以上

過日返上もの御禮旁匆々申上候處爲貴酬勞專使殊に江都新聞紙御惠示被成下重疊感銘奉多謝候御達しにも相成候彌利堅國書世上一統存外平易の事にも申沙汰し候かに承候既に來教中にも總て交易御免と相成候へば右御返翰も左迄御手間取も有御座まじく被思食候よしに候所愚見には文面至て平易に相聞え候へども御取極に相成候條約の修正も交易の模樣替も總て委任し遣し候使人の口頭に在りと申ものに候へば其伏して顯はれ候はぬ所に如何樣の險惡あるまじきにも無之候へば此後の會議を承り候迄は何とも難申けく或人來書云々の趣其實にあるまじと難申定候歟と奉存候外國へ遣し其命を辱かしめざる程の者を選び差越し候上は文書中其事を丁寧し候に及ばず既に漢土の禮にも大夫受命不受辭と有之此度彌利堅の處置全く其意に合し彼國さすがに人ありと被存感入候義に御座候尙高意も御座候はゞ相伺度奉存候偖又一昨日は令孫君

御出被下何よりの御土産戴き難有奉謝候いかにもよく御太り御丈夫らしく何より奉慶候其節何の御愛相も無之唯有合の粗品御目にかけ候所昨日は態々右御挨拶御丁寧に被仰下風呂敷御返し被下候に御移迄拜戴何とも恐入候御事に御座候又々新聞紙御手に入候とて御示し被成下毎度難有奉存候此間のとも兩通寫相仕舞候間完趙仕候御草稿ものも此間の一同愚意認め入れ返上仕候御採用に相成候義も御座候はゞ大慶と申事に御座候追々御繁劇と申御事に御座候處よく御手の廻り候義と奉感服候

好白君御書

好白君御書の寫し高庇にて初て拜見仕奉銘謝候御文體と申御書體と申恐入候義に御座候小山田大夫よく摸勒を被企候卒業に相成候はゞ御手寄にて一張乞得度奉存候御含置き被成下度候

花顏の詩書

花顏の詩書一覽如仰結句は書損にも可有之假令此書損無之候とも詩は出來ぬ人と被存候書も杜撰と思食候は去る事ながら愚見には王寵を學び候ものと被存候御右筆衆には此樣の所能書の分に可有御座候枕山生の詩も御示及久しぶりにて一見大慶仕候如仰詩も今少し出來可申筈に御座候所不調なる事と存候是も星巖などの手を離れ候て氣まゝに成候故かと被察候詩中の嫦娥氏は天帝の女にて山

を移し候二人と申事列子に見え候景山公策文中腐心の字尊意の如く苦心と何の別も有之まじく上に焦の字御座候故に腐と被遊候事と被存候全く唯字の對を御求め被成候樣奉存候昨日の御禮旁如此に御座候

返上もの左の通

御草稿　三葉

新聞紙　二綴

好白君御書牘雙鈎本　二葉

花顏書　一

枕山書　一

御査入可被成下候頓首

廿日

附白此程相窺候令孫君御朱沙記は少しく御年被成候所にて御療治御座候方可然御召使の面上も何とか致し見可申と申候を當人大喜手舞足踏を知らず候程と申義何とぞ其喜に應じ候樣參り候へば宜しくと存候兎ても一度二度

にては六かしかるべくいづれ數々塗藥相用ひ度右藥も必ず製し置き候と存昨日も心當の匣ども盡く索し候へども見え不申多分安世方へ遣し置き夫成に相成候かとも被存候左候へば新たに製し候はねば叶はず候硝酸銀と申ものにて銀を硝石精に熔化し候ものに御座候いづれ製し上げ候はゞ知らせ候はんと申置き候貎兒蒙禱の假名御尋に付申上候ヒウルモンドに御座候右も礮卦解御終惠の思召と難有奉存候乍御六借何分も所仰に御座候以上

硝酸銀

謝₂人惠₁水仙

懷哉水仙子　翠袖白玉膚　江城一辭別　路遠莫₂能輸₁
雙本忽至₂前　此情豈可₂虛　寒家梅未₂發　無₂奈芳魂孤　大星

懼堂先生　契家　　　　恪　再拜

〔七二六〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年十一月廿日か

御手簡拜見如仰續て暖氣御座候是も亦不順の事と存候さては先宵松山町御同伴にて御來過被下不相變御土產ども被下何共痛入候義に御座候爾來御內話之

御內話の樣子如何やと

松嘉子……夜陰にても來訪あり度との事

勘治長々面上腫物相艱み療方を求め度よし

御様子如何やと今日頃は使にても上げ候はんと存候所御手簡にて尙未だ御分りかね候趣相分次第仰も可被下との事委曲相心得申候將又松嘉子云々の次第とて別帋をも示及夜陰にても來訪有度との事今夕頃は幸都合も宜しかるべくと存候間其段乍御手數御申通可被下候吳服店勘治長々面上腫物相艱み療方を求め度よし是又いと易き事に御座候いつにても被遣苦しからず候吳服方のものに候へば表向出入更に差支無之候是又宜く御申聞け可被下候親類共内談中草々及拜復候以上

廿日

大坂などにて山方稀の功者と申善九郎

別帋一覽則致返璧候餘り不詰りと存候所一ヶ所致下札置候大坂などにて山方稀の功者と申善九郎等是等の次第にては實はたわひもなきものと存じ致獨咲候事に御座候

八田賢友 几下　　　　　　大星

安政四年十一月廿三日

〔七二七〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彥次郎氏藏

寒候と申候にけしからず暖かなる事に御座候是も亦不順と可申乍去先一日も暖氣なる方御同然淩よく候被成御揃御履況定て御平安と奉存候然ば高嘱の顏帖題跋相認め候まゝ持せ上げ候不相替拙陋御一咲可被下候將近日さる所より此なつめを被贈候依て近頃申かね候御無心に御座候御挽置の茶御座候はゞ此內へ御惠み被下度冀候御允兪被下候はゞ千萬可辱候頓首

（顏帖題跋相認め）（挽茶御無心）

念三　　　大　星　拜

子靜仁友　几下

〔七二八〕八田愼藏に贈る　　松代町　八田彦次郎氏藏

（安政四年十一月廿三日）（挽茶の事）（其義は御延引被下）

過刻の御回敎にて貴家倍御均慶の狀詳悉喜慰不過之候然ば御無心申候挽茶の事御有合御座候はゞ聊か蒙御分惠度と申迄に御座候兩三年御取寄せも無御座候故御持合せ無之に就ては外御尋被下候はんと被仰下候所右にては本意ならず候間其義は御延引被下棄御擲還被下度奉希候揆らず右器手に入候に付風と御有合御無心可申歟と申妄意を生じ候ての事決して彼是御心配をかけ候様の

存念に無御座候開幸に御原亮被下度如此に御座候以上

即時　　大　星

澹　庵　兄　座右

〔七二九〕岡野陽之助に贈る

長野市　秋野太郎氏藏

（安政四年十一月廿八日）小寒の候愈御碍も無御座候邪日々風は烈しく候へども氣候は殊の外緩やかにて先々凌よき事に御座候然ば昨日沼田屋大藏參候て伊勢町の事に談じ及び候（伊勢町は八田愼藏を指す）處彼等俗人大義を辨へず例の馬場への御一策などをもつまらぬものに致し候はん兆相見え候夫と申もの馬場始め大體に通せず君德の御美事を贊成候はんとの料見無之一時事を用ひ候もの丶附託を受け果決に事の道理を申上候等の事致さぬ覺悟と被相察候是は例の御內託之義等をも御發駕前まで夫成に致し（藩主の發駕せしは九月廿二日）置き御供にて出府候はむと申時に及び右之義竹村へ云々申吳候へと申手紙大藏へ殘し置き候にて其當節の心の用ひ所大抵被相察候事と存候竹村に於ても某より最初反覆致辯論遣し候內書の次第も討論に及ばず其後面會候節は伊勢

（宮下兵馬）町殘り居候書面皆用立かね候ものと宮下同役申候など一向不詰り至極之門面話のみにて其以來大藏などより相探り候へば以前は以前當時は當時と片付候存念と被相察候夫は兎も角もに候所此節大藏致口入此節の有形を以て箇樣ありたしと伊勢町より被申出候樣にと申事は愚意にはあるまじき事と存候上にては往古は往古當時は當時にて手の及び候丈を絞り下よりは其術を防ぎ候爲めに彼是と氣隨を申候樣にては扨々不體至極の事道ある代と申難かるべくと不堪嘆息依て尙一策を存じ出で申候右に付急に得拜面度奉存候昨今ちと風邪氣にて打臥罷在候へども年內日數も少く相成候處にては不快を押し候ても遂拜話申度極密申上候御障も無御座候はゞ今晚乍御苦勞一寸御過談被下度奉萬冀候何も拜話に於てと早々申殘し候已上

廿八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　悋　二　郎

陽之助樣　內用御密覽

〔七三〇〕山寺源大夫に贈る　（安政四年十二月三日）　京都帝國大學藏

求是の字出所御尋

過日は御手誨齋藤よりの兩通御示及每度難有奉謝候右拜復申上度と心がけ候へども其頃より流行之風魔に被犯候て暫く平臥仕不本意御無沙汰申上候一昨日頃より大分快く覺え候間去らば御示しの御草稿へも愚意認め入れ拜報申上候はんと存候處へ又々御投簡每々蒙御記存奉喜感候先以いつも〳〵御康寧奉慶賀候賤疾も今日は又昨日より宜しき方に御座候間乍憚御氣遣ひ被成下間敷候偖至日之高作往行の二字既に迭更の字を傍書仕差上可申心得にて認め落し愧入奉存候既行の御考も去る事ながらやはり目にかゝり候を免れずやと奉存候夫よりは迭更の方穩當の樣相考候女工事は女兒巧に御改無御座候方可然候釣舟閑傍は誠に好絕右にて更に御別調に相成珍重淺からず奉存候求是の字出所御尋に御座候處定めて古書中にも可有之又果して見かけ候樣にも存じ候へ共只今いづれの書と申事聢と憶記仕らず室に名づけ候は宋の謝顯道が窮理の要は是を求むるに在るのみと申語いかにも妙解と存じ遂に取り名づけ候に御座候其後清人の文字を見候に儒者之道求其是而已の語往々見當り候必ずこの出處も可有之候所謝氏の說とは少差御座候樣奉存候偖先達てゟ家父察知罷在

候通墨使會議に至り容易ならざる事件申出候よし右の和解既に十六日於御城諸侯方御心得の爲佐倉閣老御達しの書付と申事にて御手に入候を早速御示惠被成下毎度〳〵難有奉多謝候右之內御不審の條々御下問奉得其意候一讀仕候所いかさま容易ならざる事共と被存候乍然皆唯孩童を欺瞞候の手段にて罅漏百出見苦しき事ども是に答へ候に於て何かあらむと存じ候事に御座候但々今更申候て甲斐なき事に候へども癸丑以來用開の機會を失せられ今に至て其沙汰無之程の事に候へば固り言語道斷之次第とも可申夫より此極に馴致候事察知もあるべく候を其事も聞えず其間に阿諛逢迎自私自利を被營候衆中のみの事に候へば此罅漏百出之詰難もいかゞかと無覺束存じ候事に御座候竹村御從兄には云々の御見込のよし御人傳にて御承知の趣果して左樣に候へば彼御人には甚不滿と存申候尤も近日續位も御座候よしに候へば何かと混雜も有之例の聰明も働きかね候所御座候故も可有御座と被相察候勢力匹敵し候ひかね候より遂已む事を得ざる筋有之迄も辭命の上に於ては一言もなく言ひ伏せ候はねば國體は立ち不申候樣奉存候春秋の際に當て鄭の國褊小を以て晉楚の閒に

用開の機會を失せられ

辭命も術も第一は其人の氣魄膽量

介し其兵禍を受け候事殆ど虚歳なく候ひし所子產政を執り候に及んで辭命にあらざれば此大患の免かれ難きを知り裨諶子太叔子羽等の名士を擢用し創草討論修飾の功を盡し更に自身もこれに潤色を施し諸侯賓客交通の間に用ひ候故に每に敗事あることなく定公獻公襄公の間合せて五十餘年兵禍を免かれ社稷人民是に賴て保全を得候は詞命の裨益と存じ候ことに御座候乍去其詞命を行ひ候にも墨使の申候術と申ものの無之候ては叶はざる事と奉存候晉の平丘之盟に子產承貢賦之次を爭ひ日中ゟ昏暮に至り候など即ち其術にて富文忠の契丹に使して盛氣を以て獻納の二字を却け候も同じく此術と每々感嘆候事に御座候此度とても是等の心得專ら有之度候所如何可有御座や辭命も術も第一は其人の氣魄膽量に依り候事にて去る儒先生の橫濱應接に股栗色を失ひ候が如く候ては沙汰の限りと存じ候事に御座候さりながら是まで其輩等にて乞食芝居の如く薦張の臺場を海岸へ築き候の大河筋の御遊山船を金川の海上へ漕ぎ出し候の相撲取を集め被下の俵を運ばせ候のと申を始として餘りにたわひもなき事共を仕盡しこゝに至り候事に候へば今更其應接之機會に合し候樣望み

候は兔ても不用の事なるべく痛哭の外無御座候辭命の事には右之見解も御座候事故に春秋內外傳の內尤法戒とすべき辭命を

朝聘　盟會　宴享　爭訴　師命　請求　辭謝　弔唁　辨解　問對　抑制　失辭

右十二門に分け聊か愚管をも加へ辭命準繩と題し後輩の爲にも致し度筆を興し既に略條理を成し候彌淨寫の上は御討論をも第一に相願度と存じ罷在候事に御座候さて御下問之次第相心得候丈左に略々申上候

問一　他國と違ひ親友云々

答　彼れには却て用兵の第一著を暗じ癸丑の夏事を起し候以前數年の間種々事に託し浦賀下田邊慶船を寄せ此方にて山上に高く砲臺を築き砲兵之禁忌を每々犯し候等の陋劣を熟觀し與力同心等の技倆をも悉く探知し候偵十分に行屆き候所にて癸丑の夏國書を載せ來り飽迄暴慢無禮を示し降旗など迄も遺り候て恐嚇候所彼れの存じ候坪に此方一言も無之畏縮致し彼れの申に任せられ候是も皆某の先年の建策等御取用に不相成當今之御武備一向に御不調より起

り候事にて譬へば孷婦の强暴者の奸汚を防ぎかね已む事を得ずその奸汚に任かせ候が如くにて其情態誠に哀むべく痛むべきの事に御座候一と度その强暴者意を遂げ候より他の暴客又々つけ込候て奸者數多く成り行き候所にて最初の强暴者その孷婦に向ひ申候はん樣は其方此方と通じ候後に他人と通じ候事故に此方に於て其方を良伉儷と存じ候と申候はむに其情虛なるべきや實なるべきや是その爲にせる所あるの詞たる事知者を待たずして知るべきことゝ奉存候

問二　他方に所領云々

問三　干戈を用ひ候云々

答　始終是等の御實索御入用に可相成と洞察候故に吉田生を用ひ候祕計にも及び候處忠策畫餠と成り候のみならず只今に嚴譴を被り罷在候次第不及是非候是等の虛實は愚策御取用に相成り慥に閒諜を御用ひ御座候上ならでは明白に知るべき樣無之今更廟堂の上にても御悔恨可有御座歟と奉存候

問四　エレキトルテレガラフ云々

答　某心得候所にては尙一時はかゝり申まじく候依て此條の一時の間と申は此方の一時と心得候てはあしく唯一瞬時間と申位に解し候方可然と存候其故はエレキテルの感通迅速なる事大抵光の走り候に準候と申事に御座候光の走り候の疾き事誠に無量迅速とも可申大凡人の脈一つに光は此大地の周圍壹萬餘里を三度周匝いたし候程迅かなるものに御座候去れば夫に準じ候エレキテル故に此方の一時などかゝり可申謂れ無之被存候

問五　世界中一族云々

問六　差障取除云々

答　貴案の通

問七　アゲント云々

答　ミニストルと申方職名と被存候是は直に君に次で政事を扱ひ候職に付冢宰之譯切當に可有之候アゲントは萬事の肝煎と申位に相聞え候故ミニストルを都下置付けに致し度と申事實に容易ならざる事件と被存候何事も此方の御政令を奉行し候事に候はゞミニストルなどの高貴威權の官を置きつけに致し

候にも及ばず高貴威權の官を置き候からは此方の御政令却て其氣色を被伺候樣可相成は至然之勢只今より掌を指すが如くに御座候其上重官を都下に置き付けに致候は必ず其屬國の事の樣采覽異言中など往々見かけ候樣記し罷在候右何れの國の條其證と申事申上度候所此節右書手許に有合せ不申候故不能其義候合衆國の兵威は新國故に軍艦なども英佛に比し候へば其數も少く漸く自ら防禦候に足り候程に可有之候夫故にアゲントを此方に置付に致し候さて其勢魯英佛を威服候には固より足り不申候樣に被存候へども一國にて先づ手をつけ候場所は他國にて互に仇讐と相成候迄はむざと押領は致し候はぬ盟約にても有之候事と被察候此事聢と地記等にて見及び候事無之候へども近く佛の琉球へ人を置き候始末にて其大略を被察候事と奉存候癸丑の夏墨の本邦へ取かゝり候事情今更相考へ候へば魯にては淸の九邊滿洲を望み佛にては琉球朝鮮を欲し英にては此度墨使の啓し候通り魯を制し候爲の始終の長策に本邦と蝦夷地に朶頤候事疑ひなく候然る所彼國多事にして未だその事に及かね候間に合衆國にて籌策候は右の如く歐羅諸國に手を延ばさせ候ては自國には始終

押領すべき國もなくなりゆき自然とわが不利に可相成と評議一決候て本邦へ先鞭をつけ候事と被察候ミニストルを置き候迄に至り不申候ては英佛等にて尙いか樣の計略有之候はんも難測候故に此事を果敢取らせ度種々欺罔候事と被察候

問八　物品云々

答　いかでか

問九　上危難云々

答　甲辰荷蘭王の忠告は此度墨人の恐嚇とは其情實迥かに別也彼時節御襟懷を被爲披かの王と打込御談合御座候て御紀綱御兵制萬端御更張御座候はゞ愚策等にも申述候通此樣外國の御混雜も有御座まじく自然有之候とても當年迄十三四年も相立候事故に御國力御兵備も御丕變御座候て決して此次第には至り申まじく誠に惜しむべき機會を被失候御事と奉存候此度申出候危難云々は淸國の殷鑑も去る事には候へども全くアゲントを置附け候はん爲の恐嚇に出で候事にて思慮あるべき事と奉存候

問九　下心を附け候云々

答　しかるべし

問十　アゲント云々

答　唐國政府に於てアゲントの指揮に從ひ候はゞいかさま戰爭は興り申まじく候乍去夫にては唐國の政令は有て無きが如く成り行き可申候

問十一　淸にて云々

答　當時南京の陷り居り候は淸の國內の賊の爲にて英には無之先年英との戰爭に南京を被取候と申事犯境銖中など見及不申甚難受事に有之候

問十二　英佛とは悉く懇切云々

答　通商に依て相交り候のみ固より與國にて無之事と相見え候距今七十餘年前既に英國と數度の戰に及び每度打勝ち遂に英の手を離れ獨立の合衆國と相成候程の事に付英佛等に於ても怖れ憚候程に無之候とも隨分容易ならず存居候には可有之候

問十三　阿片云々

答　其事は實なるべし其告る所以は恐嚇の術也

問十四　アゲント云々

答　すかす也

問十五　治平打續き云々

答　いかにも

問十六　英雄云々

答　英雄の二字尊意の如く前後相應せず不都合に御座候疑ひ存じ候には是は全く譯の拙き故に可有之候前後の大意を以て推量候へば英墨の語は存せず荷蘭にてタッペルステと申尤も勇あるといふ意詞を英雄と譯しタッペル勇といふことといふ詞を勇と譯し候ものなるべく被存候其意にて見候時は前後よく照應し候樣被存候知術なき勇は尙ぶに足らず候事墨人の申候通にて此節など別して此智術の士中流の一壺と奉存候

問十七　外國にても規則云々

答　御問目の意墨使申立の本條と差異ある樣奉存候本條の外國にても夫を規

則にしてと申は合衆國と戰爭にも及ばず堅固の條約を結び候其處置を規則と致し可申と申事に相聞え候御問目の意夫と少々相觸れ候樣被存候御再覽御座候はゞ明白と奉存候且合衆國の政法はいか程宜しく候とも兎ても本邦にては行はれかね候事に御座候其故は一切君と申ものを建て不申何れの國いか樣の生の人也とも第一等の德慧學問を具し候人物を國中にて撰擇し國の政事を任せ四ヶ年づつにて夫をも亦一替し候と申事に候へば兎ても百代一王の皇國なごとは氷炭の差別と存候事に御座候以上尙御考も御座候はゞ御細論所仰に御座候扠又墨使申立に答へ第一に詰り申度筋は西洋諸國に於て世界中一族一統に致し度欲候は皇天皇土公共の道理より出で自國他國の隔なく生靈を愛育し有無を交通し候はんと爲の情願に出で候事歟但しは其各國各國自己の私を營み世界の利を網し候はんと爲の私欲に出で候事かと尋ね申度左候はゞ彼れ將に云んとす固より公共の道理より出で候事也と其時此方にて申度候は去らば其方の被申候所全くうけ難く候其故は唐國人民阿片の爲に年々夥しく其害を受け候故に唐國にて夫を嚴禁候は固より當然之道理に候然るを英國にて自國の利

益に相成候とて其人民の殘害をも厭はず其政府の嚴禁をも犯し剩へ唐國にて容易に手出し難相成程に其船に火礮等堅固に致用意其奸を恣にし候是等をば吾國にては强盜の所爲と心得候夫をも貴國にては皇天皇土生靈を愛育する公共の道理とせられ候やと申候はゞ彼方にて何と對へ可申樣も有之まじく被存候其時此方にて申度候は既に右の如く被申候所致齟齬不都合に候上は其他被申出候所も同樣と被察候本邦に於ては知られ候如く是迄外國交通之事無之候故外國之事情等總て不案内に候右に付貴國と信を結び候上は貴國に信を取り候心得貴國に於ても欺罔の筋等はあるまじき事と存じ候處右之次第甚望を失ひ候偖又英國に於ては本邦へも唐國同樣追々阿片持渡り賣弘め候志願と承候唐國の大國にてすら制し難成程に手充致し其奸を恣にし候よしに候へば小國の本邦にて條約の禁のよく制する所にある間敷去りとて他國の奸利の爲に自國の生靈に不利を歸し候事國を保つものゝ忍びざる事に付尙一番の勘辨を加へ天朝へも奏聞を遂げ國中大小の諸侯とも會議の次第も有之候に付申立の條條追て是より可及返報間一と先引取候樣と有之度奉存候夫にて墨使引取候は

ば此所にて御先非御悔悟有之七年の病三年の艾には候へども愚策御取用ひ其人を擇び諸州へ間諜を差出候樣仕度ものに御座候左無之候ては一の位不相立候故知者ありと雖も如何ともすべからず候就て二詩有之錄呈仕候尙高論御座候はゞ承度候

幾年禁錮鬢如絲。病臥傷心非爲私。對敵得情須實索。成功出衆在先知。

如何每事失機會。不及制權收便宜。迂拙舊曾存一得。常將心血寄阿諛。

先知未用取人計。（孫子、明君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也、先知者、不可取於鬼神、不可象於事、不可驗於度、必取於人、而知敵之情者也、）虜使話言何得詳。勢力敵均盟可保。威靈偏重和難常。當年宋國從邦彥。今日朝廷憶李綱。非有蒼天蚤悔禍。爭由婉畫靖跳梁。

重大事件

御草稿二頁齋藤ゟの申上二通重大事件は業奉完趙候御査入可被成下候八葉の寫しも相濟候に付昨晚拜復認め候はむと申所へ和合見え候て遂色々の說話にて四更後に引取候賤體未だ牀と仕らず候故歟甚睡く覺へ目覺め候迄必ず起し候なと家內へも申付ふせり今日起候へば既に亭午を過ぎ候と申事にて漫然清世の一閑人是に過ぎ申まじくと一笑仕候義に御座候其所へ池村猪郞の藥品々

種痘

取りに參り夫を製し遣し未だ食事仕り候はぬ閒に未鐘を報じ候あやにく出入の者の兒女に種痘をも致し遣し彼是仕り候內遂夕刻に相成此紙認めかゝり候所へ望米子內訪にて人定迄被相話夫ゟ遲筆にて認め候所只今半夜の鐘を承候故是にて筆を閣き候八葉の後半御手に入り候はゞ尙又御惠示奉願候以上

三日夜

令孫君御もりの面部の藥

令孫君御もりの面部の藥不快にて製し何分不行屆さぞ待遠に存じ可申と氣の毒に存じ候へども不及是非候少く快く候へば拵へ候て沙汰可申と御前へ罷出候節乍憚御一言奉願候

丁巳臈月　□　再拜

懼堂契家先生

〔七三二〕依田甚兵衞に贈る

長野市　渡邊萬平氏藏

安政四年十二月四日

久敷御安否も不承候當冬は此地にても幾年にも無之暖氣に有之小寒の候に相成候て彌ゆるやかに朝々洗水鉢の水なども氷候はぬ程にて凌よく覺え候其御

地定て同様に可有御座候御動履も被成御揃益御安健と奉想像候令郎今朝も御出被下候處御家内總じて御碍も無御座御安心之御事に奉存候賤家も依舊無事に能在候乍憚御省念可被成下候偖先達ては革下緒之義に付蒙御手數難有奉存候存じ候よりも革並細工も念入にて出來宜く偏に御厚情を以蒙御世話候故の義と別して感銘奉多謝候然る處其後令郎御出被下御話にて承り候へば右料物伴之助より上納致し不申候よし甚以恐惶之至奉存折節伴之助出府致し候と申義に付能々申譯仕預置分上納申上候樣申付候義に御座候此度は定て無子細上納は仕候義と奉存候乍去萬々一尙御不義理申上候義に候はゞ一寸此帋に御批答被成下度左候はゞ的便是より送上可仕候亞墨利加使節も大分容易ならざる事申立公邊にも御手數之御事のよし其申立譯文も此頃一覽仕候處多くは欺罔恐嚇の事共と被存候乍去閒諜細作の御用意無之候故萬々虛妄と目をつけ候ても其佐證無之御不都合千萬なる事奉存候家父に於ては畢竟箇樣の御時節に運びゆき閒諜のなくて叶はざる節不時の御用に相立候もの拵へ置き候はん內志にて候ひし所其忠策全く畫餅と相成剩へ嚴譴を蒙り候て只今に公家の御手數

閒諜細作の御用意無之候故

一言も無之御申伏せ

に罷成居候事不及是非候亞人此度の申立も家父など一覽候ては甚不詰の事共に付其所を看破候御役人有之一言も無之御申伏せ有之候へば假令跡にて不得已事彼が申に任せられ候事一二有之候とも此度人撰にて罷越し候者一言なく御申伏せ御座候へば聊御國威も相立ち又朝廷に人御座候を感服致しむざと致したる事も以後無之樣可相成是は當今の肝心なる義に御座候が右御挨拶なども如何相成候もの歟心配なる義と家父は申居候家父には既に亞人申立不詰の條々致看破箇樣應對候はゞ亞人一言も有之まじくと書付置き候ものも御座候へども其表へは無遠慮に付御目にも難掛候色々申上度義も御座候へども隔地不及是非候近日蟻川隱居出府に付何也とも内々の屆けもの致し吳可申と申事故時候御見舞過日御手數を蒙り候御禮旁申上此品乍如何態と掛御目候御咲存可被成下候乍憚政君へも可然御致聲奉希候時候折角御保重可被遊候以上

十二月四日　　　　恪二郎

甚兵衛樣

猶々申迄も無之候へども此帋御一覽後御燒捨可被下候以上

〔七三二〕山寺源大夫に贈る

安政四年十二月七日

御恵敎拜見仕候此雪にも御與居倍御萬祥の御容子拜聞奉慰鄙懷候賤疾をも御尋被成下難有奉存候先續て快方に及び候閒乍憚御省念可被成下候將思食寄珍品ども數々御投恵被成下感戢の劇不知所謝奉存候態と御移掛御目候御咲存奉冀候偖此閒返上もの仕候に就き申上候事ども御過賞被仰下汗顏の仕合奉存候

墨使詰難の略

墨使詰難の略此程拜啓の後に尙一二言を加へ度かと存候義有之別紙の如く認め見候大略は過日申上候通に御座候へども稍まさりも申し候はむかと存候義に御座候御慰迄供電矚候尙高意も御座候はゞ勿吝垂誨拙吟の御次韻難有拜見仕候御兩首とも面白く奉存候一兩所聲律に付申上度候所御使急ぎ候閒跡より返璧可申上其他御恵示の品々も其節愚管可申上候唯渴望罷在候は重大事件後

重大事件後半幷に六日の對話

半幷に六日の對話と申ものに御座候此度の義は實に皇國安危の係る所と奉存候故右樣子柄をも早く承知仕度奉願候可相成は早速御恵示被成下度奉懇願候餘は追て是より申上度先御恵賜の拜謝旁如此に御座候早々不次

七日

猶々別紙は草稿も無之候間御電覧の後御序に御擲還被成下度奉希候以上

山寺老先生　　　　　　　　　　　　　　　　恪　拜覆

〔七三三〕　山寺源大夫に贈る

安政四年十二月十一日

面部の薬相試申度候とて御守參り候に付又々御惠書難有拜見仕候如仰存外の大雪に御座候處尊候愈御佳安被成御座喜慰之至奉存候偖御別紙莊内侯御同席回狀と申ものの御手に入り御寫しに相成候とて御示し被成下如仰誠に大事去矣とも可申唯々浩歎の外無御座候過日も申上候通假令不得已事御許容に相成候筋有之候に就ても詰難を可加處は詰難を加へ閉口さすべき處は閉口致させ候はねば國體は立ち不申候然る所諸有司も皆腰を拔し被居候事と奉存候左も無

六日の對話

之候はゞ六日の對話にも今少し體を得候筈に候所餘り埒なしに候第一にミニストルは爵位如此にして職務は如此コンシュルは箇樣のものと申位は西洋辭書一部有之候へば誰にも相分り候事又諸國の政道邊に携り候地理書には國々

にて其扱方も載せ無之て叶はぬ事に候へば夫等の爲の蕃書調所に付對話の前夫是の詮議を委しく致し置きさて對話に臨み候ては此方の心得候を根據として問訊も可致事と存候然るを其儀なくミニストルの職務はいかにコンシュルとの差別は如何官爵は何と申様の事に問を發し候ては餘りに無學文盲の沙汰國體を辱かしめ候事と嘆かは敷存候事に御座候蕃書調所なども此度様の事に御用無之候はゞ其御役被差置候目的は何に候やらむ不審至極の事共に奉存候如仰常磐夫人を御學び候御手段と外被存不申候前に誤る所あれば後の警に相成候と被仰候へども警め候て前失取返しに相成らず候如何様後悔候ても取返しに成らぬ事も世には有之候故事を其始に愼み弘くこれを人に詢り疑ふ所あればト筮を以てこれを鬼神に質し然る後に事を決し候には無之候哉卜部の事は本邦に於ては神代よりのならはしにも有之又洪範の稽疑にも汝則有大疑、謀及乃心、謀及卿士、謀及庶人、謀及卜筮、と有之にては無御座候や當今かゝる御大事の時節に夫等の事に目を注ぎ候人都下諸有司事を被用候内一人半人は有之筈と存じ候所其音響を聞き不申候事實に慨嘆之至奉存候某近來つく〴〵存じ候

洪範の稽疑にも

今解と題し候和解の書

に此御時節兎ても人力のよく濟す所に無之いづれにも其助を鬼神に求め候の外無之鬼神に求め候には卜筮の外無之依て本邦神世よりの習はしに從ひ洪範の敎を以て道を知るの人を擇び（巫覡賣卜者流は皆道を知るに足らず）大卜筮の人を建立し大疑謀には必ず此人を參し其議を聽かせ候樣に相成候はゞ必ず大裨益有之べく存じ且洪範中時に取り格別之義御座候樣存じ候て全く今時を救ひ候爲に今解と題し候和解の書を認めかけ申候稿本出來に相成候はゞ可供電矚候是等も少しく世の補ひにもと存じ候所何も〳〵皆時過ぎ候事に相成可申と夫のみ憤悶の事に御座候御守面部藥傳け遣し大抵乾き候閒草々拜復迄申上縮候別紙寫し留め則奉返璧候御收入奉伺候以上

十一日　恪　拜覆

常山契家先生

菊池の墨蹟

附白草稿もの一通御擲還落手仕候御附書の次第恥入候義に御座候菊池の墨蹟も云々の御樣子難有延領罷在候以上

〔七三四〕　山寺源大夫に贈る

東京市　久保來復氏藏

安政四年十二月十二日

小寒之候に相成候ても凌よき事に御座候御體履倍御勝常と奉想像候然ば御示及之碑陰拜見仕候所疑も無之魯峻の碑陰に御座候此碑鄭漁仲が說に據候へば蔡伯諧の書と申事に候搨手格則精ならず候樣に候へども珍重すべきものに御座候間御藏品に相成候樣奉存候此碑拙藏にも無之候所在府中友開より久しく借り置き候て熟知候故碑面無之候ても其碑陰なる事を慥に仕候事に御座候則返璧仕候御接收奉希候將唐宋八家法帖遂に見及び候はぬものに付全部一通り展觀仕置き度奉存候先夕は顏公之帖のみ拜見相願ひ度と申上候所迚もの義に全函を御惠示被下度奉懇乞候御允兪を蒙り候に於ては感銘尤も可無已候頓首

魯峻の碑陰

唐宋八家法帖

十二日

恪　拜　覆

懼堂先生　丈室

〔七三五〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

安政四年十二月二十日

臈底珍敷輕寒に御座候彌御勝常可被成御起居と奉存候然ば此品乍如何到來に任せ懸御目候聊か寒中御見舞得貴意候印迄に御座候御咲存奉仰候以上

念日　大　　星　　拜

八田仁友几下

〔七三六〕　山寺源大夫に贈る

安政四年十二月二十日

小山田孺人眼疾

御手誨奉欣讀候先以御均慶浣慰の至毎々蒙御記存難有奉謝候老少いづれも健安罷在候間幸御過念被成下まじく候其後は江都の御新信も無之昨夕御傳聞には近日御昇進被爲在候との御事御同然恐悦奉存候偖は小山田孺人眼疾云々の義承知仕候今井生醫案も一讀候處俗醫の容體書多分箇様のものに候へども候證もさだかならず病因も浮きたる事にて是にては詳密の用をばなし不申瞳孔曇濁白色を帶び候様子と有之候所白色を帶び候故に曇濁なるにや又曇濁は曇濁帶白は帶白なるにや分明ならず且帶白も何様の次第や其厚薄も有之候得ば是のみにては物を不申又病因の諸毒諸氣も何を申に候歟つゞまり不申候其上

近年舶來の眼科書とは何と申原名の書にや近年とさし候は西洋紀元の幾年頃を申候や是又孟浪の事其薬方等も何を主薬にていづれの候證に對し候ものや是又詳に致し度事に御座候左高も致診察候よしに候へば此容體書の外に尋度候はゞ同人へ尋ね候樣被仰下候へども眼科の事は同人尤も不案内の樣子に候へば猶此多門の方用を成し可申と相考候土生に九年隨身修業と申事に候へば年數を以て論じ候へば大成の功も有之候筈に御座候但し土生と申ものも原書は讀め不申其根基は至て淺々の事に付九年同氏へ隨身もあたら歳月を過し候にて可有之と被存候於家父少々考も有之候へば能々其容體をも悉し候て醫案をも申出度就ては右多門夜中也とも被遣被下度奉存候彥五郎醫按も御示及一涉候處文筆拙く候故何分分りかね候事有之候瞳孔陷缺とはいかなる症をかく申候や不審千萬に候瞳孔の表面陷缺候ては卽ち失明候道理にて朦朧不辨物に止り候筈は無之又先天の遺毒等の論も浮きたる事の樣存じられ候濕毒の上攻と申候は黴毒の事にや去らば黴毒と稱し可然末に矢鳩答丸を用ひ候事見え候へば是は先大方黴毒の事と被察候還陰解毒湯方心得不申いかなる薬劑を用ひ

土生に九年隨身

彥五郎醫按

候事にや但名稱を以ては漢方後世家の方劑の樣被存候白内障針治の事西洋にても致し候かとの御尋に候所此手術は元來西洋に始めて起り候事にて其法渡來候迄は和漢の醫人夢にも存じ候はざる事にて候ひき尤其手術も近來益々精密を極め候て嘆服の事どもに有之候多門などもその近來の法士生より傳授候や否承度ものに御座候於家父は原書を以て大抵相心得居候杉田なども土生門下のよし遂承はらぬ事に御座候恐らくは土生の方にて眼科書の譯を杉田へ賴み夫にて益を得候事は多く可有之と被相察候高松藩小橋某遂承らぬ者に御座候如仰發句など好み候事何の得處無之の驗とも可申候絶句面白き樣被思食候よしに候へども後半調ひ不申俳偕を致し候に對し候樣被存候任命直に返璧仕候神風遺談御垂示難有奉存候夜分にても一讀仕度候先瞥見の所にて如仰海外新話一類とは被存候九州の軍など目錄にて見候ては餘りに事を略し候樣にて只々題號の神風を主とし候樣被存迂誕の極と存候事に御座候定て御覽も御座候はむ八幡童蒙訓と申ものは埒もなきものゝ樣に候へども彼時代の實錄と被存候けく此書などよりは當時の警戒とも相成候樣に御座候江都墨使への御返

神風遺談

八幡童蒙訓

答等も如何に候やらむ六日對話書などの樣子にては大抵その伎倆も推しはかられ候樣被存候近日も去る方より江戶來狀寫しと申もの被示候て一覽候所御坊主の話とか申事にて墨使次第に我儘を申候て來春向島の櫻を見候迄滯府候と申候よし少しも長く居り候て國內の虛實人民の風習等迄委しく相探り候心得と被存候然る所此方にては人を外國へ出され候事今に其沙汰無之解すべからざるの極に御座候

外國のうかみはいれてわが國のうかみはやらずいかにせむとか

四歲擠幽局。未知悔前失。愁時向東南。非關望月出。

家父近日の作に御座候內々入御覽候うかみは間諜を日本紀にかく訓じ有之候故用ひ候にて御座候爲念申上候尙御新聞御座候はゞ乍御煩瑣御惠示奉願候響案二道は近夕に右多門可罷出候へば其節不審の條をも相尋ね候上相託し返還仕度留置き申候此段拜復迄申上候以上

念日

多門參り候はゞ今夕か明後夕に致し度明夕は少々故障御座候此義も爲念申

上候

（別箋）

（小宮島は宮島嘉織を指す）

附白御近邊小宮島丁度炭彥醫案に有之候通昨冬より當九月まで其左眼人を視候ても腰脚は見え候へども頭目は見え不申字を一字視候ても字の下半は見え候て上半は見え不申候よしに付其見えざるは何樣にて見えず候と尋ね候へば只一向に暗く候て見えずと申事に候其眼中を望み候ては聊か申分無之樣に見え申候依て其患を生じ候の因を尋ね候處昨冬嚴寒の節氷上にて顚蹷いたし左の顳顬邊を强く打ち候其以來追々に箇樣に相成候と申事にて是も道齋とやらむにも久しくかゝり候よしの所露ばかりも驗無之候故不得已事極密賴度と申事に御座候ひき家父一と工夫有之候とて藥遣し候所服藥を始め候より六日と申に夫迄人の頭目は一向に見えず候所稍頭目を辨ずる樣相成字も上半は昏暗にて見えかね候所乍朦朧其全形見え候樣相成候とて大に悅び家父も奇絕と申候事に御座候其以來無油斷服藥の樣子に候所近來は倍宜しき趣に相聞え候炭彥の症と但目の左右違ひ候のみ至てよく似寄り候義に付一寸筆の序御話申上

候以上

懼堂先生几下　　　　　　　　　　　　　　恪　拜覆

〔七三七〕　山寺源大夫に贈る

安政四年十二月廿六日　小山田孺人眼疾

此間は御手簡蒙御存記殊に緻團一盒拜戴感銘之劇奉存候如仰立春に及び以の外の猛寒穩ならざる氣候に御座候乍然昨日來少々は緩み候歟と被存候御體履如何被成御座候や奉窺候然者小山田孺人眼疾の事に付多門被遣不審の廉相尋ね候處猶辨じかね候廉々殘り遠近の病因委敷相究め申聞け候樣申候事に御座候孺人も散々風邪痰喘の氣味にて問切差支候よしにて其後は今以見え不申候孺人今に快方に至られず候事にや當人修業の大略を承り候所土生一家のみの事にて洋漢混合と申す内洋學は猶其門庭を窺得ず用ひ候藥劑なども果して後世方と申ものなどを用ひ候樣子につき眞の西洋實驗の治方を講究候はゞ可然と申聞け候事に御座候過日御問目の内一事御殘し被置候條

英吉利提督某取結び候條約彼政府にては不服の旨左候はゞ其邊より條約修

正を可申出候を無其義戰爭を致し候義を心懸け候迚直ちに品川へ五十艘乘込候趣此末に相見え候は餘り理不盡の致方にて壬寅の冬長崎にて條約を結び候甲斐も無之候如此にてはいつの條約とても兵威に任せ勝手儘に破り候ても不苦風俗にや

是某の亞使申立恐嚇の言多しと目を付け候一廉に御座候西洋諸國兵を動し候にも近來は尤も其辭の曲直を辨じ候事に候へば一度水師提督をも勤め候程のもの差遣しその取結び候條約を政府不服に候とて直に之を破り兵威を以て脅し候事決して致し申まじく又其願筋を成就候はん爲に蒸氣船ばかり五十艘もと申候へば其他の船數は分り不申候へどもいづれ其倍にも餘り可申左候へば總數百五十艘又は二百艘にも及び可申候一艘百人乘とし候ても一萬五千人より二萬人に御座候此一日の費莫大の事に被存候亞人の思ひの儘に相成候丑年以來の本邦の技倆をも委しく存候上にて脅かし候手段ばかりに斯樣の不用なる費を致し候はん英國とも存じ不申旁不詰なる申方と存じ候事に御座候是等も疑はしき事とて亞人へ詰問申度廉と存じ候乍去國力兵威敵均候はでは條約

は竟に用立不申候樣に御座候是は歷代の明鑑も有之識者の確言も御座候事と存じ候依て拙詩にも勢力敵均盟可保威靈偏重和難常とも仕候事に御座候江戶來書寫御示敎難有奉謝候寫し濟候間奉返璧候水戶浪人の無智妄動は申に足らざる事に候へども仕遂ず乍ら召捕に相成候は天幸にてけく此節の無用の用をば成し候歟と被存候聞かせぬ樣に致し候て耳に入候事は却て精神によく響き候ものに候へば是等の樣子を承り候はゞ向島櫻見物などの念を止め正月の御禮濟には早く下田迄引取り候樣相成可申左候はゞ當節の微功をば成し候とも可申候吉田小林二生の事御尋に御座候所一向其後の樣子承り不申候小林事は在所へ著し候ては何の咎も無之事とは承り候先は此間の拜復迄草々申上候以上

水戶浪人の無智妄動

吉田小林二生の事

廿六日

附白年內誠に幾日も無之嘸御忙劇と奉存候賤家は春の來り候はん氣色も無之至て物靜にて讀書講學には絕妙に御座候近日大幅の山水畫望米子藏品のよしにて筆者は操山に御座候內々一題を被望拙作仕候御一唉に供し度錄呈

仕候。

畫山水歌

門扃深鎖如囹圄　一幅江山來何處　狂呼促童掛東廧　對之發興欲沖擧
羣山峨峨紫翠重　樓居往々蔭長松　江流秀色可攬結　逕路屈曲足遊蹤
鄙夫平生好籌海　謀忠承譴未須悔　時勢推移不可回　隱憂百端無由解
畫中老人野鶴姿　莫是仙侶相追隨　我亦願作畫中客　漠然永與世相遺

丁巳臘月聚遠樓題

懼堂先生　案下

（別箋）

神風遺談

又申上候神風遺談も難有一讀仕候やはり愚童訓をもこゝかしこ切入れ有之候乍去後鑒の緊要と存じ候事はけく略し有之樣被存候今朝返璧申上候心得の所荊婦一渉仕度相願候間跡より還上申上度奉存候御許諾奉仰候以上

〔七三八〕　藤岡伊織に贈る

安政四年十二月廿九日

立春後却て猛寒に御座候御起居彌御平康に御座候歟月迫嘸何かと御多忙に可有御座昨日は右之御中歳末之御祝儀品々御恵投被下感謝不盡奉存候然ば過日御無心申候梅溪畫幅之料壹方差上申候御落手可被下候山水の題詞も出來居候まゝ相附及返璧候是又御檢納被下度候忙中要事のみ草々以上

梅溪畫幅の料山水の題詞

念九

大　星　拜

令愛御氣分御瀉血後いかゞや乍序御樣子承度候

獨　正　賢　友　几下

〔七三九〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

安政四年十二月三十日か

除日愛度奉存候偖先夜は御來訪被下ゆる〳〵拜話且美好之一籃預寵貺喜感兼集候次第奉多謝候其節御示及之御書取御案文之通差出され候處其後何之沙汰も無御座候よし固より左樣に可有之候將此程の殘り御遣し被下是又奉謝候先御返事まで草々以上

大　星

八　田　契　丈

安政四年十二月か

〔七四〇〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

御手誨拜見如仰昨日などの寒威は寒中にても無之程の事に御座候ひき然る處倍御安好珍重不過之奉存候賤疾をも御垂問被下奉謝候追々快方候間幸御放念可被下候偖は被寄思食嗜好之鮓澤山に御惠贈被下不相替御妙製不打置老少團欒賞味可仕と喜躍不啻奉存候乍然每度之御芳情感謝不盡痛入候御事に御座候家內いづれも宜く御禮申上度段申出候乍憚北堂前御始可然御致謝奉賴候此段草々拜答

卽時

猶々御器は是より返上申度候其段御許諾可被下候偖過日之一條に付此間旣に別帋相認め呈し可申と存じ候所水井より也とも話相廻し候はゞいづれにも御沙汰も可有御座と存じ候て又相扣申候御別束の趣にては其御方へも今に何とも無御座候事と被察候かねて過日內書を送り候節此議に於て異論有之候はゞ某方へ內々申越し賜り度又被取用候事に候はゞ水井に云々と申贈

り候事に御座候随分事柄が事柄にて候故一己にても埒あきかね御勝手方歸著之上極密相謀り候て也發し可申心得にも可有之被察候某方へも只今に何とも沙汰無之候へば某に於ては十の七八好消息と存候事に御座候夫に付候ても一兩日内御歎願書草案致し御目にかけ可申候也

八田賢友　　　　啓拜

〔七四一〕八田愼藏に贈る

安政四年か

驅蟲劑

昨夕までに驅蟲劑拵候て上げ候樣申候處昨日は俄に取込候事有之乍存御約束に違ひ愧入候此錬藥即それに御座候唯今より夜分御休み候節までに三度ばかりに御用ひ盡し可被成候明朝より蟲下り候や否委しく御檢查被仰下度候（さゆにて御用ひ候てよろしく候御用ひ仕舞湯にて器を洗ひ其液迄御用可被成候）

煎劑も昨日拜診の所を以て相改め致進上候明日の御樣子次第又丸藥上げ可申存候

安政四年か

〔七四二〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

只今旣に別帋之通認め人差上候はんと存じ候處へ御墜簡にて御動靜御平康を詳にし沃慰之至奉存候小女君御氣體續て御快き趣降心不過之候此閒驅蟲劑法の如く御用御座候へども只今に蟲下り不申との事左候へば蟲は無之事と被存候此閒の煉藥はセメンシーナに候故腹中蟲有之候へば必ず下り候ものに御座候右用ひ候て下らざるは蟲無之の證にて安心出來申候猶御申分有之候所は別に手段可申候御目にかけ置候別條御擲還慥致落手候此後に手に入候もの五枚御座候依命差出し申候猶追々入手候はゞ掛御目可申候閒今少し早く御返し被下候樣希候

朔　　恪　二　郞

安政四年か

爭座帖臨書の事

〔七四三〕　八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

好く致快晴候愈御佳勝奉慶候さて昨日は御墜簡爭座帖臨書之事被仰下候處折

節認ものに取掛居御即答に及ばず悚惕之至御座候數枚有之候と存じ候所多分蠹蝕いたし是は不出來に候へども全く候間差上申候其儘御留被置不苦候御示及之研ども愚鑒候所石質古色とも斧研を以上首とし石は甜瓜硯其次たるべく時代は壺研共亞と存候雲龍研は端とは申定め難く候へども朝鮮物にも可有之候いづれも面白きものに候內取わけ斧研は妙品に御座候御愛玩可被成候將高囑の認もの昨日風と興に乘じ揮灑候に付研共返璧之序差出申候御一咲可被下候偏字並に國風を認め候絹は殘り多く有之候何ぞ認め候て宜く候はゞ無御遠慮御申越し可被成候昨日不及御卽答申譯旁如此御座候已上

（御示及之研ども愚鑒候所）

（高囑の認もの）

墨三枚是又致完璧候御查入可被下候

二日　　大　星　拜

澹庵令友　几下

長野市　小林暢氏藏

〔七四四〕　竹村金吾に贈る

（安政四年か）

前夜は御枉趾を蒙り久々にて拜面多々獲金誨感喜之至奉存候殊に公事を以て

蒙御尋候と申に品々嘉貺を荷ひ何共恐入候次第拜謝の申上べきやうも無御座唯感泐のみ罷在候家内のものいづれも宜しく御禮申上度段申出候偖は八愼御（八愼は八田愼藏）内借取片付一條も御妙策御書立蒙御示及候に付極密早速に相示し候所段々一方ならず御配慮被成下種々御趣法立も被成下候義深く奉感佩候趣にてさて申聞候には家財其外等も中々此御積りの金高に至り不申當惑之義（詳に御書立浮簽に申上候）且二十年ならずして取復し候御勘定には候へども三十年を一世とやらんも申候處其半世以上の義に御座候へば此節の世の中何樣の事出來候はんも難計且私家にも何等の事あるまじきにも無之又御重役方御役頭にも夫まで屹と御別條無之とも申難く既に近年厘かの閒にも種々御變革も御座候次第にて何事も其時に當りて御出かけ御座候御仁の御了簡次第と申樣の者に候へば此御書立通り此節御定被成下候ても他日に至り其御規定通不相成候事も難計たとひ左候迚も上と下の義に付仕べき樣無御座萬一左樣の義に至り候節には先祖より御厚恩を以て相傳仕候元株を私代に失ひ候義に付何共氣遣はしく忍びざる筋に有之候と申候に就き小弟申候は御役人にて聢と上意を伺ひ取極め候筋幾多

の御役人を經候とも何しに違變有之候はん其所は安心候て此異見に就き暫時の艱苦を忍び候て後榮を子孫に貽し候方良策に可有之尙書の藥瞑眩せずんば其疾瘳ずと申も是なるべしと申候所愼藏申候に御役人にて上意を伺ひ御取極め御座候事にても大いなる御違變の義御座候事私家には慥なる證據御座候と申候に付夫は如何なる筋と尋ね候に愼藏申聞け候は私五世の祖を孫左衞門と申候此者私家の始祖にて只今の喜兵衞家より別家仕候ものに御座候所寶永年中より才覺金調達被仰付段々御用向出精相勤候に付享保年中三十人御扶持被下置候二代目嘉助義も前代同樣度々才覺金被仰付御用相勤候所其頃は御上にても御勝手向殊の外御逼迫にて調達仕候金子御返濟不被成下寬延三年かに御尋有之御元利御滯之分相調べ候所金子八萬兩餘籾子四十万表と申事御座候然る所金高莫大の義に付御斷被仰出其以來は調達金急と御皆濟可被成下に付才覺金差上候樣改て被仰付御用相勤候所其以來の金子は追々御返濟被成下候へども嘉助代莫大の御滯金御斷被仰出候に付御增被成下置候二十人御扶持は其悴孫左衞門家督之節より不被下置候此孫左衞門義は祖父嘉右衞門親にて私に

は曾祖父に御座候又右二代目嘉助初代に古金八百兩餘籾二千表餘享保十三年かに才覺奉差上候所其口も年來御元利とも滯り候て寛保元年に至り所持の田地御年貢にて年々貳百九十五表宛御渡可被成下旨御書付頂戴仕候所是又孫左衞門家督被仰付候後より御斷にて不被下置候只今右古金等才覺仕候節の御證文相殘居候所いづれも御郡奉行連印にてしかも御重役方末書其內には信弘公御裏書のものも御座候て閒違ひ候ては濟ぬものに候へども形の如き次第に候へば他日之義は實に氣遣はれ候義と申候に付小弟も打驚き候て右樣の事初て今日承候實に先代多分の御用をも相勤莫大之御滯金も有之御違約の事なども御座候はゞ何故是迄話しも無之候や果して其話の通に候へば此節御內借元利六千に及び候とても幾重にも御仁計の歎願仕方も可有之如此大功も有之候家の事に候へば御家中一統の拜借等へ御引競べ彼是可有御座筋は勿論有之閒敷いづれにも一と考致し見可申候とて當人をば先歸し候義に御座候右愼藏申聞け候義は兼て御承知の御事に御座候哉小弟義は此度始めて致承知候義に御座候旣に此事相違も無之事に御座候はゞ此節之御內借追々相嵩み候と雖も先年

の御滯金に比し候へば多寡猶懸絶も仕候義に御座候左候へば當節御上にても御逼迫之御中には御座候へども何とか格別之御仁惠被成下度奉存候勿論先年之義は先年之義詰り其義を以て彼是可奉願等の横行なる計策を以て御内借仕候義には無御座祖父嘉右衛門末年より嘉助一代不回りの事のみ打續き遂に遂に此極に至り候に相違も無御座實に愍察に堪えざる義に御座候其上此極に至り候ても猶其先代御用達金滯御座候事等かね〲懇意に仕何もかも打明け話も仕候小弟にさへ是迄に遂に不申聞此度前段之語脈を以て漸其事に及び候にても愼藏忠厚之志は能く分り候義と小弟に於ては深く感じ入候事と奉存候實に右等之莫大の御下金滯に相成居候義に御座候はゞ此節御上にも以前御勝手御不如意にて其義に至り候所思召被爲出御破格の御仁惠被成下度御事と乍憚奉存候左樣も被成下候はゞ元々株も御座候義に就き追々勝手も取復し可申勝手取復し候上は此度御仁惠を奉蒙候所子々孫々永く奉拜戴又々先代の如く御用相勤め御上の御爲筋に可相成義も可有御座奉存候兎に角君臣一體之義に付御上御不如意の節は御下に罷在候もの力を盡し御不足を奉補又御下に罷在候

ものひしと難澁仕一家傾覆の際にも至り候はんと申時には御不便を被爲加御救ひ被遣候は御當然の御事と奉存候乍然其間には御法と申ものも有之御家中御領分一統の義御偏依なく御畫一に可有御座は勿論に御座候へども御先代斯ばかりの大金御用達御下金莫大の御滯も御座候ものゝ子孫の義に付外に類も有御座まじく左候へば御破格の御仁惠被成下候とても御畫一の御法に相碍候義は有御座間敷奉存候右に付愚意竊に奉存候には責て御趣法御書立の內御扶持方御移替の義のみに被成下抱屋敷其外賣拂等の義無之尤も其御扶持方御移替の義とても戴き罷在候御扶持の內御移替千兩に相成候丈差上其千兩壹割の利分にて御預け奉願只今御內借元利六千兩御禮金御免六十ヶ年賦に被成尤も年限相濟候所にて御扶持方本の如く被下置候樣位には被成下可然御事歟と奉存候先祖の義を以て箇樣にも被成下候はゞ當人は不及申萬世難有仕合に可奉存候先代形の如く御上に御德分を奉附置候義に御座候へば箇樣被成下候とても御上に於て御溢恩と申上候程の事にも有御座まじく奉存候猶平たく申上候へば此節酒造の方さへ年々仕入金に差詰り借入候ては造込も仕候程の手詰に

罷在候所蒙御憐察先代御用達金莫大の御滯御斷に相成候節其莫大の御滯替被下置候御扶持方並に年貢糀等其以來御引上に相成居候等の義被思召此節の御內借の分其儘被下切に被成下候ても可然御事又は勝手取復し候節まで御取延に被成下候ても御尤の御事と奉存候先代才覺金夫程莫大に御座候をば一向に御斷に相成其十分が一にも滿ざる近來の拜借滯のみは嚴しく御取立て御趣法とは申ながら暫にても先代より相傳の屋敷等手離し候樣に御座候ては其以來御上にも御聯綿と御相續被遊御座愼藏家にも聯綿と是迄相續罷在候所にてはちと御不道理に相當り可申と奉存候先生にも御迷惑の場に御出くはせ被成御俯仰の際御難澁に可被思召段は實に奉察候義殊に只今の御役被蒙仰候以來御承知にて御內借被仰付候分も多々可有御座候へば別して御迷惑は申迄も無御座候へ共其節には箇樣の仕議に至り候はんとも本より不被思召又先代御用金莫大の御滯に相成居候等も其頃には御承知も有御座まじく只其一時上下御融通の爲のみに御取計御座候義にて可有御座候へば聊か誰ありて御非難も申上間敷奉存候然るをもし先代は先代の義其節の御役人取計候義に付御存知無之

當時御自身御取扱御座候義のみは是非共嚴重に御取立無御座候ては不叶と申義にては輕き小吏などの上には兎も角も重き御役方等に於てはあるべき事とも存じ候はずいづれにも愼藏語次申聞候義掟と御取調御座候て果して彼家にて申候所に相違も無御座候はゞ夫丈の御仁惠被成下候樣御周旋且御廻護の程奉萬冀候左樣も被成下候はゞ彼家永く御厚德を奉欽仰忘却の期有御座まじく奉存候宜しく御勘辨可被成下候此程の御一紙寫し留則返上仕候以上

二日　大星拜

竹村先生臺下

（本紙と別紙離れ〳〵となり現在所有者を異にせり）

（別紙）　松代町　八田彦次郎氏藏

傳來の書類共取寄せ覆詳仕候處

別紙申上候八愼一條に付本書相認候處實意外之事共且容易ならざる義に付萬一齟齬仕候義等御座候ては段々深く御配慮も被成下候所に對し奉り候ても懼入候義に就き爲念傳來之書類共取寄せ覆詳仕候處愼藏申聞け候次第に聊か相違の筋無御座候何分も一と御勘辨被成下申上候義道理に當らず御取用に相成かね候義に御座候はゞ極密此本書へ直に御批抹被成下大藏に御附し被成下度

又申上候義御釆納御勘辨被成下方も御座候はゞ水忠は愼藏緣家のよしにも御座候へば是へ也御内意被成下可然歎願書にても御差出させ可被成下ものか總て奉任高意候以上

安政四年か

〔七四五〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彥次郎氏藏

王振鵬沈度の書畫冊

今日は冷風に御座候何之御恙も無御座候哉娘樣彌御快方に候歟御左右承度候然ば御話しの王振鵬・沈度之書畫册拜見申度此もの差出し候御惠示被下候はゞ千萬可辱候將過日高囑之拙書ども差出し候節此便面取落し今日迄不心付折節心づき候まゝ序に差上申候以上

廿三日

大星拜

子靜賢友

安政四年か

〔七四六〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彥次郎氏藏

昨日の御答書にて御近況詳悉且令愛御不快も次第に御善候と承り喜慰不過之

王振鵬の落款は後人の所爲に出候樣存候沈度楊子奇は殊に贋託

候然ば御惠示を冀ひ候畫冊早速賤仵に御附し被下得諦觀一時目を悅ばしめ淺からず辱不勝銘謝候畫は隨分面白く必ず明末清初の良工なるべく候但王振鵬の落款は後人の所爲に出候樣存候沈度・楊子奇は殊に贋託に有之候へども第一の畫頗る精巧に候へば御襲藏尤も可然候鐵網珊瑚消夏錄等にも跋尾贋鼎可咲と申品多く見え申候彼邦にても此類少なからずと存候折角と拜見候故に愚管無伏藏得貴意申候畫冊納去御檢接可被下候餘留面賦

廿四日

澹庵賢兄　　　　大　星拜

安政四年か

〔七四七〕　山寺源大夫に贈る

箱館にて夷人亂妨

此閒は態々御誨答難有拜見仕候去月中より少々御勝不被成乍然御加養にて近來は次第に御復常御座候よし先以奉降心候雖然此不揃之氣候千萬御保愼に不可過奉存候偖又江戸表より御到來之別條數通拜借相願候所蒙御許允乍例奉感銘候此趣にては箱館にて夷人亂妨之事も虛說には無之候ひきいかに無人に候

本邦の防海は唐山とは格別賊の死命を外海に制し

思綺堂集

往年家父八代洲河岸に罷在候頃

へばとて市中の人家の物を奪ひ戸障子打こはし候を其儘に差置候と申も國威を失ひ候の限り去りとてなまじゐに制しだて致し候はゞ彼の謀に陷り戰爭の階と成り可申此時に當て奉行たるもの難矣哉と存じ候事に御座候兎に角家父のかねて見込候通本邦の防海は唐山とは格別にていづれにも盛に礮艦の術を講じ賊の死命を外海に制し候程に無之候ては叶ひ難き事と奉存候然る所廟廊にも其下にも此一著に眞眼を被開候人一人も無之候と申は痛大哭の外無御座候別條寫し留候間返壁仕候御書入可被成下候思綺堂集標題正氣堂と有之候故に態々浪華より御取寄被成候所兪大猷の集に無之御失望のよし乍去四六の手際宜しく且自注と申處面白き樣に被思召蒙御示及難有一兩卷讀過仕候所高見の通一種の才子と被存候往年家父八代洲河岸に罷在候頃曖樓藏本の林蕙堂集一讀候處丁度此樣のものにてけく艶麗は是に過ぎ可申よしに御座候いづれも文章の正路に無之彼方にては四六も時ありて是非なく入用之事も候へども此方に於ては先入用も遠き事其上此時節虚文之爲に日月を費し候はむは務めを知らずとも可申候へば先是等は御不用に被遊候方可然やと家父は奉存候趣に

御座候

宋學士集の事も被仰下候所寛々御留置かれ何の妨も無御座候彼書の裏打に綱鑑類に相應の力量のもの丶書入御座候本を崩し入れ置候をばいつぞ別の帋を入れ替え後輩讀史の節書入にても致し候手本にも致し申度と存じ居候所本に依り糊を強く用ひ候が有之早速の事に埒あきかね候故閑を得候はゞ脫葉をも補ひ錯簡をも正し候はんなど存じ其節の事と數年打捨置き候處此節に至り候ては別して專ら取掛り居候課業も有之彼集に手入致し候隙も更に無之候閒先其儘に御手許に可被差置下候さて又越の府中產にて精製之海膽御分惠被成下珍感極て深く奉銘謝候能々御禮申上候樣申付候思綺堂二帙も則返上仕候心謝心謝餘待面盡

宋學士集

廿四日

山寺老先生　几下　　　　恪　再拜

（別紙）

此書標題に正氣堂集箋注と有之候は全く彼土製本の所にて風と閒違候事と被

正氣堂集箋注

察候恐らくはこの思綺堂章氏兪大猷が正氣堂集の箋注を著はし候事可有之夫故に傍に思綺堂章藻功原本と有之候かと被存候其思綺堂の文字有之候より遂誤り候て章氏が自注の思綺堂集に其題簽を張付け其題簽よりして其實思綺堂集なることを究めず帙の上にも正氣堂文集箋と題し候ものにも可有之乍倉卒愚考申上候

安政四年か

〔七四八〕 山寺源大夫に贈る

泰山青帝宮の碑刻

昨今霽色には相成候へ共冷氣に過ぎ申候闔府何の御障も無御座候歟奉伺候然ば例の泰山青帝宮の碑刻漫漶の所有之又磨滅無之所と雖もいかにも狂怪にて讀みかね候字句多く候先左の通まで杜撰仕候尚此上の尊考相伺度奉企望候

丁巳歳九月、與諸君同登泰山二首

大虛茫々都是天、泰山一登小天下、日中見斗天末遠、山下回首斗斜挂、齊魯何人□□□、功德□事開圖畫、上界到了上天門、□下□□欲羽化、

仙□□州□□、瀏紺宇絳接大虛、上世變遷還此嶽、乾坤俯仰獨吾區、東海日從地中

出山頂人在天上居、秦漢封壇盡草莽、相傳空有玉函書、

孟河□□

王之綱が跋の趣にては孟河の詩を念覺の筆し候ものと被存候は不明前詩韵脚閒違ひ居候可怪事に存候挂畫化は韵別にても同じく去聲にて候へば通じて用ひ候にも致せ元來天下の下は上聲にて下と申時に無之候ては去聲には成り不申候を此所に用ひ候は誤用と被存候何の例の有之候て致し候ものか見覺え不申候是考を希ひ候

安政四年か

〔七四九〕山寺源大夫に贈る

昨日の一書は差上置の心得に御座候所縷々御懇到之御誨答乍例奉感銘候昨日は少々御不例に被成御座候よし乍去晩來早速御快然と申御事先以奉降心候□□時候甚だ宜しからず候千萬御保重に不可過奉存候昨便御承知御座候には房州邊又々異船渡來の趣偖々多事なる義と奉存候尙委敷事共相分り候はゞ内々御聞せ可被成下候將今樣の詞集め候ものの刻本候や又寫本のみか何れ所藏候は

ば奉貸候樣被仰下候所いづれも所持仕らず御用立かね候但し俗箏の譜と申もの殘らず今樣に御座候故一絃琴など彈じ候ものは箏譜中より詞の可なるを選び候て歌ひ候樣に御座候近世熊澤蕃山が作りし一二首候へども詞體鄙俗に有之俗箏譜中のもの遙かに增り候樣聞え申候兎に角□□□平家物語に御座候が絕調と被存候事に御座候先拜酬迄草々申上候風呂敷御擲還慥かに奉落手候以上

廿四日　　星　拜覆

山寺君臺下

〔七五〇〕　山寺源大夫に贈る

安政五年正月十四日

御手字拜見如仰頻々之春雪寒氣殊に猛烈に御座候所倍御安健にいらせられ沃慰之至奉存候此閒御惠賜之御移有合の粗品奉獻候所御丁寧蒙仰悚惕之仕合に奉存候偖又舊臘の別條四分一御手に入御謄寫被爲濟候て速に御示及被成下乍例奉感刻候一兩日拜借仕度候將高野生の詩二首御示し是又奉謝候然る所燕の

（高野生は高野廣馬を

指す）

詩も命意新ならず且第二句聞え不申孟子に出典も候へば茅塞に候はゞ忽の字きゝ可申候へども馬蹄車轍に茅を生ずるに忽の字は當り不申欲の字に替へ候はゞ少し聞よく相成可申相考候後首驚騰の字も目を刺し申候其上落句面白からぬ趣向と存候兎角絶句は倉卒に致し易きものに付精錬も行届きかね候ものに付此等の一二首を以ては其技倆も藻鑒し難く候何か長篇の詩又は序記説類にても掛御目候はゞ御示し奉希候歸省もたまさかにて故友へ示し候詩文に候はゞ疵瑕無之を擇み示し可申所左樣參らず候は怪しみ存候事又是等の詩を自分にて少しく出來候心得にてはちとかね〴〵の望を失ひ申候渠も家父舊門人の義に付何卒一等地を出で候樣にと竊に祈り居り候所技倆を極め候て此位の事にては大に失望の事に候趣もし歸府前拜謁も申上候はゞ何となく此意を以て御激被成下候樣仕度と申事に御座候御新製篇々警拔且時弊にも切當深く奉敬嘆候毎度御下問に付一二點を申上候宜しく御取舍奉冀候此段草々奉復

（渠も家父舊門人）

十四日　　恪二郎拜

懼堂先生　臺下

〔七五一〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

安政五年正月十五日か

御手帖拜見春寒愈御佳勝と承り慰傾想候然ば御內話の次第も御談事方御行屆きと申御事珍重に御座候右に付大藏方の義に付て御相譚有御座度關田一同後刻御入來の義差支有無御尋被仰遣入御念候御事に候然る所明朝立鍵屋莊之助參宮京師へも廻り候よしに付彼邊內々相尋度方も候て認ものに取かゝり居候其所へ過刻も數輩來人大に手閒を費し迷惑に存じ候所に御座候御差掛りの事に候はゞ兎も角も宜く候へども今日に限らず候て子細無之御都合に候はゞ明日に被成被下度冀ひ候此段拜答迄草々以上

十五日

袖化丹青等の細筆

御追書之趣辱奉存候もし浪華に袖化丹青等の細筆の可也なるが有之候はゞ一二十枝御調被下度希候

濟庵 契友

大 星 拜

〔七五二〕 山寺源大夫に贈る

安政五年正月十六日

今日は大に緩かに御座候倍御健安と奉想像候然ば一昨日は不相替別條蒙御惠示奉感謝候一覽仕候處貿易之義もミニストル被差置候義も悉く御一使申立通御聞屆に相成但開港場所の事のみ少しく御拒御座候樣に候へども是又是迄の御手振を以てトし候へば十に九迄は遂に彼れの申に御隨順可有御座と存痛哭流涕の極に奉存候此御運びに相成候所にてはもはや如何樣の智者出で來り候とも取返しに難相成勢誠に不及是非次第奉存候但此所にて猶少しく望を屬し罷在候は天朝の御樣子に御座候今上も兼て御英明の御聞えもいらせられ攝家の御內にも御有力の御方も被成御座候歟に仄かに承り其上中山殿と申方格別豪傑にて既に千草三位なども每々御賞美御座候よし右之御樣子に候へばけく縉紳間にはよく事務に達せられ候御方も可有御座候左候へば舊冬江戶ゟ御使も相立候所すら〳〵と江府にて被思召候樣には京師の御樣子參るまじき樣にも被存候其上に猶薄々風聞候趣にては此度の御處置大分國主方にて御不平の

（頭注）痛哭流涕の極

（頭注）今上も兼て御英明の御聞え

參勤御訴訟など御座候御方

星巖は元來時事にも心を用ひ候老人の事に就き

此義如何可有御座候や

本文不容易事共

事御座候歟にて參勤御訴訟など御座候御方も御座候とか申事いづれにも危險の御時節と奉恐懼候義に御座候右に付候ては當今差向き天朝の御樣子并に此度御一使申立て一條公邊御應接向等の事京師にて如何致評判候や又縉紳家に於何等の議論有之候や勅答等は如何に候ひしや又一面如此にて內邊別に叡慮も被爲入候御儀や是等は容易に窺ひ知るべき事には無之候へども何分も竊に相探り心得居度ものと奉存候御國家の上にも甚御急務の樣相考候高意には如何被思召候や此義一二門下の內にも深く致心配候事に託し西遊候上星巖は元來時事にも心を用ひ候老人の事に就き是などへ便り承り繕ひ候はゞ同人頗る縉紳家へも立入候事故知り得べき程の事は相分り可申と奉存候此義如何可有御座候や委細は此人の口頭にも可有御座候右に付候ては相願度事件も御座候との事孰にも當今の要務とも奉存候宜く御勘考奉冀候已上

十六日認　大星再拜

懼堂老盟臺　臺下

附啓本文不容易事共に付禁例を破り如此に御座候御電覽後速に丙丁に御附

し可被下候至禱

松代町　八田彦次郎氏藏

〔七五三〕　八田愼藏に贈る

安政五年正月十八日か

昨日御約束申候一通認め候間封じ候はず持せ懸御目候何か思食も候はゞ妨げず被仰下度いか樣も改め可申候また是にて思食もなく候はゞ一寸御封糊を御施し闕田に御附し可被下候以上

十八日　　　　　　　　　　大　　星　　拜

八　田　賢　契

〔七五四〕　山寺源大夫に贈る

安政五年正月廿一日

拜見仕候如仰又々春寒凌にくゝ覺候倍御健安被爲入奉敬慶候然ば一昨日拜問申上候義多分相違に有御座まじく候とて御別紙蒙御惠示乍例難有奉謝候九條殿下御樣子格別の御人物に被爲入候て三九なご既に已に申上も致し候筈の樣奉存候果して當今五大洲の形勢をも明に御觀察被成御座江府是迄の御所置一

當今五大洲の形勢をも明に御觀察被成

一其是非を御辨明御座候ての御事に候へば此度堀田侯御始め川岩二君（川岩二君は川路聖謨岩瀬修理）にも餘程御心配の御事と奉察候乍去京師邊此節人に乏しき所にてはいか程明敏の御方御座候ても又御行届き被成かね候所多く可有之被存候右等の上に付候ても誰ぞ聢と致し候者上京探索の義被仰付候て可然奉存候菅鉞（菅鉞は門弟菅鉞太郎）など如何可有之哉存出候まゝ極密申上候伊藤面疔の事御別紙のみ一日案立不申いづれ西洋家の聞え候ものへ託し候方可然候戸塚静海林洞海など可宜候此義被仰遣候はゞ可然候先草々拜答申上候別紙任命直に返璧仕候毎度御多忙の御中異聞早速に御垂示被成下御禮可申盡様無御座候以上

廿一日　　　　恪　拜復

懼堂先生　三席

（安政五年正月廿六日）

〔七五五〕梁川星巖に贈る　　東京市　宮本仲氏藏（草稿）

打絶御音問も仕らず候事嚴しき法禁の係る所不及是非候次第定て御原鑒も可被下候然る所此度右之禁令を破て極密呈書候子細は追々世上致傳播候客冬亞

皇國の御大事爰に迫り候樣奉存

一日性命を保續し候も則國恩と奉存

堀田閣老被爲召

人江府參著登城已來の次第定而御地にても委細御傳聲可被成其義に就ての事に御座候夷患年を追て致漫衍殆ど以膚の勢に相成皇國の御大事爰に迫り候樣奉存乍恐兼々杞憂を懷き罷在候天朝の御安危にも拘り可申形勢獨り德川家御一代の御災患のみに無之御座と被存候へば當時禁錮の身には候へども一日性命を保續し候も則國恩と奉存此御時節聊か天下に裨益も可有御座と致料見候義有之候を無下に默し罷在候は國家の洪恩に奉背候義と致覺悟當十五日別紙第一號之通親戚の者を以て重役共迄差出し候所數日之後志之程尤の事に候へども當節の場難相成旨を以て右書面被差戾候是又不及是非次第に御座候嗣又傳聞候は林家御使を被命舊臘十四日發軔にて上京の所這々の體にて歸府有之京師へは堀田閣老被爲召川路司農も一同發駕と申事於是竊に喜び奉存候天日未だ地に墜ちず兼々僻遠に罷在候某輩もかけまくもかしこき御上の御事は奉申上候にも及ばず殿下の御明敏幷中山卿の御俊拔等耳に轟き罷在候所果して此御時節其奇特も相顯れ候樣被存難有義に奉存候竊に愚察仕候に林家御使にて不相濟閣老被爲召候御事は定而舊臘二日堀田侯の第に於て亞人と應接有之

第一天朝へ奏聞を被爲遂然る後御處置無御座候ては

一時は一言もなく申伏候樣無之候ては御國體難立義

其第三條ミニストル差置き候を御聞屆に相成候義と被相察候此ミニストル一段の事は某には最初亞人申立の次第傳覽候節既に愚意存候は普天の下王土にあらざる事なく率土の濱王臣にあらざることなしと申候に亞人の申候に據り候へばミニストル被差置候構の內は自國同樣に致し日本官府の制度を受けざる趣相見え候左候へば邦域の內にして王土にあらず王臣にあらざるもの有之候義に付開闢以來の大變とも可申左候へばたとひ當今の時勢已むことを得ざる御筋合御座候とも第一天朝へ奏聞を被爲遂然る後御處置無御座候ては濟ませられまじき義と奉存候其上愚管には亞人申立の次第恐嚇欺瞞多く罅漏百出候事どもに候へば能く其辭命を脩めて其非を詰難したとひ勢力の敵均せず候より異日御許容に可相成義に候とも不筋の次第は是非一時は一言もなく申伏候樣無之候ては御國體難立義と奉存候春秋の際に當て鄭の小國を以て晉楚の閒に介し其兵禍を受け候事殆ど虛歲なく候ひしを子產政を執り候に及て辭命にあらざれば此患を免かれがたきを知り裨諶・子大叔子羽等の名士を選用し艸創討論修飾の功を加へ更に自らもこれに潤色を施し諸侯賓客交通の閒に用

膽略無之候ては埒明き不申

某此局に當り候はゞ箇樣にも申談じ度

ひ候故に毎に敗事あることなく定・獻・襄三公を合せて五十餘年の開兵禍を免れ社稷人民これに賴て保全を得候事全く辭命の功と存候事に御座候乍去其辭命を行ひ候にも膽略無之候ては埒明き不申平丘の盟に子産承貢賦の次を爭ひ日中より昏暮に至り候も富文忠契丹に使して盛策を以て獻納の二字を却け候も此膽略と存じ候事に御座候

當今亞人應接の御役人衆には是等樞要の事聊か御念慮に及ばれざる事と竊に致歎息試みに某此局に當り候はゞ箇樣にも申談じ度第二號の如く草し見候事も有之候最初ゟ江戸御主宰にて此所に思召御座候はゞ天朝への御政體も被爲屆御國體も相立且亞人の膽を破り候義に付後々御取扱にもいか計被遊よき御事可有之と存候事に候所辭命等聊か御心にかけられず開闢已來天下の大變革に係り候義を天朝へ被仰上候はでは乍恐大義に於て難被爲濟御筋に奉存候大學殿這々の體にて歸府と申取沙汰を以て想像候へば天朝にも必らず右の大義を被仰出殊に大學殿儒者の家に候へば大に恥をかゞやかされ候義にも可有御座奉存候然る處思念爰に及び竊に又憂懼奉危候義は此以下此度禁を破て呈書候主意の有之所に御座候其

思召にて御熟覧可被下候

堀田侯の如き憺かなる御人物を被失候ては

當今有數の御方

此大義を以て御不審被仰出候時には堀田侯に於て決して御申開き御出來かね候義と奉存候其御申開き迚も御出來かね被成候時は侯には御身を以て其罪を被贖候外有御座まじく被存候然る處自然右樣之義に至り候時は天朝御威稜の嚴霜烈日たるが如くなるは去る御事に候へども當今江府にも御人に乏しき上外夷猖獗の時節堀田侯の如き憺かなる御人物を被失候ては差向き御國の御弱みに相成り候者御損失亦甚しく候義と奉存候堀田侯には兼て文武に御志深く御政事も宜しく御領國人民御撫育もよく御行屆き防海の事にも厚く御心を用られ候事一朝の義に無之年久しく御苦勞御座候事憺かに承知候筋も候て能く存知罷在候然る所撲らず此度の議出來り候事甚惜み奉存候義に御座候隨分當今有數の御方に御相違なく候へども何を申も其下に屬せられ候御役人傑出の人無之たま〳〵吏才有之候ても將才之なく和漢の事は稍知られ候ても西洋の學に疎く邦國の利病をば心得候ても五大洲の大利害には通せられずと申樣にて當今世界を總括し大經濟に通達の仁無御座候故に建議討論も多く皆故常に拘泥し候事のみにて侯の御志を贊成するに足らざるの所致とも

ペートルの規模の如く

相察し是等の義某輩申出候は憚多き義に御座候へ共竊に念願仕候は此度天朝にて被仰出候御大義にて其上の所は時節柄格別の御仁典を以て侯の御不調法の廉被爲宥此以後の功を以て可被贖候樣被仰出是迄の如き苟且の御故轍をば幡然と御改めに相成總て魯西亞のペートルの規模の如く廣く人を選で外國へ出し其長ずる所の諸術を學ばせ方に其形勢時情を探索し又多く外國の名士を招引し襟胸を披て御優待有之本邦になき所の藝術の師として盛に諸學科を興し城制を變じ遊民を禁じ刑罰を省き器械學を盛にし工作場を開き大艦を多くし航海商法を復し此方に官府の制度を受けざるミニストル置候ならば此方ゟも彼地に彼の制度を請けざる官吏を置き行々外地の貢賦御府庫に收り御國力の實に英佛彌利堅にも被爲過候樣年月を期して被爲行屆候樣の御處置に相成候樣仕度ものと奉存候是等の大經濟責ては堀田侯にても無御座候ては其任に勝へられまじく乍去又堀田侯にても御再勤已來やはり故常に牽かれ衆議に因られ當今第一の急務たる□□の事を始めて□格別の御雄略と被存候義一事も無御座候へば此處にては天朝の御威勢を戴かれ候に無御座候ては迚も十分御

行届き無覺束被存候

當今遠大之御國是も

雖然堀田侯も慥に去る御方に候へば天朝の御威勢をだに御奉戴御座候て故常苟且の舊弊を被破候はゞ當今遠大之御國是も相定り候様隨分御行屆可被成左候はゞ所謂敗を轉じて功と成し禍を化して福と爲すの御機關乍恐天朝此度の御一擧に御座候様奉存候然らざれば時節柄差向容易ならざる天下の御損失可有御座奉存候彼是の義此節先生ゟ御建策には相成まじきか追々傳聞候へば御在京以來縉紳家より御招待被申候も一方ならず候よしに候へば九條殿下を奉始中山卿等へも必らず御手寄も可有御座兼てより時事には毎々御苦勞も被成候御事に付御老境に御入候ても其段は往時に御替りは有御座まじく此度の義も追々御傳聞さぞ〳〵御感憤に被堪間敷と推察仕候就而者某存寄之次第も極密申上候何とか當今の御補ひに可相成様御密策も可有御座奉存候に付態々此者を走らせ此呈書に及び候義に御座候是聊國に報ずるの微忠と奉存候宜く御照亮可被下候もはや堀田閣老にも御京著にも可相成候へども何とぞ可相成は火速に回天の御一策奉切望候時期後れ候ては詮なき事に成行候間呉々も可然

時事には毎々御苦勞も被成候御事

國に報ずるの微忠

奉希候將又申上候迄も無之候へども此度の呈書固より禁を破ての義に付其人にあらず候はゞ決して御漏泄被下まじく書生には別して御用心可被下候癸丑の上書幷に甲寅獄中擬上書草稿御心控に可相成義も可有御座と存候閒手帋の儘密に掛御目候是は此外に稿本無御座候へば御一涉後直に賤价へ御附還被下度奉希候舊臘幷今春の拙詩錄往奉乞正候詩中に相見え候洪範解には國語を以相認候初申上候閣老へ上書の義相叶候へば差出候はんと心組候ものに御座候此度密に□奉□も仕度候へども紙數も多く寫手も差支第一差向候義急々故に不能其義候追て可奉供電矚候國風は昨年の作に御座候御流義違に候へども備御一咲候是は縉紳家之盛評をも得度ものと奉存候書不盡言惟々天下之御爲一と御苦勞被下候樣奉企望候外他事無御座候頓首

正月廿六日

省諐錄抄

是も祕物に候へども子弟抄出致し置候が有之候まゝ何ぞの御心控にと是亦掛御目候是は猥に御他見だに不被下候はゞ其儘御留置かれ候ても外に稿本

有之候間不相妨候也

星巖より返事

安政五年二月二十四日發

鴻信飛來忙手拜讀先以起居萬福奉賀候久潤之段山妻と共時々御噂申上候御引籠中定而時事感激可被成奉察候老拙事も閉戸讀書耳乍然京師は八達の地に付九州四國及往來の人士立寄候節諸方風聞承り有志の者往々有之候へ共有用奇特の人物は少く候此度御門生被遣候に付て堀田侯之仰上朝議も委敷相認差上度候へ共今以て決定の處分り兼候昨日も參內之趣如何に候哉御門生滯留數日に相成定て御待兼と存じあらましの處を認餘は御門生に話置候老拙六七日前より腹痛大に起り絶食蓐中に罷在何共不自由にて困入候へ共叩門來客不絶京師には一向無人池內大學なるもの是は智恩院宮の御內にて老拙江府留寓中に時々參り候者定て御一面も可有哉覺候此者京師にて致開業公卿の教授に日夜奔走頗る有志にて殿下大閤三條中山に出入靑蓮院宮へは月に六回進講仕候此度は上下四方無所遺周旋竭力候に付老拙も得氣候共外兩三輩も可有之哉何分にも朝議一決仰出有之承り次第に可申上候一往御門生御引取可然申候談置候處御聞可被下候時下爲國御自重奉祈候草々頓首

池內大學

二月二十四日　孟緯拜復

像山老盟臺下

（別紙）

大閤の權威實に傾朝

諸公卿の門へ猥りに出入を禁じ

客冬林家上京の主意は兼てより京都公卿承知致し被居候處に先つ大閤及臣下へ賄賂等大分に行ひ候殿下へは却て物事後に相成候殿下と大閤とは何分にも爭權の意從來有之大閤の權威實に傾朝候事年久に付宮中女官等も皆々大閤に歸し罷在候主上の思召も兎角大閤女官之塞ぎ候て言路不通此度は兩度迄殿下へ詔書下り東府より賄賂等持參候とも不拘大小官に不許受一錢表向獻上等は返禮の賜を被遣候の趣也其餘諸公卿の門へ猥りに出入を禁じ不許私謁右に付此度堀田侯及川路諸役人手揃にて上京なれ共諸人共に伎倆窮り候扠於東府堀田侯より夷人へ私に御免許之儀朝議下り候ては堀田侯無容身地此一件は何分に少々寛め御取計被下候樣に相成候趣也參內相濟後一日傳奏兩人本能寺へ臨し候此日俄かに議奏五人共に來臨に付堀田侯も當惑の由傳奏衆兩人は當世風の人物にて大閤之黨也議奏衆五人の內にて久我德大寺萬里小路皆々强々たり就中久我大納言殿は大有氣魄先年禁裏御延燒の節も第一番に參內次に轉法輪八條の兩卿供奉にて急々御避に相成候中山殿も

粟田青蓮院宮天資英邁

老兄よりの書翰は內々殿下へ差上置き候

屈强の人物に候此度の一件は參議以上法親王方に到迄不遺一人皆一書有之候東府の了簡とは盡相違致候趣法親王中にては粟田青蓮院宮天資英邁主上へ親近有之右に付言路大に通じ候平日は俗官共風狂親王と稱し居候處此節は大に畏入候由主上は叡明にて數年來洋夷一件も御承知時々詔有之候へ共大閤女官等申上候には萬機盡く東府將軍へ御托し有之彼方閣老諸人日夜商議仕り罷在候に付不煩聖慮只々大神宮及諸神に御祈禱被遊事專一と申上げ置候へ共此度は宸襟彌不安開闢以來不受外夷之點汚當朕之世諸夷如此有何面目謁見皇祖之廟萬一有事雖死社稷不辭之御決志也聞者上下一同に落涙致し報國の心を生じ候青蓮院宮は實に大塔宮の後身共可奉申御氣像にて主上親王共に三十歲餘英氣勃々難有事に候朝廷不可言無人只此度堀田侯へ如何に詔下り候哉商議中にて分り兼候天下の安危在此一詔夷人願には要地にて互市致度の由京都大阪或は堺にて開き度との事に候也○老兄よりの書翰は內々殿下へ差上置き候御取用に可相成哉は只今は分り兼候へ共何分にも商議可有之候委曲は跡より可申上候○砲の卦の儀も又々何樣共周旋可仕候其節は智恩院宮薨去にて別に其人も無之只今は青蓮院宮有之宮は南都に幼年方御入後に粟田へ御住職河路氏も南都にて先年拜謁致し宮の英邁も能々承

知に付拜謁を願候處此度は公事に付上京之事不容私謁公事相濟候て後に可面會との事に候○省諐錄は稿本有之候と仰に任せ借讀仕り候○癸丑上書草稿本返壁仕候

一大閤の門に落首有之
西東忠と不忠の界町東は吾妻西は九重（大閤の邸宅在堺町之東邊）
林家石淸水八幡へ參詣にて祠官に就神酒を請候に付祠前の瓶子を賜り候處酒味至酸歸館の夜腹痛大に起り畏れ入候之由或人狂歌に
林家　此度は儒者の取り置きまぬけ山御酒のすいのは神のばち〳〵
先きの落首は經乙覽候由に付大閤も少々避易に候

（不容私謁）（大閤の門に落首）

〔七五六〕八田愼藏に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

（安政五年二月一日か）（京都への慥かなる便）

猶々今日は家來遠方へ遣し候間此御返事は何分も被勞貴僕被下度奉賴候
又々大雪寒威も再び嚴冬の如く相成候御體履御礙も無御座候歟令愛御氣力如何の御樣子や此程の驅蟲劑效を呈し候や否承度奉存候然ば此地より京都への慥かなる便は隨分御座候ものや僅かの書狀位如何致し候はゞ速に相達し可申

や御教示被下度奉冀候松本よりは月々定飛脚なども可有之と存じ候がいかゞ
や乍御面倒一寸御批誨所仰に御座候以上

二月朔

子静令友几下　　大星拜

安政五年二月廿六日

〔七五七〕山寺源大夫に贈る

此間は何かと御用多に被成御座候よしの所縷々御誨答難有奉謝候其節御恵示被成下候數種寫し留め可申者も卒業に付今日は返璧可仕と奉存候所へ御使管を勞させられ阿蘭條約御示被成下毎々御禮難申盡奉存候長崎の方條約立派右は水筑州の力にも候歟に被思召候よし去る事も可有御座候何れ一讀の上愚管も御座候はゞ可申上候亞使節云々の事是は近日大槻俊齋より野家への文通內內瞥見候所いかにも左樣の樣子に御座候ひき佐倉侯御上京は全く林氏とは別事の沙汰も御座候よし是式の事にも紛々の說御座候へば京師の御方慥に探索も有之度と申遣候所其說行はれず果して今に約說もさだかならず候事不及是

雲如

畠篠卷

精傳別裁

非候仙臺佐賀兩侯云々の虛傳なるべき事左も有之べく乍去是とても其慥かなる義はいかにも慥に致し置き申度ものに御座候さて此間は雲如も罷出候よし何かと御淸與と不勝健羨候畠篠卷御寫し御垂示是又奉多謝候卷中の詩格別に存じ候も無之候横山生より課題御目にかけ候內齋後解環の出典御尋に御座候是は戰國策に見え申候米囊花は或人の申候通罌粟の事に無相違候三體詩にも馬頭初見米囊花の句相見え候今日の御下問の內忽の字等の假名に用ひ候事常の事に御座候尤も合轉の字故にフォと呼び候はんは音に叶はず王脈が胡海時傳の書名は隨分存じ居候へば其書は見及候事無御座候精傳別裁是は雜と一涉仕候のみ藏弆は不仕候先は拜復迄早々申上候數種の返上もの宜しく御檢納可被成下候以上

廿六日

星巖へ御寄せ被成候高調乍例妙絕奉擊節候起二句は高意の通御原作の方雄律尤可然候五言上三下二の句古詩十九首中よりして韓傳などには往々有之候其餘は遠山生申上候所可宜候尤も末に一ヶ所愚意有之候浮簽上認置候御

取舍唯命に奉存候

使無堂先生　丈室

恪　拜　復

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年四月一日發行

版權所有

象山全集 全五卷
定價 金拾八圓

長野市旭町一〇九八番地
編纂者 信濃教育會
代表者 清水曉昇

長野市妻科一七三番地
發行人 大日方利雄

長野市南縣町六五七番地
印刷所 信濃毎日新聞株式會社

長野市南縣町
發行所 信濃毎日新聞株式會社
電話長野二二〇・二四〇・二九三・三七七番
振替口座長野一二〇番

26

26

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03045 5653